白石市文化財調査報告書第26集

片倉小十郎の城

白石城跡発掘調査報告書

白石市教育委員会
（宮城県）

白石市文化財調査報告書第26集

片倉小十郎の城
白石城跡発掘調査報告書

白 石 市 教 育 委 員 会
（ 宮 城 県 ）

序　　文

雄大な蔵王連峰を西に控える白石は自然環境に恵まれた市です。蔵王国定公園も設置され、多くの動植物に恵まれています。

白石市は歴史環境にも恵まれた市でもあります。東北地方の政治的な大舞台に度々、白石市を含む刈田郡地方が登場します。そのため、市内には多数の歴史遺産が存在し、市民は歴史遺産に囲まれて生活をしているといっても過言ではありません。

今回、報告します白石城跡は、市のシンボルであり、永年、お城山と呼ばれ、市民に親しまれてきました。江戸時代には、仙台藩南における境目の城として幕府からも公式に認められ、伊達家重臣片倉公が代々、維持管理を行ってきました。

明治初めの白石城解体以降、市民には永年、白石城復元の夢がありましたが、諸般の事情から実現には至りませんでした。それが諸事情が整い、白石市による発掘調査及び復元事業が始まり、平成７年に再び、その姿を私たちの前に現しました。市のシンボルとなる三階櫓及び大手門は、これから市民のプライドを取り戻す拠り所になるに違いありません。

現地における発掘調査及び発掘調査報告書刊行にあたっては、市内外の方にさまざまな形で御協力いただきました。特に中橋彰吾文化財保護委員長には並々ならぬ御尽力をいただき、感謝を申し上げたいと思います。

この発掘調査報告書が白石市のシンボル・白石城の基礎資料として多くの人に活用されることを期待して序文といたします。

平成10年３月

白石市教育委員会

教育長　菊　地　清　治

目　　次

序文
例言、調査要項
目次
表、図版、付図、写真図版目次
第１章　位置と環境 …… 1
　第１節　位置と現況 …… 1
　第２節　植物調査 …… 12
　第３節　周辺の遺跡及び城館の分布 …… 27
第２章　調査にいたる経過 …… 39
　第１節　調査に至る経緯と経過 …… 39
第３章　白石城関係資料 …… 41
　第１節　史料からみた白石城 …… 43
　第２節　絵図からみた白石城 …… 48
　第３節　白石城縁りの建造物 …… 54
　第４節　白石城跡における表面採取資料 …… 57
第４章　白石城調査指導委員会 …… 58
第５章　調査方法と整理方法 …… 69
　第１節　調査方法 …… 69
　第２節　整理方法 …… 69
　第３節　報告に際して …… 70
第６章　発見された遺構と遺物 …… 72
　第１節　三階櫓跡と周辺 …… 72
　第２節　三階櫓跡周辺の石垣と階段跡 …… 77
　第３節　土塁部周辺（石列周辺） …… 91
　第４節　大手一ノ門跡、二ノ門跡周辺 …… 96
　第５節　北側の井戸跡 …… 112
　第６節　勘定所跡 …… 113
　第７節　遺構外の遺物 …… 114
第７章　考　察 …… 168
　第１節　遺構 …… 168
　第２節　陶磁器等 …… 168
　第３節　瓦 …… 171
第８章　復元工事と遺構保護等 …… 174
　第１節　復元工事 …… 174
　第２節　遺構保護 …… 174
　第３節　調査体制 …… 181
第９章　関連資料「白石城解体のいきさつ」 …… 182
第10章　まとめ …… 214
引用・参考文献
報告書抄録
写真図版

表　目　次

表１　蘚苔類一覧…… 14
表２　樹木の胸高直径及び樹高一覧…… 15
表３　樹木の種類別個体数…… 16
表４　植栽樹木の胸高直径一覧…… 22
表５　植栽樹木の種類別個体数…… 23

第１表　各絵図群の比較…… 50
第２表　白石城絵図及び城下絵図…… 52
第３表　文献に記された白石城…… 53
第４表　白石城の遺構…… 54
第５表　白石城の遺物…… 55
第６表　白石城調査指導委員会の会議…… 67
第７表　市教育委員会担当課職員の推移…… 68
第８表　多角点成果表…… 70
第９表　瓦出土量一覧表…… 144
第10表　遺物登録番号表…… 145
第11表　出土瓦の観察表…… 148
第12表　発見された敵機識別模型のデータ…… 151
第13表　石臼のデータ…… 151
第14表１　陶磁器等データ一覧…… 152
第14表２　陶磁器の時期及び産地別集計…… 167
第15表　在来石と新石の割合…… 176

図　版　目　次

第１図　遺跡地図…… 2
第２図　白石城跡位置図…… 4
第３図　発掘調査前の三階櫓跡、大手門跡周辺…… 5
第４図　西側芝生広場地形図（昭和54年３月）…… 7
第５図　植物調査区域…… 12
第６図　本丸跡地樹木分布図…… 25
第７図　植栽樹木分布…… 26
第８図　城内屋敷遺跡位置図…… 28
第９図　城内屋敷遺跡トレンチ配置図…… 28
第10図　北区３トレンチセクション図…… 29
第11図　南区２トレンチセクション図…… 30
第12図　城内屋敷遺跡の遺構と遺物…… 31
第13図　銚子ヶ盛古墳位置図…… 32
第14図　銚子ヶ盛古墳測量図…… 33
第15図　銚子ヶ盛古墳トレンチ位置図…… 34
第16図　トレンチ断面図…… 35
第17図　出土遺物…… 35
第18図　茶園遺跡確認調査トレンチ位置図…… 36
第19図　茶園遺跡Ｖトレンチの土坑…… 36
第20図　茶園遺跡セクション図（1）…… 37
第21図　茶園遺跡セクション図（2）…… 38
第22図　城域の変遷…… 51
第23図　解体保存された茶室の図…… 56
第24図　銚子ヶ盛古墳と白石城瓦の廃棄場所…… 57
第25図　トラバース図…… 71
第26図　白石城跡発掘区全体図…… 73
第27図　三階櫓跡平面図…… 74
第28図　三階櫓跡断面図等…… 76
第29図　石垣側面測量図（1）…… 78
第30図　石垣側面測量図（2）…… 79
第31図　石垣番付図（1）…… 80
第32図　石垣番付図（2）…… 81
第33図　三階櫓跡南側断面図…… 82
第34図　三階櫓跡北側断面図…… 83
第36図　三階櫓跡西側断面図…… 84
第35図　三階櫓跡石垣エレベーション…… 84
第37図　三階櫓跡断面図…… 85
第38図　三階櫓跡北側断面図…… 86
第39図　本丸内土塁セクション図…… 87
第40図　本丸内井戸跡周辺遺構配置図…… 88
第41図　本丸内井戸跡平面図…… 89
第42図　本丸内井戸跡東側敷石跡…… 89
第43図　三階櫓北西隅の状況…… 90
第44図　本丸西側馬場側遺構平面図…… 91
第45図　石列周辺図…… 93
第46図　石列周辺細部…… 94
第47図　土塁セクション図…… 95
第48図　大手門跡平面測量図…… 97
第49図　大手門跡周辺測量図…… 99
第50図　大手一ノ門跡詳細図…… 101
第51図　大手二ノ門跡詳細図…… 102
第52図　土塁部セクション図…… 103
第53図　大手二ノ門跡階段南脇断面図…… 104
第54図　大手二ノ門跡階段脇断面図…… 104
第55図　大手二ノ門跡西側土塁セクション図…… 105
第56図　大手門桝形部南土塁斜面西側セクション… 105
第57図　桝形部平面図…… 106
第58図　桝形部遺構図…… 106
第59図　大手二ノ門跡トレンチ配置…… 107
第60図　大手二ノ門跡遺構配置図…… 108
第61図　大手一ノ門跡、二ノ門跡図…… 109
第62図　北側井戸跡全体図…… 110
第63図　北側井戸跡周辺図…… 110
第64図　北側井戸跡断面図北壁…… 110
第65図　北側井戸跡発掘区…… 111
第66図　白石高校内発掘区位置図…… 113
第67図　白石高校内発掘区遺構配置図…… 114
第68図　土坑１　平面図…… 114
第69図　白石高校内調査区遺構詳細配置図…… 115
第70図　三階櫓跡出土瓦（1）…… 116
第71図　三階櫓跡出土瓦（2）…… 117
第72図　三階櫓跡出土瓦（3）…… 118
第73図　三階櫓跡出土瓦（4）…… 119
第74図　土塁部出土瓦（1）…… 120
第75図　土塁部ほか出土瓦（2）…… 121
第76図　大手門跡出土瓦（1）…… 122
第77図　大手門跡出土瓦（2）…… 123
第78図　大手門跡出土瓦（3）…… 124
第79図　大手門跡出土瓦（4）…… 125
第80図　本丸内(1)勘定所跡(2~4)、北側井戸(下、1~7)出土瓦… 126
第81図　未申櫓跡表採瓦…… 127
第82図　遺構外出土瓦（1）…… 128
第83図　遺構外出土瓦（2）…… 129
第84図　遺構外出土瓦（3）…… 130
第85図　遺構外出土瓦（4）…… 131
第86図　遺構外出土瓦（5）…… 132
第87図　三階櫓跡出土陶磁器…… 133
第88図　三階櫓跡（上）と土塁部出土（下）陶磁器… 134
第89図　大手門跡出土陶磁器…… 135
第90図　遺構外出土陶磁器（1）…… 136

第91図　遺構外出土陶磁器（2）…… 137
第92図　勘定所跡、表採の陶磁器等…… 138
第93図　土人形、石製品等…… 139
第94図　出土した石臼…… 140
第95図　出土した鉄製品…… 141
第96図　文字、刻印のある瓦…… 141
第98図　蒸しカマド略図…… 142
第97図　出土した銭貨…… 142
第99図　発見された板碑（拓本）…… 143
第100図　萩の坂焼山神講徳利 …… 169
第101図　山神講の碗 …… 170
第102図　石垣工事箇所 …… 175
第103図　再利用された石垣 …… 176
第104図　復元検討資料（1）…… 178
第105図　復元検討資料（2）…… 179
第106図　復元検討資料（3）…… 180
第107図　復元検討資料（4）…… 181

付　図　目　次

付図１　刈田郡白石城絵図（寛文４年）
付図２　奥州仙台領　白石城並城下絵図（天和３年）
付図３　白石城絵図（天和３年）
付図４　白石城普請奉窺絵図（貞享元年）
付図５　白石城下絵図（安政３年）
付図６　白石城絵図
付図７　白石城本丸屋形図
付図８　白石城と家中旗験図
付図９　白石城之図（小関雲洋画）

写真図版目次

写真図版１　航空写真、三階櫓跡…… 220
写真図版２　本丸跡、大手二ノ門跡…… 221
写真図版３　大手一ノ門跡、三階櫓跡…… 222
写真図版４　三階櫓跡…… 223
写真図版５　三階櫓跡とその周辺…… 224
写真図版６　三階櫓跡遺構変遷図、大手二ノ門跡写真… 225
写真図版７　白石城跡現状写真…… 226
写真図版８　白石城絵図（寛政10年　仙台市博物館蔵）… 227
写真図版９　刈田郡白石城下御絵図（天和３年　宮城県図書館蔵）… 228
写真図版10　白石城絵図（元禄15年　仙台市博物館蔵）… 229
写真図版11　白石城絵図細部（元禄15年　仙台市博物館蔵）… 230
写真図版12　白石城下絵図（年代不明、宮城県図書館蔵）… 231
写真図版13　白石城絵図（斎藤報恩会蔵）…… 232
写真図版14　白石城光景之図（小関雲洋筆）…… 233
写真図版15　常盤崎別邸絵図（斎藤報恩会蔵）…… 234
写真図版16　大堀相馬…… 235
写真図版17　切込焼、岸、瓦…… 236
写真図版18　肥前…… 237
写真図版19　大堀相馬…… 238
写真図版20　堤、末家…… 239
写真図版21　産地不明、瀬戸美濃、軍隊茶碗…… 240
写真図版22　小野相馬、信楽、現川ほか…… 241
写真図版23　肥前…… 242
写真図版24　肥前ほか…… 243
写真図版25　大堀相馬、瀬戸美濃、肥前…… 244
写真図版26　大堀相馬、肥前、青花、元…… 245
写真図版27　地方窯…… 246
写真図版28　地方窯、産地不明、京・信楽…… 247
写真図版29　中世陶器ほか…… 248
写真図版30　かわらけ、洋食器ほか…… 249
写真図版31　統制陶器ほか…… 250
写真図版32　鉄製品ほか…… 251
写真図版33　出土遺物ほか…… 252
写真図版34　発見された飛行機模型…… 253
写真図版35　白石城絵図、白石城住居之覚…… 254
写真図版36　白石城略記、覚書、天和３年絵図　表書… 255
写真図版37　白石城姿図…… 256
写真図版38　白石城絵図と片倉家仙台屋敷絵図…… 257
写真図版39　茶室…… 258
写真図版40　発掘調査以前の状況（1）…… 259
写真図版41　発掘調査以前の状況（2）…… 260
写真図版42　発掘調査以前の状況（3）と発掘風景 … 261
写真図版43　本丸跡地植物調査（1）…… 262
写真図版44　本丸跡地植物調査（2）…… 263
写真図版45　本丸跡地植物調査（3）…… 264
写真図版46　本丸跡地植物調査（4）…… 265
写真図版47　本丸跡地植物調査（5）…… 266
写真図版48　銚子ヶ盛古墳ほか…… 267
写真図版49　茶園遺跡ほか…… 268
写真図版50　三階櫓跡の建物跡…… 269
写真図版51　三階櫓跡、本丸内井戸跡…… 270
写真図版52　三階櫓跡石垣ほか…… 271
写真図版53　三階櫓跡、石列周辺…… 272
写真図版54　石列周辺…… 273
写真図版55　石列、桝形部…… 274
写真図版56　桝形部、大手二ノ門跡…… 275
写真図版57　大手二ノ門跡…… 276
写真図版58　土塁部、大手二ノ門跡…… 277
写真図版59　大手二ノ門跡、一ノ門跡等…… 278
写真図版60　大手一ノ門跡…… 279
写真図版61　調査写真…… 280
写真図版62　北側井戸跡、工事状況…… 281
写真図版63　復元工事状況…… 282
写真図版64　工事状況、関連行事…… 283
写真図版65　三階櫓跡出土瓦（1）…… 284
写真図版66　三階櫓跡出土瓦（2）…… 285
写真図版67　三階櫓跡ほか出土遺物…… 286
写真図版68　三階櫓跡周辺、土塁部出土遺物…… 287
写真図版69　土塁部周辺、大手門跡出土瓦…… 288
写真図版70　大手門跡出土瓦（1）…… 289
写真図版71　大手門跡出土瓦（2）…… 290
写真図版72　大手門跡出土遺物…… 291
写真図版73　遺構外出土瓦（1）…… 292
写真図版74　遺構外出土瓦（2）…… 293
写真図版75　遺構外出土瓦（3）…… 294
写真図版76　そのほかの瓦、石臼…… 295
写真図版77　石臼、高野家の瓦…… 296

例　　言

1　本書は宮城県白石市益岡町に所在する白石城跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は白石城三階櫓及び大手門復元事業に伴い、それらに先だって実施されたものである。また本書には白石高校敷地内確認調査、文化財説明板設置に伴う工事立会出土資料も併せて掲載した。

3　本書の作成は白石市教育委員会が担当した。執筆編集は本来、清野俊太朗文化振興係長が行う予定であったが、各種事業に伴う発掘調査により多忙を極め執筆が困難となり、白石市文化財保護委員会委員長の中橋彰吾氏と白石市出身で白石城三階櫓跡発掘調査の現地作業もあたった日下和寿（岩手県立博物館勤務）に編集執筆を依頼した。日下が執筆編集するにあたり、資料提供を受け、調査に関する不明な点は、各担当者への聴き取りも行った。執筆分担は次のとおりである。

中橋彰吾（第３章第１節）、上野雄規、横山正弘（第１章第２節）、亘理梧郎（第９章）、日下和寿（その他）

第３章第１節は白石市文化財愛護友の会会報第17号の２、５、６頁、「白石城築城の謎」（平成７年）、第９章は白石市誌資料「白石城解体のいきさつ」（昭和36年）から再録した。

4　本書における土色の記述は『新版標準土色帖』（小川・竹原1973）を利用した。

5　本書の第１図は国土地理院の２万５千分の１「白石」「白石東南部」「白石東部」「大河原」、第２図は白石市土木部都市計画図（平成元年）を複製して使用した。調査要項における調査諸経費は書類が整っているもののみを掲載した。

6　発掘調査成果の一部は市教育委員会等によって記者発表、各種パンフレット、宮城県遺跡調査成果発表会等で公表されているが、本書の見解が優先するものである。

7　本書刊行にあたり下記の項目について次の方々から御教示、鑑定をいただいた。

城郭、三階櫓　室野秀文（盛岡市教育委員会）

瓦　　藤沢　敦、柴田恵子、高木暢亮（東北大学埋蔵文化財調査研究センター）

陶磁器　　佐藤　洋（仙台市教育委員会）

8　発掘調査及び報告書刊行にあたり下記の方に御協力いただいた。

発掘調査と復元調査は白石城調査指導委員会の指導のもとに行われた。所属は当時のものである。

史料調査研究会には絵図、文献調査を委託した。白石城調査指導委員会は第４章に記載した。

史料調査研究会　我妻健治（成城大学）、渡辺信夫（東北大学）、平井聖（東京工業大学）、清水眞澄（成城大学）、吉原健一郎（成城大学）

協力者・機関

上野雄規（白石市立深谷小学校）、鈴木六一郎（白石植物の会）、佐々木敏雄（白石市文化財保護委員会）、森治右衛門、高橋博、宮本長二郎（文化庁文化財保護部建造物課）、桑原滋郎（宮城県教育庁文化財保護課）、阿部博志（東北歴史資料館）、須田良平（東北歴史資料館）、相原淳一（宮城県河南高校）、菊地逸夫（宮城県教育庁文化財保護課）、石本弘、菅原祥夫（福島県文化センター遺跡調査課）、稲野彰子（いろは写房）、鈴木隆、神原雄一郎、菅野智則、桜井和人、服部友里子

内閣文庫、東北大学、宮城県教育庁文化財保護課、東北歴史資料館、多賀城跡調査研究所、宮城県図書館、仙台市博物館、斎藤報恩会、岩手県立博物館

白石城跡発掘調査報告書作成委員会　中橋彰吾（白石市文化財保護委員会）、太斎享（あけぼの園）、千葉典男（白石市税務課）、遠藤智（白石市マルチメディアセンター準備室）、清野俊太朗（白石市教育委員会）

9　調査によって得られた資料及び図面等は市教育委員会において保管しており、求めに応じて公開活用している。

調　査　要　項

遺　跡　名　白石城跡（しろいしじょうあと）

遺跡番号　０２１９７　　所　在　地　宮城県白石市益岡町

種　　別　城館跡　　時　　代　中世・近世

調査主体　白石市教育委員会　　発掘調査面積　2,900㎡

調査期間　平成２年（1990）10月15日～平成３年（1991）10月18日、三階櫓跡、石垣
平成４年（1992）５月12日～平成５年（1993）11月18日、石列（土塁部）周辺、大手門跡
平成６年（1994）５月18日～平成７年（1995）１月９日、北側井戸跡、本丸内井戸跡等
平成６年（1994）10月22日～11月５日、勘定所跡（白石高校敷地内）

調査経費　平成２年度5,733,575円、平成３年度7,120,329円、平成４年度9,969,790円
平成５年度6,251,770円、平成６年度2,075,490円（何れも市単独発掘調査経費、勘定所跡は含めず）
史料調査（平成元年度委託）4,500,000円、史料調査研究会
三階櫓跡・基準点、トラバース測量1/200測量図（平成元年度）、経費不明
大手門跡写真及び基準点測量（平成４年度）、アジア航測株式会社仙台支店968,200円
大手門付近の1/100及び1/20測量図化（平成４年度）、アジア航測株式会社仙台支店1,266,900円
三階櫓跡石垣北面、東面の写真測量面（平成３年度）、アジア航測株式会社仙台支店1,390,500円
三階櫓跡建物跡遺構図面トレース（平成４年度）（株）アート54,590円
石碑移設（平成３年度）、（有）高橋建設298,700円、（平成４年度）（有）高橋建設295,610円
樹木伐採（平成３年度）、（有）高橋建設1,405,950円
白石城三階櫓基本構想策定（平成２年度）、建築文化研究所一級建築士事務所（代表八木清勝）3,038,500円
白石城絵図写真撮影（平成９年度）、新井写真事務所128,100円
よみがえる白石城パンフレット印刷（平成４年度）、小泉印刷（株）319,300円
発掘調査報告書印刷（平成９年度）（株）、東北プリント1,883,700円

調　査　員　清野俊太朗、佐藤康治、千葉典男、日下裕一郎、遠藤　智

調査協力　（有）高橋建設

調査参加者　小山　司、木須文雄、平間　博、志村久子、佐藤みつ、斎藤　栄、小形和代、半田喜美子、沼辺久男、日下和寿（東北学院大学）

調査延人員　平成２年度189人、平成３年度310人、平成４年度502人、平成５年度588人、平成６年度203人

整理参加者　大槻しげ子、家納久美、岡部とき子、山田礼子、佐久間しづ子、大槻市郎

第１章　位置と環境

第１節　位置と現況

白石市の中心に位置する白石城跡すなわち益岡公園は、市民から‘お城山’と呼ばれ親しまれて来た。特に４月末の花見シーズンには出店もでき、市内一の花見の名所として多くの人で賑わう。

白石城跡は宮城県遺跡台帳において東西0.45km、南北0.3kmの範囲が埋蔵文化財包蔵地として登録されている。この遺跡範囲中央には益岡遺跡（古代・散布地）があり、過去に須恵器が発見されている。

現況は都市公園用地、県立高校用地、神社境内等となっている。廃城以降、様々な形で利用されてきたが、現在は各所に樹木が多く緑地帯となっている。

その益岡公園は大きく分けて３つの地区から構成される。一つは、明治半ばから公園として親しまれた本丸跡地と二ノ丸跡地及び周辺、もう一つは、昭和30年代に野球場が造成された地区で沼ノ丸跡、最後は昭和54年度以降に公園化された地区で、市営野球場北の芝生広場等となっている箇所である（第３、４図）。

白石城三階櫓及び大手門復元箇所には、この敷地内に記念碑や文化財標柱、水飲み場、ベンチ、テーブル等が設置されて市民公園として利用されていた。昭和54年作成の公園現況図があり、本丸跡周辺は発掘調査着手までの状況と大きく変化していない（第４図）。

本丸公園中央部は現在、芝生部分が高く、人が歩く部分が掘り下げられ低くなり、側溝が設置されている。これは昭和44年の公園整備時に掘削したもので、工事の際、多量の遺物が出土したのを地元の小学生が目撃している。この頃、街灯も整備されたものと思われる。桜は芝生区画の端に植えられていた。中央には片倉小十郎景綱公頌徳碑がそびえ立っている。

発掘調査対象となった箇所は本丸跡北辺にあたり、木々が生い茂っていた。特に三階櫓跡斜面には多くの樹木があった。南側に登り口が設けられて跡地まで登れるようになっていた。上には戦時中には防空監視所があった。片倉報告（片倉1965）によれば、昭和40年頃までは、三階櫓跡には２階建て建物が残っていたが（写真図版40－１）、取り壊し年次は不明である。発掘調査前までコンクリート建物基礎が残っていた。周囲には安全柵が設けられ、南東にベンチ、南西に文化財標柱（白石城三階大櫓跡）も設置されていた。三階櫓跡から南西隅の橋を渡り、松が生えた土手づたいに南へ土塁上を歩いて、未申櫓跡、裏門へ行くことができた。途中、土塁の崩れ方が激しく、部分的にコンクリートによる土留めが行われていた。

三階櫓南西側は本丸土塁が一部切断され、朱塗りの橋（後に擬木に改められる）が架けられていた。市民はこの橋下を潜って旧二ノ丸方面へ通行した。切り通し状になっていた両側は玉石を埋め込んだコンクリート壁で覆われ、階段が設けられていた。

三階櫓跡東側、鐘突堂が復元された周辺は、本丸中央よりも一段高くなり、木造便所、旧白石城茶室を利用して造られた平屋の茶寮があった（写真図版39）。茶寮の東端の建物が白石城の旧茶室である。この辺りは夏においては木がうっそうと生い茂り、日中でもあまり日が差さないような場所で

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	白石城跡	城館	近世	21	南宮内遺跡	散布地	奈良、平安
2	益岡遺跡	散布地	古代	22	殿台崎遺跡	集落跡	古墳後期、平安
3	益岡西遺跡	散布地	平安	23	五橋陣屋跡	陣跡	近世
4	丸山遺跡	散布地、墓跡、城館	縄文中期、古代、中世	24	黒山横穴墓群	横穴墓	古墳後期、奈良
5	宿山遺跡	散布地、窯跡	縄文、弥生、古代	25	黒山城跡	城館、散布地	古代、中世
6	八幡原西陣屋跡	陣屋跡	近世	26	清澄山遺跡	散布地、城館	縄文、古代、中世
7	八幡原遺跡	窯跡	古代	27	豊の浦古墳群	古墳	古墳、古代
8	新屋敷	城館	中世、近世	28	城内屋敷遺跡	散布地	縄文、古代
9	中屋敷陣屋跡	陣屋跡	近世	29	寺入屋敷遺跡	散布地	古代
10	月心寺遺跡	散布地、寺院	古代、近世	30	田子屋敷遺跡	散布地	古代
11	陣場山城跡	陣屋跡、城館	中世、近世	31	浦野城跡	城館	中世
12	堂生田遺跡	集落跡	縄文後期～奈良、弥生	32	鼻子＋盛板石遺跡	散布地	古墳
13	長屋遺跡	散布地	縄文後期、平安	33	鼻子＋盛古墳	円墳	古墳
14	長屋堂遺跡	散布地	縄文後期、晩期、弥生	34	北熊谷古墳群	集落跡	古墳、平安
15	鷹山城跡	城館	近世	35	白石西遺跡	散布地	縄文、古代
16	鷹山屋敷跡	城館	近世	36	谷津川遺跡	散布地	縄文、弥生、古代、中世
17	塩ノ崎谷戸遺跡	散布地	縄文	37	江ノ下遺跡	散布地	古代、中世
18	七塚遺跡	散布地、官衙	弥生、奈良、平安、中世	38	白石条里制施行区域	水田跡	古墳～近世
19	本郷遺跡	散布地	古代	39	和田堂遺跡	散布地	縄文～近世
20	弥代内遺跡	散布地	弥生～平安	40	田中屋敷遺跡	城館	中世

第1図　遺跡地図

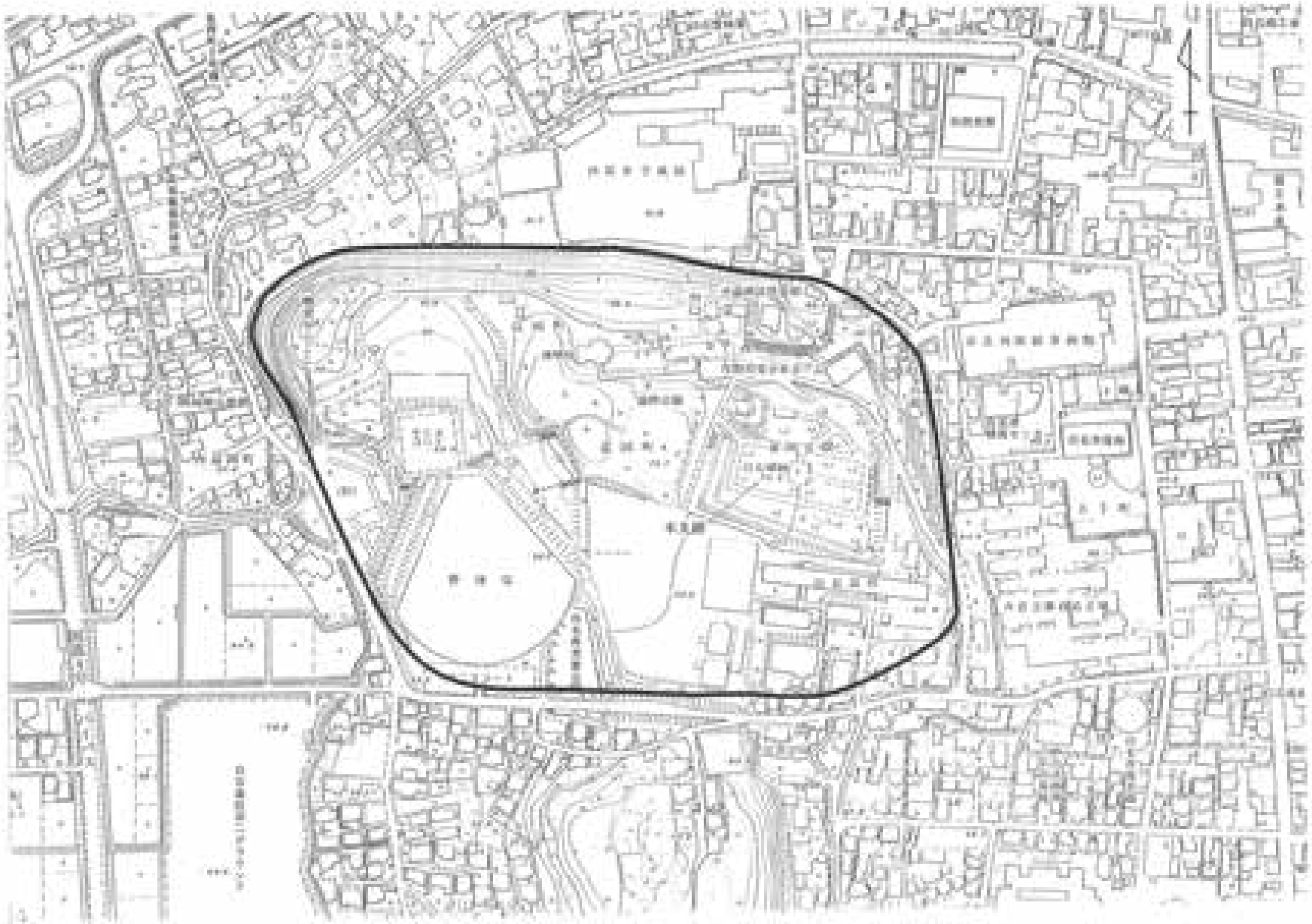
あった。白石城内建物配置図説明版が便所の南側に設けられていた。この茶寮は維持管理のため、市職員夫婦が住み込み、また、昭和40年代には市職員野球部の合宿や市民の会合で使用され、その後、昭和57年頃までは、花見で利用されたということである。

三階櫓跡北側の井戸周辺は木々によって日陰となり、湿り気の多い所であった。石垣は本丸北西隅付近から井戸あたりまで残存しているのが見えるようになっていた。石垣が最も高く残っていた箇所には明治45年壮丁記念碑が建っていた。石垣よりも標高の高い所は、草木に覆われていたが、裏込め石と考えられる小礫が所々露出していた。屋根つき井戸跡、石組庭園、白石城址碑、白石城説明看板２基があった。白石城下絵図説明版（渡辺製靴本店寄贈）、白石城姿図説明版があった。石組庭園脇には公園利用説明看板、文化財標柱（白石城庭園跡）が配置されていた。（写真図版40～42）

大手門跡は旧状を比較的残していた。大手一ノ門、二ノ門跡間の北東土塁は部分的に掘削、建碑が行われていた。側溝付きアスファルトは大手二ノ門跡を登り切る箇所まで敷かれ、本丸に車両進入防止の鎖が張られていた。二ノ門跡附近には部分的にも石垣が残り、礎石と伝えられる大石が５個あり、本丸方向を見て右に３個、左に２個あった。文化財説明版、文化財標柱（白石城大手門礎石）も設置されていた。３つの礎石北脇には昭和62年、大手門復元を呼びかける看板が作れられた。これは白石城大手門復元趣旨と記され、白石大手門復元準備委員会が設置したものである。二ノ門跡を過ぎて右側には白石城説明版、水道があった。大手門から巽櫓跡までの土塁頂部には転落防止のため鉄棒とコンクリートによる柵が設けられていた。

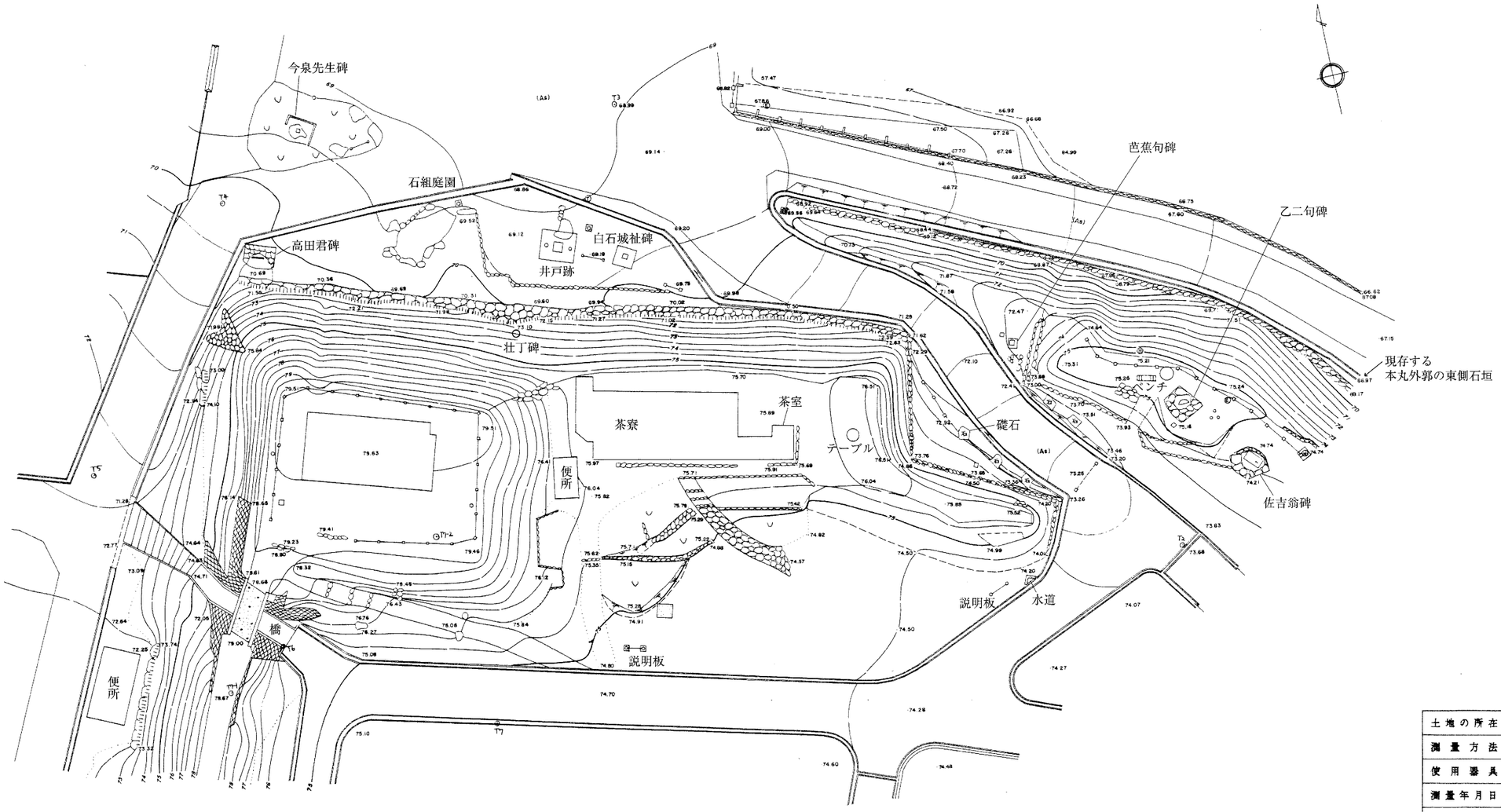
未申櫓跡は崩壊が著しく、旧状をあまりよく留めていない。周囲の土塁よりも櫓跡の標高が高いことが確認できる。現在、地表からＬ字形に最大２段の石列が確認できる。長さは東西4.2m、南北2.1m程で、長さ0.6m、幅0.4m、厚さ0.15m大の石を使用している。用いられている石で最も大きいものは長さ0.7m、幅0.4m、厚さ0.27mである。配置から推定すると本丸の南西隅に該当するとも考えられるが、やや外側に寄っており、検討が必要である。周囲から瓦片が出土している。土塁が屈曲する内側に土壇状の高まりがあり、櫓があった頃の階段跡かと推定される。櫓に付随する石垣は確認されていない。かつて白石高校生が白石高校側斜面から須恵器を採取しており、奈良・平安時代頃の遺構が付近に存在する可能性がある。三階櫓跡とこの櫓跡間に石垣が4.2m、高さ1.5mほど積まれている箇所があるが、石垣が造られた時期は不明である。位置、使用されている玉石が0.2～0.3mの大きさであることからすると近代のものである可能性がある。大正時代に、この土塁沿いに招魂社が移転した。戦後に撮影された思われる写真が残されている（写真図版40－１、白石市1964）。写真左手に社殿、右手高台に旧防空監視所建物が写っている。この櫓跡から裏門までの途中には地表に玉石が散乱しているのが確認できる。

巽櫓跡は一部を除き残存状況が比較的良好であると考えられる。櫓跡全体は南北に長い長方形状の高まりとなり、北面には石垣が１～３段ほど残存し、長さは2.4m、高さは最大で0.8mになる。石垣の石で大きいものは縦0.46m、横0.6mの大きさである。打込みハギ乱層積みと考えられる（写真図版49－４）。建物の礎石の可能性がある石も確認できる。西面において段差は確認できず、緩やかな傾斜がついて本丸と同じ標高になる。瓦片も若干見られる。



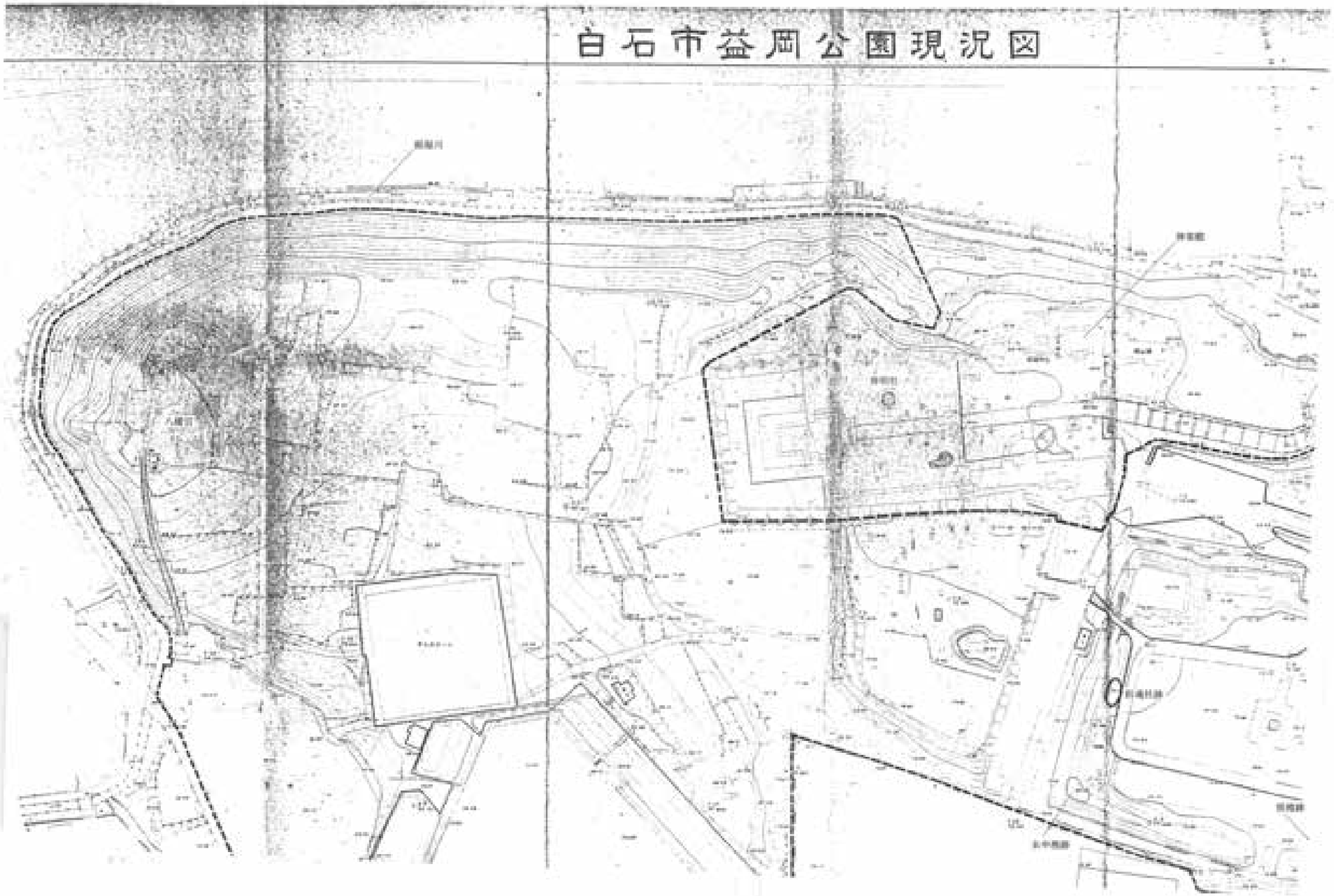
第2図　白石城跡位置図（S＝1/4,000）

白　石　城　跡　地　形　測　量　図



土地の所在	宮城県白石市益岡地内
測量方法	トラバース測量・平板測量
使用器具	国土地理院認定2級経緯・中距離型光波測距儀・平板一式
測量年月日	平成　3　年　4　月　　日
測量者	仙台市青葉区木町通1丁目1-11・505号 株式会社東北地形社 TEL022-224-0955

第３図　発掘調査前の三階櫓跡、大手門跡周辺（S=1/400）



第4図　西南芝生広場地形図（昭和54年3月）（S＝1/300）

三等山三角点標石が設置されている。西側の池跡は昭和33年に貯水池が設置され破壊されたようであるが、その後、埋め立てられ、付近に現在、寄贈された藤棚が設置されている。櫓跡東側と二ノ門跡間の本丸東辺は公園時代の上り口設置、学校用地造成等が原因と思われるが大きく地形改変を受けている。つまり白石高校裏門から公園に昇るコンクリート製階段は、斜面途中で北へ折れ、公園へと繋がっている。北へ折れる箇所を南へ折れた場合、コンクリート舗装されていないが、登り口ふうの傾斜のある通路が巽櫓跡東下まで続いている。これらの通路の西側には２カ所ほど、石垣が積まれている箇所がある。位置から考えると江戸時代のものではなく、公園時代の石積みと推定される（片倉1979）。

白石高校通用口から復元された大手一ノ門までの間に南側は打込ハギ乱積み、北側は布積みで石垣が積まれている（写真図版７－２～４）。公園からのコンクリート階段北端から北へ17mは土に覆われていおり石垣の有無は確認できない。石垣が確認できる箇所の長さは斜距離で45.6m程である。その北側4.4m程は復元工事箇所に接し、既存石垣が一度、解体され、積み直しされている。復元工事箇所と、石垣とは直線的なラインで判断できる。南端は土砂とコンクリートに覆われ、現在の公園階段下に潜るようである。

未申櫓跡から巽櫓跡間と白石高校敷地境までの間において土塁の斜面が屈曲している。裏門跡から西側は現在歩道が設置され、東側は木に覆われているが、斜面に緩やかな屈曲が認められる。裏門跡から巽櫓跡までの土塁上には地表に玉石の散乱が見られるほか、直径0.4mを超える石が東西に並んでいるように見える箇所がある。

裏門跡は土塁が切れ、白石高校側との通路となっている。東西から延びてきた土塁はこの門跡で若干高くなっている。おそらく門が機能していた時の土積みを反映していると考えられる。石垣は確認されていない。白石高校側の土層断面に土坑らしきものが確認できる。幅0.6m、深さ0.5mで周囲の土が水分を含んでいる時に、乾燥した土となっており、土層の違いを示している。土は褐色土であり、断面において埋土中央に円礫が確認されている（写真図版７－１）。

二ノ丸跡は児童公園となり北側は神明社敷地と接し遊具、石碑、柵等が設置されている。地形的には南から北へ低くなる土地となっている。中央東に池状施設がある。

本丸跡と二ノ丸跡間は標高が低くなり馬場跡となる。アスファルト敷道路が白石高校グランド方向に延びている。本丸土塁西辺に沿って鉄筋コンクリート製便所が設置され、背後には石垣が露出していた。白石高校敷地近くには物品庫も設置されている。

現在芝生広場になっている公園西側は、昭和54年度に始まる公園整備以前は民地で葡萄畑等になっていた。既に完成していたテニスコートから北側は段々畑となっており、直線的な南北、東西方向の区画が読みとれる（写真図版49－５～６）。南北方向の段差は恐らく城内の侍屋敷の区画の名残であり、東西の段差はその区画内における段差で、段差ごとに屋敷、畑地が設けられていたのだろう。これらは安政３年白石城絵図にも描かれた屋敷区割りを反映していると考えられる。地元の人の間では、果樹園時代に古井戸が発見され、その中から銀簪が発見されたという話しが伝わっている。

復元地内にあった６基の石碑は全て移転した（第３図）。①松窓乙二句碑（昭和33年建碑）、②芭蕉

句碑（昭和48年建碑）、③白石城跡碑（昭和51年建碑）、④明治四十五年壮丁記念七十四名碑、⑤高田君碑（明治43年建碑）、⑥故渡辺佐吉翁頌徳碑（大正14年建碑）があった。①は大手二ノ門跡前の北側②は大手二ノ門跡南東脇、③は三階櫓跡北側石垣下の井戸の東隣、④は三階櫓北側の斜面中、現存していた最も標高の高い石垣の上に建てられていた（写真図版４－６）。⑤は三階櫓北西隅付近にあった。⑥は大手ニノ門をくぐって左側にあり、土台石に二ノ門礎石が使用されていた。これらのうち①②は芝生広場の北側通路沿い、③は野球場の北東斜面の園路沿い、④⑤は二ノ丸跡の西側土塁沿いに移転した。⑥は、いきいきプラザ建物東側に移転となった。

移転対象とはならなかったが、本丸南東地区には⑦二宮尊徳翁遺訓碑（大正４年建碑）、⑧櫻苗木三百本植樹の記念碑（昭和36年建碑）。本丸中央には⑨片倉小十郎景綱公頌徳碑（大正４年建碑）がある。巽櫓跡に⑩三等三角点標石がある。標高76.03m、北緯37度59分55秒571、東経140度37分16秒992を示している。復元以降ではあるが、巨石を使用した⑪白石城碑（平成７年建碑）がある。三階櫓下の神明社敷地に近い箇所には⑫今泉先生誕生記念碑（昭和17年建碑）がある。

城復元後の平成９年２月には、景綱公頌徳碑の北側、厩口門跡、東口門跡の３カ所に文化財説明看板が設置された。頌徳碑の基礎掘削では、遺物が若干出土している。

次に益岡公園及び白石城の沿革を示すと次のようになる。

明治元年10月９日	白石城明け渡し
明治２年４月11日	白石城を南部氏へ引き渡し
８月13日	南部旧白石藩知事が白石城へ入城
明治３年９月28日	三陸磐城両羽按擦府廃止、白石城は旧片倉家中開拓役所預かりとなる
10月15日	白石城売却代金を北海道開拓費用に充てるよう願い、元按擦府の許可を得る
明治４年４月	旧白石城が兵隊屯所となり、御親兵が入城、三の丸の居家を壊して調練場として洋式調練を行う
明治５年	白石城、陸軍省の管轄になる
明治６年	太政官「廃城令」通達、白石城が大蔵省の管轄となる
明治７年７月28日	白石城を家禄奉還士族、御代田円八ら５名に払いさげる
明治33年５月10日	東宮殿下御慶事記念として白石城址を益岡公園とすることに決定。
明治34年１月	私立刈田造士館が現在地に移転する。
明治36年６月	刈田中学校の町民地均し奉仕作業実施される。
明治36年10月29日	白石城址本丸跡を上西勇吉郎より借り受け、郡立白石中学校の運動場に利用
明治39年10月10日	神明社が現在地に移転
明治40年11月	横綱大砲一行の大角力興行
大正元年11月	城山公園及び白中（現白石高校内）に鈴木幸吉が数百本の桜苗木を植樹する。
大正４年11月	本丸跡に片倉小十郎頌徳碑建碑、神明社参道脇に片平観平翁頌徳碑建碑
大正６年３月４日	公園地拡張のため城址１町４反５畝７歩を片倉男爵家より300年無償で借用
大正６年	本丸跡に市内の斉川から招魂社を移す
大正６年10月	横綱谷風、大砲碑を二ノ丸に建碑
昭和２年４月13日	イルミネーションを取り付けた花見茶屋ができる。
昭和４年１月	明治二十一年同年会76名によって二ノ丸跡、中ノ丸跡に檜450本が植樹される。

昭和４年６月20日	白石高校運動場拡張落成
昭和10年10月17日	白石神明社改築落成
昭和31年10月15日	都市公園として供用開始、開設面積3.5ヘクタール
昭和36年	益岡公園（本丸周辺）に桜苗木300本記念植樹される。
昭和38年３月１日	白石城本丸付近の土地所有が片倉家より市に譲渡移管
昭和38年	白石市営野球場落成
昭和40年11月	白石高校校舎全面改築工事着工（昭和44年７月落成）
昭和44年	本丸跡整備
昭和45年６月	白石高校体育館落成
昭和46年５月16日	勤労青少年ホーム落成
昭和46年	野球場南側バレーコート落成
昭和47年３月	白石高校柔道場落成
昭和50年	テニスコート落成
昭和54年～58年	芝生広場整備
昭和58年	野球場西側駐車場落成

第２節　植物調査

植物については、及川仁によって益岡公園を対象とした調査結果が既に公表されている（及川1972）。今回、発掘調査実施と並行して本丸跡地植物調査は昭和62年４月、平成２年10月、11月に上野雄規、佐々木敏雄、鈴木六一郎に依頼した。平成４年５月、６月には本丸跡東接地（大手門付近）の調査を上野雄規、佐々木敏雄に依頼した。

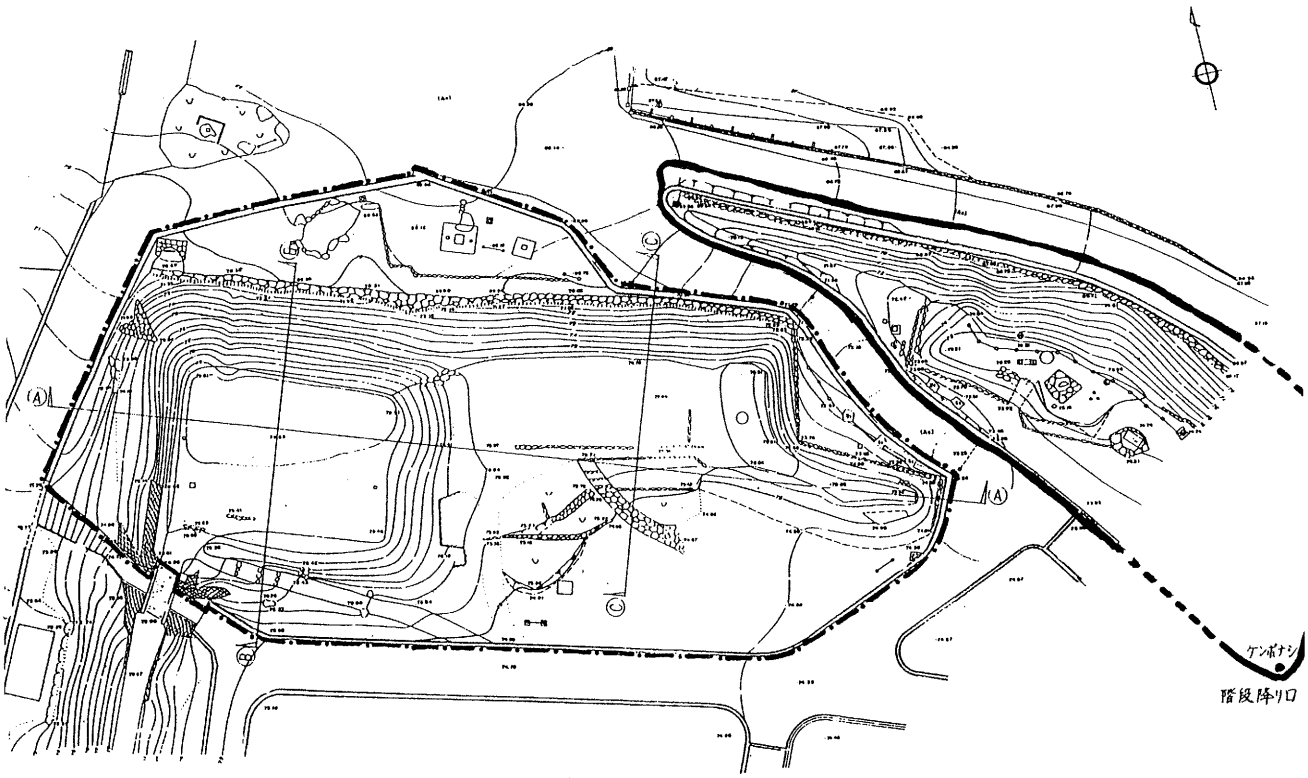


図１．調査区域（◎）．—・—：前回の調査区域（1990.11.30，報告済）．

第５図　植物調査区域

益岡公園本丸跡地植物調査報告

平成２年11月30日

１．例　言

１．調査年月日

・蘚苔植物　　昭和62年４月19日

・高等植物　　平成２年10月25日－11月28日

項目 ＼ 月日	10.25	10.27	10.30	11.5	11.16	11.25	11.28
高等植物相	○	○	○				○
樹木の大きさ・分布		○	○	○	○	○	

２．調査範囲

・蘚苔植物――益岡公園全域

・高等植物――益岡公園本丸跡地

３．調査内容及び担当者

(1) 益岡公園蘚苔植物目録――――横山　正弘　日本蘚苔類学会会員

・昭和62年４月の調査で採集した標本を、今回、同定及び研究した。

(2) 本丸跡地産高等植物仮目録
(3) 本丸跡地樹木分布
(4) 本丸跡地樹木胸高直径、樹高
(5) 本丸跡地主要樹木写真撮影

―上野　雄規　東北植物研究会事務局長
―佐々木敏雄　白石市文化財保護委員
―鈴木六一郎　蔵王のブナと水を守る会会長

４．備　考

(1) 調査時間が充分に確保できなかったため、植物標本の作成、全種類についての生育頻度の把握ができなかった。また、写真撮影もかなり不十分であった。

(2) 今回は、春季～夏季に開花する種類の調査ができなかった。また、植栽樹木についても花期でないと同定できないものもあるので、周年調査が必要である。

(3) 発掘調査報告書に本植物調査の結果も盛り込む場合は、印刷ページの分量と原稿提出締切日を連絡願いたい。調査結果を分析し、考察を加えて原稿を提出したい。

２．益岡公園の蘚苔類

白石市益岡公園の蘚苔類

横山正弘

Musci　蘚　類

Anomobryum filiforme (Griff.) Jaeg.		
var. concinnatum (Spruce)Loeske	ヒメギンゴケモドキ	石垣上
Atrichum undulatum (Hedw.) P. Beauv.	タチゴケ	地上
Bartramia pomiformis Hedw.	オオタマゴケ	地上
Brachymenium nepalense Hook.	キイリゴケ	樹幹上
Brachythecium buchananii (Hook.) Jacg.	ナガヒツジゴケ	石垣上
B. helminthocladum Broth. et Par.	ヒモヒツジゴケ	石垣上
B. populeum (Hedw.) B. S. G.	アオギヌゴケ	石垣上
Bryhnia navae-angliae (Sull. et Lesq.) Grout	ヤノネゴケ	地上
B. tenerrima Broth. et Yasuda	ヒメヤノネゴケ	樹幹上
Geratodon purpureus (Hedw.) Brid.	ヤノウエノアカゴケ	地上
Claopodium prionophyllum (C. Muell.) Broth.	ナガスジハリゴケ	石垣上
Entodon challengeri (Par.) Card.	ヒロハツヤゴケ	石垣上　樹幹上
E. sullivantii (C. Muell.) Lindb.		
var. vesicolor (Besch.) Miz.	アキタツヤゴケ	樹幹上
Fabronia matsumurae Besch.	コゴメゴケ	樹幹上
Fissidens bryoides Hedw.		
var. lateralis (Broth.) Z. Iwats. et T. Suzuki	チャボホウオウゴケモドキ	石垣上
Glyphomitrium humillimum (Mitt.) Card.	サヤゴケ	樹幹上
Grimmia pilifera P. Beauv.	ケギボウシゴケ	石垣上
Haplocladium angustifolium (Hampe et C.Muell.) Broth.	ノミハニワゴケ	地上　石垣上
Haplohymenium triste (Ces.) Kindb.	イワイトゴケ	石垣上　樹幹上
Herpetineuron toccoae (Sull. et Lesq.) Card.	ラセンゴケ	石垣上
Homomallium japonico-adnatum (Broth.) Broth.	ヤマトキヌゴケ	石垣上
Hyophila propagulifera Broth.	ハマキゴケ	石垣上
Hypnum lindbergii Mitt.	エゾハイゴケ	地上
Macromitrium japonicum Duz. et Molk.	ヤマトミノゴケ	石垣上
Mnium laevinerve Card.	ナメリチョウチンゴケ	石垣上
Myuroclada maximowiczii (Borsze.) Steere et Schof.	ネズミノオゴケ	石垣上
Orthotrichum consobrinum Card.	タチヒダゴケ	樹幹上
Philonotis fontana (Hedw.) Brid.	サワゴケ	石垣上
Physcomitrium eurystomum Sendtn.	ヒロクチゴケ	地上
Plagiomnium cuspidatum (Hedw.) Kop.	ツボゴケ	地上　石垣上
Plagiothecium cavifolium (Brid.) Iwats.	マルフサゴケ	石垣上
Ptychomitrium sinense (Mitt.) Jaeg.	チヂレゴケ	石垣上
Pylaisiadelpha tenuirostris (Brach et Schim ex Sull.) Buok	ケカガミゴケ	樹幹上
Rhynchostegium pallidifolium (Mitt.) Jaeg.	コカヤゴケ	地上
Taxiphyllum taxirameum (Mitt.) Fl.	キャラハゴケ	地上　石垣上
Thuidium kanedae Sakurai	アソシノブゴケ	地上　石垣上
Tortella japonica (Besch.) Broth.	コネジレゴケ	石垣上
Trematodon longicollis Michx.	ユミダイゴケ	地上
Venturiella sinensis (Vent.) C. Muell.	ヒナノハイゴケ	樹幹上

Hepaticae　苔　類

Cololejeunea japonica (Schlffn.) Hattori	ヤマトヨウジョウゴケ	石垣上
Frullania muscicola Steph.	カラヤスデゴケ	樹幹上
F. parvistipula Steph.	ヒメアカヤスデゴケ	樹幹上
Lejeunea japonica Mitt.	ヤマトコミミゴケ	石垣上
Lophocolea minor Nees	ヒメトサカゴケ	石垣上
Macvicaria ulophylla (Steph.) Hattori	チヂミカヤゴケ	石垣上
Porella grandiloba Lindb.	オオクラマゴケモドキ	石垣上
Reboulia hemisphaerica (L.) Raddi	ジンガサゴケ	石垣上

3．樹木の胸高直径及び樹高一覧

表1． 本丸跡地に生育する樹木の胸高直径・樹高一覧．胸高（地上約1.2m）直径10cm以上の95個体を対象とした。＊印は，伐採後に調査したため推定したもの。分枝している場合はそれぞれの胸高直径を示した。各個体の生育位置は分布図に番号で示してある。

階級	番号	和名	胸高直径cm	樹高m
●50cm以上	9	モミ	73	35
	12	ケヤキ	61	20
	19	ソメイヨシノ	54	7
	27	ソメイヨシノ	60	6
	33	ソメイヨシノ	73	6
	43	ケヤキ	67	25
	45	エノキ	51	17
	47	ケヤキ	53	22
	48	ケヤキ	35、70、90	20
	75	ミズキ	79	12
	77	アオナラガシワ	72	16
	92	アカマツ	55	13
・30－49cm	5	ケヤキ	46	20
	7	ケヤキ	43	18
	11	ソメイヨシノ	46	20
	13	ケヤキ	43	20
	14	ケヤキ	38	14
	15	ケヤキ	39	14
	20	ヒノキ	33	12
	23	ソメイヨシノ	39	5
	24	クロマツ	43	16
	28	ソメイヨシノ	40 ＊	不明
	34	ヒノキ	40	14
	35	ヒノキ	44	14
	36	クルミ	33	14
	40	アカマツ	30	19
	42	イロハモミジ	34、40	15
	59	ソメイヨシノ	33	11
	63	ソメイヨシノ	33	13
	68	ヒノキ	36	14
	69	ヒノキ	38	10
	70	ヒノキ	31	14
	72	ソメイヨシノ	43	15
	79	エノキ	36	13
	80	エノキ	36	13
	81	ソメイヨシノ	39	15
	90	ソメイヨシノ	44	2
	93	アカマツ	38	14
	95	ソメイヨシノ	44	9
・10－29cm	1	ソメイヨシノ	20	3
	2	イロハモミジ	24	12
	3	イロハモミジ	18	11
	4	ケヤキ	23	17
	6	ウワミズザクラ	15	6
	8	ソメイヨシノ	12	8
	10	モミ	19	10
	16	ヒノキ	24	10
	17	ヒノキ	20	10
・10－29cm	18	コナラ	17	10
	21	ソメイヨシノ	14	8
	22	ミズキ	25	15
	25	エドヒガン	19	7
	26	ソメイヨシノ	15	6
	29	不明	10 ＊	不明
	30	不明	20 ＊	不明
	31	不明	22 ＊	不明
	32	不明	11 ＊	不明
	37	ミズキ	10	9
	38	ケヤキ	21	17
	39	オオモミジ	10	8
	41	オオモミジ	27	15
	44	ソメイヨシノ	14	7
	46	イチョウ	23	18
	49	マメガキ	28	6
	50	ヒノキ	24	13
	51	シダレザクラ	28	12
	52	スギ	19	9
	53	ソメイヨシノ	12、13	7
	54	ウメ	18	4
	55	ソメイヨシノ	19	8
	56	ネズミモチ	15	7
	57	ソメイヨシノ	21	10
	58	ウメ	26	9
	60	ソメイヨシノ	12	8
	61	ヒノキ	27	10
	62	シダレザクラ	14	7
	64	ハナカイドウ	13	6
	65	ソメイヨシノ	16	5
	66	ソメイヨシノ	12	6
	67	エドヒガン	18	7
	71	ヒノキ	22	12
	73	ソメイヨシノ	14	4
	74	ミズキ	3、11	9
	76	オオモミジ	20	9
	78	エノキ	26	10
	82	ソメイヨシノ	21	15
	83	ソメイヨシノ	25	12
	84	ソメイヨシノ	19	11
	85	シダレザクラ	12	6
	86	ソメイヨシノ	16	5
	87	シダレザクラ	15	6
	88	エドヒガン	13	6
	89	ソメイヨシノ	12、16	7
	91	シダレザクラ	21	8
	94	ソメイヨシノ	12	11

4．樹木の種類別個体数

表2． 本丸跡地に生育する樹木の種類別個体数．胸高（地上約1.2m）直径10cm以上の95個体を対象とした。バラ科サクラ属は花期に再同定を要する。

和　名	最大胸高直径cm	胸高直径				科　名
		50cm	30－49	10－29	合　計	
ソメイヨシノ	73	3	9	18	30	バラ科
ケヤキ	90	4	5	2	11	ニレ科
ヒノキ	38		6	5	11	ヒノキ科
シダレザクラ	28			5	5	バラ科
エノキ	51	1	2	1	4	ニレ科
ミズキ	79	1		3	4	ミズキ科
アカマツ	38	1	2		3	マツ科
イロハモミジ	40		1	2	3	カエデ科
オオモミジ	27			3	3	カエデ科
エドヒガン	19			3	3	バラ科
モミ	73	1		1	2	マツ科
ウメ	26			2	2	バラ科
アオナラガシワ	72	1			1	ブナ科
クロマツ	43		1		1	マツ科
クルミ	33		1		1	クルミ科
マメガキ	28			1	1	カキノキ科
イチョウ	23			1	1	イチョウ科
スギ	19			1	1	スギ科
コナラ	17			1	1	ブナ科
ウワミズザクラ	15			1	1	バラ科
ネズミモチ	15			1	1	モチキノ科
ハナカイドウ	13			1	1	バラ科
不明	22			4	4	
合　計		12	27	56	95	

5．高等植物仮目録

凡例・本丸跡地内に自生、帰化・逸出するもの、植栽されているもの160種類（変種、品種を含む）を収録した。そのうち植栽は45種類である。

・調査月日　1990年10月25日（木）、27日（土）、30日（日）。

・諸記号　s：胞子嚢、fl：花、fr：果実、o：花または果実の痕跡、b：芽生え、§：帰化または逸出、©：植栽、＿＿＿：シダ植物。

・春季～夏季に補充調査をする必要がある。

目録

	アオイスミレ	
©	アオキ	
©	アオナラガシワ	
	アカネ	fr
©	アカマツ	
	アキカラマツ	
	アキノキリンソウ	
	アケビ	
©	アジサイ	fr
	アズマザサ	
	アズマネザサ	
	アブラススキ	
§	アメリカセンダングサ	fr
©	イチイ	
©	イチョウ	
	イヌガラシ	fl
	イヌザンショウ	b
	イヌタデ	fl
	イヌヨモギ	
	イヌワラビ	s
	イボタノキ	
©	イロハモミジ	
	イワイタチシダ	s
	イワニガナ	
	ウツボグサ	
	ウド	fr
©	ウメ	
	ウラジロガシ	
	ウワミズザクラ	
©	エドヒガン	
©	エノキ	
	オウレンシダ	s
§	オオアレチノギク	fl
	オオバコ	fr
©	オオモミジ	
	オクマワラビ	s
	オトギリソウ	
	オニドコロ	
	オノマンネングサ	
©§	オモト	fr
©	カイヅカイブキ	
	カキドオシ	
	カテンソウ	
	ガマズミ	
©	キク属 sp.	
	キチジョウソウ	fl
	キヅタ	fr
	キンマサキ	
	キンミズヒキ	fr
	クサギ	
	クサコアカソ	
	クジャクシダ	
©§	クマザサ	
	クリオザサ	
©	クルミ	
©	クロマツ	
	ケカタバミ	fl
	ケチヂミザサ	fr
©§	ケヤキ	b
	コアカソ	fr
©§	コナラ	
	コバギボウシ	
	コボタンヅル	
	サカゲイノデ	
	ササガヤ	fr
	サワラ	b

	シオデ	
©	シダレザクラ	
	ジャノヒゲ	fr
©	シュウカイドウ	
	シロダモ	fr
	シロツメクサ	
	スイカズラ	
	スイバ	
©	スギ	
	スギナ	
	ススキ	
	スズメノエンドウ	
	スズメノカタビラ	fl
§	セイヨウタンポポ	fl
	ゼンテイカ（ニッコウキスゲ）	
	センボンヤリ	fr
©	ソメイヨシノ	
	ダイコンソウ	fr
	タガネソウ	
	タチツボスミレ	
	タマブキ	
	チカラシバ	fr
	ツクシハギ	
	ツタ	
©	ツツジ属 sp.	
	ツユクサ	
©	ツルニチニチソウ	
	テイカカズラ	
	ドクダミ	
	トラノオシダ	s
	ナギナコウジュ	fr
	ナライシダ	s
	ナワシロイチゴ	
©	ナンテン	fr
	ニガカシュウ	
©	ニシキウツギ	fr
©§	ニシキギ	
	ニワトコ	
	ヌカキビ	fr
	ヌスビトハギ	fr
©§	ネズミモチ	b
	ネムノキ	
	ノイバラ	
	ノコンギク	fl
	ノブドウ	
©	ハクチョウゲ	fl
©	ハナカイドウ	fl
©	ハナズオウ	o
©	バラ	fr
	ヒカゲイノコズチ	fr
©	ヒノキ	
	ヒメアシボソ	fr
§	ヒメシャガ	
§	ヒメジョオン	fl
§	ヒメムカシヨモギ	fl
	ヒヨドリバナ	fl
	フキ	
©§	フジ	b
	フユノハナワラビ	s
	ヘクソカズラ	
	ヘビイチゴ	
	ホオズキ	
	ホソバシケシダ	s
©	ボタン	
	ボタンヅル	
©	マサキ	
©	マメガキ	fr
	マユミ	
©§	ミズキ	
	ミズタマソウ	
	ミチノクホンモンジスゲ	
	ミツバ	
	ミツバアケビ	
§	ミヤギノハギ	b
©§	ミヤマイラクサ	b
	ムラサキシキブ	
©	モミ	
	モミジガサ	fl
	ヤクシソウ	fr
	ヤグルマソウ	

©	ヤツデ	fl		ヤマハタザオ	o
	ヤブソテツ			ヤマブキ	
	ヤブタバコ	fl			
	ヤブマメ		©§	ユキノシタ	
©	ヤブラン	o			
	ヤマウコギ			ヨモギ	
	ヤマカモジグサ	o			
	ヤマグワ	b	©	リョウメンシダ	s
	ヤマシロギク	fl			

益岡公園本丸跡東接地植物調査報告

平成４年６月22日

上　野　雄　規　・　佐々木　敏　雄

１．例　言

１．調査の目的

・大手門の復元が検討されている地域周辺のうちまだ植物調査の行われていない本丸跡東接地の植栽樹木と野生植物（自生・帰化・逸出）の実態を明らかにすることが目的である。

なおこの報告は、1990年11月30日に提出した『益岡公園本丸跡地植物調査』と対をなすものである。

２．調査区域（図１）

３．調査年月日　　平成４（1992）年５月30・31日
　　６月６・10日

４．調査者　　上野　雄規（東北植物研究会事務局長、日本植物学会会員）
　　佐々木敏雄（白石市文化財保護委員）

５．調査内容

(1) 自生、帰化、逸出及び植栽しているシダ類以上の高等植物の種類を同定し、現時点での植物相を把握する。

(2) 植栽樹木のうち、胸高直径が10cm以上のすべての個体について胸高直径を計測すると共に分布図を作成する。

2．高等植物仮目録

凡例

・調査区に自生、帰化、逸出するもの及び植栽されているもの 133種類（変種・品種を含む）を収録した。そのうち植栽は17種類である。

・諸記号　s：胞子嚢、fl：花、yfl：蕾、fr：果実、b：芽生え、§：帰化または逸出、©：植栽、＿＿＿：シダ植物。

・便宜上、標準和名の五十音順に配列し、学名は省略した。

目録

	アオイスミレ	fr
	アオスゲ	fl
	アオツヅラフジ	
	アカネ	
©	アカマツ	
	アキカラマツ	
	アケビ	
©	アジサイ	
	アズマザサ	
	アズマネザサ	
	イタドリ	
	イヌツルウメモドキ	
	イヌワラビ	s
	イボタノキ	
©	イロハモミジ	
§	〃	b
	ウグイスカグラ	
	ウシハコベ	fl
§	ウスアカカタバミ	fl
	ウメモドキ	
©	ウワミズザクラ	
	エゾタンポポ	fr
©	エドヒガン	
	エノキ	
	オオジシバリ	fl
	オオバクロモジ	
	オオバコ	
	オクマワラビ	s
	オトギリソウ	
©	オニグルミ	
§	〃	
	オニタビラコ	fl
	オニドコロ	
§	オモト	
	カキドオシ	fl
	ガマズミ	yfl
§	カモガヤ	fl
§	カラスノエンドウ	fl,fr
	カラスビシャク	fl
	ギシギシ	fl, fr
	キヅタ	
	キュウリグサ	fl, fr
	キランソウ	fl, fr
	キンミズヒキ	
	クサコアカソ	
	クズ	
	クリ	
	クルマバナ	
	ケカタバミ	
©	ケヤキ	
§	〃	b
	ゲンノショウコ	
©	ケンポナシ	
	コアカソ	
	コナラ	
	コバギボウシ	
	コマユミ	
	サイカチ	b
	ササガヤ	
©	サトザクラ	
	サンショウ	
©	シダレザクラ	
	ジャノヒゲ	
§	シロツメクサ	fl
	スイカズラ	
	スギナ	
	スズメノエンドウ	fl, fr
	スズメノカタビラ	fl
§	セイヨウタンポポ	fr
	センボンヤリ	
©	ソメイヨシノ	
	ダイコンソウ	
	タガネソウ	
§	タチイヌノフグリ	fl, fr
	タチツボスミレ	fr
	ツタ	b
	ツメクサ	
	ツユクサ	fl
	ツルカノコソウ	fl
§	ツルマンネングサ	
	テイカカズラ	
	ドクダミ	fl
	トボシガラ	fl
	トラノオシダ	s
	ナガエコナスビ	fl
§	ナガハグサ	fl
§	ナツグミ	fr
	ナワシロイチゴ	
	ニガキ	
	ニガナ	fl
©	ニシキギ	
©	ニワウルシ	
	ニワトコ	
	ヌスビトハギ	

§ ネズミモチ b

ノアザミ yfl
ノイバラ
ノコンギク
ノビル fl
ノブドウ

© ハギ属の一種
ハナイバナ fl
ハハコグサ fl
§ ハルガヤ fl
§ ハルジオン fl

© ヒイラギ
§ ヒメジョオン yfl
ヒメノキシノブ
ヒメヨツバムグラ fl
ヒヨドリバナ

フキ

ヘクソカズラ

ホソバシケシダ s
ホソバジャノヒゲ
ボタンヅル

© ミズキ
§ 〃
ミズヒキ
ミミナグサ fl
© ミヤギノハギ
§ ミヤマイラクサ

ムラサキシキブ

ヤエムグラ fr
§ ヤツデ

ヤブカンゾウ
ヤブコウジ yfl
ヤブタバコ
ヤブタビラコ fl
ヤブニンジン fl
ヤブヘビイチゴ fl
ヤマカモジグサ
ヤマシロギク
ヤマツツジ
ヤマハタザオ fr
ヤマブキ
ヤマユリ

ヨモギ

以上133種類
（うち植栽のみ11種類）

3．植栽樹木の胸高直径一覧

表1． 植栽樹木の胸高直径一覧表

胸高（地上約1.2m）直径10cm以上の54個体を対象とした。分枝している場合はそれぞれの胸高直径を示した。各個体の植栽位置は図2（分布図）に番号で示してある。

階級	番号	和　　名	胸高直径（cm）
50cm以上	1	ソメイヨシノ	58
	11	ケヤキ	74
	36	サイカチ	62
30－49cm	6	ソメイヨシノ	15、17、31、33
	7	ソメイヨシノ	37
	18	オニグルミ	48
	20	エドヒガン	35
	27	シンジュ	34
	30	ミズキ	32
	31	ケヤキ	46、48
	32	エドヒガン	40
	33	ソメイヨシノ	43
	44	エドヒガン	47
	45	ソメイヨシノ	31
	47	ウワミズザクラ	39
	48	ソメイヨシノ	44
	49	ケヤキ	44
	51	ソメイヨシノ	51
	52	ミズキ	30
	54	ケンポナシ	40
10－29cm	2	イロハモミジ	16
	3	ソメイヨシノ	23
	4	クロマツ	14
	5	ケヤキ	11
	8	ソメイヨシノ	13
	9	ソメイヨシノ	21
	10	イロハカエデ	12、15
10－29cm	12	シダレモミジ	15
	13	シダレザクラ	18
	14	ソメイヨシノ	26
	15	ケヤキ	23、26、27
	16	ソメイヨシノ	12
	17	ヒイラギ	11、13、17
	19	シダレザクラ	20
	21	エドヒガン	21
	22	ソメイヨシノ	17
	23	ソメイヨシノ	12、18
	24	ソメイヨシノ	28
	25	ソメイヨシノ	16
	26	エドヒガン	17
	28	シダレザクラ	20
	29	ソメイヨシノ	15
	34	シダレザクラ	10
	35	エドヒガン	11
	37	サイカチ	23
	38	ソメイヨシノ	10
	39	サトザクラ	26
	40	サトザクラ	19
	41	サトザクラ	13、14
	42	シダレザクラ	25
	43	ソメイヨシノ	12
	46	ソメイヨシノ	26
	50	エドヒガン	27
	53	イロハモミジ	16、21

4．植栽樹木の種類別個体数

表2． 植栽樹木の種類別個体数一覧表

胸高（地上約1.2m）直径10cm以上の54個体を対象とした。

和　名	最大胸高直径(cm)	胸高直径別本数				科　名
		50cm以上	30－49	10－29	合計	
ソメイヨシノ	58	1	6	13	20	バラ科
エドヒガン	47	－	3	4	7	バラ科
シダレザクラ	25	－	－	6	6	バラ科
ケヤキ	74	1	2	2	5	ニレ科
サトザクラ	26	－	－	3	3	バラ科
イロハモミジ	21	－	－	3	3	カエデ科
サイカチ	48	1	－	1	2	マメ科
ミズキ	32	－	2	－	2	ミズキ科
オニグルミ	48	－	1	－	1	クルミ科
ケンポナシ	40	－	1	－	1	クロウメモドキ科
ウワミズザクラ	39	－	1	－	1	バラ科
シンジュ	34	－	1	－	1	ニガキ科
ヒイラギ	17	－	－	1	1	モクセイ科
クロマツ	14	－	－	1	1	マツ科
合　計	－	3	17	34	54	

5．摘　　要

益岡公園本丸跡東接地の植物相・植栽樹木の現状を以下のように把握した。

1．本調査では益岡公園本丸跡東接地の植物相、植栽樹木の分布と胸高直径（地上約1.2mでの直径）を調べた。

2．植物相は、白石城築城以来の何度かの戦い・改築・火災などを経た後、公園管理上から毎年何回か刈り払われるという、長年にわたって人為の影響を受けつつ成立したものである。

3．調査区は、北向きの斜面であるために土壌水分が自然に確保されること、植栽樹木によって草本層は強い日光の直射を受けることがなく適度の光条件下にあること、そして土壌の表層部を大幅に剥いだり移動したりしなかったことなどの理由で、植物が生育するのに適した環境が保たれている。

4．調査区からは119種類の自生・帰化及び逸出植物、17種類の植栽樹木（３種類は両方に該当）が確認でき、面積が小さく環境が単純なわりには豊富な植物相が形成されている。ただ、分布上の貴重種は見出せなった。

その植物相は、①　丘陵地帯の半日陰に生育する草本、②　丘陵～山地帯でクリ－コナラ林やアカマツ林をつくる木本、③　古くからの帰化種、④　植栽樹木などによって構成されている。植栽樹木の殆どは白石周辺あるいは国内に自生する種類が利用されている。

5．胸高直径10cm以上の植栽樹木は10科14種類54個体が確認された。中でも、胸高直径74cmのケヤキを筆頭に、62cmのサイカチ、58cmのソメイヨシノの３個体は相当の古木であり、白石城の盛衰と共に今日なお成長し続けているもので、歴史上大変貴重な樹木である。これに次ぐ階級の樹木の

うち、白石市で大木になっている個体が少ないものとしてはケンポナシ、ウワミズザクラ、ニワウルシなどがある。

6．植栽樹木54個体中、69％に当たる37個体がバラ科サクラ属である。それはソメイヨシノ、エドヒガン、ウワミズザクラ、シダレザクラ、サトザクラの５種類で、調査区は益岡公園内でも各種のサクラ属が鑑賞できる一帯である。

6．環境保全上の意見

大手門の復元計画策定及び当該地域を整備するに当たっては、以下の点に配慮されたい。

1．現存する植物相は、白石盆地の自然と白石城をめぐる人間の諸活動とが調和した歴史的所産物であり、樹木の伐採や植物相の剥離は必要最小限に留め、次代の人々に伝えて行く。

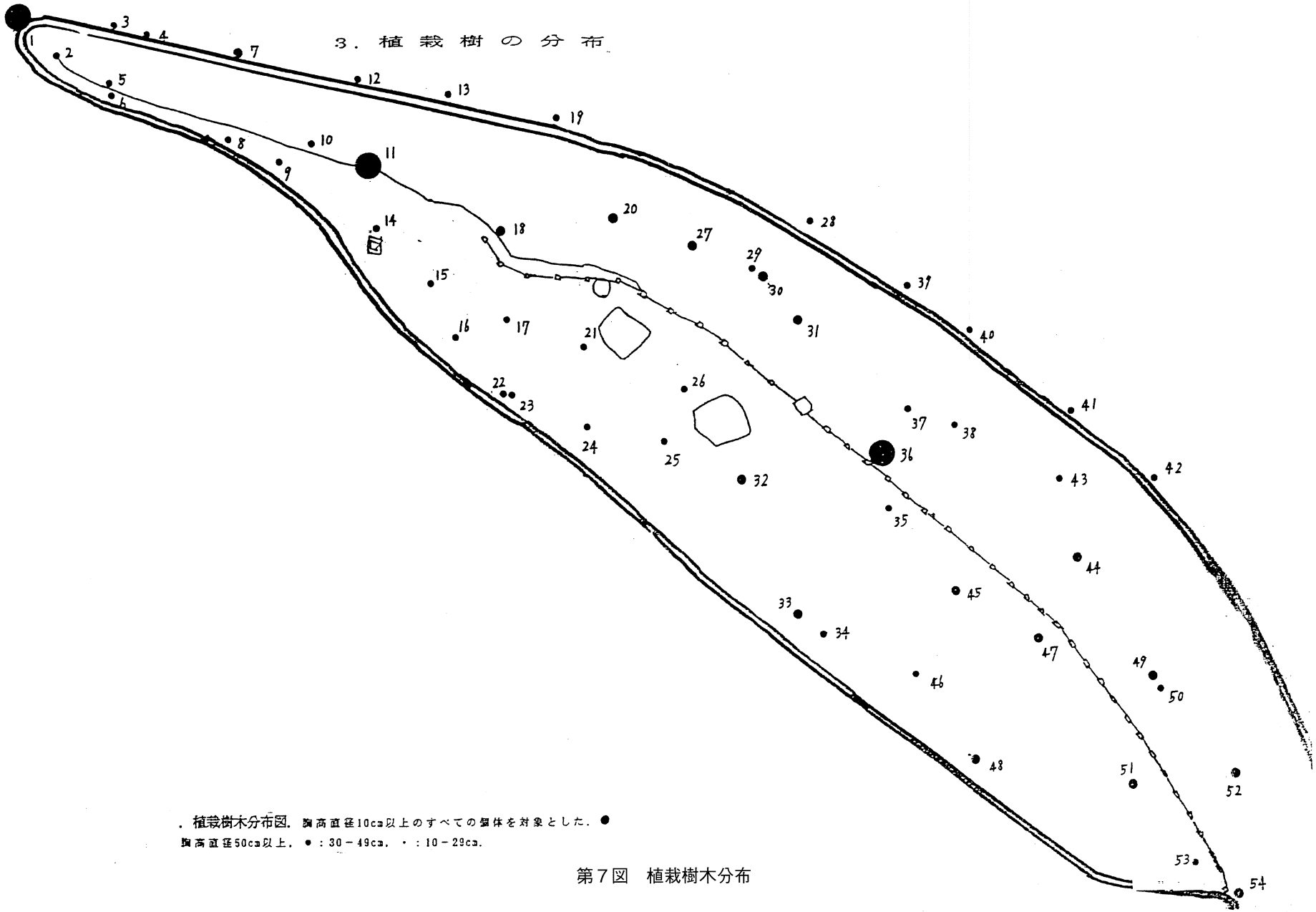
2．伐採した樹木については、その切り株の年輪についてのいろいろなデータを集め、白石城周辺の気象の変遷をさぐる手がかりとする。

3．本丸跡及び二ノ丸跡は、決して益岡公園の中に隔離された一帯ではありえず、丘陵を被う緑のベールとその上で営まれる動物の生活、そしてそこに住居を置く人々、往来する人々との深い結びつきのもとに存在する。今後も白石地方の歴史の原点として、また市民の心の拠り所としての存在意義が続くと同時に、生物にとっての生息環境、市民にとっての生活環境の変化も気念されている。従って、益岡公園一帯の自然について総合的な調査が必要と思われる。

本丸跡地樹木分布図．各個体の胸高直径・樹高，種名は表1に示してある．○胸高直径50cm以上，○30－49cm，∘10－29cm．

第6図　本丸跡地樹木分布図

3．植栽樹の分布



．植栽樹木分布図．胸高直径10cm以上のすべての個体を対象とした．●
胸高直径50cm以上．●：30－49cm．・：10－29cm．

第７図　植栽樹木分布

第３節　周辺の遺跡及び城館の分布

白石城跡周辺には古代以降の遺跡が多い（第１図）。北東1.3kmには刈田郡家と推定される大畑遺跡があり、白石城跡に南接する兀山遺跡は大畑遺跡へ瓦を供給した窯跡と推定されている（菊地・佐々木1985）。

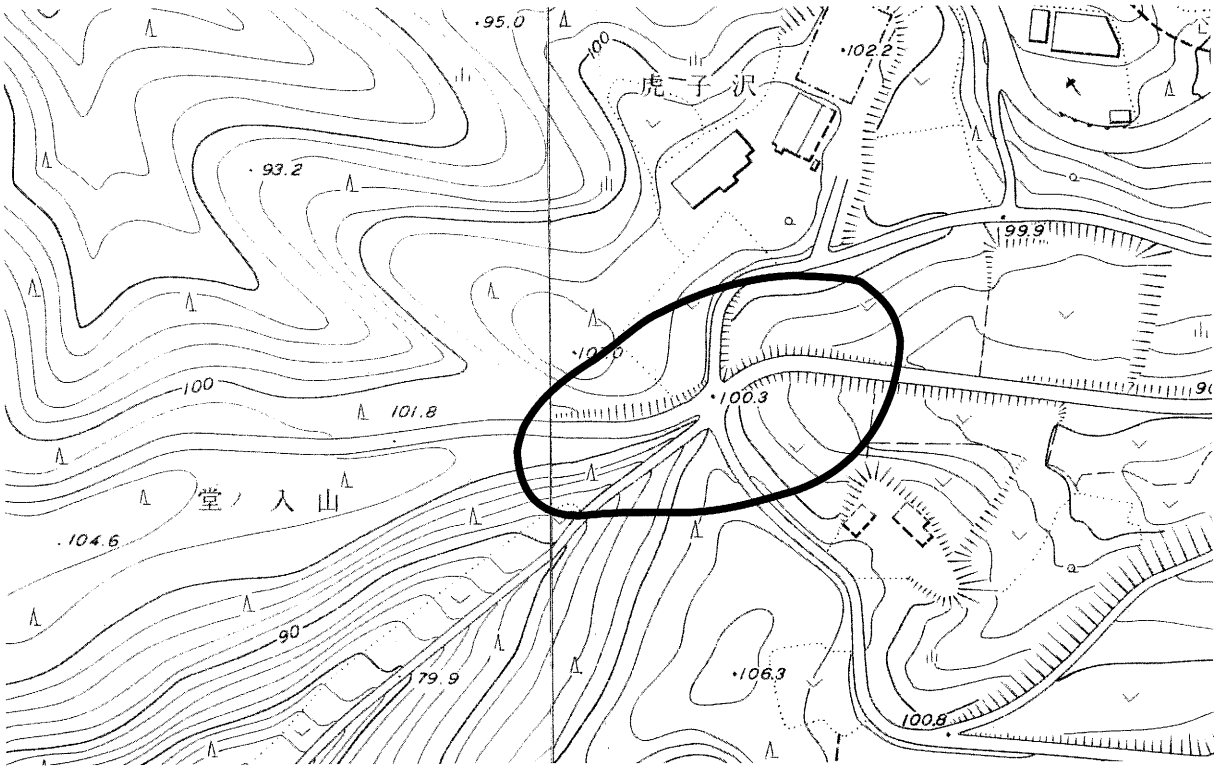
白石城に関連する遺跡として重要なものは、伊達政宗による白石城攻めの陣地となった陣場山館跡である。白石川を挟んで白石城を見下ろせる地形となっており、一部の土塁が残されているが、大半は学校用地、公務員宿舎として改変を受けている。その陣場山の麓で白石川と挟まれた所には瓦焼場窯跡があり、白石城で用いた瓦を焼いたと伝えられ、瓦、瓦器、摺鉢などの陶器、窯道具が表採されている。その他、周辺には白石城攻めの陣屋跡が遺跡として登録されており八幡坂西陣屋跡では、発掘調査により鉛鉄砲玉が発見されている。

白石地方の中世城館について見ておきたい。市内の中世城館については、過去に発掘調査が実施された城館跡もあるが、全体が発掘調査された例はない。白川犬卒都婆の羽山館跡が２回にわたって発掘調査が実施されたのが、最も大きい調査である。また、市史編纂に伴い、昭和47年から地形測量、縄張り図作成が行われ、中橋によって全体数の把握、近世文書に登場する城館と現在、遺跡として確認できる城館の対比検討が示されている（中橋1987）。市内には位置が未確認のものも含め、60箇所の城館が確認されているが、大半が南部の越河、斎川地区に集中し、中橋の指摘どおり沖積平野を望む丘陵端部に立地するのが特徴である。

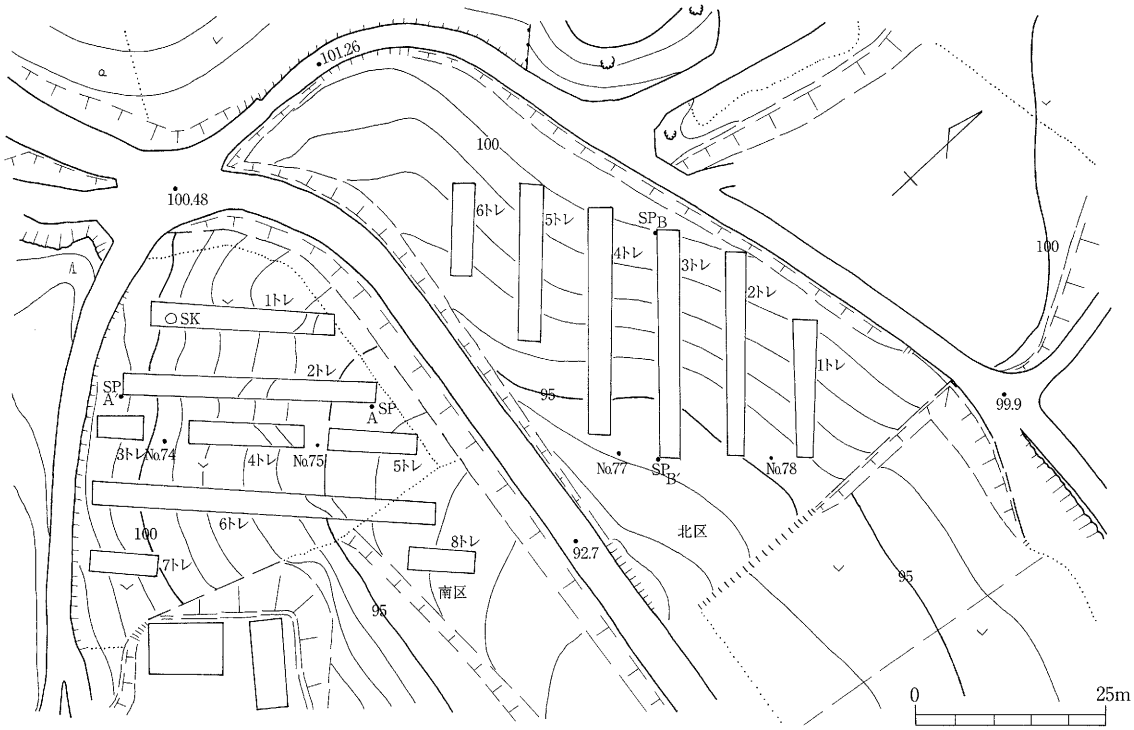
白石地区では５箇所の城館が確認されている。白石城に最も近い新館跡は白石城の南に位置する城館跡であるが、早くからアパート建設等が進み、城館構造は不明である。

白石城跡は現在、市街地西端に位置する南北に延びる丘陵北端が範囲となっているが、古い白石城は0.6km南の傑山寺辺までを含んだ範囲との指摘がある（片倉1965）。古い航空写真で城館の曲輪跡が畑地として痕跡が確認できるとの指摘があるが、現在は宅地化が進み過去の地形読み取りは難しい。

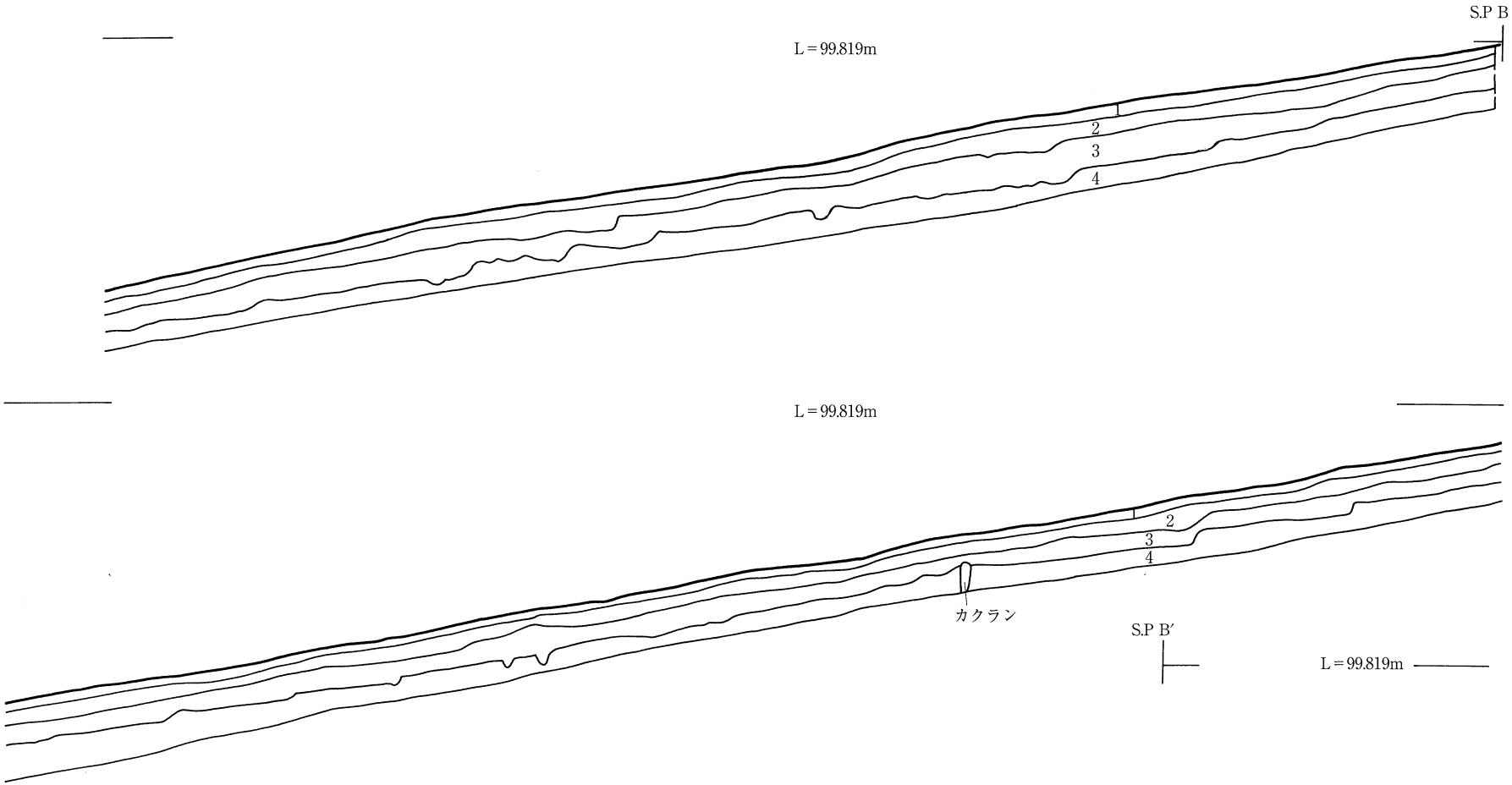
次に発掘調査が実施された近隣の遺跡を紹介する。城内屋敷遺跡（県遺跡番号02260）は鷹巣字城内屋敷に所在し、白石市役所から東へ2.6kmの丘陵上にある。北緯38度0分6秒、東経140度38分58秒付近に所在する。鷹巣古墳群に隣接している。都市計画道路建設に伴い平成７年11月～12月に確認調査が実施された（第８、９図）。調査区は大きく北区、南区に別れ、それぞれトレンチが６、８カ所設定された。発掘調査面積は856.8㎡である。付近の標高は95m～100mである。南区の１トレから土坑１基が発見された。円形を呈し、直径は1.3～1.4mで深さは0.9mである。壁面は途中で若干屈曲する。１トレ北側、２トレ中央では、性格不明の落ち込みが確認された。これは１トレから６トレまで続くようである。等高線に沿っているようにも見える。須恵器２点を図示した（第12図１、２）。これらは北区１トレ、表土下から出土したもので、１の外面は平行タタキ、内面は青海波文、２の外面は平行タタキ、ヨコナデ、内面はヨコナデである。この他、北区３トレ、表土下から須恵器片２点が出土している。この内、１点は断面に赤褐色を呈しており、５世紀代の須恵器に多い特徴である。北区２トレ、表土下から須恵器１点、南区１トレ、溝状遺構確認面からやや摩滅した須恵器１点が発見されている。



第８図　城内屋敷遺跡位置図（S=1/2,500）

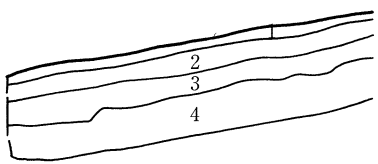


第９図　城内屋敷遺跡トレンチ配置図（S＝1/1,000）

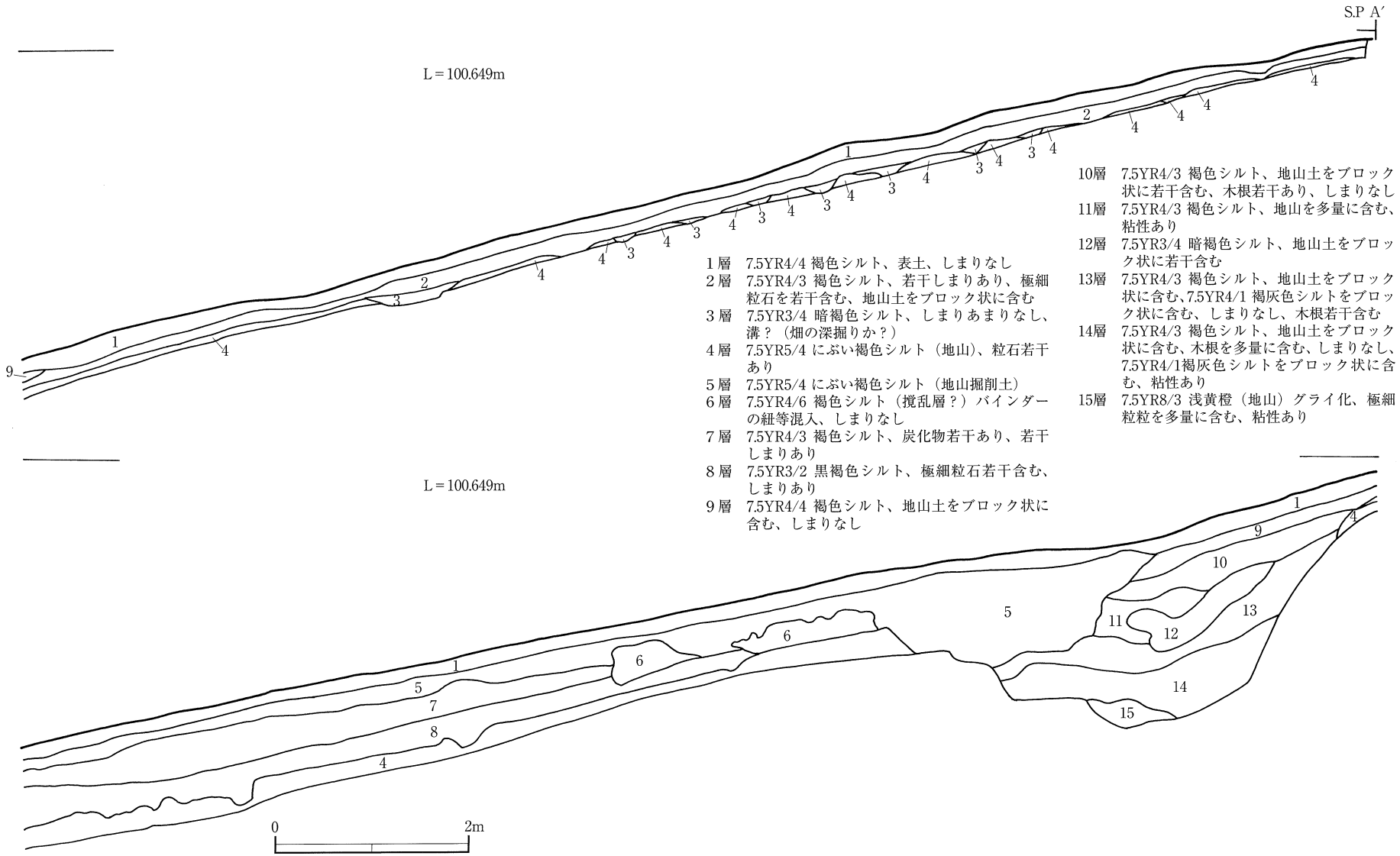


1層　7.5YR4/4 褐色シルト、表土、しまりなし、コウゾ畑、木根多し
2層　7.5YR4/6 褐色シルト、極細粒石若干あり、しまりあり
3層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、細粒石若干あり、しまりあり、細い根若干あり、畑地時の段々残存部あり
4層　7.5YR5/4 にぶい褐色シルト、地山、粒石若干あり

0　2m

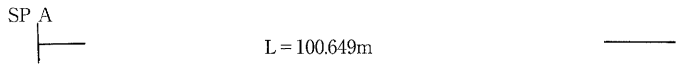


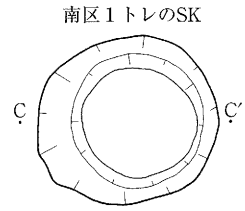
第10図　北区３トレンチセクション図（S＝1/60）

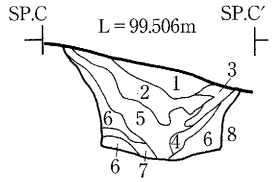


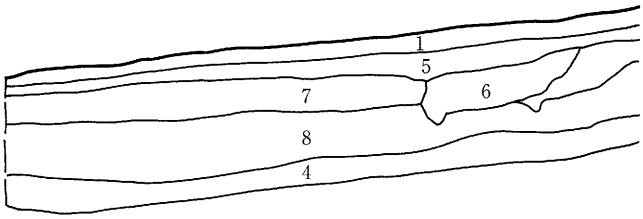
1層　7.5YR4/4 褐色シルト、表土、しまりなし
2層　7.5YR4/3 褐色シルト、若干しまりあり、極細粒石を若干含む、地山土をブロック状に含む
3層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、しまりあまりなし、溝？（畑の深掘りか？）
4層　7.5YR5/4 にぶい褐色シルト（地山）、粒石若干あり
5層　7.5YR5/4 にぶい褐色シルト（地山掘削土）
6層　7.5YR4/6 褐色シルト（撹乱層？）バインダーの紐等混入、しまりなし
7層　7.5YR4/3 褐色シルト、炭化物若干あり、若干しまりあり
8層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、極細粒石若干含む、しまりあり
9層　7.5YR4/4 褐色シルト、地山土をブロック状に含む、しまりなし
10層　7.5YR4/3 褐色シルト、地山土をブロック状に若干含む、木根若干あり、しまりなし
11層　7.5YR4/3 褐色シルト、地山を多量に含む、粘性あり
12層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、地山土をブロック状に若干含む
13層　7.5YR4/3 褐色シルト、地山土をブロック状に含む、7.5YR4/1 褐灰色シルトをブロック状に含む、しまりなし、木根若干含む
14層　7.5YR4/3 褐色シルト、地山土をブロック状に含む、木根を多量に含む、しまりなし、7.5YR4/1褐灰色シルトをブロック状に含む、粘性あり
15層　7.5YR8/3 浅黄橙（地山）グライ化、極細粒粒を多量に含む、粘性あり

第11図　南区２トレンチセクション図（S＝1/60）

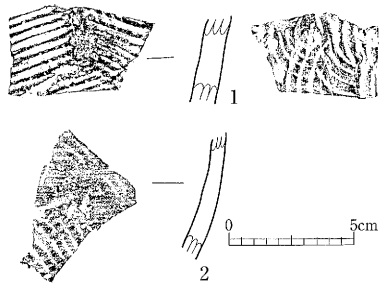


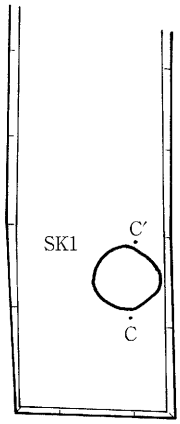


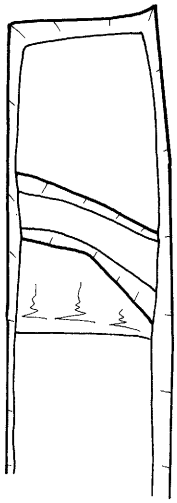


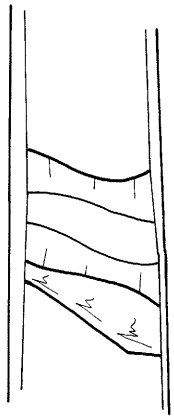


１層　7.5YR4/3 褐色シルト、極細粒石を含む、炭化物を若干含む、しまりあり
２層　7.5YR4/3 褐色シルト、7.5YR5/4 にぶい褐色シルトをブロック状に含む、若干しまりあり、極細粒石を若干含む
３層　7.5YR5/8 明褐色シルト、地山を多量に含む、若干しまりあり
４層　7.5YR4/6 褐色シルト、地山土を若干含む、粘性あり、若干しまりあり
５層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、5/4 にぶい褐色シルト粒を少量含む、あまりしまりなし
６層　7.5YR5/6 明褐色シルト、地山土を多量に含む、しまりなし、極細粒石を若干含む
７層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、しまりなし
８層　地山



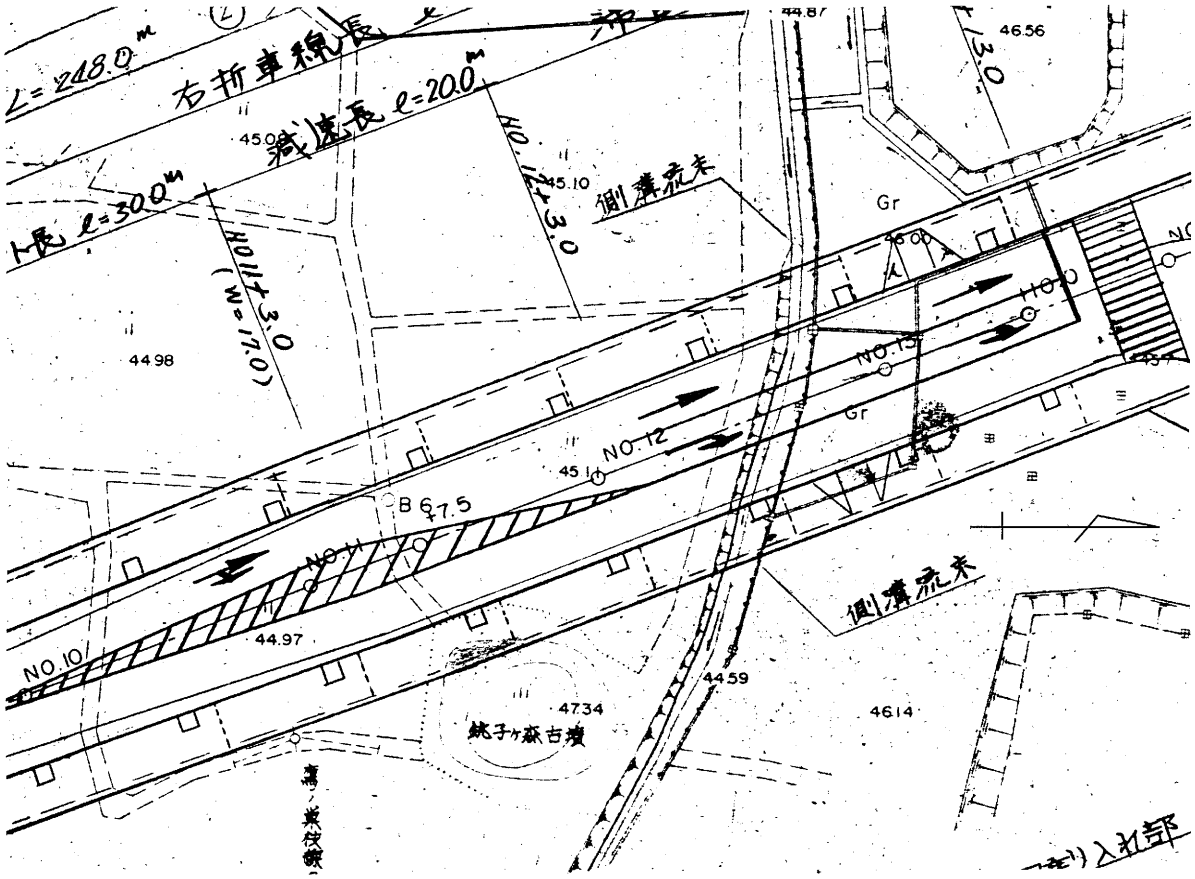






南区１トレンチ土坑位置図　南区１トレンチ北側の落ち込み　南区２トレンチ中央の落ち込み

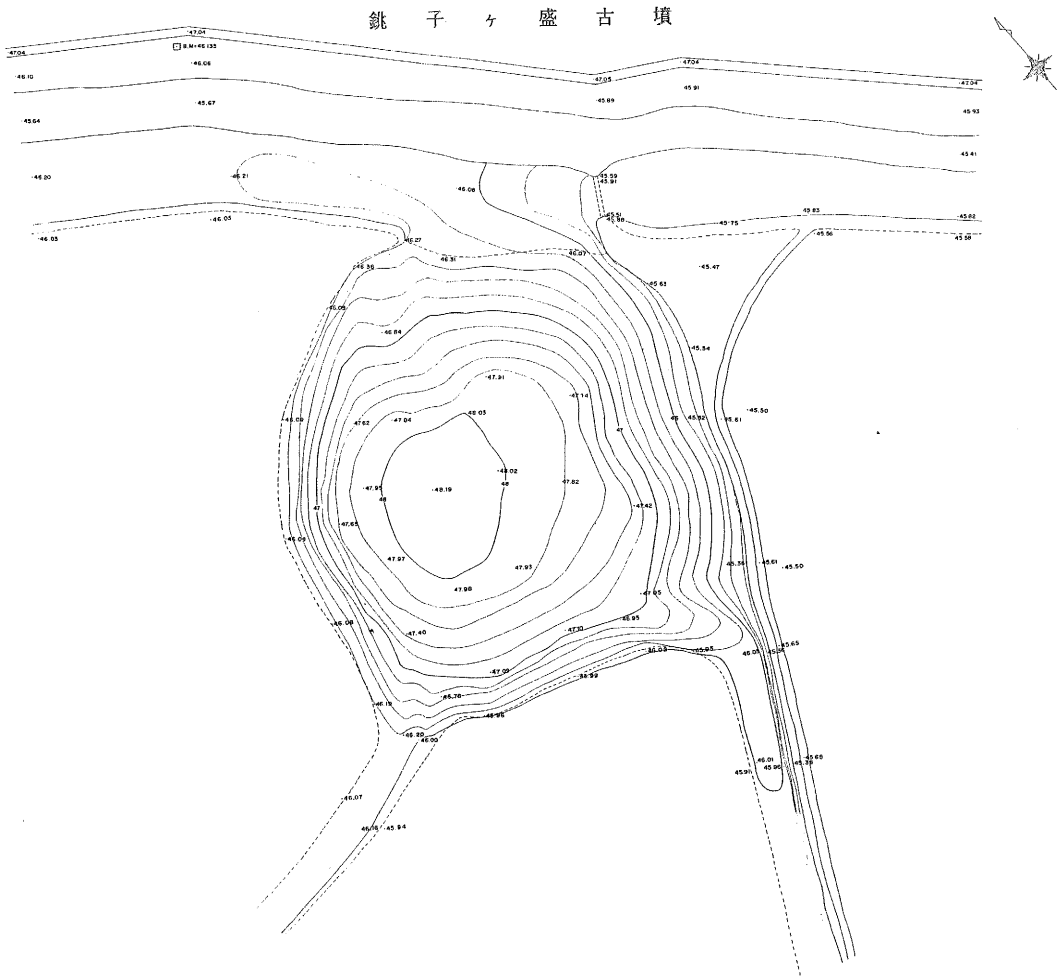
第12図　城内屋敷遺跡の遺構と遺物



第13図　銚子ヶ盛古墳位置図（S＝1/500）

銚子ヶ盛古墳（県遺跡番号02008）は白石市字銚子ヶ森にあり、白石市役所から南東へ0.75kmの斎川左岸の沖積平野に所在する円墳である（第１図33）。北緯38度0分0秒、東経140度37分42秒付近に所在する。江戸時代から知られた古墳で、鷹巣古墳群の一部である。都市計画道路建設により、一部が事業地となることから、平成３年10月に発掘調査が実施された（写真図版48）。発掘調査面積は47.51㎡である。付近の地表の標高は45m前後である。現状で墳丘高は2.1～2.2mである。トレンチが３カ所設定され、それらを繋ぐ形で調査区が設けられた。調査は墳丘の西側の一部であったが、墳丘の広がりを確認できた。調査の結果、直径12～13m、表土を除く高さは1.65mであった。東側が若干歪になっている。

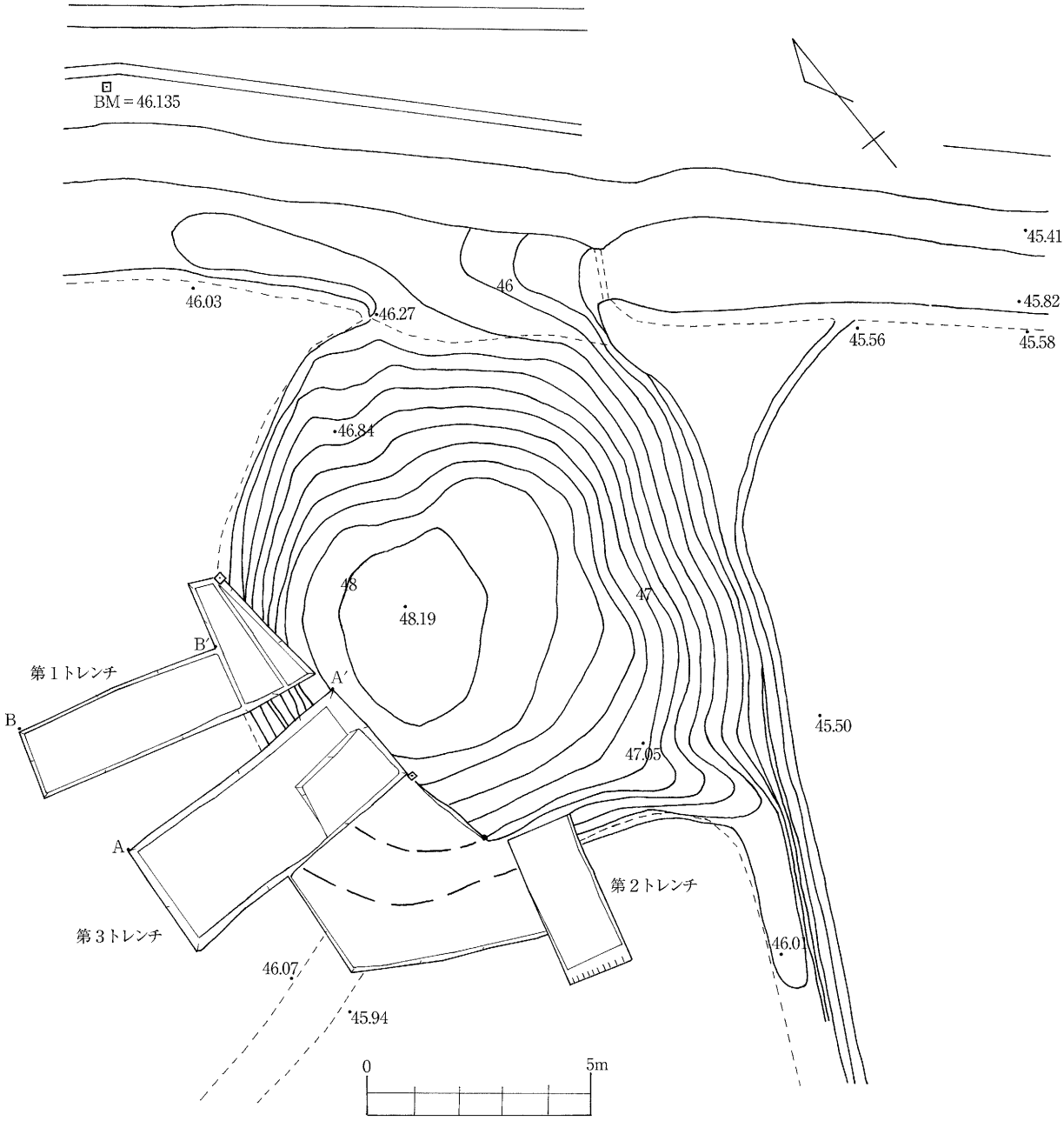
遺物は少量出土し、第17図１（写真図版48－５の１）は第３トレンチ、２層出土、縄文中期の大木９式、２（写真図版48－５の２）は第３トレンチ、３層出土、土師器甕底部片である。６～７世紀代と考えられる。外面はケズリ、内面はハケメ、推定底径は4.9cm、残存高は2.7cmである。写真図版48－５の３は土師器甑の底部片、内外面は粗いナデである。昭和58年頃に市内の中学生が文化財標柱設置で掘り返された土から表採した資料である。写真図版48－６の１は内外面ともハケメの土師器で７世紀代、地表土出土、同２、３は赤彩土師器２点で第３トレンチ、３層出土である。図示はしなかっ



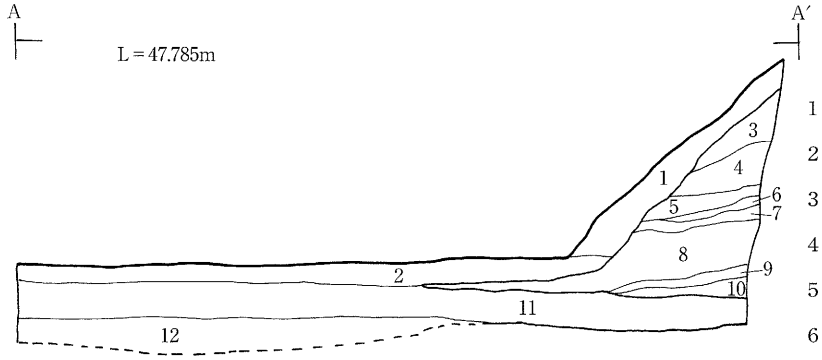
第14図　銚子ヶ盛古墳測量図（S＝1/200）

たが、地表からは近代以降の陶磁器３点、鉄製品が見つかっている。

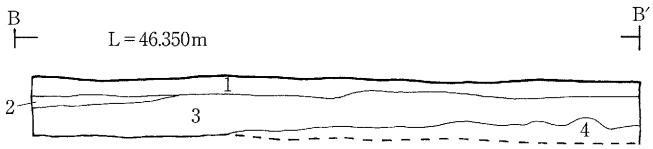
茶園遺跡（県遺跡番号02033）は福岡蔵本字茶園に所在し、白石市役所から北東へ約1.8kmの丘陵先端に位置し、白石市街を見下ろせる場所にある。北緯38度0分37秒、東経140度36分15秒付近に所在する。昭和50年10月に最初の確認調査が実施されている（中橋1976）。白石市では総合福祉センターを建設する計画があったことから、平成６年３月に確認調査を実施した（写真図版49）。第18図では、昭和50年調査図面に今回の確認調査トレンチを重ね合わせた。アルファベットが昭和50年調査、ローマ数字が今回の調査のトレンチ呼称である。標高は120～140mほどである。Ⅴトレンチで土坑が１基発見されたのみである。土坑は長軸1m、短軸0.4m、深さ0.4mの大きさである。発掘調査面積は705㎡である。遺物はⅥトレンチから江戸時代の擂鉢、産地不明、おろし目に釉なし、近代、国産、洋食器？、土師器細片、Ⅷトレンチからは土師器細片が出土している。（写真図版33－７、８）



第15図　銚子ヶ盛古墳トレンチ位置図（S＝1/150）

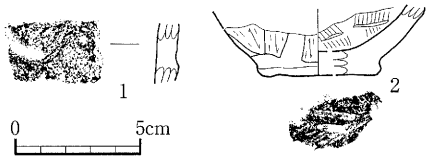


1　表土、7.5YR4/3 褐灰色シルト、藤根多し、しまりなし、ぼそぼそ
2　水田耕作土、7.5YR4/1褐灰色シルト、粘性あり
3　7.5YR3/3 暗褐色シルト、しまりあまりなし、10YR5/6 黄褐色シルトを若干含む
4　7.5YR3/4 暗褐色シルト、しまり若干あり、10YR5/6 黄褐色シルトを多量に含む
5　7.5YR3/4 暗褐色シルト、しまり若干あり、黄褐色シルトを微量含む
6　7.5YR3/4 暗褐色シルト、黄褐色シルトを少量含む、若干しまりあり
7　7.5YR3/4 暗褐色シルト、若干しまりあり、黄褐色シルトを微量含む
8　7.5YR3/4 暗褐色シルト、しまりあり、黄褐色シルトをブロック状に多量に含む（基底部）
9　7.5YR3/4 暗褐色シルト、黄褐色シルトを微量含む、しまりあり
10　7.5YR3/4 暗褐色シルト、黄褐色シルトを少量含む、しまりあり
11　7.5YR3/1 黒褐色シルト、粘性あり、酸化鉄を含む
12　10YR5/6 黄褐色シルト、（砂質）、若干粘性あり、酸化鉄を含む、地山？　3～10：墳丘部、8～10：基底部

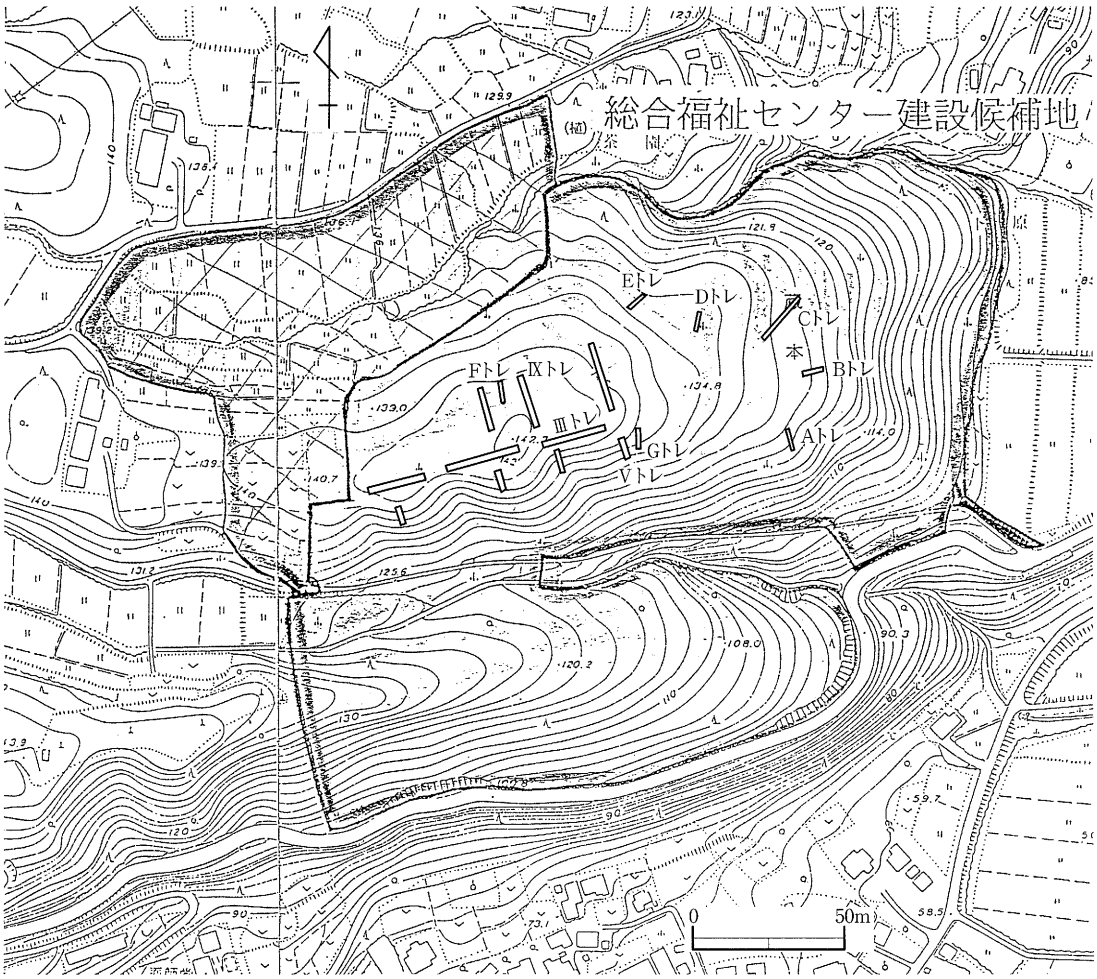


1　水田耕作土、7.5YR4/1褐灰色シルト、粘性あり
2　7.5YR3/1 黒褐色シルト、粘性あり、墳丘部の崩落土の7.5YR5/6 明褐色シルトをブロック状に含む
3　7.5YR3/1 黒褐色シルト、粘性あり、酸化鉄分を全面に含む
4　10YR5/6 黄褐色シルト、若干粘性あり、全面に酸化鉄分を含む、地山？

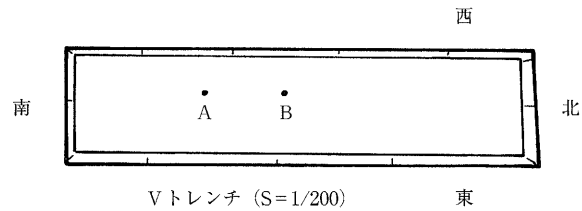
第16図　トレンチ断面図（S＝1/60）



第17図　出土遺物（S＝1/3）



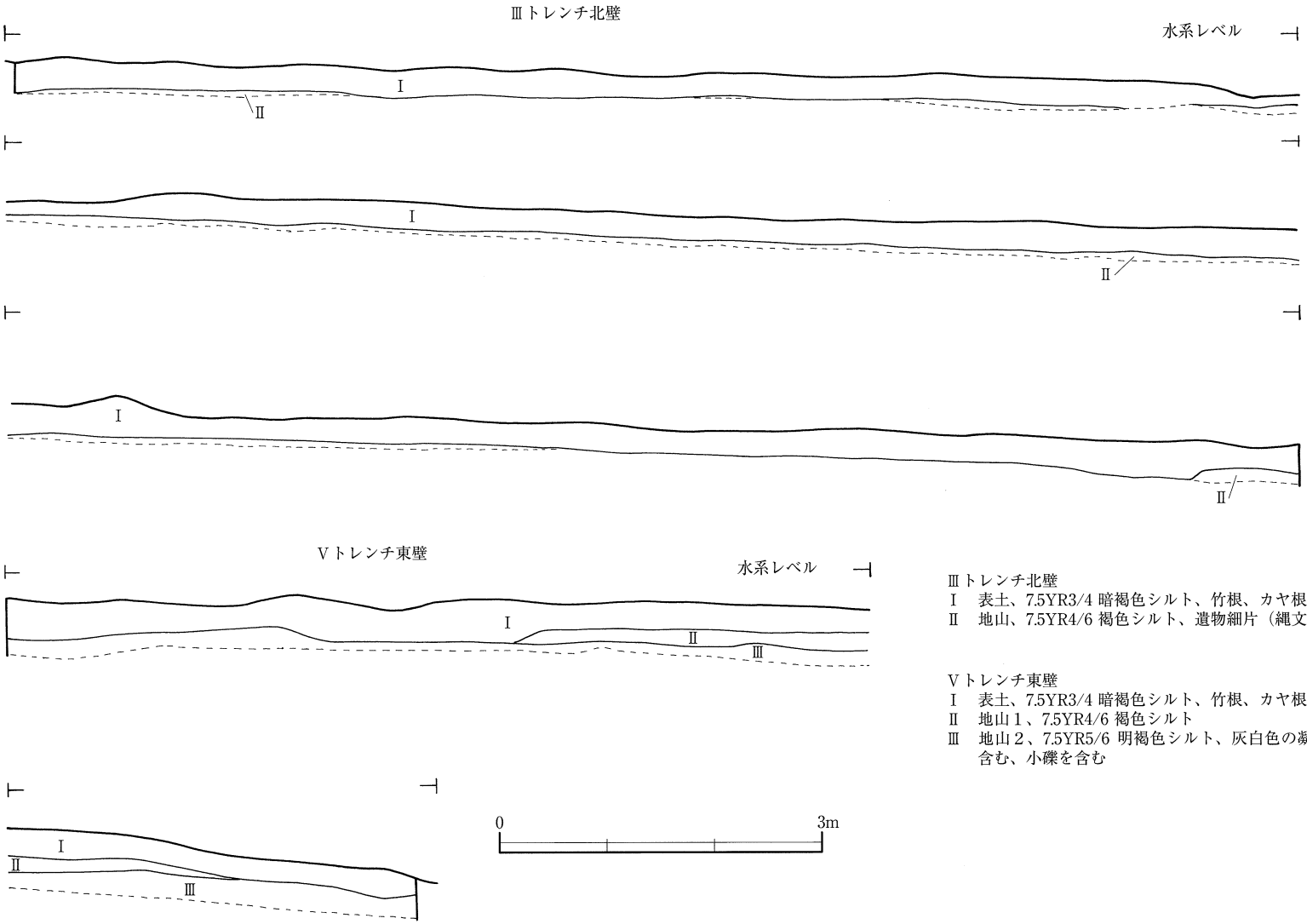
第18図　茶園遺跡確認調査トレンチ位置図（S＝1/2,500）



Ⅴトレンチ（S＝1/200）

S＝1/60

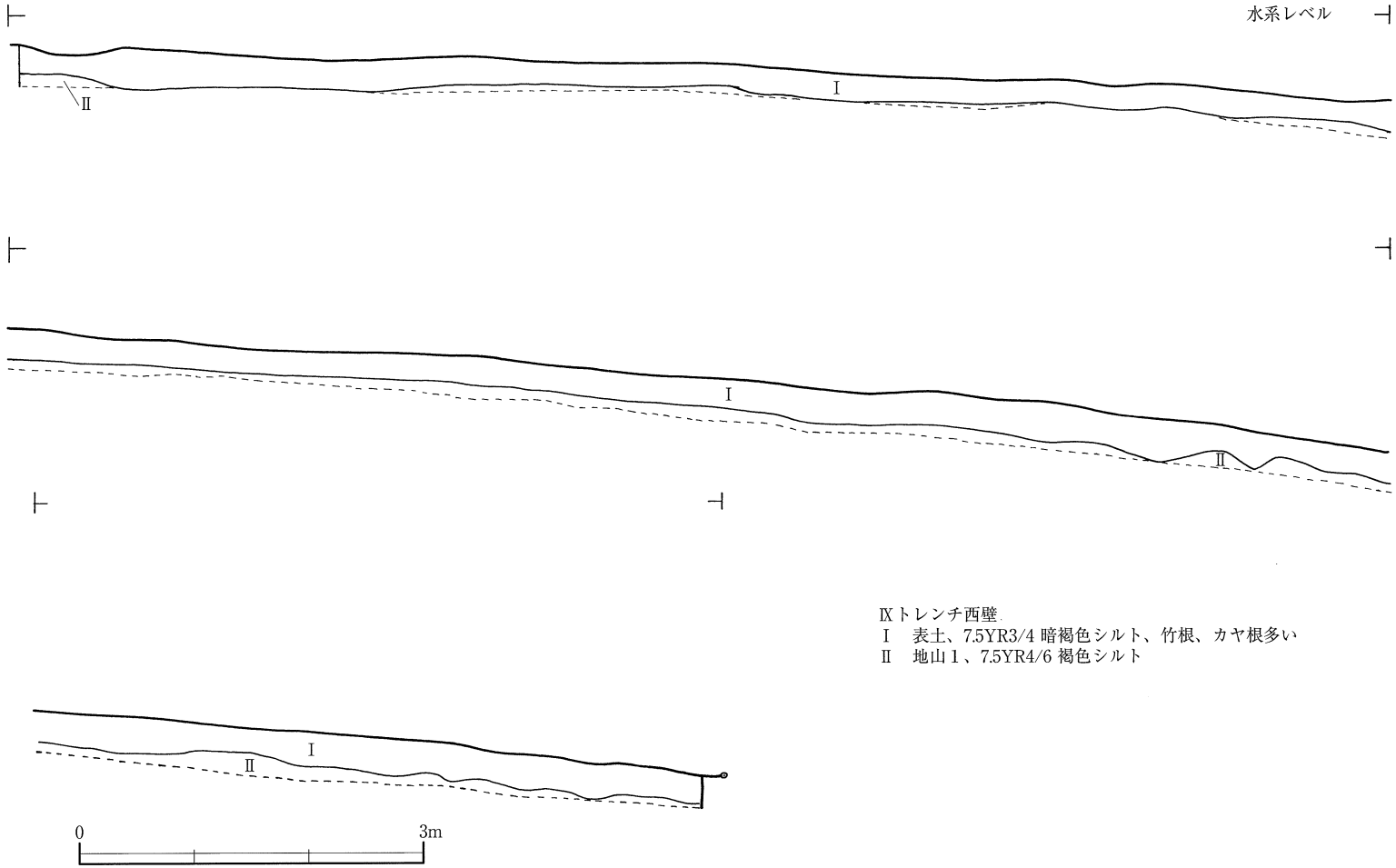
第19図　茶園遺跡Ⅴトレンチの土坑



Ⅲトレンチ北壁
Ⅰ　表土、7.5YR3/4 暗褐色シルト、竹根、カヤ根多い
Ⅱ　地山、7.5YR4/6 褐色シルト、遺物細片（縄文土器片）あり？

Ⅴトレンチ東壁
Ⅰ　表土、7.5YR3/4 暗褐色シルト、竹根、カヤ根多い
Ⅱ　地山１、7.5YR4/6 褐色シルト
Ⅲ　地山２、7.5YR5/6 明褐色シルト、灰白色の凝灰岩ブロックを含む、小礫を含む

第20図　茶園遺跡セクション図（1）



Ⅸトレンチ西壁
Ⅰ　表土、7.5YR3/4 暗褐色シルト、竹根、カヤ根多い
Ⅱ　地山１、7.5YR4/6 褐色シルト

第21図　茶園遺跡セクション図（2）

第２章　調査にいたる経過

第１節　調査に至る経緯と経過

明治７年に白石城が解体されてから、永年、市民の間では白石城復元の話が話題となっていた。地元の不忘新聞紙上でも、この話題が掲載され、市議会でも取り上げられたり、昭和57年夏には福岡中１学年の生徒が夏休みの課題で、三階櫓復元模型を製作したこともあった。昭和57年７月２日に白石市指定史跡となっている。

しかし巨額の復元費用、当時は市内に木造校舎が多数存在し、学校校舎鉄筋化率が県内最下位という状況から、市としては学校建築を優先せざると得ない事情と、現地が公園として利用されていたことが障害となり、復元構想はその都度立ち消えとなっていた。しかし、昭和62年度にはNHK『独眼竜政宗』が放送されるに及んで、重臣であった片倉小十郎も大きく注目を浴びることになった。同年の白石春祭りではNTT白石を会場に『片倉小十郎歴史展』が開催され、３万３千人の来場者があり盛況であった。市内では歴史系博物館設置、白石城復元への期待が高まる中、昭和62年夏、白石商工会議所では白石城の大手門復元を図るため、白石城大手門復元期成会を設置し、募金事業を始め、大手門跡に募金を呼びかける看板設置を行った。

こうした中、白石市では昭和63年に策定した第３次白石市総合計画の中で、まちづくりの二大核のひとつとして「お城山整備計画」を掲げた。

昭和63年８月には益岡公園整備基本構想検討委員会が設置され、市では委員会へ益岡公園整備基本計画を諮問した。委員は我妻健治（成城大学）、渡辺信夫（東北大学）、平井聖（東京工業大学）、清水真澄（成城大学短期大学）、吉原健一郎（成城大学）である。平成元年３月に委員会から答申があり、その中で市総合計画と調和した白石城の復元が掲げられた。城復元の気運が盛り上がる中、平成３年２月に白石城三階櫓復元推進市民の会（会長は白石商工会議所小林新助会頭）が発足し、募金、瓦の寄進、広報活動等を実施した。事務局は白石市中央公民館内の白石市文化協会に置かれた。この前後、少なくとも昭和63年から平成５年頃には白石春祭りの期間中、電球によってかつての三階櫓形を表示する試みも行われた。一方、白石市では市役所内部に白石城復元推進委員会（助役、教育長、都市計画課長、建設課長等関係課長９名）を発足させた。

昭和63年12月、白石城復元基金条例を設置し、基本額を５億円とした。平成３年９月10日における基金残高は総額462,590,857円となり、うち市民等からの浄財は、128,238,466円であった。このような中、平成３年８月には市民から城復元の浄財集めと称して寄付金集め詐欺を行った人物が逮捕される事件もあった。白石城復元基金は最終的に個人寄付141名60,985,371円、法人寄付82団体110,464,533円、市一般会計積立339,800,000円、利子108,035,575円、合計619,285,479円となった。平成７年３月に全額取り崩し、基金条例は廃止となった。好景気、城復元という親しみやすく、分かり易い事業であったことから、多くの寄付が寄せられた。

また、昭和64年１月市広報紙では市職員を偽って白石城絵図、歴史史料収集が行われているので、市民に注意を呼びかける程であった。

その後、専門家による復元のための各種資料収集が行われ、併せて発掘調査による資料整備の必要性も出てきたので、宮城県教育庁文化財保護課と協議し、その指導により白石城調査指導委員会を設置し、遺構確認調査並びに一部事前調査を実施した。復元構想及び計画は三階櫓の復元から、大手門までを含めた本丸北辺の復元に計画が拡大されたことから、発掘調査範囲も順次、三階櫓跡から大手門跡へと順次、移動していった。平成２年及び３年には三階櫓跡及び周辺、平成４年には大手門跡及びその周辺部分の調査を実施した。その後、三階櫓跡北側及び東側の井戸の調査を実施した。白石高校敷地の調査は平成６年に実施した。

市内部では復元事業を担当する振興課に有能な職員を重点配置し、教育委員会では文化財専門職員募集も行った。しかし、好景気で人手不足の時代背景もあり、新たな専門職員配置は実現しなかった。

この間、新聞等の取材で復元事業が取り上げられることが多くなり、市内外において城復元に対する期待が高まった。特に読売新聞では「白石城物語」が平成元年４月から平成４年３月まで、中断を挟みながら連載された。また、城復元方法をめぐっての見解の相違が大きく報道されたこともあった（河北新報1992年９月15日、21日、26日朝刊）。しかしながら、城復元が市民の琴線に触れたためか、発掘調査及び復元工事中も見学者が多く訪れた。

第３章　白石城関係資料

ここでは文献史料からみた白石城について述べたい。基本的な史料は次に掲げた。また、白石市南町の渋谷氏から寄贈を受けた渋谷家文書（約380点）には「御山林役方覚」があり、白石城再建時の材料調達についての記述がある。内容は文政２～４年、白石市西部の小原地区の堀ノ内、苗振等から白石城の大塀廻り、櫓普請のため、木舞竹に使用する竹を用立てたものである。

『白石城天守閣（三階櫓）復元建設工事報告書』では、三階櫓の規模について関連史料を掲載しているが、大手門については掲載していない。ここでは、大手門の関連史料を掲載しておきたい（旧字は常用漢字とした）。また、次に修復関連年表、そのほかの関連資料を写真図版に掲載した。

◎『白石城略記』安政元年（1854）の抜粋（仙台市博物館蔵）

一、本丸ヨリ大手二ノ門北南脇石垣高サ一間半

一、同出シ塀一ノ門脇高サ一間

一、同出シ塀二ノ門北ノ下石垣高サ三間五尺千人溜上下水ト井ノ所ニ巽ノ方角二階櫓下石垣高サ四間半勘定所前ニ午ノ方裏門脇石垣高サ三間二尺坤ノ方角二階櫓下石垣高サ四間一尺

一、大手ニノ門西折廻シ石垣高サ二間四尺

一、大手門脇石垣孕ミ三坪裏高サニテ二間上ハ横四間四寸下ニテ三間一尺門名

一、本丸ニノ門長六間半二間本丸大門也

一、同一ノ門上二間三尺六寸五分下一間三尺七寸井ノ前平地菱門

一、大手一ノ門長サ一間三尺七寸横一間七寸

一、同ニノ門二階長四間一尺八寸横二間矢狭十九窓三ヶ所

◎『御城御普請御願済之御奉書之事』の抜粋（『白石市誌資料』第31巻795頁）

一、在所刈田郡白石本丸大手門、裏門、三階櫓壱ヶ所、西南北囲塀都合百間其外城下家作焼失ニ付右両門并ニ塀櫓以連々如元之取達候儀任絵図面御願被成候所絵図面朱引之趣可被仰付旨御老中御連名之御奉書ヲ以被仰渡候、此旨可申渡由御意ニ付恐々謹言　　平賀美濃　石田豊前　後藤孫兵衛　福原縫殿　松前和泉　　文政三年正月廿九日　片倉小十郎殿

◎『白石城住居之覚』（白石市図書館蔵）

平山城　桝岡城

一、二階門　長六間半横二間一尺三寸　石垣高一間三尺五寸

白石城の修復関連年表

慶長５年７月24日　伊達政宗、上杉領の白石城を攻撃。（片）
　　７月25日　片倉景綱・石川昭光連署による城兵の身命を保証する起請文を与え、白石城開城。（片）
　　８月　この頃、白石城中普請。（片）
　　８月14日　政宗、白石城を石川昭光に預ける。（片）

7年12月	片倉景綱白石城を拝領。(片)
8年2月8日	片倉家白石城へ入る。(片)
正保3年4月26日	地震のため「石垣壁櫓等」崩れる。(片)
承応3年3月11日	「東照大権現御神輿」を迎えるため、「大櫓の南の方」に「御假殿」を建てる。(片)
寛文元年閏8月	破損により再鋳していた鐘が完成し、掛けられる。(片)
3年12月28日	正保3年の地震等により破損していた石垣、櫓等の修復につき伺い提出。翌年中に完成。(片)
7年2月晦日	「東之方石垣」普請開始。(3月9日終了。片)
延宝6年8月17日	地震にて石垣崩れる。年内中に修復完了。(片)
貞享元年6月29日	石垣普請につき、「元の如く」修復するよう老中より指示がある。(片)
4年5月28日	「本丸艮方石垣」崩れる。(片)
5年7月21日	「西曲輪切通門北脇」の石垣崩れる。(片)
元禄4年12月28日	「二之丸大手二之門南脇袖屏之土台下石垣」崩れる。(片)
5年5月16日	「坂口門東厩曲輪南之方土手土留石垣」崩れる。(片)
7年12月13日	「白石城普請」が幕府より許可された旨、藩より申し渡しがある。(片)
8年1月23日	「白石城石垣普請」始まる。(片)
10年閏2月4日	「坂口門東厩曲輪南之方土手土留石垣」崩れる。(片)
8月6日	「乾之門北脇土留石垣」崩れる。(片)
8月13日	「乾之門北脇西之方土留石垣」崩れる。(片)
11年1月26日	「坂口門東厩曲輪南之方土手土留石垣」崩れる。(片)
15年3月29日	「西曲輪切通門西之方南脇土手土留石垣」崩れる。(片)
7月28日	普請願につき、老中より許可された旨藩より申し渡しがある。(片)
8月16日	同上普請開始。(27日終了　片)
享保16年9月7日	「大地震」にて石垣、櫓、堀等多くの箇所が損壊。(片)
17年閏5月朔日	白石城下より時鐘を撞く事を許される。(片)
6月5日	「白石城普請之儀」老中より許可があった旨、藩より申し渡しあり。(片)
27日	城普請始まる。(片)
18年6月28日	城普請成就につき、当主村定藩へ御礼。(片)
19年2月6日	「白石城本丸三階裏門取付之段相達す」。(片)
寛保3年	「御勘定所出火」(年)
宝暦6年3月	「大烈風」のため、城内の松が折れる。(年)
寛政9年4月28日	8代当主片倉村典奉行職、嫡子景貞白石城締り拝命。(片)
10年正月12日	幕府の国目付白石城見分の際、景貞に名代として案内役を務めることを藩から許可される。(片)
5月3日	「公儀御目付衆」来白。翌日白石城見聞。景貞名代を務める。(片)
文化7年7月12日	これまで使用していた「時鐘」破損につき、以後「当分」の間太鼓を使用する。(片)
文政2年5月2日	白石城焼失。(片)
3年正月29日	白石城元の如く建築につき、老中奉書到来。(片)
3年5年2日	「太守(仙台藩主伊達)斉義公御入部」、 白石城御上り無し。(年) 「御城御普請中人足御手伝五ケ年」。(年)
4年4月	大手門に鯱を上げたい旨伺いの処、藩奉行衆より「御下知」。(認められたものと思われる。　年)
5年	白石城普請云々。(開)
6年9月	「大櫓御成就」。(年)
8年2月15日	「御城石垣普請向五年見詰御端立　仙台御役人下ル」。(年)
12年	「御城巽角櫓」、「石垣四ケ所」完成。(年)
弘化元年2月2日	夜中12時頃より翌3日夕方まで「烈風」のためお城等「大破」。(年)
元治元年3月23日	「御城中御普請御端立」。(年)
慶応2年11月	太鼓堂東御門に移る。(年)
明治元年10月9日	白石城、片倉家より白川口総督府へ引き渡し。(年)
明治7年7月28日	白石城、民間に払い下げ～逐次解体。

注記……(片)＝片倉代々記(『白石市史』4所収。)
(年)＝年代重要記(　　〃　　)
(開)＝開巻有楽

第１節　史料からみた白石城

白石城はよく知られているわりには、謎の多い城である。

一　白石城は何時、誰が築城したのか。

一　上杉領となり、古城を新しく縄張りし、白石城を築いたとの説があるが、本当か。

一　城下町と石垣を持つ増岡城を築城したのは、蒲生という伝承は本当か。

一　２階櫓から３階櫓に改造できたのは謎、その時期は何時か。

など、数えればキリがない。しかも、こうした謎は、これまで全く明らかにされていない。多分そうであろうという仮説と、伝承という形で伝わってきたに過ぎない。

白石城復元に先立って、発掘調査が行われたが、調査は予想外の発見や、これまで謎とされてきた事等も明らかになったり、数々の新しい資料の蓄積もあった。しかし、また謎となったこともある。

近世増岡城築城の伝承

天正19年（1591）豊臣秀吉による奥州仕置によって、伊達政宗は岩出山に移され、白石地方は蒲生氏郷領となり、刈田33ヶ村（３万８千石）は蒲生源左衛門の支配地となった。

伝承によると、源左衛門は古い白石城を、新しい鉄砲による戦いに備えて、石垣を持つ近世の城に改造、城下町もつくり増岡城と名付けたと伝えている。

源左衛門の増岡城在城は約４年間で、文禄４年（1595）には須賀川に移るが、この移封時に、増岡城を破壊して移ったと伝える説が、福島県史に記されている。この説が確かなものなら、文禄４年以降、増岡城は廃城となったと考えられる。

上杉家の白石城築城説

文禄４年の増岡城廃城後３年の、慶長３年（1598）に白石・刈田地方は上杉景勝領となる。

上杉家は、甘糟備後清長を白石城主に任命する。この甘糟が白石城を築城したという説がある。あまり良好な資料ではないとされているが、「嚢塵埃拾禄・ノウジンアイシュウロク」に・白石町裏、西方に古城有り、人皇108代後陽成天皇の御時、慶長５年夏４月、上杉中納言景勝、初めて地を開き、縄張りして此城を築構て、家臣甘糟備後守清長を居らしむ云々・とある。つまり、新しく古城を縄張りして白石城をつくったということで、増岡城は廃城となっていたようにも受け取られる。

この上杉家の白石城は、２年後の慶長５年（1600）の関ヶ原合戦時に、伊達政宗によって攻め落とされ、慶長７年には片倉小十郎が拝領して、代々片倉家の居城となった。

こうしてみると、蒲生は、白石在住４年間のあいだに、増岡城及び城下町をつくり、その城を破壊して須賀川に去り、甘糟は、この廃城となった古城を、２年程で白石城に改築し、政宗の攻めにあって落城したことになる。

現在、大型の土木機械を駆使して、復元工事が行われている。しかも、城のごく一部の復元でさえ、２年以上もかかる工期である。

どう考えても、蒲生の４年・上杉の２年の年月での、築城や改造は短い気がする。

こうした疑問も、発掘調査によって解明できるのではないかと思いながら、石垣の調査を行った。

石垣の謎

今回の復元では、残っている石垣のなかで、使用できる石は元の場所にはめ込んで使うことになっており、慎重に調査をした。

城の石垣の積み方は、大きく３種類に分けられる。年代の古い順に、野面積み・打ち込みハギ・切り込みハギの３種の積み方がある。

野面積み　加工しない自然石をそのまま積み上げる技法で、石の奥行きを長く深くして積み上げるのでゴボー積みともいう。また、近江国滋賀郡穴太（アノウ）村の村人は、古来から石工の集団で、この石積みの技法を受け継いでいることから、別名穴太積みともいわれている。

安土城・松本城・犬山城など、天正から慶長５年頃までの城はこの技法で積まれたものが多い。ちなみに、穴太村は蒲生の旧領地でもあった。

打ち込みハギ　石の表面をたたいたり、割ったりして、平らにして積み上げる技法で、石の大きさは不揃いである。

熊本城・姫路城・名古屋城などの慶長５年頃から慶長末年頃までの城に多用されている。

切り込みハギ　タガネで四角に整形し、整然と積み上げる技法で、大坂城・江戸城など寛永年間頃までの城や、江戸時代の石垣の修理などに使用されていた技法である。

こうした石積みの技法を、白石城の石垣に当てはめてみると、

野面積み技法は、３階櫓部分と櫓から南に延びる石垣部分。

打ち込みハギ技法は、３階櫓北側接点から大手門を含み、東側の石垣部分。

切り込みハギ技法は、白石高校裏門付近から大手一の門までの間に、部分的にみられる。

このように、白石城の石垣は、３種の技法が混用されている。これを詳しくみると、

３階櫓の部分は、大きな自然石を積み上げ、裏込めの栗石もしっかり詰めてあり、堂々たる野面積みであった。

これは、蒲生の築城の伝承に矛盾せず、前支配地の穴太衆の技法で、積み上げたと考えられる。しかし、蒲生時代の増岡城は、櫓部分から西側のみの石垣であったことが明らかになった。また、石垣に中世の板碑なども組み込んでおり、裏込めには石臼など、庶民の生活用具などを割って詰め込んでいることから、石材集めは苦労したとみえる。

大手門までの石垣は、打ち込みハギ技法によるもので、石垣をはずしてみると、石の表面は大きくみえるが、厚みがなく、平べったい石で、裏込め石も所々にはみられるが、少量で殆ど用をなさず、石垣というよりは、石を張った石壁状のものであった。さらに、石垣の裏側の切断した断面をみると、

古い時代の土塁であることが明らかになった。この土塁の表面に、単に石を張り付けた状態の、打ち込みハギ技法による石垣であった。

こうしたことから、蒲生の増岡城は、古白石城の全域、もしくは、一部の施設を利用して近世の城に改造したと考えられ、石垣は櫓付近の一部を積んだだけで、ほかの部分は土塁や空掘などの状態であったと考えられる。おそらく増岡城は完成をみずに蒲生が去り、廃城となったものと考えられる。

その３年後、上杉家は伊達政宗に対する備えとして、白石城を再建するが、その工事は日時との戦いで、本格的な石垣は積めず、見せ掛けだけの脆弱な石壁状のものしか作れなかったのではないか。

それと、この時代の白石城周辺の環境は、現在の寺前から片倉製糸・刈田病院・市民会館周辺は、湿地帯や河川の氾濫地であり、この方面からの攻撃は想定されておらず、手抜きも考えられよう。

この上杉の白石城は２年後、政宗によって落城するが、引き継いだ片倉家は、その維持に大きな負担を背負うことになる。

江戸時代の城の改造や修復は、すべて幕府に、城の現状絵図を付け、修復箇所を届け出て、承認をもらい、修復完成後は幕府の検閲を受けねばならない。それも幕府はいつも「いずれも先規の如く修復」を命じ、新規の改造や規模の拡大などは、殆ど許さなかったようである。

片倉代々記をみると、白石城の修理は飛び抜けて多い。大きなものだけでも約30回程の普請記事がみえる。その大部分が石垣の崩壊であった。

その度の修復は、先規の如くといわれても、恐らくできず切り込みハギの新しい技法で、修復されたものであろう。その跡が東側石垣から大手一の門にかけて見られる。

今回の復元も、この部分に現存する石は使用不能で、新しい石材で本格的な打ち込みハギの石垣になった。

２階櫓から３階櫓への改造のナゾ

蒲生・上杉時代の白石城の規模や構造については、全く不明である。

正保元年（1644）幕府は全国の大名に、「城絵図」の作成を命じ提出させているが、「奥州仙台領白石城絵図」（内閣文庫蔵）これであり、この絵図で初めて白石城の姿が明らかになった。この正保の絵図は、大櫓は２階に描かれている。

正保絵図に次いで古い絵図は、寛文３年（1663）に城の修理のため、幕府に提出した、修理絵図の控えと考えられている「刈田白石城絵図」（県立図書館蔵）である。

この寛文３年の絵図の大櫓は、２階櫓ではなく３階櫓に描かれている。このことは、白石城の大櫓は、正保元年から寛文３年までの20年程の間に、２階から３階に改造されたことになる。

片倉代々記によると、正保３年（1646）４月24日に仙台・白石地方に大地震があり、仙台城・白石城共に櫓や石垣が崩壊し、正保４年城絵図を添えて修復の願いを出し、幕府老中から「白石城の崩壊については、如元普請有るべく候　此の外櫓、塀之儀　先規の如く尤もに候」と、正保４年日附の３老中署名の許可証が、仙台藩宛にきたとある。

この許可証によると、櫓・塀は、先規の如くとあるから、絵図のように２階櫓が再建されたと見る

のが自然である。

しかし、代々記の寛文３年の頃には、正保３年の地震時の修復中、大猷院様（家光）の御他界で、修理を中止し３分の２が未修理になっている。この事は、毎年下向する公儀の御目付の了解は得ているが、破損がひどくなったので、老中へ修復窺いをだし、翌年に修復が終わったとある。

この寛文３年の修復窺いの箇所は、

○　西南角櫓但し曲屋　右櫓土台朽めり申候二付而一字立直申候

○　大手２階櫓

○　本丸東方石垣

○　その他正保時の石垣

となっている。さらに、このように修復記には大櫓についての記事はない。しかし、この寛文の修復窺いの絵図の大櫓は３階櫓に描かれている。

つまり、この20年間のある時期に、幕府に無届けで２階から３階に改築が行われた事になる。厳重な監視下にあった城の、無届けの改造は考えられないことであり、全く不思議なナゾといえる。

このナゾ解く一つのカギとして、読売新聞連載の「白石城物語」に、２層と３層の絵図について、城郭研究家の神山仁さんの話として――正保の城絵図は幕府の命令で作ったものだが天守の階層については正確でない例が他にもある。従って、３階櫓は白石城初期、つまり蒲生・上杉時代から３層だった可能性がある――と疑問をなげかけている。

この度の大櫓の復元に先立って、発掘調査が行われ、３回の櫓の建て替えが確認されたが、それぞれの遺構の櫓の規模の詳細な解明までは行われず、遺構は保存されることになった。

３階櫓の調査

発掘の結果、大櫓は３回の建て替えがあった。

一　掘立柱の建物跡

一　礎石を持つ建物跡

一　大石を据え込んだ建物跡

調査結果は、一番新しい時期は大石の時期であったが、この時期での設計は難しいとのことで、協議の結果設計を変更し、この発掘の跡を保存することになり、復元完成後は、１階の床を上げると発掘の跡が見られる構造になっている。

数多い白石城絵図

城絵図には、場内の個々の建物などは描かれていないが、堀・空堀・石垣・土塁・櫓・塀・門・井戸などの位置や、防備上の構造が正確な縮尺で描かれている。

このような白石城絵図が、読売新聞記者・名村栄治氏によると約20種類程が確認されるという。一つの城に、これ程多くの絵図が描かれ、また、残っていることも非常にめずらしい。

これらの絵図の多くは、城の修復などの際幕府に提出するため製作されたもので、絵図から見ても

数多くの修復を要した白石城であったことが明らかであろう。

主だった白石城絵図は

一 「奥州仙台領白石城絵図」（国立公文書館内・内閣文庫蔵）

正保元年（1644）に幕府が、全国の城持ち大名に城絵図を作成させ提出させたもので、白石城絵図では最も古い絵図である。大櫓は２層である。

大きさは、1.5メートル×1.54メートル。

一 「刈田白石城絵図」（宮城県立図書館蔵）

寛文３年（1663）作成。大きさは、0.95メートル×1.03メートル。大櫓は３層である。

一 「刈田郡白石城下絵図」（宮城県立図書館蔵）

前年11月から測量をはじめ天和３年（1683）完成。５枚切図になっており、３分卦（１間を３分・約９ミリ・に縮尺）で描かれている。現在５枚の内４枚が残っている。

作者は、仙台藩士野村善右衛門外４人。

大きさは、最大4.6メートル×13.7メートル。最小5.84メートル×7.18メートル。

一 「白石城絵図」（宮城県立図書館蔵）

延宝六年（1678）から測量をはじめ、５年後の天和３年に完成した。縮尺３分卦。作者は仙台藩士村上安太夫外３人。

大きさは、3.93メートル×3.03メートル。

一 「白石城絵図」（宮城県立図書館蔵）

年代不詳

一 「白石城下絵図」（白石市教育委員会蔵）

宝暦11年図を安政３年写した図の大きさは、2.40メートル×1.725メートル

第２節　絵図からみた白石城

１　絵図から見た白石城及び城下の変遷

白石城及び城下絵図の確認例については第　表にまとめた。それらから城下の変遷について考えてみたい。城及び城下の変遷についての研究は片倉信光の研究（片倉1979)、中橋彰吾（中橋1995)、風間観静（風間1979)、佐藤巧（佐藤1994)、名村栄治（名村1995、1996）等がある。

絵図における城の変遷に重きを於いた研究には片倉、佐藤、名村のものがある。今回、佐藤による絵図群の分類を踏まえ変遷をたどりたい。佐藤が示した「正保絵図」、「正保後天和前絵図」、「天和絵図」の案を活かし、最後の「天和絵図」を「天和以後宝暦以前絵図」と変えて考察を行う。「天和以後宝暦以前絵図」としたのは、宝暦絵図が天和絵図と大きな違いがないうえ、詳細な絵図であるので検討対象に加えたためである。なお、白石城は最終的に六丸五曲輪の構成になっている。

分析対象としたのは第２表の１、４，７，18、41である。絵図細部の比較は第　表に示した。正保絵図及び正保後天和前絵図と天和以後宝暦以前絵図の間には、作図上の大きな精度の違いがある。両者間には精度、幕命での作図基準の関係で省略、あるいは描かれなかった施設もあると推定される。前者においては沼ノ丸及び西曲輪にあたる箇所が相対的に小さく、北寄りに歪んで描かれている。これに対し本丸周辺は城の中心ということもあって詳細に、かつ大きく描かれている。つまり城の西側が実際の姿と異なる形で描かれている。

変遷をたどると、白石城は江戸時代を通じて城域の拡大を図っていた（第22図)。つまり、西曲輪、館堀川の設置、沢端川の流路を変更して、三ノ丸と外曲輪の外堀を設置し、さらにその外堀沿いに土塁上に柵木を巡らし、櫓場を設けるなど城の防衛機能を強化している。また沢端川は正保絵図から描かれ、流路変更があるものの、基本的には変化はない。現況で沢端川をみると、白石女子校、いきいきプラザ付近では、川の両側が川よりも緩やかに標高が高くなっている。つまり、沢端川から北側、国道113号線に向かって標高が高くなっている。このことは、沢端川に先行する小河川によって形成された自然堤防と考えられる。もともと小規模な河川がここを流れており、築城に併せて拡幅、流路整備、白石川からの水の確保等が行われたと考えたい。

細部では本丸や二ノ丸に堀を新たに設置している。一方、本丸のすぐ側にあった２カ所の櫓は、一時、白壁塀が設けられるものの、最終的には土塁上の柵木、櫓場となっており、塀が撤去され、規模縮小が行われている。

また未申及び巽櫓は、基本には大きな変化はなく、単層であるが、天和以後宝暦以前絵図では巽櫓が二層に描かれているようである。幕末の絵図では両櫓とも二層に描かれているものがある。

最後に白石城は当初二階櫓だったものが、三階櫓に変更になったというこれまでの指摘についてふれておく。これは、以前から多くの人が指摘していることであるが、これに対し２つほどの反論が可能である。

①　他の城でも三階櫓が、絵図において二階櫓に誤って描かれる例があることから、白石城も当初から三階櫓であったが、作図段階で二階櫓に描かれた可能性があるという神山仁の見解である（名村1995、中橋1995)。

② 天守閣の形式で望楼型の場合、外観は二階櫓で内部は三階にみえる場合があるという見解である。つまり実存の三階櫓が見誤って二階櫓に描かれてしまう可能性がある。現存する福井県丸岡城天守が類例として示すことができるという（盛岡市教育委員会・室野秀文氏の指摘）。

以上の点をふまえ、絵図群を詳細に観察する。「正保絵図」では二階櫓に描かれているが、一階屋根には千鳥破風、二階屋根は入母屋破風であり、層塔型とみなせる。「城郭協会絵図」（第２表18）では三階櫓に描かれ、一階屋根には千鳥破風と唐破風、二階屋根には入母屋破風が付くようである。三階屋根は入母屋破風であり、望楼型とみなせる。「寛文絵図」では三階櫓に描かれ、各階屋根に千鳥破風が付き、層塔型とみなせる。「天和絵図」では、付櫓があり、三階櫓である。二階及び三階屋根には入母屋破風が付き、望楼型とみなせる。

この様な三階櫓の検討結果からすると、当初から白石城は望楼型の三階櫓であった可能性が高い。「正保絵図」では入母屋破風ではなく千鳥破風に描かれているが、入母屋破風を誤って描いた可能性があるうえ、櫓自体が簡略化した描き方になっており、「城郭協会絵図」ほど詳細かつ正確に櫓は描かれていない。したがって簡略化の中で本来描かれるべき一階もしくは二階屋根の入母屋破風が省略されたために、二階櫓に描かれたと推定したい。その他の絵図においては入母屋破風もしくは千鳥破風が描かれ、望楼型の可能性が高くなる。白石城三階櫓が蒲生氏郷によって築城され正保年間以降まで残存していたとすると、全国の初期の天守には望楼型が多いことから白石城の三階櫓は望楼型であった可能性が高い。この三階櫓は幕末まで存続し文政二年の火災以後の再建で、より新しい型式である層塔型に改められたと思われる。

幕藩体制下においては一般に城の拡張は非常に困難と考えられてきたが、近年、仙台城本丸跡発掘調査（仙台市教育委員会1998）においても、複数時期の石垣が発見され、創建時の石垣の上に新しい石垣を築き、本丸域を拡張している。条件等によっては城の拡張、増強は実施できたものとみなせそうである。実際、白石城においても西曲輪等の増設が行われており、このような考えに立てば、白石城の二階櫓から三階櫓への規模拡大は否定することはできない。しかし、正保年間から寛文年間までに、地震により櫓への被害が史料で確認できるものの、櫓を建て替えたとする明確な史料はなく、上記①②とそれを踏まえた検討結果から当初から白石城は望楼型三階櫓を具備していたと推定される。

２　数値でみる城域の拡大

絵図からみると白石城域は拡大の一途をたどっている。イ、正保年間、ロ、正保後天和前、ハ、天和以後宝暦以前の３つに分けて考えてみたい。

城絵図の中でも記載が詳しい安政３年写（宝暦11年）と平成元年都市計画図を重ね合わせて検討する。この試みは、既に実施されており（我妻1995）、今回、これを外曲輪まで拡大し城域の拡大を検討するものである。

まず、城域をいくつかに区切ることにする。本丸、二ノ丸、中ノ丸、南ノ丸、厩曲輪、帯曲輪を①とする。②は西側の沼と南ノ丸へ伸びる細長い空堀部分とする。③は沼ノ丸と西曲輪とする。④は三ノ丸の北西端から西の部分、つまり安政３年絵図で土塁で仕切られた区画で、西に尖った三角形状の土地である。⑤は三ノ丸、⑥は外曲輪である。

それぞれの面積を、都市計画図とプラニメーターを用い３回計測した後の平均で計算すると①84,250㎡、②10,978㎡、③は45,808㎡、④12,283㎡、⑤89,280㎡、⑥56,987㎡となり、全体では299,586㎡となる。

絵図群と対比させるとイは①＋②、つまり95,228㎡、ロは①～③の合計141,036㎡、ハは①～⑥の合計299,586㎡となる。イからロへは1.48倍、ロからハへは2.1倍となっている。

しかし、この拡大から順次、城域が拡大し機能を強化したとばかり言えない面がある。ハの段階は確かに城域が最大となり、城の最大形を示している。イの時期には三ノ丸、外曲輪にあたる箇所は、単に侍屋敷と記されているものの、城の一部とは認識されていない。西曲輪も同様である。絵図群を通して判るのは、イの時期には既に存在した侍屋敷が順次、城域として取り入れられていることである。それが先に示した見かけ上の面積拡大に繋がっている。

第１表　各絵図群の比較

	イ　正保絵図	ロ　正保後天和前絵図	ハ　天和以後宝暦以前絵図
三階櫓	二階櫓	三階櫓	三階櫓
本丸未申櫓	一階櫓	一階櫓	一階櫓
本丸巽櫓	一階櫓	一階櫓	二階櫓ヵ
二ノ丸	蔵屋敷	二ノ丸	ニノ丸
巽櫓	土塁上に巽櫓	土塁上に鉄砲狭間白壁塀と巽櫓	櫓なし（土塁と櫓場）
丑寅櫓	土塁上に丑寅櫓	櫓なし（土塁と柵木列）	櫓なし（土塁と柵木列と櫓場）
西曲輪	侍屋敷	西曲輪	西曲輪
沼ノ丸	沼あり	沼あり	沼ノ丸
館堀川	なし	館堀川あり	館堀川あり
巽曲輪	なし	なし	巽曲輪あり
三ノ丸外堀	なし	堀のみあり	堀、土塁上に柵木、櫓場あり
外曲輪外堀	なし	堀のみあり	堀、土塁上に柵木、櫓場あり
本丸南西堀	なし	なし	堀あり
二ノ丸西側堀	なし	なし	堀あり

1 [illegible]

2 [illegible]

3 [illegible]

4 [illegible]

図22図 地域の交通

第２表　白石城絵図及び城下絵図

番号	名　　称	製作年代	法　　量	所 有 者	文　　献
1	白石城絵図	正保年間	1.59×1.54	国立公文書館	片倉1982
2	刈田郡白石城下御絵図	天和三年（1683）	5.84×7.18、 4.61×13.75	宮城県図書館	片倉1982 宮県図1993
3	刈田郡白石城絵図	寛文四年（1664）	0.95×1.03	宮城県図書館	宮県図1993
4	白石城絵図	天和三年（1683）	3.03×4.15	宮城県図書館	宮県図1993
5	白石城下絵図	不明	1.58×1.75	宮城県図書館	宮県図1993
6	白石城普請奉窺図	貞享元年（1684）	134.8×156.8	仙台市博物館	仙台市博1994
7	奥州仙台領白石城並城下絵図	天和三年（1683）	293.7×205.2	仙台市博物館	仙台市博1994
8	白石城絵図	元禄十五年（1702）	134.6×155.4	仙台市博物館	
9	白石城絵図	寛政十年（1798）	163×172.3	仙台市博物館	片倉1982
10	白石城図	不明	91×97	仙台市博物館 伊達家寄贈文化財	仙台市博1966
11	白石城絵図	不明	97×91	仙台市博物館	仙台市博物館1987 p.59 名村1996
12	白石城下略図	幕末		仙台市博物館 （奥羽盛衰見聞誌）	白石市1971 p.717
13	白石城の図	明治41年（1908）春 小関雲洋画	135.8×62.1	仙台市博物館	仙台市博1994
14	白石城略記抜粋之図	（コピー）	108×107.2	仙台市博物館	仙台市博1994
15	白石城本丸屋形図	近世	117.5×113.9	仙台市博物館	仙台市博1994
16	白石城下屋敷割図	近世	79×119	仙台市博物館	仙台市博1994
17	奥州仙台領白石城並城下絵図	貞享元年（1684）	3.03×2.10	斎藤報恩会	片倉1982 名村1996
18	白石城正保様式図	正保以後天和以前	1.95×1.15	（財）日本城郭協会	日本城郭協会編1984、 名村1995
19	日本分国絵図（奥州白石城図）	享保年間写本		国立公文書館 記号176-0282	
20	日本古城絵図第13帙東山道之部（６） 奥州白石城下絵図	江戸中期～後期	121.4×108.8	国立国会図書館 稲垣家旧蔵	
21	奥州白石　以中図縮之	寛文頃	28.9×40.8	前田育徳会尊経閣文庫 （諸国居城図）	
22	奥州白石	寛文三年（1663）		金沢市立玉川図書館 （諸国居城之図集）	
23	奥州白石城図	丙午年	40.7×56.4	岡山大学図書館 池田文庫	
24	仙台之内白石城下絵図	不詳	99×102	秋田県公文書館	
25	白石城下絵図	不詳	82×79	東北歴史博物館	東北歴史資料館1994
26	白石城下絵図	写し		宮城教育大学	国文研1990
27	奥州白石城図			三康図書館（東京都）	日本城郭研究センター 1991
28	城下絵図	江戸初期？ （寛文３年頃）		広島市立中央図書館 （旧浅野文庫）	風間1987 原田・矢守1982
29	白石城下絵図	正徳３年（1713）	78×108	個人蔵	岩谷堂伊達義隆家旧蔵
30	白石城絵図	幕末	110.5×86.5	沢端町・高橋家	名村1995
31	白石城下家中屋敷図	幕末		森治右衛門	風間1979 p.265
32	白石城と家中旗験図	幕末～明治	1.1×3.4	片倉家	中橋他1979
33	白石城略記抜粋之図			白老町・鈴木家	名村1995、1996
34	白石城下絵図	不明		現在所在不明 前編、11頁	阿子島、片倉、岡崎 1967
35	白石城城下絵図	幕末		郷土館	中橋他1979
36	白石全図	近代	70.1×53.8	白石市教育委員会	小片氏旧蔵
37	益岡城図	昭和９年（1934）	107.2×95.8	白石市教育委員会	小片氏旧蔵
38	白石城絵馬	昭和10年（1935） 斉藤清三郎画	1.82×0.9	郷土館	中橋他1979
39	白石城下絵図	昭和14年（1939）	51.2×74.8	個人蔵	
40	白石城姿図	明治末～大正 小関雲洋画		個人蔵	
41	白石城下絵図	安政三年写 （宝暦十一年、1761）	2.4×1.725	白石市教育委員会 （仙台市・半沢氏旧蔵）	白石市教委1990
42	奥州白石城図	寛政頃 （伝中川忠英の製写）	99×91	白石市図書館	
43	白石城下絵図（武家屋敷配置図）	文政年間	85×65	白石市立図書館	風間1979 p.265 名村1996
44	武家屋敷配置図	万延年間		不明	風間1979 p.265

番号	名　　称	製作年代	法　　量	所有者	文　　献
45	屋敷配置図	天保年間		白石市図書館 （大内資料写本）	風間1979 p.265
46	白石城之図	明治末～大正 小関雲洋画	1.06×112.5	白石市	
47	白石城光景之図	明治～大正 小関雲洋画	130.2×73.8	白石市教育委員会	
48	奥州白石之城図	近世	98×107	大分県臼杵市立図書館	
49	白石之城	近世	104×99	大分県臼杵市立図書館	
50	片倉小十郎御上洛之図（白石城姿図）	明治～大正 北洋画		不明、菓匠三全でパネルとして使用	

この他、齋藤報恩会には常盤崎別邸絵図がある。

第３表　文献に記された白石城

番号	名　　称	製作年代	法　　量	所有者	文　　献
1	仙台城覚書	享保八年1723		宮城県図書館	名村1995
2	白石城略記	安政三年1856		仙台市博物館	名村1995
3	白石城住居之覚	明治初期		白石市立図書館	名村1995
4	宝暦書上記	1751-63		沢端町須江家	名村1995
5	武家屋敷配置書	天保年間		大内氏写本資料	風間1979 p.264

第３節　白石城縁りの建造物

白石城に関連する建造物について述べたい。白石城が明治７年に解体、売却されており、各地に関連建造物が所在している。確認できたものは第４表にまとまめた。

なお、今回の復元事業に伴い、茶寮東端にあった茶室は解体されている。解体時の図版、写真は写真図版39、第23図に掲載した。解体部材は旧大鷹沢小体育館に搬入された。茶室の規模は東面において横2950mm、縦2340mmであった。茅葺きの上にトタンを張っていた。茶室の性格については既に片倉によって報告がされている（片倉1979）。

福岡長袋の高野家には鯱瓦、鬼瓦が保管されている（写真図版77、33の６）。高野家では鯱２点、鬼瓦２組、軒丸瓦１点を保管している。うち鯱瓦は尻尾、下顎がなく鱗もだいぶ破損し、高野氏によって修理されている。破損し、バラバラになっている。もう一つの鯱瓦の背面には「文政十年□月□日」「四月　大橋喜平信房」とヘラ書きされている。高さは78cm、顎先から腹部までは60cm、頭部上では幅30cm、重量は34.6kgである。上端の尾ひれ穴の所は長軸15cm、短軸８cmである。軒丸瓦は竪三引両紋である。瓦当面直径は15.5cm、長さ30cm、重量は2.9kgある。鬼瓦は３点で一組になる。中央の鬼瓦は幅36.5cm、厚さ13cm、18～19kg、鬼面は長さ26cm、幅20cm、両脇の瓦は一つ当たり12～13kg代である。これら３つは組み合わせると幅113cm、高さ85cmになる。大橋喜平については現在のところ、どのような人物が不明である。

当信寺山門（東門）の瓦は白石城から移築されたものであったが、昭和49年頃の改築時に廃棄され、市内北無双作の埋め立てに使用された。当時の目撃者の証言によれば、第24図付近であるという。

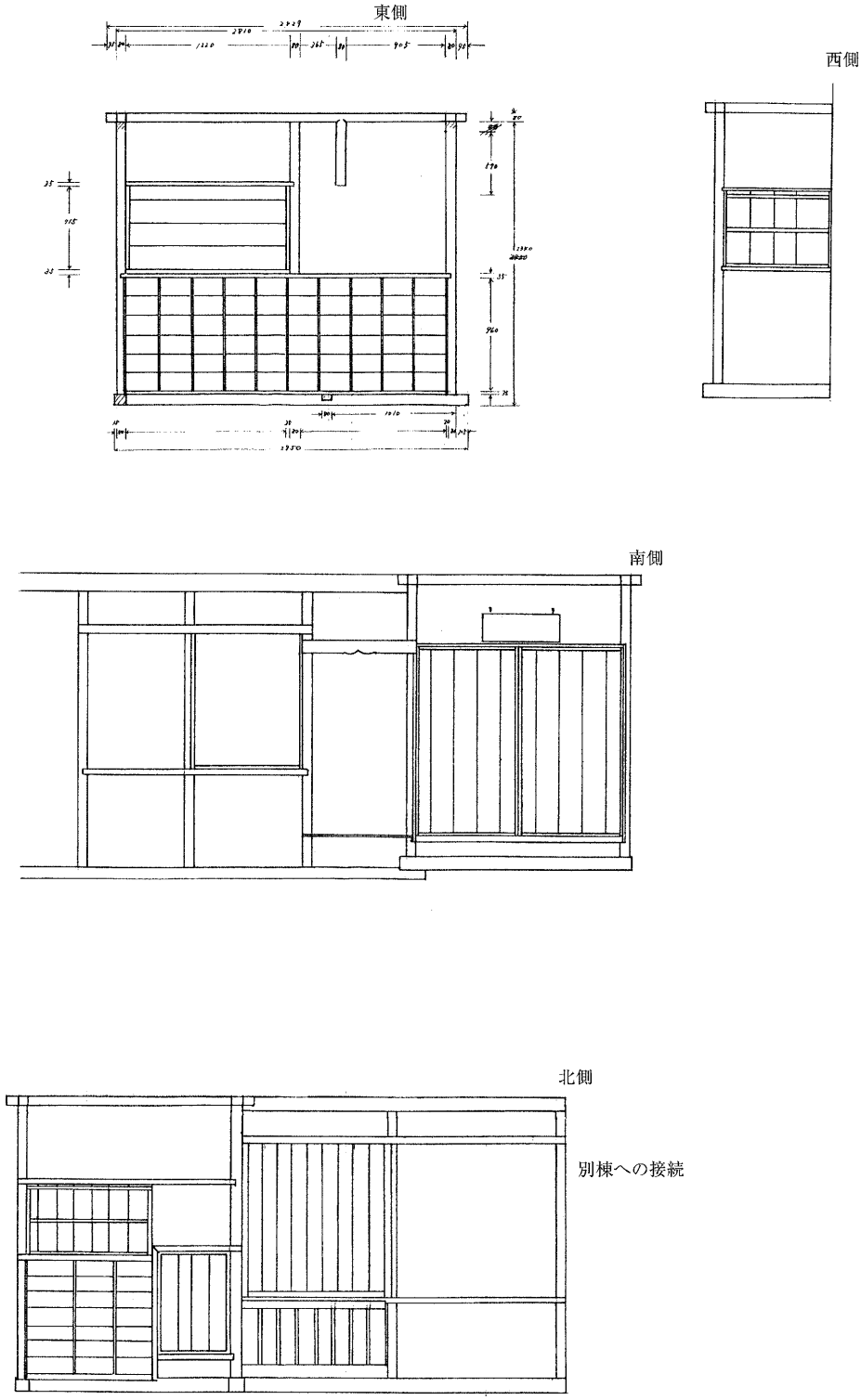
延命寺山門（厩口門）は何度か修理を受けているが、瓦の一部は寺に保管されており、鬼瓦、軒平瓦、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、桟瓦が確認できる。

第４表　白石城の遺構

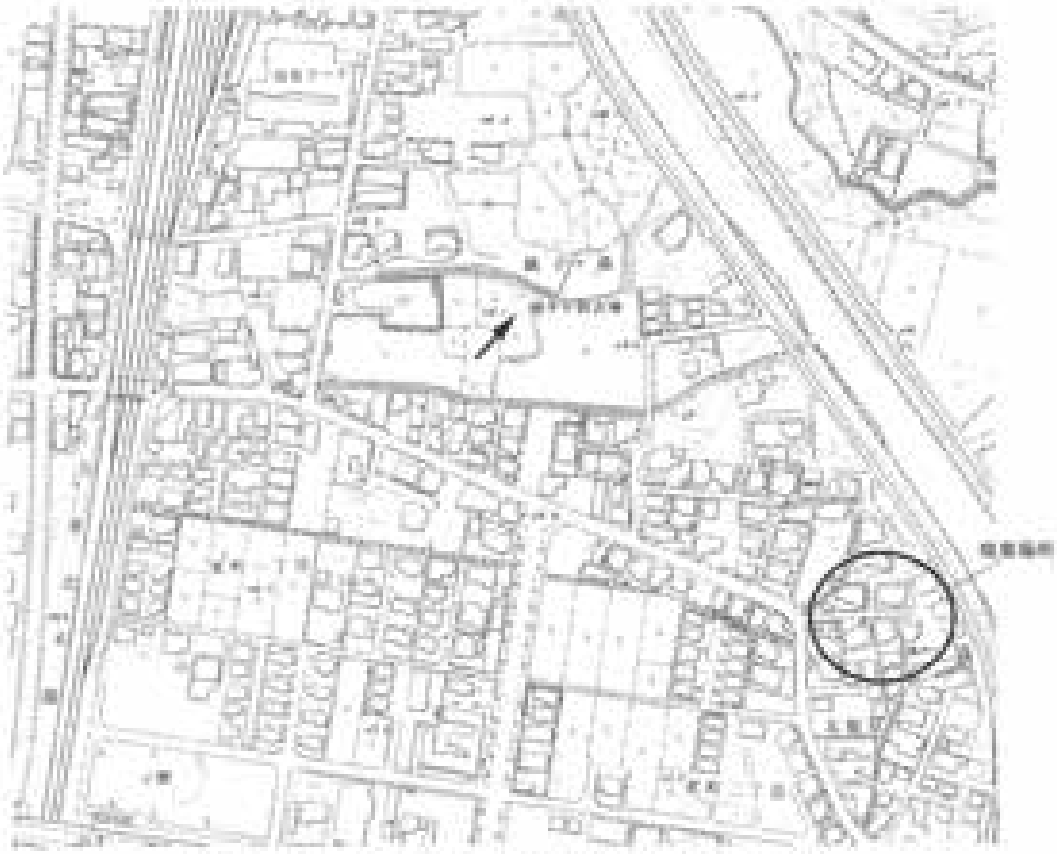
番号	名　　称	員数	状　　態	所　有　者	文　　献
1	茶室	１棟	解体されている。	白石市	片倉1982 名村1995
2	厩口門	１棟	若干修理されている。	延命寺	片倉1982
3	東口門	１棟	若干改造されている。	当信寺	片倉1982
4	本丸大手二ノ門	１棟	取り壊しされた。 もとは、白川・高橋家にあった	大河原・大須賀家	片倉1982 片倉他1983
5	兵具倉	１棟	取り壊しされた。鯱瓦等もある。	長袋・高野家	片倉1982
6	火薬倉	１棟	これに伴う大甕、木箱もある。	森合神明・佐久間家	片倉1982
7	煙硝蔵	１棟	棟札もある。	坂谷・古山家	片倉1982
8	門	１棟	上屋敷の門かもしれない。	名取市・耕徳寺	片倉1982 名村1995 加藤1990
9	水車小屋	１棟	用水路もある。	南之丸・岩山家	片倉1982 p.30
10	庭園	１式		坂谷・古山家	名村1995 p.293
11	門	１棟	奥方御門か。札あり。	坂谷・古山家	名村1995 p.294
12	馬屋守の屋敷	？	白女校地拡張で解体した。	県有地	片倉1982 p.28
13	川田家表門	１棟	外曲輪？、昭和39年に移転。幕末頃改造？	村田町願勝寺南門	村田町1977

第５表　白石城の遺物

番号	名　称	員数	状　　態	所　有　者	文　献
1	時の太鼓	1		常林寺	片倉1982
2	石垣の一部	多数	白石大橋上流50mの所、市内各地	国	片倉1982
3	鯱瓦	１対	三階大櫓分。	蔵本・菊池家	片倉1982
4	鯱瓦	１対	本丸裏門分。	小原・いづみや	片倉1982
5	鯱瓦	１対	本丸大手二ノ門分。焼失している。	小原・かつらや	片倉1982
6	襖絵	１枚	城内のもの。	益岡・神明社	片倉1982
7	瓦、釘留	各１個	軒丸瓦である。	不明	片倉1982
8	矢の根	４本		不明	片倉1982
9	瓦	２棟分	現在、蔵の屋根に使われている。	長袋・小野家	名村1995 p.289
10	仏狼機	１門		九段・靖国神社	片倉1982
11	釣り鐘	１口		桑折町・伝来寺	片倉1982



第23図　解体保存された茶室の図（S=1/60）



第24図　銚子ヶ峰古墳と白石城瓦の廃棄場所（S=1/4,000）

第４節　白石城跡における表面採取資料

白石城跡からは現在でも瓦片等が地表に露出しており採取が可能な箇所がある。未申櫓跡では瓦片が多数採取されている。資料の一部を図示した（第81図）。ここの斜面ではかつて白石高校生によって須恵器が採取されている。この付近に古代の須恵器窯の存在を指摘する見解もある。

昭和44～45年の公園整備時には本丸御殿があった所を削平しており、掘り出した土の中に多数の瓦、陶磁器が含まれていたという。中橋がその資料を保管していた。その中で軒丸瓦完形品（写真図版76－１、２）、かわらけ完形品（第92図16）を図示した。口縁部の内外面に黒色物質が付着している。口径12.8cm、底径7.8cm、器高3cmである。近世のものである。削平箇所は本丸中央の現在の芝生よりも一段低い、コンクリート敷きの通路部分である。当初、白石市史考古資料篇への掲載を考えたが、当時、近世資料に対し考古学界が冷淡であったこともあり、掲載を見送ったものであるという。

量の多寡、時期を別にすれば、城跡公園全体で、陶磁器の表採が可能である。

第４章　白石城調査指導委員会

今回の発掘調査にあたり、極めて重要な遺跡であることから、県教育庁文化財保護課の指導により、外部有識者による委員会を設置した。委員については第６表に示した。都合12回開催された。

平成２年10月１日　第１回白石城調査指導委員会会議

協議事項　白石城復元に伴う発掘調査について

指導確認事項

① この委員会は市長の諮問機関的な性格を持つものであり、会議の内容を指導委員会としては公表しない。発表は行政側で対応すること。

② 発掘調査の時期は予定では10月～３月となっているが、冬期間になると適切な発掘調査は不可能となるので、その点を考慮すること。

③ 現状の市教委における発掘調査体制では不備があるので、体制を整えて欲しい。

④ 三階櫓基礎部分（側面）は、調査の結果、石垣であったと確認されれば、基礎の部分から上まで石垣で積み復元しなければならないのではないか。

⑤ 発掘調査前に現状測量図をとる必要がある。

⑥ 三階櫓の完全な資料を得るためには、立木を全部伐採か移植をして発掘調査をする必要がある

⑦ 立木を取り除いて発掘をすれば、発掘調査後の保護・現状修復等を勘案しなければならないので、発掘調査は建築年次に近い方が適切である。

⑧ 発掘調査中は安全対策処置と立入禁止、通行止めの方策を検討して欲しい。特に石垣部分については安全対策は是非必要である。

⑨ 白石城は城郭として機能していた時代には、本丸から二の丸へ行く通路はなかったのではないか、この部分の復元はどのようにするのか、埋め戻さないと完全な復元ではなくなる。

⑩ 発掘の手順としては、最初に三階櫓部分の平場を調査し、第二次調査として側面部分を平成３年度以降に調査するように。

⑪ 白石城は中世末期頃からの城であり、以後何代も続いているので、遺構としては５、６層にわたると考えられ、相当掘り下げる必要がある。

⑫ この発掘調査にあたっては、指導の窓口として地元から中橋彰吾委員と、東北福祉大学講師・梶原洋委員にお願いし、御了解いただいた。

平成２年10月19日　第２回白石城調査指導委員会会議

協議事項　１　調査報告と遺構発掘調査について

指導確認事項

① 今、表面に出ている遺構だけでも少なくとも３時期、おそらく４～５時期分の遺構が出ていると思われる。これからの調査は側面部分も併せて調査することが必要である。

② 今、表面に出ている遺構の中で玉砂利の根石らしきものが最晩年の遺構ではないかと思われる。これからの調査は図面を取り、手順差、時期差を見極めることを急がなければならない。

2 今後の発掘調査等事業手順について

指導確認事項

① 今年度のこれからの調査は冬期間に入り、霜が降りるようになると調査は不可能である。冬の間、遺構を保護するようにしなければならない。

② これからの調査の方法としては一つのコーナーずつ、上面と側面部分を併せて調査するようにし、盛土の状態などをセクションをを通して認識し、そして全体像をまとめるような方法で行うこと。

③ 本丸から二の丸に通じる通路は復元ということなので、必要だが、これら立木などを含めて、市民のコンセンサスを得ることがもっとも必要である。

④ 中間の現地説明会（今年度分）は市民の理解を得るために是非行った方がよい

⑤ 調査体制として、常時発掘現場に専任の調査担当者２名を当てるようにしなければならない。

平成３年３月19日　第３回白石城調査指導委員会会議

協議事項　白石城三階櫓発掘調査中間報告と今後の調査について

指導確認事項

① 前年にとった三階櫓部分のみの平面図だけでなく、大手門部分までの測量をして欲しい。

② 発掘調査終了後、空撮を行うこと。

③ 石垣部分の発掘調査時には安全対策として、防護柵を作ること。

④ 白石城復元の手順として、発掘調査は６月末までに終了する体制をとること。

⑤ 茶寮の解体については市民の理解を得てから解体すること。なお、茶室部分の記録保存をすること。

平成３年８月７日　第４回白石城調査指導委員会会議

協議事項　白石城発掘調査報告と今後の調査について

指導確認事項

① 石垣低部（東西南北）のレベルを一本の線で図示する作業が必要である。

② 石垣の傾斜を計測して欲しい。

③ 三階櫓頂部の平場基礎（青）は、配列が不規則なところが見られるので、土台を据えた礎石かどうか追跡調査をしてほしい。

④ 遺構の保存保護については、設計士等の意見を聞いて検討を要する。

⑤ 東、南階段部分の積み土の確認をすること。

⑥ 白石城三階櫓復元の範囲は景観等を勘案して最小限に留める。範囲としては西側はトイレ裏の石垣が残っているところ、北側は大手門寄りの角までが望ましい。

平成３年９月12日　第５回白石城調査指導委員会会議

協議事項　白石城発掘調査現地確認と礎石の見極めについて

指導確認事項

平井教授の用務の都合上、会議室における協議を取り止め、発掘調査現場で協議確認した。

① 前回の指導委員会の際、提出を求められていた平場石列（青）のセクション図及び石垣エレベーション図を提出した。

② 赤、黄、青の時代的経緯を確認するも、青列の上に横木を据えるには石列の高低差が大きく建物の礎石とは認められず、青列礎石下部の栗石の有無の確認を課題として残す。

③ 平井教授の帰った後、青石列のレベル差を確認、最大約13cmの高低差を確認した。

④ 赤黄の推定位置の精査の指示があった。

平成４年１月19日　第６回白石城調査指導委員会会議

協議事項　白石城発掘調査の精査について

調査報告　発掘調査員から前回の指導委員会、または平井委員から指導のあったことを中心に調査報告がなされた。

特に３期目を称された部分２カ所の掘り下げをしたところ、大石下部の根石が確認されたものと、中規模の石が二段に積まれ、その間に切石を入れた石列等が確認されている。３時期目の石列は、２時期目の礎石等を整地のため落とし込んだものではなく、何らかの目的をもって造られた遺構である。

質疑事項

① ３時期目が据えた石ならば全部が統一した配列であると考えられるが、しかし、石と石との間隔が一定ではなく、バラバラな石の配列となっているところがあり、またレベル差が最大13cmと高低差がある。これらの上にさらに礎石を据えて建物を建てるという類例はない。

② ３時期目を礎石とすると２時期目の根石といわれる部分より低くなり、３時期目の石は、２時期目の礎石面をさらに掘り下げて礎石を据えたことになり建築上考えられない。

③ ３時期目といわれる石は、２時期目の石と石の間に落とし込んだものと考えられる。このような例は他にもあった。

④ ３時期目は、明治７年以降の礎石とすれば、２時期目の礎石は理解される。

⑤ 落とし込んだ石ならば列状には埋めない。また、穴は雑になっているはずであるが、３時期目の堀り方は石に合わせてあり、据えた石と考えられる。しかし建築上で建物があったかどうかは予測できない。

⑥ ３時期目は考古学的には残しておきたい遺構である。

⑦ ３時期といわれる遺構は９間×6.5間となる。年代的にはいつの時期か分からない。

⑧ 最終的な遺構は、３時期目となると思うが、石列の間隔やレベル、石列の並びなどからみて、建築物の遺構とは考えられない。

⑨ 特に写真で見る限り、３時期目はどの様な建物であったかは分からない。

⑩　２時期目の復元でもかまわないが、周辺の整備の関係が出てくる。

平成４年10月２日　第７回白石城調査指導委員会会議

協議事項　白石城三階櫓平場遺構について

報告事項　史料調査研究会　代表　我妻健治

(1)　平成元年４月、史料調査研究会を発足し、以来今日まで調査した結果、下記のような結論に達した。

①　明治６、７年頃の写真があればと思っていたが見つからなかった。

②　白石の画家・川村春洋が幕末～明治の白石城を模写した絵図を調べた。また『片倉代々記』、『白石城』等の各種文献を調べた。

寛保３年４月１日	焼失以前	１期
文政２年５月２日	焼失	２期
文政６年９月	成就	３期
明治７年	解体	

１期　二階櫓　正保書上に天守なし、二階櫓規模なし

２期　文政２年５月２日『片倉代々記』に三階櫓の記録なし

３期　文政６年９月２日成就の城

③　いろいろ絵図があるが、『住居覚』、『白石城略記』また『白石城覚書』等から明治の初めまでのものと思われる。

発掘調査担当の報告

①　３期と称される遺構は基礎遺構であるか否かは確認が得られなかった。

②　３期とされる遺構が、もし石を捨てたものであると仮定しても、あれほど整然とは捨てないのではないか。

③　現状のままでは建物は建たないと思うが、大石の上に礎石を据えて建物を建てるということはありえないだろうか。

④　明治７年解体後は建物が建てられた記録も形跡もなかった。

⑤　時期確定には、掘り上げて遺物等の調査をして確認する方法も考えられる。

協議指導事項

①　３期目の遺構は炭化物がのっていないので焼けた形跡はない。学術資料として後世に残した方がよい。

②　２期目の遺構をもとに復元が妥当と思う。

③　文化庁文化財保護部建造物課宮本長二郎主任調査官を招聘して現地を見ていただいた方がよいと思う。

④　平井委員　３期目の遺構は基礎遺構ではない。

理由　１　礎（大）石といわれる石は規則的に並んでいない。

2　平面上に高低差が大小20cmあるので問題である。

3　石の大きさが大小さまざまで一様の石はない。

4　一般にあの礎石といわれる石の上に土台を置くことはない。

5　礎石といわれる石が二重に入っている。

⑤　現状では性格不明であるならば、完全発掘調査を検討したらどうか。

⑥　文献的には２期目は適切なので、遺構を壊さない方法で復元を検討して欲しい。

⑦　基本的に遺構のないところに基礎を設置されるように設計者に指示して欲しい。＝平井委員

⑧　県としては、建築確認申請前に遺構の取り扱いについて協議して欲しかった。

⑨　遺構を最大限に残す方向で、遺構面の上に設計して次回委員会で検討する。

⑩　工事にも支障なく遺構を残す方向で設計者に指示している。

平成４年10月12日　第８回白石城調査指導委員会会議

協議事項　1　白石城三階櫓平場の遺構の取り扱いについて

指導確認事項

①　別紙のとおり直径1200mmヒューム管４本を埋設し、遺構の保護をする。ヒューム管埋設にあたっては、調査しながら埋設し記録する。

②　三階櫓の建設にあたっては、一階床の部分より地下の遺構が見えるような構造の検討をして欲しい。しかし、全面的にはできないと思うので、どの部分をどうするか、建築上の問題等もあるので検討を要する。

③　発掘調査では大石を据え込んだ礎石跡を３期の遺構として取り扱った。しかし、発掘調査報告書作成上、どのように扱ったらよいか、今後、検討を要する。

④　三階櫓平場の現地調査を行い、ヒューム管４本の埋設箇所を確認した。

⑤　遺構の取り扱いについては、別紙原案どおり了承された。しかし土木工事については、遺構保護に十分配慮して工事が進められるよう要請された。

協議事項　2　白石城大手門発掘調査報告と遺構について

①　現地での発掘調査の説明を行ったが、時間の関係で協議までには至らなかった。

平成５年３月19日　　第９回白石城調査指導委員会会議

教育長から渡辺信夫委員の辞任により我妻健治氏を委員とすることの経緯が説明があった。委員の互選により我妻委員を委員長に選任した。

協議事項　1　白石城大手門復元に係る遺構の取り扱いについて

指導確認事項

①　復元という言葉を使うのであるから、あくまでも史料調査及び発掘調査によって得られたデータに基づいて設計、工事を行って欲しい。

②　塀の処理をどうするのか。塀をも含めて復元するのであれば、史料や実際の遺構の状況に矛盾が

ないようにしなければならない。塀を復元しないのであれば、塀が建っていた位置に植木を植えたり或いは表示板を立てるなどして訪問者に当時の姿が窺えるようにして欲しい。

③　絵図を検討すると大手一ノ門は一階、二ノ門は二階であったことが分かる。『片倉代々記』には本丸一ノ門、二ノ門と記載されているので、参照する際には注意が必要である。

④　二ノ門の排水遺構から考えて門には少なくとも二の時期があったと考えられる。

⑤　一ノ門が建っていた場所については根石が確認できなかったので、今のところ特定できていない。折り返しの石垣については調査によって確認された遺構で特定できる。排水遺構についても特定してもかまわないではないか。

協議事項　2　その他

指導確認事項

①　発掘調査において不明の部分や疑わしい部分については掘り下げてみたり、立ち割りを入れるなどもっと大胆に取り組んでもよいのではないか。

②　発掘調査を行った結果、十分な史料が得られなかった場合、工事にあたって何を根拠にしたか示さなければならない。仮に発掘調査で礎石や柱跡等が分からなくとも、史料によって分かっている門と門の間の距離等によってある程度は推測できるのではないか。

③　史料によって得られたデータと実際の発掘結果をどう結びつけるか。絵図を参考にする場合、絵図はそれぞれ描かれ方が違い、特に一ノ門は全く違う描かれ方をしているので設計の際、どの絵図を基準にするかでずいぶん印象が変わるのではないか。また二ノ門が石垣に取り付く位置など絵図だけでは正確な位置を割り出すのが難しいので再度、発掘調査をする必要があるのではないか。

④　まだ発掘調査が必要な部分があり現段階での審議が難しい部分もあるので、今後細く調査を行い、その結果に基づいて指導委員会を開いて再度審議を行いたい。

平成５年６月18日　　第10回白石城調査指導委員会会議

協議事項　1　白石城大手門の位置の特定について

指導確認事項

①　三階櫓下から大手一ノ門に至る石垣については、工事に先立って業者が根石を取り外したり、地山を削りすぎている恐れがあるので、業者が工事の都合で実際の石垣を無視して作業をしないように立会をするなどきちんと監督し矛盾のないようにすること。

②　一ノ門の礎石跡については、今回新しく発見した側溝下の礎石跡と思われるものとの対応を精査するため、昨年発掘した舗装道路下の一ノ門遺構を再調査する。下側（井戸に近いもの）の栗石が並んだものは側溝を作る際に入れた新しいものとも思われるが、門の位置としては適当と思われるのでこれに対応するものが石垣側にないかを調査する。これに対応するものが発見できない場合は図面上では対応している上側（二ノ門寄りのもの）の礎石跡を採用すればよい。その場合、門の位置が石垣の切れ目より後にあることになるが、絵図の中にはそのように描かれているものもあるので、これで設計をしても支障ないだろう。また、控え柱のない塀の延長のような簡単な門になるこ

とも考られる。

③　二ノ門の礎石跡の特定、また門が何回建て直されているかについては、現在までの調査では十分解明できていない。これまで以上の調査が必要である。前回も指摘を受けたが、必要に応じて部分的に石を外すなどして立ち割りを入れたり、掘り上げるといった徹底的な調査をすることも必要ではないか。また遺構の保存が困難な部分も多く、遺構が保存できないのであれば、歴史資料の保存を第一にして完全な調査記録が必要である。

④　桝形部の石垣の処理については、根石を基準にして本丸内へ折り返している石垣の積み方を参考にして復元すればいいのではないか。ただ、あまり小さい石で積むと短時間で崩れてしまう恐れがあるので、使用する石は市民に定着している桝形部のイメージを壊さない程度であれば、大きめの石で積んでもいいのではないか。桝形部の石積みは前半部と後半部では多少積み方が異なる部分もあるので、違和感がないようにうまく処理する必要がある。

協議事項　２　その他

指導確認事項

①　今後、工程が進んでいくなかで工事を中断させずに、並行して調査も滞りなく進めて行くのは大変困難だとは思うが、すでに変更が不可能になってから確実なデータが揃っても無意味であるので工事側と検討しながら、時間が許す限り調査をして欲しい。

②　全体的に工事の進め方が乱暴なように感じる。まず第一に遺構の保存を尊重し、作業効率優先ではなく、遺構の保存に努めて欲しい。現場にはたしかにスペース的に余裕はないが、石垣を外す際などに直接関係のない遺構を取り払って工事をするような方法は文化財保護の立場からは認めることができない。今回の復元に直接関係のない、あるいは何らかの方法で残せるものは極力保存して欲しい。

③　これまで確認された遺構で復元に関係ないものは盛土を施し、その上に芝生を植えるなどの保存処置をする必要があるが、本丸内へ折り返している石垣については整備のうえ、公開してもいいのではないだろうか。

④　明治の払い下げ以降、公園化されるまでの資料を掘り起こして明らかにしておく必要があるのではないか。また、公園化以降、現在までの公園整備の記録も集め、桝形部で疑問になっているダイヤモンドカットされた石など、後世において石垣に手を加えられていないかを確認しておく必要がある。

平成５年９月23日　　第11回白石城調査指導委員会会議

協議事項　１　白石城大手門の位置の特定について

指導確認事項

①　記録によると白石城は文政２年に焼失し、文政４年に大手二ノ門を再建し、文政６年には三階大櫓が再建、その後、文政１２年に巽角櫓が再建され最終的に完成した。

②　一ノ門の高さが不明なのは、石垣の高さと連動しているからではないか。二ノ門の高さは三丈一

尺と『白石城略記』に記されている。天和３年の絵図と『白石城略記』の寸法は同じ。その他の記録では若干寸法が異なるものもある。

③　一ノ門の遺構に切り合い（時期差）があるので、調査記録検討のうえ、再確認する必要がある。

④　二ノ門の溝が二時期あるのであれば、門も二時期あると考えるべきである。

⑤　一ノ門には門扉と控柱がないのか確認すべきである。

⑥　二ノ門では、東側において、３カ所の礎石が確認されたので、これを資料として復元すべきである。これは記録にある二間一尺とほぼ一致する。あとは六間半をどう割り振るかが課題である。

協議事項　２　その他

指導確認事項

①　今までは確認調査だけで保存するという前提で実施してきたが、工事上破壊された部分もあるので、今後は保存が最大の条件になるが併せて記録保存も実施していくべきである。

②　現状のまま保存しても、将来見られなくなっては、だめなので、記録保存（写真化、図化等）は積極的に行うべきである。

平成６年３月５日　第12回白石城調査指導委員会会議

協議事項　１　本丸大手門後跡と復元図について

指導確認事項

①　発掘調査の結果、二ノ門の二つの溝の関係はよくわからなかった。新しい溝は単に形状を整えたのみで実際には機能しなかったのではないか。階段も片側に袖石があるが、一方にはなく、このような階段の積み方があるのか疑問が残った。また溝の縁石を取り外した下からは炭化物が見つかっているが、これから類推して新しい門は消失した門の跡を片付けずに、そのまま整地して建てたのではないか。門が新しくなった際、その門に合わせて溝を作ったため、新旧の溝の方向の違いができたのではないか。

②大手二ノ門の寸法については『白石城略記』に記された寸法を採用するのが適当でないか。設計もこの寸法に合わせて欲しい。

③各種の絵図面によると二ノ門の姿は踏み込み（一段平らな部分）がある形だと思われる。この形で復元するとすれば、３次の平面図を採用するのが適当と思われる。

④　４次の図面は検出された遺構に合わせてあるが、門の位置が正面北側の石垣の角から後ろにあり、本丸内にはみ出しており踏み込みのない門になっている。これでは絵図の印象とは違う門になってしまう。だが現在示されている根石の位置は底の部分の確認面であるから実際の根石の範囲はもっと広く、実際に礎石が据えられ、柱が建てらていた場所は、もう少し石垣の角寄りだったことも考えられる。ゆえに根石の広がりを考慮に入れて４次の図面に示された根石をいかしながら、３次の図面をそれに重ねるような設計で復元するのが適当だと思われる。

⑤　一ノ門については、絵図からも発掘調査の結果からも控柱があった根拠はないので、これに控え柱を作ることは認められない。

⑥　一ノ門の復元図には扉があるが、絵図には扉が描かれたものはない。また発掘調査の結果、礎石間に扉受けの石と思われる石が発見されたが、もし扉があるとすれば、その根拠は今のところ、これだけである。だがあらゆる面から検討した結果でなければ現時点では、これを受ける石という可能性があるのではないか。いずれにしても現段階ではこの石の性格を特定することはできない。完成後に証拠が見つかれば扉を加えることはできるので、一ノ門には扉を付けずに復元すべきである。

⑦　発見された遺構から考えて一ノ門は掘立柱であったと思われるが、そうすると、ここは塀の延長のような簡単な屋根のない門だったと思われる。また絵図の多くにも屋根のない姿で描かれているので、そのように復元すべきである。さらに菱門と呼ばれる南側の石垣と柱の間の三角形の構造も復元して欲しい。

協議事項　2　その他

指導確認事項

①　三階櫓の階段については発掘調査では切石で積まれていたことが確認されたが、今回の復元では石垣に合わせて自然石で作られている。これはノミ等で曲面を削るなどしてかつての姿に近づくよう処理して欲しい。また、三階櫓東側で確認された階段状遺構も再現されていないが、これも同様に再現して欲しい。

②　本丸内については、今後の復元、調査のため極力手を加えないで遺構の保存に努めて欲しい。またトイレ、休憩所等を設置する際にも、城に合わせた外観にする必要はないのではないか。むしろかつてその場所にトイレ等の施設があったと誤解される恐れがあるのではないか。勤労青少年ホームを改装して資料館にする場合にも同様のことが言える。内部の資料展示に必要な改装に留め、三階櫓に合わせて外装に手を加える必要があるのではないか。

なお、この他、平成４年３月18日には市役所第４会議室において白石城復元に伴う今後の発掘調査計画打ち合わせ会議が開催されている。参加者は県教育庁文化財保護課小井川第二係長、古川雅清及び中橋彰吾白石城調査指導委員、清野俊太朗及び遠藤智白石城調査委員、事務局として菊地教育長、太齋亨文化スポーツ振興課長、遠藤令一課長補佐、千葉典男主幹、佐藤康治主事であった。

協議内容

1　三階櫓平場部分の精査実測等を行って記録保存を明確にする。

2　三階櫓東部の突出平場部分の調査も進める。

3　三階櫓の西部、南部の写真実測もする。

4　三階櫓から大手門までの復元となると現発掘調査体制では、復元終了時に支障が生じるので発掘調査体制を強化すること。

5　再度、史料調査研究会の調査意見を聞いて史料の考古学上の位置付けを明確にして白石城復元を進めたい。

意見

1　文化財保護の立場から見ると三階櫓復元にあたっては、現遺構の上に20～30cm盛土して遺構に

支障のないように復元して欲しい。（もし不可能であれば、三階櫓の全面発掘調査が必要であり、予算的、時間的にも見直しが必要となる。）

2　石垣の石質、使用可能がどうかの調査が必要である。

第６表　白石城調査指導委員会の会議

		第１回	第２回	第３回	第４回	第５回	第６回	第７回	第８回	第９回	第10回	第11回	第12回
役　職	委員名	H2.10.1	H2.10.19	H3.3.19	H3.8.7	H3.9.12	H4.1.9	H4.10.2	H4.10.12	H5.3.19	H5.6.18	H5.9.23	H6.3.5
委　員	渡辺信夫	○	○	○	×	×	×	×	×				
	我妻健治									○	○	○	○
〃	平井　聖	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
〃	藤沼邦彦	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	○	×
〃	古川雅清	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
〃	梶原　洋	○	○	○	×	×	×	○	×	○	×	×	×
〃	中橋彰吾	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○
県教委	桑原滋郎課長							○					
県教委	小井川和夫係長	○	○	○	○	○	×	○	○	×	○	×	×
開催場所		市役所第３委員会室	市役所第３委員会室	市役所第３会議室	市役所第３委員会室	市役所第二会議室	市役所第４委員会室	仙台市勾当台会館	市役所第３委員会室	市役所第３委員会室	市役所大会議室	市役所大会議室	市役所第３会議室

○：出席　　×：欠席

昭和62年度（1987）		昭和63年度（1988）		平成元年度（1989）		平成２年度（1990）		平成３年度（1991）		平成４年度（1992）	
職　名	氏　名	職　名	氏　名	職　名	氏　名	職　名	氏　名	職　名	氏　名	職　名	氏　名
教育長	鈴木　五朔	教育長	鈴木　五朔	教育長	菊地　清治	教育長	菊地　清治	教育長	菊地　清治	教育長	菊地　清治
教育主幹	伏見　光龍	教育主幹	伏見　光龍	教育課長	太齋　亨	教育課長	太齋　亨	教育課長	太齋　亨	文化スポーツ振興課長	太齋　亨
教育主幹	松野　勝郎	教育主幹	阿部　正一	課長補佐	高野　義玄	課長補佐	高野　義玄	課長補佐	遠藤　令一		
教育主幹	相原　秀	教育主幹	高野　義玄	主幹	加藤　善美	主幹	加藤　善美	主幹	千葉　典男	課長補佐	遠藤　令一
社会教育係・係長事務取扱（兼）	相原　秀	社会教育係・係長事務取扱（兼）	高野　義玄	社会教育係・係長事務取扱（兼）	高野　義玄	社会教育係・係長事務取扱（兼）	高野　義玄	文化振興係・係長事務取扱（兼）	千葉　典男	文化振興係長	清野俊太朗
										主事	日下裕一郎
教育主査	今井　昌文	教育主査	今井　昌文	主事	清野俊太朗	主事	佐藤　康治	主事	佐藤　康治		
社会教育主事	清野俊太朗	社会教育主事	清野俊太朗	社会教育主事（県派遣）	大野　博	社会教育主事（県派遣）	大野　博	主事	佐久間浩子		
社会教育主事（県派遣）	加藤　正光	社会教育主事（県派遣）	加藤　正光								
						中央公民館		中央公民館			
						教育係・係長	清野俊太朗	教育係・係長	清野俊太朗		

教育長　H1.11.11～

平成５年度（1993）		平成６年度（1994）		平成７年度（1995）		平成８年度（1996）		平成９年度（1997）		平成10年度（1998）		平成11年度（1999）	
職　名	氏　名	職　名	氏　名	職　名	氏　名	職　名	氏　名	職　名	氏　名	職　名	氏　名	職　名	氏　名
教育長	菊地　清治	教育長	菊地　清治	教育長	菊地　清治	教育長	菊地　清治	教育長	菊地　清治	教育長	高橋　昌	教育長	高橋　昌
生涯学習課長	管野　松吉	生涯学習課長	管野　松吉	生涯学習課長	太齋　義勝	社会教育課長	太齋　義勝	社会教育課長	阿部　秀一	社会教育課長	阿部　秀一	社会教育課長	遠藤　令一
課長補佐	遠藤　令一	課長補佐	遠藤　令一	課長補佐	遠藤　令一	課長補佐	遠藤　令一	課長補佐	岩松　辰夫	主幹	椿　祐一	課長補佐	清野俊太朗
文化振興係長	清野俊太朗	文化振興係長	清野俊太朗	文化振興係長	清野俊太朗	主幹	清野俊太朗	主幹	清野俊太朗	主幹	清野俊太朗	主幹	椿　祐一
主事	日下裕一郎	主事	日下裕一郎	主事	佐藤　一博	文化振興係・係長事務取扱（兼）	清野俊太朗	文化振興係・係長事務取扱（兼）	清野俊太朗	文化振興係・係長事務取扱（兼）	清野俊太朗	文化振興係・係長事務取扱（兼）	清野俊太朗
						主事	佐藤　一博	主事	佐藤　一博	主事	伊賀　真樹	主事	伊賀　真樹

教育長　H10.10.1～

第７表　市教育委員会担当課職員の推移

第５章　　調査方法と整理方法

第１節　調査方法

発掘調査は三階櫓跡とその斜面の調査から開始された。その後、大手門周辺までが復元事業の対象となったことから発掘調査範囲が拡大された。

調査は復元のための基礎資料を得るという目的から、遺構確認面までを原則とし、遺構の掘り下げはあまり行わなかった。したがって確認された遺構は白石城の最終末の遺構確認面となっている。遺構は表土を除去すると割と浅い箇所から発見された。掘り下げは表土等は重機、遺構確認面近くは人力によって精査を行った。三階櫓跡のグリッド設定は磁北に合わせている。

明治以降の地形改変や石垣における石の採取によって、大半のものは失われ、本丸北側を除くと石垣は残存していなかったと見込まれていたが、石垣基底部はほぼ残存し、上部からの崩壊土により埋没していたことが判明した。三階櫓跡南斜面も公園時代の通路が設置されており、大きく削平されていることが予想されたが、調査の結果、階段状石積が発見された。また公園内のアスファルト道路敷及び側溝の下からも遺構が確認された所もあり、遺構は当初の見込みよりも保存状態が良好であった。

白石城復元に先立ち、平成元年度に歴史分野の専門家を中心とした史料調査研究会（代表　我妻健治）に絵図等所在調査を依頼した。白石市、仙台市、札幌市、東京都内等での史料調査が実施された。

測量図面は必要に応じて作成した。測量会社に委託したものとして、平成元年11月に三階櫓跡・基準点及び1/200測量図、平成３年４月に三階櫓跡から大手門までを含めた基準点及び1/200測量図、大手門付近の1/100及び1/20測量図及び写真撮影がある。平成４年２月18日に三階櫓跡石垣の写真測量を行い北面、東面、突出部南面で１/20側面図を作成した。トラバース測量も実施している（第25図、第８表）。三階櫓跡の建物跡遺構図面のトレース作業も委託を行った。市教育委員会では現場の進捗に合わせ、1/20、1/100の平面図、断面図、エレベーション図作成を行った。写真撮影は順次、白黒、カラーネガの35mm、６×７版のカラーポジの撮影を行った。空撮も一部で行った。

調査の進展に伴い発掘調査範囲における既設石碑の移設作業も教育委員会及び市振興課によって行われた。また三階櫓跡斜面の樹木の伐採も委託された。平成３年９月28日に三階櫓跡、平成４年９月26日に大手門跡の現地説明会を実施した。

第２節　整理方法

土嚢袋に収納されていた瓦類は順次、プラスチック箱に入れ直された。資料整理は発掘終了後、市文化財整理室（市図書館前の旧白石市公民館）において実施した。順次、水洗い、注記、接合の手順で進めた。瓦類については資料に直接、注記、ラッカー塗りを行い、陶磁器は、ビニールテープ片を貼り、その上に袋毎の整理番号（算用数字、出土地を表す）、枝番を付し整理した。枝番が多いほど一つの地点での出土点数が多いことになる。なお、出土した鉄製品、木製品の保存処理は行っていない。

平成９年度には白石城絵図の写真収集のため、仙台市博物館、宮城県図書館所蔵絵図、白石市所有

絵図の写真撮影（大形判）を専門業者に委託した。

第３節　報告に際して

発掘調査の最初の段階では、市教育委員会において十分な発掘調査体制、つまり専門調査員確保が十分になされず、野外調査では中橋委員に現場の指揮・管理を依存せざるを得ない状況が生じた。このことは白石城調査指導委員会議でも指摘があった。こういったことから調査記録にも不備、不足が生じ、発掘調査現場において十分な記録作成が行われたとは言い難い状況が生じた。さらに復元工事が進展する中、工事に急かされる格好で発掘調査が実施され、工事範囲のすぐ隣で発掘調査を行うような形となった。

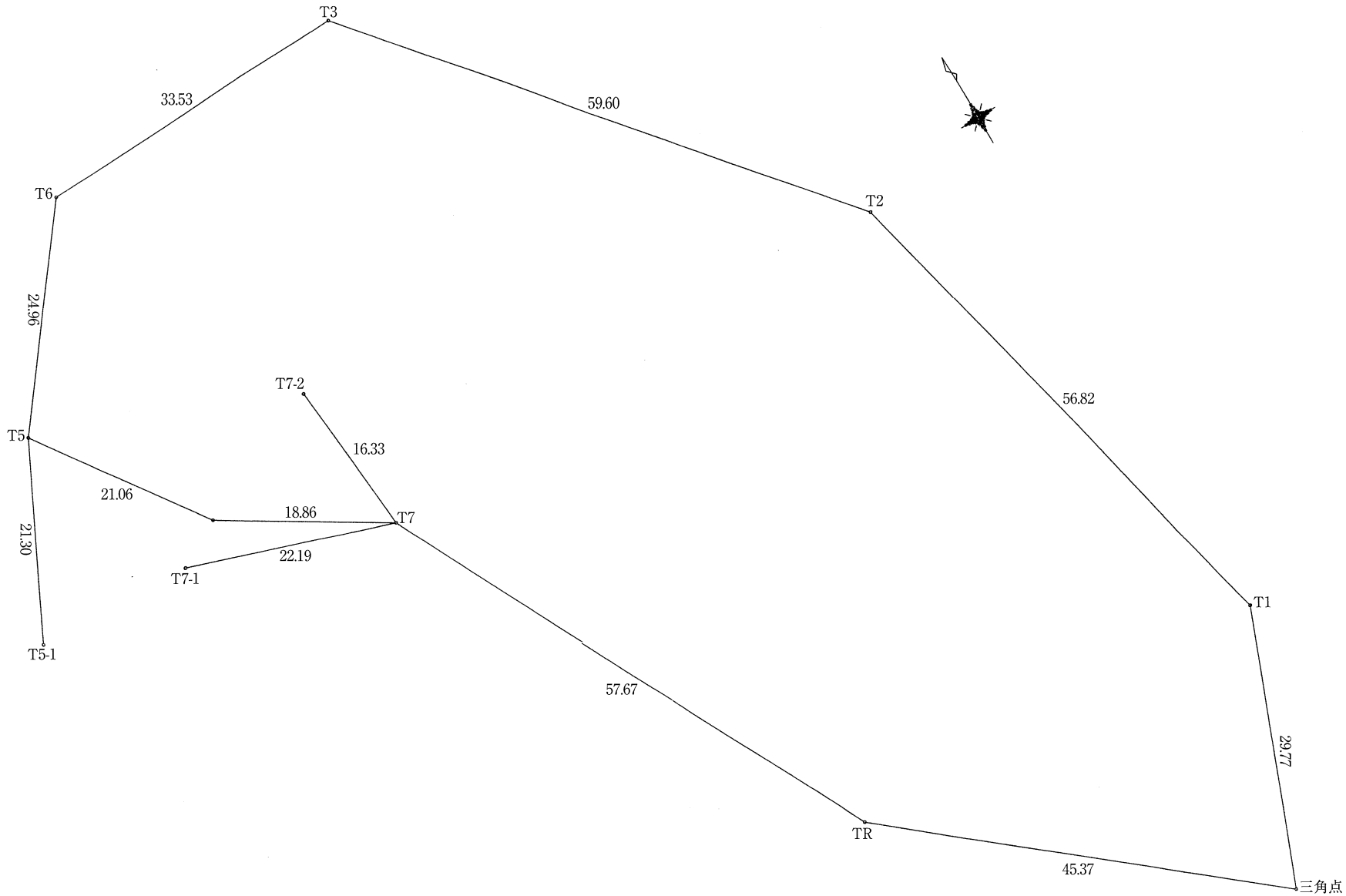
また資料整理についても施設が狭く、資料を広げる十分な面積がなかったこと、文化財担当職員が十分な時間が確保できないことから作業に支障をきたした。しかし幸い外部からの協力を得ることができ、報告書刊行の運びとなった。

さらに発掘調査が複数年次にまたがったにもかかわらず、調査成果がまとめられていない年度もあり、図面整理、調査概要把握で混乱をきたした。また写真では、カラーネガ、カラースライドの撮影情報がほとんど記されず、結果として撮影対象を説明できない写真が多数出てしまった。

第８表　多角点成果表

点名	X座標　m	Y座標　m	辺長　m	方向角　°′″	標高　m
三角点	500.000	500.000	—	—	75.891
	—	—	29.768	21－53－33	—
Ｔ１	527.622	511.100	—	—	73.500
	—	—	56.820	347－05－15	—
Ｔ２	583.005	498.403	—	—	73.683
	—	—	59.600	320－11－44	—
Ｔ３	628.791	460.249	—	—	68.991
	—	—	33.529	268－19－25	—
Ｔ４	627.810	426.734	—	—	70.315
	—	—	24.956	217－38－55	—
Ｔ５	608.051	411.491	—	—	72.283
	—	—	21.058	144－43－09	—
Ｔ６	590.861	423.653	—	—	75.174
	—	—	18.855	122－00－24	—
Ｔ７	580.867	439.642	—	—	75.020
	—	—	57.666	153－35－10	—
Ｔ８	529.222	465.295	—	—	74.336
	—	—	45.369	130－05－49	—
三角点	500.000	500.000	—	—	75.891

三等三角点　城山30084　標高76.03m　北緯37°59′55″
東経140°37′16″
国家座標　10系　X－22210021
Y－1861204



第25図　トラバース図（S＝1/600）

第６章　発見された遺構と遺物

第１節　三階櫓跡と周辺

三階櫓跡は城跡で最も標高の高い箇所にあり、東西17m、南北13mほどの平場となっていた（第26図）。表土と戦時中に建てられた防空監視所のコンクリート基礎を外すと、地表下約20～30cmのところから複数の建物跡が発見された。その形態から３つに分類され、時期、つまり、切り合い関係があった。下記の①→②→③の順で新しくなる（写真図版６の上）。なお、三階櫓跡周辺の石垣の傾斜からすると、平場は本来、もっと広い面積を有していたと考えられ、各時期の建物跡の石垣天端に近い箇所の基礎が失われている可能性がある。

石垣は基底部のみが残存していた。三階櫓跡の東側には本丸広場よりも石垣で段差がつき、一段高くなっており、建物跡が１棟発見された。この一段高い箇所は突出平場と呼称した。突出平場の南側には井戸１基があった。馬場跡は本丸西側石垣下において発見された。

遺物は瓦の出土が圧倒的に多い。発掘された瓦総量は第９表に示した。ただし、この総量には紐組瓦６点（SJ東下部から１点、大手門階段下１点、SJXX（＝遺構外）４点、計8,040g）、コンクリート平瓦（SJXX１点、3,400ｇ）は除外してある。ちなみに復元した三引両文軒丸瓦は4.4kgである。未申櫓跡の表採瓦と平成９年２月の文化財看板設置に伴う工事立会出土の瓦（1,115g）は表採に含めている。

次いで陶磁器類が多い。中近世陶磁器、土師質土器、近現代の陶磁器、ガラス製品等は全体で1,100件を超す登録となっている（第14表）。

大手二ノ門跡階段上面の一部を除き、一括廃棄単位の瓦、陶磁器の出土はない。鉄器類（第10表）も比較的多く出土しているが、共伴関係がしっかりしているものは少ない。金属製品、陶磁器、各種遺物はそれぞれまとめ図示し、出土地、計測値を掲載した。瓦の実測図、拓本は地区毎に掲載した。陶磁器の実測図は地区毎、写真は産地毎、その他は種別でまとめて掲載し、一覧表には産地データ等を記載した。

三階櫓跡

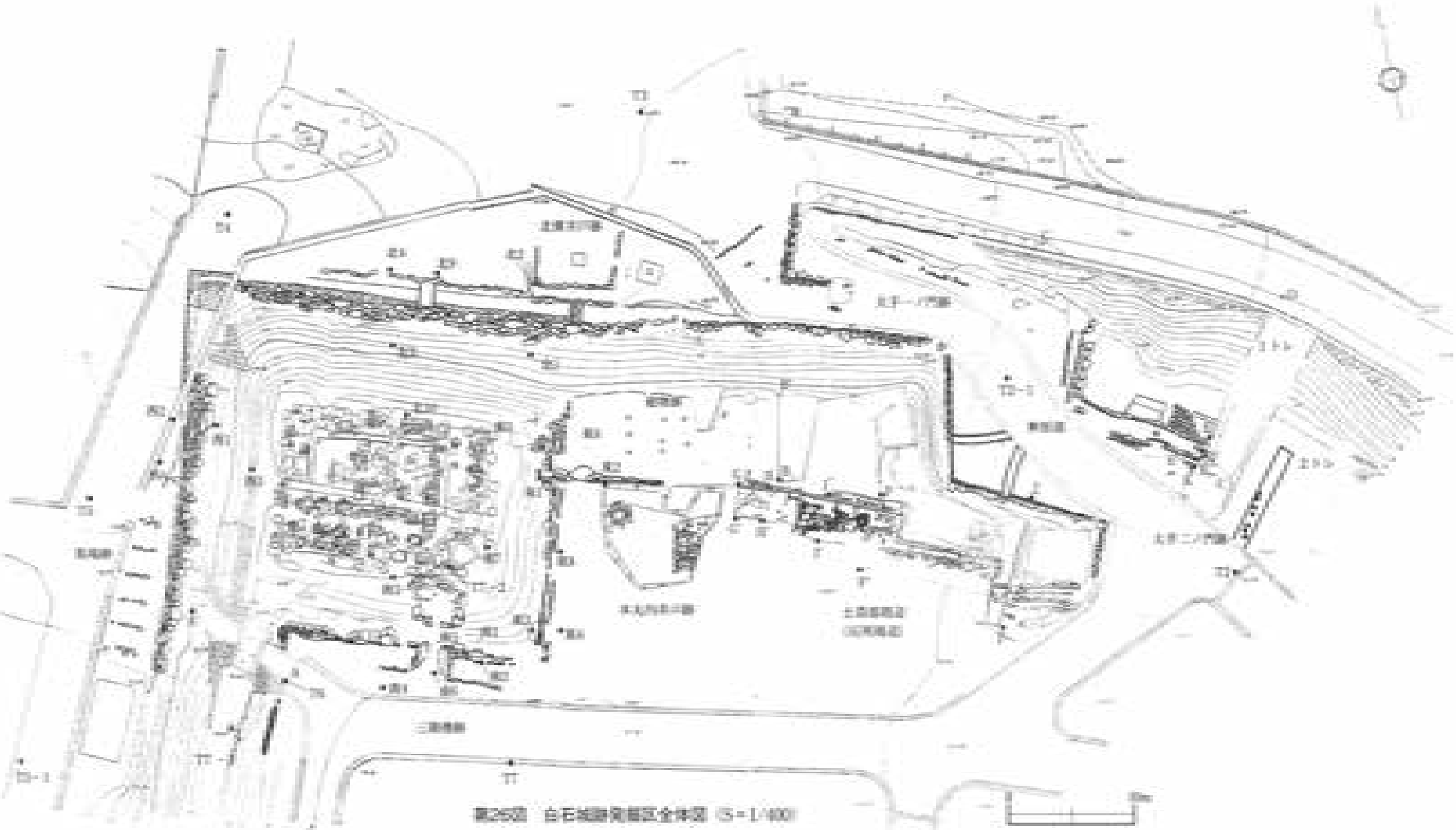
① 掘立柱建物跡（第27図）

平場西側寄りにおいて発見された。東西３間、南北２間が確認されている。桁行は北側列で、総長980cmで、柱間は西から290cm、400cm、295cm、中央列は、柱間は西から290cm、405cm、305cmである。南側は中央列からの距離があり、柱穴痕も確認されていない。西から320cm、413cm、245cmである。

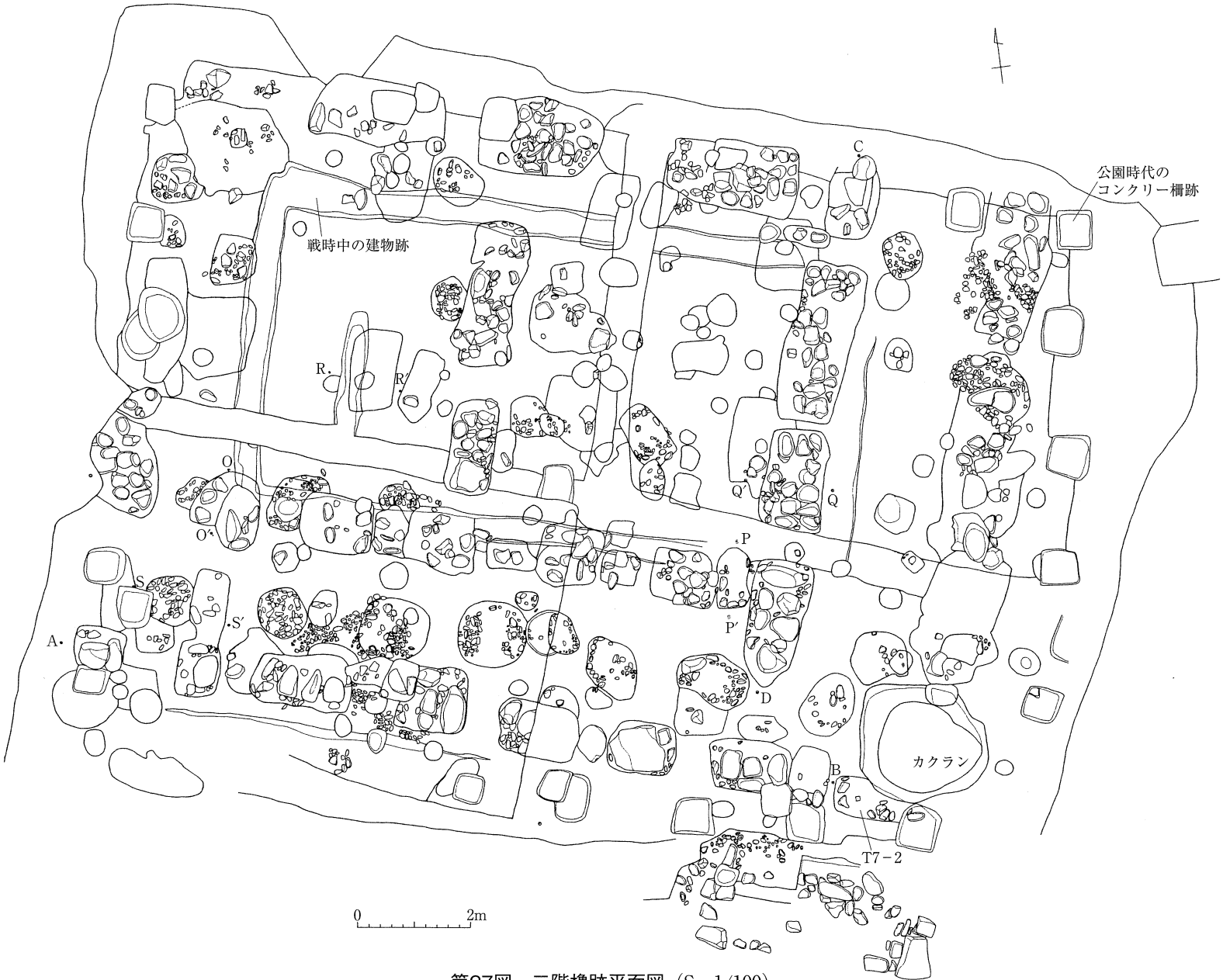
梁行は西側列で総長900cm、柱間は北から395cm、500cm、西から２列目で395cm、483cm、同３列目は390cm、512cm、同４列目は355cm、490cmである。

南側柱穴だけが、距離があり、柱痕跡も確認されていないが、建物の性格は不明である。なお、柱間計測は南側列の遺構残存状況が良くないことから、平面形からの推定で中心を想定し計測した。

柱穴痕は直径約20～30cm、深さ70cmの柱穴があり、概ね長方形の掘り方を持つ掘立柱建物跡であ



第25図　台石地区発掘区全体図（S＝1/400）



第27図　三階櫓跡平面図（S＝1/100）

る。柱穴底面には厚さ15cm、幅55cmほどの平石が据えられている。最も古い建物跡である。本来建物跡は東側を除く３方にもう少し広がっていたものと推定される。

② 礎石を持つ建物跡

平場全体から検出された直径約80～120cmの規模で約5cm大の石を根石として、びっしりと敷き詰め、その上に礎石をのせた建物跡である。礎石は全く残っておらず、根石のみが確認された。４間×７間分が確認されているが、本来はもっと大きかったと推定される。ただ、東側部分に建物跡が確認されなかった箇所がある。①よりも新しい建物跡である。

根石は長方形を基調としたもので、桁行は南側で総長1200cmである。柱間は最も北側にある礎石の西から800cm、160cm、２列目は400cm、800cm、150cm、同３列目は２カ所しか確認されていないが220cm、同４列目は170cm、190cm、200cm、200cm、200cm、同５列目は200cm、200cm、230cm、220cm、180cm、390cmとなっている。

梁行総長は西側から３列目で820cmである。柱間は、最も西側の北端から420cm、195cm、２列目は200cm、３列目は220cm、360cm、235cm、４列目は250cm、150cm、５列目は245cm、185cm、６列目は180cm、７列目は180cm、640cm、７列目は180cmである。

柱間計測には、掘り込み確認面から中心部を推定した。

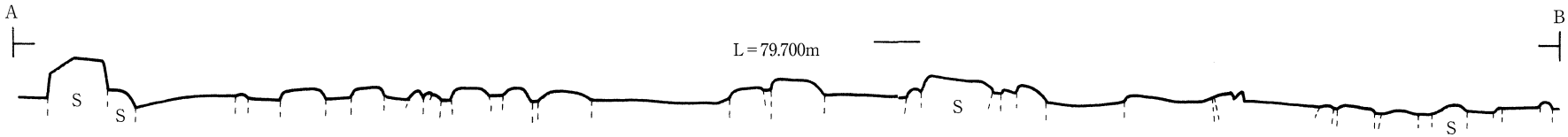
③ 大石を据え込んだ建物跡

平場全体から発見された。幅約１ｍ、長さ１～３ｍの方形もしくは長方形の平面形で他の建物跡よりも大きく、平らな自然石や若干加工した石を遺構確認面とほぼ同一レベルに据えこんで配置している。構築はまず、掘り込みを行い、石を据え、その後、土を充填し、その後、石を配置する方法である。一種の掘り込み地業である。

桁行は北側総長で1475cm、柱間は北側の西端から340cm、300cm、360cm、200cm、300cm、北から２列目で600cm、590cm、350cm、３列目は600cm、570cm、335cm、４列目は200cm、170cm、170cm、225cm、210cm、170cm、340cm、５列目は180cm、190cm、235cm、200cm、190cm、200cm、250cmである。

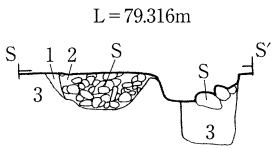
梁行は西側総長で1004cm、柱間は西側列の北から170cm、190cm、250cm、310cm、西から２列目は310cm、３列目は290cm、４列目は300cm、280cm、150cm、300cm、５列目は330cm、６列目は320cm、７列目は260cm、250cm、250cm、290cm、７列目は300cm、250cm、150cm、360cmである。

柱間計測は、掘り込み確認面から中心部を推定した。掘り込みが布掘り状のものが多く、計測は困難な部分があった。特に東端列は布掘状となっており、東西の同じ並びのものを勘案しながら、中心部を推定した。



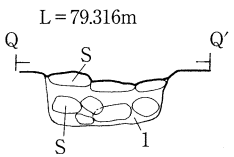
エレベーション図（S＝1/60）

エレベーション図（S＝1/60）



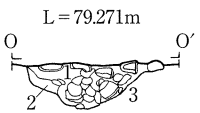
礎石をもつ建物跡断面図

1層　10YR5/4 にぶい褐色
2層　10YR4/4 褐色
3層　10YR3/4 暗褐色土、ボソボソしてしまりなし



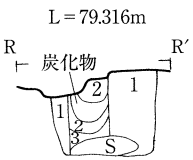
大石を据え込んだ遺構断面図（3期）

1層　10YR4/4 褐色土、地山の白色ブロックを多く含み、しまりがない



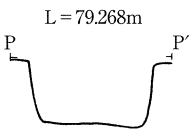
杭設置箇所2期目断面図（西側）

1層　7.5YR4/2 灰褐色シルト、炭化物、明褐色粒を若干含む
2層　7.5YR5/4 にぶい褐色シルト、若干砂質、浅黄橙（7.5YR8/3）をブロック状に含む
3層　凝灰岩質（積土）の7.5YR8/3 砂質なるも部分的に粘性あり



掘立柱遺構（1期目）断面図

1層　10YR5/4 にぶい褐色、白色ブロック（2～3mm）を多く混入する
2層　10YR5/3 にぶい褐色、1層よりもやや黒い
3層　10YR4/4 褐色土、やや粘性あり



杭設置箇所3期目掘り方断面

第28図　三階櫓跡断面図等（S＝1/60）

第２節　三階櫓跡周辺の石垣と階段跡

三階櫓北辺、西辺、南辺、東側、東側に接した突出平場の南面の石垣は野面積みで積まれており、自然石の平坦面を表にして積まれていた（第29～32図）。用いられた石は大小さまざまであり、積石の隙間には小型の詰石がなされている。三階櫓周辺の石垣底面から規模を推定すると、東西30m、南北27mの規模となる。

北辺は残存状況の良い箇所で５段（高さ3.3m）、その他は３段ほどの石が積まれていた。低い箇所では0.8mほどしか石垣が残存していなかった。北西隅は既に道路下となっており、石垣は確認されなかった。積まれている石は大きいもので２ｍを超える幅のものがあるが、大きめの石でも１ｍ前後のものが多い。東西に38mほどの長さが確認されている。石垣側面図が作成された箇所で34mほどで、石垣付番図で４ｍほど確認できる（第31図）。これより東側は20mほど、打込ハギにより築かれている。北辺石垣は三階櫓部分に対応する箇所と、それより東では、若干ではあるが、張り出し方が異なっている。つまり、三階櫓箇所から東は、最大1.8mほど北へせり出す形になっている。

北辺石垣に平行して小さい石を東西方向に並べた犬走り状石列が確認されている。高さは50cm、長さ14mあり、西側はおそらく削平されている。東側は北側井戸があり、設置の際に破壊されていると思われる。北辺石垣と、この石列の先端までの幅は２ｍである。用いられている石は50～100cmまでのものが多いが、１ｍを超えるものもある。石は２段ほど積んであるが、しっかりとした据え方ではないようだ。断面図北９、10では、裏込め石と推定される層が下段で140cm、上段では50cmほどである。現存する石垣から石垣勾配を推定すると北１、２間で54度、北３、４間で53度、北９、10間で53度となる。

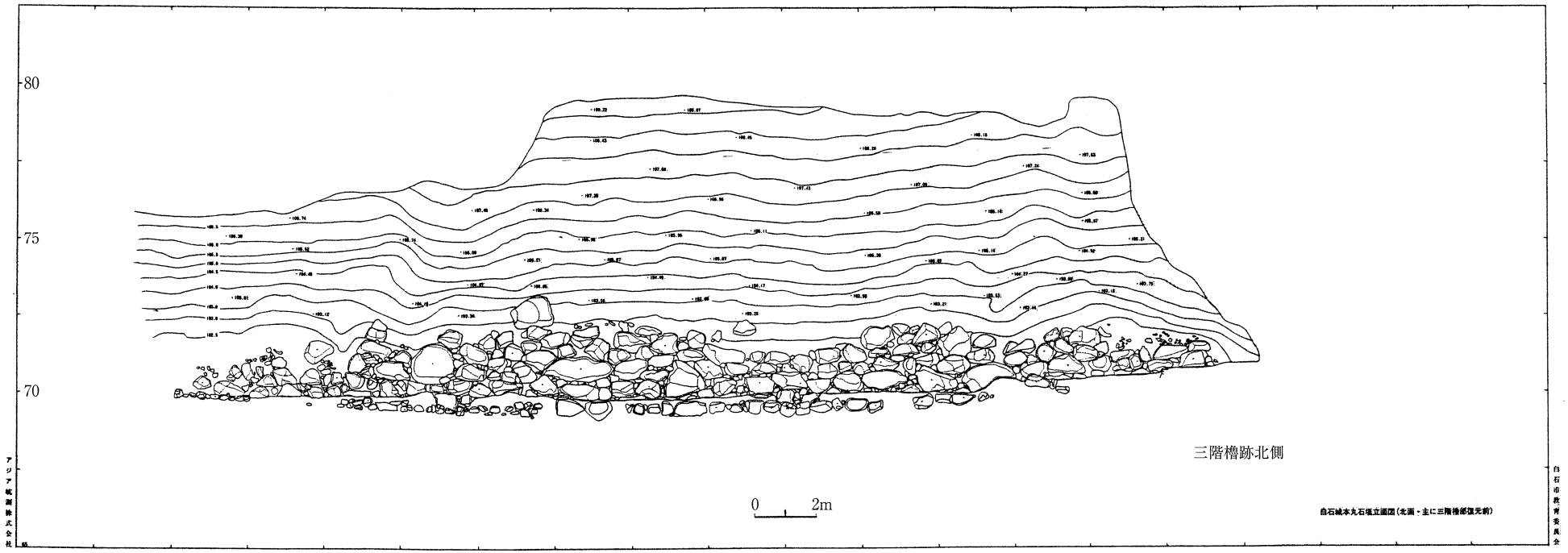
東側石垣は２段ほど残存している箇所があるが、残存状況は悪い。長さは約15mである。残っている箇所で高さ１ｍ弱であった。石は大きいもので１ｍ前後である。石垣底面から三階櫓上面の遺構確認面までの比高は4.2mである。断面図東５、６において裏込石は、最も厚い箇所では1.5mほど確認されている。同東７、８において裏込石は底面で1.7m、最も厚い箇所では1.8m、上端では0.9mほど確認された。

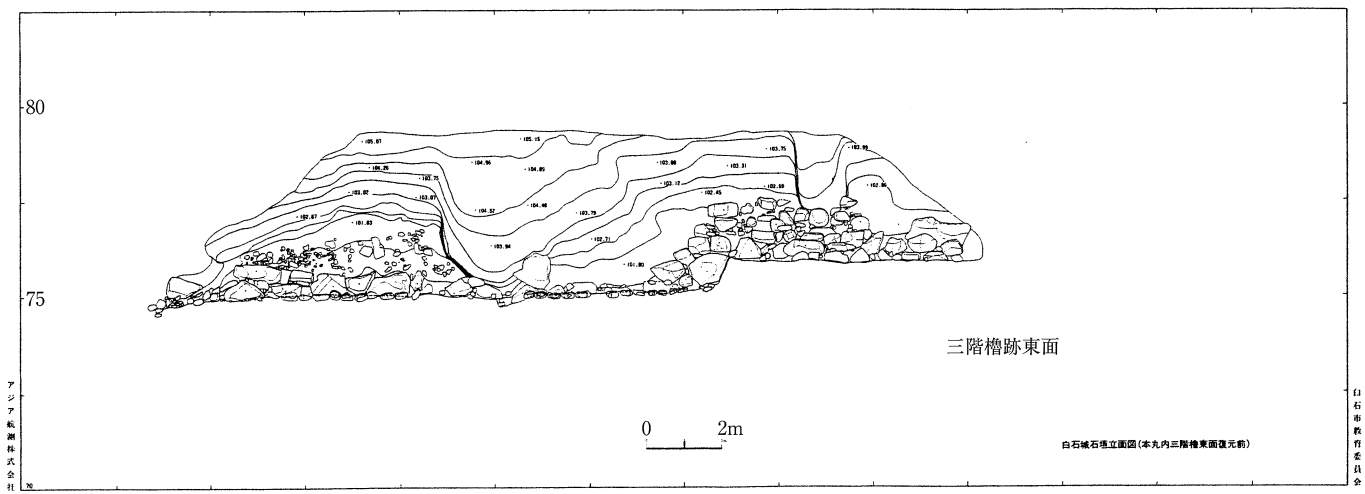
東側には階段状の石段があり、突出平場と天守台の接する屈曲箇所から北へ2.1mで南端石、北側石垣底面から８ｍ南で北端石となる。階段状の幅は2.6m、東西で2.1mほどが確認された。

東側石垣には犬走り状石列が南北に確認されている。途中、途切れている箇所があるが、全体では、14.2mである。若干歪んでいる。東側石垣と、この石列の先端までの幅は40～60cmである。石の大きさは40cm以下のものが多い。

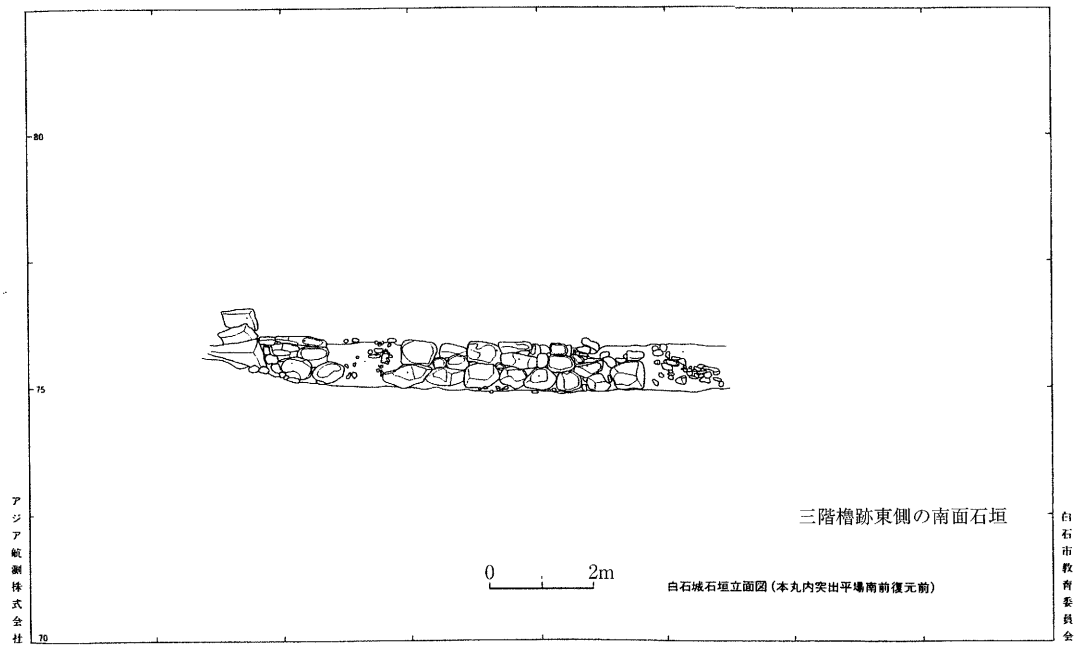
現存する石垣から石垣勾配を推定すると東１、２間で71度、東３、４間で67度となる。

南側石垣も残存状況は良好ではなかった（写真図版61－1）。櫓南東側から、櫓南西部の本丸側における石垣屈曲箇所までの長さは約18mである。側面図が残されている箇所では、石が３段ほど確認でき、高さは２ｍを超える。用いられている石は１ｍを超えるものもある。三階櫓のへ階段跡に向かって左側には、復元後も存在が確認できる石があり、斜めに長さ84cm、幅4cmほどの溝状の彫り込みがあり、矢穴が８つ刻まれている（写真図版５－５）。矢穴の大きさは幅10.4cm、奥行き10cmである。





第29図　石垣側面測量図（1）（S＝1/200）



第30図　石垣側面測量図（2）（S＝1/150）

南側階段跡は、三階櫓南東隅から10.5m、本丸内南西隅屈曲箇所から10.1mで下段西端となる。本丸地面と接する箇所では東西両端の石間の幅3.3m、三階櫓建物跡のある天守台上面近くでは幅４ｍとなっている。途中、残存状況不良ではあるが階段状に石が２段確認できる。加工された石が使用されている。南北長は6.9mである。階段下端と上端（天守台面）では4.6mの比高がある。断面図３、４において裏込石は１ｍほどあるものと推定される。

この階段下段の東西には犬走り状石列が確認されている。西側で3.3m、東側で4.5mである。東側は若干歪んでいる。南側石垣と、この石列の先端までの幅は２ｍである。石の大きさは南面で計測すると50cmほどになるものもある。

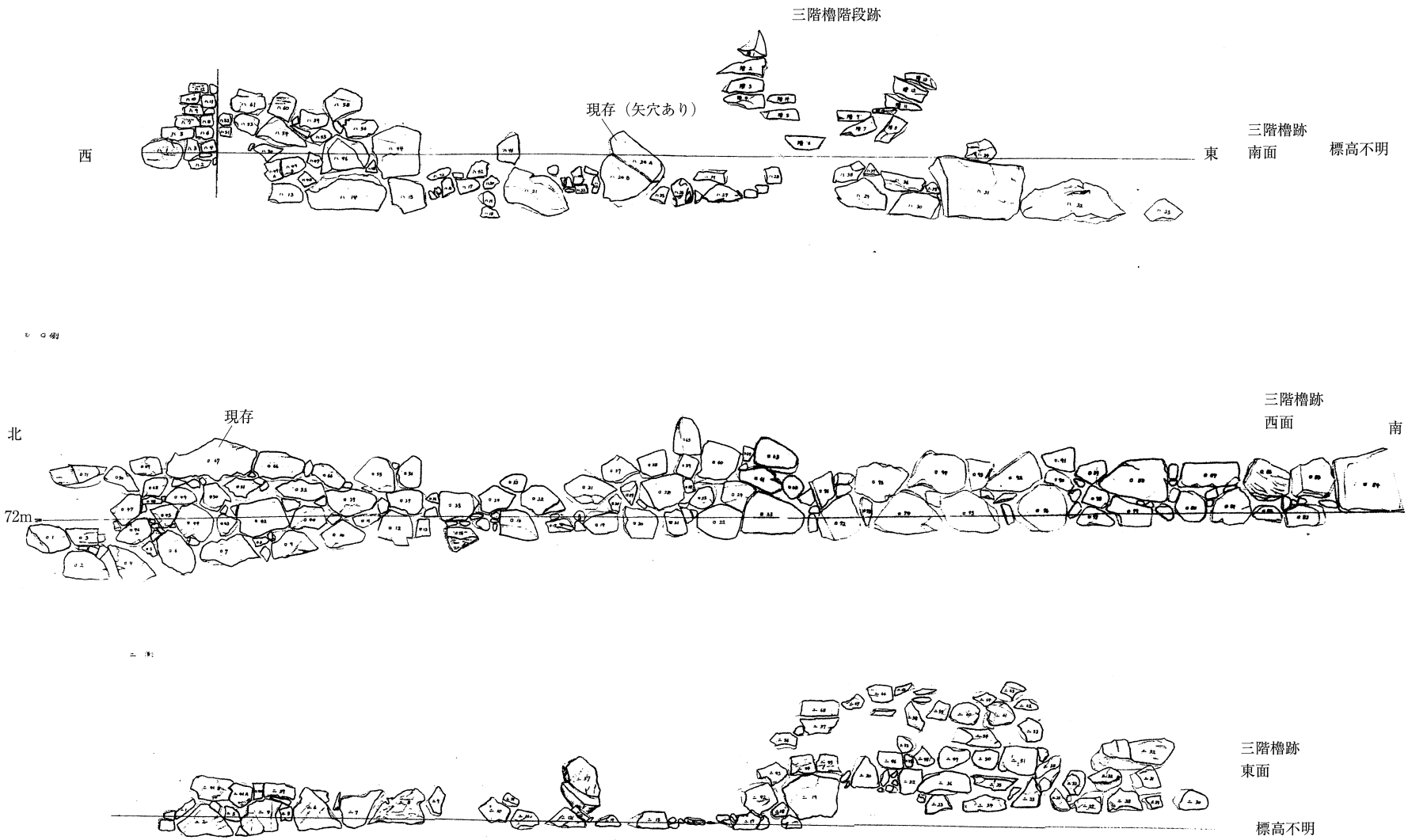
現存する石垣から石垣勾配を推定すると南１、２間で66度、南３、４間で55度となる。

三階櫓のある天守台から南に伸びる土塁にも石垣があり、東面は南北で1.4m、4.5m分が確認された。途中は４ｍ分が公園整備時の切り通し箇所となり掘削が行われ、上部に朱塗り橋が設置され、残存しない（写真図版42－1）。切り通し箇所の東面の石垣側面図は残されていないが、写真から判断すると打込ハギ布積みで２段ほど築かれている。残存高は低いが、１段目と２段目は横目地が通っている。その背後には厚さ50cmほどの裏込石が確認できる。

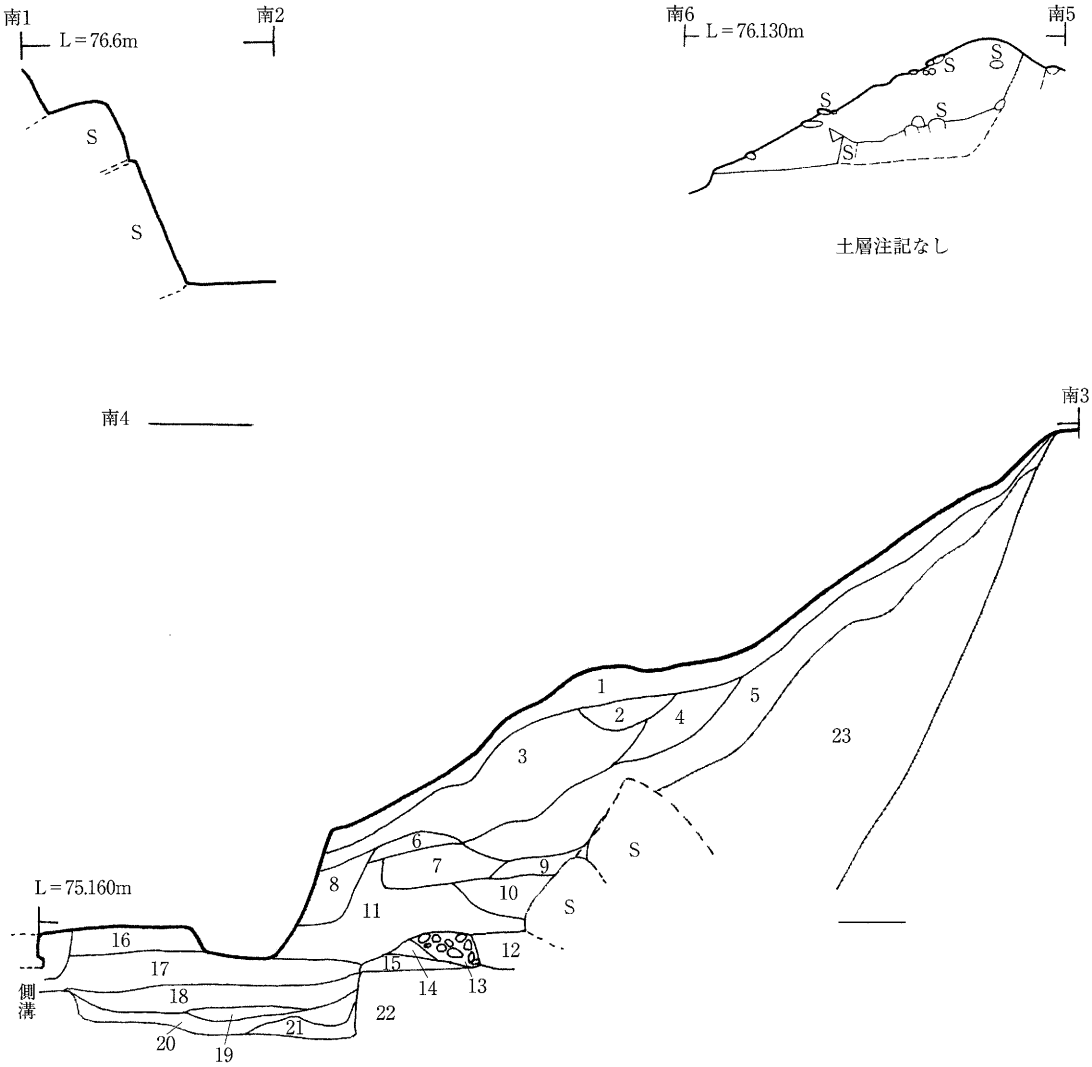
この土塁の断面図は第39図、写真図版5-3に示した。原図には詳しい記載がないが、カラー写真を見る限り、７、６層上面、12層上面、22、23層上面の３面に暗褐色層が堆積しており、旧表土の可能性がある。それぞれの層間には、褐色系統土が厚く堆積し、埋め戻し土と推定される。　22、23層上面の西側には幅2.4mの溝状落ち込みがあり、近世白石城に先行する遺構と考えられる。

三階櫓西側の石垣は、公園時代の切り通し箇所の下に残存していた（写真図版５－１）。三階櫓北西隅は道路下となり、角付近の石垣が既になくなっていたが、基底部には焼土混じりの層、黄白色土層

第31図　石垣番付図（1）（S＝1/120）

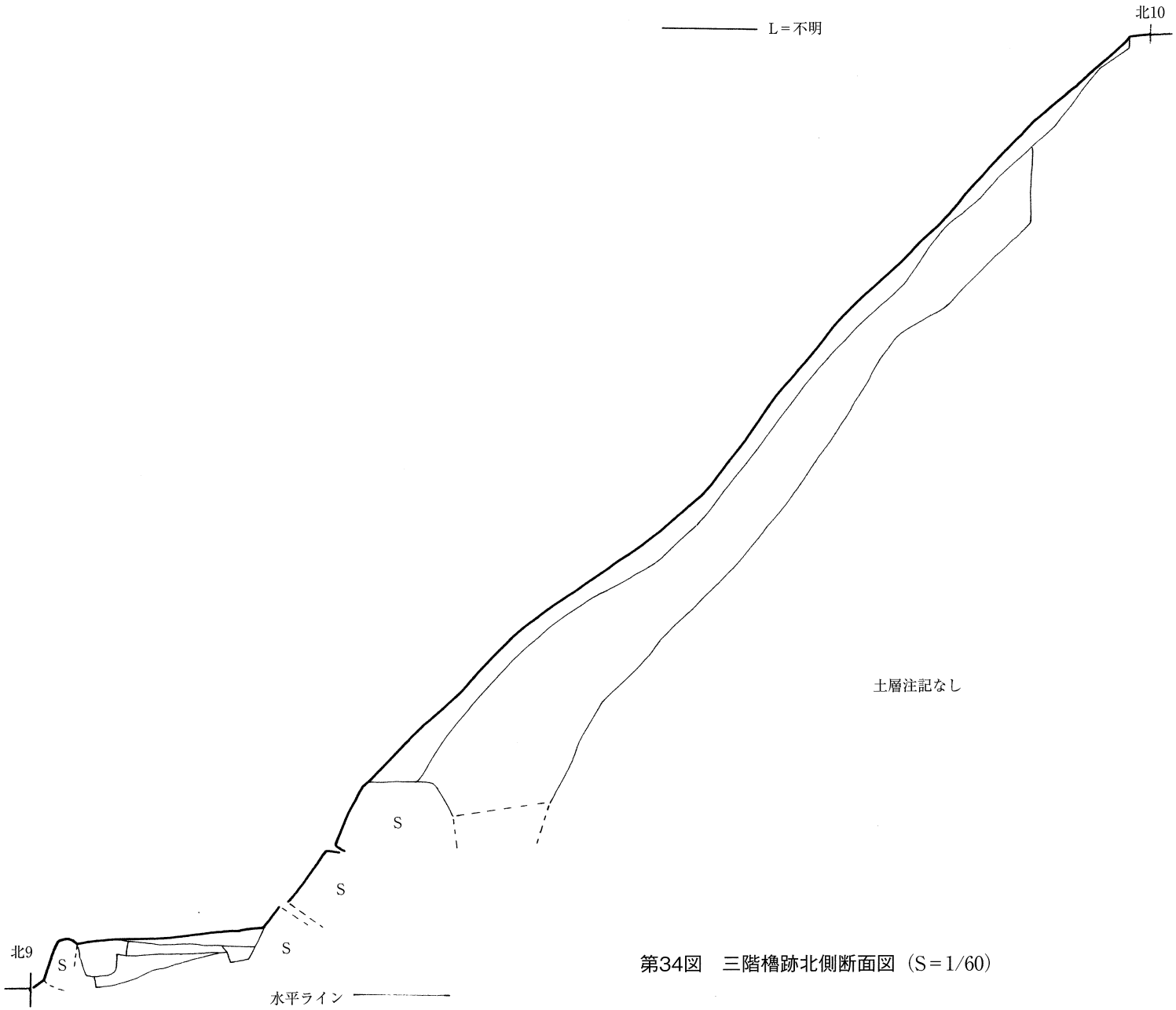


第32図　石垣番付図（2）（S＝1/120）

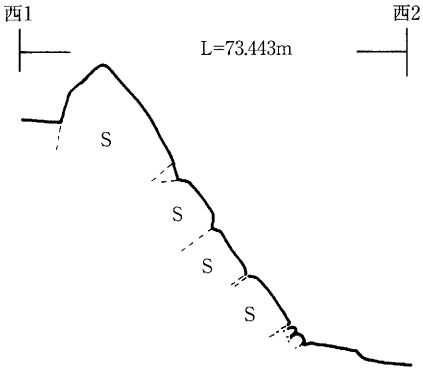


1層　7.5YR3/4 暗褐色シルトシルト、表土
2層　7.5YR4/6 褐色シルト、小礫を含む
3層　7.5YR4/6 褐色シルト、礫、瓦を含む
4層　7.5YR4/6 褐色シルト、瓦、炭化物を含む
5層　7.5YR4/4 褐色シルト、7.5YR7/4 にぶい橙を若干含む
6層　7.5YR6/4 にぶい橙シルト
7層　7.5YR4/3 褐色シルト、若干の炭化物、礫を含む
8層　7.5YR4/6 褐色シルト、瓦、炭化物、礫を含む
9層　7.5YR4/6 褐色シルト、炭化物を若干含む
10層　7.5YR4/4 褐色シルト、礫を含む
11層　7.5YR4/4 褐色シルト、炭化物、礫を含む
12層　7.5YR5/4 にぶい褐色シルト、7.5YR6/6 橙色を粒子状に含む、しまりなし、ボソボソ
13層　10～15cm大の礫層
14層　7.5YR4/3 褐色砂質シルト、炭化物、7.5YR6/6 橙色を粒子状に含む
15層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、炭化物、7.5YR6/6 橙色を多量に含む
16層　7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト、しまりなし
17層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、酸化鉄分を含む、礫あり
18層　7.5YR5/1 砂質シルト（7.5YR8/2 灰白色粘性シルトを含む）、酸化鉄分を含む
19層　7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト、7.5YR8/2 灰白色粘性シルト及び酸化鉄分を若干含む
20層　7.5YR5/1 砂質シルト、瓦を含む
21層　7.5YR5/1 砂質シルト、多量に木端を含む
22層　7.5YR3/3 暗褐色シルト、地山？、7.5YR5/6 明褐色を含む
23層　裏込め、こぶし大からの河原石と若干の40～50cm大の石を含む

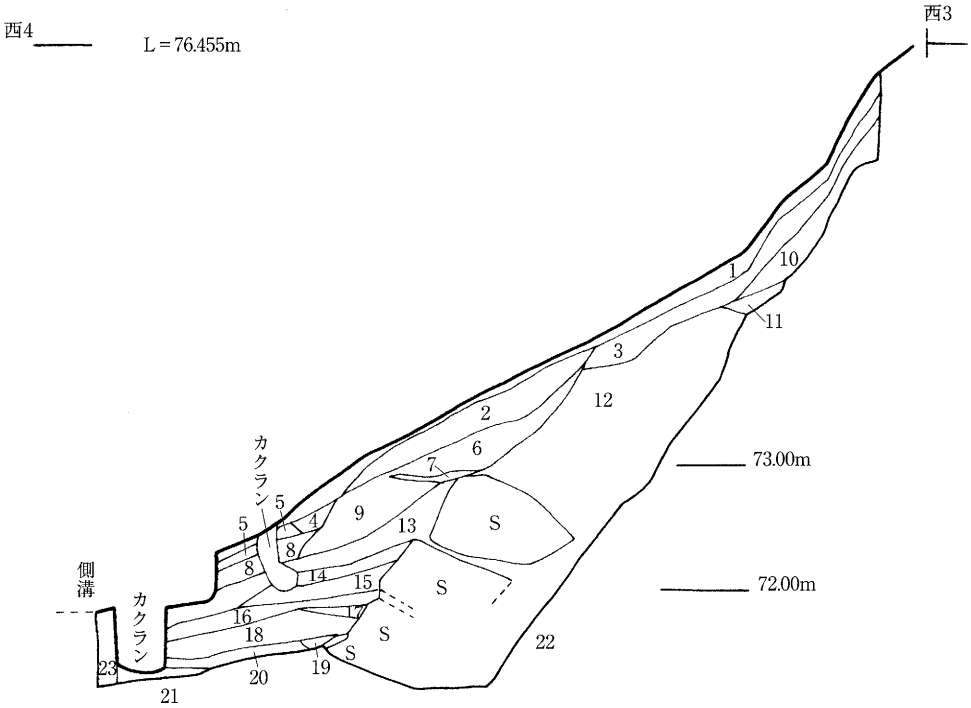
第33図　三階櫓跡南側断面図（S＝1/60）



第34図　三階櫓跡北側断面図（S＝1/60）

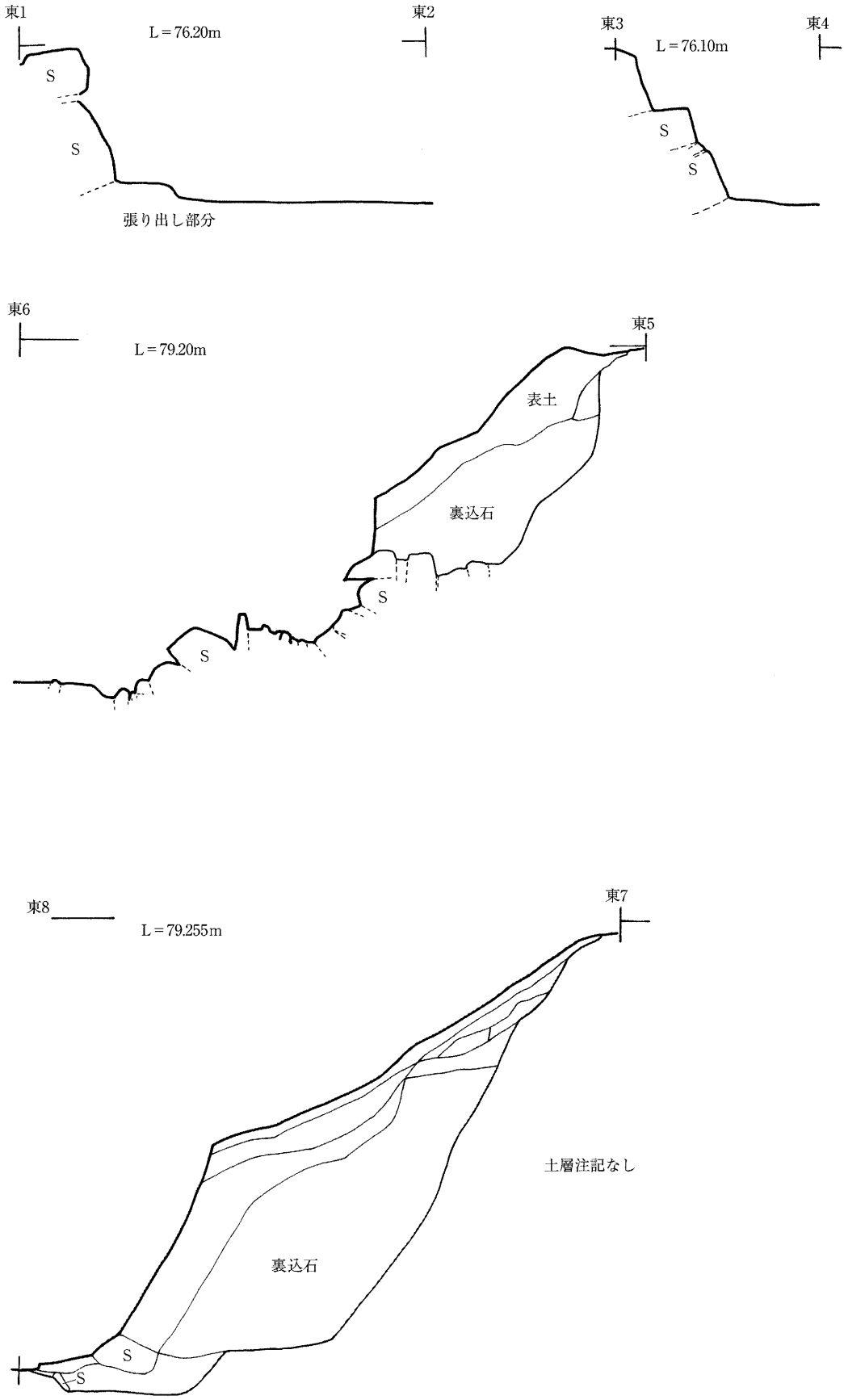


第35図　三階櫓跡石垣エレベーション（S＝1/60）

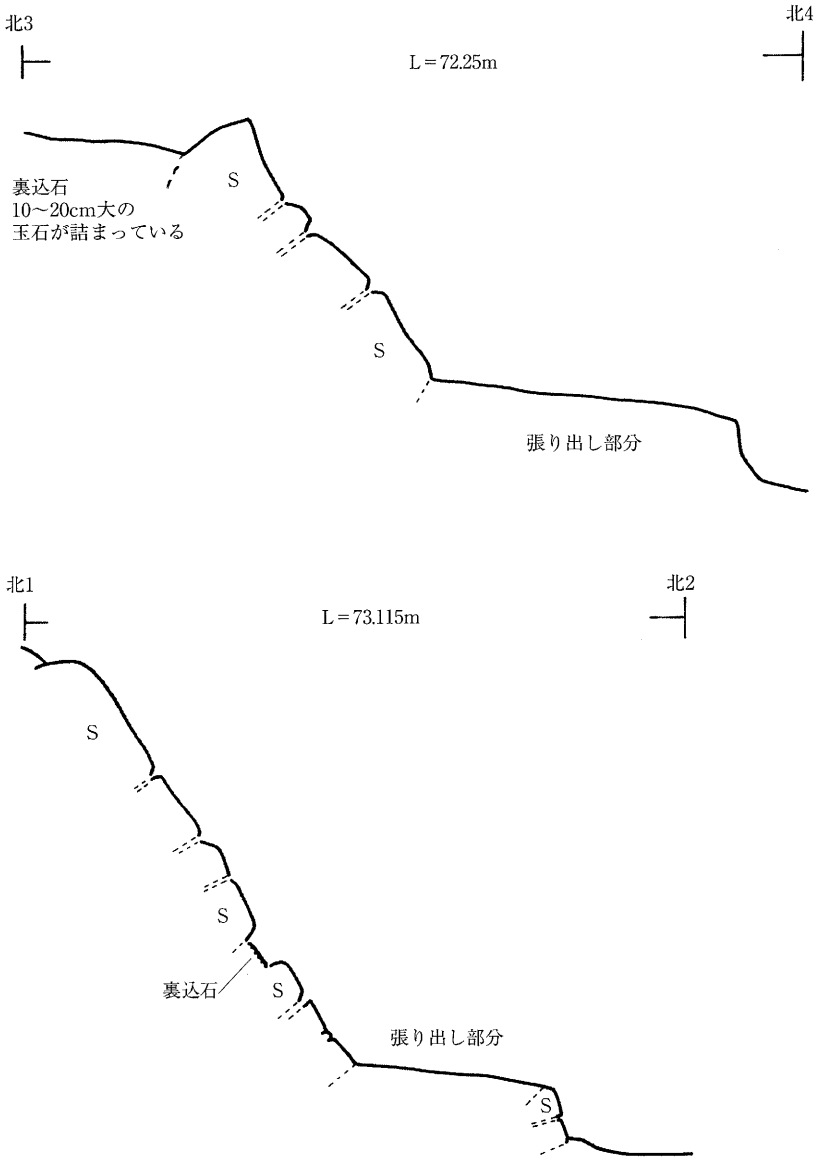


第36図　三階櫓跡西側断面図（S＝1/60）

1層　7.5YR4/4 褐色シルト、表土
2層　7.5YR6/6 橙色シルト、崩落土
3層　7.5YR4/6 褐色シルト、7.5YR6/6 にぶい橙色シルトを若干含む
4層　7.5YR4/4 褐色シルト
5層　7.5YR4/6 褐色シルト、7.5YR6/6 にぶい橙色シルトを含む
6層　裏込め石の崩壊層、7.5YR4/3 褐色シルト、7.5YR6/6 にぶい橙色シルトを若干含む
7層　7.5YR4/3 褐色シルト
8層　7.5YR4/3 褐色シルト
9層　7.2YR4/3 褐色シルト、7.5YR6/6 にぶい橙色シルトを若干含む
10層　裏込め石
11層　7.5YR6/6 橙色シルト、崩落土
12層　直径5～30cm程の河原石（60cm程の石もあり）、中には石垣の石の矢を入れた未使用の石も含む
13層　7.5YR4/4 褐色シルト、瓦等を大量に含む
14層　7.5YR4/6 褐色シルト
15層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、瓦を含む
16層　7.5YR3/4 暗褐色シルト
17層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、瓦を含む
18層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、7.5YR6/6 にぶい橙色シルトを部分的に含む、瓦を含む
19層　7.5YR4/3 褐色シルト
20層　7.5YR4/3 褐色シルト、7.5YR6/6 にぶい橙色土を部分的に含む
21層　7.5YR4/4褐色シルト、若干の炭化物を含む
22層　凝灰岩、地山
23層　側溝の堀方、7.5YR3/4暗褐色シルト、小礫を若干含む



第37図　三階櫓跡断面図（S＝1/60）

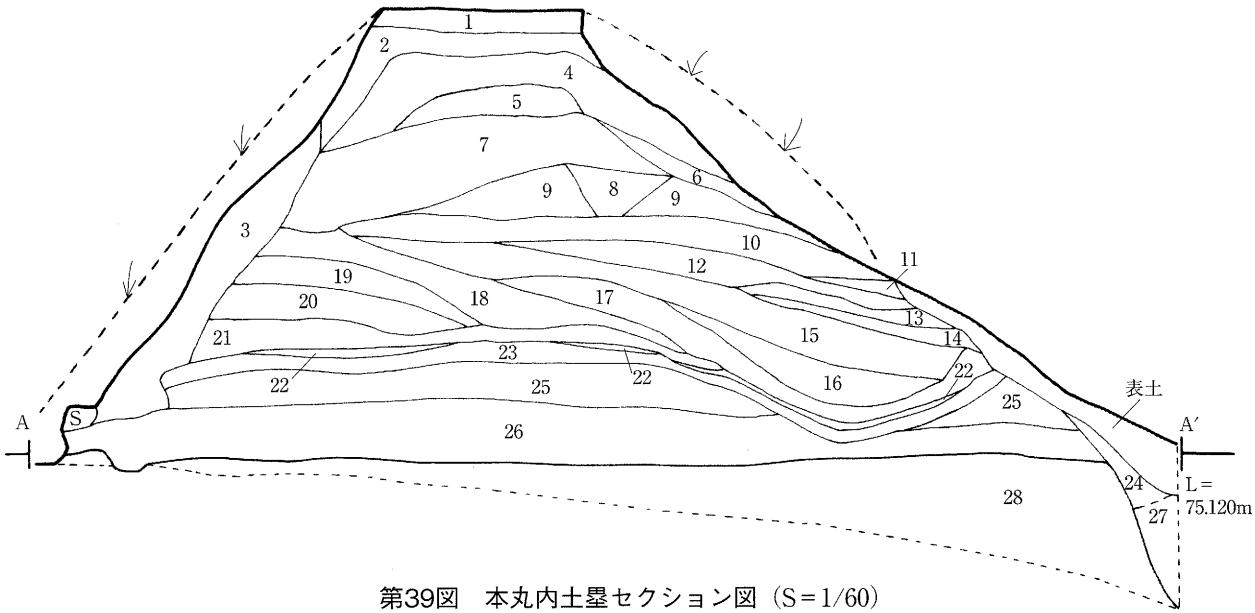


第38図　三階櫓跡北側断面図（S＝1/60）

が確認された（第43図）。失われた箇所は西辺で８ｍ、北辺で3.6mの三角形状を呈している。西側石垣は25mほど残存しており、４段ほどの石積みが残存していた。用いられている石は大きいもので２ｍ近くある。１ｍを超える石が比較的多く見られる。断面図３、４において石垣の石は奥行が１ｍほどであり、裏込石は10cmと非常に薄い。現存する石垣から石垣勾配を推定すると西１、２間で54度、西３、４間で55度となる。

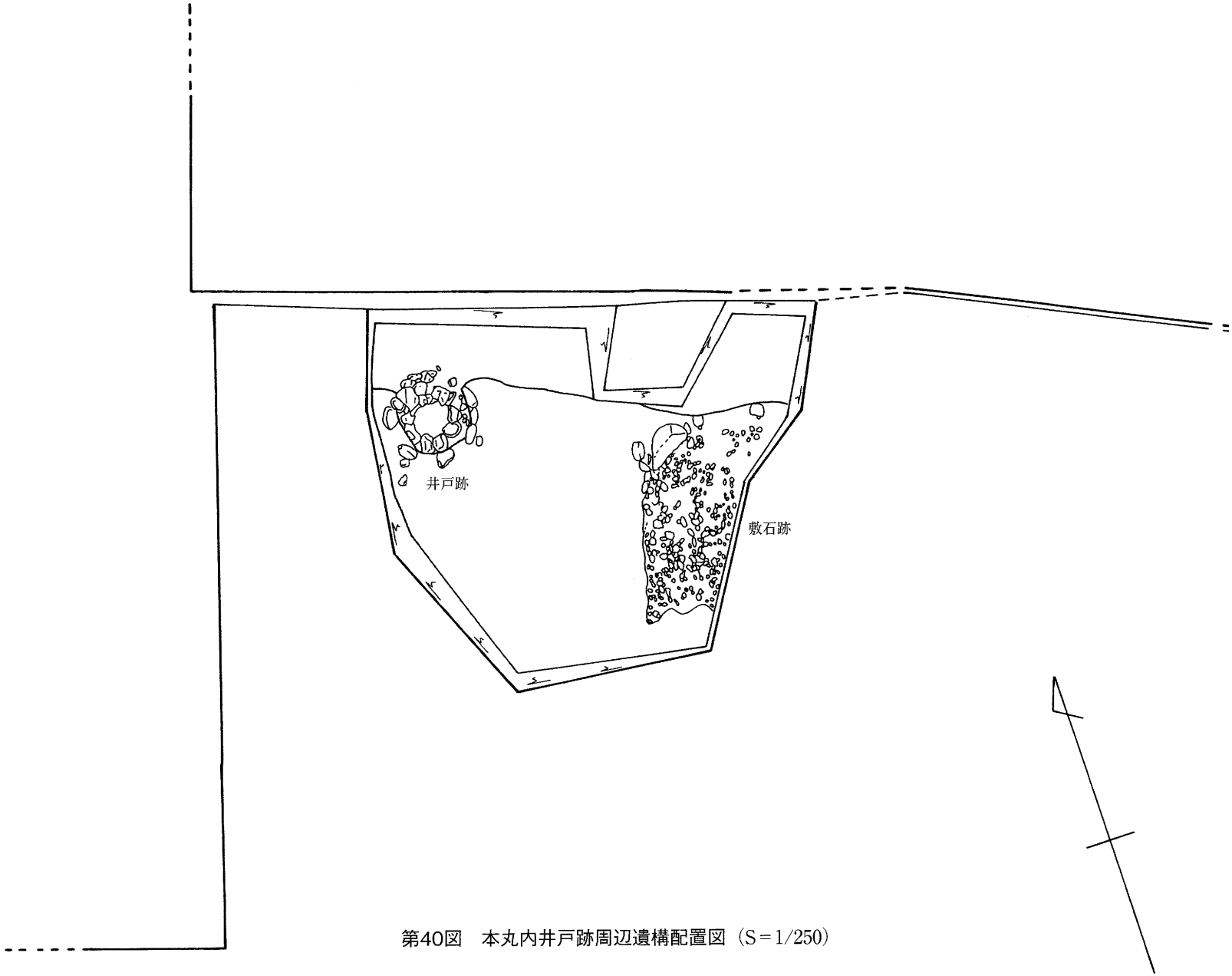
突出平場と接する箇所は石垣の残りが比較的良い。突出平場とその南側では１ｍの段差がある。段差では石が４段ほど確認された。突出平場上になると石垣が高さ1.5mほど残存している。用いられている石は１ｍを超えるものは少ない。この平場での石垣残存長は6.2mである。突出平場上面と三階櫓上面では3.4mの比高がある。

突出平場の南面石垣は途中、石が抜けている箇所があるが、長さ7.3mほどである（写真図版51－5）。用いられている石は１ｍを超えるものはなく、50～60cmのものが多い。

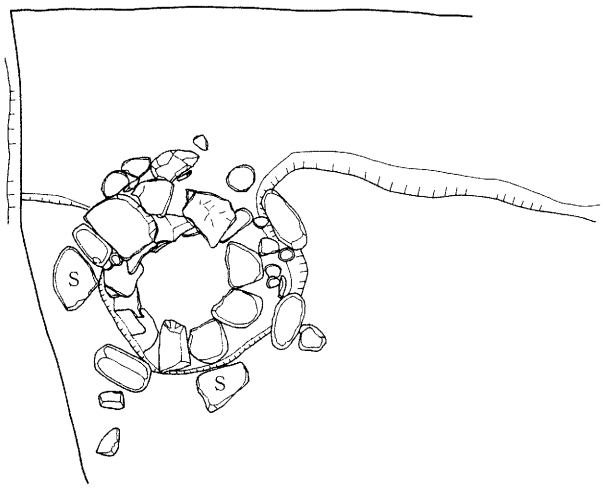


第39図　本丸内土塁セクション図（S＝1/60）

表土　7.5YR2/3 極暗褐色シルト、しまりなり、崩れた大礫（30cm）及び中礫（20cm）等を含む、木根多い
1層　山砂
2層　7.5YR5/4 にぶい黄褐色シルト、礫、根を含む、しまりなし
3層　7.5YR5/4 にぶい褐色、多量の礫（裏込石）を含む、瓦片あり
4層　7.5YR7/4 にぶい橙色、地山ブロック（灰色）を少量含む、しまりなし、根を含む
5層　7.5YR4/4 褐色シルト、明褐色ブロックを含む、しまりなし
6層　7.5YR5/6 明褐色シルト、地山ブロック（灰色）を若干含む
7層　2.5Y 灰白色シルト、凝灰岩礫（ブロック？）を含む、しまりなし
8層　7.5Y5/3 にぶい褐色シルト、しまりなし
9層　7.5Y6/4 にぶい橙色、地山ブロックを含む、しまりなし
10層　7.5YR4/6 褐色シルト、しまりなし
11層　7.5YR5/4 にぶい褐色シルトに明褐色ブロックを多量に含む、しまりなし
12層　7.5YR4/3 褐色ブロックを多く含む
13層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、明褐色ブロックを若干含む
14層　7.5YR5/4 にぶい褐色シルト（砂質）、しまりなし
15層　7.5YR5/3 にぶい褐色シルト、地山ブロックを多量に含む、しまりなし
16層　7.5YR5/3 にぶい褐色シルト、多量に地山ブロック（酸化）を含む、しまりなし、隙間あり
17層　2.5Y 灰白色シルト、明褐色ブロックを若干含む
18層　7.5YR5/3 シルト、地山ブロックを含む
19層　7.5YR5/4 にぶい褐色、礫なし、しまりなし、地山ブロックを含む
20層　7.5YR5/8 明褐色シルト、礫あまりなし
21層　7.5YR5/6 明褐色シルトに礫を含む、地山ブロックを若干含む、しまりあり
22層　7.5YR3/4 暗褐色シルト（グライ化）、炭化物を含む
23層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、炭化粒を若干含む
24層　7.5YR4/3 明褐色粒を含む、しまりなし、崩落土
25層　7.5YR5/4 にぶい褐色シルト、礫を若干含む
26層　7.5YR5/6 明褐色シルト
27層　裏込石層
28層　2.5Y8/1 灰白色シルト、凝灰岩（地山）、酸化鉄を多く含む



第40図　本丸内井戸跡周辺遺構配置図（S＝1/250）

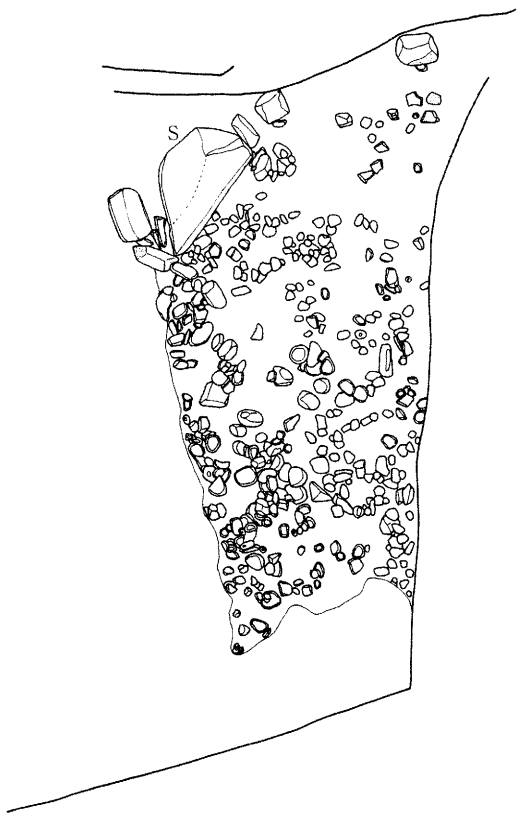


第41図　本丸内井戸跡平面図（S=1/60）

板碑は長さ85cm、巾45cm、厚さ20cmで、上部に梵字「バン」が彫られている（写真図版33－2）。三階櫓下南西隅石垣脇から出土している。大人４人で運ぶのがやっとの重さである。扁平な自然石を利用している。

三階櫓跡の建物跡、周辺の石垣、階段跡の遺物は瓦の出土が圧倒的に多い。三階櫓周辺からは計231kgの瓦が出土し、桟瓦を除く全ての種類の瓦が出土している。軒丸瓦は巴文、九曜文、三引両文、菊丸があり、軒平瓦は草花文、雪持笹文があり、谷丸瓦も出土している。陶磁器は各時代、各産地の出土が見られる。土師質土器（素焼き）、中世陶器、土師器、磁器の人形片、スサ入り土壁片、石盤、和釘10本、板状などの鉄器も出土している。青銅製小柄櫃１点も見つかっている。石臼は２点、銭貨は９点出土している。大正４年の片倉公300年祭の記念の杯も出土している（写真図版30－3）。

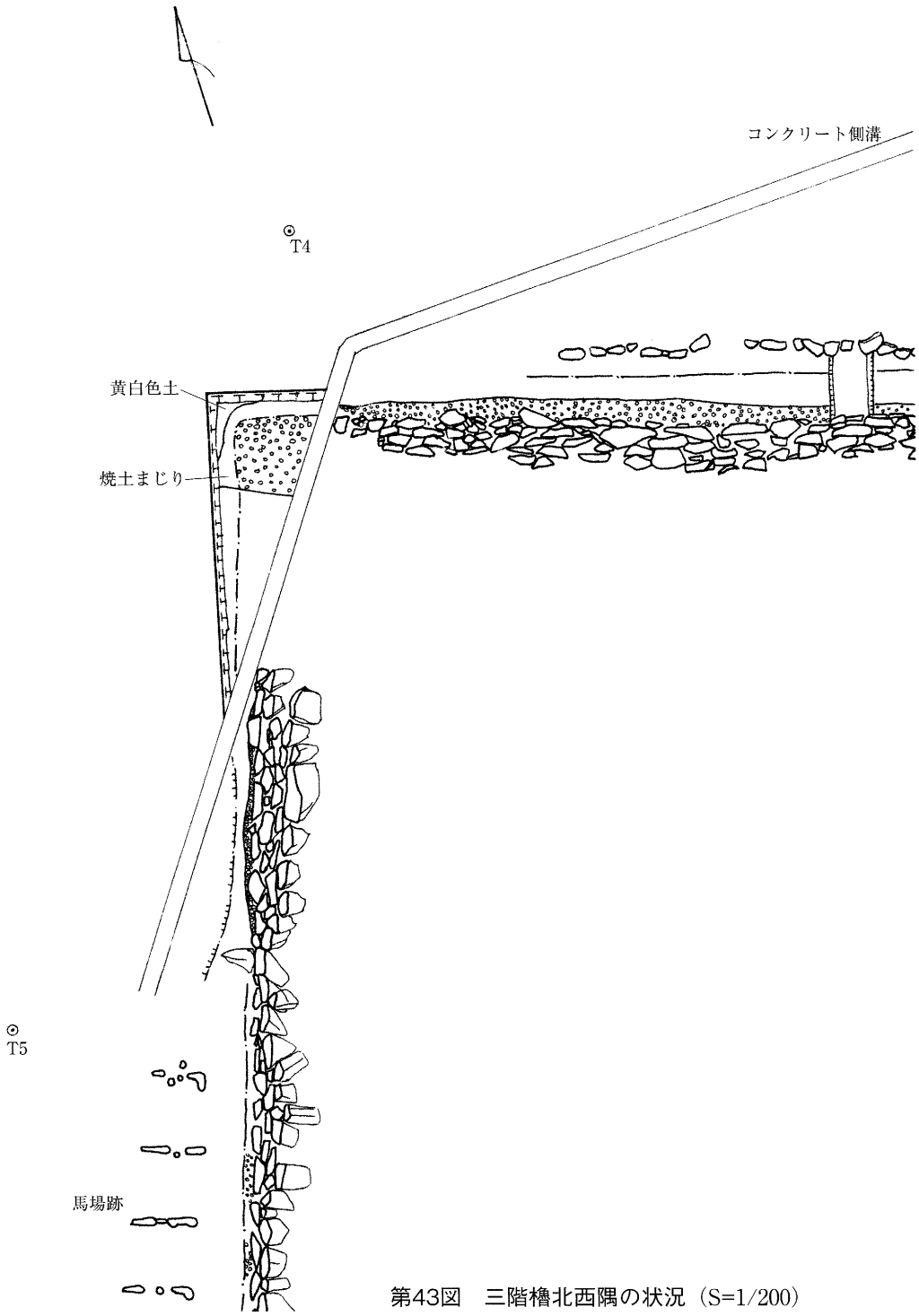
三階櫓跡の天守台上面の南東隅にある撹乱の穴から第二次世界大戦時の防空監視所で使用されていたと推定されるアメリカ軍用機模型８機分が出土した（写真図版34、68－１～５、67－8）。敗戦時に土中に埋めたものと考えられる。これらと共に統制陶器も発見された（写真図版31－１～６）。これらとは別に軍隊茶碗も見つかっている（写真図版21－8）



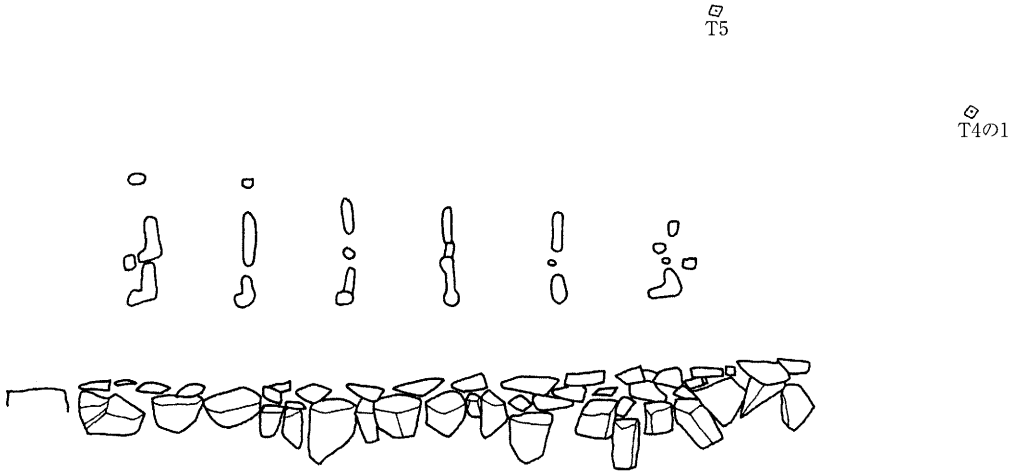
第42図　本丸内井戸跡東側敷石跡（S=1/60）

馬場跡

馬場跡は三階櫓西側石垣そばで確認された。東西に平行した溝がかろうじて６本確認できる（第44図）。幅は20cmほどである。溝の間隔は1.8mのものが多い。長さは1.5～2.1mまでとバラツキがある。三階櫓石垣北辺とほぼ平行になる配置となっている。遺物は出土していない。



第43図　三階櫓北西隅の状況（S=1/200）



第44図　本丸西側馬場側遺構平面図（S＝1/150）

第３節　土塁部周辺（石列周辺）

突出平場

三階櫓跡の東側に本丸よりも一段高い箇所が突出平場と呼ぶ箇所である。三階櫓脇で南北6.8mほど、櫓東側石垣から大手門桝形部の東面石垣までの東西は28mほどある。

石垣は野面積みで２段ほど積んで南側の本丸井戸跡と段差がついている。平場の規模は南北７ｍ、東西10m以上と推定された。上面の平坦面で掘立柱建物跡が１棟確認されている。西端の三階櫓と接する斜面には階段状の石積が確認されている。

建物跡は最寄りの南側から約２ｍ、三階櫓東側石垣から５ｍ離れた位置にある。南北（桁行）２間、東西（梁行）１間で、東側に南北１間の東西１間の張り出しが付く。両者併せて南北総長265cm、東西総長455cmである。柱穴の大きさは30cmほどである。柱間は南北から記すと、西端の柱列において北から120cm、140cm、２列目は170cm、80cm、東端は205cmである。東西は北側柱列の西端から295cm、165cm、２列目は265cm、205cm、南列は260cmとなっている。柱穴は若干歪んだ配置となっている。

掘立柱建物跡が確認された箇所より一段低い箇所では、石列が発見された（第45～46図）。石列は西から東へ確認され、２度ほどクランク状に屈曲する。最も北側にあるものは、突出平場の南面石垣とラインが揃うことから、一段高い地形を区切る石垣で、打込ハギ乱積みと推定される。西から東へ13mほどで屈曲し南へ2.7m、また屈曲し東へ、8.4mで屈曲し南へ1.8m、東へ７ｍほど伸び、大手二ノ門跡に接続する。用いられた石は、西側を除き、割面を南に向けている。大きさは30～40cmのものが多く、１ｍを超えるものはない。西側では河原石のような丸みを帯びた石が多い。中央より西では、石が２段ほど確認されている。西端から５ｍの所から南へ伸びる石列がある。長さ３ｍほど確認されたが、調査区外に伸びるようである。用いられている石は30～40cmのものが多い。その石列から東は細かい石が東西5.5m、南北2.5mの範囲に分布している。その中に直径35～40cm、深さ12cmのピットがあり、さらにその東側は礫が散在している。

この屈曲箇所から東は石列に挟まれる形の溝がある。途切れている箇所があるものの、6.8m、5.3mほど確認できる。溝幅は40～50cmである。溝の範囲からは石の出土は少なく、石列の南北両側に石の散乱が確認された。側面が石、底面が地山の溝と考えられる。屈曲箇所の南接箇所には上下層に石が詰まったピットがあった。

この溝は大手門跡に近い東側では、石垣からの距離（１m）を保ちながら、ほぼ平行に設置されている。東端において、溝上に平瓦が６枚並べられていた。長さ60cm、幅45cmの石があった。表面には長さ8cm、幅3.5～3.8cmのノミ跡が多数確認できる。蓋として使用されたものと思われる。

石垣は最も北側にあり、長さ4.8mあり、長さ50mの石が用いられている。その南側に長さ30cm程度の石が石垣、溝に平行に5.5m並んでいる。これらの南側には方形、長方形を基調とするピットがある４基見つかっている。長さ90cmほどのものが多い。

これらの遺構は発掘調査までは、全体が瓦、礫を含む遺物包含層に覆われていたため、存在が確認されていなかったものである。

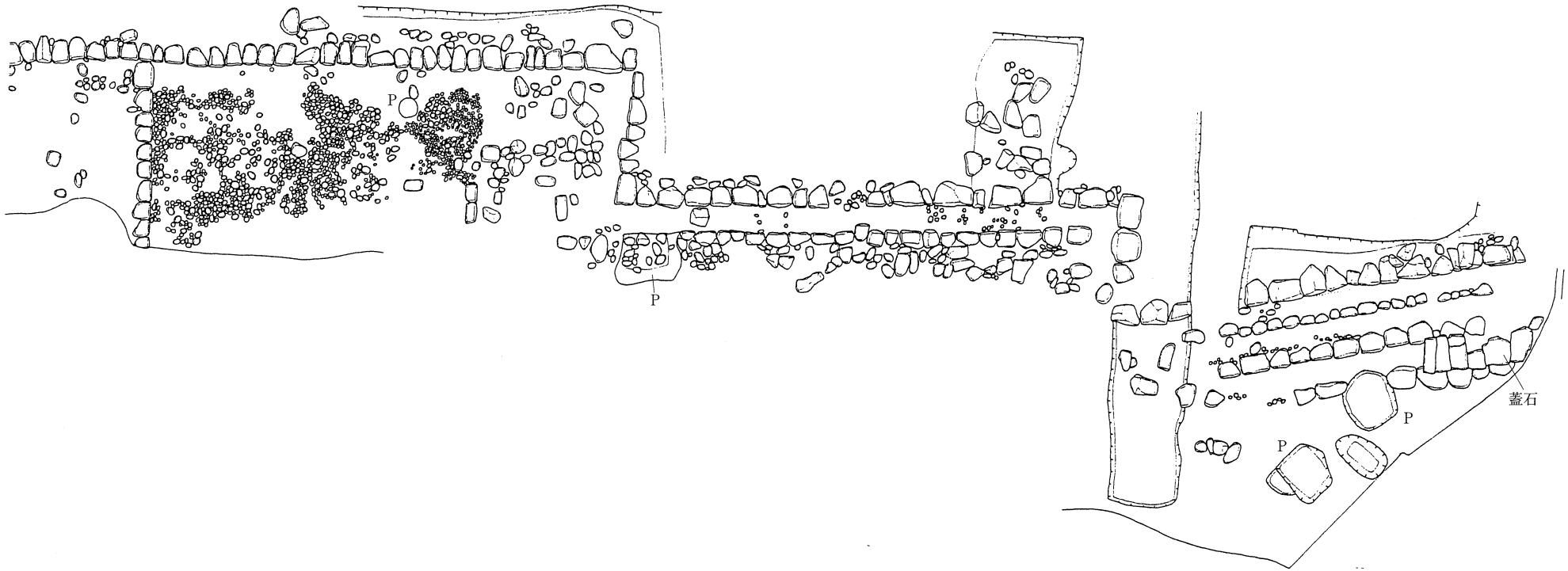
土塁部の断面Ｂ～Ｂ′においては（写真図版５－４、第47図）、堆積土中央部において溝跡と考えられるものが確認された。上部で2.8m、深さ1.85mの規模である。東西の溝跡である。写真、断面図を観察すると、59と15層、47と48層に旧表土と推定できる層があり、これらも近世白石城に先行するものと考えられる。

井戸跡

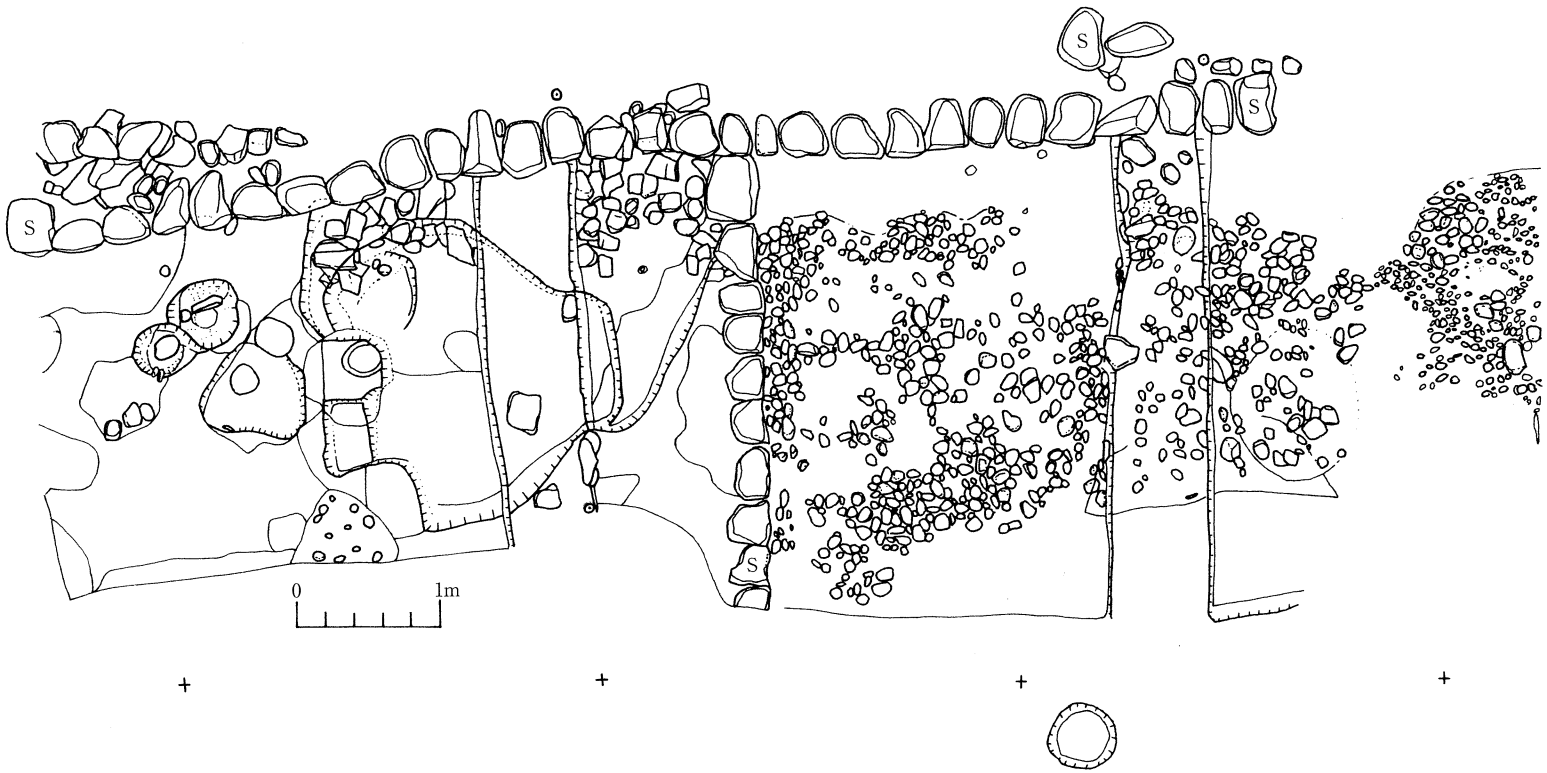
井戸跡の調査区は54㎡で、この地区だけに限れば、調査期間は平成６年12月15日～翌年１月９日の12日間である。調査区は井戸本体が発見された箇所と東側の石敷きとに分かれる（第40図）。東側の石敷きは断ち割りの結果、インスタントラーメン袋等が含まれており、新しい時期のものであることが判明した。井戸跡は深さ７ｍまで発掘を行った。当初、井戸跡は上面が倒伏した石によって覆われていた。調査は底面近くから大きい石が３つ出土し、そこで断念した。石積は地表から3.3mの深さまでである。面取りされた河原石が用いられている。その下は素掘りで、地山を掘り抜いていた。内径は地表付近で0.7～0.8m、石積下端では1.4m、底面近くで1.1～1.2mであった。発掘調査時、水は地表から2.5mの所まで溜まっていた。排水作業を行い、発掘調査を実施した。埋土からは、切石、丸石、瓦片、曲物破片（現物不明）が出土した。木製品の中には幅役10cm、長さ140cmの角材、直径約5cm、長さ270cmでやや湾曲した棒状のものがあった。井戸跡周辺からは建物跡、排水施設等は発見されなかった。湾曲した棒状の出土品から釣瓶を持った井戸と推定された。なお、調査時の所見として、井戸内の水は白く濁っており、飲料水に適さないように思えたという。

平成９年２月、本丸中央の頌徳碑の北東側に白石城内建物についての説明看板が設置された。基礎掘削において瓦片、陶磁器が出土した。

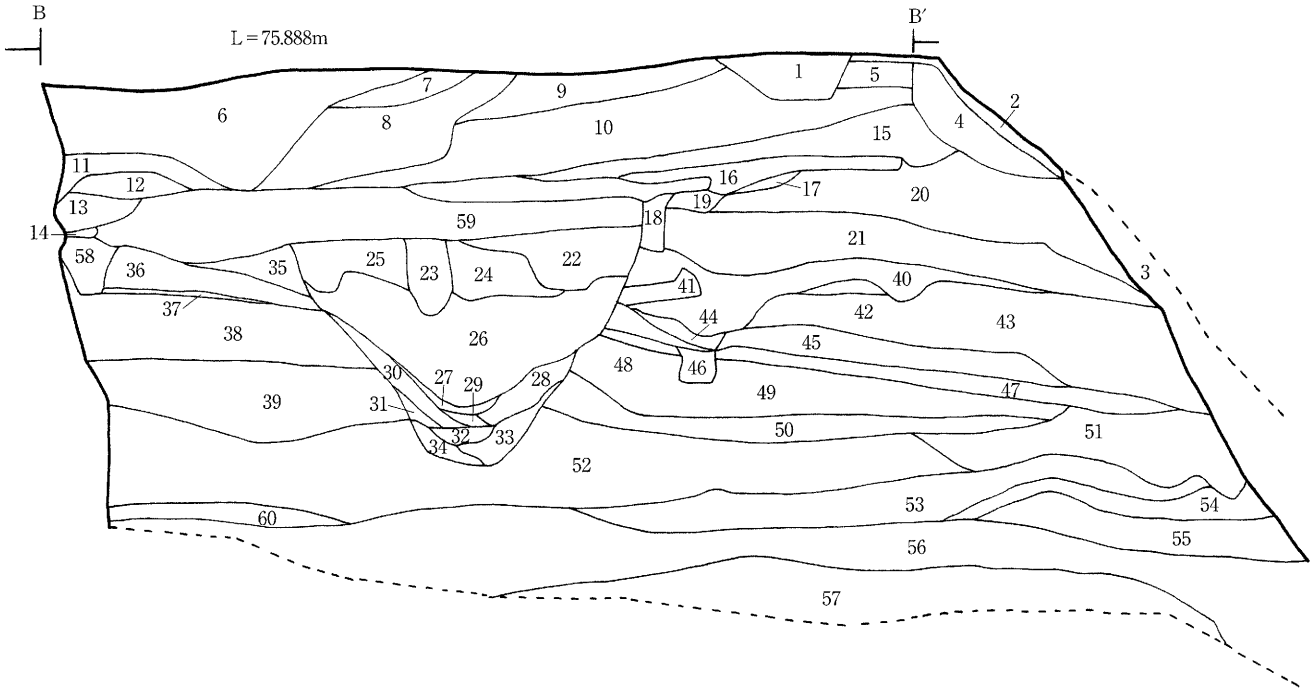
遺物は計282kgの瓦、多数の陶磁器、瓦質土器、土師質土器、中世陶器が出土した。瓦は軒丸瓦の三引両文、巴文など、軒平瓦は雪持笹、草花文などがある。隅切瓦も多い。板塀瓦、平瓦の出土が多



第45図　石列周辺図（S=1/100）



第46図　石列周辺細部（S＝1/50）



1層　7.5YR4/3 褐色シルト、ゴミ穴
2層　7.5YR2/2 黒褐色シルト、しまりなし、ボサボサ
3層　裏込石層
4層　7.5YR4/3 褐色シルト、灰と灰白ブロックを含む、しまりなし
5層　7.5YR4/3 褐色シルト、炭を若干含む
6層　7.5YR4/6 褐色砂、切石片、ガラス片を含む、しまりなし
7層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、にぶい橙をブロック状に含む
8層　7.5YR4/4 褐色砂質シルト、しまりなし、中礫含む、にぶい橙を若干含む
9層　7.5YR4/3 褐色シルト、炭を若干含む
10層　7.5YR4/6 褐色シルト、小礫を若干含む、しまりなし
11層　7.5YR4/4 褐色砂質シルト、しまりなし、中礫含む、にぶい橙を若干含む、瓦片出土
12層　7.5YR4/4 黒褐色シルト、しまりなし、中礫、炭化物あり
13層　7.5YR3/1 黒褐色シルト、しまりなし
14層　7.5YR4/4 褐色砂質シルト
15層　7.5YR4/3 褐色シルト、明褐色粒と小礫を含む、しまりあり
16層　7.5YR3/4 明褐色、少量の炭を含む、若干しまりあり
17層　7.5YR3/4 暗褐色、炭なし、しまりなし
18層　7.5YR3/3 暗褐色シルト、炭を含む
19層　7.5YR4/6 褐色シルト
20層　7.5YR5/8 明褐色シルト、中礫を多量に含む、ゴツゴツ
21層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、明褐色粒を極少量含む、炭あり
22層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、しまりなし、炭を含む
23層　7.5YR3/1 黒褐色シルト、炭化物を含む、しまりなし
24層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、明褐色粒、炭を含む、しまりなし
25層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、炭化物を含む、しまり若干あり、にぶい橙粒を若干含む
26層　7.5YR5/1 褐灰シルト、しまりなし、にぶい橙、灰白をブロック状に含む、炭化物あり
27層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、炭化物あり
28層　7.5YR3/1 黒褐色シルト、にぶい橙をブロック状に含む
29層　7.5YR5/1 褐灰砂質シルト、にぶい橙を若干含む
30層　7.5YR4/1 褐灰シルト、にぶい橙を含む、しまりあり
31層　7.5YR4/1 褐灰砂質シルト、炭化物を含む
32層　7.5YR4/1 褐灰シルト、にぶい橙を含む
33層　7.5YR5/6 明褐色シルト、炭化物を含む、ボサボサ
34層　7.5YR8/1 灰白色シルト（7.5YR5/3 にぶい褐色シルト含む）、粘性あり
35層　7.5YR7/3 にぶい橙砂質シルト、しまりあり
36層　7.5YR7/6 橙シルト（7.5YR5/6 明褐色シルトを含む）
37層　7.5YR7/3 にぶい橙砂質シルト
38層　7.5YR5/8 明褐色シルト、粘性あり、地山漸移層
39層　7.5YR5/6 明褐色シルト、しまりあり、粘性あり
40層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、明褐色粒を若干含む
41層　7.5YR4/3 褐色シルト、灰白粒を若干含む
42層　7.5YR8/2 灰白シルトを含む
43層　7.5YR5/6 明褐色シルト、中礫を多量に含む
44層　7.5YR5/6 明褐色シルトに灰白粒を含む
45層　7.5YR4/6 褐色シルト、明褐色中礫を多く含む
46層　7.5YR4/4 褐色砂質シルト、明灰白褐色粒を含む
47層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、しまりあり、旧表土？
48層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、旧表土？
49層　7.5YR5/6 明褐色シルト、しまりあり、粘性あり、地山漸移層
50層　7.5YR7/8 黄橙色シルト、若干サラサラ、地山
51層　7.5YR4/6 褐色シルト、粘性あり、若干明褐色粒を含む
52層　7.5YR6/8 橙色シルト、50層よりしまりあり
53層　7.5YR8/3 浅黄橙色、ガリガリ、地山
54層　7.5YR7/6 橙色シルト、粘性あり
55層　7.5YR5/8 明褐色シルト、粘性あり、灰色のガリガリを含む
56層　7.5YR5/6 明褐色シルト（7.5YR8/3 浅黄橙色を含む）、粘性あり、地山
57層　7.5YR6/3 にぶい褐色砂質シルト、ガリガリ、7.5YR4/1 褐灰色ブロックを含む、岩盤
58層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、炭化物あり
59層　7.5YR3/3 暗褐色シルト、明褐色小礫を少量含む、炭を若干含む
60層　7.5YR5/4 にぶい褐色シルト、炭化物あり

第47図　土塁セクション図（S＝1/60）

い。ヘラ描き、刻印瓦も発見されている。軒桟瓦は出土していない。動物の足と推定される土人形もある。井戸跡から木製品が出土したとされるが、現物不明である。和釘２本、太棒状鉄器等、石臼が出土している。銭貨は２点出土している。また、近代以降の遺物として、土塁土留部から蒸しカマド片が１箱分出土しているが、接合は行っていない。地元の人の話をもとに、以前使用したという蒸しカマドの略図を作成した（第98図）。

第４節　大手一ノ門跡、二ノ門跡周辺

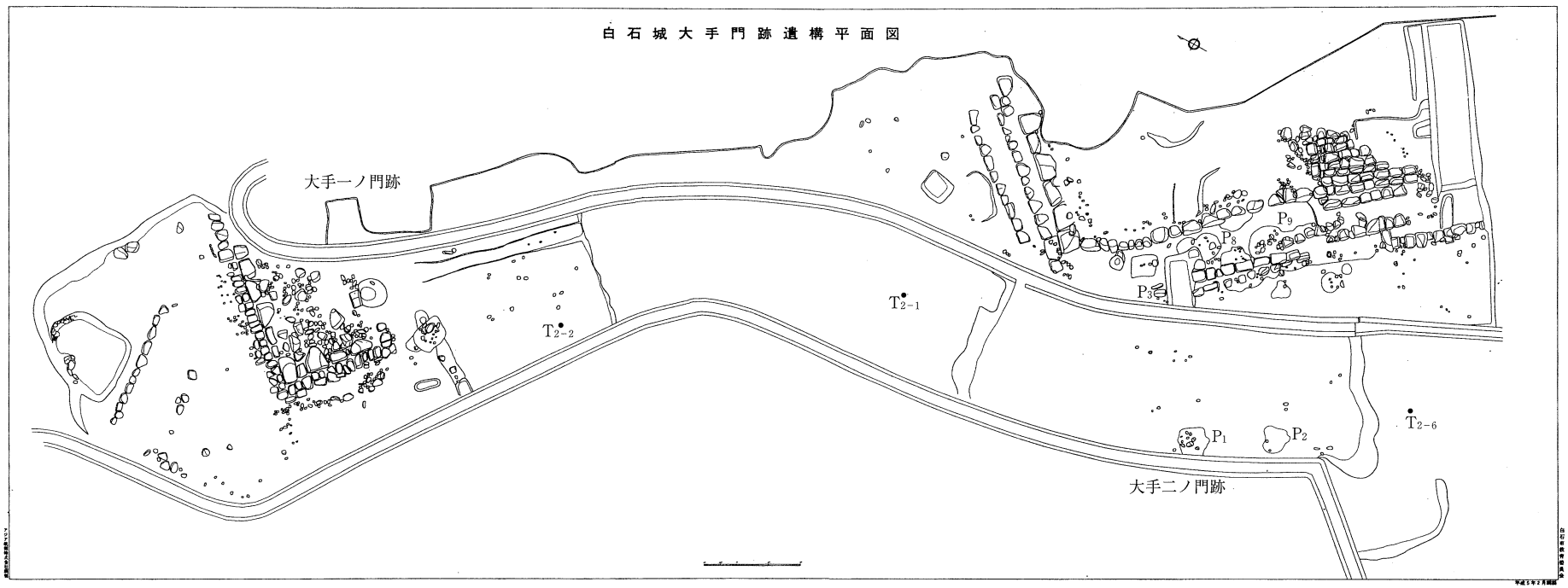
大手門跡は大手一ノ門跡、大手二ノ門跡、枡形部から構成されている（第48図ほか）。門は北西を向いている。白石高校通用口方向から城に登ると、本丸外郭東側石垣沿いに進むことになる。本丸北辺石垣に到達すると、平坦な場所となるが、その左手が大手一ノ門跡である。この門と二ノ門跡でＳ字状の形となるように配置されている。一ノ門跡は発掘調査以前は、完全にアスファルト道路下となっており（写真図版41－1～２）、それまで位置の特定ができていなかった。

一ノ門跡は東辺から伸びてきた石垣を南へ直角に折り曲げ、4.6mの西面石垣を配置し、さらに直角に折れ、南面石垣が2.6mほどある。そして直角に北方向に折れている。北方向は残りが悪いが3.8mで、一ノ門と二ノ門間の石垣と接続すると考えられる。一ノ門は、本丸方向に向かって右手は長方形の石垣が築かれ、コ字形になっていたことを示している。石垣は１段しか残っておらず、残存状況は不良であった。石は長さ50～100cm、奥行きは50cm程度で、平坦な面が表になるように配置されていた。石垣の背後は細かい石が多数、発見された。石垣南面と本丸北辺の石垣間距離は3.3～3.5mとなり、二ノ門方向に坂を上がると狭くなる。一ノ門跡裏から二ノ門跡の左手上に石が並んでいる箇所があり、途切れている箇所もあるが長さ11mになる。長さ50cmほどの石も用いられているが小さい石が多い。本丸外郭東側石垣との距離は北西端で２ｍ、南東端では3.4mとなっている。この石列は直線的ではないものの、二ノ門跡に向かって左手に接続するものと考えられる。

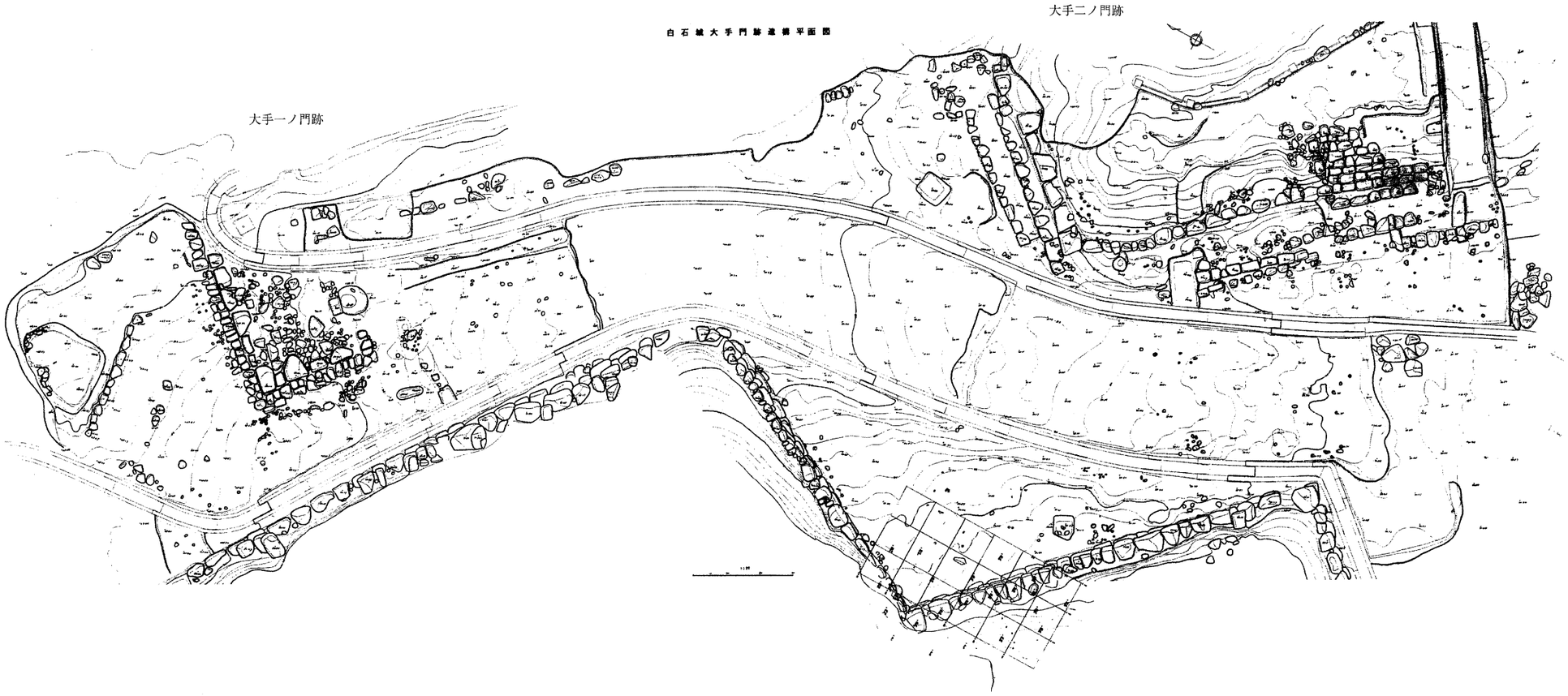
石垣の西、南、東面には、長さ40cm以下の長方形、方形を呈する扁平な小石が帯状に敷き詰められていた。この帯状敷石は西面で６ｍ、南面に3.9m、残りの悪い東面では0.8m確認された。また、一ノ門跡の石垣北隅に向かって南西から北東へ直線状の石列がある。長さは3.9mあり、用いられている石は40cmくらいである。一ノ門跡石垣南西隅から石列南西隅までは5.5m、同北西隅から石列東北隅までは3.2mの距離である。

また、石垣南面よりも１ｍほど南に30cm以下の石が北西から南東方向に並んでいる。長さ2.8mほどである。この大手一ノ門跡に先行する遺構の一部が残っていた可能性がある。

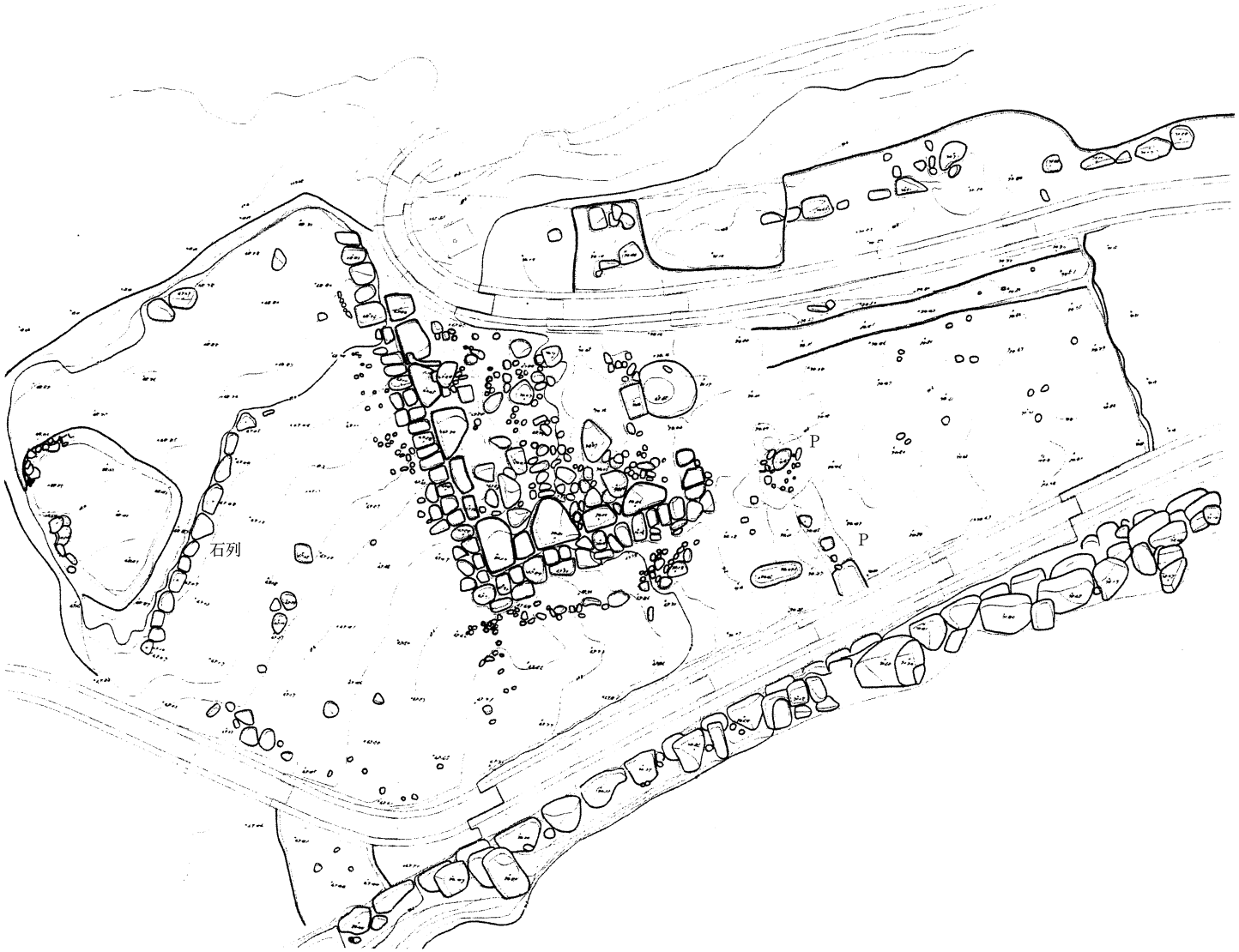
一ノ門跡石垣の南東隅から直線で1.8mの位置に門跡柱穴が２つ発見されている。発掘調査当初は既存のアスファルト道路の一部を掘削して調査を行い、後に全面的にアスファルトを除去して調査を行った。門の基礎は一部が現代の排水溝下となって発見された。柱穴の中央で発見された石同士の距離を測ると2.4mとなる。柱穴掘り込みは２段ほどになり、長軸1.7～2m、短軸で0.7～１ｍで、深さは0.6mである。柱穴１も２時期の変遷があり、また左側には、古い柱穴があることから、遺構が切り合っている。柱穴２は、当初、小礫の集石、小礫が詰まった柱穴、平らな石を据えた柱穴への変遷がある。



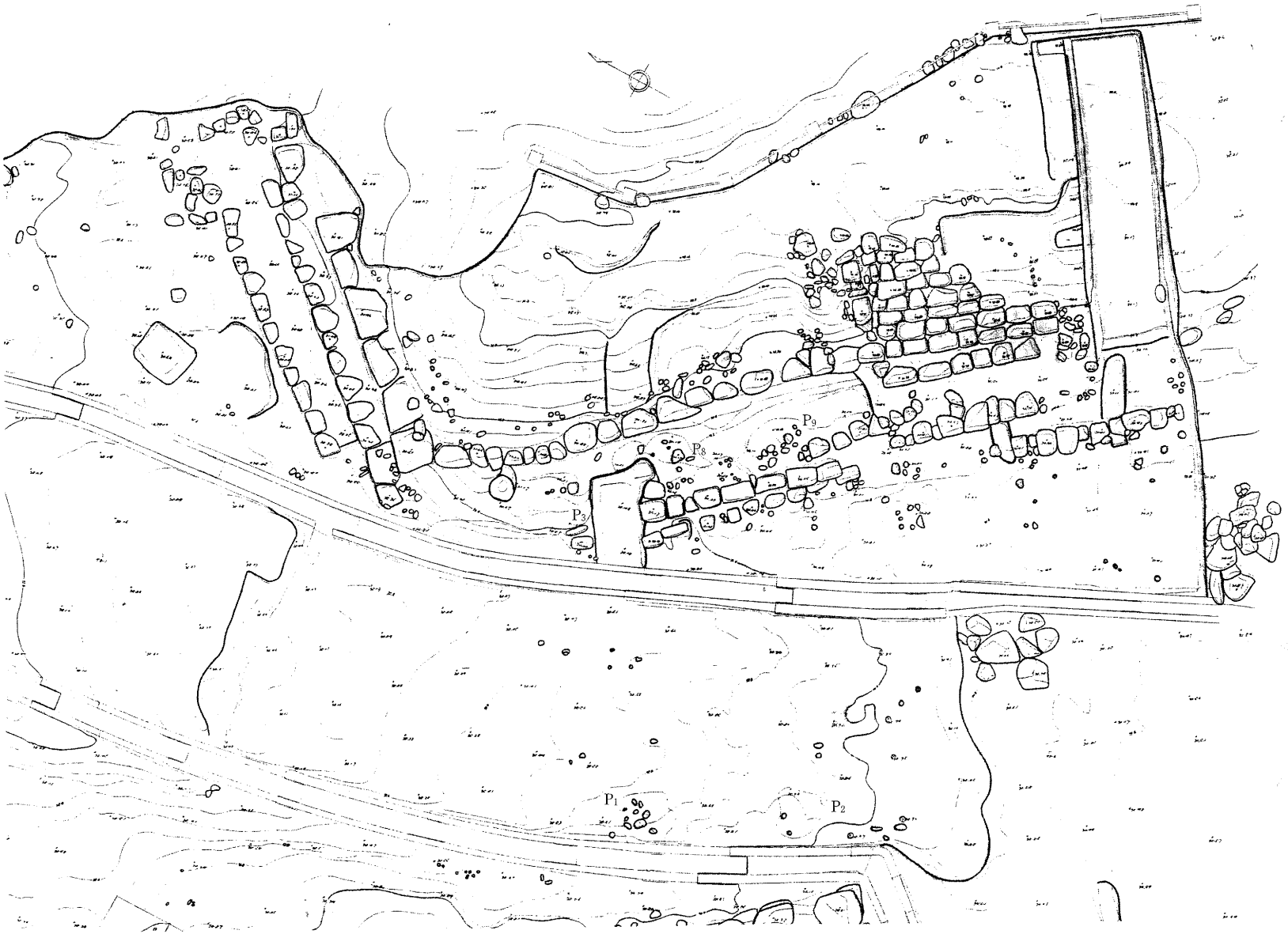
第48図　大手門跡平面測量図（S＝1/200）



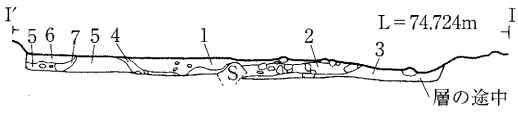
第49図　大手門跡周辺測量図（S＝1/150）



第50図　大手一ノ門跡詳細図（S=1/100）

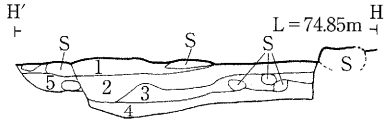


第51図　大手二ノ門跡詳細図（S=1/100）



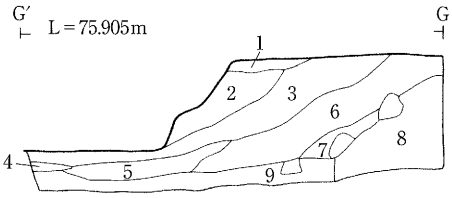
本丸内土塁南№8のベルト東壁セクション（S＝1/60）

1層　7.5YR4/4 褐色シルト、小礫（2～5cm大）含む、2.5Y5/6 黄褐色シルトのブロックを含む、火災後の整地層
2層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、礫（4cmないし5cm～20cm大）含む、瓦あり、火災時の堆積層、炭化物を多量に含む
3層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、礫（4cmないし5cm～15cm大）あり
4層　7.5YR4/1 褐灰色砂質シルト、酸化鉄若干あり
5層　7.5YR4/4 褐色シルト、しまりあり
6層　7.5YR5/8 明褐色シルト、礫あり
7層　7.5YR3/1 黒褐色シルト、礫の抜き取り痕？



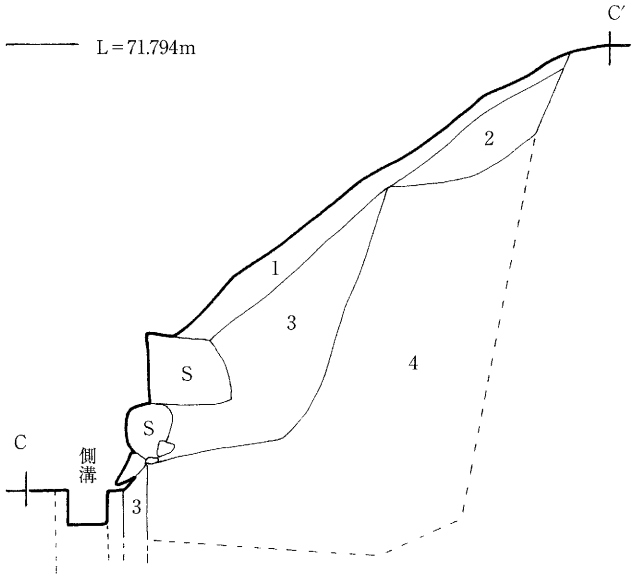
本丸内土塁（突出平場）
南下0.6ピットと0.7ピット間のベルト東壁セクション（S＝1/60）

1層　7.5YR4/1 褐灰色砂質シルト、酸化鉄混じり、割石大きめのもの多い、瓦が若干含まれる
2層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、炭化物極少量あり、礫（6～7cm大）あり
3層　7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト、礫（10～15cm大）、瓦多い、炭化物含む、乳白石ブロックを若干含む（火災時の土塁部からの崩落土？）
4層　7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト、炭化物若干あり、瓦含む、割石、礫（4～5cm大）を含む
5層　7.5YR3/3 暗褐色シルト、礫（5～10cm大）を含む



本丸内土塁（突出平場）東壁セクション図（S＝1/60）

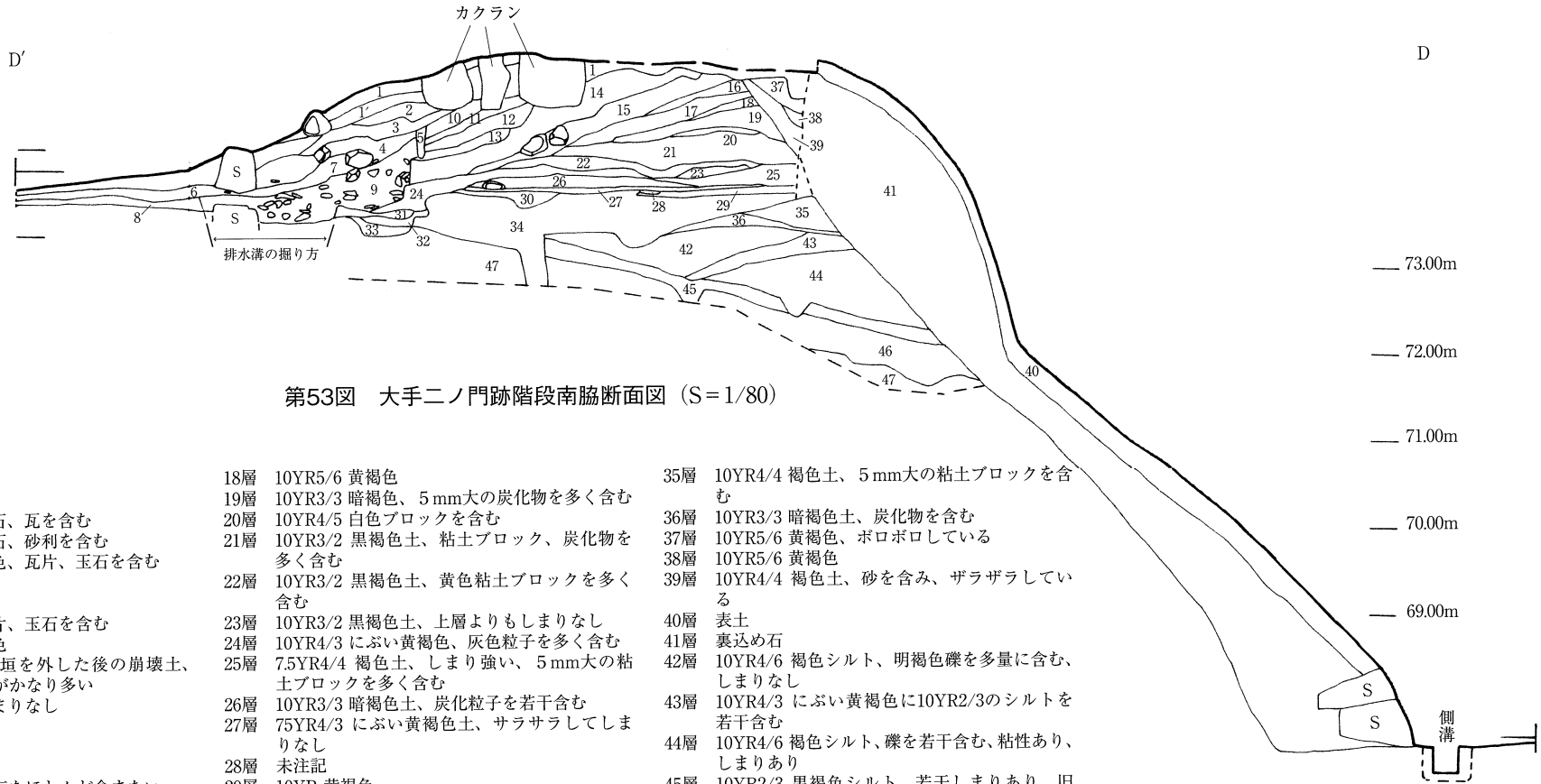
1層　7.5YR3/2 黒褐色砂、小石まじり
2層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、小礫（4～5cm大）混じり、炭化物多い、木根あり、しまりあり
3層　7.5YR3/3 暗褐色シルト、小礫（2～3cm大）混じり、炭化物若干あり、しまりあり
4層　10YR6/8 明褐色シルト、粘性あり
5層　7.5YR4/1 褐灰色砂質シルト、酸化鉄まじり、瓦と小礫（4～5cm大）多い
6層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、炭化物極少量あり、小礫（2～5cm大）あり
7層　7.5YR3/3 暗褐色シルト、炭化物極少量あり、角石あり、しまりあり
8層　7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト、角石、丸石を多量に含む、瓦も多量にあり、しまりなし（崩壊土）
9層　7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト小礫若干あり、角石あり



大手一ノ門～二ノ門道の北側斜面セクション図（S＝1/60）

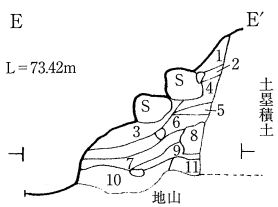
1層　表土、7.5YR3/2 黒褐色シルト、しまりなし、ボサボサ、草と木の根が多く混入
2層　7.5YR5/6 明褐色シルト、地山漸移層、しまりなし、木根含む、岩盤ブロックを含まない
3層　5cm～10cm、20cm～25cm大の裏込石、7.5YR3/2 黒褐色シルト土を含む
4層　7.5YR5/8 明褐色シルト、粘性あり、しまりあり、地山、部分的に岩盤ブロックを含む

第52図　土塁部セクション図



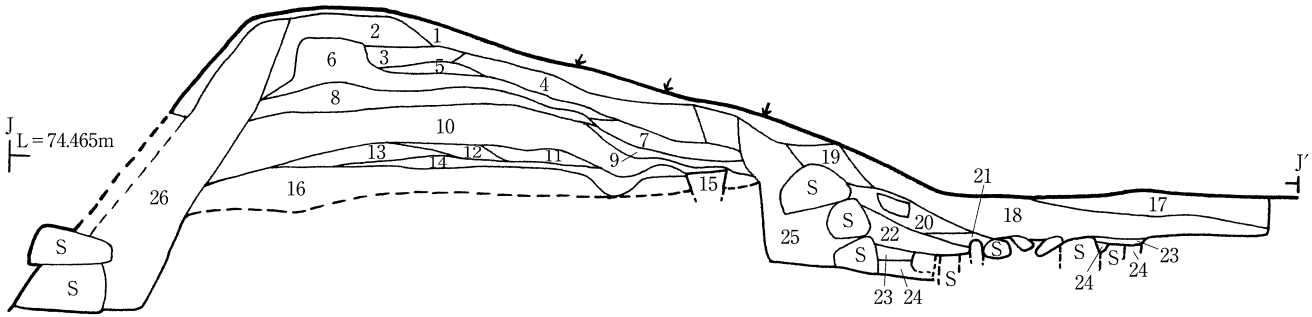
第53図　大手二ノ門跡階段南脇断面図（S＝1/80）

1層　表土
1′層　表土
2層　10YR3/3 暗褐色、玉石、瓦を含む
3層　10YR3/3 暗褐色、玉石、砂利を含む
4層　10YR5/4 にぶい黄褐色、瓦片、玉石を含む
5層　カクラン
6層　10YR3/3 暗褐色
7層　10YR3/3 暗褐色、瓦片、玉石を含む
8層　10YR4/3 にぶい黄褐色
9層　10YR3/3 暗褐色、石垣を外した後の崩壊土、瓦片、10cm大の玉石がかなり多い
10層　10YR3/3 暗褐色、しまりなし
11層　11YR4/4 褐色土
12層　10YR6/6 明黄褐色
13層　10YR4/4 褐色土
14層　10YR5/8 黄褐色土、石をほとんど含まない
15層　10YR5/6 黄褐色土、40～20cm大の石（泥かぶり石）を多量に混入
16層　10YR5/6 黄褐色土、瓦は含まず、下層より明るい
17層　10YR5/4 にぶい黄褐色５cmほどの岩盤石を含む、下層よりもやや明るい
18層　10YR5/6 黄褐色
19層　10YR3/3 暗褐色、５mm大の炭化物を多く含む
20層　10YR4/5 白色ブロックを含む
21層　10YR3/2 黒褐色土、粘土ブロック、炭化物を多く含む
22層　10YR3/2 黒褐色土、黄色粘土ブロックを多く含む
23層　10YR3/2 黒褐色土、上層よりもしまりなし
24層　10YR4/3 にぶい黄褐色、灰色粒子を多く含む
25層　7.5YR4/4 褐色土、しまり強い、５mm大の粘土ブロックを多く含む
26層　10YR3/3 暗褐色土、炭化粒子を若干含む
27層　75YR4/3 にぶい黄褐色土、サラサラしてしまりなし
28層　未注記
29層　10YR 黄褐色
30層　10YR3/2 黒褐色、炭化物を多量に含む
31層　10YR4/4 褐色土、かなりしまり強い
32層　10YR3/3～3/4 暗褐色土
33層　10YR3/3 暗褐色土、古い溝の埋土である
34層　10YR3/3 暗褐色土、灰粘土、粘土粒子を多く含む、しまりはつよい
35層　10YR4/4 褐色土、５mm大の粘土ブロックを含む
36層　10YR3/3 暗褐色土、炭化物を含む
37層　10YR5/6 黄褐色、ボロボロしている
38層　10YR5/6 黄褐色
39層　10YR4/4 褐色土、砂を含み、ザラザラしている
40層　表土
41層　裏込め石
42層　10YR4/6 褐色シルト、明褐色礫を多量に含む、しまりなし
43層　10YR4/3 にぶい黄褐色に10YR2/3のシルトを若干含む
44層　10YR4/6 褐色シルト、礫を若干含む、粘性あり、しまりあり
45層　10YR2/3 黒褐色シルト、若干しまりあり、旧表土？
46層　地山、10YR5/6 黄褐色シルト、粘性あり、岩盤の礫が若干あり
47層　岩盤

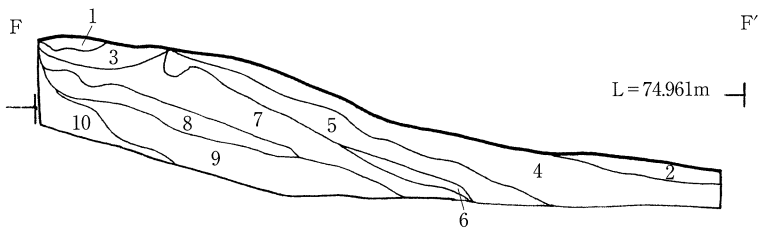


第54図　大手二ノ門跡階段脇断面図（S＝1/60）

1層　7.5YR4/4 褐色砂質シルト、小礫含む、しまりなし、崩壊土
2層　7.5YR4/6 褐色シルト、小礫含む
3層　7.5YR5/6 明褐色シルト、粘性あり
4層　7.5YR4/2 灰褐色シルト、粘性あり、炭化物あり小礫を若干含む
5層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、粘性若干あり、炭化物を若干含む
6層　7.5YR5/6 明褐色シルトに５層のシルトを含む、炭化物を若干含む、粘性あり
7層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、若干砂質シルト、明褐色粒を若干含む、炭化物あり
8層　7.5YR4/2 灰褐色シルト、炭化物、酸化粘土を若干含む
9層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、炭化物を含む、古い時期の溝堆積土
10層　7.5YR3/3 暗褐色シルト、粘性あり、明褐色粒、炭化物を含む

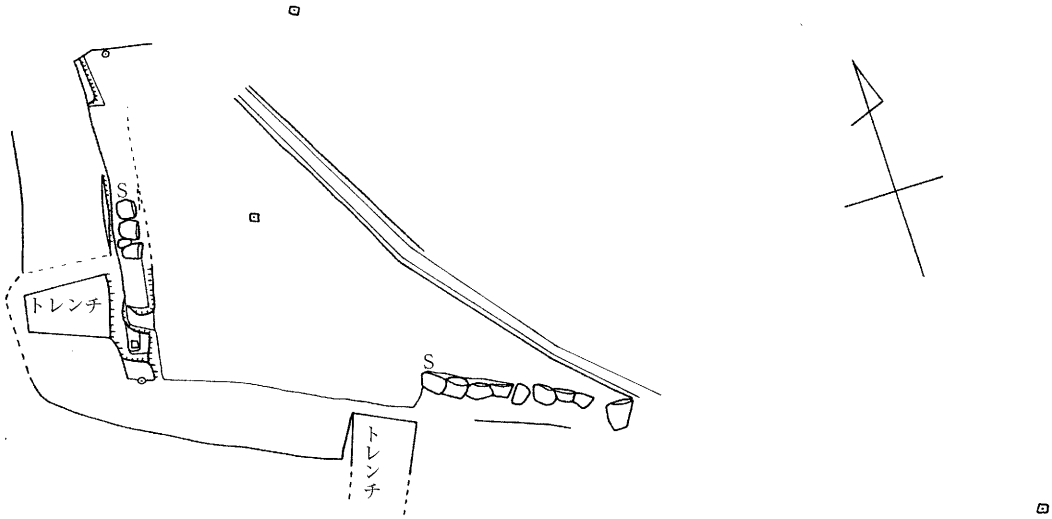


1層　7.5YR4/4 褐色シルト、しまりなし、木根、ゴミ等を含む、表土
2層　1層に7.5YR5/8 明褐色シルトをブロック状に多量に含む、しまりなし、中～大礫を含む
3層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、しまりあり、瓦、中礫（10cm程）を若干含む、炭化物を若干含む、7.5YR5/8 明褐色を若干含む、粘性あり
4層　7.5YR3/3 暗褐色シルト、若干しまり、粘性あり、中礫、炭化物を含む
5層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、しまりあり、炭化物、木根を含む
6層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、7.5YR7/4 にぶい橙色シルトをブロック状に含む、小礫を若干含む、炭化物あり
7層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、7.5YR5/8 明褐色をブロック状に若干含む、炭化物あり
8層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、7.5YR5/8 明褐色シルトをブロック状に多量含む、炭化物が若干あり
9層　7.5YR3/1 黒褐色シルト、炭化物を若干含む、木根あり、7.5YR5/8 明褐色を極少量含む
10層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、7.5YR5/8 明褐色をブロック状に若干含む、炭化物を多量に含む、大礫（25cm大）を若干含む
11層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、炭化物、瓦片あり、中礫（10cm大）を含む
12層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、炭化物を多量に含む、11層よりしまりなし、7.5YR7/4 にぶい橙をブロック状に含む
13層　7.5YR3/3 黒褐色シルト、にぶい橙をブロック状に多量に含む、小礫を含む、しまりなし、炭化物を若干含む
14層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、しまりなし、にぶい橙を若干含む、炭化物多い
15層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、7.5YR5/8 明褐色、炭化物を含む、ピット埋土
16層　7.5YR5/8 明褐色シルト、粘性あり、地山
17層　7.5YR3/3 砂質シルト、にぶい橙をブロック状に極少量含む、小礫若干あり、ゴミ木根あり、しまりなし
18層　7.5YR3/4 暗褐色シルト、小礫、中礫、瓦片を若干含む、しまりなし、木根あり
19層　7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト、にぶい橙色をブロックで含む、ゴミ、瓦片あり、しまりなし
20層　7.5YR4/3 褐色砂質シルト、しまりなし、大礫（20～25cm）を含む
21層　7.5YR4/3 褐色シルト、にぶい橙をブロック状に多量含む
22層　7.5YR4/4 褐色シルト、小礫（3～5cm大）を多量に含む、にぶい橙を若干含む
23層　7.5YR4/6 褐色砂質シルト、にぶい橙を多量に含む
24層　7.5YR3/2 黒褐色シルト、炭化物、小礫を若干含む、大礫も若干あり
25層　7.5YR4/4 褐色シルト、裏込め石（10cm～15cm大）
26層　7.5YR4/4 褐色シルト、裏込め石（10cm～25cm大）

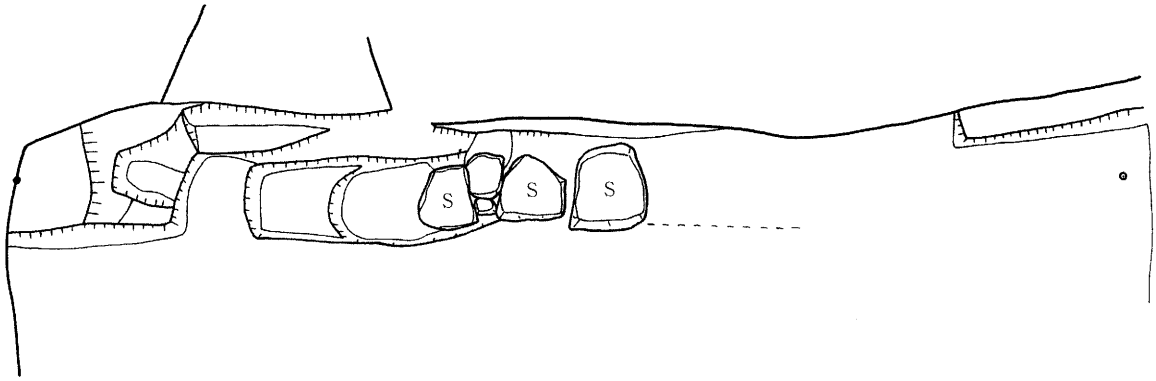


1層　7.5YR2/2 黒褐色シルト（7.5YR8/1 灰白ブロックを含む）、7.5YR7/8 黄橙小礫粒を含む、炭化物あり、中礫あり、客土？
2層　7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト、炭化物、黄橙小礫粒を含む、瓦あり、客土？
3層　7.5YR7/3 褐色砂質シルト、炭化物若干あり、中礫あり、黄橙をブロック状に含む
4層　7.5YR4/4 褐色砂質シルト、炭化物若干あり
5層　75YR4/6 褐色砂質シルト、中～大礫、切石片を含む、炭化物あり
6層　7.5YR5/3 にぶい褐色シルト、粘性あり、中礫あり
7層　7.5YR4/3 褐色シルト、黄橙土（粘性あり）を多量に含む、瓦あり、中礫、切石片あり
8層　7.5YR4/4 褐色砂質シルト、中～大礫を多量に含む、炭化物、瓦あり
9層　7.5YR4/4 褐色砂質シルト、7.5YR8/3 浅黄橙土をブロック状に含む、小中大礫を含む
10層　7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト、中、大礫を若干含む

第56図　大手門桝形部南土塁斜面西側セクション（S＝1/60）



第57図　桝形部平面図（S＝1/200）



第58図　桝形部遺構図（S＝1/60）

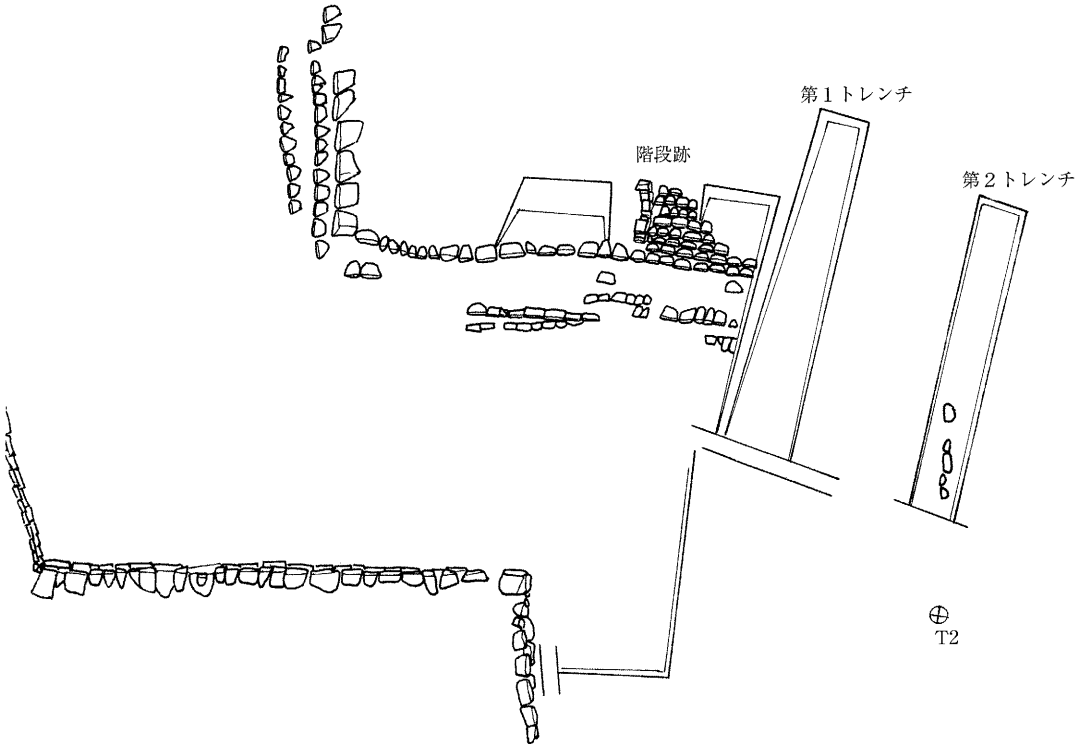
左右の柱穴とも３時期以上の変遷が確認された。柱穴１、２間には幅50cm溝の中央に23～24cmの角石が据えられていた。その下に根石が左右から押し込む形で入れられ、角石を支えるようになっていた。溝の手前には長さ85cm、幅35cmの細長いピットがある。

大手二ノ門跡周辺

大手二ノ門跡周辺は、二ノ門跡と桝形部からなる。

桝形部は一ノ門跡、二ノ門跡の間に位置し、クランク状を呈している。北東側と南西側に分け記述したい。

北東側は一ノ門跡裏から、かろうじて繋がる石列が土塁上にある。それが大手二ノ門跡の北東隅に残存する石垣に接続し、南へ屈曲し石垣は大手二ノ門跡正面となる。正面の石垣は１段分のみ６ｍの長さが残っていた。奥行きが60cm以上の横長に据えられた石が使用されていた。その石垣の手前つまり西側には２列の石列があり、西から4.4m、5.8m確認できる。使用されている石は30～40cmのものが多く、石垣の石よりも小さい。テラス状となっており、上段で50cm、下段で70cmほどの幅となっ



第59図　大手二ノ門跡トレンチ配置

ている。この北東隅の石垣屈曲部からから大手一ノ門跡南面石垣西隅までの距離は24mである。ここで桝形部は西へ90度開いた形となっている。

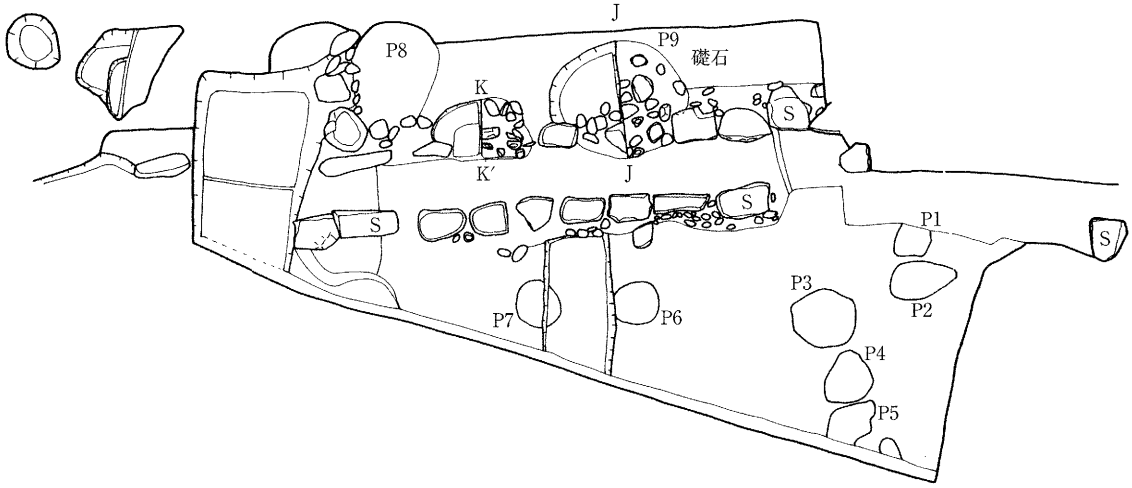
断面図Ｃ－Ｃ′では、厚さ60～90cmほど裏込め石が確認されている。石垣の石は奥行き70cmほどである。

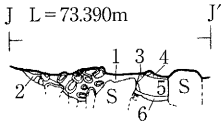
南西側は、北西部と比較すると、石垣の残存状況が良好であった。本丸北辺の北東隅は石が既に失われていたものの、それ以外は、２段から３段ほどの石積みが確認された。打込ハギ布積みである。本丸北辺東北隅から南へは10.8m、屈曲があり、今度は南東へ12.7mで大手二ノ門跡裏の石垣隅となる。さらにここで屈曲し、4.5mほど南へ続いている。そして、本丸内土塁部の石垣と接続する。この箇所において、桝形部は北東方向へ105度開いた形となっている。桝形部は両者とも、桝形の角、つまり奥ほど、標高が高くなっている。

大手二ノ門跡は桝形部の東に接続し、門跡が確認されている。通路を挟み北東側と南西側に分けて、順に記述する。

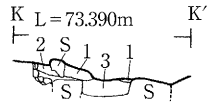
一ノ門跡裏の北西方向から伸びる石垣は大手二ノ門跡で南へ屈曲し、８ｍ程伸び、階段跡に接する。階段跡は3.3mの幅、奥行きは３ｍほどで９段分確認された。下３段ほどは７つほどの石があり、保存は良好であるが、上段ほど、残存状況が悪く、石が３つくらいしか残っていない。階段上には多量の瓦が、まるで崩れ落ちたような状態で発見された。

階段跡の前、南西側には石列、柱穴があった。石列は、溝の両側に石があるもので、本丸内土塁部にあったような溝と同様である。溝は新旧２時期確認されたが、残された図面等では、どれが新しく、

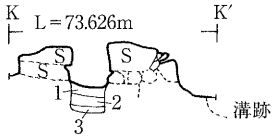




二ノ門跡及び溝跡断面図（西面）
1層　7.5YR5/3 にぶい褐色砂質シルト、炭化物及び焼土を含む、しまりはあまりない
2層　7.5YR4/3 褐色シルト、炭化物を若干含む、しまりあり
3層　7.5YR5/6 明褐色シルト、しまり及び粘性あり（火災後の整地層？）
4層　7.5YR5/2 灰褐色砂、炭化物、焼土を含む、遺物あり
5層　7.5YR5/2 灰褐色砂、遺物あり、溝の堆積土
6層　7.5YR5/2 灰褐色砂、炭化物が若干含まれる、粘性あり、遺物あり



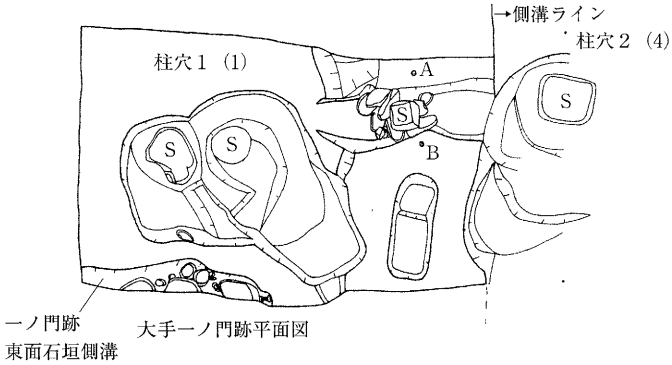
石抜取痕及び溝断面図（西面）
1層　7.5YR4/2 灰褐色シルトに灰色ブロック、焼土を含む
2層　7.5YR3/4 暗褐色シルト
3層　7.5YR5/2 灰褐色砂、炭化物を若干含む、遺物あり（古銭、鉄製品）、溝の堆積土

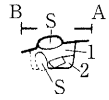


大手二ノ門跡新溝跡断面図（このセクションポイントは第26図に対応）
1層　7.5YR5/2 灰褐色砂、溝の堆積土、しまりなし
2層　7.5YR3/3 暗褐色シルト、溝の堆積土、粘性、しまりあり、炭化物粒を含む
3層　7.5YR3/3 暗褐色シルト、多量の炭化物を含む（火災の堆積）、炭化物の上に溝を構築（火災後）

ピット1　7.5YR4/6 褐色シルト、炭化物、瓦片、小礫を含む、塀の壁土ブロック（7.5YR8/2 灰白色）を少量含む
ピット2　7.5YR4/4 褐色砂、小礫を若干含む、地山ブロック（7.5YR5/6 明褐色シルト、堅くしまっている）を含む
ピット3　7.5YR4/3 褐色砂質シルト、小礫、切石を含む、炭化物を若干含む、地山ブロック（7.5YR5/6 明褐色シルト）を含む
ピット4　7.5YR4/6 褐色砂質シルト、小礫、瓦片を含む、地山ブロック（2.5Y5/6 明赤褐色シルト）を含む
ピット5　7.2YR4/3 褐色砂質シルト、炭化物を極少量含む、小礫、根を含む
ピット6　7.5YR4/3 褐色砂質シルト、小礫、地山ブロック（7.5YR5/6 明褐色シルト、2.5Y5/6 明赤褐色シルト）を含む、炭化物あり
ピット7　7.5YR4/4 褐色砂質シルト、小礫、中礫を含む、根の混入あり
ピット8　7.5YR3/3 暗褐色シルト、炭化物を底面まで含む、埋土から古銭出土、しまりあり、焼土粒極少量あり

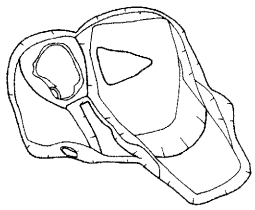
第60図　大手二ノ門跡遺構配置図（S＝1/60）



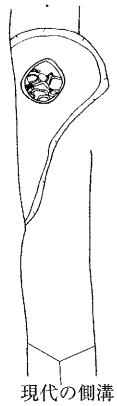


大手一ノ門跡礎石脇
溝断面図

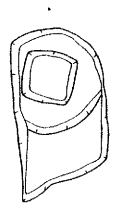
１層　10YR4/4 褐色土、砂混じりでザラザラしている、炭化物、焼土は含まない
２層　10YR4/4 褐色土、地山ブロックが混入、炭化物、焼土は含まない



柱穴１（2）



現代の側溝ライン
柱穴２（2）



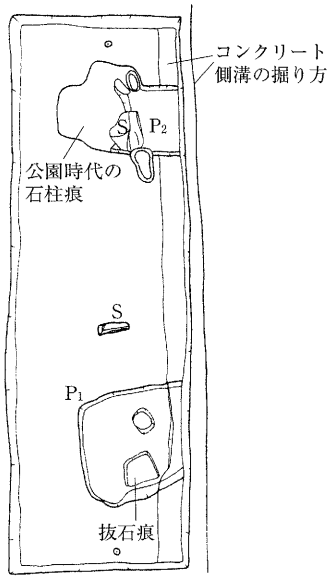
柱穴２（3）

柱穴２（1）

古いのかがはっきりせず、詳しい記述はできない。第60図には階段跡の西側に位置する石列、ピットを図示した。石列間は40cmほどである。礎石の根石と考えられる長軸１m、短軸0.8mのピットも確認されている。石列に平行、直行する配置のピットも見つかっている。Ｐ３、８、９が大手二ノ門跡礎石になると考えられる。

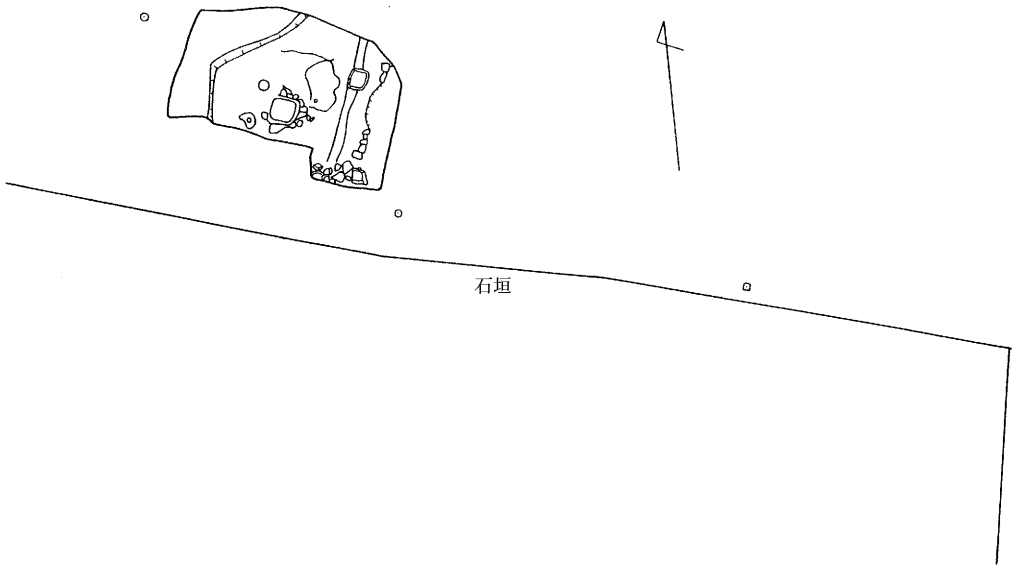
石列は北西から南東へ７m分確認された。これにほぼ平行な石列が第１トレンチ内外で３m分確認された。これらは幅30cmの間を挟んで一つ溝跡を構成するものである。さらに第２トレンチでは北東から南西への４m分の石列が確認されている。この２つの石列は、第２トレンチ付近で屈曲し、本丸内部御殿跡へ繋がる通路に接続する可能性がある。屈曲箇所が白石城本丸屋形図（付図７）と一致する。

第１トレンチでは断面図Ｄ－Ｄ′が作成されている。現コンクリート側溝上端から大手二ノ門跡裏の平坦面までは５mの

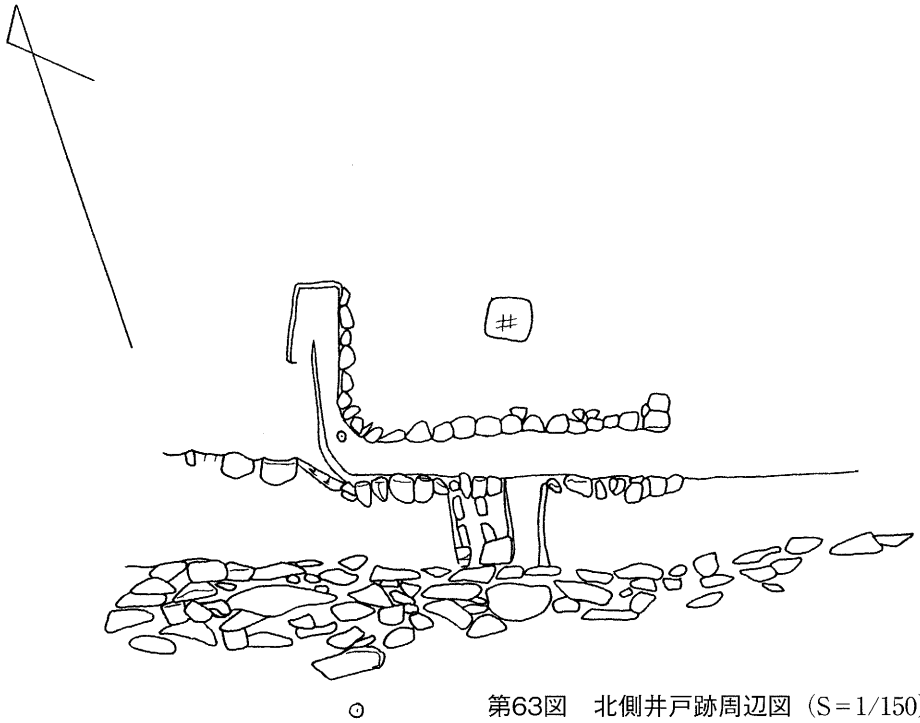


大手二ノ門跡平面図

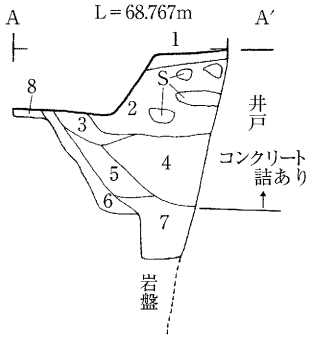
第61図　大手一ノ門跡、二ノ門跡図（S＝1/60）



第62図　北側井戸跡全体図（S＝1/300）

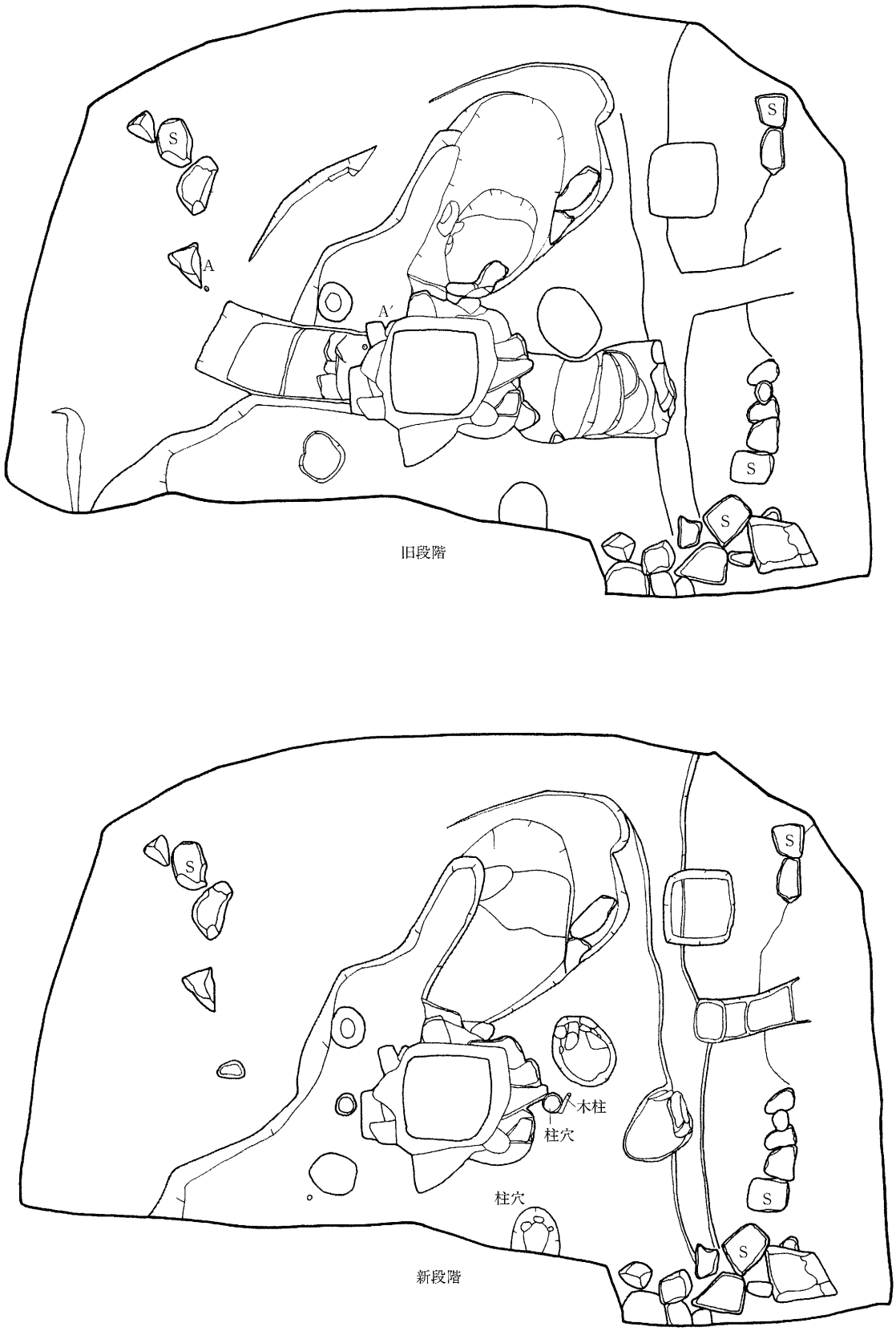


第63図　北側井戸跡周辺図（S＝1/150）



1層　7.5YR4/4 褐色シルト、根、礫多い
2層　7.5YR4/3 褐色シルト、酸化鉄、割石、大中礫多い
3層　7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト、しまりなし
4層　7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト、礫多い、礫間にねっとりシルト
5層　7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト、黄褐色ブロック（凝灰岩ブロック）を若干含む
6層　7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト、しまりなし
7層　7.5YR4/1 灰色シルト、（グライ化層）、礫あり
8層　7.5YR4/6 褐色シルト、酸化鉄ブロックを含む

第64図　北側井戸跡断面図北壁（S＝1/60）



第65図　北側井戸跡発掘区（S＝1/60）

比高がある。裏込め石は厚い箇所で１ｍ、薄い箇所では25cmである。断面図作成時には土層は、積み手の違いから、いくつかのグループに分類された。１つめは表土、２つめは２～４、７、６層、３つめは37～39層、４つめは９、11、14を上面とし、15、17、18、14層を下面とするもの、５つめは９層のみ、６つめは19、21、22、24、31層を上面、29、27、33層を下面とするもの、７つめは34、47層を上面とするものである（写真６－1、58－８）。

南西側には門の基礎跡が確認されたが、コンクリート側溝沿いに発見され、遺構の残存状況は良好ではなかった。第61図下のＰ１が基礎跡の長さ90cm、幅80cm以上のピットと考えられる。抜石痕と底面には小ピットがあった。抜石痕箇所では深さ26cmであった。Ｐ２は後世の撹乱があったが、幅55cm、深さ20cmほであった。Ｐ１とＰ３間距離は5.5mである。この箇所と本丸内土塁部の石垣南面の距離は６ｍで、桝形部南西奥と本丸内土塁部間では5.2ほどである。

断面図Ｊ－Ｊ′は土塁を横断する形で設定されている。本丸北辺側では裏込め石が30～45cm確認されている。本丸内土塁部側では15～50cmほどとなっている。裏込め石の掘り方壁面同士では約4.5mの幅がある。

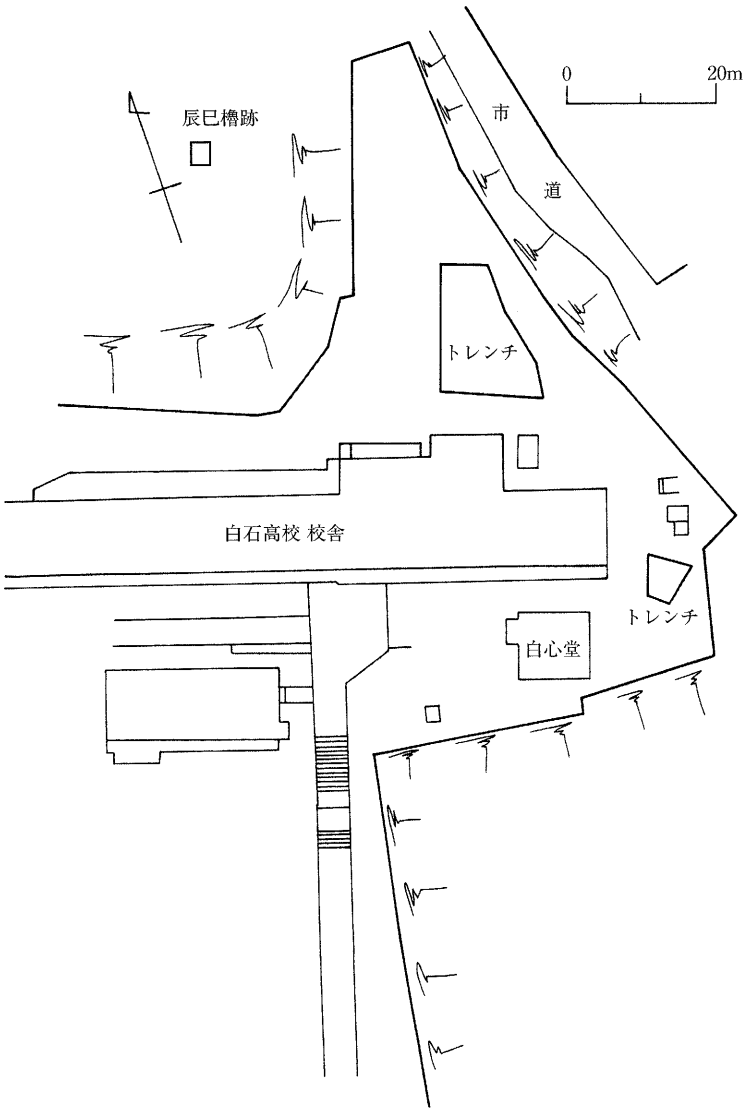
大手一ノ門跡、二ノ門跡において瓦が169kg出土し、陶磁器も多く出土した。13～14世紀の中世陶器も出土している。瓦質土器、土師質土器、土師器も出土している。瓦は輪違い、鬼瓦、鯱瓦の出土が多い。軒丸瓦は三引両文、巴文、軒平瓦は草花文、雪持笹文、軒桟瓦には九曜文が用いられている。注目されるのは「文政」の年号がヘラ描きされた鬼瓦片である（写真図版17－８、第79図２）。土人形、素焼き製品（練炭コンロ？）、石盤、白色土の壁土片、焼成を受けた粘土塊が発見されている。一ノ門跡、二ノ門跡、二ノ門東階段跡等から和釘等の鉄器が出土している。和釘は計９本出土している。扁平な鉄器も２点、銭貨は５点出土している。

第５節　北側の井戸跡

この箇所は、三階櫓石垣北面の北にあり、石垣北面が僅かに屈曲する箇所のすぐ北側に位置している。復元工事以前から庭園となり、もともと屋根付き井戸が存在した（写真図版40－3）。今回、復元に伴い発掘調査を行った結果、井戸跡の南側を除く３方向に掘り込み、ピットが確認され、切り合い関係（時期差）があった（第62～65図）。しかしながら、確実に近世以前とは判断できないものであった。井戸跡本体もコンクリートで固められている部分があるなど、最近までの使用を示すものであった。東側には溝に沿って金属管が埋設してあった。

東西のピット類は、復元工事以前の屋根の基礎の掘り込みを考えられる。東西には石が並んでおり、井戸跡を取り囲む区切りの石と考えられる。

遺物は瓦、陶磁器が若干、和釘１本が出土しているが、近現代の遺物と共に出土している。



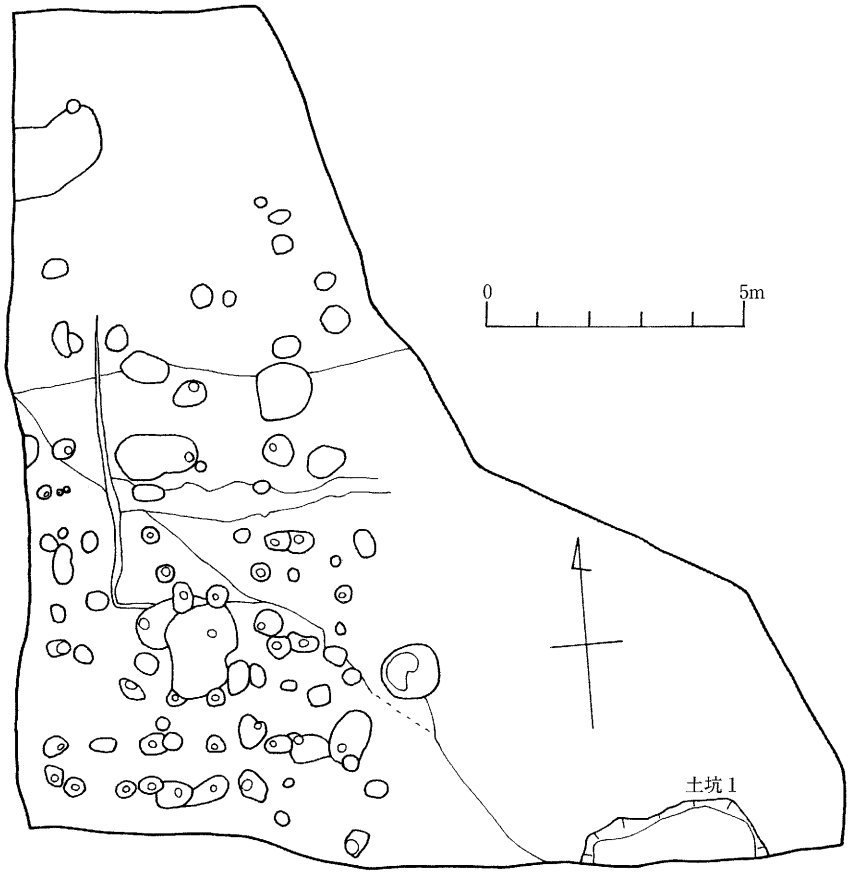
第66図　白石高校内発掘区位置図（S＝1/1,000）

第６節　勘定所跡

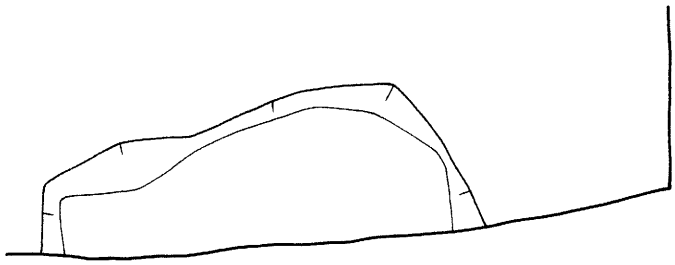
調査区は宮城県白石高等学校用地の北側で、白石城跡本丸辰巳櫓跡に隣接する箇所である（第66図）。学校施設建設に伴い確認調査を実施した。調査区は校舎の北側（実習棟建設）、東側（倉庫建設）の２カ所となっている。調査の結果、北側の調査区から２～３時期にまたがる建物跡が見つかった（第69図）。整地層、土坑のほか、蓋の可能性がある丸い木片を伴う井戸と推定される遺構もある。杭、寛永通宝が発見された遺構は何れも約１～1.5m程の盛土の下から発見された。調査図面は残っているものの、写真の所在は不明である。

安政５年絵図においては勘定所にあたる箇所であり井戸跡１基、焼土１基、整地層１カ所、溝跡１条、土坑及びピット92基が発見され、瓦、陶磁器、銭貨（寛永通宝）が出土した。直径1.1mの井戸跡には木質部が残っていた。調査区南端の土坑１は長さ3.5m、幅は1.2m以上で、くぼみを有する長方形で、半分は調査区外である。深さは10～20cmほどである。調査区北の焼土は長さ1.8mほどである。中央の溝跡は東西に７mあり、幅は20～50cmである。ピット類は明確な柱痕跡を残すものが多い。長さ40～70cmのものが多い。調査区南端に東西棟、中央に南北棟が存在する可能性がある。

遺物は瓦、陶磁器、瓦質土器、砥石が出土している。曲った和釘も発見されている。



第67図　白石高校内発掘区遺構配置図（S＝1/150）

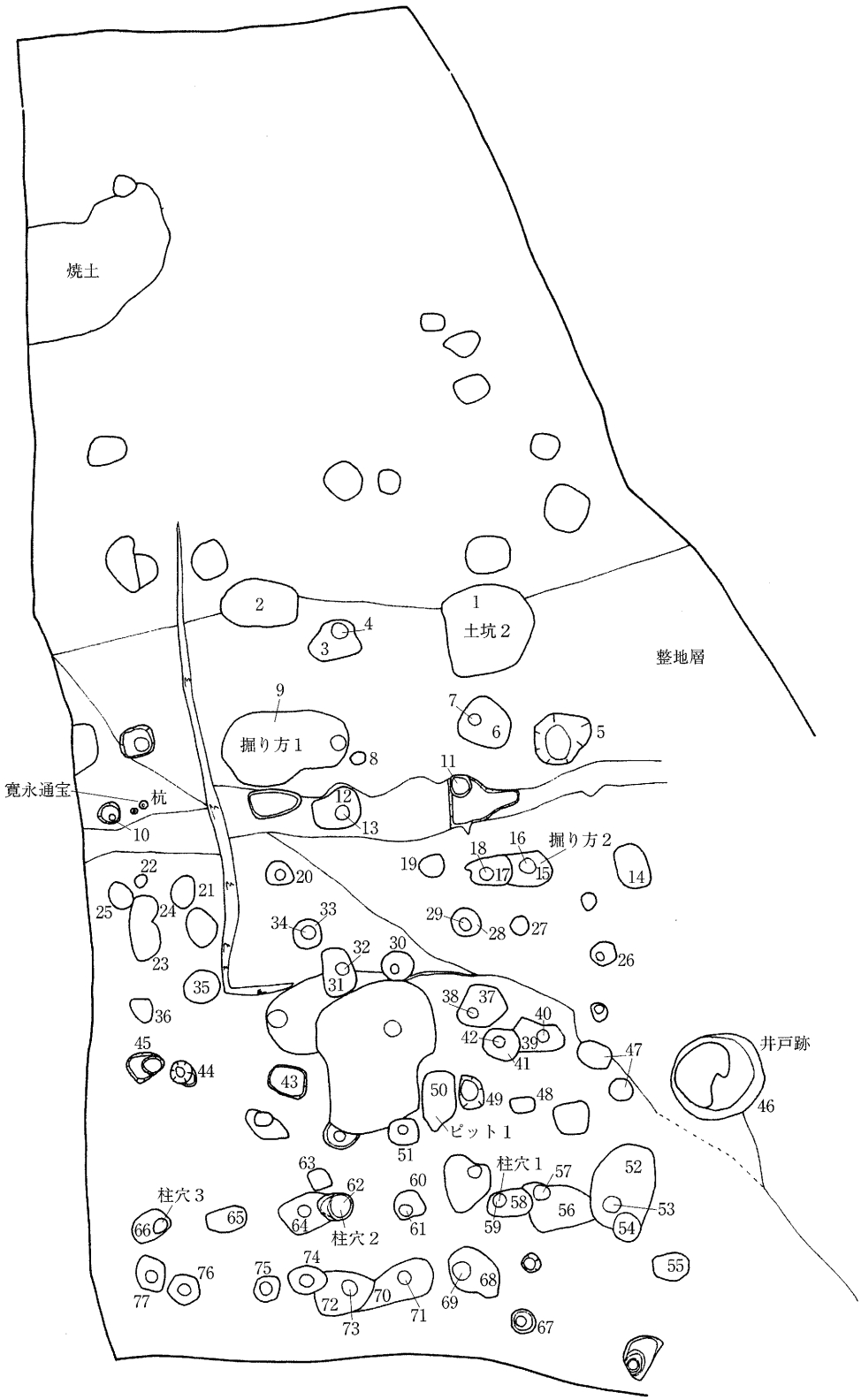


第68図　土坑1　平面図（S＝1/60）

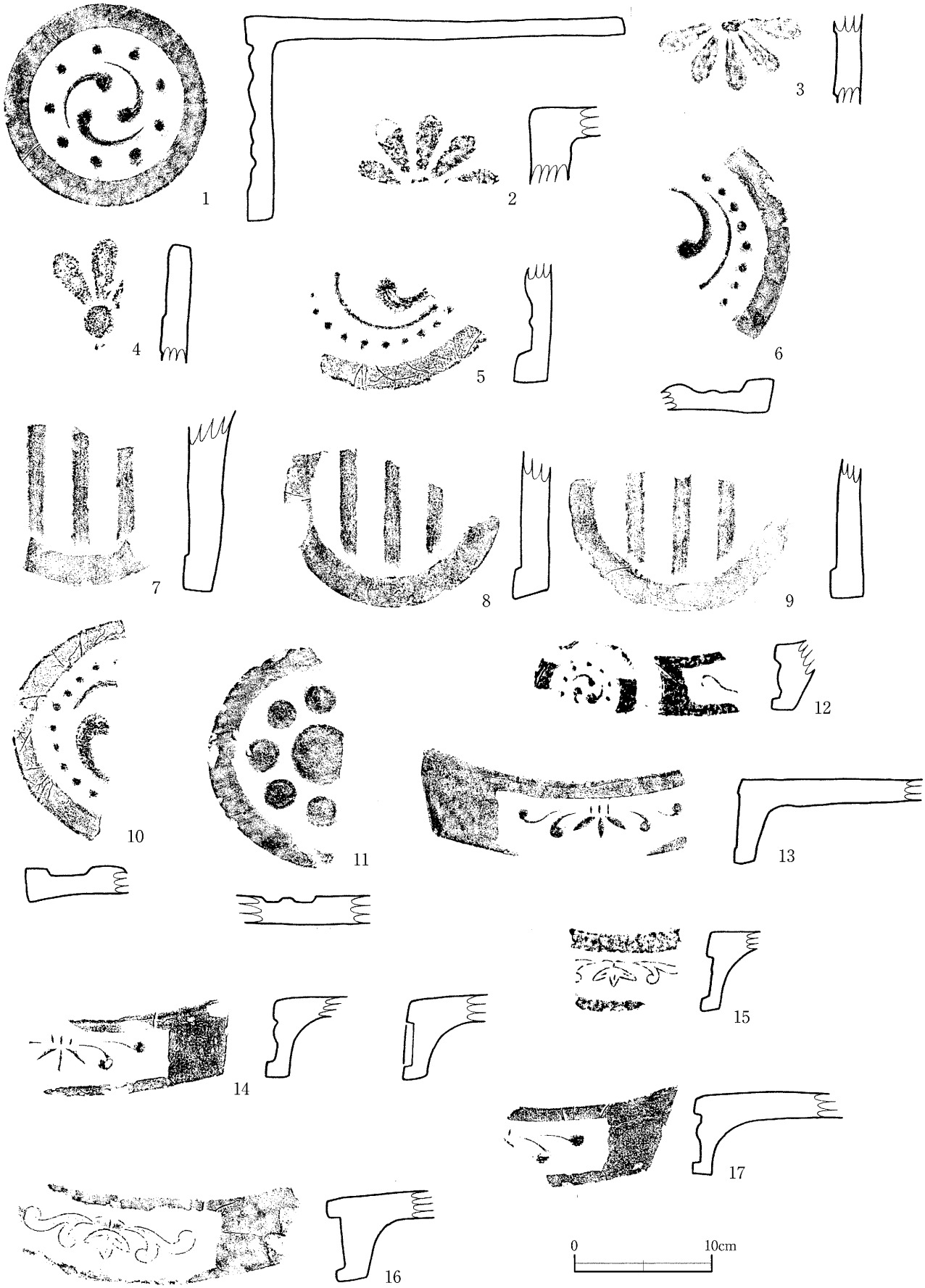
第7節　遺構外の遺物

遺構外の遺物としてSJXXという扱いの遺物が多量にある。瓦だけで556kgである。おそらく表土の出土遺物という扱いで遺構外になっているが、出土地区に注意が払われず一括されている。発掘調査の結果では地区毎に瓦の出土に傾向が見られるので、少なくとも、遺物取り上げ時に地区毎に取り上げる必要があった。

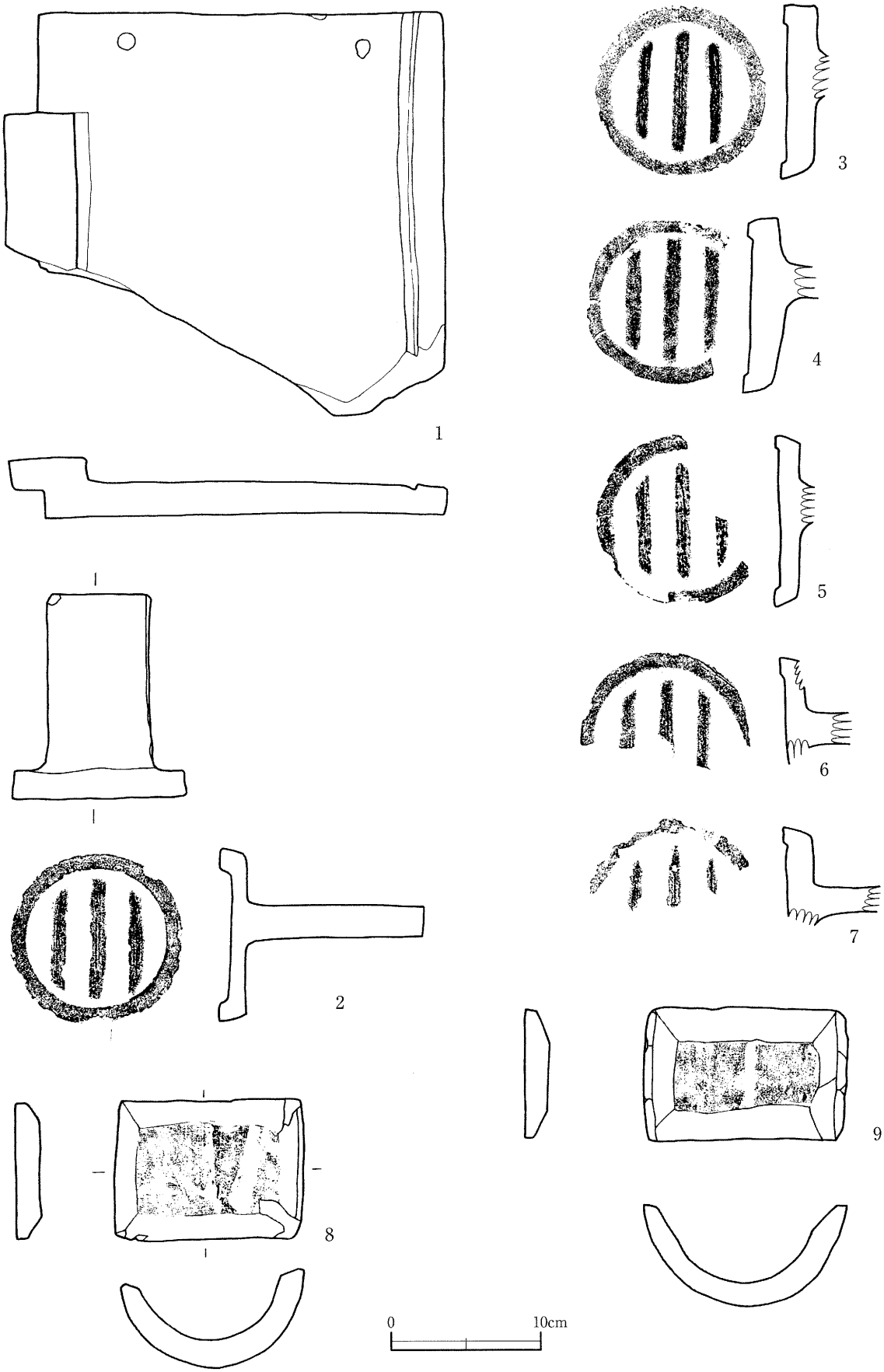
軒丸、軒桟瓦、軒平瓦、棟込瓦、鬼瓦等が出土している。陶磁器、土師質土器、瓦質土器等が発見されている。出土地不明の銭貨が3点出土している。



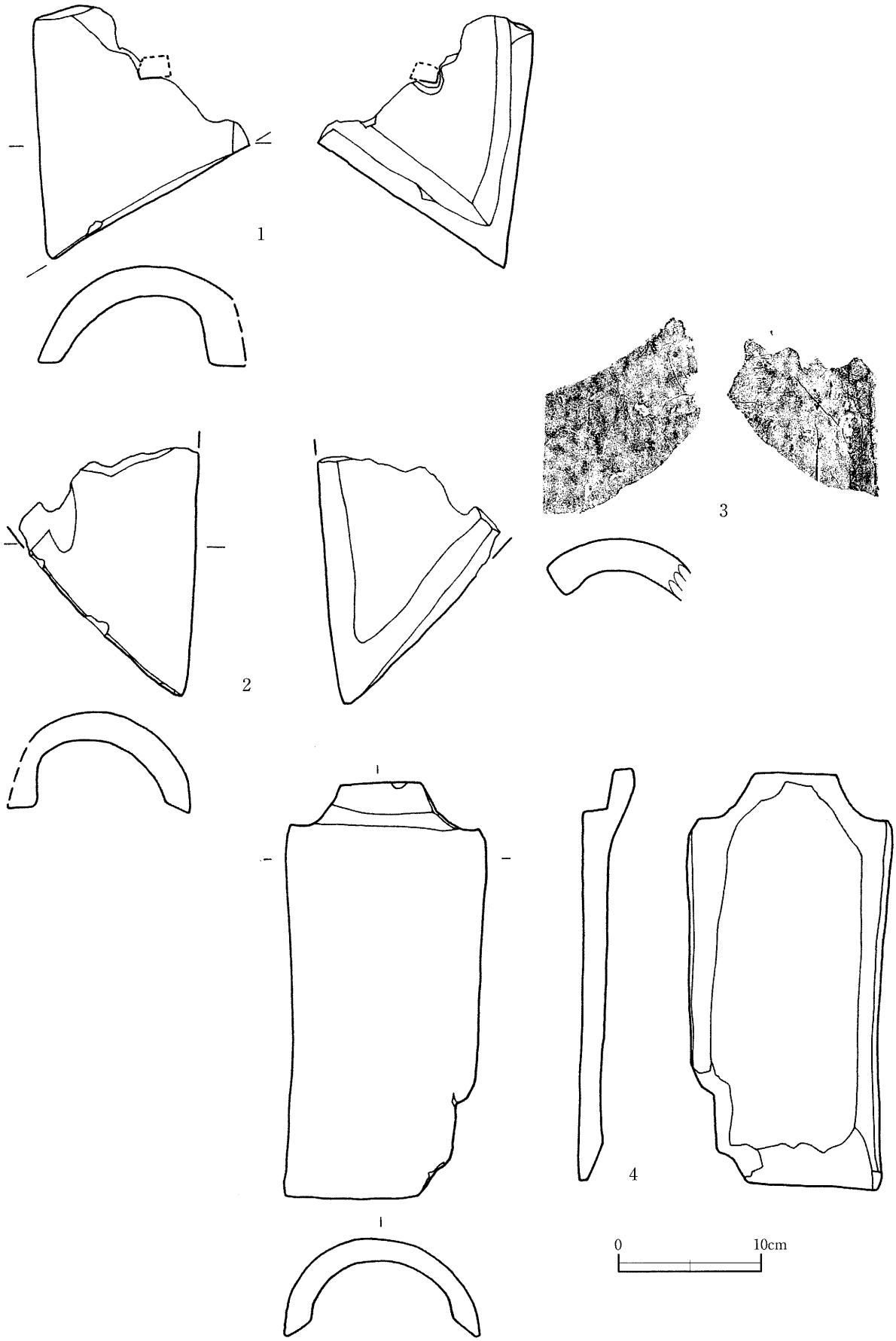
第69図　白石高校内調査区遺構詳細配置図（S＝1/80）



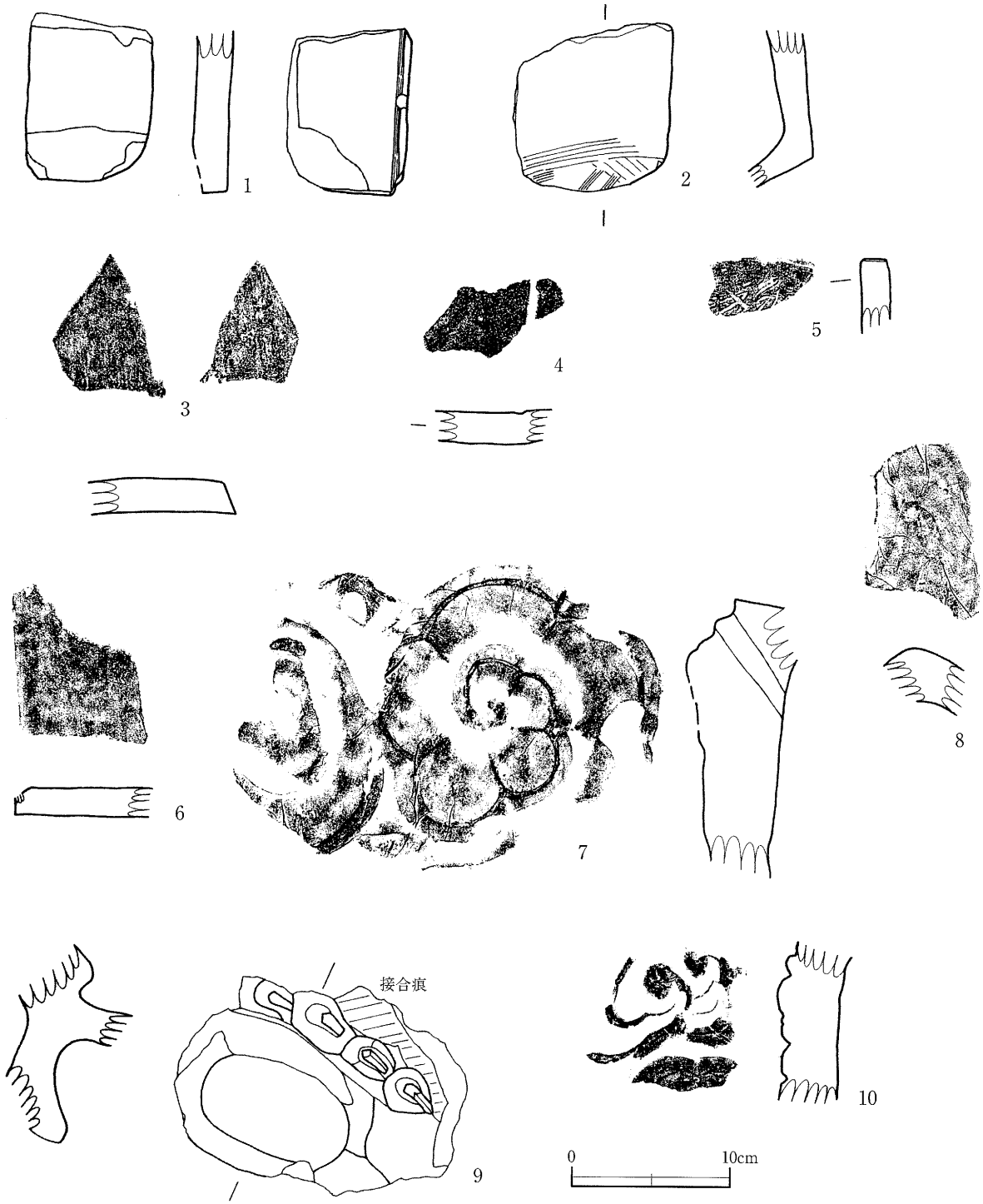
第70図　三階櫓跡出土瓦（1）



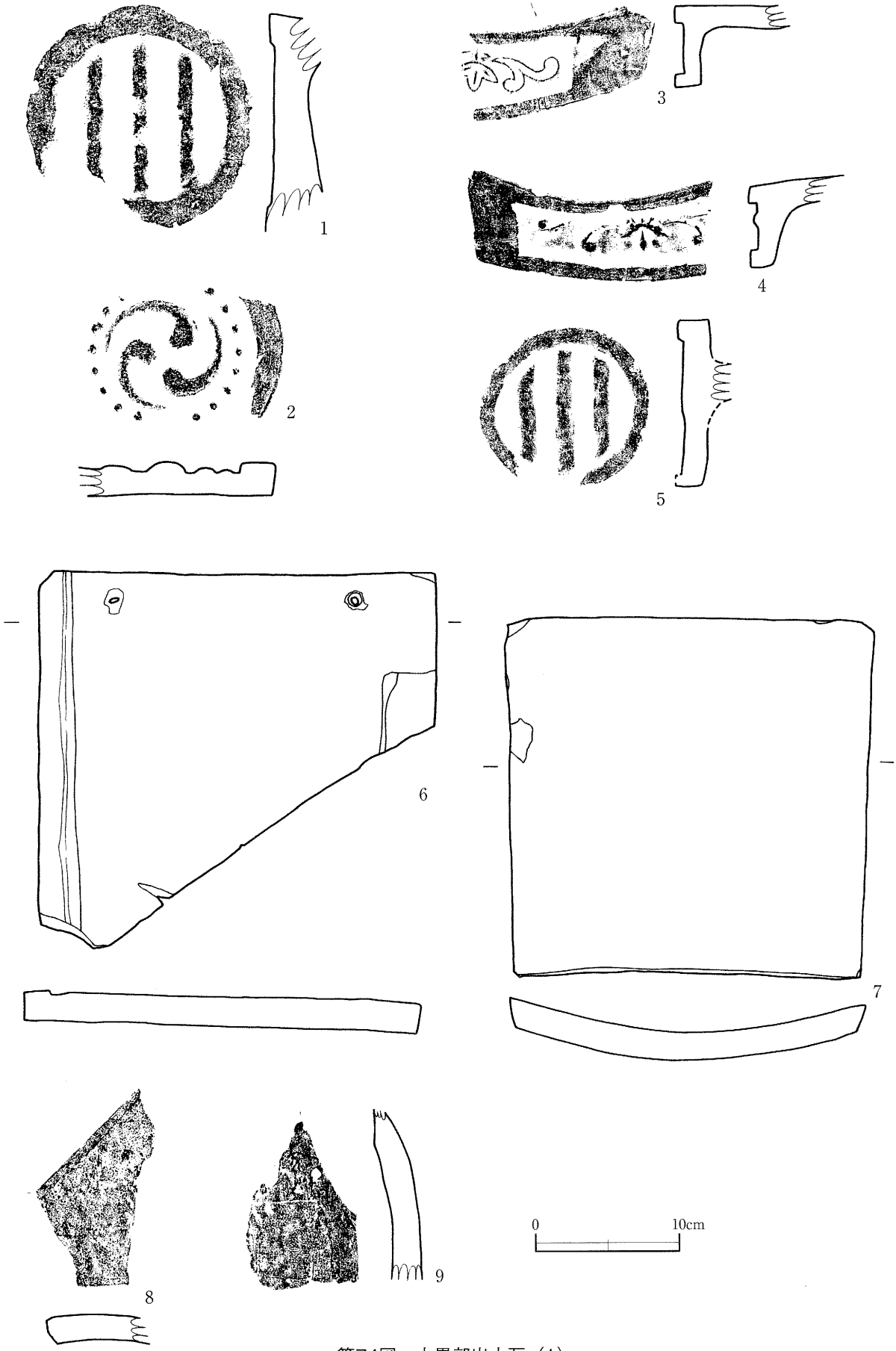
第71図　三階櫓跡出土瓦（2）



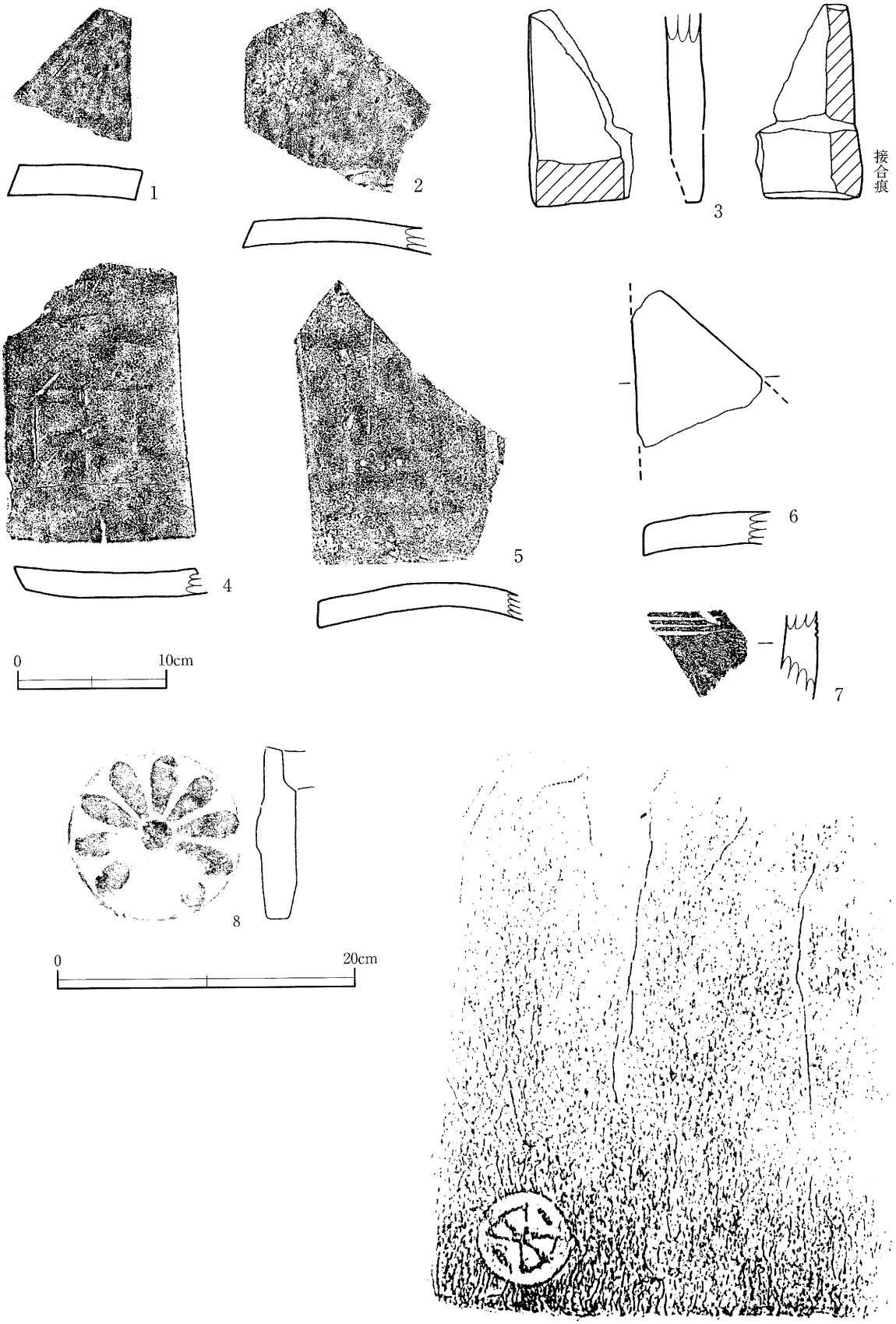
第72図　三階櫓跡出土瓦（3）



第73図　三階櫓跡出土瓦（4）



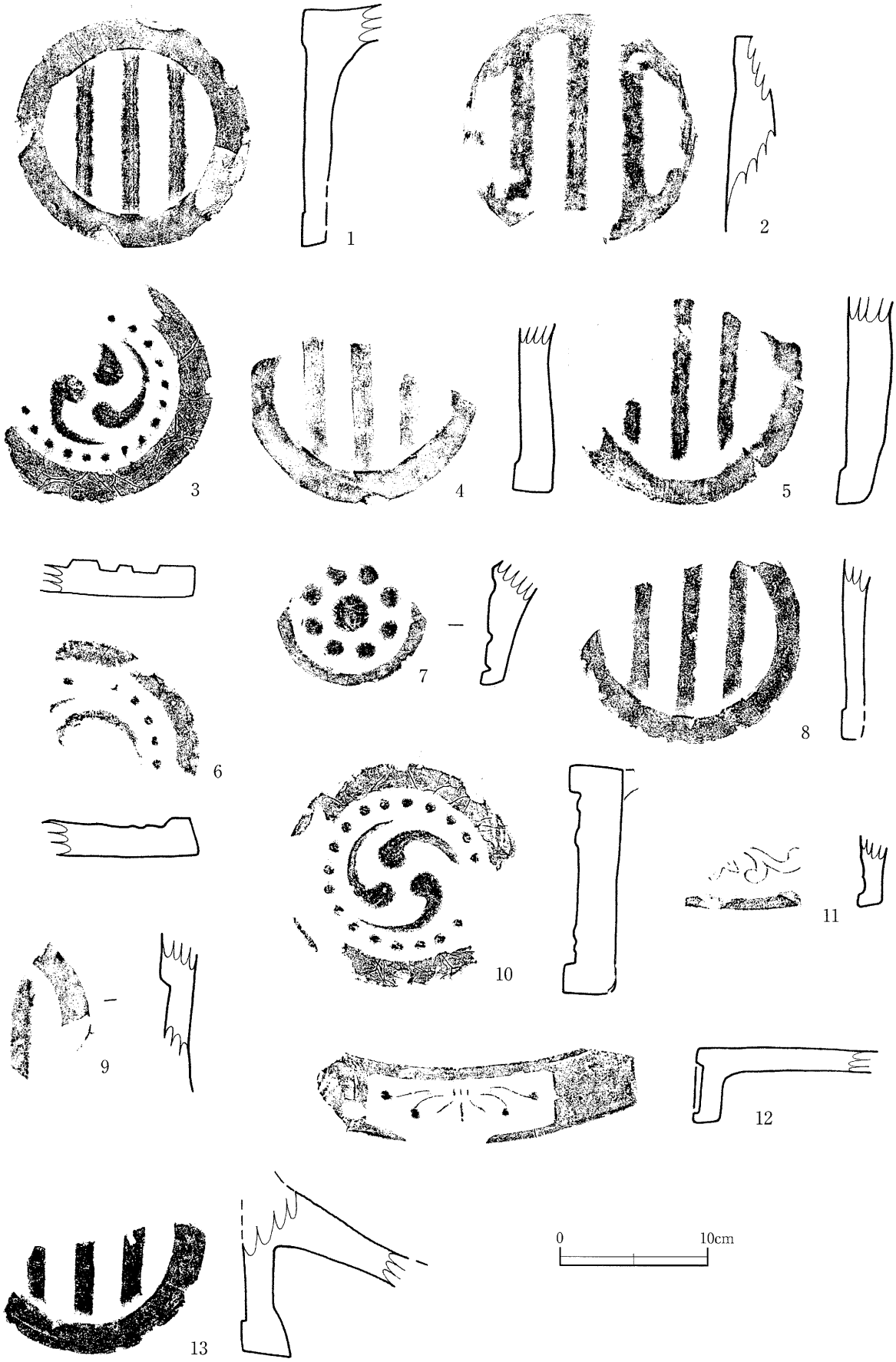
第74図　土塁部出土瓦（1）



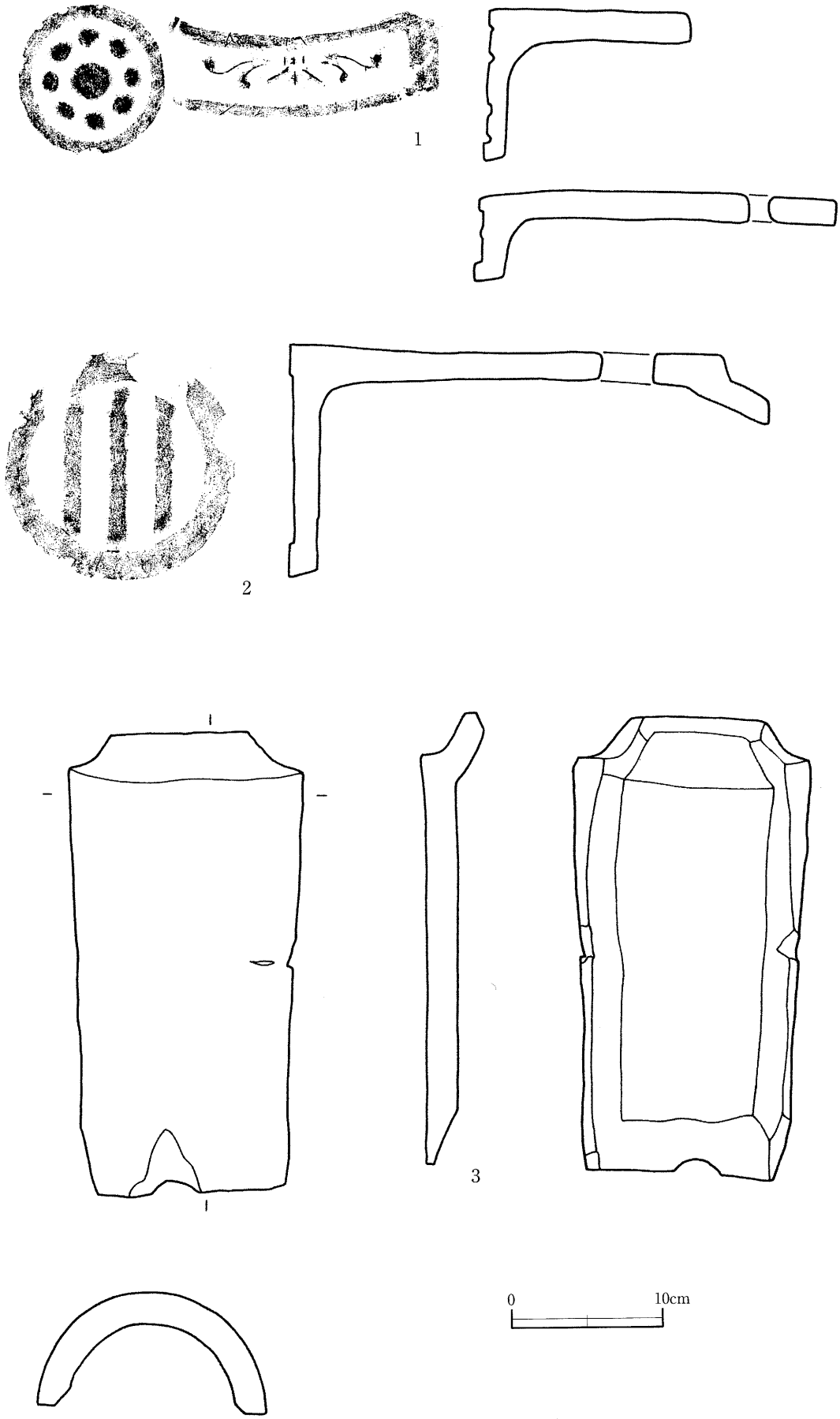
9　刻印瓦（軒丸瓦）

9のスケールは不明

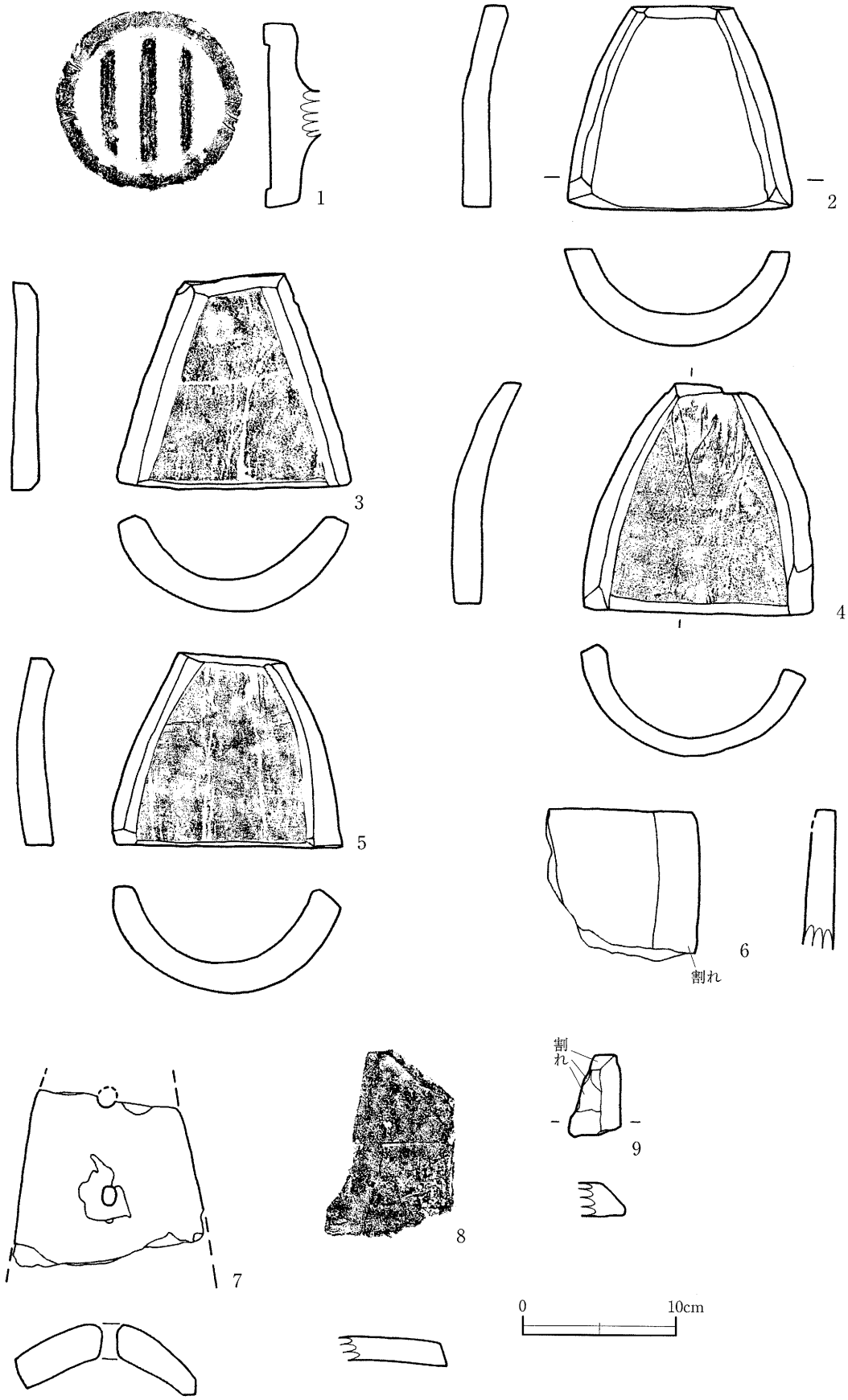
第75図　土塁部ほか出土瓦（2）



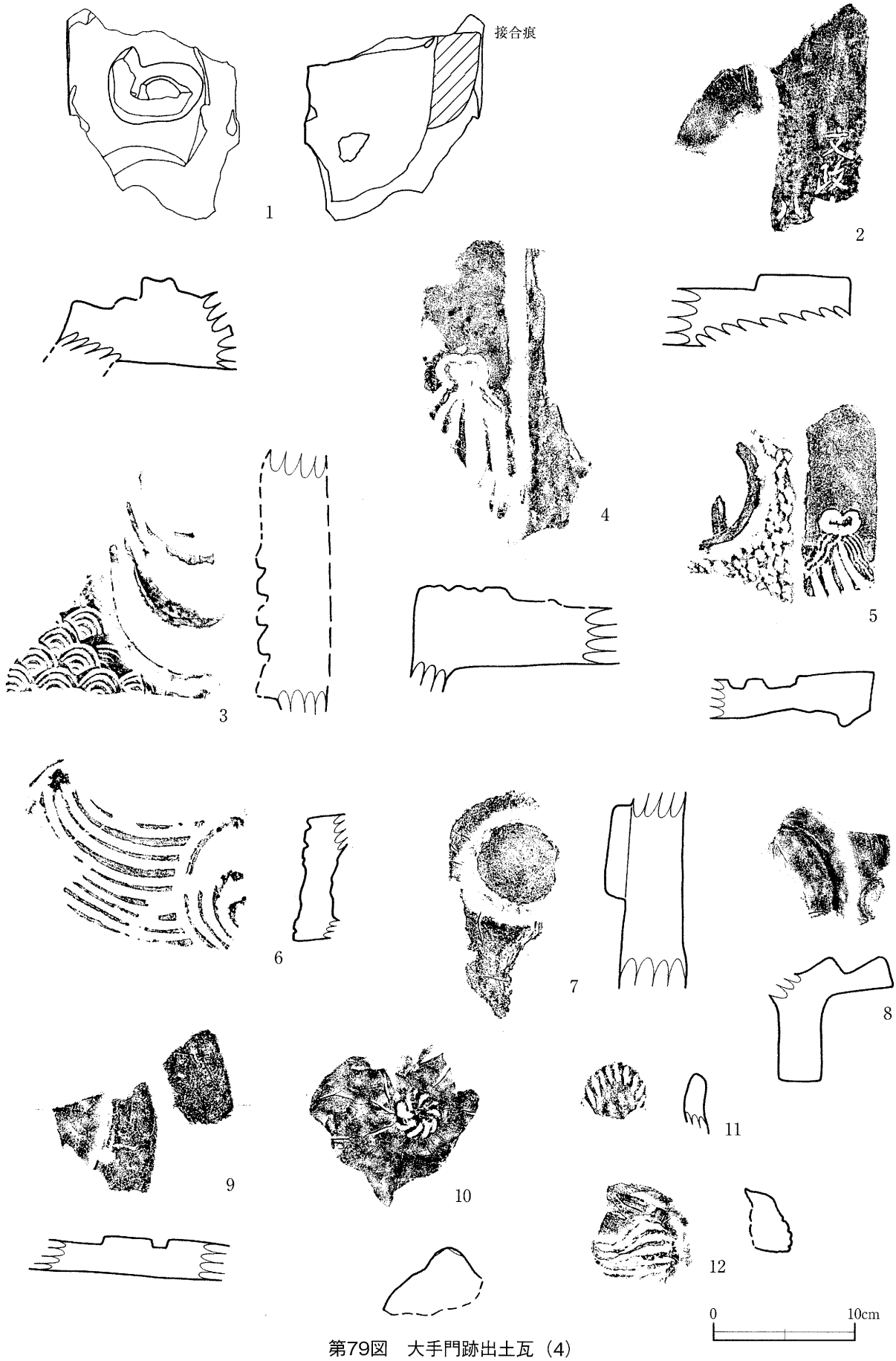
第76図　大手門跡出土瓦（1）



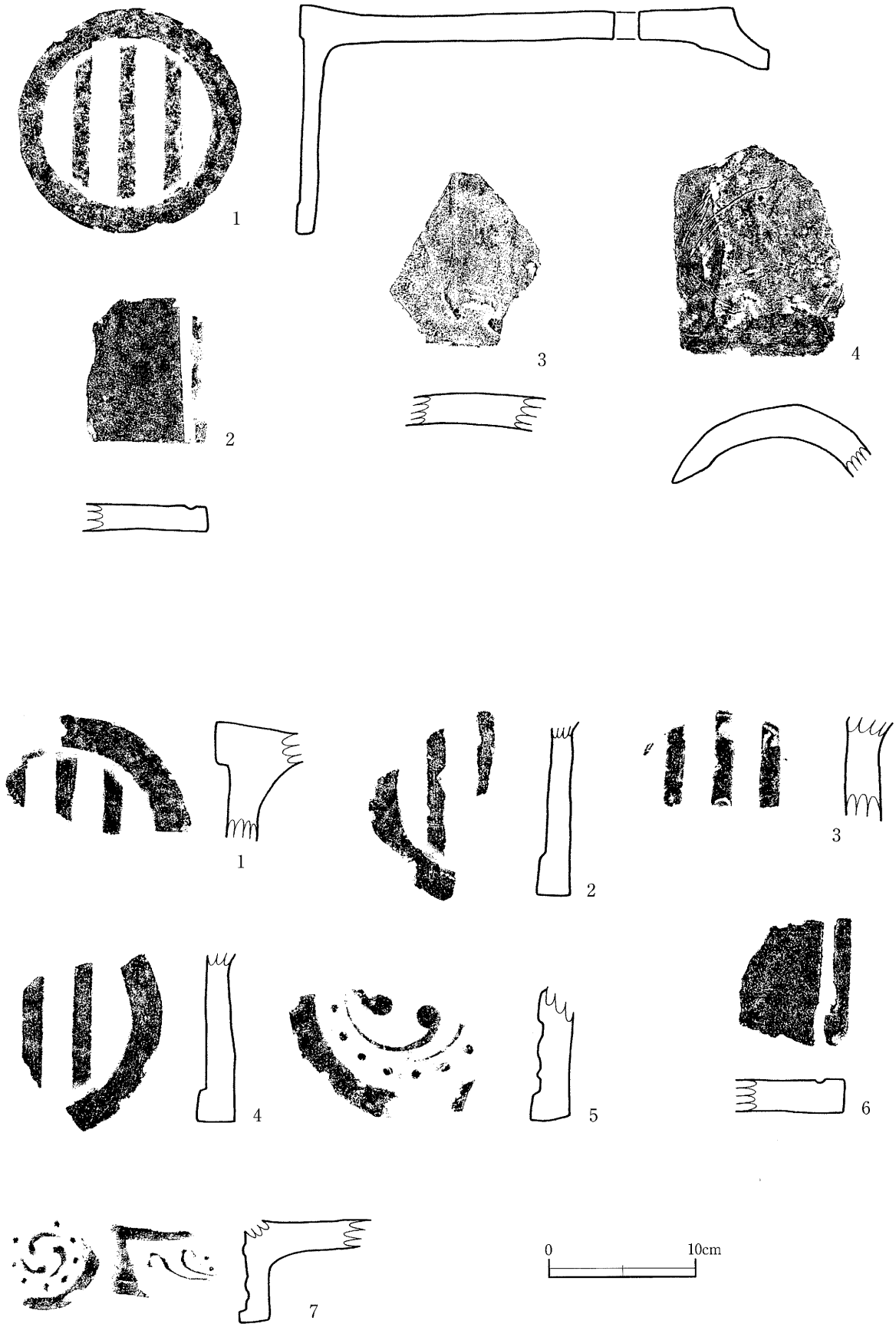
第77図　大手門跡出土瓦（2）



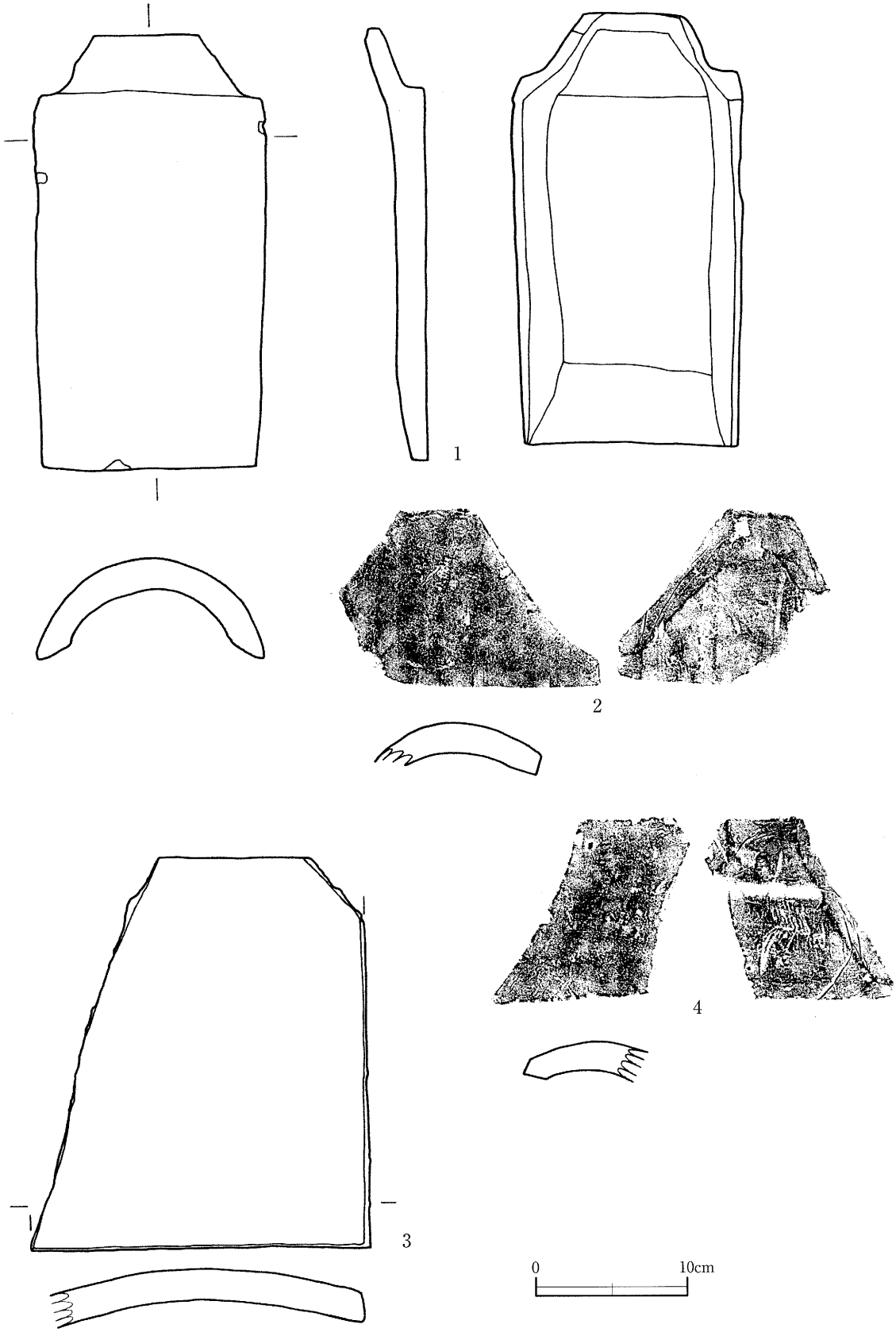
第78図　大手門跡出土瓦（3）



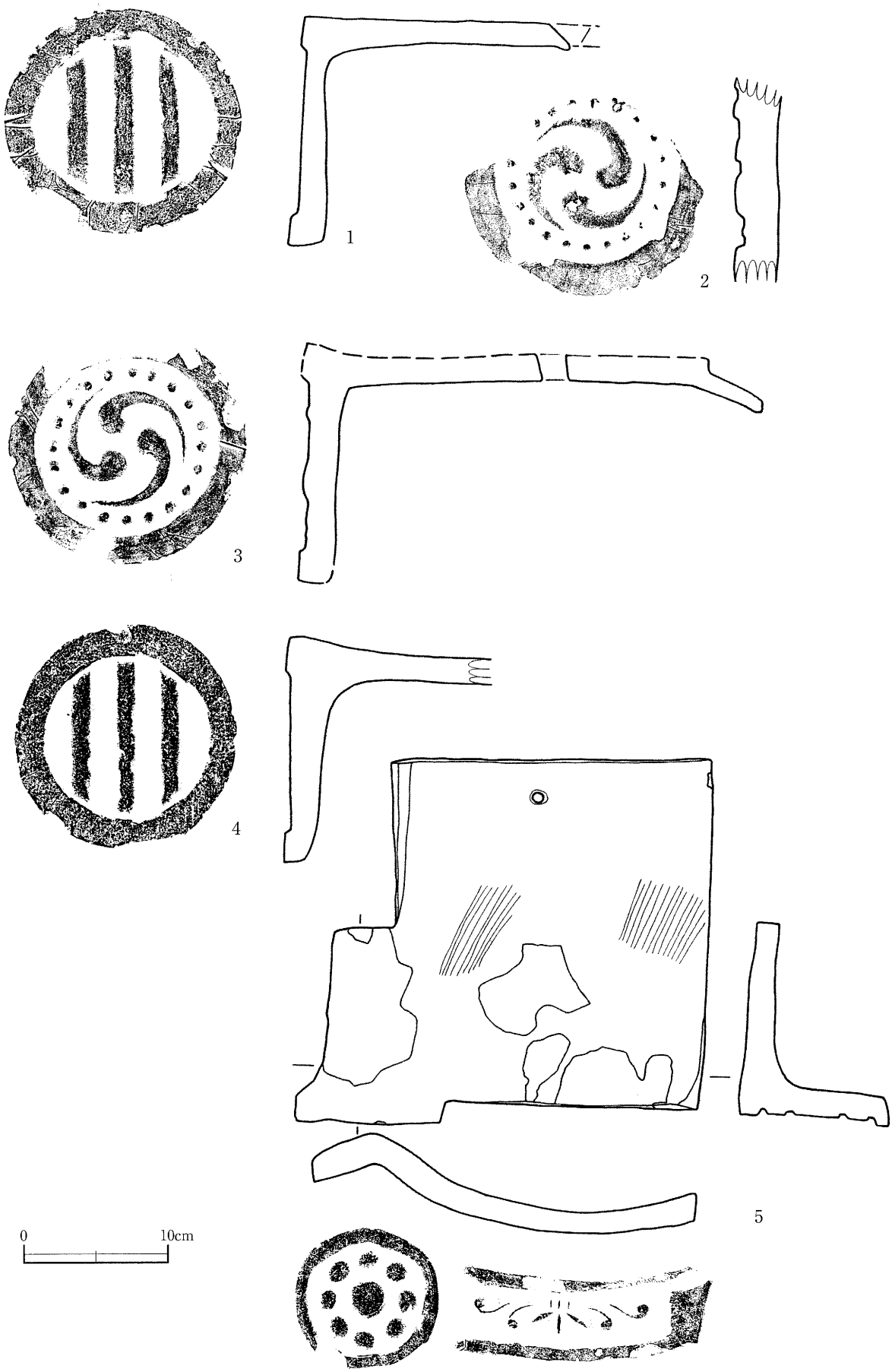
第79図　大手門跡出土瓦（4）



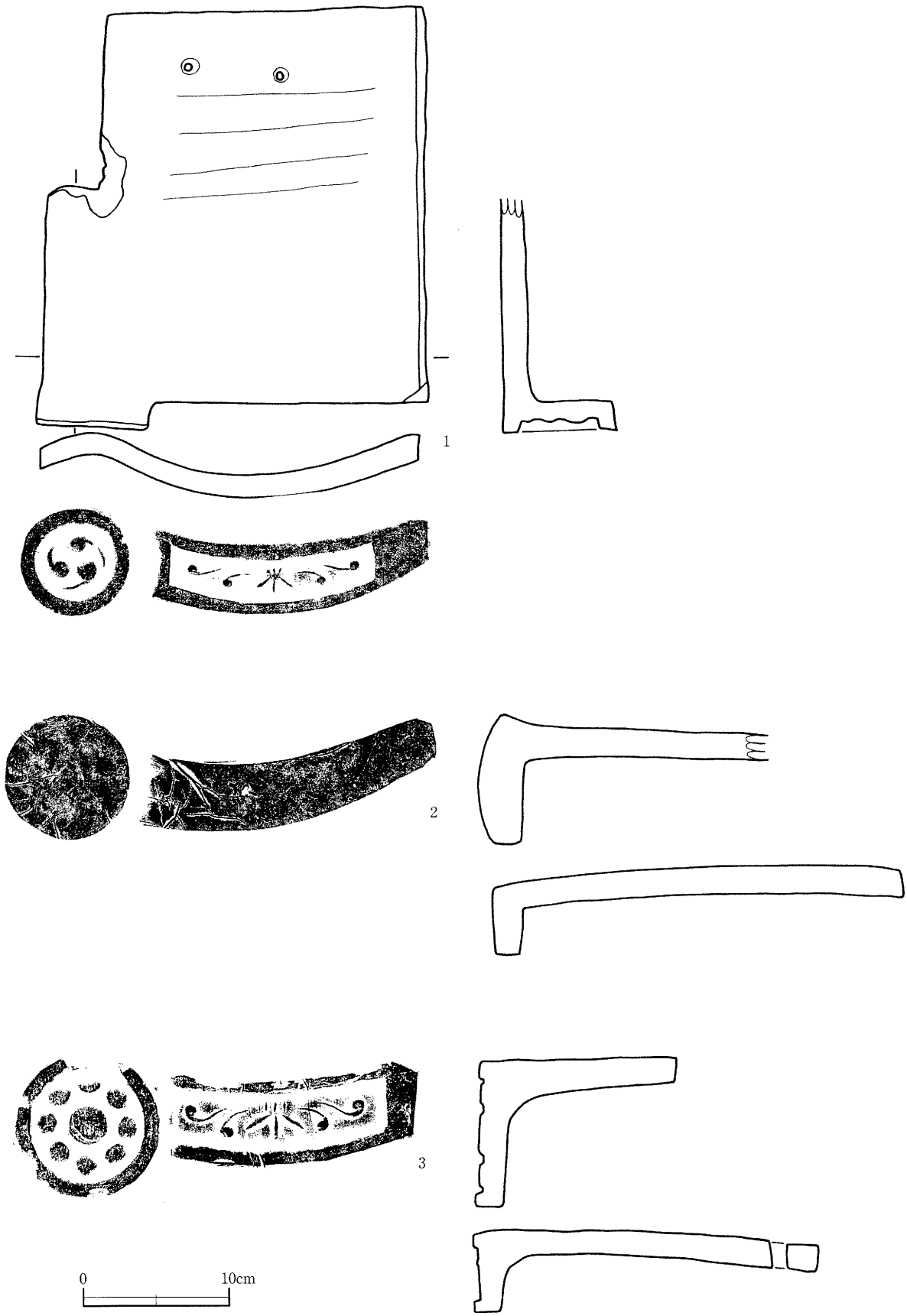
第80図　本丸内（1）勘定所跡（2～4）、北側井戸（下、1～7）出土瓦



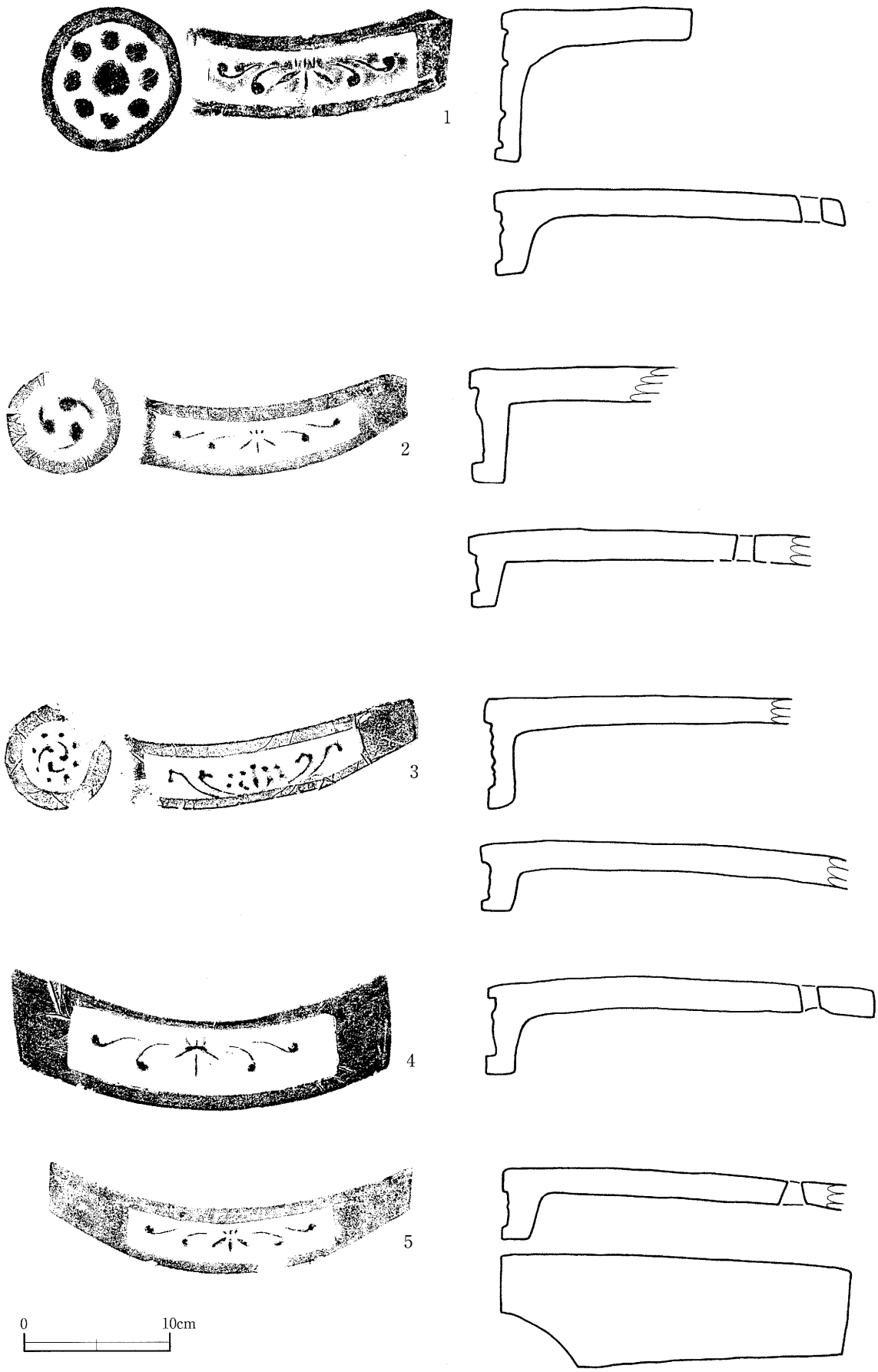
第81図　未申櫓跡表採瓦



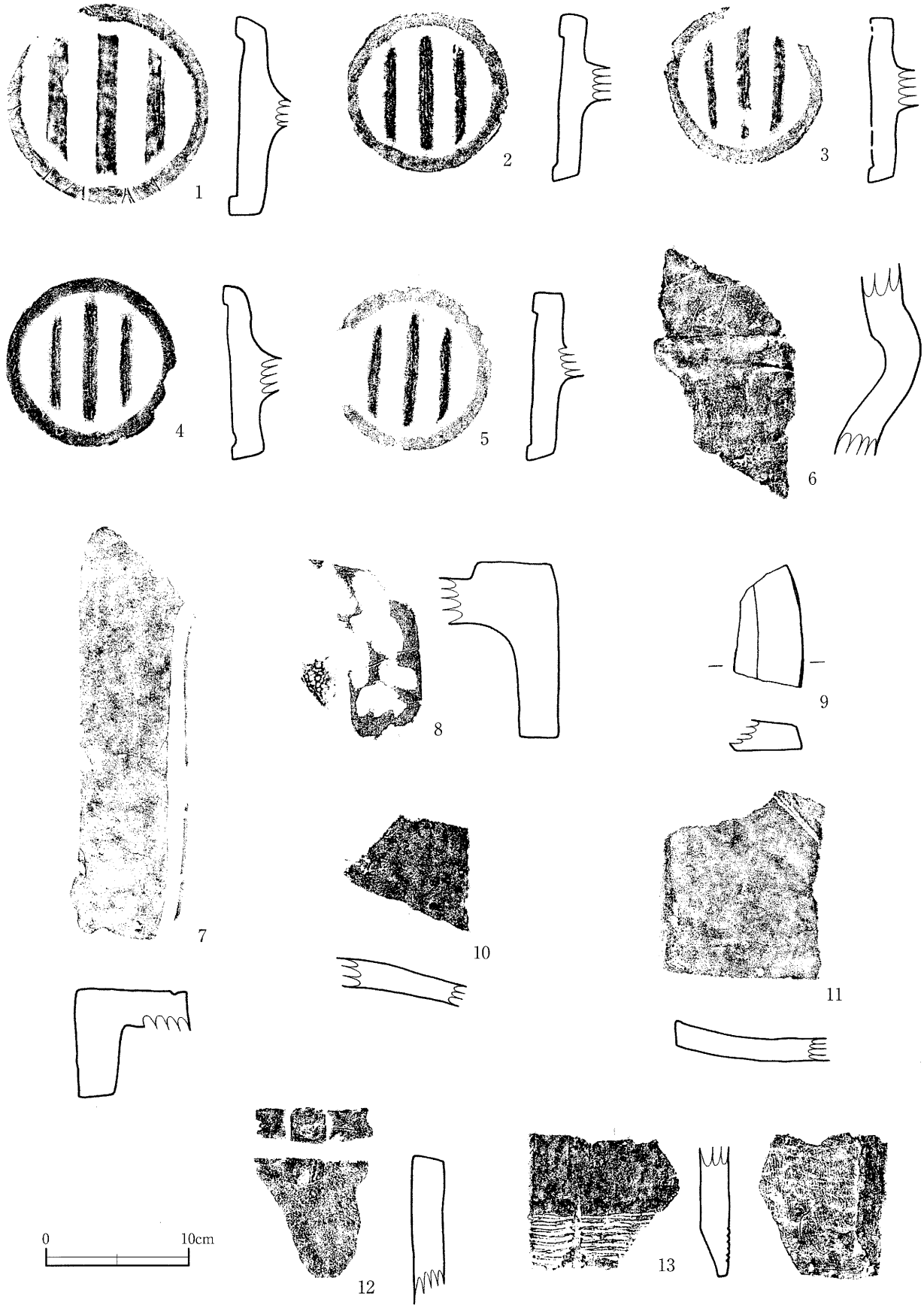
第82図　遺構外出土瓦（1）



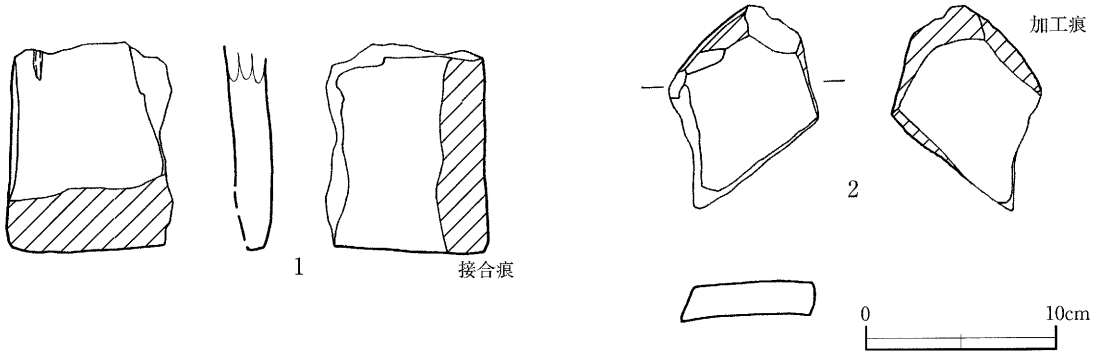
第83図　遺構外出土瓦（2）



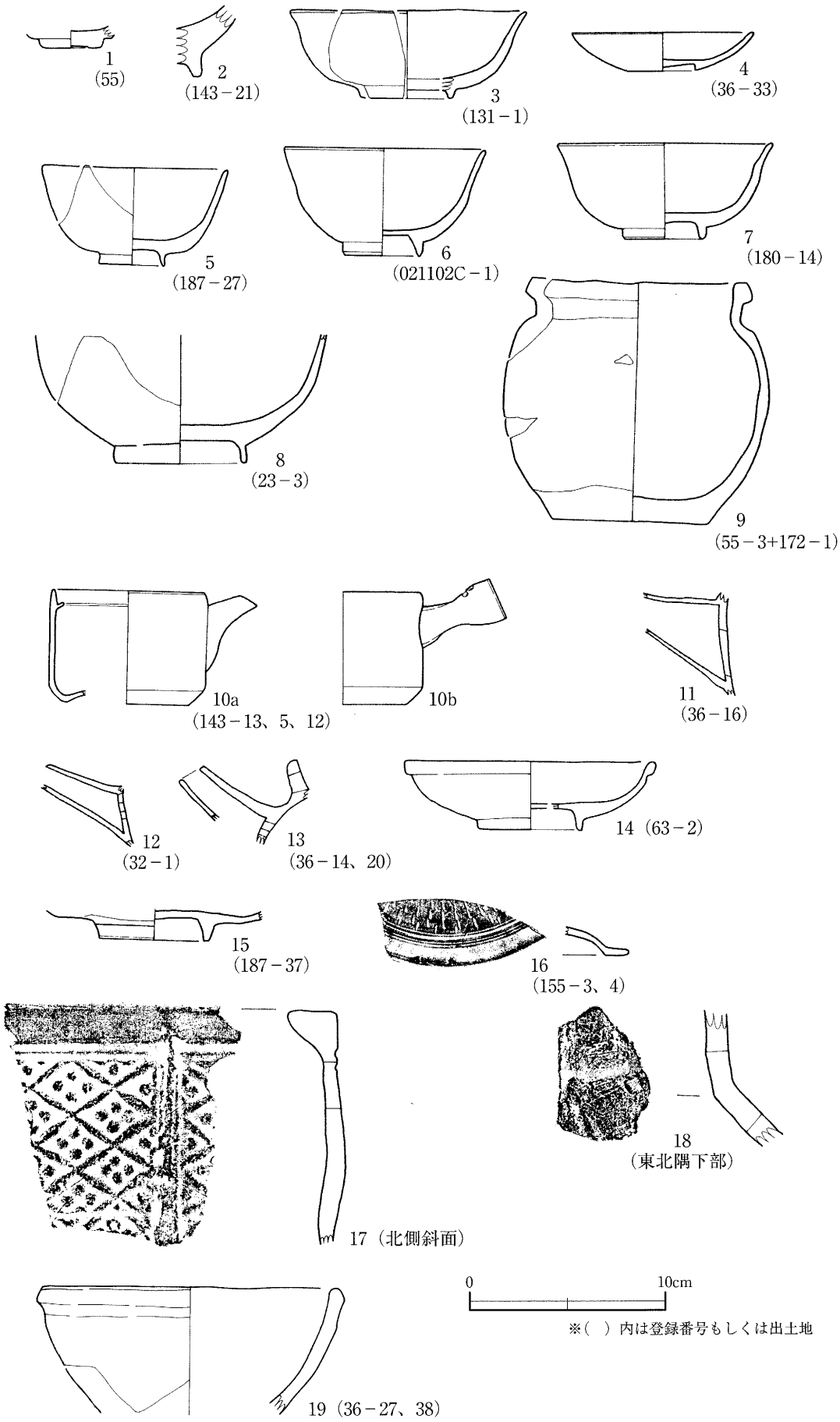
第84図　遺構外出土瓦（3）



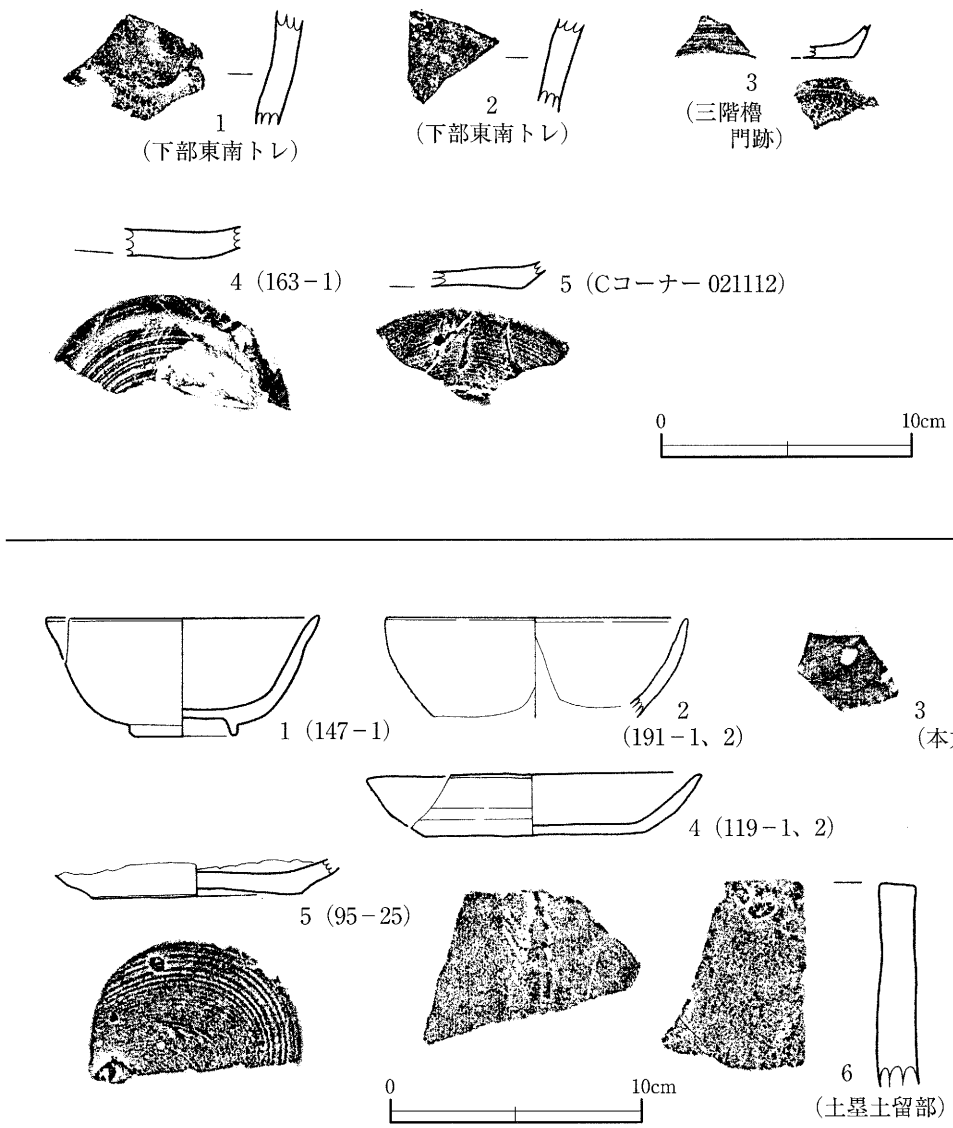
第85図　遺構外出土瓦（4）



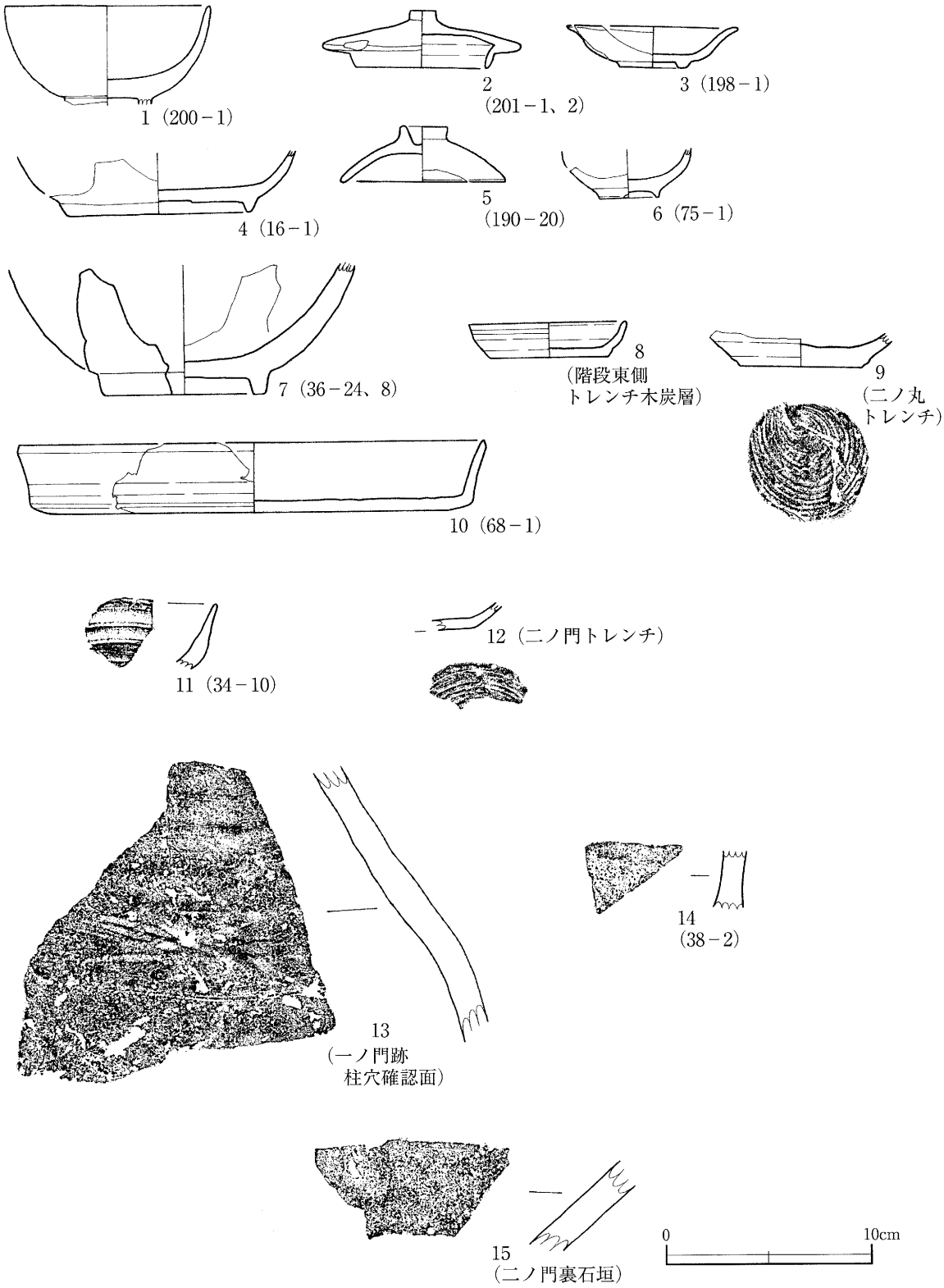
第86図　遺構外出土瓦（5）



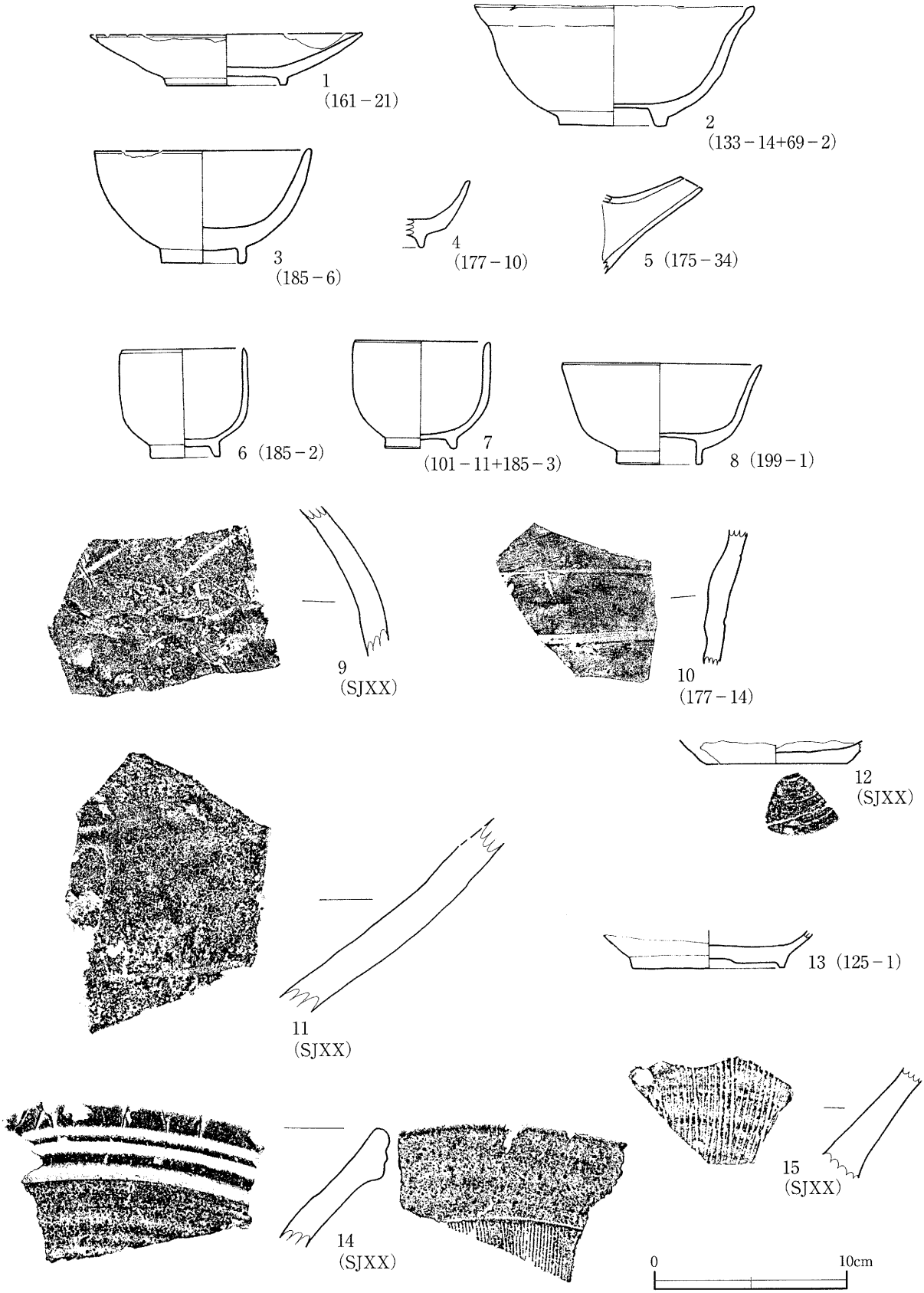
第87図　三階櫓跡出土陶磁器



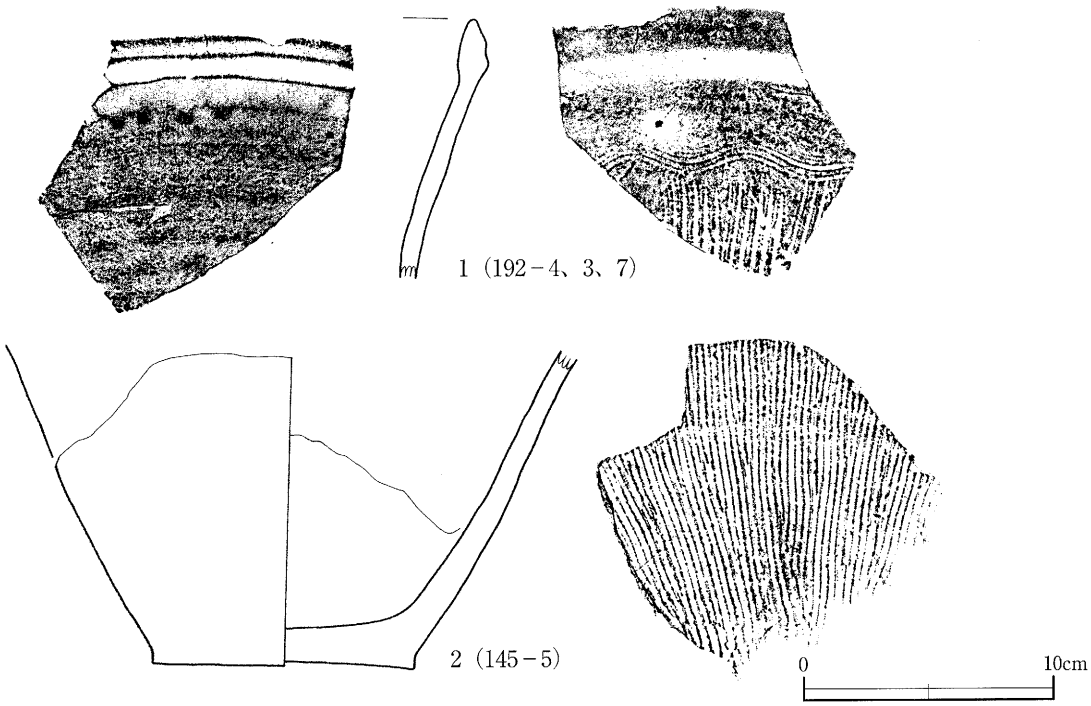
第88図　三階櫓跡（上）と土塁部出土（下）陶磁器



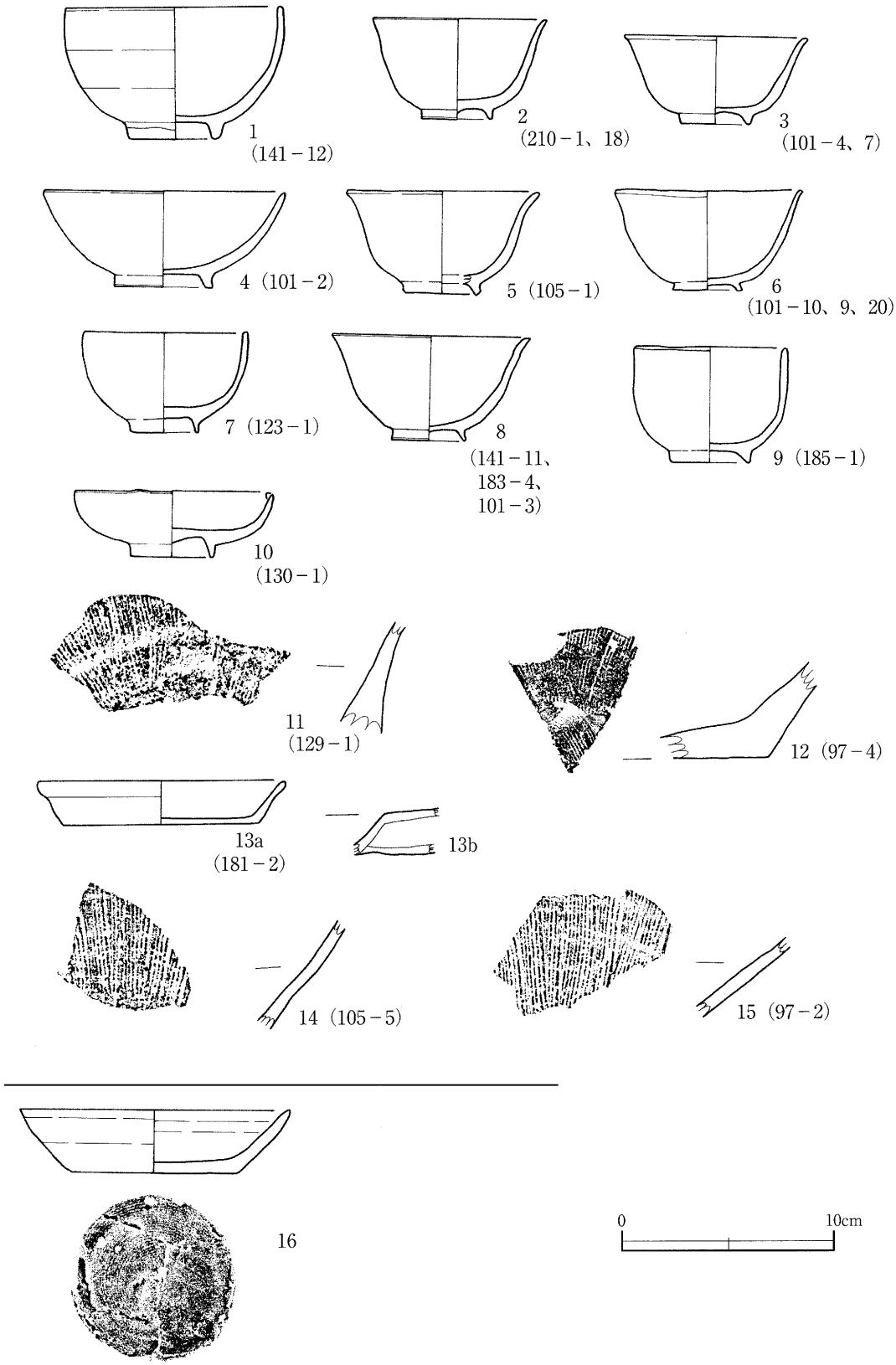
第89図　大手門跡出土陶磁器



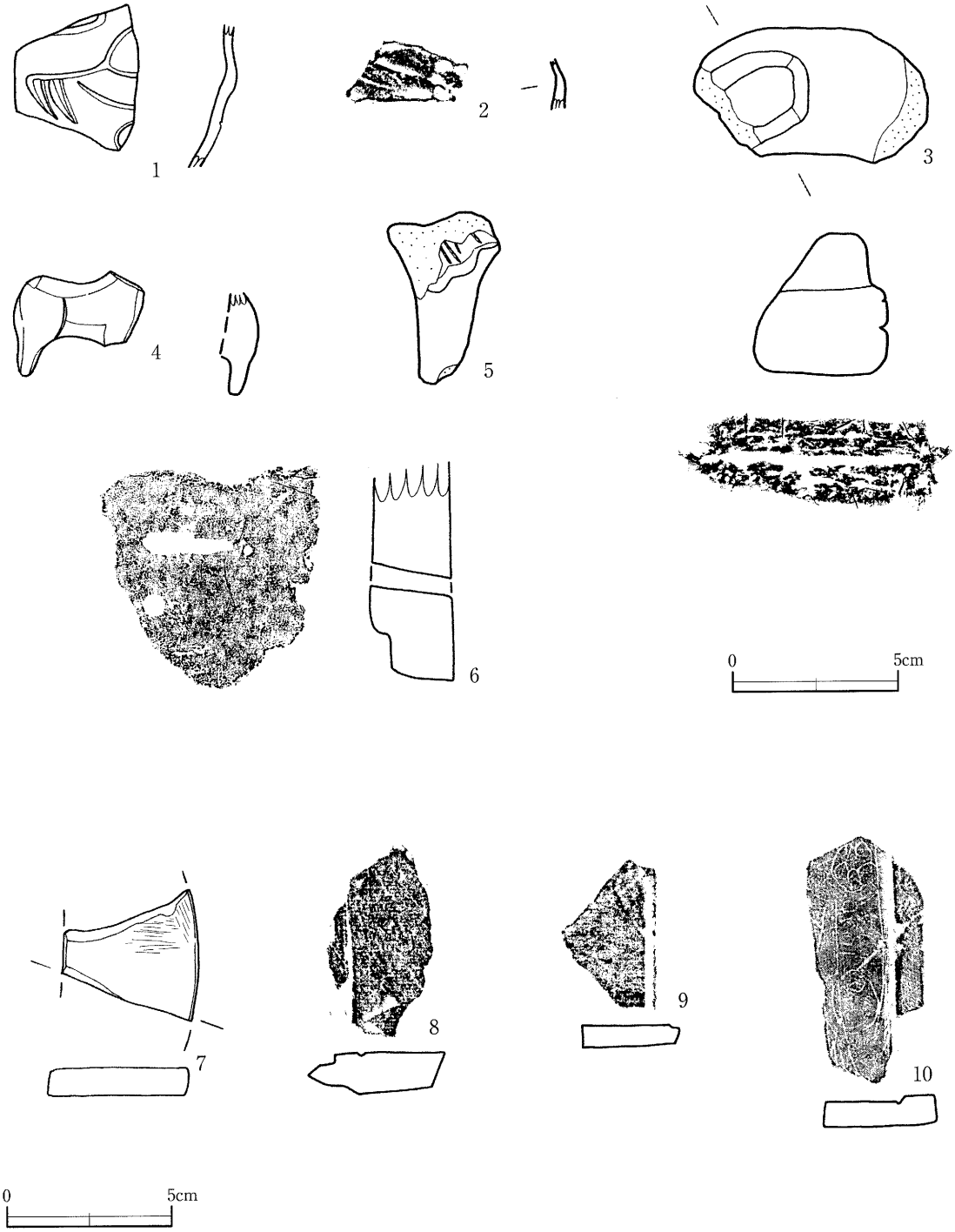
第90図　遺構外出土陶磁器（1）



第91図　遺構外出土陶磁器（2）

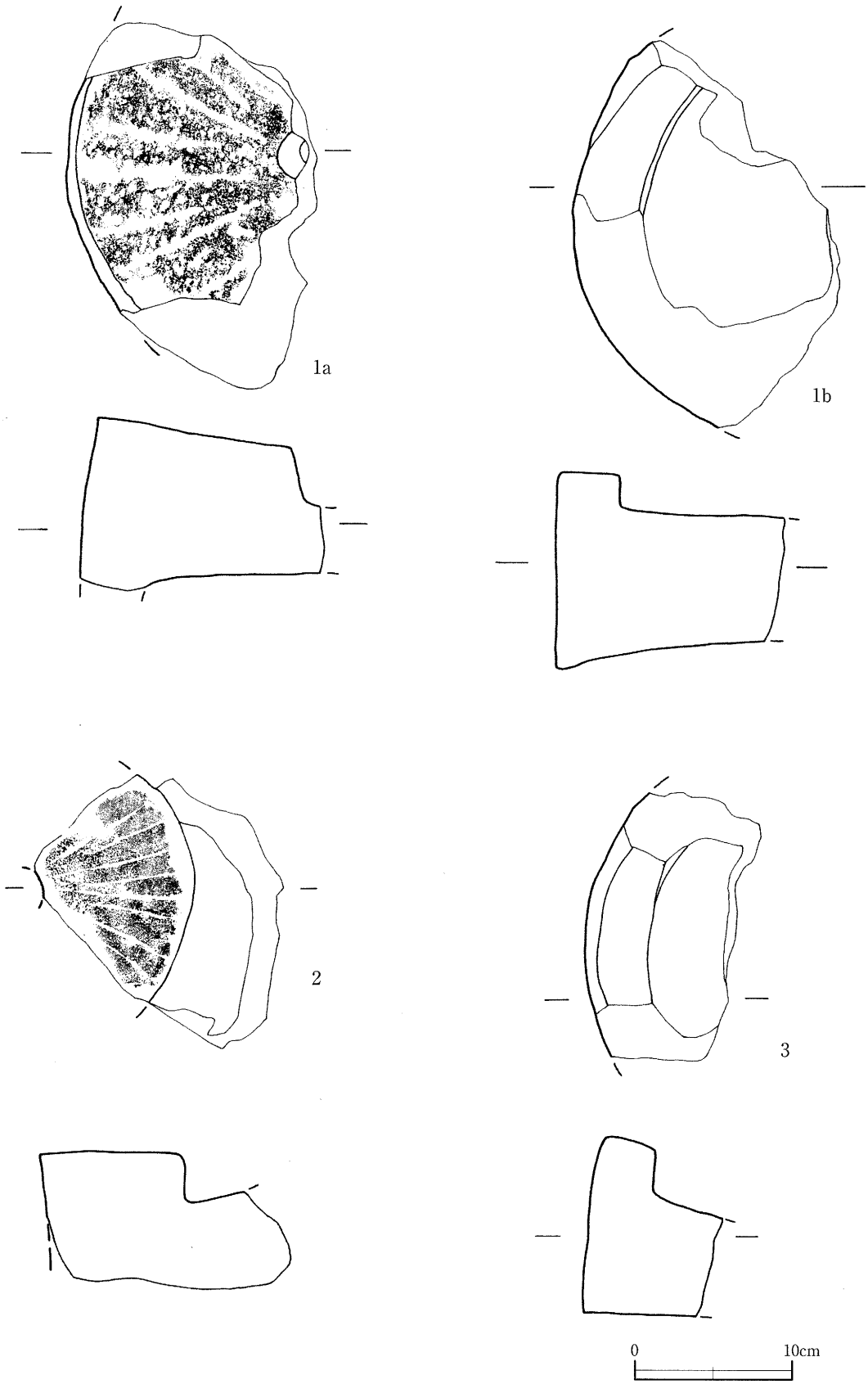


第92図　勘定所跡、表採の陶磁器等

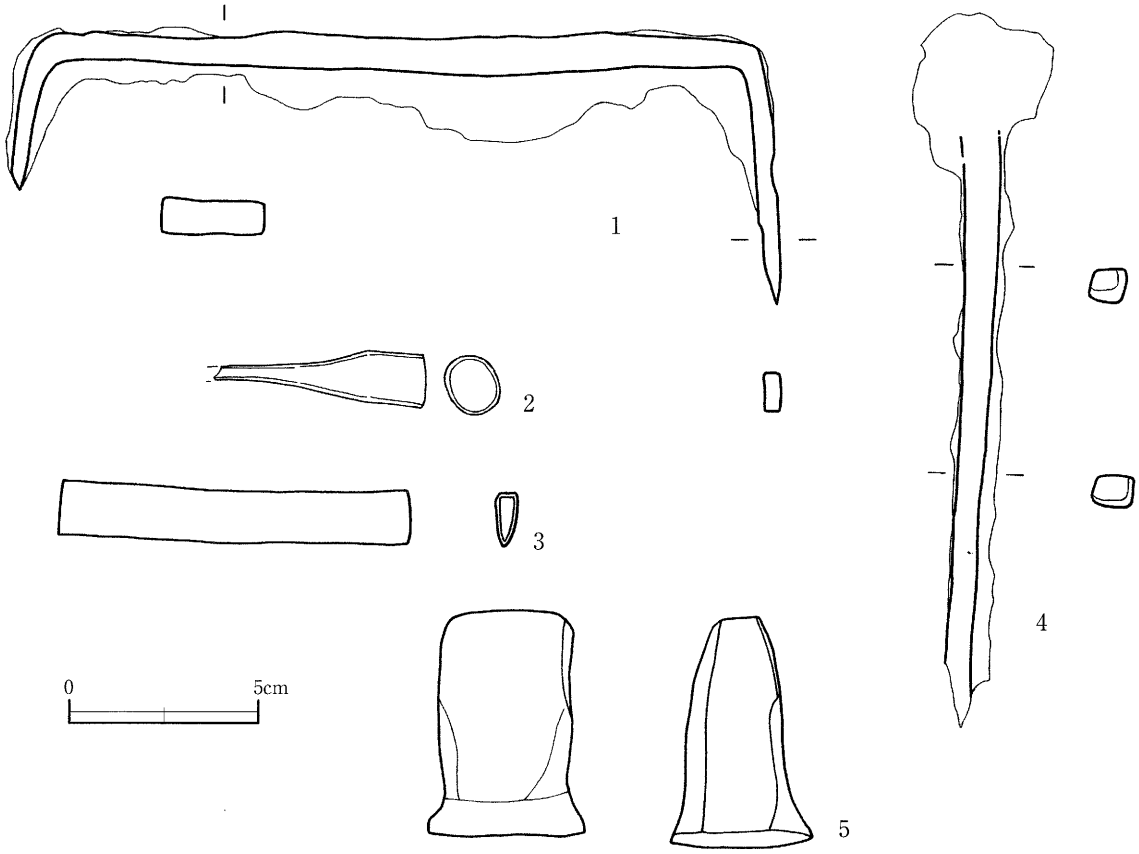


図版番号	出土位置、登録番号	内　　容	写真図版
第93図１	西側石垣　崩落土　92.5.30、26－17	人形の顔部分、磁器、透明釉、産地時期は不明	32－６
第93図２	大手門第二トレンチ、920916	土人形、近世、中空、型押成形	32－７－２
第93図３	ＳＪＸＸ	非常に軽い、帯状の突起があり、円環状になり、側面に沈線あり	32－７－４
第93図４	大手二ノ門北側石段下、920610	犬？、中実、型押し成形、近世	32－７－１
第93図５	本丸内土塁部、940718	動物の足？	32－７－３
第93図６	大手門階段東側トレンチ木炭層	素焼き製品、軽い、内面は強い焼成を受けている	72－７、８
第93図７	白石高校　ピット　94.10.17	砥石、重量21.3g、幅4.1cm、長さ4cm、厚さ1cm、両面に擦痕がある	
第93図８	大手二ノ門階段溝間、931116	石盤、長さ9.5cm、幅4.4cm、厚さ1.2cm	32－１－２
第93図９	本丸小十郎碑	石盤、長さ4.9cm、幅2.8cm、厚さ0.6cm	32－１－１
第93図10	021113、SJC－１	石盤、長さ7.7cm、幅3.7cm、厚さ0.9cm	32－１－３
	大手二ノ門階段～溝間　93.10.28、SJ192	壁土、２点、6.1g	32－６

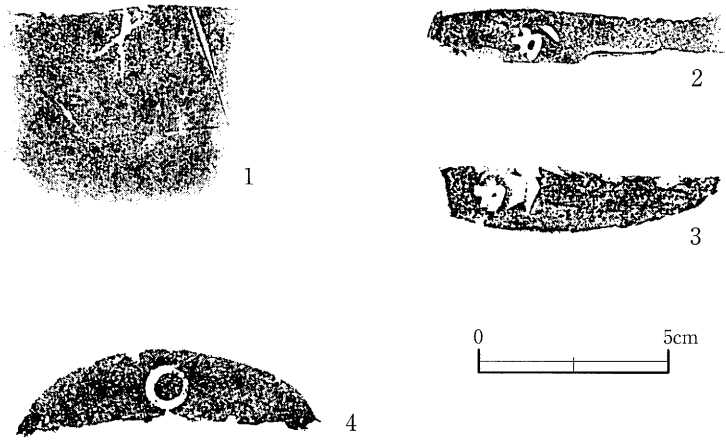
第93図　土人形、石製品等



第94図　出土した石臼

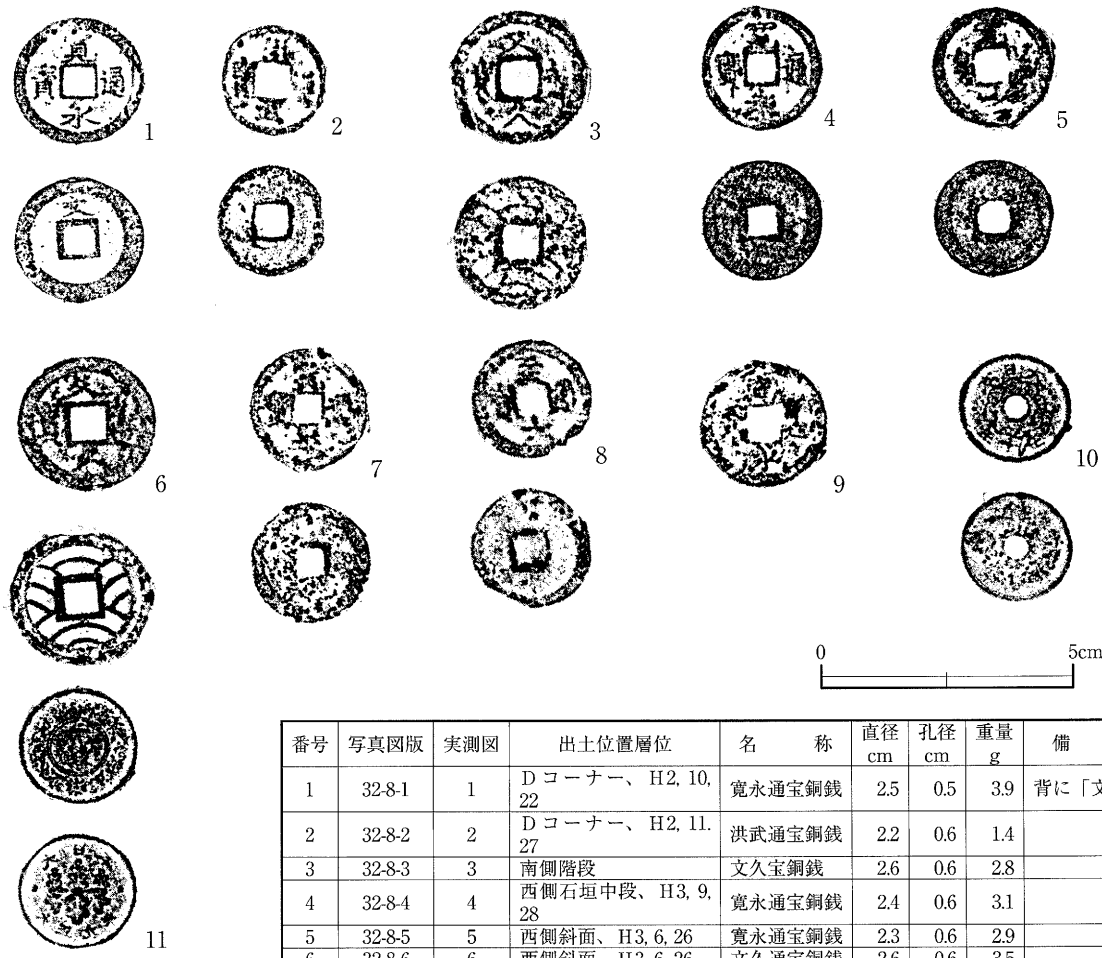


第95図　出土した鉄製品



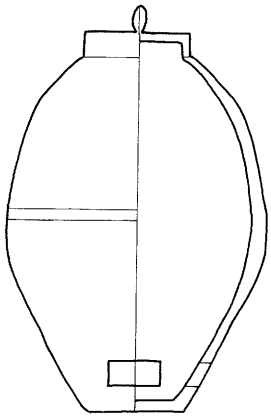
図版番号	出土位置、登録番号	内容	写真図版
第96図１	土塁土留部	ヘラガキで「×」、平瓦	
第96図２	ＳＪＸＸ	刻印で「か」、平瓦	
第96図３	本丸内溝確認面	刻印で「か＞＞＞」、平瓦	
第96図４	ＳＪＸＸ	刻印で「○」、丸瓦尻部	
	上場南東、Ｈ３、９、６	スサ入り土壁、長さ6.5cm、幅4.3cm、厚さ2.1cm、39.8g	31－７
	大手二ノ門脇階段と溝の間、埋土、931107	焼成粘土塊、長さ3.8cm、幅2.5cm、厚さ1.8cm、10.2g	31－６

第96図　文字、刻印のある瓦

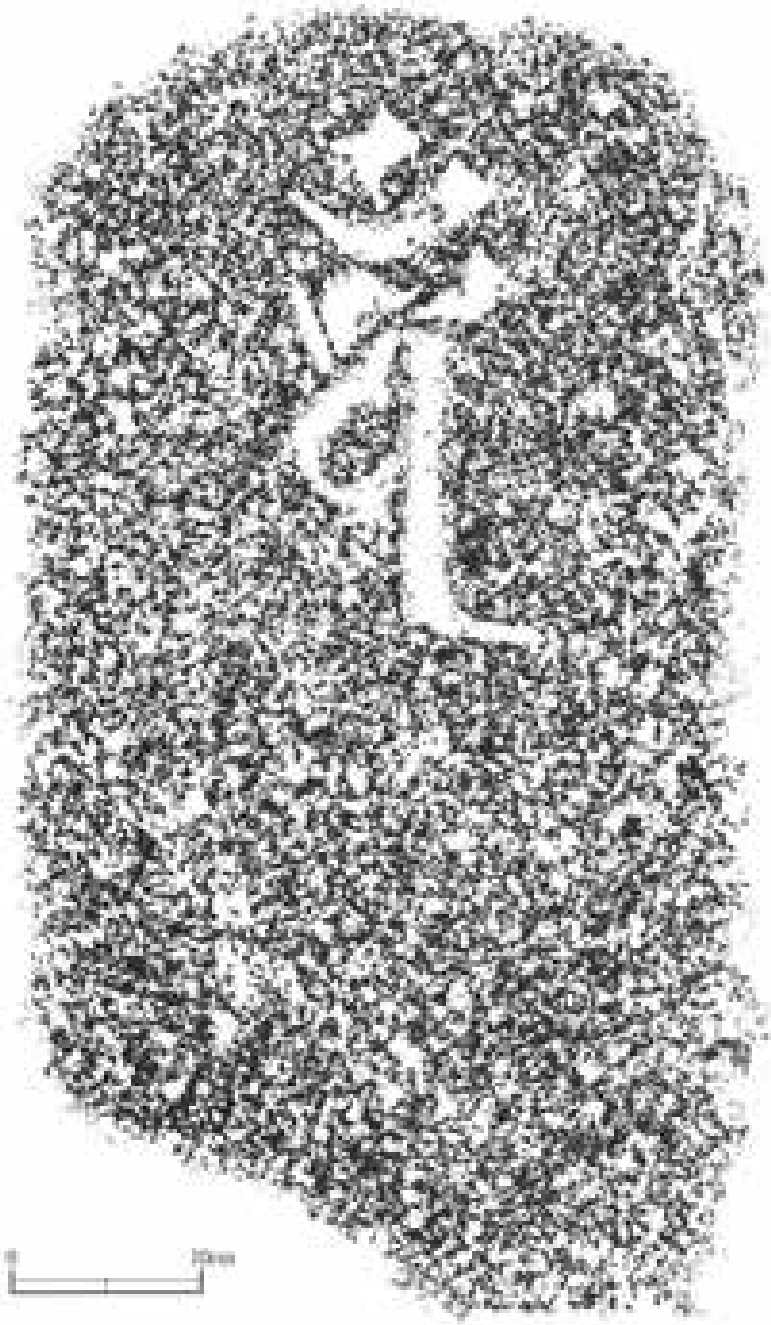


番号	写真図版	実測図	出土位置層位	名　　称	直径 cm	孔径 cm	重量 g	備　　考
1	32-8-1	1	Dコーナー、H2, 10, 22	寛永通宝銅銭	2.5	0.5	3.9	背に「文」
2	32-8-2	2	Dコーナー、H2, 11. 27	洪武通宝銅銭	2.2	0.6	1.4	
3	32-8-3	3	南側階段	文久宝銅銭	2.6	0.6	2.8	
4	32-8-4	4	西側石垣中段、H3, 9, 28	寛永通宝銅銭	2.4	0.6	3.1	
5	32-8-5	5	西側斜面、H3, 6, 26	寛永通宝銅銭	2.3	0.6	2.9	
6	32-8-6	6	西側斜面、H3, 6, 26	文久通宝銅銭	2.6	0.6	3.5	
7	32-8-7	7	東側張出部平場中央床面	寛永通宝銅銭	2.3	0.5	3.1	
8	32-8-8	8	ピット8埋土、93, 11, 15	至大通宝銅銭	2.3	0.6	2.3	
9	33-1-9	9	大手門東階段東トレンチ地山上	判読不明銅貨	2.2	0.6	1.3	
10	33-1-10	なし	大手二ノ門旧溝埋土	判読不明銅貨	2.4	—	2.8	砂が付着
11	33-1-11	なし	2. 10. 22　Dコーナー	寛永通宝銅銭片	2.5	—	3.4	
12	33-1-12	なし	不明	寛永通宝銅銭	2.4	0.6	2.8	孔に加工痕
13	33-1-13	10	不明	大正10年十銭白銅貨	2.1	0.4	3.5	
14	33-1-14	11	不明	大正9年一銭青銅貨	2.2	—	3.5	
15	なし	なし	三階櫓南側石垣部ベルト崩落土	昭和29年10円青銅貨	2.2	—	4.1	
16	なし	なし	大手二ノ門旧溝埋土	判読不明銅貨	—	—	4.7	砂が付着、破損
17	なし	なし	西側石垣崩落土、92, 5, 30	寛永通宝銅銭片	—	—	1.2	
18	なし	なし	本丸石垣脇、93, 9, 22	五銭白銅貨	2.0	—	3.9	年号不明
19	なし	なし	大手一ノ門まわり確認面　92. 8. 7	半銭銅貨	2.2	—	3.2	年号不明

第97図　出土した銭貨



第98図　蒸しカマド略図



第09図　発見された板碑（拓本）S=1/4

第９表　瓦出土量一覧表

種別	三階櫓		石列周辺		大手門		北側井戸		勘定所		ＳＪＸＸ		表採		総計	
	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g
丸　瓦・玉縁	82	26,197	72	23,220	42	13,600	9	2,780	0	0	183	66,880	5	2,300	393	134,977
・体部	157	27,560	194	29,350	93	14,300	34	5,170	4	408	277	49,120	7	790	766	126,698
・頭部	65	17,183	77	21,000	51	10,440	11	1,690	1	510	174	49,790	7	1,420	386	102,033
・完形	4	6,150	3	3,600	2	3,130	0	0	0	0	3	2,850	0	0	12	15,730
板塀瓦・桟付	11	4,330	49	18,180	35	11,530	2	300	0	0	66	22,880	1	70	164	57,290
・溝あり	1	300	30	6,320	22	6,420	7	1,320	0	0	49	16,770	0	0	109	31,130
・完形	1	2,200	1	1,800	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4,000
不明	17	600	53	1,260	20	760	5	93	4	160	35	1,465	2	15	136	4,353
平瓦１類・曲	403	86,228	730	147,500	336	57,612	107	14,230	10	1,680	895	221,620	52	14,460	2,533	543,330
平瓦２類・板・体部	11	1,968	38	9,010	17	3,230	3	430	1	150	71	11,720	1	80	142	26,588
・板・隅部	4	890	15	3,430	3	380	0	0	0	0	48	9,680	4	770	74	15,150
棟瓦	10	5,042	8	2,180	3	1,120	4	1,990	1	270	11	3,940	0	0	37	14,542
軒丸瓦	66	25,751	23	6,800	28	14,720	9	2,920	0	0	40	19,515	3	3,975	169	73,681
軒平瓦	3	1,900	2	616	6	1,840	0	0	0	0	11	7,330	0	0	22	11,686
軒桟瓦	1	250	0	0	5	3,400	0	0	0	0	18	41,530	0	0	24	45,180
桟瓦	0	0	2	550	1	170	0	0	0	0	5	7,370	0	0	8	8,090
輪違い	8	2,861	4	740	25	11,470	1	60	0	0	5	2,260	2	710	45	18,101
平瓦	1	2,760	2	1,300	1	1,080	0	0	0	0	3	4,410	6	7,400	13	16,950
面戸瓦	10	3,160	4	580	1	200	1	200	0	0	8	1,850	3	430	27	6,420
軒平瓦か軒桟瓦	15	3,480	8	1,620	6	1,870	1	50	0	0	7	1,940	1	170	38	9,130
その他	30	14,660	9	3,620	28	12,515	0	0	0	0	25	13,677	0	0	92	44,472
合計	900	233,470	1,324	282,676	725	169,787	194	31,233	21	3,178	1,934	556,597	94	32,590	5,192	1,309,531

第10表　遺物登録番号表

出土位置	略号	金属製品の出土内容	図版番号	合計重量
本丸内土塁土留部　94.6.2	1			
大手門南側石垣　92.9.15	2	小柄櫃、断面三角形の青銅器、長さ24.5cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm	第95図３、写真32－３－１	24.5
第１トレンチベルト下溝堆積土　92.9.29	3			
三階櫓下北側井戸西側断ち割部　94.7.14	4			
北側斜面　H3.7.17	5			
頂部平場　東南隅	6			
北側斜面　H3.7.17	7			
階段西脇白土層　92.7.13	8			
2.10.22　Ｄコーナー	9			
下部北東　H3.5.30	10			
本丸内溝確認面　93.9.27	11			
大手二ノ門裏石垣　93.6.2	12			
大手二ノ門裏通路部分　93.6.25	13			
本丸内溝確認面　93.9.28	14			
未記入	15			
桝形部　93.7.8	16			
大手二ノ門旧溝埋土内　93.11.　１１	17			
	18			
未記入	19			
第２トレンチ　溝確認面上　92.9.29	20			
三階櫓東側突出平場下面土塁積土中、灰褐色土93.3.3	21			
大手門階段下溝　92.7.17	22			
大手二ノ門トレンチ　93.6.25	23	和釘２本以上		171.6
本丸内石垣脇　93.11.21	24	碗形滓？		399.0
大手門階段下溝　92.7.20	25			
西側石垣　崩落土　92.5.30	26			
本丸溝　93.9.27	27			
上場南東ゴミ穴　H3.9.6	28	現代の電気関係か		
大手門　92.9.3	29	和釘		123.1
大手門東側階段崩落土　H4.6.26	30			
第１トレンチベルト　92.9.28	31			
Ｄコーナー　H3.5.29	32			
第２トレンチ　２層　92.9.29	33			
大手門土塁積土　92.7.13				
本丸内溝跡　93.9.24	35			
南斜面下　H3.7.17	36			
三階櫓下北側井戸断割部　94.7.14	37			
桝形部土塁崩落土　93.6.30	38			
下部南東トレンチ　H3.8.28	9	和釘		27.6
上場南東ごみ穴　H3.9.6	40			
	41			
	42			
大手二ノ門道路下土坑No.1堆積土内　92.10.8	43	高師小僧		
大手二ノ門裏通路部分　93.7.2	44			
本丸内溝確認面　93.9.27	45			
大手門北側石垣　H4.7.15	46			
掘立柱　大手一ノ門　柱穴内　93.7.2	47			
第２トレンチ遺構確認面　92.9.29	48			
本丸内土塁土留部　94.6.1	49			
本丸内土塁部　94.7.18	50			
	51			
未記入	52			
未記入	53			
三階櫓西側石垣部崩落土中　92.9.18	54			
東北隅下部　H3.5.30	55			
階段脇　白土下　92.7.13	56			
未記入	57	細い和釘		6.4
南下部　H3.5.30	58	和釘、実測	第95図１、写真32－５	301.4
三階櫓大石（Ⅲ期）大石の北の張出部　92.10.1	59	和釘、新しい針金含む		20.4
大手一ノ門ピット　93.10.18	60	和釘		13.0
大手二ノ門旧溝、93.11.16	61	高師小僧と若干の鉄片		
大手二ノ門旧溝埋土内　93.11.16	62			
南下部　H3.5.29	63			
大手門北側石垣下　92.6.10	64			
大手一ノ門石垣下側溝	65			
大手一ノ門まわり確認面　92.8.7	66	煙管の吸口	第95図２、写真32－３－２	6.4
階段下　白土下層　92.7.13	67			
大手門階段東隣トレンチ　炭化物層	68			
	69			
未記入	70			
大手二ノ門裏石垣　93.6.25	71			
大手二ノ門桝形部土塁確認面　93.5.12	72			
本丸内土塁土留部６～７ピット　94.6.10	73			
三階櫓下北側井戸　94.7.5	74			
大手二ノ門裏　93.7.6	75			

大手一ノ門　92.8.19	76			
	77			
大手門東部分石段　92.6.5	78	和釘		43.8
本丸内石垣脇　93.9.22	79			
大手門北側石段下　92.6.10	80			
本丸内土塁部　94.7.18	81			
06～07　06～07ピット　　94.6.15	82	和釘		10.1
未記入	83			
未記入	84			
大手一ノ門　　92.8.11	85	和釘		7.9
08～09区　08～09間ベルト　94.6.15	86			
三階櫓下　92.7.23	87			
大手二ノ門溝脇　93.10.6	88			
三階櫓平場三時期目ノ大石　92.10.1	89	和釘		10.4
大手門階段東側トレンチ木炭層	90			
本丸内土塁土留部　94.6.1	91	太棒状鉄器		28.3
三階櫓北側下井戸東側区画断割部　94.7.11	92			
大手門　表土　92.7.13	93	鉛、白さび		6.3
大手二ノ門階段脇　炭化物上　93.11.15	94	扁平な鉄器		19.0
遺構確認面　94.10.17	95			
三階櫓階段下　91.8	96	長さ31.6cmの和釘		213.3
白石高校土坑　94.11.2	97	直角に曲がった和釘ほか		69.0
白石高校遺構確認面　94.11.2	98			
本丸内土塁土留部６、７ピット間ベルト　94.6.10	99			
大手二ノ門裏　93.7.2	100			
白石高校　ピット　94.10.17	101			
大手二ノ門旧溝埋土内、93.11.11	102	高師小僧、石		
白石高校　掘り方２　94.11.2	103			
白石高校遺構確認面　94.10.17	104			
白石高校　ピット　94.10.17	105			
大手二ノ門トレンチ　　93.9.22	106			
本丸内土塁土留部石積裏　94.6.2	107	鉄鏃？		40.8
北側井戸　94.6.28	108			
大手二ノ門裏通路部分　93.6.25	109			
南下部　H3.5.31	110			
東側斜面　H3.7.31	111			
大手二ノ門旧溝埋土中　93.11.15	112			
ピット８　埋土　93.11.15	113			
	114			
大手門階段下崩落土　92.7.3	115	和釘	第95図４、写真32－４	103.0
大手二ノ門旧溝、底面　93.11.15	116			
	117			
未記入	118			
本丸内土塁土留部　６、７ピット　94.6.10	119			
本丸内石列部　95.1.6	120			
東側下部平場	121			
大手二ノ門旧溝出土　93.9.20	122			
掘り方１　94.11.2	123	？		
西石垣　H3.6.6	124			
	125			
白石高校　ピット１　94.11.2	126			
大手二ノ門裏石垣下　H5.6.16	127			
北側斜面　H3.7.31	128			
白石高校　柱穴２　94.11.2	129			
白石高校　柱穴４　94.11.2	130			
南側階段　H3.6.18	131			
三階櫓北側下井戸区画東側溝　94.7.11	132			
上場南東ごみ穴　H3.9.6	133			
本丸内土塁土留部６、７ピット　94.6.10	134			
東南隅トレンチ黒色土中　H3.9.12	135			
未記入	136			
井戸北側　94.6.27	137	18.7cmの和釘		134.0
三階櫓北側下井戸西側断割部　94.7.15	138			
本丸内石垣脇　93.9.24	139			
08　たたき石内　94.6.15	140			
白石高校　溝　94.11.2	141			
	142			
南東部上場　H3.9.12	143			
大手二ノ門古溝内　93.11.5	144			
	145			
頂部平場　　Ａコーナー　9.25	146			
本丸内排水溝確認面　94.6.10	147			
上場南東ゴミ穴　H3.9.7	148			
未記入	149			
本丸内土塁土留部　94.6.2	150			
南側斜面　H3.7.31	151	和釘		37.1
東側張出部平場中央床面　6.12	152	高師小僧		
西側斜面　H3.6.26	153			
未記入	154			
南側斜面　H3.7.31	155			
大手二ノ門桝形部土塁確認面	156			

南石垣下部床面	157			
三階櫓下井戸北側断割部	158			
未記入	159			
北側石垣下部　H3.9.25	160			
未記入	161			
三階櫓階段部　H3.8.29	162			
下部　6.11	163	和釘と石が付着している		172.0
三階櫓東側石垣下平担場、確認面下の黒色土（炭化物層）中より出土　H3.9.6	163			
本丸内溝確認面　93.9.27	164	高師小僧		
大手二ノ門旧溝埋土内　93.11.16	165			
大手二ノ門旧溝埋土中　93.11.16	166	和釘片		8.1
下部南東トレンチ　H3.8.28	167			
下部南　H3.8.28	168			
大手二ノ門新溝上面　93.11.1	169			
大手二ノ門脇階段と溝の間　埋土　、93.11.17	170	小刀？		45.6
西斜面トレンチ　H3.7.3	171	板状鉄器		70.7
下部東北　H3.5.30	172	金槌		513.0
南石垣下部床面	173	和釘		71.8
北側斜面　　H3.7.17	174	和釘ほか		219.0
未記入	175			
未記入	176	石、高師小僧		52.6
未記入	177			
大手二ノ門旧溝断面　93.11.16	178	陶器に高師小僧が付着		29.3
三階櫓北側下井戸断割部　94.7.11	179			
大手門東側石段下　崩落土　92.7.9	180			
白石高校内　土坑２　94.11.2	181			
大手二ノ門第１トレンチ　92.9.16	182			
未記入	183			
未記入	184	白い軟質石		
未記入	185			
大手門北側石段　92.6.29	186	細い扁平鉄器		100.0
三階櫓南側石垣部ベルト部（崩壊土）　92.9.18	187	細長い鉄器		131.0
本丸内溝跡　H6.5.25	188			
上場南東ゴミ穴　H3.9.6	189			
大手二ノ門第２トレンチ　92.9.16	190			
桝形部入隅の奥、本丸内土塁下検出土坑　底面 93.11.5	191			
大手二ノ門階段～溝間　93.10.28	192			
未記入	193			
大手二ノ門新溝下面（焼面）　93.11.1	194			
大手二ノ門溝跡　93.9.21	195			
本丸内土塁土留部６ピット　94.6.10	196			
未記入	197			
大手門東階段東トレンチ地山上　92.7.27	198			
	199			
大手二ノ門階段東側トレンチ　木炭層内　92.7.20	200			
大手二ノ門階段下溝　　92.7.20	201			
大手二ノ門階段下崩落土内　　92.7.3	202	金槌？	第95図５、写真32－２	308.0
Ａコーナーピット２層　H2.12.4	203			
南側階段	204			
Ｄコーナー　H2.11.27	205			
南側階段	206	和釘		160.6
南側石垣下部　6.11	206			
H3.7.31、北側斜面		輪状鉄器		25.0
H4.9.1、大手二ノ門石垣下側溝、溝内覆土、トレンチ内出土		石、炭、高師小僧ほか		340.0
不明		和釘ほか		284.0
93.9.20　大手二ノ門旧溝		小片鉄片		1.7
92.9.16　大手二ノ門第２トレンチ		Ｌ字状和釘		11.2
H3.7.31　北側裏込め中		端が曲がった鉄器		54.2
94.6.10　本丸内土塁土留部６，７ピット		鉄製品		14.8
94.6.15　06～07ピット１		和釘		22.2
不明		幅広い帯状鉄製品		85.3
93.11.11大手二ノ門旧溝底面		鉄片		15.7

第11表　出土瓦の観察表

図版番号	出土区、層位	種　別	特徴１	写真図版
第70図１	東下部	軒丸瓦	連珠巴文、左巻き、瓦当直径14.5cm、瓦当内径11cm、周縁高0.6cm、瓦当高1.9cm	65－１、２
第70図２	東下部	菊丸瓦		65－３
第70図３	Ｃ１	菊丸瓦		65－４
第70図４	Ｃコーナー南西隅	菊丸瓦		65－５
第70図５	南下部	軒丸瓦	連珠巴文、左巻き	
第70図６	東下部	軒丸瓦	連珠巴文、左巻き	
第70図７	西斜面トレンチ	軒丸瓦	三引両文	
第70図８	南下部	軒丸瓦	三引両文	
第70図９	西斜面トレンチ	軒丸瓦	三引両文	
第70図10	下部南側	軒丸瓦	連珠巴文、左巻き	
第70図11	東下部	軒丸瓦	九曜文	
第70図12	東下部	軒桟瓦	連珠巴文、左巻き、不明	
第70図13	東下部	軒平瓦	唐草文	
第70図14	東下部	軒平瓦	唐草文	
第70図15	東側斜面	軒平瓦	細葉雪持笹、唐草文	65－６
第70図16	東下部	軒平瓦	太葉雪持笹、唐草文	
第70図17	西側斜面	軒平瓦	唐草文	
第71図１	南側石垣部	板塀瓦		65－７、８
第71図２	東下部	棟込瓦	三引両文、瓦当直径11.5cm、瓦当内径9.4cm、周縁高0.9cm、瓦当高1.9cm、長さ14cm	66－１、２
第71図３	南側石垣ベルト部	棟込瓦	三引両文、瓦当直径11.5cm、瓦当内径9.5cm	
第71図４	東下部	棟込瓦	三引両文、瓦当直径11.5cm、瓦当内径9cm	67－１
第71図５	東下部	棟込瓦	三引両文、瓦当直径11.5cm、瓦当内径9.5cm	
第71図６	東下部	棟込瓦	三引両文	
第71図７	東下部	棟込瓦	三引両文	
第71図８	北側斜面	面戸瓦	幅12.7cm、長さ9.5cm、高さ6cm	66－３、４
第71図９	東下部	面戸瓦	幅13.7cm、長さ9cm、高さ6.8cm	66－５、６
第72図１	平場南側	谷丸瓦	残存長17cm	66－７、８
第72図２	下部東北部	谷丸瓦	残存長17.5cm	
第72図３	櫓下西側断割部	谷丸瓦？	残存長13.5cm	67－３の２
第72図４	南側石垣部ベルト	丸瓦	尻幅13.6cm、玉縁長3cm、胴長26cm、高さ3.7cm	
第73図１	下部南西トレンチ	平瓦	残存長10.5cm	
第73図２	東側下部平場	谷丸瓦？	残存長10.6cm	
第73図３	南下部	平瓦		
第73図４	東側石垣下部	平瓦	沈線	
第73図５	南下部	平瓦	沈線文	
第73図６	三階櫓下部	板塀瓦？	沈線	
第73図７	東側土垣下部	鬼瓦		67－２
第73図８	東下部	鬼瓦？		67－７
第73図９	三階櫓下	鯱瓦	耳部分か	67－６
第73図10	東下部	鬼瓦		67－４
第74図１	本丸内井戸	軒丸瓦	三引両文、瓦当直径16cm、瓦当内径12.8cm、周縁高0.3cm	69－１
第74図２	06～07ピット	軒丸瓦	連珠三巴文、左巻き、周縁高0.8cm、瓦当厚2.3cm	
第74図３	07～08ピット	軒平瓦	太葉雪持笹、唐草文、文様区高4.5cm、瓦当高5.7cm、瓦当厚1.9cm	
第74図４	土塁部	軒平瓦	唐草文、文様区高4.5cm、瓦当高6cm、瓦当厚1.7cm	
第74図５	07～08ピット	棟込瓦	三引両文、瓦当直径11.7cm、瓦当内径9.7cm、瓦当厚2.2cm	
第74図６	土留部、６、７ピット	板塀瓦右桟	全幅27.8cm、桟幅3.8cm、桟は剥落、２孔あり	68－７
第74図７	土留部、６、７ピット	平瓦	幅25cm、長さ25.1cm、谷深2.2cm	68－８
第74図８	本丸内土塁部	平瓦	隅切瓦	
第74図９	土塁土留部６ピット	丸瓦		69－３の１
第75図１	土塁土留部６～９ピット	平瓦	隅切瓦	
第75図２	土塁土留部	平瓦	隅切瓦	
第75図３	三階櫓東側突出平場下面	袖瓦？	接合痕	
第75図４	土塁土留部６ピット	平瓦	右端に沈線	
第75図５	土塁部	平瓦	隅切瓦	69－２
第75図６	土塁土留部６、７ピット	平瓦	隅切瓦	
第75図７	東側下部平場	平瓦	平行沈線文	

第76図１	二ノ門階段下溝	軒丸瓦	三引両文、瓦当直径16cm、瓦当内径11.5cm、周縁高0.4cm、瓦当厚1.6cm	
第76図２	大手門階段崩落土	軒丸瓦	三引両文、瓦当直径15.9cm、瓦当内径13cm	69－８の１
第76図３	桝形部土塁崩落土	軒丸瓦	連珠巴文、左巻き、瓦当厚2cm、周縁高0.5cm	69－４
第76図４	二ノ門裏通路部分	軒丸瓦	三引両文、瓦当厚2.7cm	
第76図５	二ノ門裏通路部分	軒丸瓦	三引両文、瓦当厚2.3cm	
第76図６	二ノ門平場	軒丸瓦	連珠三巴文、右巻き、周縁高0.7cm、瓦当厚2.5cm	
第76図７	二ノ門北側石段下	軒桟瓦	九曜文	71－５の１
第76図８	二ノ門１トレンチ	軒丸瓦	三引両文、瓦当直径15.4cm、瓦当内径12cm	
第76図９	二ノ門裏通路部分	軒丸瓦	三引両文	
第76図10	大手一ノ門	軒丸瓦	連珠三巴文、瓦当直径15.6cm、瓦当内径12cm、周縁高0.8cm、瓦当厚3.5cm	69－７
第76図11	二ノ門旧溝	軒平瓦	太葉雪持笹、唐草文、瓦当厚1.7cm	
第76図12	二ノ門	軒平瓦	唐草文、文様区高3.7cm、文様区幅13cm、瓦当高5.1cm、瓦当厚1.9cm、周縁高0.4cm	
第76図13	大手門	鳥伏間	三引両文、三角形の孔、瓦当厚3cm	
第77図１	大手門階段下	軒桟瓦	九曜文、唐草文、瓦当直径9.6cm、瓦当内径8cm、瓦当厚2cm、文様区幅15cm、文様区高3.5cm、瓦当厚1.5cm、焼成後穿孔	70－１、２
第77図２	階段下溝内	軒丸瓦	三引両文、瓦当直径15.3cm、瓦当内径11.7cm、周縁高0.4cm、瓦当厚1.9cm、焼成後穿孔	69－５、６
第77図３	大手門階段下	丸瓦	胴長27.5cm、玉縁長2.5cm、尻幅15.5cm	71－１
第78図１	掘立柱大手一ノ門柱穴内	棟込瓦	三引両文、瓦当直径12cm、瓦当内径9.8cm、周辺高0.4cm瓦当厚2.2cm	69－８の２
第78図２	二ノ門東側石段下	輪違い	上幅6.6cm、下幅14.6cm、長さ13.5cm、高6.2cm	70－３、４
第78図３	大手門階段下	輪違い	上幅6.2cm、下幅15.2、長さ14.2cm、高さ6.2cm	
第78図４	大手門階段下	輪違い	下幅14.8cm、長さ15.1cm、高さ6.4cm	70－５、６
第78図５	二ノ門１トレンチ	輪違い	上幅7cm、下幅14.8、長さ12.8cm、高さ6.8cm	70－７、８
第78図６	二ノ門裏石垣	板塀瓦？		
第78図７	大手門階段脇白土下	丸瓦	焼成前穿孔２カ所	71－６の２
第78図８	二ノ門裏石垣	隅切瓦		
第78図９	二ノ門道路下土坑NO、１	隅切瓦？		
第79図１	二ノ門第２トレンチ北側	鬼瓦	眼の部分か、厚6cm	72－１の１
第79図２	二ノ門１トレンチ	鬼瓦	「文政」の文字あり	71－８、写真図版17－８
第79図３	二ノ門トレンチ	鬼瓦		72－３
第79図４	二ノ門１トレンチ	鬼瓦	厚6cm	72－２
第79図５	二ノ門第１トレンチ	鬼瓦	厚3.8cm	72－４
第79図６	大手門西側石垣	鬼瓦	厚2.5cm	72－５、６
第79図７	大手一ノ門石捨場跡上面	鬼瓦	厚5.5cm	71－２
第79図８	二ノ門裏石垣	鯱瓦	厚3cm、鰭部分か	71－３、４
第79図９	大手二ノ門トレンチ	鬼瓦	厚2.5cm、巴文か、推定直径52cm	71－６の１
第79図10	二ノ門東側階段	鯱瓦		71－７の３
第79図11	二ノ門裏	鯱瓦	厚1.4cm	71－５の２
第79図12	二ノ門１トレンチベルト	鯱瓦		71－７の２
第80図上１	本丸内	軒丸瓦	三引両文、瓦当直径15cm、瓦当内径11.5cm、周縁高0.4cm、瓦当厚1.2cm、尻幅9.4cm、玉縁長2.5cm、胴長29.8cm、焼成前穿孔	68－６
第80図上２	勘定所遺構確認面	平瓦	沈線、厚1.5cm	
第80図上３	勘定所遺構確認面	平瓦		
第80図上４	勘定所、柱穴１	丸瓦		
第80図下１	北側井戸西側断割部	軒丸瓦	三引両文	
第80図下２	北側井戸	軒丸瓦	三引両文、瓦当厚2.3cm、周縁高0.5cm	
第80図下３	北側井戸	軒丸瓦	三引両文	
第80図下４	北側井戸	軒丸瓦	三引両文、瓦当厚2.5cm、周縁高0.5cm	
第80図下５	北側井戸	軒丸瓦	連珠三巴文、右巻き、瓦当厚2.6cm、周縁高0.5cm	
第80図下６	北側井戸西側断割部	平瓦	沈線、厚2.1cm	
第80図下７	北側井戸	軒桟瓦	連珠三巴文、右巻き、唐草文、瓦当厚２cm、周縁高0.6cm	
第81図１	未申櫓跡本丸側斜面	丸瓦	頭幅14cm、尻幅14.5cm、胴長25cm、玉縁長3.8cm、高4.2cm	76－５
第81図２	未申櫓跡白高側斜面	輪違い	上幅4.5cm、長さ11.8cm	
第81図３	未申櫓跡本丸側斜面	平瓦	長さ25.8cm	
第81図４	未申櫓跡平場	輪違い	上幅5.5cm、長さ11.8cm	
第82図１	ＳＪＸＸ	軒丸瓦	三引両文、瓦当直径15.5cm、瓦当内径11.5cm、周縁高0.5cm、瓦当厚2cm	76－３
第82図２	ＳＪＸＸ	軒丸瓦	連珠三巴文、左巻き	74－８

第82図３	ＳＪＸＸ	軒丸瓦	連珠三巴文、右巻き、瓦当直径16.3cm、瓦当内径12.5cm、周縁高0.5cm、瓦当厚2.4cm、胴長28.2cm、玉縁長3.7cm	73－１、２
第82図４	ＳＪＸＸ	軒丸瓦	三引両文、瓦当直径15cm、瓦当内径11.5cm、周縁高0.4cm、瓦当厚2cm	
第82図５	ＳＪＸＸ	軒桟瓦	九曜文、唐草文、瓦当直径10cm、瓦当内径8.3cm、瓦当厚1.8cm、周縁高0.4cm、文様区幅14.6cm、文様区高3.5cm、瓦当厚1.8cm、焼成後穿孔	73－５、６
第83図１	ＳＪＸＸ	軒桟瓦	巴文、右巻き、唐草文、瓦当直径7.4cm、瓦当内径5.4cm、瓦当厚1.9cm、周縁高0.7cm、文様区幅14cm、文様区高3.9cm、穿孔	
第83図２	ＳＪＸＸ	軒桟瓦	万十、瓦当直径8.5cm、瓦当厚3.1cm、瓦当幅29.5cm、長さ28.1cm、焼成前穿孔	74－３、４
第83図３	ＳＪＸＸ	軒桟瓦	九曜文、唐草文、瓦当直径9.8cm、瓦当内径8cm、瓦当厚1.9cm、周縁高0.3cm、文様区幅14.3cm、文様区高3.7cm、瓦当厚1.8cm、焼成前穿孔	73－３、４
第84図１	ＳＪＸＸ	軒桟瓦	九曜文、唐草文、瓦当直径9.5cm、瓦当内径8cm、瓦当厚1.7cm、周縁高0.4cm、文様区幅15cm、文様区高3.5cm、瓦当厚1.8cm、焼成前穿孔	73－７、８
第84図２	ＳＪＸＸ	軒桟瓦	巴文、左巻き、唐草文、瓦当直径8.7cm、瓦当内径5.7cm、瓦当厚2.2cm、周縁高0.7cm、文様区幅14cm、文様区高３cm、瓦当厚1.8cm、焼成前穿孔２、焼成後穿孔１	74－１、２
第84図３	ＳＪＸＸ	軒桟瓦	連珠、巴文、右巻き、草花文か、瓦当直径7.2cm、瓦当内径4.8cm、瓦当厚1.8、周縁高0.4cm、文様区幅14.6cm、文様区高2.6cm、瓦当厚2.1cm、焼成前穿孔、筋状の文様	74－５、６、７
第84図４	ＳＪＸＸ	軒平瓦	唐草文、瓦当幅25.5cm、瓦当高9cm、文様区幅18.2cm、文様区高4.5cm、周縁幅0.9cm、弧深3.3cm、焼成後穿孔	75－１、２
第84図５	ＳＪＸＸ	左刻み袖瓦	唐草文、瓦当幅24.5cm、瓦当高2.8cm、文様区幅13.8cm、文様区高2.6cm、周縁幅5.3cm、弧深3cm、焼成前穿孔２、焼成後穿孔１	75－３、４
第85図１	ＳＪＸＸ	棟込瓦	三引両文、瓦当直径14cm、瓦当内径12.3cm、周縁高0.5cm、瓦当厚2.3cm	75－６
第85図２	ＳＪＸＸ	棟込瓦	三引両文、瓦当直径11cm、瓦当内径9.5cm、周縁高0.3cm、瓦当厚1.9cm	
第85図３	ＳＪＸＸ	棟込瓦	三引両文、瓦当直径11cm、瓦当内径9.3cm、周縁高0.3cm、瓦当厚1.8cm	
第85図４	ＳＪＸＸ	棟込瓦	三引両文、瓦当直径11.8m、瓦当内径9.6cm、周縁高0.3cm、瓦当厚2.1cm	
第85図５	ＳＪＸＸ	棟込瓦	三引両文、瓦当直径11.4cm、瓦当内径9.6cm、周縁高0.3cm、瓦当厚1.9cm	
第85図６	ＳＪＸＸ	鬼瓦	長さ17.5cm	76－４
第85図７	ＳＪＸＸ	鬼瓦	長さ28.5cm、厚さ7.5cm	75－７
第85図８	ＳＪＸＸ	鬼瓦	長さ12.3cm、厚さ12cm	75－８
第85図９	ＳＪＸＸ	鬼瓦？	長さ8.5cm、2.1cm	
第85図10	ＳＪＸＸ	隅切り瓦	長さ10cm、厚さ1.8cm	
第85図11	ＳＪＸＸ	平瓦	沈線、長さ13cm、厚さ1.4cm	
第85図12	ＳＪＸＸ	平瓦	平坦な突起、長さ8.1cm、厚さ2.2cm	
第85図13	ＳＪＸＸ	丸瓦	頭部、長さ10cm、厚さ1.9cm	69の３の２
第86図１	ＳＪＸＸ	袖瓦？	沈線、長さ11cm、厚さ1.9cm	
第86図２	ＳＪＸＸ	加工痕のある平瓦	長さ11cm、厚さ1.8cm	
	ＳＪＸＸ	屈曲のある丸瓦	長さ12.5cm	67－３の１
	東側石垣	鬼瓦	長さ16.8cm、厚さ10cm	67－５
	大手二ノ門道路下土坑NO.１、921008	鬼瓦	長さ11.4cm、幅3.5cm	71－７の１
	大手二ノ門、930901	鬼瓦	長さ12cm、厚さ4.5cm	72－１の２
	ＳＪＸＸ	平瓦	「か」字あり、頭幅23cm、尻幅23.5cm、長さ25cm、谷深2.9cm	75－５
	本丸跡表採	軒丸瓦	三引両文、瓦当直径15.8cm、瓦当内径11.4cm、周縁高0.6cm、瓦当厚1.8cm、尻幅9cm、玉縁長2.2cm、胴長29.8cm、焼成前穿孔	76－１、２

第12表　発見された敵機識別模型のデータ

番　号	出土区、層位	種　別	特徴１	写真図版
1	三階櫓の平場の南東隅穴	爆撃機	エンジン２基、後部に銃座３基、全長23.3cm、主翼長33.7cm、高さ4.8cm、垂直尾翼なし、底面に直径0.8cmの穴、主翼の左側に○に☆印	67－８
2	〃	爆撃機	エンジン２基、後部に銃座１基、全長15.43cm、主翼長19.4cm、高さ2.4cm、垂直尾翼なし、底面に直径0.8cmの穴	68－１
3	〃	爆撃機	エンジン４基、操縦席上に銃座１基、全長22.3cm、主翼長30.6cm、高さ３cm、垂直尾翼あり、底面に直径0.8cmの穴、プロペラの一部残存	68－２
4	〃	爆撃機	エンジン４基、銃座あり（欠落している）、全長18.5cm、主翼長29.8cm、高さ2.7cm、垂直尾翼あり、底面に直径0.8cmの穴、主翼左右に☆印、エンジン４つのうち、２つは大きい	68－３
5	〃	爆撃機	エンジン４基、銃座は不明、全長18.6cm、主翼長32.3cm、高さ3.5cm、垂直尾翼なし、底面に直径0.8cmの穴、主翼の左右に○に☆印	68－４
6	〃	戦闘機	エンジン２基、後部に銃座１基、全長24cm、主翼長21.3cm、高さ2.3cm、垂直尾翼は欠落、底面に直径0.8cmの穴、主翼の左側に☆印	68－５
7	〃	ＰＢ２Ｙ コロネード飛行艇	エンジン４基、後部に銃座１基、全長22.7cm、主翼長33.6cm、高さ4.8cm、水平尾翼長11.8cm、垂直尾翼なし、底面に直径0.8cmの穴、主翼の左側に○印、プロペラ一部残存	34－１
8	〃	ＰＢＹ カタリナ飛行艇	エンジン２基、前方に銃座１基、後部に銃座２基、全長19.4cm、主翼長29.8cm、高さ４cm、垂直尾翼なし、底面に直径0.8cmの穴	34－２

第13表　石臼のデータ

図版番号	出土区、層位	種　別	特徴１	写真図版
第94図１	東側石垣裏	石臼	長さ25.1cm、厚さ12.8cm、溝は７条、4,200g	写真76－６、７
第94図２	東側下部井戸周辺	石臼	長さ17.8cm、厚さ8.4cm以上、溝は８条、2,400g	写真76－８
第94図３	三階櫓西側石垣部	石臼	長さ17.6cm、厚さ11.6cm、2,300ｇ	写真77－１

第14表１　陶磁器等データ一覧

番号１	番号２	種別	産地	時代	特徴	備考
137-8		ガラス製品		近代以降		
101-1		陶器	大堀相馬	18世紀～19世紀	灰釉土瓶	
101-15		陶器	大堀相馬	18世紀～19世紀	灰釉皿	
101-17		陶器	大堀相馬	18世紀～19世紀	灰釉瓶類	
101-2		陶器	大堀相馬	18世紀後半	発色悪い（不純物）、白濁釉碗、あめ釉流し、口径11.6cm、器高4.6cm、底径4.7cm	第92図４
101-10	101-９、20、183-30、141-4	陶器	大堀相馬	19世紀、明治	灰釉端反り碗、口径8,8cm、器高4.7cm、底径3.3cm	第92図６
101-30		陶器	大堀相馬	18世紀～19世紀	皿？灰釉	
141-11	183-4、101-3	陶器	大堀相馬	19世紀前半～中頃	緑釉、端反り碗、口径9.3cm、器高5cm、底径3.4cm	第92図８
101-4	101-7	陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉、あめ釉流し、小型碗端反り碗、口径8.6cm、器高4.7cm、底径3.2cm	第92図３
104-1		陶器	大堀相馬	明治以降	灰釉	
105-1		陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉、端反り碗、口径9.2cm、器高5cm、底径3.7cm	第92図５
105-3		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
109-1		陶器	大堀相馬	19世紀前半～中頃	呉須、鉄絵、燗徳利	
109-2		陶器	大堀相馬	不明	びん類	
109-4		陶器	大堀相馬	19世紀前半～中頃	呉須、鉄絵、燗徳利	
112-1		陶器	大堀相馬	19世紀前半	鉄絵の皿	
112-2	112-3	陶器	大堀相馬	19世紀	鉄絵馬文碗、地の釉は灰釉薬	接合
133-14	69-2、69-7、69-8	陶器	大堀相馬	19世紀？	灰釉鉢、輪花、目跡、口径14.4cm、器高6.2cm、底径5.9cm	第90図２
116-1		陶器	大堀相馬	19世紀中頃以降	鉄釉碗	
121-3		陶器	大堀相馬	19世紀前半	とびかんな文様、鉄釉、土鍋	
123-1	123-3	陶器	大堀相馬	18世紀後半？	小型灰釉碗、口径7.9cm、器高4.8cm、底径3.3cm	第92図７
124-2		陶器	大堀相馬	19世紀前半	鉄絵土瓶	
139-1		陶器	大堀相馬	18世紀後半？	白濁釉碗	
141-2		陶器	大堀相馬	18世紀後半？	小型灰釉碗、	
141-3		陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉	
141-9		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉小型碗か小杯	
142-2		陶器	大堀相馬	18世紀後半？	白濁釉、小型碗	
143-2		陶器	大堀相馬	19世紀前半	鉄釉の鍋	
143-13	143-5、12	陶器	大堀相馬	19世紀	白濁釉急須、直径8cm、器高5.8cm	第87図10
149-10		陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	
149-15	175-12、175-29	陶器	大堀相馬	19世紀前半	色絵、土瓶とフタ	同一個体
149-21	149-23	陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	同一個体
150-1		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
150-17		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗？（びん類）	
150-23		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
155-3	155-4	陶器	大堀相馬	19世紀中頃	とびかんな文様、鉄釉、土鍋の蓋	第87図１６
160-1		陶器	大堀相馬	18世紀以降	灰釉皿、目跡	
169		陶器	大堀相馬	19世紀前半～中頃	呉須、鉄絵、燗徳利	
169-3		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
17-1		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
174-8		陶器	大堀相馬	19世紀	燗徳利	
175-1		陶器	大堀相馬	19世紀前半～中頃	灰釉、燗徳利	同一個体
175-16		陶器	大堀相馬	19世紀前半	鉄絵	
175-22		陶器	大堀相馬	19世紀	灰釉土瓶？	
175-25		陶器	大堀相馬	19世紀前半	灰釉土瓶	接合同一個体
175-28		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉皿、玉縁	
175-30		陶器	大堀相馬	19世紀前半～中頃	土瓶、色絵、山水文？	
175-31	175-6、20-2	陶器	大堀相馬	19世紀	鉄絵土瓶	同一個体
175-34		陶器	大堀相馬	19世紀前半～中頃	呉須、鉄絵土瓶、長さ6.7cm、口径1.4cm	第90図５
176-2		陶器	大堀相馬	19世紀前半～中頃	灰釉皿、玉縁状	
176-27		陶器	大堀相馬	19世紀	白濁釉、徳利	
176-39		陶器	大堀相馬	19世紀前半	鉄絵	
176-40		陶器	大堀相馬	19世紀前半	鉄絵	
176-58		陶器	大堀相馬	18世紀以降	灰釉、びん類	
178-2		陶器	大堀相馬	18世紀以降	灰釉	和釘が附着
180-1		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉鉄釉掛分碗	
180-9		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
18-1		陶器	大堀相馬	19世紀前半	灰釉碗	
182-10		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
182-15		陶器	大堀相馬	明治	鮫肌土瓶	
182-8		陶器	大堀相馬	18世紀後半	白濁釉	
183-1	101-1	陶器	大堀相馬	19世紀	鉄絵走馬文、小型碗	接合
183-11		陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉端反碗	
183-12		陶器	大堀相馬	18世紀後半以降	白濁釉碗	
183-14		陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉、鉄絵の碗	
183-15		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
183-18		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
183-20		陶器	大堀相馬	18世紀後半以降	白濁釉碗	
101-11	185-3、2、25	陶器	大堀相馬	19世紀	白濁釉、鉄絵走馬、口径7.2cm、器高5.1cm、底径3.8cm	第90図７
183-26		陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉小型碗、鉄絵	
183-27		陶器	大堀相馬	18世紀後半以降	白濁釉碗	
183-28		陶器	大堀相馬	18世紀後半	灰釉折縁輪花皿	

183-29		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
183-3		陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉、鉄絵の碗	
183-32	183-34、193-35	陶器	大堀相馬	18世紀後半以降	白濁釉碗	同一個体
183-36		陶器	大堀相馬	18世紀後半以降	白濁釉徳利	
183-6		陶器	大堀相馬	18世紀後半？	小型灰釉碗	
183-7		陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉端反碗	
183-8		陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉、青釉流し、碗	
183-9		陶器	大堀相馬	18世紀後半	灰釉にアメ釉流し椀	
18-4		陶器	大堀相馬	19世紀前半	土瓶、鉄絵	
185-1		陶器	大堀相馬	幕末～明治	走馬文、呉須絵、白濁釉、小型碗、口径7.2cm、器高5.6cm、底径3.8cm	第92図９
185-2		陶器	大堀相馬	19世紀	鉄絵走馬文、小型碗、口径6.7cm、器高5.7cm、底径3.7cm	第90図６
185-24		陶器	大堀相馬	18世紀後半	灰釉にアメ釉流し椀	
185-4		陶器	大堀相馬	18世紀後半	白濁釉碗	
186-11		陶器	大堀相馬	19世紀前半	鉄絵の皿	
186-6		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉片口か鉢、玉縁	
187-13		陶器	大堀相馬	19世紀	土瓶、鉄絵	
187-19		陶器	大堀相馬	19世紀	灰釉土瓶	
187-24	187-43	陶器	大堀相馬	19世紀前半～中頃	鉄絵土瓶、耳あり（取れている）、注ぎ口も壊れている	接合
187-39		陶器	大堀相馬	19世紀前半～中頃	灰釉皿、玉縁状	
187-6		陶器	大堀相馬	18世紀～19世紀	土瓶	
190-1	190-52、190-59	陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	同一個体
190-13	190-34、190-61	陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	同一個体
190-18		陶器	大堀相馬	18世紀～19世紀	鉄釉瓶類	
190-19	190-17	陶器	大堀相馬	19世紀前半？	土瓶底部	接合
190-2		陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	
190-22		陶器	大堀相馬	18世紀後半？	灰釉にあめ釉流し碗	
190-25		陶器	大堀相馬	19世紀前半	鉄絵皿	
190-47		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉	
190-49		陶器	大堀相馬	19世紀前半	土瓶底部片、灰釉？	
190-5	190-68、190-69	陶器	大堀相馬	19世紀前半	鉄絵土瓶	接合同一個体
190-5	190-13	陶器	大堀相馬	19世紀前半	青色土瓶	接合
190-50		陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	
190-57		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉鉄釉掛分碗	
190-58		陶器	大堀相馬	19世紀前半？	土瓶底部	
190-62		陶器	大堀相馬	19世紀以降	鉛釉徳利	
190-66		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉	
190-67		陶器	大堀相馬	19世紀中頃以降	上絵づけ（色絵）、土瓶？	
190-8		陶器	大堀相馬	19世紀前半	土瓶？	
19-2		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉、鉄釉、掛け分け碗	
192-1		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
192-14		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
192-6	186-9	陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	接合
20-1	20-3	陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	接合
201-2	201-1	陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉、土瓶蓋、最大径9.1cm、器高2.8cm、底径6.4cm	第89図２
210-1	210-18	陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉、端反り碗、口径8.4cm、器高4.8cm、底径3.4cm	第92図２
210-10		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
210-11		陶器	大堀相馬	不明	灰釉鉢	
210-12		陶器	大堀相馬	18世紀	掛け分け、灰釉、鉄釉	
210-2		陶器	大堀相馬	不明	灰釉鉢	
210-22		陶器	大堀相馬	不明	灰釉碗	
210-4		陶器	大堀相馬	18世紀後半	灰釉、小型碗	
210-5		陶器	大堀相馬	近代以降	緑釉瓶類、貼り付けの鯉	
22-1		陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉端反碗	
22-2		陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	
22-3	25-11	陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗、目跡	同一個体
22-4		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
25-1		陶器	大堀相馬	18世紀後半	白濁釉皿	
25-10		陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉、鉄絵	
25-12		陶器	大堀相馬	18世紀後半以降	白濁釉	
25-14	25-16	陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	同一個体
25-15		陶器	大堀相馬	18世紀後半	白濁釉碗	
25-20		陶器	大堀相馬	18世紀後半以降	白濁釉	
25-22		陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉	
25-4		陶器	大堀相馬	19世紀	鉄釉徳利	
25-8		陶器	大堀相馬	19世紀前半	灰釉鉄絵皿	
25-9		陶器	大堀相馬	不明	鉄釉、瓶類	
26-15		陶器	大堀相馬	19世紀前半～中頃	呉須、鉄絵、燗徳利	
26-25		陶器	大堀相馬	19世紀前半？	灰釉、土瓶？	
26-28	26-3	陶器	大堀相馬	19世紀中頃	灰釉、呉須絵皿、玉縁状	接合
30-5		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
3-1		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉鉄釉掛分碗	
32-1		陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉土瓶、長さ6cm	第87図12
34		陶器	大堀相馬	19世紀前半～中頃	呉須、鉄絵、燗徳利	
34-4	34-5	陶器	大堀相馬	19世紀前半～中頃	灰釉、玉縁	同一個体
35-1		陶器	大堀相馬	18世紀後半以降	白濁釉碗	
36-13		陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	

36-14	36-20、15	陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉土瓶、長さ6.7cm、口径1.5cm	第87図13
36-16		陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉土瓶、長さ7cm	第87図11
36-17		陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	
36-18		陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	
36-44		陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	
36-51		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉	
36-55		陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	
36-56	176-55	陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	接合
36-58		陶器	大堀相馬	18世紀以降	灰釉、鉢？	
36-7	36-57、36-21	陶器	大堀相馬	19世紀前半～中頃	灰釉皿、玉縁、見込みに目跡、白濁釉	接合
38-5	38-7	陶器	大堀相馬	18世紀後半	白濁釉にあめ釉流し、折縁鉢	同一個体
4-2		陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉碗	
48-1		陶器	大堀相馬	19世紀前半	鉄絵、土瓶の蓋	
53-1	76-10	陶器	大堀相馬	19世紀前半	あめ釉と灰釉、鉢	同一個体
53-2		陶器	大堀相馬	幕末～明治	鉄絵、土瓶	
63-12		陶器	大堀相馬	18世紀後半～19世紀前半	灰釉皿、玉縁	
63-2		陶器	大堀相馬	19世紀前半～中頃	灰釉皿、玉縁、見込みに目跡、口径12.8cm、器高3.5cm、底径5.4cm	第87図14
65-3		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
65-4		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉鉄釉掛分碗	
66-12		陶器	大堀相馬	18世紀	鉄釉と灰釉、掛け分け碗	
66-7		陶器	大堀相馬	18世紀～19世紀	灰釉鉢	
67-1		陶器	大堀相馬	19世紀前半	鉄絵皿	
6-9	6-4	陶器	大堀相馬	19世紀前半？	土瓶底部	接合
69-3	69-4	陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	同一個体
70-4		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
74-11		陶器	大堀相馬	19世紀前半	土鍋？	
74-18		陶器	大堀相馬	不明	鉢	
74-8		陶器	大堀相馬	不明	鉢	
76-11		陶器	大堀相馬	近世	灰釉	
81-1		陶器	大堀相馬	18世紀後半	白濁釉碗	
82-7		陶器	大堀相馬	18世紀後半以降	白濁釉碗	
8-3		陶器	大堀相馬	18世紀後半	白濁釉土瓶	
84-9		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
85-5		陶器	大堀相馬	18世紀後半	白濁釉、土瓶	
85-7		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
86-1	ベルト間	陶器	大堀相馬	明治	灰釉小型碗	
90-2		陶器	大堀相馬	18世紀後半	白濁釉、皿？	
90-5		陶器	大堀相馬	18世紀後半	白濁釉、皿	
90-6		陶器	大堀相馬	18世紀後半～19世紀前半	白濁釉、土瓶蓋	
9-1		陶器	大堀相馬	18世紀以降	灰釉碗	
9-2		陶器	大堀相馬	18世紀後半	白濁釉小型碗	
920713SJ大手門東側階段下		陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉、鉄絵皿	
920713SJ大手門東側階段下		陶器	大堀相馬	18世紀前半	白濁釉、油とっくり	同一個体
93-4		陶器	大堀相馬	18世紀後半	白濁釉にあめ釉流し、碗	
93-5		陶器	大堀相馬	18世紀後半	灰釉小碗	
93-7		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
9-4		陶器	大堀相馬	18世紀以降	灰釉徳利	
95-1	95-5、95-22、95-33	陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	接合、同一個体
95-39		陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
95-4		陶器	大堀相馬	19世紀前半	青釉の土瓶	
95-45		陶器	大堀相馬	18世紀後半以降	白濁釉皿	
95-56		陶器	大堀相馬	19世紀前半？	白濁釉、鉢か片口、玉縁	
95-9		陶器	大堀相馬	19世紀前半	白濁釉、鉄絵皿	
SJH21102Cコーナー		陶器	大堀相馬	19世紀中頃	白濁釉に青釉流し、どんぶり鉢に近い	
SJH21102cコーナー１層		陶器	大堀相馬	近世	飴釉のびん類？	２点
ＳＪＸＸ		陶器	大堀相馬	18世紀後半	白濁釉碗	
大手二ノ門	旧溝埋土内	陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	２点、同一個体
大手二ノ門	旧溝埋土内	陶器	大堀相馬	18世紀	灰釉碗	
本丸跡小十郎	碑北西1-3	陶器	大堀相馬	18世紀後半以降	白濁釉碗	
130-1		陶器	大堀相馬？	18世紀以降	灰釉輪花皿、菊花文、口径9.5cm、器高3.2cm、底径4cm	第92図10
137-16	74-10	陶器	大堀相馬？	19世紀～20世紀	表が灰釉、裏が白釉	同一個体
141-12		陶器	大堀相馬？	18世紀	灰釉碗、釉調が少し違和感あり、口径10.4cm、器高5.4cm、底径4cm	第92図１
180-15		陶器	大堀相馬？	18世紀以降	白濁釉皿	
187-37		陶器	大堀相馬？	近世	灰釉か透明釉、目跡、器高1.6cm、底径5.6cm	第87図15
190-7		陶器	大堀相馬？	18世紀後半以降	灰釉かあめ釉、瓶類	
85-2		陶器	大堀相馬？	18世紀～19世紀	白濁釉、びん類	
100-4		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉薬碗	
101-28	183-17	陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉碗	接合
108-3	108-6	陶器	小野相馬	18世紀	飴釉（鉄釉の一種）、大ぶりの片口鉢？	
122-1		不明	小野相馬	18世紀	（大）鉢？	
139-2		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉碗	
150-10		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉碗、目跡つき	
150-12		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉碗、目跡つき	
150-13		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉碗、目跡つき	
167-2		陶器	小野相馬	18世紀	蓋もの、灰釉	

18-5	22-7	陶器	小野相馬	18世紀中～後半	折縁鉢、皿	接合
186-7		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色皿	
23-3		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉鉢、目跡、器高6.3cm、底径7.6cm	第87図８
25-21		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉碗	
25-23		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉、鉄釉、黒釉	
36-48		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉、目跡	
47-1		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色椀、目跡なし	
71-7		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉、鉢？	
83-1		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉碗	
84-14		陶器	小野相馬	18世紀	びん類？	
95-28		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉鉢	
95-3		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉碗	
95-43		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉碗	
95-49	95-40	陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉碗	接合
95-53		陶器	小野相馬	18世紀	淡青色釉碗	
121-2		陶器	小野相馬？	18世紀～19世紀	灰釉土瓶	同一個体
143-14	143-17	陶器	小野相馬？	18世紀～19世紀	灰釉土瓶	
180-16		陶器	小野相馬？	18世紀以降	擂り鉢	
188-99		陶器	小野相馬？	18世紀	擂り鉢、鉄釉	
145-5	192-4、169-5	陶器	小野相馬？	18世紀	擂り鉢、鉄釉とあめ釉、器高12.9cm、底径10.2cm	第91図１、２
192-2		陶器	小野相馬？	18世紀	擂り鉢、鉄釉とあめ釉	
23-2		陶器	小野相馬？	18世紀以降	壺	
49-14		陶器	小野相馬？	18世紀以降	擂り鉢	
61-1		陶器	小野相馬？	18世紀？	鉄釉擂鉢	
71-9		陶器	小野相馬？	18世紀	擂り鉢、鉄釉とあめ釉	
84-4		陶器	小野相馬？	18世紀	擂り鉢、鉄釉	
155-1		陶器	唐津	17世紀初め	藁灰釉？碗	
38-1		陶器	唐津	18世紀？	ハケメ、大鉢	
66-11		陶器	唐津	17世紀前半？	灰釉碗	
ＳＪＸＸ		陶器	唐津？	17世紀初め	瓶類	
100-1		磁器	切込	19世紀前半～中頃	染付端反碗、山水文？目跡	
124-7		磁器	切込	19世紀前半～中頃	染付端反碗、目跡	
133-3		磁器	切込	19世紀前半～中頃	染付、目跡	
137-22		磁器	切込	19世紀前半～中頃	染付端反碗、植物文？	
150-4		磁器	切込	19世紀前半	染付、見込みに蝶、目跡	
154-1	154-2	磁器	切込	19世紀前半～中頃	染付端反碗、植物文？目跡	接合
174-5		磁器	切込	19世紀前半～中頃	染付端反碗、目跡	
180-19		磁器	切込	19世紀前半～中頃	染付端反碗、目跡	
187-15		磁器	切込	19世紀前半	染付端反碗	
187-15		磁器	切込	19世紀前半	染付端反碗	
187-18		磁器	切込	19世紀前半	染付端反碗、蝶々	
187-2		磁器	切込	19世紀前半	染付	
187-20		磁器	切込	19世紀前半	染付端反碗	
187-31		磁器	切込	19世紀前半	染付端反碗、源氏香文？	
187-31		磁器	切込	19世紀前半	染付端反碗、笹文	
190-15		磁器	切込	19世紀前半	染付小型筒型碗、蝶	
190-16		磁器	切込	19世紀前半	染付碗	
199-1		磁器	切込	19世紀前半～中頃	染付端反り碗、山水文、目跡、内面黒色付着物、口径10.3cm、器高5.3cm、底径4.4cm	第90図８
46-4		磁器	切込	19世紀前半	蝶文碗、染付	
63-3		磁器	切込	19世紀前半～中頃	染付端反碗、山水文？目跡	
63-9		磁器	切込	19世紀前半～中頃	染付端反り碗、山水文	
65-1	65-2	磁器	切込	19世紀前半～中頃	染付端反碗	接合
95-27		磁器	切込	19世紀前半	染付	
本丸跡小十郎	碑北西1-3	磁器	切込	不明	碗、目跡	
13-1		磁器	切込？	19世紀前半？	染付碗、目跡	
13-2、13-5		磁器	切込？	19世紀前半？	染付碗、目跡	
139-4		磁器	切込？	19世紀前半	染付皿	
150-19		磁器	切込？	19世紀前半	草花文？染付碗	
174-2		磁器	切込？	19世紀前半？	切込？蝶々、染付、筒型碗	
176-62		磁器	切込？	19世紀前半	角小皿、型押し、透明釉	
36-23		磁器	切込？	19世紀前半	染付碗	
36-42		磁器	切込？	不明	染付	
74-6		磁器	切込？	不明	染付碗、笹文	
84-12		磁器	切込？	19世紀前半？	染付碗	
ＳＪＸＸ		磁器	切込？	19世紀前半	染付、目跡あり	
ＳＪＸＸ		磁器	切込？	19世紀前半	染付、笹文、端反	
123-2		陶器	岸窯	17世紀	香炉	
129-1		陶器	岸窯	17世紀前半	鉄釉摺鉢	第92図１
129-2		陶器	岸窯	17世紀	鉄釉とあめ釉、擂り鉢	
158-1		陶器	岸窯	17世紀	鉄釉、水柱？	
196-1		陶器	岸窯	17世紀	香炉	
23-10		陶器	岸窯	17世紀	鉄釉とあめ釉、香炉	
97-4		陶器	岸窯	17世紀	擂り鉢	第92図12
ＳＪＸＸ		陶器	岸窯？	17世紀？	鉄釉擂り鉢	第90図15、写真17－６
ＳＪＸＸ		陶器	岸窯	17世紀前半	鉄釉擂り鉢	第90図14
北側井戸立割部		陶器	岸窯	17世紀	鉄釉、水柱？	
本丸内石垣脇		陶器	岸窯	17世紀	鉄釉擂り鉢	
156-6		陶器	岸窯？	不明	擂り鉢	

南石垣下部底面		陶器	岸窯？	17世紀	擂り鉢、二次被熱	底面？
45-2		陶器	京・信楽	18世紀	赤と緑の色絵、腰折碗、筒茶碗	
95-18		陶器	京・信楽	18世紀	色絵、金、緑、青、赤彩、灰落としとして転用	
021102c-1		磁器	切込	19世紀前半	蝶、笹葉文、見込みも蝶、目跡４つ、口径10.1cm、器高3.8cm、底径5.5cm	第87図６
180-14	SJ021102c-1	磁器	切込	19世紀前半～中頃	染付端反碗、植物文、目跡、見込みに圏線、文様、口径10.8cm、器高4.9cm、底径4cm	第87図７
SJH21102Cコーナー１層		磁器	切込？	19世紀以降	染付碗	
26-31		磁器	切込	19世紀前半	染付碗、風景文？	
176-36		磁器	切込？	19世紀前半	染付碗	
176-38		磁器	切込？	19世紀前半？	白磁、隅入角小皿	
70-3		磁器	切込？	19世紀前半	染付碗	
ＳＪＨh21102ｃコーナー１層		磁器	切込？	19世紀前半	染付碗、端反り？	同一個体
ＳＪＸＸ		磁器	切込？	19世紀前半	染付端反碗	
143-21		磁器	元	13～14世紀	青磁碗	第87図２
190-37	190-64	陶器	現川	18世紀	はけめ文碗	
191-1	191-2	陶器	古瀬戸	15～16世紀	鉄釉天目茶碗、Ⅲ期～Ⅳ期古相か	第88図下段２
177-14		陶器	信楽	18世紀～19世紀	こしじろう茶壺	第90図10
ＳＪＸＸ		陶器	瀬戸？	17世紀以前	黒釉筒茶碗	
114-3		磁器	瀬戸美濃	19世紀？	小杯か杯（さかずき）	
124-4	124-5	磁器	瀬戸美濃	19世紀後半以降	白磁坏	
127-4	127-3	磁器	瀬戸美濃	近現代		別個体
131-1		磁器	瀬戸美濃	19世紀前半	染付端反碗、蝶？　口径12cm、器高4.5cm、底径4.7cm	第87図３
131-2		磁器	瀬戸美濃	幕末～明治	染付端反小形碗	
137-20		磁器	瀬戸美濃	19世紀～20世紀	染付皿	
14-1		陶器	瀬戸美濃	18世紀？	碁笥底、目跡	写真図版21－５
14-11		陶器	瀬戸美濃	18世紀	鉄釉、汁つぎ？平高台	墨書あり
14-12		磁器	瀬戸美濃	19世紀	口さび碗	
14-14	14-9	磁器	瀬戸美濃	19世紀前半～中頃	染付碗、小型	
141-6		陶器	瀬戸美濃	18世紀	灰釉碗	
14-7		磁器	瀬戸美濃	幕末～明治	染付小形碗	
150-1	150-16	磁器	瀬戸美濃	明治	染付端反碗、口さび、源氏香文	接合同一個体
150-22	150-7	陶器	瀬戸美濃	18世紀後半？	灰釉碗	同一個体
161-18			瀬戸美濃	近現代	皿	
168-1	168-2	磁器	瀬戸美濃	19世紀前半～中頃	染付小型端反碗、蝶々、口さび	同一個体
176-13	26-26	磁器	瀬戸美濃	明治	染付、型紙刷	接合
176-25		磁器	瀬戸美濃	19世紀中頃	染付小型端反碗、口さび	
176-45		磁器	瀬戸美濃	19世紀中頃	染付小型碗、源氏香文	
176-61		磁器	瀬戸美濃	19世紀中頃	染付小型碗	同一個体
179-1		磁器	瀬戸美濃	幕末～明治	染付端反小形碗	
180			瀬戸美濃	近現代	燗徳利	
180-2		磁器	瀬戸美濃	19世紀前半～中頃	蓋物の蓋、染付、波文様	
183-13		陶器	瀬戸美濃	18世紀	灰釉小碗	
183-16		陶器	瀬戸美濃	18世紀後半	灰釉小型碗	
183-21		陶器	瀬戸美濃	18世紀後半	灰釉小型碗	
185-5		磁器	瀬戸美濃	幕末～明治	染付端反碗	
186			瀬戸美濃	近現代	燗徳利	
186-2	186-3	磁器	瀬戸美濃	19世紀中頃	染付呉須	
187-10		磁器	瀬戸美濃	19世紀前半～中頃	染付碗	
187-23		磁器	瀬戸美濃	19世紀前半～中頃	端反り	
187-3		磁器	瀬戸美濃	19世紀前半～中頃	口さび染付碗	
187-34		磁器	瀬戸美濃	19世紀前半～中頃	口さび染付碗	
187-41		磁器	瀬戸美濃	19世紀前半～中頃	口さび染付碗	
187-5		磁器	瀬戸美濃	19世紀前半～中頃	染付碗	
187-8		磁器	瀬戸美濃	19世紀前半～中頃	染付碗	
189-6		磁器	瀬戸美濃	近代	統制番号　岐86、口径11.5cm、器高5.7cm、底径4.7cm	写真図版31－３、４
190-42	190-51	磁器	瀬戸美濃	幕末～明治初め	染付端反小杯、文字文、漢詩	接合同一個体
197-1		磁器	瀬戸美濃	19世紀	盃	
197-3		磁器	瀬戸美濃	明治中頃以降	染付、燗徳利、銅板転写	
22-8		陶器	瀬戸美濃	18世紀	灰釉碗	
25-19		陶器	瀬戸美濃	近世	灰釉碗？	
25-2		磁器	瀬戸美濃	19世紀中頃	染付碗	
25-6		磁器	瀬戸美濃	19世紀	染付小型碗、発色悪い	
26-14		磁器	瀬戸美濃	近代	碗	
26-23		陶器	瀬戸美濃	18世紀～19世紀？	呉須絵、瓶類	
31-2		磁器	瀬戸美濃	幕末～明治	染付小形碗	
31-3		磁器	瀬戸美濃	近世	染付端反碗	
33-1		磁器	瀬戸美濃	19世紀前半	染付碗	
34-2	34-7、34-6	磁器	瀬戸美濃	明治	白磁か染付、小杯か杯	同一個体
36-28	36-5	磁器	瀬戸美濃	幕末～明治	染付端反小形碗	同一個体
36-3	85-8	磁器	瀬戸美濃	現代	寿字文	接合同一個体
36-40		磁器	瀬戸美濃	幕末～明治	染付小形碗	
36-41		磁器	瀬戸美濃	近代	染付	
36-33	36-33、36-60、36-47	陶器	瀬戸美濃	18世紀？	碁笥底、目跡、口径9.4cm、器高2cm、底径3.5cm	第87図４
42-3		磁器	瀬戸美濃	19世紀中？	急須	
42-4		磁器	瀬戸美濃	19世紀、近代	染付急須	
42-6		磁器	瀬戸美濃	19世紀中？	急須	

42-7		磁器	瀬戸美濃	不明	急須	
42-9		磁器	瀬戸美濃	19世紀中？	急須	
4-3		陶器	瀬戸美濃	不明	瓶類、透明釉	
45-3		陶器	瀬戸美濃	18世紀？	黄釉碗、高台付	
63-14		磁器	瀬戸美濃	明治以降	杯	
66-13		陶器	瀬戸美濃	17世紀？	掛け分け、長石釉（緋色）、鉄釉、兜幅	
66-8		磁器	瀬戸美濃	19世紀中頃	染付皿	
71-10	17-3	磁器	瀬戸美濃	19世紀前半	染付端反碗	同一個体
74-17		磁器	瀬戸美濃	19世紀～20世紀	染付皿	
77-2		磁器	瀬戸美濃	明治中頃以降	染付、燗徳利、銅板転写	
82-4		陶器	瀬戸美濃	中世	鉄釉天目茶碗	
82-5		磁器	瀬戸美濃	近世	鉄釉	
85-12			瀬戸美濃	近現代	燗徳利	
95-50		陶器	瀬戸美濃	18世紀？	灰釉碗、高台	
95-7		陶器	瀬戸美濃	18世紀？	灰釉碗	
101-16		陶器	瀬戸美濃？	18世紀？	灰釉碗	
108-2		磁器	瀬戸美濃？	19世紀中頃以降	染付、端反り碗、小型	
108-5		磁器	瀬戸美濃？	19世紀中頃以降	染付、端反り碗、小型	
137-4		磁器	瀬戸美濃？	明治以降	酒杯、染付	
137-5		磁器	瀬戸美濃？	幕末～明治	筒型碗、葉文	
14-8		磁器	瀬戸美濃？	19世紀中頃以降	染付、端反り碗、小型、口さび	
149-9	149-32	磁器	瀬戸美濃？	19世紀～20世紀	色絵の急須	同一個体
150-5		磁器	瀬戸美濃？	18世紀以降	鉄絵碗	磁器か
176-12	176-14	磁器	瀬戸美濃？	19世紀中頃以降	染付、端反り碗、小型、口さび	同一個体
187-28		磁器	瀬戸美濃？	19世紀中頃以降	染付、端反り碗、小型	
36-35	176-24	磁器	瀬戸美濃？	19世紀中頃以降	染付、端反り碗、小型、口さび	接合同一個体
57-2		磁器	瀬戸美濃？	近世	灰釉皿、発色悪い、茶、黒褐色物質付着	磁器か
80-1	150-6	磁器	瀬戸美濃？	19世紀中頃以降	染付、端反り碗、小型、口さび	同一個体
84-13		磁器	瀬戸美濃？	19世紀中頃以降	染付、端反り碗、小型、口さび	
H3,9,28、西側石垣中断	中段	磁器	瀬戸美濃？	明治以降	灰釉碗	
101-18		陶器	地方窯	不明	灰釉碗	
103-1		陶器	地方窯	近世	甕、鉄釉	
1-10		磁器	地方窯	19世紀	輪花、口さび	
1-11	188-70、49-17	陶器	地方窯	19世紀	呉須絵大鉢	接合同一個体
121-7		磁器？	地方窯	不明	瓶、透明釉	
136-1		陶器	地方窯	近世	皿か鉢、あめ釉	
149-33		磁器	地方窯	19世紀～20世紀	急須の蓋、白磁？	
156-4		陶器	地方窯	近世	鉄釉、油徳利か	
174-3		磁器	地方窯	19世紀	せん茶用茶碗、染付	
174-6		磁器	地方窯	19世紀	染付皿、目跡	
174-9		磁器	地方窯	19世紀	せん茶用茶碗、染付	
176-21		磁器	地方窯	19世紀	せん茶用茶碗、染付	
177-6		陶器	地方窯	近世	甕、鉄釉	
187-4		磁器	地方窯	19世紀	せん茶用茶碗、染付	
210-16		磁器	地方窯	19世紀中頃	急須の蓋	
25-17		磁器	地方窯	近世		
25-25		磁器	地方窯	近世		
26-10	25-26、173-3、175-17	陶器	地方窯	不明	鉄絵徳利、胎土に黒色粒子が入る	接合同一個体
30-1		磁器	地方窯	近世	染付	
44-1	44-4	陶器	地方窯	近世	甕、鉄釉	同一個体
44-5	121-4	陶器	地方窯	19世紀	呉須絵の瓶	接合
49-70		陶器	地方窯	近現代	呉須絵鉢	
63-10		磁器	地方窯	不明	染付、蛇目凹高台、目跡	
66-4	66-3	陶器	地方窯	近世	甕、鉄釉	同一個体
6-7		磁器	地方窯	19世紀～20世紀	染付急須の蓋	
6-8		磁器	地方窯	19世紀～20世紀	染付急須の蓋	
75-1		磁器？	地方窯	19世紀以降	白磁？底面に墨痕、器高2.4cm、底径2.6cm	第89図６
75-2	182-6	磁器	地方窯	近代	摺り絵皿	接合
84-1		磁器	地方窯	幕末～明治？	呉須絵の瓶類	
95-2		磁器	地方窯	19世紀	染付	
95-23	95-59、95-6	陶器	地方窯	近世	甕、鉄釉	同一個体
95-36	95-56	陶器	地方窯	近世	甕、鉄釉	同一個体
95-44		陶器	地方窯	近世	甕、鉄釉	
95-55		磁器	地方窯	不明	透明釉	
95-8		磁器	地方窯	19世紀	染付、燗徳利	
本丸跡小十郎	碑北西1-3	磁器	地方窯	19世紀？	染付	
108-4		陶器	地方窯	19世紀	呉須絵の皿、半菊文皿、つる草、見込みに目跡、玉緑、畳付のみ裸体	同一個体
118-2		磁器	地方窯	19世紀	染付山水文、発色、焼成良好、蛇目凹高台	
121-5	95-21、95-19		地方窯	明治以降	染付急須	
125-1		磁器	地方窯	19世紀	蛇ノ目凹高台、染付、山水文皿、器高1.8cm、底径8cm	第90図13
14-13	14-15	磁器	地方窯	19世紀	染付山水文、発色、焼成良好、蛇目凹高台	接合
141-8		陶器	地方窯	19世紀？	端反り碗	
14-5		磁器	地方窯	19世紀	染付山水文、発色、焼成良好、蛇目凹高台	
161-14		磁器	地方窯	19世紀	蛇ノ目凹高台、染付、山水文皿	
166-1	161-2	磁器	地方窯	19世紀？	染付、亀型水滴？	同一個体
187-1		磁器	地方窯	19世紀	呉須絵の皿、半菊文皿、つる草、見込みに目跡、玉緑、畳付のみ裸体	
187-30	187-11	磁器	地方窯	19世紀	染付、徳利（大きい）	同一個体

26-5		磁器	地方窯	19世紀	呉須絵の皿、半菊文皿、つる草、見込みに目跡、玉縁、畳付のみ裸体	
30-7		磁器	地方窯	19世紀	染付山水文、発色、焼成良好、蛇目凹高台	
63-6		磁器	地方窯	19世紀	蛇ノ目凹高台、染付、山水文皿	
63-7		磁器	地方窯	19世紀	染付山水文、発色、焼成良好、蛇目凹高台	
80-4	26-2、26-33、176-15、176-23、176-53	磁器	地方窯	19世紀中頃	染付、燗徳利	同一個体
88-1	169-2、190-14、190-44、57-4	磁器	地方窯	19世紀前半？	染付端反り碗	同一個体
ＳＪＨh21102ｃコーナー		磁器	地方窯	近世	端反碗、透明釉	
149-6		磁器	地方窯？	明治？	染付急須	
174-1	174-7	磁器	地方窯？	江戸時代？	染付碗	接合
42-1		磁器	地方窯？	明治？	染付急須	
6-6		磁器	地方窯？	明治？	染付急須	
69-1	69-5、69-6	磁器	地方窯？	19世紀	染付、草花文、碗	接合
117-1		磁器	中国	15～16世紀	端反り碗、口さび、染付碗（Ｂ群？）	
14-4		磁器	中国	16世紀後半～17世紀前半	青花皿	
146-1		磁器	中国	16世紀後半～17世紀前半	青花、昆虫、染付皿Ｅ群？	
176-56		磁器	中国	16世紀後半～17世紀前半	青花？端反り	
182-2		磁器	中国	16世紀～17世紀前半	青花碗	
198-1		磁器	中国	１５世紀後半～16世紀前半	染付、端反り皿、牡丹唐草文、見込み十字花文、回線、口径8.4cm、器高2cm、底径3.3cm	第89図３
25-24		磁器	中国	16世紀～17世紀	青花、碗？	
43-2		磁器	中国	16世紀後半～16世紀末	輪花鉢？青花	
83-3		磁器	中国	16世紀末～17世紀前半	青花	
95-47	95-16	磁器	中国	16世紀後半	青花、圏線などが描かれる	接合
95-51		磁器	中国	16世紀後半	青花、碗	
95-54		磁器	中国	16世紀	青花碗	
95-60		磁器	中国	16世紀後半	青花、端反皿、圏線などが描かれる	
95-62		磁器	中国	16世紀後半	青花、十字花文	
ＳＪＨh21102ｃコーナー１層		磁器	中国	16世紀後半	青花皿	
ＳＪＸＸ		磁器	中国	16世紀	唐草文様、回線	252
ＳＪＸＸ		磁器	中国	16世紀代？	青花皿？	251
70-6		磁器	中国？	中世	青磁	
74-16		磁器	中国？	16世紀	青花皿？	
55-1	172-11、172-14、172-1、172-15、172-6、172-4、55-3、172-5、172-7、172-10、172-13、172-18、172-9、172-17、172-16、55-5	陶器	堤	19世紀中頃以降	ナマコ釉、小型瓶、口径11cm、器高12.3cm、底径7.8cm	第87図９
68-1	195-2、二門第一トレ	陶器	堤	19世紀前半	焙烙、口径22.4cm、器高3.4cm、底径18.8cm	第89図１０
二ノ門第２トレンチ		軟質施釉陶器	堤焼	19世紀前半	焙烙	
北側井戸	区画東側溝	陶器	堤焼？	明治以降	鉄釉土管？	３点
大手一門	柱跡確認面	陶器	東北、一本杉	13～14世紀	甕の体部破片	第89図13、写真29－１
下部東南トレ	Ｈ3,8,28	陶器	常滑	13世紀？	甕か壺の体部破片	第88図上段１、２、写真29－２の1、２
下部東南トレンチ	Ｈ3,8,28	中世陶器	常滑	13世紀？	甕か壺、第　図	
14-16		陶器	常滑？備前？	19世紀？	びん類	
200-1	182-12	磁器	波佐見	18世紀	染付、梅樹文碗、銘あり、くわらんかわん、口径9.8cm、器高4.8cm、底径4.2cm	第88図１
23-1	23-4	陶器	成島？	19世紀	鉄釉と白い釉	
131-3		磁器	波佐見	17世紀	見込み、目跡、碗か鉢、内面文様あり、青磁？	
187-42		磁器	波佐見	18世紀	丸文の碗	
66-9		磁器	波佐見	18世紀	染付、香炉か灰吹	
190-48		磁器	波佐見？	18世紀前半	見込み、蛇ノ目釉剥ぎ染付皿	
100-2		磁器	肥前	18世紀？	染付、小杯か猪口、人物画	
100-3		磁器	肥前	18世紀後半	染付碗、内側に笹文あり	
100-5		磁器	肥前	18世紀後半	蛇ノ目凹高台、輪花、染付、口さび	
101-23	101-26	磁器	肥前	19世紀前半	染付、レイシ文、広東碗	
101-29		陶器	肥前	17世紀後半以降	灰釉碗、呉器手碗	
101-6		磁器	肥前	19世紀前半	染付碗、柳文？	
105-2		磁器	肥前	18世紀	染付碗、こんにゃく印版？植物葉	
105-4		磁器	肥前	18世紀	染付、香炉	
106-1	62-1、195-3	磁器	肥前	18世紀前半	染付鉢（円形）、タコ唐草文	同一個体
110-1		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付型押輪花皿、草花文、蛇目凹高台、目跡	
114-1		磁器	肥前	近世	染付碗	
114-2		磁器	肥前	近世	染付碗	
118-1		磁器	肥前	18世紀前半？	染付鉢	
120-1		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付型押輪花皿、草花文、蛇目凹高台、目跡	
120-4		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付小型碗、見込みと外面は不明文、目跡	
127-1		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付型押輪花皿、草花文、蛇目凹高台、目跡	
127-2		磁器	肥前	18世紀以降	白磁の蓋物の身	
132-1		磁器	肥前	近世	碗？	
13-3		磁器	肥前	近世	染付碗	
133-15		磁器	肥前	19世紀前半	格子文	
137-12		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付小型碗、外面は植物文、目跡	
139-3		磁器	肥前	17世紀～18世紀	小型皿、染付	
14-10		磁器	肥前	17世紀後半？	染付皿、口さび、七宝か四方だすき	
141-5		磁器	肥前	近世	染付皿	

14-2		磁器	肥前	18世紀～19世紀前半	口さび、染付、輪花	
14-3		磁器	肥前	近世	染付？皿、口さび	
143-1		磁器	肥前	18世紀末～19世紀前半	染付、草花	
143-16		陶器	肥前	17世紀～18世紀	灰釉、香炉か火入れ	
143-6		磁器	肥前	18世紀末～19世紀前半	染付、草花	
144-1		陶器	肥前	18世紀？	鉄絵の碗、灰釉ベース	
14-6		磁器	肥前	17世紀～18世紀	染付碗（若しくは鉢）	
147-1		磁器	肥前	18世紀末～19世紀前半	染付、端反り碗、山水、草花、口径10.8cm、器高4.7cm、底径4.2cm	第88図下段１
150-11		磁器	肥前	18世紀後半	染付輪花皿、口さび	
150-14		磁器	肥前	17世紀末～18世紀初め	花文（中心）、唐文（周り）	
150-2	150-20	磁器	肥前	18世紀後半～19世紀初め	染付、半筒碗	
150-20		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀初め	染付、半筒碗、菊花文	
150-3		磁器	肥前	17世紀後半	染付皿、見込みは蛇目釉剥、高台は露体	
150-9		磁器	肥前	近世	皿か鉢、染付	
153-1		磁器	肥前	19世紀前半	格子文	
153-2		磁器	肥前	19世紀前半	染付、格子に蝶文碗	
153-2		磁器	肥前	19世紀前半	格子に蝶文碗	
156-3		磁器	肥前	不明	瓶類、底部片	
156-5		磁器	肥前	17世紀後半	染付、中皿、松の木？	
157-2		磁器	肥前	近世	染付碗	
159-2	157-3、157-4	磁器	肥前	18世紀	白磁、猪口、焼き接ぎ？	接合同一個体
160-2		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付型押輪花皿、草花文、蛇目凹高台、目跡	
16-1		磁器	肥前	18世紀後半以降	染付皿、山水文、（風景）文、蛇ノ目凹高台、なます皿、底径8.8cm、器高3cm	第89図４
161-21	161-20	磁器	肥前	19世紀前半	染付皿、蔓草、口径14cm、器高2.7cm、底径6cm	第90図１
171-4		磁器	肥前	18世紀	染付小坏、ぐいのみ	
17-2		磁器	肥前	18世紀？	染付椀？	
174-4		磁器	肥前	19世紀前半	格子に蝶文碗	
176-22		磁器	肥前	18世紀～19世紀前半	口さび、染付、輪花	
177-10		磁器	肥前	18世紀後半	蛇ノ目凹高台、輪花、染付、口さび、草花文？	第90図４
180-17		磁器	肥前	近世	染付か白磁	
180-3		磁器	肥前	近世	碗	
180-5	180-12	磁器	肥前	18世紀？	染付中皿	接合
182-1		磁器	肥前	近世	染付	
182-13		磁器	肥前	18世紀	染付皿、高台内に吉祥文あり	
182-17		磁器	肥前	18世紀末～19世紀前半	染付、文様不明	
182-18		磁器	肥前	18世紀後半	蛇ノ目凹高台、輪花、染付、口さび、草花文？	
182-3	182-7	磁器	肥前	近世	染付、高台	同一個体
182-9		磁器	肥前	17世紀	染付皿	
183-23		磁器	肥前	17世紀後半以降	白磁端反小型碗	
183-33		磁器	肥前	近世	白磁？	
183-5		磁器	肥前	近世	染付碗	
185-6		磁器	肥前	18世紀	染付、笹文碗、見込みコンニャク印板、５弁花、口径11.2cm、器高5.8cm、底径4.4cm	第90図３
186-5		磁器	肥前	近世	染付皿	
187-12		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付小型碗、目跡	
187-16		磁器	肥前	18世紀	染付	
187-27		磁器	肥前	19世紀前半	染付、格子、草花文？見込みに蝶、口径9.6cm、器高5cm、底径3.5cm	第87図５
187-33		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付型押輪花皿、草花文	
187-36		磁器	肥前	18世紀末～19世紀前半	染付碗、草文	
187-40		磁器	肥前	18世紀以降	染付、筒	
187-42		磁器	肥前	18世紀？	仏飯器、白磁？	
187-7		磁器	肥前	近世	白磁碗	
187-9		磁器	肥前	19世紀前半	格子文	
190-10		磁器	肥前	近世	白磁皿	
190-20		磁器	肥前	19世紀前半	染付、見込み寿字文、蓋付き碗の蓋、口径8cm、器高2.7cm、つまみ径2.3cm	第89図５
190-23		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付小型碗、見込みと外面は不明文	
190-26		磁器	肥前	近世	染付皿（大）	
190-29		磁器	肥前	18世紀	染付小坏、体部に銘あり、櫛歯文様	
190-55		磁器	肥前	18世紀後半？	染付小型碗、輪郭が丸であれば丸文	
190-9		磁器	肥前	18世紀以降	白磁？小型碗	
192-8	192-11	磁器	肥前	18世紀	染付、猪口、草花文	同一個体
195-4		磁器	肥前	近世	碗	
197-4		磁器	肥前	近世	碗	
204-1		磁器	肥前	18世紀末～19世紀前半	染付、山水、見込みに文様あり	
210	遺構確認面94.11.4	磁器	肥前	18世紀後半	染付中皿、笹文、墨はじき	
210-13		磁器	肥前	17世紀末～18世紀初め	染付輪花皿、見込みは魚か竜、外面は蔓草	
210-14		磁器	肥前	18世紀後半	呉須皿、蛇目凹高台、漆つなぎ？	
210-15		磁器	肥前	18世紀～19世紀	染付碗	
210-21		磁器	肥前	18世紀？	染付皿	
210-8		磁器	肥前	18世紀後半以降	染付小型碗	
210-9		磁器	肥前	18世紀～19世紀？	白磁？半筒形碗	
22-5		磁器	肥前	近世	白磁か染付	
22-6		磁器	肥前	近世	染付	
22-9		磁器	肥前	19世紀前半？	染付碗	
25-18		磁器	肥前	近世	染付瓶類	
25-3	25-13	磁器	肥前	17世紀後半～18世紀前半	染付猪口	接合

25-7		磁器	肥前	17世紀後半	染付碗、見込みと高台内に文字、釉の厚さ一定せず	
26-20		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付小型碗、見込みに不明文	
26-22	26-16	磁器	肥前	18世紀後半以降	染付輪花皿、口さび	接合同一個体
26-24		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付型押輪花皿、草花文、蛇目凹高台、目跡	
26-30	124-6	磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付型押輪花皿、草花文、蛇目凹高台、目跡	接合
26-6		磁器	肥前	幕末～明治	変形皿、口さび、呉須絵、発色悪い	
27-1	27-3	磁器	肥前	18世紀～19世紀前半？	染付長皿	接合
30-11		磁器	肥前	18世紀	直径20cmを超す染付中皿、見込みは蛇目釉剥ぎ	
30-6		磁器	肥前	19世紀前半	染付碗	
30-8		磁器	肥前	18世紀末～19世紀前半	染付、山水	
30-9		磁器	肥前	不明	染付碗	
31-4		磁器	肥前	近世	染付碗	
31-5		磁器	肥前	近世	染付碗	
31-8		磁器	肥前	18世紀後半？	染付碗、文様不明	
36-1		磁器	肥前	19世紀前半	格子に蝶文碗	
36-1		磁器	肥前	19世紀前半	格子文	
36-12		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付小型碗、見込みに蝶、目跡	
36-2		磁器	肥前	19世紀前半	染付、格子、見込みに文様	
36-37		磁器	肥前	18世紀～19世紀前半	染付碗	
36-24	36-8、32、53	磁器	肥前	19世紀	風景文、銘あり、器高6.6cm、底径6.9cm	第89図7
38-3		磁器	肥前	近世	染付瓶類	
38-4		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付型押輪花皿、草花文、蛇目凹高台、目跡	
39-6		磁器	肥前	18世紀末～19世紀前半	染付、山水	
42-5		磁器	肥前	18世紀	染付皿、風景文	接合
42-8		磁器	肥前	18世紀？	染付皿、高台内に目跡	
43-1		磁器	肥前	18世紀	染付碗	
44-10		磁器	肥前	19世紀前半	染付碗	
44-2	44-9	陶器	肥前	17世紀後半	灰釉碗	接合
44-3		磁器	肥前	18世紀？	染付碗	
44-6		磁器	肥前	18世紀	染付碗、手書き五弁花、高台付	つる草の省略形？
45-1		磁器	肥前	18世紀？	染付、中皿	
45-3		磁器	肥前	18世紀後半	染付、半筒碗、見込みに手描きの５弁花	
51-1		磁器	肥前	18世紀？	染付碗	
52-1		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付型押輪花皿、草花文、蛇目凹高台、目跡	
5-3		磁器	肥前	18世紀～19世紀前半	口さび、染付、輪花	
54-1		磁器	肥前	18世紀末～19世紀前半	染付	
56-1		磁器	肥前	18世紀末～19世紀前半	染付、草花	
56-1		磁器	肥前	18世紀末～19世紀前半	染付、草花	
56-2		磁器	肥前	近世	染付徳利	
56-3		磁器	肥前	近世	碗	
56-4		磁器	肥前	19世紀前半	染付碗	
56-5		磁器	肥前	近世	碗	
62-4		磁器	肥前	近世	染付皿？	
63-1	63-4	磁器	肥前	18世紀後半	青磁染付皿、蛇ノ目凹高台	同一個体
63-11		磁器	肥前	19世紀前半	染付碗	
63-13		磁器	肥前	近世	染付	
63-5		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付小型碗、見込みに蝶、外面は風景文、目跡	
63-8		磁器	肥前	18世紀後半以降	染付皿、風景文、蛇目凹高台	
64-2		磁器	肥前	18世紀	染付皿、唐草文様	
64-3		磁器	肥前	近世	染付端反小杯	
66-1		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付型押輪花皿、草花文、蛇目凹高台、目跡	
66-5		磁器	肥前	18世紀	染付碗、二重編目文	
66-6		磁器	肥前	19世紀	青磁、型押し文様、角形皿	
70-5		磁器	肥前	近世	染付瓶	
71-1		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付型押輪花皿、草花文、蛇目凹高台	
71-8		磁器	肥前	18世紀～19世紀	染付皿、蛇目凹高台	
80-2		磁器	肥前	17世紀～18世紀？	青磁、変形鉢	
80-3		磁器	肥前	近世	びん類、染付か白磁	
8-2		磁器	肥前	近世	染付	
82-2		磁器	肥前	18世紀	染付椀、笹文	
82-3		陶器	肥前	17世紀後半	灰釉碗	
83-4		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付碗、発色不十分	
84-10		磁器	肥前	近世	染付碗	
84-20		磁器	肥前	18世紀？	染付碗	
84-3		磁器	肥前	近世	染付碗	
85-4		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付型押輪花皿、草花文、蛇目凹高台、目跡	
90-1		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付猪口	
90-3		磁器	肥前	18世紀後半～19世紀前半	染付型押輪花皿、草花文	
90-4		磁器	肥前	18世紀？	染付碗	
90-7		磁器	肥前	19世紀	染付猪口か急須、ごけ底	
93-1		磁器	肥前	18世紀？	染付碗	
93-3		磁器	肥前	18世紀後半以降	白磁か染付、蛇目凹高台？	
95-10		磁器	肥前	18世紀前半	染付大皿、草花文	
95-11		磁器	肥前	17世紀～18世紀	染付端反小杯	
95-15	95-52	磁器	肥前	17世紀後半	中～大形の染付皿、口さび、外面は蔓草、内面は周囲に同心円文、見込みに草花文	接合同一個体
95-29		磁器	肥前	近世	碗？	
95-32		磁器	肥前	近世	碗？	
95-34		磁器	肥前	近世	白磁か染付	
95-35		磁器	肥前	17世紀～18世紀	染付輪花皿？つる草	

95-42		磁器	肥前	18世紀前半	角入りの蛸唐草文？皿	
95-48		磁器	肥前	幕末～明治	色絵	
95-50		磁器	肥前	18世紀？	青磁、変形皿、むこうづけ、脚が付く	
95-58		磁器	肥前	18世紀？	染付碗	
95-61		磁器	肥前	近世	染付鉢	
97-1		磁器	肥前	18世紀？	染付、亀甲文様、香炉？	
SJH21102C コーナー１層		磁器	肥前	18世紀後半	染付、長皿	
ＳＪＸＸ		磁器	肥前	近世	染付、鉢？茶碗？	
ＳＪＸＸ		磁器	肥前	18世紀前後	染付	
大手二ノ門	旧溝埋土内	磁器	肥前	18世紀	染付碗	
本丸跡小十郎	碑北西1-3	磁器	肥前	近世	染付か白磁、蓋物	
本丸跡小十郎	碑北西1-3	磁器	肥前	18世紀後半	染付皿、風景文、蛇目凹高台	
本丸跡小十郎	碑北西1-3	磁器	肥前	18世紀後半	染付皿、風景文、蛇目凹高台	
本丸内土塁土留め部７ピット		磁器	肥前	18世紀	染付碗、笹文？	
本丸内土塁土留め部７ピット		磁器	肥前	近世	白磁か染付	
121-6		磁器	肥前？	不明	型押し瓶類、鉄絵	
146-2		磁器	肥前？	近世	染付皿？	
182-11		磁器	肥前？	18世紀	染付小型碗、ジグザグ文様	
195-1		陶器	肥前？	17世紀～18世紀	灰釉碗	
197-2		磁器	肥前？	17世紀～18世紀？	染付、筒型碗か鉢	
210-6		磁器	肥前？	18世紀～19世紀	染付碗	
37-1		磁器	肥前？	17世紀	染付皿	
66-2		磁器	肥前？	18世紀後半以降	染付皿、見込みに文様、蛇目凹高台、焼き損じ	
8-4		磁器	肥前？	19世紀	染付？急須？上げ底	
90-8		磁器	肥前？	不明	白磁か染付	
ＳＪＸＸ		磁器	肥前？	19世紀前半	染付端反	248
1		陶器	不明	近代	カメ	
10-1		陶器	不明	19世紀～近代？	黒い釉	
101-12		磁器	不明	不明	磁器の破片	
101-13		陶器	不明	近世	灰釉碗	
101-19		陶器	不明	近世	灰釉碗	
101-22			不明	近代以降	新しい	
101-27		磁器	不明	19世紀前半	染付、重菱形文、小型皿か杯	
109			不明	近代以降	新しい物	
111-1			不明	近代以降	新しい	
113-1		土師質土器	不明	近世	破片	
119-1	119-2	土師質土器	不明	近世	かわらけ、口径13.3cm、器高2.5cm、底径8.5cm	第88図下段４
120-2		陶器	不明	近世	灰釉、透明釉	
121-1			不明	近代以降	新しい	
124-1			不明	近現代	新しいもの	
124-3		磁器	不明	不明	型押成形、内面に布目、白磁瓶類	
126-1		磁器？	不明	不明	皿、見込みは滑らか	
128-1	128-5	磁器	不明	昭和		同一個体
128-11			不明	明治以降	摺絵碗、人が描かれている	
128-12		磁器	不明	江戸～明治	白磁瓶類	
128-13		磁器	不明	明治以降	急須、染付	
128-15	126-18		不明	近現代	新しい	
128-16	74-5		不明	近現代	新しいもの	
128-17			不明	近代以降	新しい	
128-20			不明	近代		
128-21	128-19	磁器	不明	明治以降	色絵、端反碗	同一個体
128-23			不明	明治	徳利の口縁部	
128-24	128-25		不明	近現代	新しいもの	
128-26		磁器	不明	近現代	洋食器	
128-3	132-2		不明	近現代		別個体
128-7	124-1、143-20		不明	近現代	新しいもの	
128-8	128-22		不明	近現代		
128-9			不明	近代		
133			不明	近代以降	新しい物	
133-1			不明	大正か昭和	茶碗	
133-13		磁器	不明	19世紀代（明治～大正）	染付け鉢、色絵、素茶碗	
133-17			不明	近代		
133-18		磁器	不明	19世紀代（明治～大正）	染付け鉢、色絵、素茶碗	
133-2			不明	近代以降	新しい	
133-5			不明	近代		
133-6	40-17		不明	近現代	統制番号　岐8/4、口径8cm、器高8.4cm、底径4.6cm	写真図版31－１、２
133-8			不明	明治以降	蓋	
13-4		磁器	不明	不明	染付端反碗、龍文？	
134-1	134-3	陶器	不明	近世	灰釉に鉄絵、碗	接合
135-1		土師器	不明	古代	内黒土師器体部片	
137			不明	近代以降	新しい物	
137-10		磁器	不明	幕末～明治	染付碗、寿字文	
137-15	137-19、137-23		不明	近現代	新しいもの	
137-18		陶器	不明	明治以降		
137-19			不明	近現代		

137-2			不明	近代以降	新しい	
138-1		磁器	不明	19世紀後半	摺絵	
140-1			不明	不明	土瓶	
141-1		陶器	不明	19世紀？	燗のとっくり、口えん部、灰釉系の釉薬	
141-10		陶器	不明	近世	鉄釉擂り鉢	
142-1		陶器	不明	近代以降	壺、びん類	
143-1	143-3	陶器	不明	近現代		接合同一個体
143-11			不明	近代以降	新しい	
143-20			不明	近現代	新しいもの	
143-4			不明	近代		
143-8	82-6	磁器	不明	江戸～明治	急須、型押し、底面は指頭押圧	
145			不明	近代以降	新しい物	
145-1		磁器	不明	19世紀以降、近現代		
149			不明	近代以降	新しい物	
149-1			不明	近代以降	新しい	
149-22			不明	近代以降	新しい	
149-24		磁器	不明	現代		
149-25			不明	現代		
149-26	149-17	磁器	不明	現代		接合
149-34	149-19	磁器	不明	明治時代	染付変形皿、型紙刷り転写	接合同一個体
149-35			不明	近現代		
149-36			不明	近現代	統制番号　岐911　27237、口径11cm、器高2.3cm、底径6cm	写真図版31－5、6
150			不明	近代		
150-15			不明	近代以降	新しい	
15-1			不明	現代		
155-5	155-2	磁器	不明	現代		同一個体
155-6			不明	現代		
157-1		陶器	不明	近世	皿？	
157-6			不明	近代以降	新しい	
157-7			不明	近代		
159-1		陶磁器	不明	幕末～明治	洋食器	
161-10			不明	近代以降	新しい	
161-11	161-22		不明	近現代	新しいもの	
161-12	161-13		不明	19世紀～20世紀、近現代		
161-15			不明	近代以降	新しい	
161-16			不明	近代		
161-17			不明	近代以降	新しい	
161-19		軟質磁器	不明	近代	洋食器	
161-2	161-3		不明	近現代	国産洋食器	接合
161-24			不明	19世紀～20世紀、近現代		
161-26			不明	近代		
161-5		磁器	不明	明治～大正	洋食器	
161-6	161-23		不明	近現代	新しいもの	
161-7	161-25		不明	近現代		接合同一個体
161-9	161-8	磁器	不明	明治～大正	洋食器	接合
163-1		素焼き	不明	中世～近世	かわらけ皿	第88図上段４、写真30－１
168			不明	近代以降	新しい物	
168-3		磁器	不明	幕末～明治	端反りの染付碗、口さび	
1-7	49-72	陶器	不明	近代	呉須絵大鉢	接合
170-3			不明	近現代		
171		磁器	不明	幕末～明治	端反りの染付碗、口さび	
172-19			不明	近代以降	新しい	
172-3	172-20		不明	現代		接合
172-8	172-12		不明	現代		接合
17-3		土師器	不明	古代	網代底部片	
175-10		磁器	不明	幕末～明治	灰釉瓶類、胎土に黒粒子を含む	
175-11		磁器	不明	幕末～明治	灰釉瓶類、胎土に黒粒子を含む	
175-20	176-51、5-2	陶器	不明	幕末～明治	土瓶、白土に呉須による絵	接合同一個体
175-33		陶器	不明	近世以降		
175-6	175-31		不明	近代以降		
175-8		陶器	不明	江戸時代？	灰釉瓶類	
176-1		磁器	不明	19世紀	瓶（徳利？）、底部	
176-18		磁器	不明	明治後半	銅版転写	
176-20			不明	近代以降	新しい	
176-26		磁器	不明	遡っても幕末	染付	
176-29			不明	近現代		
176-35	176-47		不明	近現代		接合同一個体
176-37		磁器	不明	遡っても幕末	染付か白磁、口さび	
176-44		磁器	不明	不明	フタ	
176-48			不明	近代	急須？	
176-54		磁器	不明	遡っても幕末	染付	
176-57		磁器	不明	近代	刷絵(呉須)	
176-59		磁器	不明	遡っても幕末	染付か白磁、口さび	
176-6	176-10、176-11、176-17、176-32、176-33、176-34、176-43、176-46、176-49、176-52、176-64、176-65		不明	明治	すり絵、段重、３か５段	
176-60		磁器	不明	遡っても幕末	染付	
176-63		磁器	不明	遡っても幕末	染付	

176-67		磁器	不明	遡っても幕末	染付	
176-68		磁器	不明	遡っても幕末	白磁	
176-7		磁器	不明	近代	クリームウェア、ノリタケ？洋食器	
176-8			不明	19世紀～20世紀、近現代		
177-13		陶器	不明	不明	内面は鉄釉なし	
177-16	77-3		不明	近現代		接合同一個体
178-1		土師質土器	不明	近世	油煙付着	
179-2			不明	19世紀～20世紀、近現代		
180			不明	近代		
180-20	68-2	陶器	不明	近世	鉄釉擂り鉢	接合
180-7	180-8、180-10、180-13、8-1		不明	近現代	新しいもの	
181-2	36-29	軟質製陶器	不明	19世紀前半	焙烙、鉛釉、口径11.6cm、器高2.1cm、底径9.2cm	同一個体、第92図13
181-3		陶器	不明	近世	鉄釉擂り鉢	
182			不明	近代		
182-14	182-5	磁器	不明	明治～大正	洋食器、緑色製造マークあり	同一個体
182-16		磁器	不明	近世	壺、白磁	
183-19		磁器	不明	不明	玉縁、白磁碗	
183-22			不明	近代以降	新しい	
186-1		陶器	不明	幕末～明治	急須	
186-8		磁器	不明	近代	染付	
187			不明	近代以降	新しい物	
187-14		陶器	不明	19世紀中頃	呉須絵土瓶	
187-17		磁器	不明	幕末～明治	端反りの染付碗、口さび	
187-21		陶器	不明	19世紀前半以降	呉須絵の瓶	
187-26			不明	近現代		
187-32			不明	近代以降	新しい	
187-35		陶器	不明	幕末以降	呉須絵徳利？	
187-38		磁器	不明	19世紀	染付、燗徳利	
188		陶器	不明	近代	カメ	
188-11		陶器	不明	近世	鉄釉擂り鉢	
188-62	1-15、49-33、27-2	陶器	不明	19世紀～近代	甕、鉄釉に黒釉流し	接合同一個体
188-98		陶器	不明	近世	鉄釉擂り鉢	
189-8			不明	近代以降		プラスチックも含む、多数
190			不明	近代以降	新しい物	
190-6		陶器	不明	19世紀前半？	灰釉徳利、玉縁	
190-60		磁器	不明	不明	染付碗	
19-1		土師質土器	不明	近世～近代	脚付鉢？	
192-10		土師質土器	不明	近世～近代	鉢類	
192-15		磁器	不明	不明	高台	
192-18		瓦質土器	不明	近世～近代	角形鉢	
192-20		瓦質土器	不明	近世～近代	体部破片	
192-21		瓦質土器	不明	近世～近代	体部破片	
193-1			不明	近代以降	新しい	
197-5			不明	近代以降	新しい	
203-1		土師器	不明	古代	甕	
203-2		素焼き	不明	近世	かわらけ	
2-1			不明	現代		
210	遺構確認面94.11.4	陶器	不明	近世	鉄釉擂り鉢	
210-17	210-19		不明	近現代		別個体
210-20		陶器	不明	江戸時代？	甕、白濁釉、焼成不十分	
210-3		磁器	不明	明治以降	型押し白磁皿、中に仕切りがある	
210-7	遺構確認面94.11.4		不明	近現代		別個体
23-7	23-9	陶器	不明	近世	鉢？	
25-5			不明	20世紀初め？		
26-1		陶器	不明	幕末～明治	鉄絵、呉須、土瓶	
26-27		陶器	不明	19世紀中頃以降	鉄絵の圏線、瓶類	
26-4	26-11、26-18、26-13、26-29、26-32、161-4、161-6、161-28、161-23		不明	近現代	新しいもの	
26-8		陶器	不明	幕末～明治	鉄絵、土瓶	
30-10		磁器	不明	近世	白磁？	
30-2	30-3	磁器	不明	江戸時代？	染付瓶類	
30-4			不明	現代		
31-1		陶器	不明	近世	灰釉皿	
31-7		磁器	不明	18世紀～19世紀	白磁鉢	
34		土師器	不明	古代	体部小片	
34		土師質土器	不明	不明	体部小片	２点
34-1			不明	近代		
34-10		土師質土器	不明	近世	かわらけ、灯明皿	第89図11
34-9		土師質土器	不明	近世～近代	体部片	
36			不明	近代以降	新しい物	
36-10		磁器	不明	近現代	片倉公三百年の銘あり、器高3cm、底径一辺2.3cm	写真図版30－３
36-11			不明	近代		
36-13			不明	現代		
36-19			不明	近現代		
36-26			不明	近代以降	新しい	

36-27	36-38、36-52	陶器	不明	近代	第２師団、軍隊食器、口径15,7cm、器高6.5cm	第87図19
36-31	36-45	陶器	不明	不明	灰釉皿	接合
36-39		陶器	不明	近世	鉢	
36-4	176-24		不明	昭和		別個体
36-43			不明	近代		
36-46		磁器	不明	不明	白磁	
36-49			不明	近代		
36-50			不明	近代以降	新しい	
36-59		陶器	不明	明治時代	大ぶりな徳利	
37-3		陶器	不明	明治？	釉下に赤色顔料塗布	
37-4			不明	近代以降	新しい	
38-2		陶器	不明	中世	体部破片	第89図14
38-6			不明	江戸～明治	急須の蓋	
３階櫓Ｃコーナー		陶器	不明	不明	甕	
40			不明	近代		
40-14	133-4、148-4		不明	近現代		接合同一個体
40-18	40-16	磁器	不明	近代	瓶	接合
40-19			不明	近現代		
40-5	133-9	磁器	不明	近現代		接合
4-1		陶器	不明	近世～近代	透明釉、瓶類、	
41-1			不明	近現代		
42-3		磁器	不明	19世紀中頃	急須	
42-6		磁器	不明	19世紀中頃	急須	
42-7		磁器	不明	不明	急須	
43-3	43-4		不明	近現代	新しいもの	
43-5			不明	近代以降	新しい	
44			不明	近代		
44-7		陶器	不明	不明	灰釉、びん類	
46			不明	近代		
46-1		磁器	不明	幕末～明治	中皿（φ20以上）？、風景文	
49		陶器	不明	近代	カメ	
49-46			不明	近代		
49-5	188-67	陶器	不明	近代	呉須絵大鉢	接合
49-54	188-84	陶器	不明	近代	甕	接合同一個体
49-57	1-5、188-88	陶器	不明	近代	甕	
49-76		瓦質土器	不明	近世	瓦質土器片？	
49-78	49-77	瓦質土器	不明	近世～近代	小破片	６点
50		陶器	不明	近代	カメ	
6-1	149-11		不明	近代		接合
6-1			不明	近現代		
6-11			不明	近代以降	新しい物	１つ番号なし
6-12			不明	近代以降	新しい	
6-3			不明	近代以降	新しい	
70		陶器	不明	近代	カメ	
70-2			不明	19世紀～20世紀、近現代		
71-5			不明	近現代		
71-6		磁器	不明	不明		
72-1		磁器	不明	19世紀～20世紀	黒釉皿	
72-2			不明	近代		
73-1		磁器	不明	近代	刷絵、染付	
74-12			不明	近代以降	新しい	
74-13	74-4		不明	近現代		別個体
74-14	74-7	磁器	不明	幕末～明治	染付徳利、大形品、圏線あり	
74-19	74-9		不明	近代		同一個体
74-2	74-1		不明	近代		接合
74-3	137-17		不明	現代		同一個体
74-5			不明	近現代	新しいもの	
75-3		土師質土器	不明	近世	かわらけ、口縁部片	
76-1			不明	近現代		
76-4	76-7、76-8、76-5、76-6、76-2、76-3	陶器	不明	近世	白濁釉、びん類	同一個体
76-9		陶器	不明	不明	八鉢か香炉、灰釉	
77-1、177-3	161-29、156-2、127-5	陶器	不明	不明	鉄釉甕	同一個体も含む
8-1			不明	近現代	新しいもの	
82-1			不明	近代	大形香炉	
83-2			不明	近代		
84			不明	近代以降	新しい物	
84-15	84-16		不明	近現代	新しいもの	
84-19	12-1、143-9、18-6	磁器	不明	19世紀～20世紀		接合同一個体
84-2		陶器	不明	19世紀？	鉄絵、透明釉	
84-8	84-17	磁器	不明	近代以降	近代	同一個体
85-10			不明	近代以降	新しい	
85-3			不明	明治	刷絵	
85-6		磁器	不明	19世紀後半	すり絵の染付中皿	
85-9	85-11	磁器	不明	近代	染付輪花鉢	接合同一個体
87-1		陶器	不明	近代？	外面は不明釉、内面は鉄釉、甕	
92-1		陶器	不明	近代	呉須絵大鉢	
9-3		土師質土器	不明	近世	かわらけ皿	
93-2		陶器	不明	幕末～明治	鉄絵、灰釉碗	
95-12		土師器	不明	古代	内黒土師器底部片	
95-20			不明	近代		刈田？の墨書あり

95-24		陶器	不明	近世	鉄釉擂り鉢	
95-25		土師質土器	不明	近世	かわらけ、器高1.3cm、底径8cm	第88図下段５、写真29－８
95-26		陶器	不明	不明	鉄釉に黒釉流し、甕	
95-41			不明	近現代		
95-63		陶器	不明	近世	鉄釉擂り鉢	
98-1			不明	近代		
99-1		磁器	不明	18世紀～19世紀	筒茶碗、湯飲み茶碗、白磁か染付	
Ｃコーナー１	021112	土師質土器	不明	近世	かわらけ	第88図上段５、写真30－１
ＳＪＸＸ		土師質土器	不明	近世	かわらけ、器高1.2cm、底径7cm	第90図12、写真29－７
ＳＪＸＸ		土師質土器	不明	近代	火鉢？	接合
ＳＪＸＸ		土師質土器	不明	近代	火鉢？	接合
ＳＪＸＸ		土師質土器	不明	近代以降	素焼きの器台	
ＳＪＸＸ		土師質土器	不明	近代以降	素焼きの鉢	
ＳＪＸＸ		土師質土器	不明	近代以降	素焼きの四角い鉢	
ＳＪＸＸ		土師質土器	不明	不明	素焼きの壺の蓋、沈線あり	
ＳＪＸＸ		土師質土器	不明	不明	素焼き	２点
ＳＪＸＸ		陶器	不明	近世～近代	黒釉鉢	
SJXX		陶器	不明	13～14世紀	在地産、体部片	第90図９、写真29－２の３
ＳＪＸＸ		陶器	不明	中世	在地産、金色雲母を含む	第90図11、写真29－２の４
ＳＪＸＸ		土師質土器	不明	近世	かわらけ皿、底部～体部片	
ＳＪＸＸ		土師質土器	不明	近世	かわらけ皿、体部片	
ＳＪＸＸ		磁器	不明	18世紀	染付輪花皿、蛸唐草	
ＳＪＸＸ		磁器	不明	近代	型押し、染付皿	
ＳＪＸＸ		不明	不明	不明	全て不明	
遺構確認面		瓦質土器	不明	近世～近代	焜炉	
大手一ノ門まわり	確認面	土師器	不明	古代	体部片	
大手一ノ門まわり	確認面	土師質土器	不明	近世以降	器種不明	
大手一門桝形部	930512	土師器	不明	古代	体部片	
大手二ノ門	旧溝	陶器	不明	近世	鉄釉擂り鉢	
大手二ノ門	礎石跡２	土師質土器	不明	近世～近代	鉢類	
大手二ノ門トレ	930625	土師器	不明	古代（９～10世紀）	甕の口縁部	
大手二ノ門トレ	930625	土師質土器	不明	中世～近世	かわらけ皿、底部～体部片	第89図12、写真30－２
大手二ノ門トレンチ	930625	土師質土器	不明	中世？	かわらけ、見込みに指ナデあり、器高1.7cm、底径5.8cm	第89図９、写真30－１
大手門階段	東側トレ木炭層	土師器	不明	古代	土師器甕	
大手門階段東側	トレンチ木炭層	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿、底部再調整あり、口径7.6cm、器高1.7cm、底径5.6cm	第89図８、写真30－２
大手門階段東側	トレンチ木炭層	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿、底部～体部片	
大手門階段東側	トレンチ木炭層	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿、底部～体部片	
大手門階段東側	トレンチ木炭層	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿、底部～体部片	
大手門階段東側	トレンチ木炭層	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿、口縁部片	
大手門階段東側	トレンチ木炭層	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿	
大手門階段東側	トレンチ木炭層	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿	
大手門階段東側	トレンチ木炭層	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿	
大手門階段東側	トレンチ木炭層	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿	
大手門階段東側	トレンチ木炭層	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿	
大手門階段東側	トレンチ木炭層	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿	
大手門階段東側	トレンチ木炭層	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿	
大手門階段東側	トレンチ木炭層	土師質土器	不明	近世	かわらけ、灯明皿、底部～体部片	
大手門表土	920713	土師質土器	不明	近世～近代	体部破片	
下部東南トレンチ	H3.8.28	瓦質土器	不明	中世～近世	鉢類	
北側斜面		陶器	不明	19世紀以降	鉄釉おろし金	
北側斜面		陶器	不明	近代	七輪	接合
北側斜面		土師質土器	不明	近世？	鉢、焼成を受けている	
北側斜面		土師質土器	不明	近世～近代	角形、鉢類	
北側斜面		土師質土器	不明	近世～近代	火鉢か手あぶり、窓あり、表面型押し	第87図17、写真29－７
三階櫓	Ｂコーナー	土師質土器	不明	近世～近代	火鉢、表面は赤色塗布	２点、同一個体
三階櫓下西側	断割部	土師質土器	不明	近世～近代	四角い鉢類、金色ウンモを含む	
三階櫓南石垣	ベルト	土師器	不明	古代	底部片、回転糸切り	
三階櫓南側下部	Ｈ３．５．20	土師器	不明	古代	体部片	
三階櫓南側崩落土	920917	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿、底部～体部片	
三階櫓門跡	黒色土	土師質土器	不明	近世	かわらけ	第88図上段３、写真30－２
白石高校柱穴２		瓦質土器	不明	近世？	火鉢、内傾する	
白石高校柱穴２		瓦質土器	不明	近世～近代	瓦質土器	
白石高土坑２		瓦質土器	不明	近世～近代	鉢類	
東北隅下部	H030530	素焼き	不明	近世～近代	素焼きの土器、円孔あり	第87図18、写真20－６
二ノ丸	遺構確認面991022	土師質土器	不明	近世	かわらけ、灯明皿、口縁部片	
二ノ門２トレ		瓦質土器	不明	近世～近代	体部破片	
二ノ門新溝下面		土師質土器	不明	不明	体部片	２点、同一個体
二ノ門第１トレンチ		土師質土器	不明	近世～近代	鉢	

二ノ門第１トレンチ		土師質土器	不明	近世	口縁部から底部	
二ノ門第１トレンチ		土師質土器	不明	近世	底部片	
二ノ門第１トレンチ		土師質土器	不明	近世	底部片	
二ノ門第１トレンチ		土師質土器	不明	近世	体部片	
二ノ門第２トレンチ		瓦質土器	不明	近世	鉢	３点
二ノ門第２トレンチ		土師質土器	不明	近世～近代	角形、鉢類	５点
二門裏石垣		陶器	不明	中世	体部片	第89図15
二門第１トレ		土師質土器	不明	不明	土師質土器	
二門第２トレ		土師質土器	不明	近世	孔あり	
本丸跡小十郎	碑北西1-3	陶器	不明	19世紀？	土瓶か急須	
本丸跡小十郎	碑北西1-3	陶器	不明	近世？	鉄釉擂鉢	
本丸跡小十郎	碑北西1-3	土師質土器	不明	近世～近代	四角い鉢類、金色ウンモを含む	
本丸跡小十郎	碑北西1-3		不明	近現代		
本丸土塁土留部	0.7ピット、940609	瓦質土器	不明	近世	鉢	
本丸土塁土留部	940601	土師質土器	不明	近世	鉢	
本丸土塁部	940710	土師質土器	不明	近世	焼塩壺？	第88図下段３、写真29－７
本丸内石垣脇	930924	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿、底部片	
本丸内石垣脇	930924	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿、体部片	
本丸内石垣脇	930924	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿、体部片	
本丸内石垣脇	930924	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿、口縁部片	
本丸内土塁部	940718	瓦質土器	不明	近世	窓のある火鉢	同一個体、第88図下段６、写真29－８
本丸内溝跡		瓦質土器	不明	近世～近代	小型の火鉢、文様らしきものあり	
本丸内溝確認面	930928	土師質土器	不明	近世	かわらけ皿	
南石垣下部床面		土師質土器	不明	近代以降	器台	
南下部	H030529	土師質土器	不明	中世～近世	かわらけ皿、底部～体部片	
櫓下井戸	北側断割部	瓦質土器	不明	近世～近代	鉢類、破断面にも黒色物質付着	
101-14		陶器	末家	不明	鉄釉甕	
105-5、6	97-3、141-7	陶器	末家	不明	鉄釉擂り鉢	同一個体、第92図14
11-1		陶器	末家	不明	鉄釉甕	
156-1		陶器	末家	不明	甕、鉄釉	
172-21		陶器	末家	19世紀	土灰釉、甕	
181-1		陶器	末家	江戸～明治	末家焼き、すり鉢底部片	
190-39		陶器	末家	明治はじめ	折縁鉢、あめ釉？	
21-5	21-2	陶器	末家	19世紀以降	甕、発色悪い、焼成甘い	同一個体
21-7	21-9	陶器	末家	19世紀以降	甕、発色悪い、焼成甘い	接合
57-5		陶器	末家	不明	鉄釉	
95-17	95-37	陶器	末家	不明	白濁化した釉、発色悪い	
ＳＪＸＸ		陶器	末家？	19世紀	鉄釉擂鉢	第90図14、写真20－６、７
149-12	6-2		美濃	現代	色絵皿	同一個体
33-3	33-2、190-11、190-30、190-46	陶器	美濃	17世紀前半？	灰釉、輪禿皿、しのぎ文	同一個体
62-2		陶器	美濃	17世紀	鉄絵皿	
62-3		陶器	美濃	17世紀～18世紀	鉄釉（さび釉）	
95-57	95-13	陶器	美濃	18世紀	鉄釉とあめ釉流し	
161-27	161-1	磁器	美濃？	明治	国産洋食器	接合
18-3		陶器	美濃？	18世紀	灰釉碗	
55		陶器	美濃？	16世紀	鉄釉、天目茶碗、削出し輪高台、底径3cm、器高1.2cm	第87図１
84-11		陶器	美濃？	19世紀前半？	灰釉折縁植木鉢	
137-24		プラスチック		現代	プラスチック箸、子供用	
137-6		ガラス製品		近代以降	ランプ片か、気泡あり	
143-22		ガラス製品		近代以降		
149-37		ガラス製品		現代	吸い飲み	
167-1		ガラス製品		近代以降		
37-2		ガラス製品		近代以降		
49-57		ガラス製品		近代以降	ビール瓶か	

第14表２　陶磁器の時期及び産地別集計

大手門17世紀
N＝11

磁器		陶器				
肥前	中国	肥前	美濃	唐津	瀬戸美濃	岸窯
3	2	1	2	1	1	1

大手門18世紀
N＝91

磁器		陶器				
肥前	波佐見	肥前	唐津	瀬戸美濃	大堀相馬	小野相馬
31	3	2	1	1	39	14

大手門19世紀
N＝91

磁器					陶器					
肥前	瀬戸美濃	切込	地方窯	不明	瀬戸美濃	大堀相馬	成島	地方窯	堤	不明
20	8	11	5	2	1	39	1	1	1	2

三階櫓17世紀
N＝4

磁器		陶器	
波佐見	中国	岸窯	唐津
1	1	1	1

三階櫓18世紀
N＝17

磁器		陶器			
肥前	波佐見	肥前	瀬戸美濃	大堀相馬	小野相馬
7	1	1	1	5	2

三階櫓19世紀
N＝98

磁器					陶器				
肥前	瀬戸美濃	切込	地方窯	不明	大堀相馬	小野相馬	堤	末家	不明
29	12	16	8	1	25	1	1	1	4

北側井戸17世紀
N＝3

磁器	陶器
肥前	岸窯
1	2

北側井戸18世紀
N＝1

陶器
小野相馬
1

北側井戸19世紀
N＝8

磁器				陶器	
肥前	瀬戸美濃	切込	不明	大堀相馬	地方窯
1	2	1	1	2	1

土塁部17世紀
N＝7

磁器		陶器	
肥前	中国	肥前	岸窯
3	1	1	2

土塁部18世紀
N＝41

磁器		陶器				
肥前	瀬戸美濃	瀬戸美濃	美濃	大堀相馬	小野相馬	京・信楽
13	1	6	1	8	10	2

土塁部19世紀
N＝29

磁器					陶器					
肥前	瀬戸美濃	切込	地方窯	不明	大堀相馬	小野相馬	備前カ常滑	末家	地方窯	不明
6	3	3	5	1	5	1	1	2	1	1

白石城跡17世紀
N＝25

磁器			陶器				
肥前	波佐見	中国	肥前	唐津	瀬戸美濃	美濃	岸窯
7	1	4	2	2	1	2	6

白石城跡18世紀
N＝150

磁器			陶器					
肥前	瀬戸美濃	波佐見	肥前	瀬戸美濃	美濃	大堀相馬	小野相馬	京・信楽
51	1	4	3	8	2	52	27	2

白石城19世紀
N＝226

磁器					陶器								
肥前	瀬戸美濃	切込	地方窯	不明	瀬戸美濃	大堀相馬	小野相馬	成島	堤	末家	備前カ常滑	地方窯	不明
56	25	31	18	5	1	71	2	1	2	3	1	3	7

第７章　考　察

第１節　遺構

白石城跡の石垣は発掘調査の結果、野面積み、打込ハギ布積み、乱積み技法が用いられていることが明らかになった。天守台は野面積み、大手門内は打込ハギ布積み、本丸外郭東側は打込ハギ布積み、乱積みが見られる。石垣は３種類の技法が用いられていることとなる。従来、三階櫓跡西側石垣は崩落土により覆われており、地表からは観察できなかった。発掘調査で石垣の残存が確認できたことにより、三階櫓跡の規模が把握できた。

片倉小十郎の姉喜多が考案したと伝えられる大手一ノ門が設置される以前の本丸の詳細は不明である。しかし、トレンチで部分的に確認した先行遺構の存在と、三階櫓跡北辺石垣とそれに接続する大手一ノ門跡の石垣のが直線にならず、三階櫓跡から東側の石垣が若干北側に膨らんでいるのは、何らかの遺構の存在、もしくは改修の痕跡を示すのもと考えられる。

また、近世白石城に先行する遺構は、三階櫓跡南側土塁の断面Ａ～Ａ′（写真図版５－３）と石列（土塁）部のＢ～Ｂ′断面に溝跡と思われるものが確認されている（写真図版５－４）。また、大手二ノ門跡第１トレンチ内で、積み手の異なる堆積土が確認され、本丸周辺の土塁が複数の盛り土を経て、現在の形となっていることが判明した。実際、13～14世紀代の中世陶器など、近世以前の遺物が少なからず出土しており、先行する遺構の存在を裏付けるものである。

文政２年（1819）に白石城が全焼している。今回の調査では、これを裏付ける明確な遺構、遺物つまり、被災した大量の陶磁器、瓦は確認できなかったが、一部の遺構では焼土が見られた。

このことについて、白石城三階櫓は文政２年の火事の時点では、三階櫓は瓦葺きではなく、こけら葺き、檜皮葺であった可能性があることが指摘できる。被災した瓦、陶磁器が少ないことは合理的に説明できるが、被災資料を発掘調査区外に廃棄した可能性もある。

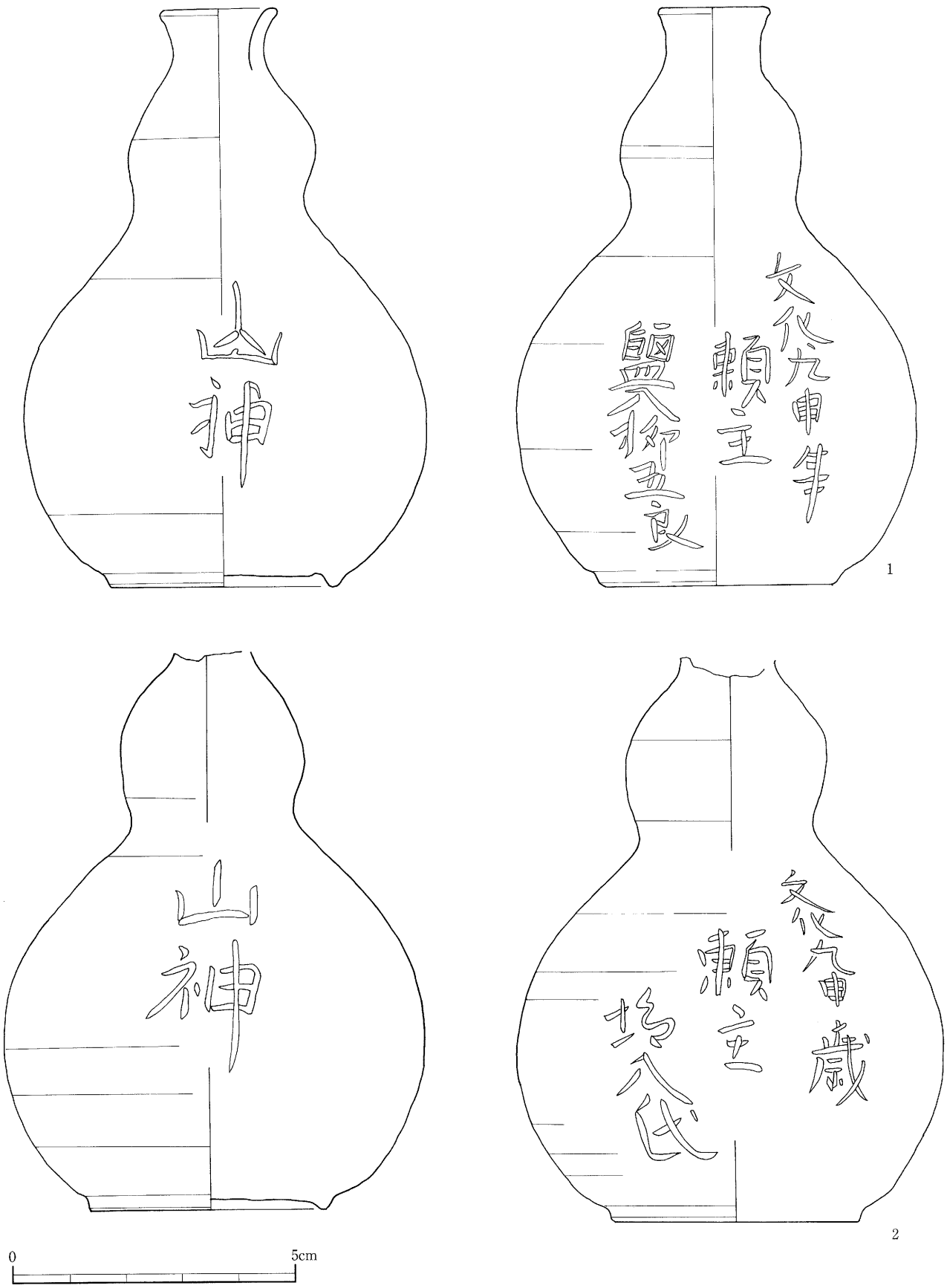
今回の調査資料からは、この点に明確にできなかったことから、将来において、本丸跡内の発掘調査により、年代観が矛盾しない被災した資料、遺構の追求が必要と考えられる。

なお、本丸内の建物については絵図が残されており、付図７として掲載した。白石城西方にあった常磐崎別邸図（片倉公別荘図、齋藤報恩会蔵、写真図版15）は、おそらく19世紀代のものと考えられる。大きさは南北2.47m、東西2.41mである。建物が立体的に描かれ、屋敷内には池、樹木が配置されている。東側には白石城沼之丸の沼が要害池として、西曲輪には八幡宮も描かれている。若干、虫食いがある。

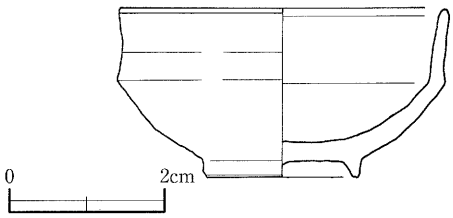
第２節　陶磁器等

中近世陶磁器、土師器、近現代の陶磁器、ガラス製品等は1,000件を超す登録となっており、陶磁器鑑定結果はリストを作成している（第14表１）。ここではまとまった点数が出土している近世陶磁器について若干の分析を行い、その他のものについては、個別に記述する。

これらの産地は肥前、青花（中国の明～清）、瀬戸美濃のほか、地元に近い産地として大堀相馬、



第100図　萩の坂焼山神講徳利（藤沼邦彦氏原図）



第101図　山神講の碗

小野相馬、岸、堤、成島があり、切込、末家も見られる。地方窯としたものは奥州、すなわち東北地方産の製品と見られるものの、産地の調査研究が進展していないために、現時点では、地方窯として一括せざるを得なかったものである。

分析にあたり、例えば、18～19世紀というような時期決定しかできない陶磁器は、19世紀と分類した。また、18世紀以降という時期決定しかできない陶磁器は18世紀に所属するものとした。従って、近世、近世から近代というような時期の推定しかできないものは、分析対象から除外した。また、陶磁器リストにおいて、？を付した産地のものも、今回の考察では、仮にその産地のものとして扱い分析した（第14表２）。

地区毎、時代別にに分析結果を見ていく。

三階櫓跡は、17世紀代に属するものは、ごく少数で４点しかない。18世紀代になると資料が増加し、18点になり、肥前、大堀相馬と小野相馬の割合が拮抗する。19世紀代になると、肥前、大堀相馬が多く、次いで切込、瀬戸美濃の順になる。18世紀代と19世紀代を比較すると、磁器の割合が増加していることが指摘できる。

石列周辺（土塁部）は、17世紀代は資料数が少ない。18世紀代になると肥前、大堀相馬が同一割合になり、小野相馬を加えると、肥前の割合を超えてしまう。19世紀代になると肥前はなくなり、大堀相馬が多くなる。17世紀代は磁器の割合が高いものの、18、19世紀代になると陶器の割合が急増する。

大手門跡周辺は17世紀代において、肥前、青花（中国）の割合が高い。18世紀代になると肥前、大堀相馬の順になる。次いで小野相馬が多い。19世紀代になると大堀相馬が約半数を占めるようになる。

北側井戸は資料総数が少なく、撹乱も著しいことから、数量の提示に留めた。

白石城跡全体では磁器の割合をみると、18世紀代に割合が若干落ち込むものの、全体としてみれば、増加傾向にある。17世紀代は肥前陶器及び磁器が３割を超え、次いで岸のものが多い。18世紀代は肥前磁器及び陶器が４割弱であるが、大堀相馬及び小野相馬の２者が５割を超え、急激に増加する。19世紀代は大堀相馬が全体の４割弱を占める。次いで肥前、切込、瀬戸美濃となる。瀬戸美濃もは18世紀代と比較すると急増する。切込は19世紀に一定の割合を占めるようになる。

以上の傾向は仙台城跡二の丸跡とほぼ同じである（関根1998）

地元の磁器である萩の坂窯跡の製品は、確実なものは見いだされなかった。白石市指定文化財になっている山神講中の徳利２点、おやわら碗を参考資料として掲載した（第100、101図、写真図版33－３～５）。徳利は紀年銘のある東北地方の磁器では最古のものである（中橋ほか1979、芹沢1981、藤沼1996）。

土師質土器について

発掘調査では、近世の土師質土器もややまとまって出土している。これまでの白石市周辺の発掘調査では、最もまとまった資料といえる。第14表１の種別で土師質土器、素焼きとしたものである。

出土地区では大手門跡周辺が最も多い。中世に遡る可能性のあるものもあるが、器高、口径のデータが計測できるものは少ない。焼塩壺と推定される資料も出土している。

一方、仙台城二の丸跡では土師質皿は元禄年間～18世紀後葉に法量分化、18世紀末～19世紀初めに小型化、全体的に浅いものに変化していく傾向が指摘されている（藤沢1998）。

板碑について

今回の発掘調査で板碑が１基出土している。これまで白石市を含む刈田郡では、板碑の確認例が少なかった。市内鷹巣平地山で１基、小下倉六角元に２基確認されていたのみであった（加藤1984）。

また、中橋によれば斎川の大義寺墓地内に板碑を再利用した墓碑が１基あるという。今回、更に一例を加えることになった。

白石地方において板碑が少ない点について、調査方法に関係がある旨の指摘（渡部1984）もあったが、指摘にあるような調査方法の問題があるとは言えない。その理由として、白石市内は片倉信光、阿子島雄二、中橋彰吾により、石造物の悉皆調査に近い集成が既に実施されており、石碑群調査の先駆的業績として高く評価されているからである（阿子島1970、中橋1974）。板碑はもともと、製作数が少なかったと考えられる。

防空監視所関連資料について

三階櫓跡南東隅の撹乱の穴から軍隊茶碗、統制番号のついた陶磁器が出土しており、敵機識別用アメリカ軍機模型と共に、戦時下における防空監視所での利用を示すものである。軍隊茶碗の出土も県内では珍しい。第二師団があった仙台城二の丸跡で多く出土している。二の丸跡第12地点の調査（NM12、調査期間1993年６月30日～10月27日）において、星印がついたものがまとまって出土している。

第３節　瓦

瓦は総計1,300kgを超える量が出土している。しかしながら、出土状況から一括資料と呼べるものは少ない。今回、地区毎に瓦の特徴を記述して、傾向を見ることとする。地区毎としたのは、三階櫓跡、石列周辺、大手門跡、北側井戸間では、絵図においても構造の異なる建物が配置されており、出土した瓦に、それぞれの建物の性格が反映していると考えられるからである。

ここで、瓦片の分類基準について述べる。近世城郭跡から大量に出土する瓦片については、先行研究例として仙台城三の丸跡（結城、佐藤1985）、同二の丸跡における東北大学埋蔵文化財調査研究センターによる一連の『調査年報』がある。今回、詳細な分類がされている『調査年報』９における分類を基にしながら（菊池1998）、白石城跡の出土資料に即した分類を加え、破片数算定を行った。

平瓦は確実に平瓦と言えるものだけが該当する。平瓦１類は反りがある瓦であり、破片では、反りがある平瓦、桟瓦、軒桟瓦片を含むことになる。平瓦２類は反りがなく、板塀瓦の一部で、体部と隅が残存するものを分けて集計した。丸瓦の完形品は瓦当面が確実に存せず、軒丸瓦でないものを指す。従って集計数は最小値となる。丸瓦は完形と破片資料は別扱いとし、玉縁、体部、頭部の破片を分類

した。したがって、瓦当面を欠損した軒丸瓦破片の可能性があるものも集計に含めている。したがって、集計数は最大値となる。板塀瓦は桟部分の破片、溝部分の破片、それらが揃う完形品とに分類集計した。板塀瓦は桟部分が屈曲せず、左桟が多い。分割した瓦は、大手二ノ門跡トレンチで平瓦１類に分類されるもので１点、本丸内溝確認面で同１点（幅11.5cm）、本丸内土塁土留部６ピットで同１点（幅12.5cm）出土している。棟瓦は桟部分が屈曲するものである。

軒丸瓦の瓦当面には連珠巴文、三引両文、九曜文が用いられている。仙台城二の丸跡において、17世紀代においては、連珠巴文、巴文しかみられず、家紋系の九曜文は後出であり、確実な出土例は18世紀代であるという（菊池1998）。

三階櫓跡では、連珠巴文28点、三引両文31点、菊丸４点、九曜文１点が確認されている。石列周辺では連珠巴文12点、三引両文８点、大手門跡では連珠巴文７点、三引両文14点、北側井戸では連珠巴文２点、三引両文５点となっている。勘定所では瓦当面のある軒丸瓦は出土していない。SJXXでは、連珠巴文11点、三引両文18点、巴文１点、表採資料では、連珠巴文２点となっている。

全体では三引両文が約５割、連珠巴文が約４割となっている。九曜文、巴文は少ない。

軒桟瓦で瓦当面の文様が明確に判断できる資料は少なく、巴文と唐草文（第83図１）、九曜文と唐草文（第84図１）がある。全体でも22点の出土であり、遺構外の出土が多く、傾向は掴めない。

草花文とした第84図３は、瓦に筋状の文様が入り、明治時代以降のものである。

軒平瓦か軒桟瓦がどちらかの区別が付かないが瓦当面のあるものは比較的、出土点数があり、小破片を除くと、24点出土している。三階櫓跡、石列部、大手門では雪持笹系統のもの（第70図15、第70図16、第74図34、第76図11）が確認されている。

軒平瓦は雪持笹系統が１点、唐草文が12点、その他３点出土している。

菊丸瓦は三階櫓跡のみで４点出土している。板塀瓦は石列周辺に多く出土している。

面戸瓦のうち、計測できるものは幅11～13.5cm、長さ7.5～9.8cmの範囲に収まる。長さは８～9.5cmに多く、10cmを超えるものはない。

棟込瓦は軸幅６～7.8cmに収まり、直径は11.5～12cmに集中する。一覧表ではその他に分類した。

輪違いは、上幅は４～9cmと範囲が広いが、5.8cm～7.5cmにややまとまりが見られる。下幅は15cmが多いが、11.5～15.8cmまでのバラツキがある。長さは12～14cmが多い。その他は10.5～14.5cmまでの範囲に収まる。谷丸瓦、鳥伏間（瓦当直径16～17cm）がある。

仙台城二の丸跡の瓦と比較すると、いくつかの相違点が指摘できる。

1　白石城跡には滴水瓦、Ｔ字瓦がない。

2　白石城跡独自の瓦として棟込瓦（第71図２等）がある。

3　仙台城二の丸跡の軒平瓦の雪持笹と同一のものがない。

３の雪持笹は、二の丸のものと比較すると若干ではあるが型式差がある、すなわち、３つの笹の上の雪の表現が異なり、「～」ではなく、新芽が吹き出たような「Ｔ」に近い文様となっている。

さらに今回、唐草文とした文様は、３枚の笹の葉脈は表現されず、扁平な長楕円形となり、両脇の唐草も先端部のみが丸く厚い形となっている。笹の上の文様も３本の棒状文様になる。この文様は仙

台城二の丸跡では出土していない。

なお、片倉家中に瓦焼役、吉田中左エ門、柴山富太が確認できる（『奥羽盛衰見聞誌』後編、白石役人帳、文久３年）。柴山は『家臣系譜書上』に系譜が掲載されている人物である（川村1997、p.292）。白石城北の白石川を挟んだ対岸の福岡蔵本の瓦焼き場で白石城の瓦を焼いたという（片倉ほか1937、片倉1941、中橋ほか1979）。瓦質土器も焼いていたようだ。

第８章　復元工事と遺構保護等

第１節　復元工事

白石城復元は白石市にとって一大事業であった。復元事業のみで総事業費は2,107,595千円となり、うち、起債は1,560,600千円（地総債：地域づくり事業75％）であった。

第104～107図には大手門跡の復元資料を掲載した。復元工事は発掘調査成果に基づくことが示されている。

白石城歴史探訪ミュージアム工事（勤労青少年ホーム改造）は総事業費474,850千円となり、設計施工監理12,978千円、改造工事381,872千円、立体映画制作80,000千円であった。工期は平成６年10月22日～平成７年３月30日で、設計監理は（有）建築文化研究所・八木清勝、施工者（建築）は株式会社間組、改造工事（機械）株式会社ミツヤ設備機工、改造工事（電気）株式会社ユアテック白石営業所、改造工事（エレベーター）フジテック株式会社、立体ハイビジョンシステム（財）ＮＨＫサービスセンターであった。

ミュージアムの建築規模は406.09㎡、延べ床面積1.042.31㎡、１階面積338.31㎡、２階床面積338.31㎡、３階床面積338.31㎡、４階床面積27.38㎡である。２階には白石城下模型1/500スケール、白石城本丸模型1/100スケールが展示された。

復元工事が終了し、一般公開が開始されると市内外から多くの方が訪れた。平成７年５月３日の公開から５月21日までの見学者は約17万人を越えた。公開から１年にも満たない平成８年２月12日には、白石城と関連施設入場者が50万人を突破した。一時は、白石城見学に際し、駐車場が手狭であり、駐車場探しに難儀したという苦情が出るほどであった。

第２節　遺構保護

白石城復元工事にあたって、発掘調査、絵図史料調査等の史実に基づき、忠実な復元工事が行われたものの、遺構保護は不十分であった。遺構保護の観点からは、問題のある復元工事となっている。文化財保護の観点からは、復元工事というより、‘平成の築城’であった。

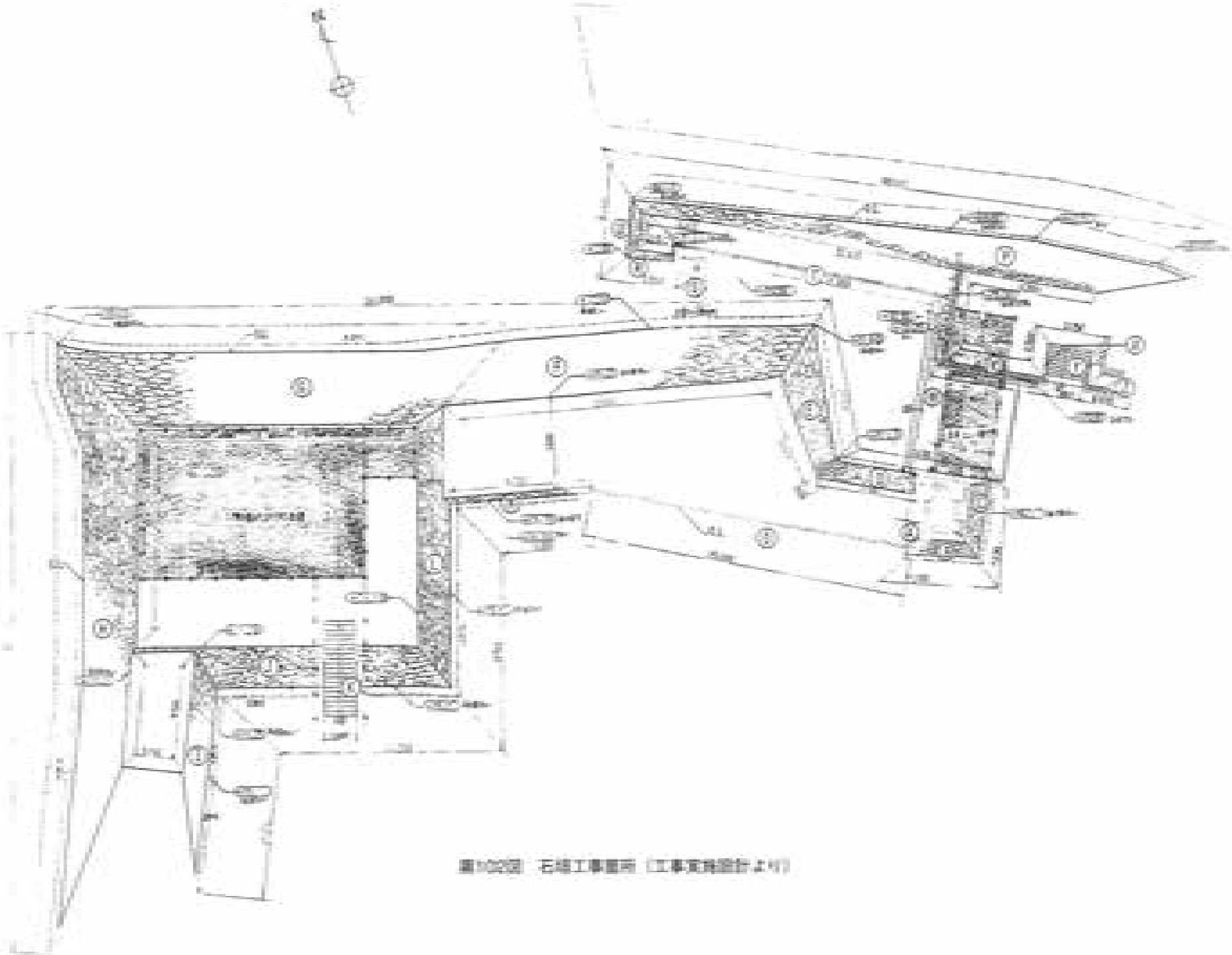
以下、問題と思われる箇所を記載する。発掘調査担当者の視点で見ると、復元建設工事報告書において十分なデータが示されていない所が多数見られる。

調査段階

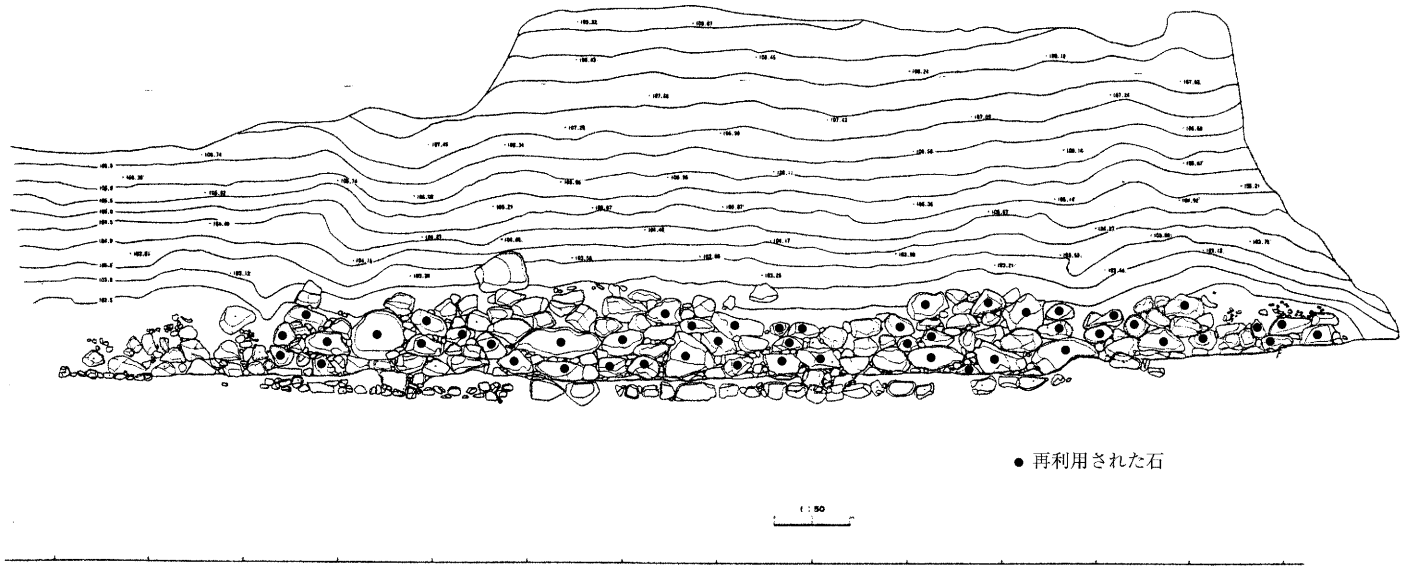
1　復元のための工事ということで、遺構確認調査で調査段階が終了しており、遺構の断ち割り、下層遺構の有無確認が不十分であった。近世白石城に先行する遺構の追究が十分に行われなかった。

2　１に関連するが、現土塁の断ち割り調査断面で古い土塁、溝が発見されているにも関わらず、それらの遺構を平面的に確認する調査が実施されていない。三階櫓跡に南接する土塁では、平面調査が全く行われていないようである。

3　層位的な遺物取り上げが不十分であった。平面的な遺物取り上げは、何とか行われたものの、層



第102図　石垣工事箇所（工事実施設計より）



第103図　再利用された石垣（S=1/200）

位置	石積撤去		積直し石積						栗石	階段石
	隅石 (m³)	平石 (m²)	隅石 (m³)			平石 (m²)			(m²)	(m)
			在来石	新石	計	在来石	新石	計		
A	1.74	2.70	—	5.00	5.00	—	9.82	9.82	1.68	—
B	3.48	5.94	—	5.29	5.29	—	6.42	6.42	1.56	—
C	3.17	9.13	—	5.98	5.98	—	8.75	8.75	1.26	—
D	3.02	22.10	—	6.70	6.70	—	53.12	53.12	3.57	—
E	4.35	23.41	—	9.37	9.37	—	45.32	45.32	3.33	—
F	—	58.31	—	—	—	—	197.84	197.84	7.08	—
G	1.84	113.10	—	41.14	41.14	53.50	293.08	346.58	10.41	—
H	—	103.11	—	0.86	0.86	37.30	362.30	399.60	13.53	—
I	—	31.10	—	—	—	—	71.70	71.70	4.41	—
J	3.74	48.35 (29.67)	—	32.22	32.22	—	123.62	123.62	6.03	—
K	—	1.84	—	—	—	—	12.82	12.82	0.90	50.40
L	—	47.46	—	—	—	—	115.91	115.91	6.51	—
M	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
N	—	23.30	—	2.94	2.94	—	21.01	21.01	3.57	—
O	—	—	—	—	—	—	37.00	37.00	1.35	—
P	1.71	99.47	—	6.98	6.98	—	338.23	338.23	14.88	—
Q	1.65	2.79	—	4.18	4.18	—	13.68	13.68	1.29	—
R	—	3.50	—	2.4	2.4	—	1.95	1.95	0.59	—
S	—	—	—	—	—	—	2.20	2.20	0.54	—
T	—	—	—	—	—	—	40.66	40.66	6.39	—
U	1.47	4.74	—	4.52	4.52	—	23.51	23.51	1.89	—
V	1.47	6.94	—	3.27	3.27	—	16.29	16.29	1.71	—
W	—	—	—	1.56	1.56	—	3.80	3.80	—	32.10
X	—	2.24	—	—	—	—	22.40	22.40	2.28	—
Y	—	—	—	—	—	—	—	—	0.64	37.50
Z	—	—	—	3.27	3.27	—	33.11	33.11	2.01	—
合計	27.64 m³	609.53 (m²)	—	135.68 (m³)	135.68 (m³)	90.80 (m²)	1,354.54 (m²)	1,445.34 (m²)	97.41 (m²)	120.00 (m)

※ 積直し石積の在来石は、石積撤去石の 80% 再利用可能数量とする。

第15表　在来石と新石の割合（工事実施設計より）

位に基づく取り上げは、不十分であった。特に大手二ノ門跡の土塁断ち割りでは、層位的な堆積状況でありながら、遺物は注意を払いながら取り上げはされていない。土塁に複数時期があるのであれば、どの層から、どのような陶磁器、土師質土器が出土するのかを見極めることによって年代決定は可能であったはずである。また、大手二ノ門跡東側階段上には、崩れ落ちた大量の瓦片があったが、これなどはまさに一括資料であり、取り上げ方如何で、良好な資料となるはずであった（写真57－１）。

4　石垣調査は不十分であった。石垣の詳細測量が実施されたのは、ごく一部の箇所であり、大手門周辺、本丸外郭、石列周辺、三階櫓跡南側階段跡、三階櫓に南接する土塁の石垣は側面図は作成されなかった。番付図が作成されているが、これも一部だけであった（写真図版52－７、61－６、62－２～３、64－３）。

また、石垣のデータ収集も不十分であった。復元工事にあたり、番付図は作成されたものの（第31、32図、写真図版52－７）、どの石を再利用したのかが判る資料はなく、この報告書作成のため、番付図と現況を対比し、再利用された石を確認する作業が必要であった（第103図、第15表、第102図）。また石のデータも計測、刻印、墨書の有無、加工痕の調査が十分になされていない（写真図版61－６）。再利用されなかった石、復元工事前に存在した大手門跡の石は行方不明である（写真図版64－３、62－２、３、63－２）。

復元段階

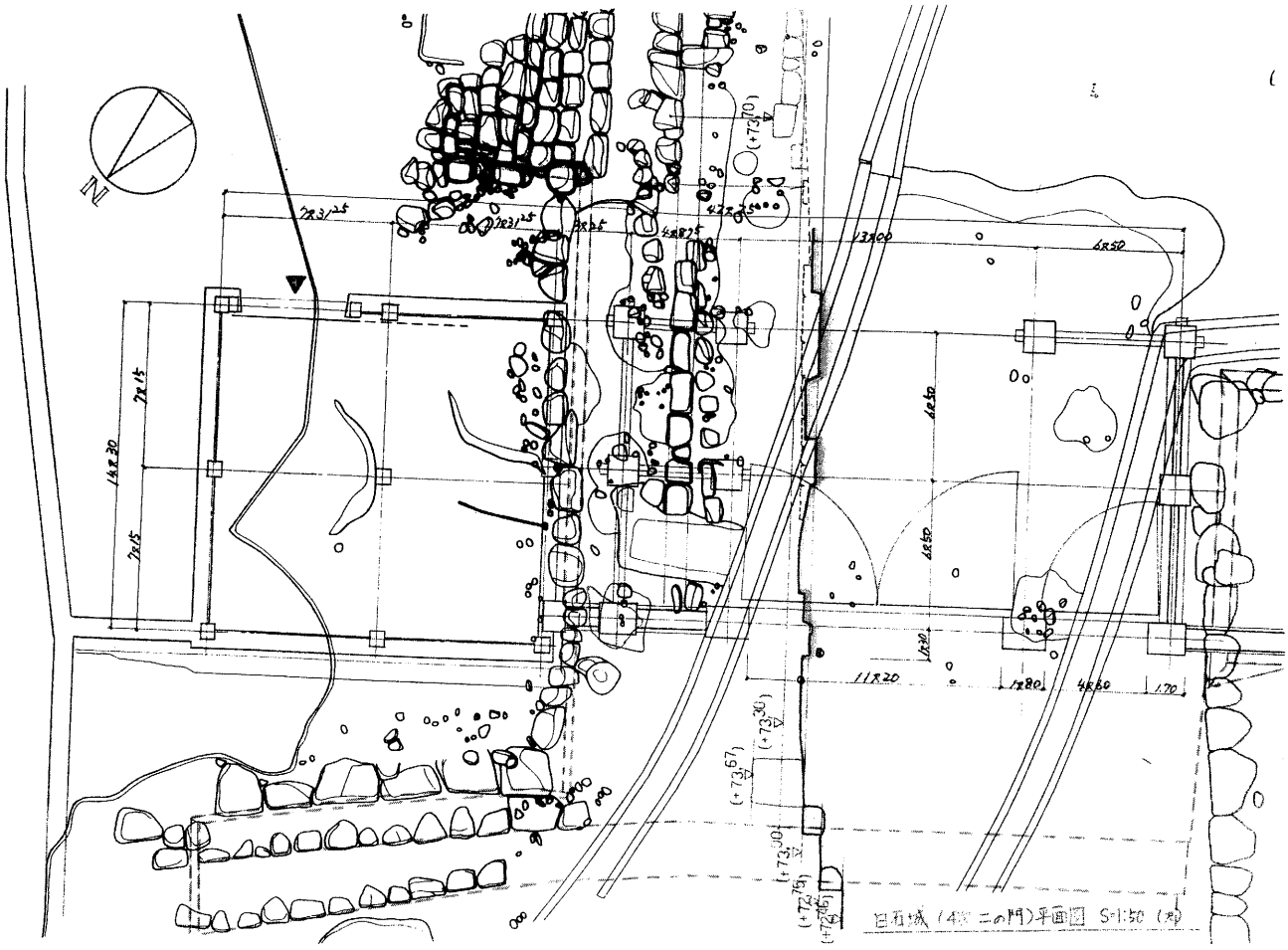
1　最大の問題は三階櫓の復元において２期の遺構を基に復元工事を行ったことである。今回、白石城三階櫓跡の３期のような遺構が発見されているものの、委員会では考古系と建築系委員の見解の相違があり、結局、採用されなかった。これは文政２年の火災後の基礎であった可能性が非常に高かったものである。指導委員会における検討資料の一部を第104～107図に掲載した。

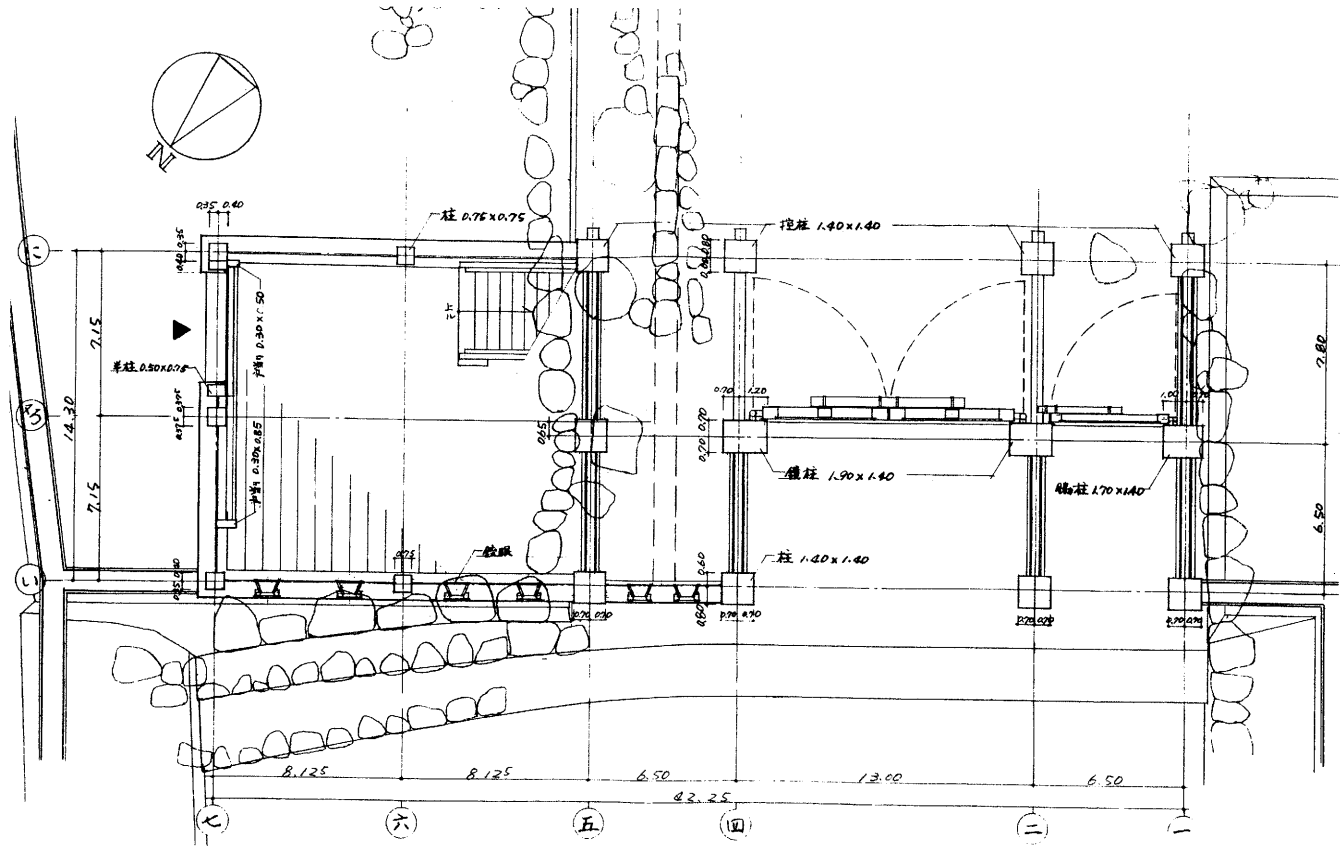
2　工事も工期が迫っていたこともあり、発掘調査のすぐ脇で工事が行われる状況であり、危険であった（写真57－２、53－６、61－５）。発掘調査で発見された遺構も十分な検討がなされないまま、復元工事が行われていた。これらは指導委員会でも問題になったことである。

3　工事に伴い、特に斜面、石垣基底部は大きく削平されてしまった（写真59－１、６、62－４～７、63－１、３～７、64－１、７）。また大手一ノ門とその背後の土塁は、大きく掘削され、現在、地下には遺構は全く残っていないと思われる。大手二ノ門跡東側階段跡の石も、全て撤去されている。

4　遺構保存も不十分であった。今回の事業は城復元であり、遺構保存は通常の土木事業（道路建設等）に伴う遺構保存と異なり、保存は容易であったはずである。今回の事業に限って言えば、遺構保存は、首長の政治的な判断を待つまでもなく、実務者レベルで協議を行い、保存が可能であったと思われる。

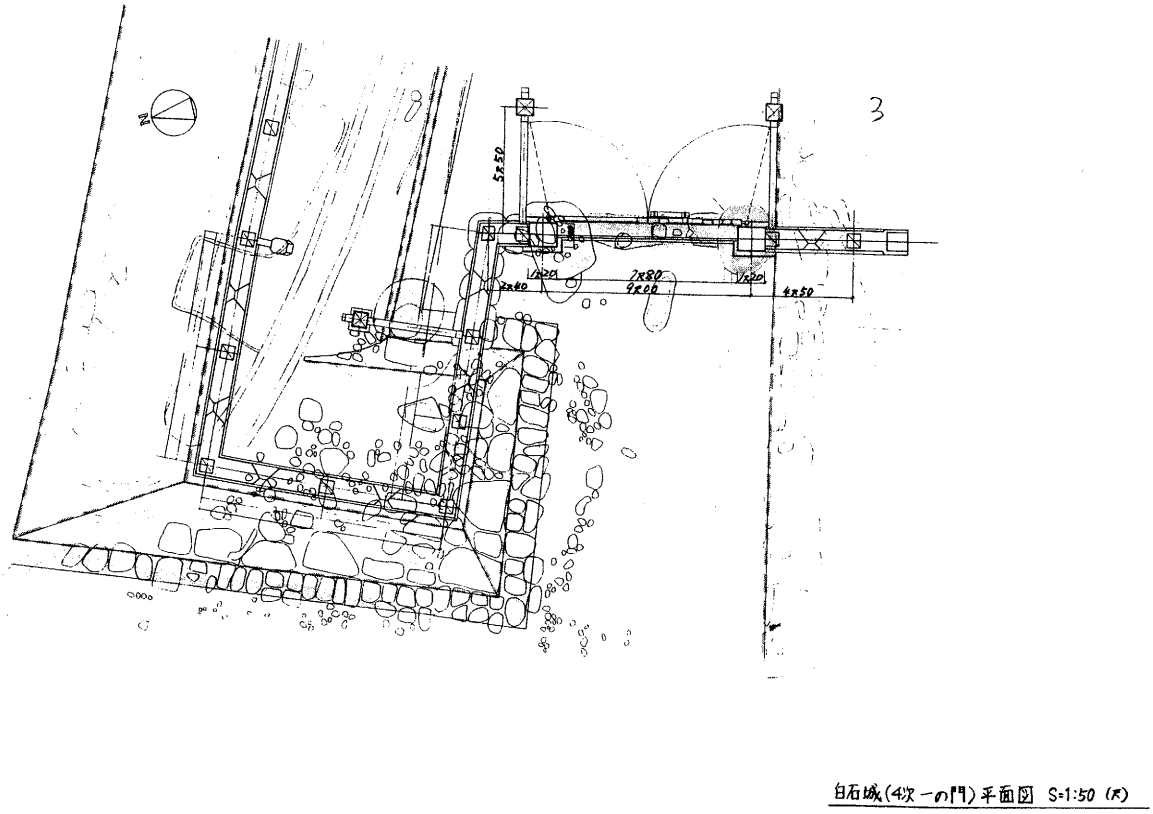
5　復元工事報告書においてもどの箇所をどのくらい掘削して工事を行ったのかが記載されていない。これでは、将来、石垣修理時に過去の掘削範囲が判らず、修理の度、確認調査を実施し、遺構の有無を把握する必要が生じることになる。





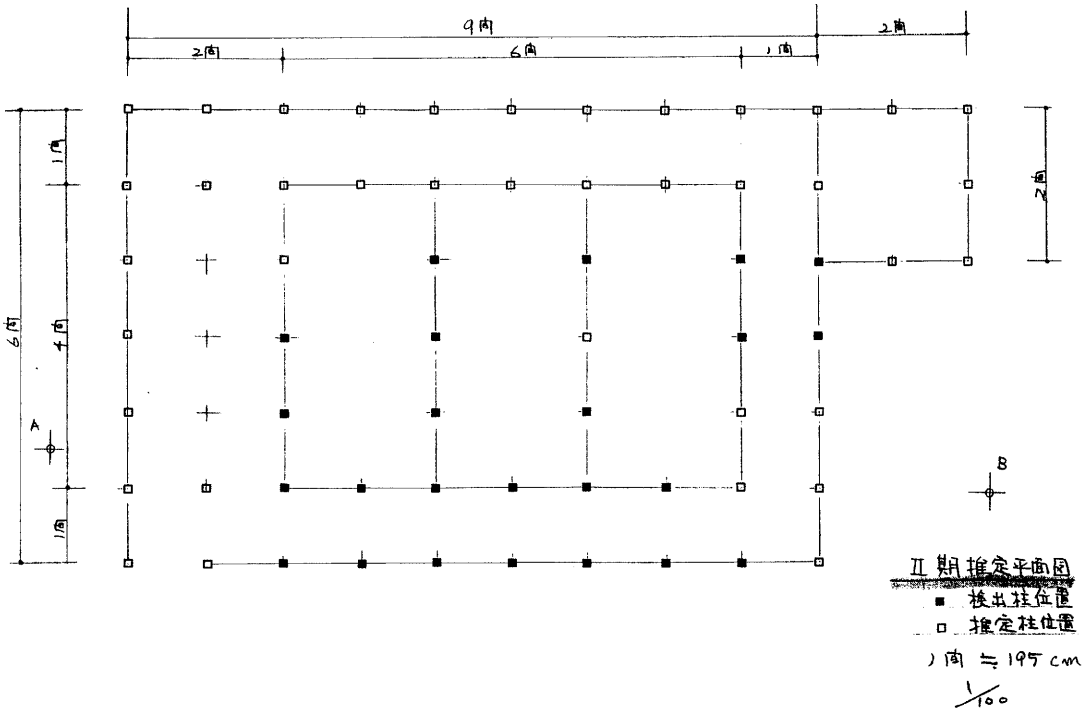
白石城（3次二の門）平面図 S=1:50 (尺)

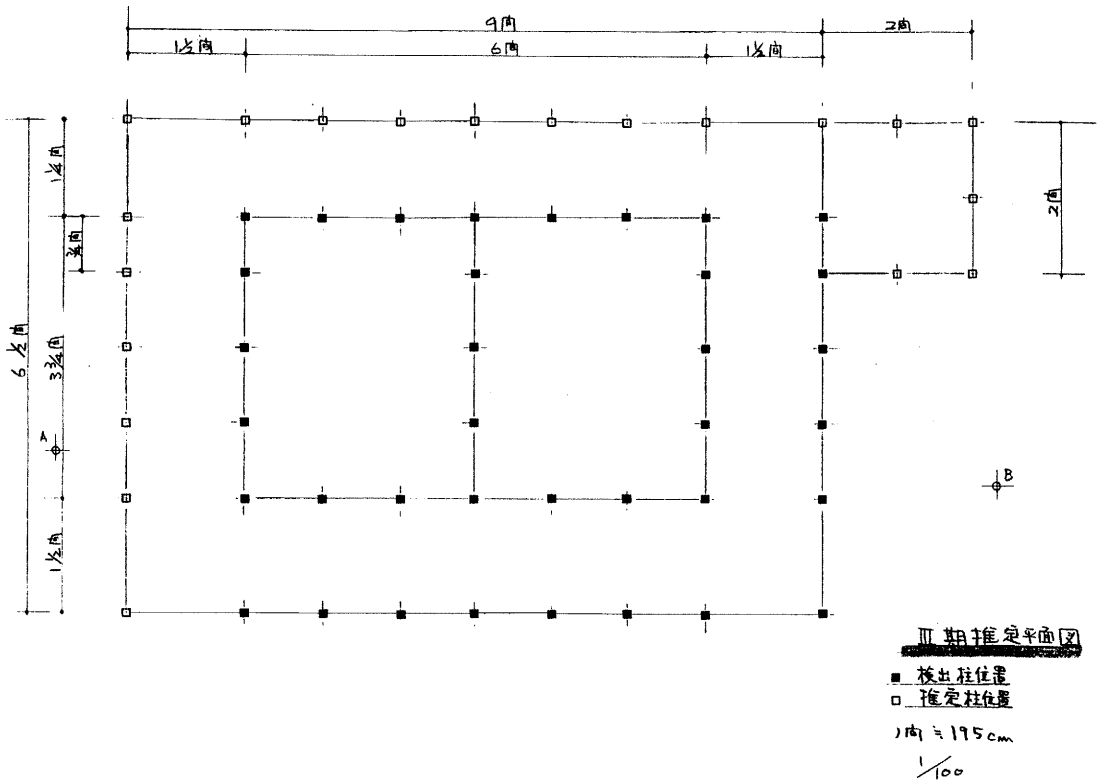
第104図　復元検討資料（1）（1/2に縮小）



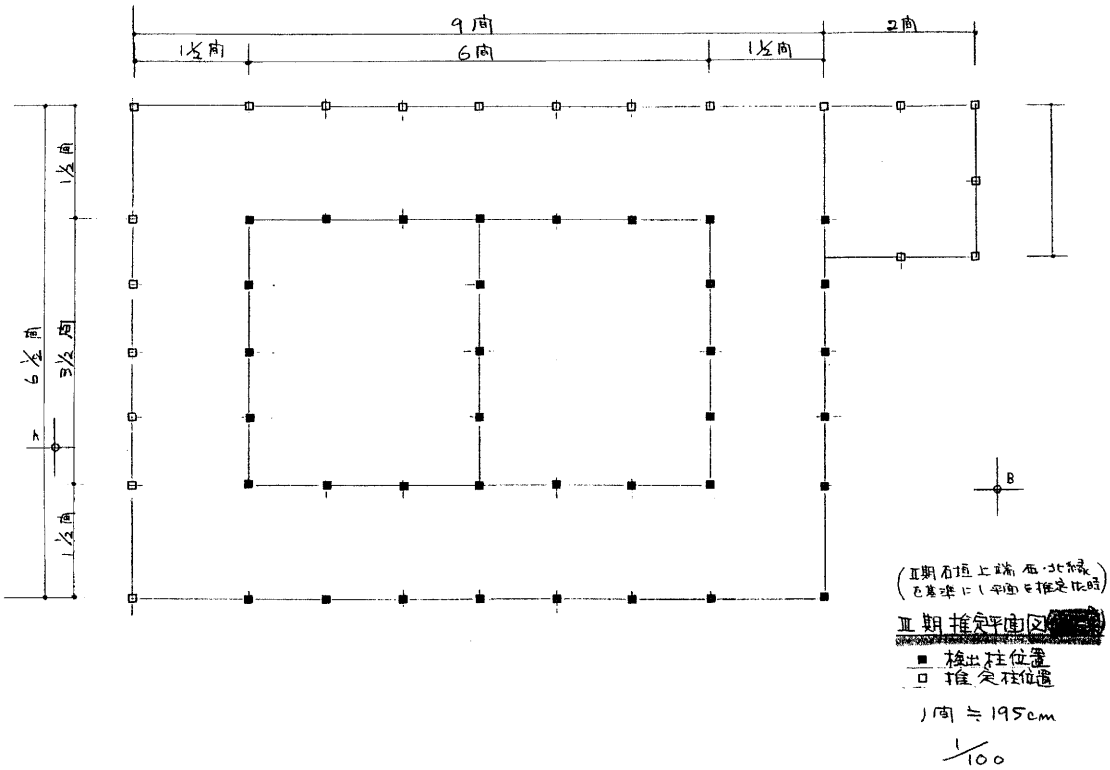
第105図　復元検討資料（2）（1/2に縮小）

6　白壁の塀が復元されているが、本丸内部から見ると、塀を支えるための控え柱が設置されているが、これは発掘調査では発見されていない遺構である。石垣の復元も、発掘調査で確認された技法と異なる技法で積まれている箇所があり、問題である。三階櫓跡に南接する土塁東面石垣は打込ハギ布積みであるべき所が、野面積みで復元されている（写真図版61－１）。突出平場を除く土塁部の石列周辺の石垣は現在、野面積みで復元されているが、本来は打込ハギ布積みである可能性が高い（写真図版53－４、７）。また、三階櫓跡東側で発見されていた階段は復元されていない（写真図版４－３）。三階櫓跡の南側階段は、現在、野面積みであるが、発掘調査では切石が用いられていたことが確認されている（写真図版５－５）。





第106図　復元検討資料（3）（1/2に縮小）



第107図　復元検討資料（4）（1/2に縮小）

第３節　調査体制

1　白石城跡復元工事に伴うこのような大規模な発掘調査であれば、調査員の配置は念入りに行うべきであった。人事異動で、担当者が頻繁に交代し、調査事業全体を通して把握できる人、発見された遺構全体の把握、価値付けをできる人が市教育委員会内部に存在しない事態となった。

2　特に写真に問題があった。撮影データが記されていない写真がほとんどで、何を撮影したがが、一見しただけで分からない写真が豊富に存在した。基本的な写真整理がなされていなかった。また、発掘調査図面、写真の一部は調査員が自宅に持ち帰ったまま保管しており、報告書作成作業に支障をきたした。遺構図面の中には、何の図面であるがさえ、記されていないものがあり、作成箇所特定に多くの時間を割くこととなった。

3　調査員の資質も問題であった。調査指導委員会でも指摘があったが、発掘調査に際して、消極的な姿勢が終始一貫しており、遺構に関して、十分なデータが得られなかった箇所が多かった。高い問題意識、意欲を持った者でないと、十分なデータは得られず、それまでに経験のない遺構の発掘はありきたりの調査しか行えない。この点についても十分な配慮が必要であった。

第9章　関連資料「白石城解体のいきさつ」

白石市誌資料

「白石城解体のいきさつ」

白石市誌編纂調査委員

亘　理　梧　郎

凡例

一　本稿は、昭和三六年（一九六一）に白石市誌資料第三輯として発表されたものである。

一　表記は原則原文のままとしたが、明らかに誤記と思われるものは訂正した。

一　原文の脚註は各節毎に付されていたが、本稿では文末にまとめた。

目次

一、はしがき

二、官軍の入城

三、按察府時代と白石城

四、北地跋渉計画の進展と白石城の解体過程

五、むすび

あとがき

解説

一、はしがき

中世以来の一時にはもっと古く、古代以来と云ってもよい程の一長い歴史の中で、地理的条件による白石の軍事、戦略上の意義が、県内の他の地方に比較しても、より大きなものであったことは、衆目の見るところほとんど異論はないようである。

これが江戸時代においては、伊達氏が、領内南の関門として、白石に対する特別配慮の結果、いわゆる一国一城令の制限をこえ、仙台城を除く領内唯一の城として、幕府公認の白石城を残す政策として見られるようになる。

このことは、城が戦時における拠点をなすということばかりでなく、白石の住民すべての生活を、戦略上に結集せしめようとする、封建権力の象徴として存在したことをも意味するのでもあった。

後世、城のもつ建築美の再認識と、これに対する愛惜の情は別として、このような理解にもとづく場合、明治維新とともに城の消滅して行く過程は、同時に白石の住民が、封建的桎梏から解放されて行く過程を示すものとして、平和な町作りへの一里塚であったと見ることが出来る。

したがって白石城解体までのいきさつについては、新生白石の胎動として、歴史の跡づけを必要とするゆえんがあると見てよかろう。

小稿においては、戊辰戦争による城の明渡しから南部藩への授受、按察府の入城、白石県の設置とその移転等、維新当初における行政機関の変遷を中心とし、刈田郡強訴、片倉氏家中の北海道跋渉と関連させ、その間における白石城の取扱いから解体への過程を見、年代的には、明治元年から同七年にいたるまでを取扱うことにした。これによって、維新期における白石地方史の空白が、幾分でも埋められゝば幸いである。

二、官軍の入城

会津落城の一週間前、明治元年九月十五日、伊達慶邦が平潟口総督の軍門に降伏した日をもって、仙台藩の官軍に対する抵抗は終った。十月六日白河口総督は岡山、彦根、柳川、大村四藩の兵を白石に派遣し、*1八、九両日にわたり、これらの兵は相次いで白石に到着した。八日には片倉邦憲に対し、明日四ツ時（午前十時）城を明け渡すよう命令があり*2九日、城はその兵に収められることになったのである。『岡山藩記』によれば、

十月八日、本軍白石表へ著陣仕候、若松表出張之一手ハ、同九日白石へ著陣、本軍と合隊仕、同日白石城受取之節、隊長軍事方之者出勤仕候。

と見えている。*3

この日、白石では亘理町より町横目二人、若士両名が案内に立ち、大手門から城に登り、それより片倉景範が待ちうけて案内に当った。櫓下には家老衆が出迎え、付き添い見分の上九ツ時（正午）搦手より下り、城絵図と領内絵図を収め、城明け渡しを終ったのである。*4

彦根藩兵は総督府の命により藩兵の一部二小隊を残して、十一日に白石を発し、東京に凱旋しているので、*5これと前後して他の三藩の兵も白石を引上げることになったのであろう。十二日には、その留主中当分の間片倉氏の重臣に城を預け置くと申渡しがあり、櫓及び玄関には封印を施した上岡山藩から引渡され、番士をつけ、昼夜共に厳重な警戒のもとに預かることになった。*6

十二月に入り、行政官は官軍に抗した奥羽諸藩の処分を決定し、十二月七日、仙台藩南方（みなみかた）の刈田、伊具、柴田、亘理、宇多の五郡は南部彦太郎十三万石の領地とされ、翌二年正月七日には、片倉氏に対して、城地及び領分一宇召し上げの通達が行われた。ここにおいて、白石は慶長七年以来二六八年目に片倉氏の支配を離れ、新しい支配者を迎えることになるのである。

三、按察府時代と白石城

明治二年の年は、白石の住民が二百数十年来かつてない不安と動揺の中に送った年でもある。前年の官軍を迎えた時とも違い、又過去数回にわたる飢饉の経験とも異なる深酷さを持っていた。町方の様子は明らかではないが、千四百の片倉氏家中は、支配者の交替によって生活の根拠を失い、農民は粗米の取扱いをめぐって、遂に一揆の形をもって立ち現れて来る。交替したばかりの南部藩は、間もなく廃藩とともに去って白石県が置かれ、僅かにして角田県へと変わる。その間に按察府が割り込んで来る政治の複雑さを加えたのもこの年であった。

城地及び領地の召し上げについて、最も困難な問題は家中千四百の取り扱いであった。領主の家士

という身分と、早急に解決を要する生活問題をめぐって、大にしては維新政治の成否を決する問題の縮図がここでも展開されるのである。このことは新たに南部藩領に編入される五郡に共通する問題として、二月十四日、仙台藩重臣の石母田但馬等二名より弁官宛に提出された嘆願書の中でその対策を開陳するに至るのである。

旧領之内刈田郡柴田郡伊具郡宇田郡亘理郡南部彦太郎様江下賜候付右地所居住之臣属領内江為引移可申之所同所之内萬石以上并四五千石千石以上之家来十一人程有之右陪隷人頭壱万人以上老幼婦女取合四五万人茂可有御座右者領内江為引移候ニ茂当領内ニハ領内大之人員相満居候間食料引足不申終ニ飢餓ニ及候外無御座且右陪隷過半土着ニ而地所に而割與ひ置手自耕耘仕糊口罷在士ニして農を兼百性（姓）之業営罷在候間右者引移候へ者百性人員不足田地荒廃ニも相至可申候間右地所與置（中略）田地所持無之分も彦太郎様御家来引移候ニ指障不相成分江居住の輩者是迄之屋敷地直々居住農工商之内江帰し候生活仕候様御評議被成下度奉存願候（下略）*7

即ち五郡内の旧藩士で、千石以上万石に及ぶ約十一名の家中戸数およそ一万人以上、その家族を合せ四～五万人を、人口の多い新仙台藩領に移住させても、かえって食料不足を来たし、飢餓に陥入る外ない故、幸い右家中の大半はかねて知行を与えられ、農業に従事している者であるから、これを帰農させ、又地所を持たない者も、南部氏の家来に支障ない限り元の屋敷に住まわせて、農工商に従事出来るよう御評議願いたいと云うのである。これについては、弁官よりそれぞれの主人において実状をただし、武器刀剣類を取り上げ、眞実に農商に従事するならば居住を許すと回答がなされた。*8

右の如き五郡内居住の陪臣取扱の基本方針の決定に基づき、各地旧領主においては、具体的に陪臣帰農の方法を講ずる必要が起って来た。特に白石では南部藩士の多数移住により、遷延を許されない事情にあり、二月二十日には片倉邦憲からも嘆願書が提出された。これによれば、旧領中多くの荒蕪地があり、近年家来共が切り開いて田園に開拓するよう取り立て、又は試験的に開墾しておいた所もあり、もとより荒廃の瘠土にして地味もよくないが、いろいろ培養等世話をいたし、かなりの田園にしたいと両三年来努めて来たため、相応の耕地になる見込もたち、やがて検地を受けたいと願っていたところである。これらの土地は高以外の土地にして、南部氏領分の禄高に含まれず、南部氏の損益にかゝわりないところであるから、従来世話をして来た家来共に土着帰農させたいと願い出たのである。*9これに対する回答資料が見当らないので如何に処置されたか明らかではないが、事情は更にさし迫って、南部藩へ引渡す以前、城及び家中の屋敷は三月二十日までに、仙台藩の郡方（郡奉行）へ引渡すよう次の如く申渡された。

□月十五日

片倉小十郎殿

南部彦太郎様江下賜候御領地御引渡相成候間御自分儀早速罷下白石城并家中屋敷家作共来る廿日迄壱宇御郡方江可被引渡候尤委細之儀者出張之御郡奉行承合候様可有之候以上*10

そのため、旧家中問題の解決を将来に残したまゝ、引渡しの準備が進められることになり、三月十七日には、郡奉行への引渡し以後、更に南部藩へ引渡すまでの城の警備について、世情動揺の折柄変革に備えるためと、城地が郡方において取り扱うべき性質のものでないことによって、仙台藩の武頭

を派遣することと、片倉氏向役の中から取締人を出すよう指示した旨藩へ報告があり、*11これによって、南部藩へ引渡すまでの方針が決定された。

残る問題は南部藩へ引渡す際、昨年官軍の監察衆の行った封印の取扱であり、これを藩において始末するか、または片倉氏の重臣から南部氏の重臣に引渡すかについて、郡奉行より問合せがあり、同十九日、片倉小十郎から（藩の重臣の立場から）封印のまゝ引渡すよう指示が与えられた。*12かくて明治元年十月九日に官軍によって封印された城は、二年三月二十日まで片倉氏の重臣によって警備されたが、この日をもって、郡奉行の手に引渡されたようである。

既にその前、郡奉行から南部藩への引渡期日も三月二十五日と定められていたようであるが、いよいよこれを引渡す段になると、再び問題がもち上ってきた。仙台藩からは佐藤直衛等が出向いて、南部藩の城受取り役人と折衝を行ったが、南部藩としては封印のまゝでは受取りかねると主張したので、三月二十四日東京へ飛脚をたて、伺いの上決定するようとりきめられた。*13当時東京へ伺いを立てれば、往復に二週間を要することになり、事実上引渡しはそれまで遷延しなければならなかった。然しその間にも両者の交渉はしばしば行われたらしく、特に仙台藩としては、出来るだけ引渡しを早くすませたい考えを持ち、領地の引渡しは城が本分であるから、東京からの指令に待つとしても、角田その他郡村の引渡しは、枝葉のことであるという理由をもって説得した結果、ようやく了解を得、近日中内見分の名目で手続を済ませる段取りとなり、四月三日、この旨を含んだ使者が白石から角田へ派遣されることになった。更に仙台藩としては、白石城引渡しの直後、報告の使者を上京させることについて、南部藩では白石から使者を発足させるが、こちらは仙台から出発するため、当然東京着が遅れる筈であり、行政官からいろいろ不審をかけられている折柄、何等か適宜の手段を講ぜられたいと、四月四日、白石出先の入生田三右エ門から藩へ具申されて来た。*14折りかえし四月六日に藩からの指示があり、明七日東京勤番のため上京する六人のうち、一、二人を選んで途中白石に留めおき、引渡し完了次第、報告書を持たせて上京させるようとの手配を命じて来た。*15官軍に抗した仙台藩の立場上、こうしたことにも細心の注意が払われた事情をよく見ることが出来る。

四月九日になると、去る四日、軍務官御用係頭取佐藤嘉七郎と川村幸七郎の両名が、白石城の封印を切るために東京を出発したという報告があり、道中身分の取扱は知県事同格とし、場合によれば角田へも廻るかも知れぬと申し添えてあった。*16両名は十一日に白石到着、十二日朝五ツ半時（午前九時）登城、南部藩宿老中野舎人、仙台藩宿老後藤和泉、若老入生田三右エ門その他郡奉行等参列の上滞りなく引渡され、*17これをもって南方五郡の南部藩への引渡しはすべて終ることになった。

かくてこれ以後南部藩政が開始されるが、住民の間には新しい政治になじめない者もあり、七月二十四日、新支配について疑惑の心を懐き、旧主を眷顧する者もあるが、新旧隔なく心を合せ、藩事に精励するよう布達された。*18

このようなことは既に政府においても予期されたことであり、五月には巡察使を派遣し、七月には、最も動揺のはげしい東北地方と越後国に按察使がおかれることになった。

按察府は奥羽及び越後の地方における各藩県の政績を監察するために設置された地方官で、設置の趣旨は八月八日付右大臣の達に明示されている。

民政は治国の大体至重の事とす、御一新以来専ら億兆其所を得て生業勉励候様との御趣意之処三陸磐城両羽等之地に至りては、去年兵事打続、平定の今日に当り萬民猶未だ安堵せず御仁恤の御趣意貫徹に至らず、実に大政の隆替に関係候間、今般按察として被遣候に付ては、藩県の政績を熟察し、地方官と戮力協心、専ら御趣意を奉体し、政教治化其道を盡し、上下之情を貫通せしむ可く候事*19

初め倉卒の間、その職務内容までを規定することはなかったが、十一月左の如く定められた。

按察使

一、藩県ノ情状ヲ審按シ民政ノ得失ヲ督察シ且時宜ニヨリ官吏の非違ヲ糺シ其状可及奏聞事

一、非常警戒ノ事アラハ管内藩兵ヲ以テ臨機ノ処置シ迅速兵部省江可報知事

（明治二年）

十一月　　大政官*20

このように大きな権限を持たされた按察使は、管下の各藩県に対し、左の如く触れ出している。

一、毎歳春時藩県参事□人会府議事尤国家ノ為建言ノ者ハ附属不苦候事但参議已上一人下向臨席モ可有之候事

一、諸争論藩県ニ於テ処置難相成事件或ハ凶荒困迫等非常ノ願届都テ府ノ検査ヲ受官省へ可申出事

一、藩々毎年正租税可届出事

一、県々毎年正租税調へ民部省へ差出候写当府へモ可差出候

一、各藩支配飛地陸羽七国中ニ有之者盡ク府ノ按察ヲ受ヘキ事

（明治二年）

十二月　　按察府

磐城
国
岩代

若松除之外

藩県

各藩飛地陣屋詰共*21

即ち各藩県に対しては、監督官的権限をもって臨んだのが按察使であったのである。

按察府は越後国水原と白石の両所に設置されるが、白石については

奥羽三陸磐城按察府岩代国白石に被置候旨被仰出候事

太政官*22

と発令があり、羽前、羽後、陸前、陸中、陸奥、磐城七国が管轄範囲とされた。これによって、管下各藩県に対する通達が行われたが、南部藩へは左の如く見えている。

今般右之通被仰出坊城少將按察使渡辺民部権大丞按察判官宣下有之候間此段為御心得相達候也

（明治二年）

巳八月　　按察府

盛岡御中＊23

『奥羽盛衰見聞誌』によれば、按察府初期の官員組織は次のようになっていた。

長　官　坊城左少弁（俊章）殿　（公卿）
判　官　渡辺　清殿　肥前大村
　　中村　潜叟殿　豊後岡
大主典　橋本　正人殿　江州彦根
　　岩崎小次郎殿　肥前大村
権大主典　大谷佐久馬殿　土州高知
　　杉山健次郎殿　尾州
小主典　瀧川　渉　岩城平
権小主典　富田　省三　仙台
　　坂元　総助　守山
史　生　村田　栄作　羽州松山
　　水谷長左エ門　中村
醫　師　細谷　米山　羽州
　　和田孫平治　三春
　　矢野政右エ門　羽州天童
使　掌　桜田精一郎　羽州久保田
　　遠藤　武夫　守山
給　使　遠藤　次郎　守山
使　部　富田久三郎　旧幕
　　宗像　巌　三春
　　板倉精三郎　常州土浦
出納方　近藤忠五郎　旧幕
　　武藤　林一　旧幕
　　下　大八郎　旧幕
　　小柳　雄太　旧幕

役所は城内に置かれ、そのため城には南部藩庁と按察府とが同居することになるのである。

按察使の入城した八月中は、はげしい人の出入りが見られている。約百人に近い南部藩士が白石に移住し、旧白石家中の屋敷に入り込み、八月十三日には、藩主南部利恭（彦太郎）も入城した。按察使着任の直前であり、今まで一度も藩庁に出なかった藩主も、按察使の赴任を前にして、急遽入城の必要を感じたのであろう。しかもこれより以前、七月には早くも南部藩の盛岡復帰について、次のように発令されているのである。

盛岡江復帰金七拾萬両献納被仰出候　　南部　利恭

（明治二年）
巳七月　　太政官[*24]

即ち維新草創期における、行政の混乱振りを示す一例としてもあげられる史料であるが、『宮城県国史』はその発令日付を

己巳七月廿二日白石藩知事南部利恭旧領地盛岡へ
復帰スヘキ命ヲ拝シテ復藩ス格別の詮議ニカカル
金七十万両ヲ献納ス
ルノ願意ヲ許
可セラル

と記しているので、入城の時は既にこの通達をうけた後とみられるから、白石引揚げのことを考慮に入れていることが明らかである。

なお盛岡復帰の裏面には、特別詮議による七十万両の献納の事実と、さらにこの年の二月、盛岡の領民が南部氏の白石移封を憂い、党を結んで強訴反対した事件[*25]の起こっていることとが、見逃せない事実としてあげられる。前者は財政基礎をもたない弱体の維新政府の措置として行われ、後者は因襲と不安な世情を反映して発生したもので、ともに盛岡復帰を実現する力となったものである。

藩政を廃止し、南部氏の盛岡復藩が決定された後をうけて、八月十八日には、刈田以下五郡にあらためて白石県を置くことが定められ、[*26]南部利恭は九月二十日に盛岡へ去り、次いで二十二日には白石県権知事武井逸之助（守正）以下の者が東京を出発し、晦日に白石に着任したことが民部省への報告に見えている。

着県御届

先般御届申上置候通権知事事其外一同去月廿二日東京出立兼而日割之通同月晦日当地着仕候依之御届申上候以上

（明治二年）
巳十月　　白石県

民部省

御役所[*27]

不幸にもこの年は稀に見る凶作の年であった。その状況を、十二月になって角田県から民部省に提出された報告によって見ると、

（上略）当夏已来雨気多別而土用前生立肝要之折柄照込薄至而生立不宜上当七月十三日暴風雨ニテ大痛相成早稲方花最中等ノ分ハ悉粃ニ相成中稲晩稲等の儀モ一旦暴風雨ニ掛り其上不時ノ冷気ニテ不熟別テ阿武隈川附村々之儀ハ数日水中ニ相成皆無同様ノ村方モ数ヶ村有之天保度の飢饉ニ指続候凶作ニテ（下略）

とあり、[*28]同月早くも刈田郡内では、九百四十三人に対し、三十日間一人につき、救済の為米一日一合の割で与えなければならなくなった事情を報告している。[*29]（伊具郡は二、六二九人、柴田郡五五〇人、亘理郡三一二人、宇多郡八八九人）前年戊辰戦争による疲幣の後をうけて、農村一般は深酷な打撃を受けたことが推察される。

八月から九月にかけては、凶作はもはや決定的となって現れた時である。この時期に相当する八月十八日の白石県設置の発令から、九月晦日の権知事着任までの四十二日間、地方行政は一種の空白状態におかれたと推測される。即ち南部藩の引揚げと白石県庁開設の準備に忙殺される余り、民政上細心の注意を要する年貢米の管理取扱に欠けるところがなかったか等、種々の悪條件の想定される時期にあたっていた。特に南部藩主が白石を去った九月二十日以後は、混乱、動揺の最大の危機となる可能性を持つのである。――藩主在城中は身辺護衛の為の警戒が厳重を極めると考えられる――従来かつて経験しなかった一揆が、初めて白石地方で見られたのもこの時期と考えられる。

刈田郡一揆の経緯、規模の詳細について、現在これを明らかにする史料がなく、筆者の管見にふれたものは、わずかに左の二点に過ぎない。

刈田郡村々百姓共集会(ニ脱カ)および候一件ニ付大肝煎阿部養輔親類預ケ御申付置之処此節差免御申渡被成度段昨日委細御談之趣致承知書類一覧いたし候処吟味相決候訳ニモ無之尤同人罪之有無ニ不拘一時鎮静之為親類預ケ御申付被成候儀ニ付右吟味未決之間差免候而ハ村々之もの共又々動揺難計候間吟味相決候迄先ツ是迄之通御差置可然与愚考致候尚御勘考可然御取計可被成此段御意候也

（明治二年）

九月廿八日　　竹内権大属

山口　大属

（南部藩白石取締所掛）＊30

福島圓司様

金千匹宛被下

鷹巣村百姓

忠　助

常　蔵

富　十

林右エ門

右は去ル九月中連村螽(ママ)（蜂）起之節右ニ組ザルヲ以為御褒美被下也

（明治二年）

十二月十九日＊31

右の二史料のうち山口大属等二名は、権知事着任以前、連絡及び開庁準備の為に来県していた白石県の官員であり、福島円司は盛岡藩主引揚以後、居残って連絡と後始末にあたった白石取締所掛である。

後者の史料によれば、蜂起の時期は九月中とあるが、二十日以前は盛岡藩主在城中の為、厳重な警戒がしかれていたと想像されるので、藩主離白の直後数日の間が蜂起の時期と見られる。従って前者の史料は蜂起数日後のものであり、その為に再度不安動揺なきよう、大肝入阿部養輔の身柄を罪の有無未決の間、親類預けのまゝにしておかれたいと要請した掛合書である。文中に「連村蜂起」とあれ

ば、規模も郡内各村を連ねる集会と想定され、不参加はごく稀であったので、鷹巣村の僅か四名が褒賞を与えられたと考えられる。同時に、この文面によれば、行政上如何なるものか不明ではあるが、大肝入のとった措置宜しきを得なかったことに起因して、蜂起の事態に至ったものではないかと考えられる。

この想定は去る昭和二十五年、白石市大平森合の故老日下由之助翁（慶應元年生、二十五年当時八十六才）から、筆者が直接聞いた話を綜合して考えられることでもあるので、参考の為に翁の談話を摘記しておく。

肝入格や倉係の役人達がお蔵の米を自由に運んだので、片倉家の供え物を（？）勝手に処分してはならぬとして、七ケ宿その他の村民が出て来て役人達を追い払った。百姓達は白石の大橋に集合し、白石の全村はお握りを出して御馳走したものである。ゴーソー（翁はこう発音していた。強訴の意味）に出てきた者は、股引（モモヒキ）、脚絆にわらじばきの旅仕度をし、百姓かせぎでない人達は、タカジョーだった（鷹匠、足袋をはいていたことを云う）

翁は幼少の頃、お城の三階（大櫓）に登った経験があり、ありし日の白石城をその目で見た人であるが明治二年は五才であるから「ゴーソー」の話は御自分の記憶ではなく、大人達からの聞き傳えであったようである。その為、この事件を戊辰戦争の前の事と云ったり、片倉家のお供えものと云った若干の思い違いをしている向も見られるが、ゴーソーの起因、集合や炊出しの事実、一揆勢の服装など貴重な伝えとして聞くべきものがある。（再度採訪を期していたが、その機会を得ず、未だに心残りである。）

事件は武井権知事着任以前のことであり、初め南部藩の手によって取扱われたことは、前記山口大属の掛合書によってもうかがわれるが、後白石県に引継がれたものであろう。

白石県はその初めから、困難な問題の処理に当らねばならなかったのである。

白石県庁開設の準備は、権知事以下官員の舎宅を決定することから始められた。九月二十七日、山口、竹内の両名から福島円司宛に、片倉氏旧家中の屋敷を早急に引払うよう掛合があり、*32二十八日には、明後日権知事到着の急便が入ったので、明夕までに舎宅予定の両斎藤氏の家を明けるようにと催促しているが、（両斎藤氏とは斎藤新蔵人と矢内弥一郎の家であること廿九日付山口光之助書状に見える）この両家は按察府において入用の申入があって断わられた。同日付更に、両家の件は県においてかねてより入用の手筈をきめ、昨日も申入れて置いた筈であるから、是非当県に用立てるよう取計らわれたいと重ねて掛合に及んだ。*33更に二十九日には、山口大属の書状をもって、按察府の役人と見られる西健之助に対し、時日は遷延を許されず、又両家の件は按察府において早急に必要という訳でもなさそうである故、決定はあと廻しとして、将来両家を按察府に渡すことは出来ないが、一両日は代りの家を都合するから、そのうちいずれ熟談したいと申入れ、*34白石県の予定した権知事の舎宅は、按察府の介入によって変更を余儀なくされたのである。

それでも十月一日には、左のように新しい県の開設が触れ出される運びとなった。

今度白石表ニ於テ新県御取建ニ相成別帳郡村則当県支配所ニシテ権知事武井守正居住相成候間此段相達候右之趣小前末々迄不洩様可相触者也

（明治二年）
十月朔日　　白石県役所
各五郡役人共

今度新ニ当県ヲ被為立即知県事武井守正初諸官員一同着県相成候間此旨可相心得候也

（明治二年）
巳十月　　白石県役所
五郡社寺一同へ[*35]

十月に入ると、南部藩との間に郷村引渡しの手続が進められ、①白石、大河原、角田、亘理の四ケ所は、二、三人定詰の民政取締方の役人と、白石取締所の者立合の上で引渡しを行うこと、②越河仮屋、金津代官所及びの境目番所と村々の備穀は書類で引渡すこと、③白石及び大河原の仮屋は民政取締方と交渉の上、④白石城については

一白石城之儀ハ防(坊)城殿御入城之節御用ニ入候間城地絵図面而已ニテ御引渡申度事
（朱書）（附紙ノコトヲ云フ　註亘理）
同請取之節見分可致候間立合可有之事

と見え、その他二、三の事項を含めた南部藩の申入があり、[*36]十九日に引渡しの完了を見た。そのうち特に城の引渡には、絵図面だけで引渡すとする南部藩の原案に対し、朱書の分は受取りの時実地見分を行うという白石県の追加条件であった。

然るにこの件について、早速按察府から申入れがあり、

当城之儀御県ニテ御請取可相成候様盛岡藩ヨリ申出候得共城之儀ハ太政官江も申上済八月十八日ニ当府江受取役所ヲ開候儀ニ付左様御承知可被下候右為念申入候也

（明治二年）
十月　　按察府
白石県御中[*37]

即ち当城は太政官の了解のもとに受取り、府の役所に当てゝいるので承知されたいと云い、言外に、県のあずかり知らぬこと故、見分に及ばずの意味を含んだ文面である。折返し県からは、十九日付をもって、本日郷村引渡完了につき、城の見分も当然行うことになると南部藩へ申し通じておいた訳であるので、御承引ありたいと左の如く返答に及んだ。

致拝見候然ハ其御城当県に受取ニ可相成旨盛岡藩より申出候趣致承知候右ハ今日同藩ヨリ郷村引渡相済候ニ付当城之儀モ一應可及見分旨申達置候事ニ候此條御承引可被下及御答候也

（明治二年）
十月十九日　　白石県
按察府
御中[*38]

あくまでも筋を通そうとする県の申入れには、按察府も、承認の外なく、間もなく城の見分が行われたもののようである。

暫らくして二十九日、南部藩から城中の畳、建具等の員数点検の申出があるので、右藩の役人出向

の際は然るべく御指図下されたいと、あらためて白石県から按察府へ連絡書が提出された。*39既に同藩からも同様申入れがあり、これに対しては承知の旨回答したらしいが、白石県に対しては、先刻の城中点検の申入れには承知の旨答えたが、過日白石県と南部藩との間において、既に点検済となっているのに、いまになって、右藩から建具等の点検に出向いて来るのは、甚だ不都合に思うと拒否の態度を示して来た。*40県からは折返し

過刻盛岡藩ヨリ申出候間城中畳建具等惣員数点検之儀御掛合申候処御承知之旨御答候然ル所御不都合之由被仰越候得共既ニ盛岡藩江達替之儀モ不都合ニ有之其上過日盛岡藩立合ニ而見分旨致候へ共其節畳建具等之調書も差出し不申ニ付猶改而申付候事ニ付彼是御手数ニハ可有之候得共右調之儀宜敷御指図被下度候依之及御答候也

（明治二年）

十月廿九日　　白石県

按察府

御中*41

と返答し、一旦右藩の点検申出を承知しながら、県からの申出については不都合と回答があり、右藩への返答と違う返答となるのも不都合なりと反駁し、更に過日南部藩立合の上で見分した時は、畳、建具等の調書も提出されなかったので、あらためて調査提出するよう申付けたので、よろしく指図下されたいと回答に及んだのである。この件もいずれは認めざるを得なかったものであろう。

以上縷々両者折衝の経過を述べた理由は、城の行き方を追求する傍ら、このような県の申入れに対して、按察府が常に、直ちに快諾しようとはしなかった態度のあることを指摘し、それが昜じては、いたずらに県政事務を澁滞させる原因となることも併せ見たい為で、次の例は更に甚だしい例として挙げたものである。

十一月になると、何か特別の事件によって、按察府から揚屋の借用方を申込んで来たらしく、二十四日付白石県から按察府宛の回答文書が見えている。これによると、現在県において入牢申しつけておるものは、いずれも軽罪の者ばかりであるから、番人も特別の者をつけていないので、不行届のことのないように、按察府から番人を出してもらいたいと述べている。翌日按察府から揚屋の件について話があるので、係の者を出頭させられたいと申入れて来た。折返し県からは、現在甚だ多忙故、揚屋の件は書面をもってお掛合下さるまいかと返答に及んだ。その後も按察府から、揚屋と本牢及び番人の配置等うるさく問合せ、且つ返答を促し、その都度県は応答の文書を出しているが、結局揚屋借用の件は詮議替の結果、不用になった旨一片の挨拶をもって終わってしまったのである。*42

開庁間もない多忙な県としては、煩わしさに堪えなかったものと同情される資料である。

按察府は職務上当然のことながら、行政面についても、厳しい鞭撻を県に対して加えている。

片倉旧陪隷之内帰農之面付御届可申候ニ付即日ヨリ御引受苗字帯刀廃シ御命令受候様被仰渡度且是迄帰農列之者共計小十郎父子ニ隋従侍坐罷在候趣之処当今ニ至候テハ一民モ王臣ニ非サルハ無候得共華族タリトモ家令家扶家従人員朝廷へ御届申上召仕候儀ニ候ヘハ片倉家帰農之者共ヲ侍坐為致候筋毛頭無之候間其心得方も御令容相成候將又帰農之者共開拓之儀ヲ妨ケ小十郎父子ヲ蠱惑

致サセ候事情就テハ家中多端ニ相成不埒之所分不少候間確然之御処置有之度存候此段申入候也

（明治二年）
十月　　按察府
白石県
御中*43

ここに示された事情は、白石県管轄五郡内は云うまでもなく、按察府管轄の七国内にも、同様の事例が多く存在したと想像される事実であるにかゝわらず、ひとりお膝もとの白石関係のみを指摘しているのは、いかにも近視的な見方であり、官員舎宅の件から、城見分、揚屋借用の件をも通じて、何かしら相互微妙な関係にあることを感じさせられるのである。

憶測を許されるならば、県においては右のような煩わしさから、逃れようとする考えを持つようになったのではないかと想像されることである。僅か三ヶ月にして県庁移転が行われた事情をこの辺に求められはしないであろうか。

十一月中旬頃、県は左の理由をもって、県庁を角田へ移転することを請願するに至った。

当県治所白石表之儀狹少之上租税其外産物運輸之便乏ク一管中民政之便薄ク従来之弊習ヲ脱化シ更ニ御新政之威徳ニ風靡致サセ候ニ者当白石ヨリ五里東角田表ニ如ク所無之同所別紙図面之通支配所之中央に当り収納ヲ初布令萬端速ニ四陲ニ渉り其上大隅川之水利モ有之自ラ運輸之道モ至極ニ有之旁以当県治所角田表江相移シ県名角田県ト御改称被下候様左候得ハ上下互ニ其便ヲ得眼前県民の巨益モ相立往々豊盛之基礎モ確立可致ト奉存候間速ニ御聞済相成候様仕度奉存候此段奉願上候以上

（明治二年）　白石県権知事　　武井守正
十一月
民部省
御中

追テ同所之義者石川源太旧邸モ有之右邸ヲ以県舎ニ相用候得者経費モ無之旁御聞済相成候者至急同所江移徙仕当白石ハ出張所ト致置官員相応差置可申存候事*44

右の請願書から移転の理由を要約すると、白石が狹少にして交通不便のため、治所に適しないことに対し、角田は管内の中央に位置すること、交通に便利なことがあげられている。地理的な位置から見て、白石が県庁所在地として不適なことは客観的にも当然であり、「従来之弊習ヲ脱化シ」ようとする決意も諒とするが、維新草創期の人心もまだおさまらないこの時期において、僅か三ヶ月にして県庁を移すことは他にも例がなく、表面に現れない別の理由が考えられそうである。「追って書」に見える石川氏邸を県庁舎に使用し得る利点などが、真意の一部ではなかったかとさえ考えられ、前記按察府との関係が、移転を決意させた要因ではないかと推測されるのである。

このようにして、十一月二十七日、太政官布告によって移転が決定され、白石には出張所設置の旨が触れ出されることになり、十二月九日、県庁は角田に移転されたのである。

白石県

今般其県庁角田表江相移シ改テ角田県ト可称事

（明治二年）　　太政官

十一月

今度別紙之通太政官より被仰出候付テハ明九日角田表江御役所御引移相成候条此旨郡村末々迄不洩様其方共ヨリ急々相達可申事

但本文之通ニハ候得共更ニ白石表江出張所被立置刈田郡並柴田郡北方之分諸願伺届共右出張所江差出可申事

（明治二年）　　白石県

十二月七日

各通五郡長

同助役＊45

四、北地跋渉計画の進展と白石城の解体過程

その頃、かねて計画を進めていた片倉氏旧家中の北海道跋渉は、その機ようやく熟して来た時であるが、実行にはなお幾多の困難を克服して行かねばならぬ段階にあった。『刈田郡誌』及び『奥羽盛衰見聞誌』に収める史料から、跋渉計画を略年表にまとめると次の通りとなる。

年	月	日	
二・	四		横山一郎、斎藤良知の両名上京し北海道跋渉の斡旋を計画。
二・	七		右両名帰白、旧主に建議し、全家中を傑山寺に招集して会議を開く。
二・	八		按察府へ跋渉の歎願書を提出。
二・	八・	二〇	按察府斎藤良知をして民部省へ陳情せしむ。
二・	九・	一二	弁官片倉邦憲を東京に召喚。
二・	九・	一三	太政官片倉邦憲に対し、北海道開拓御用と幌別郡支配を命ず。
二・	一〇・		按察府片倉景範に北海道出張を命ず。
二・	一〇・	一八	片倉景範仙台出発、函館、幌別を経て十二月二十六日帰仙。
二・	一〇・		旧家中一四〇二戸の内帰農者五八戸を除き全員旧版籍に復し移住に決定した旨白石県に報告。
三・	一		移住までの生活を維持する為旧奉公人前の田畑の耕作を角田県に歎願。
三・	一・		北海道開拓志願者調六五一戸、三六〇〇人程とあり。
三・	五・		片倉小十郎室蘭郡の内増支配を命ぜらる。
三			移住までの間旧奉公人前の耕作を再願し、十五才以下五十才以上の者に対し、耕地を割渡さる。
三・	六・	二五	遠藤震三郎等十九名寒風沢出帆同二十九日幌別着
三・	六		明春百人余移住、更に三五〇余戸移住の準備あるも困窮につき手当を必要とする旨陳情。

三・　九　　片倉小十郎開拓地の状況を按察府に報告。
四・　三　　太政官白石在留の旧家中六百人に対し北海道移住開拓使貫属を命ず。
四・　三・　一六　斎藤基等二八戸白石発跋渉。
四・　三・　二八　太政官白石人数六百人の移住を命ず。
四・　四　　六百人分移住費約一千両と見積る。
四・　九・　一二　六百人寒風沢出帆。

右の略年表によれば、北海道への大挙跋渉までに、二年六ヶ月の準備期間を要したことが知られ、この間、絶えず生活不安に脅かされ続けたろうことが想像される。その上、六百人分の旅費だけで約一千両の支出を見込まねばならず、跋渉の前途は頗る多難なものがあった。果して、明治三十一年の公債證書下附願の文面によれば、二年九月から五年五月までの間、片倉邦憲の支出した分だけで、開拓費に一万六千八百九十三円余と、米六百四十九石余を費したことが記録され、*46その外跋渉者全員の出費を加算すれば、莫大な金額に達すると推定される。

このように過大の出費を要した理由の一つは、三年九月按察使への報告書に

（上略）無禄之窮民目前之飢餓ヲ凌兼殊ニ彼地開拓成熟之間ハ食料器物総而此方ヨリ相送不申候テハ即今飢寒ヲ免レ難ク去リ迚空敷此地ニ留置候テハ益困弊ヲ極メ候仕合千萬歎敷次第奉存候（下略）

と記された如く、*47食料から諸道具まで一切を白石から送る必要のあったことであり、それだけ、当事者の払った苦心の程が察せられるのである。

従って、この資金を調達する過程においては、この人達が祖先伝来二百六十年間、彼等の精神的支柱ともなった白石城を、資金源の一つに見込むことさえ余儀なくさせられるに至るのである。かくて白石城払下の機会は次のような情況下に訪れて来た。

明治二年四月から同三年の初めにかけて、跋渉への準備が、外部的には政府に対する陳情と、開拓地支配権の取得、内部的には旧家中の意見の調整と、跋渉志願者の調査等を主として行われたことは、前掲略年表に見られる通りであるが、これにもとづいて、三年には跋渉の第一陣が送られるばかりになっており、資金面の解決だけが残された問題となって、実現を阻む最大難関となっていたのである。

折も折、この年の五月、北海道へ出帆する仙台藩お雇いの蒸汽船があるという情報が入った。これに便乗出来れば、経費も少なくて済むことがわかったので、早速金策にとりかかったが、余りにも急な話のため、資金のまとまりがつかないまま四、五日を経過するうち、遂に出帆の期限におくれ、みすみす好期を逸してしまったのである。

この上は借金をしても実行に移そうと決意し、按察府に願い出て、三千両の拝借を申し入れたが、同府の取り上げるところとならず、一同途方にくれるばかりであった。

恐らく、財政基礎の整わないその頃においては、正式な官の融資は不可能な事情にあったとも推察されるのであるが、旧家中のこのような窮状は、いたく按察府の官員達を動かしたもののようで、多分同府官員の示唆によるものであろうか、やがて、民間の融資に頼ろうとし、当時按察府の御用達を勤めていた山崎屋清右エ門（後の米竹氏）にあらためて、借用方を申し込んだのである。

山崎屋としては、既に再三御用金を命じられ、疲弊の折柄このような大金には応じられないと断ったが、何等かの手段により、是非融資の便をはからうよう按察府の要請があり、この上は按察府からの預り金を一時融資する外なく、もし将来返済不能におちいった場合は、按察府において始末をするという同府官員の言質をとり、石田租税権少祐、奥田按察権少主典両名の裏書證文をもって、ようやく三千両の借用が決定されたのである。返済には幌別郡産物の秋味昆布等の利益金をあて、七ヶ年賦で完済することが條件とされた。

公金流用という異例の非常手段にうったえても、解決を急がねばならなかったところに、跋渉問題の重要さと、経済面における逼迫の状況とが見られるのである。

間もなく五十人余が無事北海道に送られたが、同年の秋、予期しない災難に見舞われた。跋渉者達は契約を履行するため、羽後国(秋田県)能代の船を雇い、秋味昆布を積込んで寒風沢港（松島湾の寒風沢）へ回漕の途中、釜石沖において大風に遭い、積込の荷物を全部失ってしまい、返済は延引の止むなきに至ったのである。

跋渉者達の身に及んだ思わざる災難に対し、これを救済し、開拓の進展を促す方法として、やがて按察府の廃止されるあと、空城となる白石城をこれらの者に払下げ、その売却金をもって、開拓の入費と借金の返済にあてさせる措置がとられるに至るのである。

右概略の説明は、明治六年に至り、返済の道がつかなくなった結果、融資した旧按察府の御用金を政府に返還しなければならなくなった、米竹清右エ門（その頃、米竹氏と復姓）の返還金打切り訴願の記録によったものである。この記録は相当長文にわたるが、特に城解体の最初の契機をなすものとして、重要な史料であるので左に摘記することゝした。

證　文　之　事

一金三千両也

右之通致借用候義実正明白御座候返済之儀者北海道縗(ママ)別郡産物秋味昆布等之利を以当午ノ年(明治三年)より子年(明治九年)迄向七ヶ年賦済切致返済候右入用之次第者今般前文縗(ママ)別郡江人数五拾人餘移住為致候処来ル廿一日出起ニ付米噌等始諸品入料至急差迫不恐憚御府厳威拝借金之儀奉嘆願候処願書者被相下候得共苦困之状態深御聞取被成下御官員様方御評議被為垂御哀憐右金貴殿御手元より借用之相成候義御旧情御汲分被下別而御懇篤之至同志一編銘肝辱仕合御座候仍而為後日之證文如件

明治三年己巳(庚午ノ誤写)五月　　片倉小十郎旧家来　本沢浩齋

同　齋藤　基

同　小島　久

御用達　山崎屋清右衛門殿

表書之通相違無之候也

石田租税権少祐　印

奥田按察権少主典印＊48

御管内白石街山崎屋清右衛門今般出願之云々御糺問之趣奉謹承候然処庚午年旧主片倉小十郎旧支配所北海道幌別郡江旧家来共移住之手当罷在候得共積年困迫之末金配方甚差支候折柄同年五月旧

仙台藩ニ於テ雇入之蒸気船便有之趣承り此船江便乞候得者多少之入費も相減候故金策ニ取懸り候処俄之事ニ而自力ニ及兼四五日ヲ過候得者出帆期限ニ後レ旁以不得止当時白石江被建置候元按察府江三千両拝借奉願候処ニ御聞届ニ不相成如何共斗（計）方尽果歎息罷在然処御同府御用達白石住居山崎屋清右衛門江借用致度趣相頼申候処大金之義迚も御用立兼候段断ヲ得候処猶又情実申述御同府御官員御口添之上證書江御両官員御裏印被成下年譜（賦）借用相済五拾人餘移住仕候即約定之通午之年返弁之金高ヲ見込羽後国能代船相雇秋味昆布積込陸前国寒風沢港江向廻漕仕候処豈料ランや陸中国釜石沖ニ而難風ニ逢へ積込之荷物悉皆捨り物ニ相成自然返金延引之処同午ノ年十月按察府御廃シニ相成白石城建家共風除ケ柎木（ママ）等下賜右取毀チ致売却開墾入費ニ可差当御達ヲ蒙り難有仕合速ニ売却仕山崎屋清右衛門江返金仕度手配仕居候内無程被召上翌春二月建家而已下賜候義ニ而大ニ出金ノ目的ヲ失ヒ他ニ可施術策無束手罷在候得共不及是非此上は開墾一途ニ尽力諸物産等之利潤金ヲ以返済可仕見込之処去々未八月中既ニ幌別室蘭支配被相免地所奉上仕候上者右返金之目途壱切不相立日夜痛心罷在候得共（中略）固（困カ）苦之情態深ク御察被成下寛大之御詮議被仰付度依之御糺ニ付奉申上候通相違無御座候以上

片倉小十郎家来北海道移住

本沢浩齋

同　同

齋藤基

同　当時白石寄留

小島久

宮城県

御廳*49

乍恐奉歎願候書付

一庚午年五月旧領主片倉小十郎様御家来多人数北海道縦（ママ）別郡江御移住之砌至急寒風沢港より御乗船ニ付彼地御持越之諸品御買入金御指支之趣ヲ以金三千両御借用被成度段被申聞且亦御一統奮発御移住被成候儀ニ付貯金御座候ハ、何レニ茂用立申度御座候得共先年より再三之用金被申付甚疲弊之折柄手元手薄ニ付断然相断候処猶亦元按察府石田権少佑（ママ）様奥田権少主典様よりも御談事御座候処難渋之折柄殊ニ大金之儀迚茂貸遣可申様無御座趣申上候処亦々御両人様より被仰付候ニ者旧藩至急乗船不相成候而者多人数困苦之趣談にも有之候間如何様ニか指繰貸遣申度由御談事ニ付右ニ而者御府御預ケ金之内貸遣候外無之趣申上候処如何様ニか可取扱旨御内命ニ付右御両人様御調印之證書別紙写請取萬一指滞候節者於御府御取扱御始末被下候御約定を以前書之金員相渡候儀ニ御座候然ル処最早五ヶ年ニ至り聊返金無之旧御府方エ返納差滞居候ニ付癸酉（明治六年）三月中片倉小十郎様旧御家来衆より差出置候證書写相副早々返納相成候様御沙汰被成下度段当御県江出願仕候上猶其後共厳重之催促仕居候然処既ニ縦（ママ）別郡室蘭之両支配地被召上種々之目途相違致シ迚茂此末返納目的無御座候趣何様厳重掛合仕候共更ニ返納見詰相立不申如何様共於私共当惑之仕合御座候間何卒御憐恤之御評議ヲ以右金之義者御見捨金ニ被成下度奉歎願候以上

明治七年戌十月

元山崎屋清右衛門事

村扱　米竹清右衛門（印）
　　米竹和兵衛（印）＊50

その頃按察府の存在は、前記白石県との交渉に一例を見る通り、地方行政事務をいたずらに渋滞混乱させるものとして、三年九月二十八日、太政官はこれを廃止することに決定し、長官坊城俊章は山形県知事に転任し、十月二十一日白石を去ることになった。＊51

既に幾度か開拓地の窮状が報告され、更に又釜石沖における不慮の災害が報じられたが、特に後者の場合が、貸金の返済に影響する危険性と、ひいては公金流用の責任を追及される可能性をも含み、直接按察府官員達の身辺に及ぶ問題として、事態収拾への英断とも云うべき処置をとらしめる動機となったのではなかろうか。

かくてこれらの事情を勘案し、白石城売却の代金を下附するよう決定を見たのである。即ち、

片倉小十郎

膽振国覜（幌）別郡支配所痞土殊ニ開墾ニ付段々盡力之由ニ候得共失費不少極難渋之趣相聞旁以格別之御詮議有之白石城相毀売却之上代金其方へ被下候間右入費ニ相充候様可致事

但角田県へ申出可受指図事

庚午（明治三年）十月　　元按察府

と指令し、＊52角田県へも同時に左の如く通達されたのである。

別紙写之通片倉小十郎へ相達候間公平可及差図様此段申入候也

庚午（明治三年）十月十五日　　元按察府

角田県＊53

この指令、通達が、既に廃止と告示された元按察府の名において行われたことも妙であり、又按察府の独断で行われたとは考えられないが、白石城だけの取扱において、片倉氏旧家中の跋渉には、不公平と見られるまでに同情を寄せた向が多分に見られることも問題である。前者については、制度の確立しない時期の慣例によるものかも知れないが、後者については、果たして角田県において問題化し、民部省宛に、元按察府の不公平な処置と合せ、亘理の伊達氏邸、船岡の柴田氏邸の取扱について、伺書が提出されるに至った。

（上略）右小十郎陪隷等困迫之情状ハ先般来毎御達申上候通ニハ候得共若困迫ニヨリ北地跋渉費用トシテ旧居城被下候儀ニ候ハ、独小十郎ノミナラス同藩士族伊達藤五郎柴田倫之助等旧邸等モ夫々被下ニ相成候筈ニ可有之尤夫々跋渉之徒ヨリ旧居邸被下候儀歎願有之候スラ可遣筋ニ無之ニ付不聞届罷在候処旧按察府ヨリ右等之申合振不公平ニ相渉リ取扱方差支候事ニ御座候尤邸宅等トモ違ヘ苟城郭ヲ以テ済窮相成候儀無之候得共未タ御省ヨリハ当県ヘ何等之御達モ無之旁取毀方当惑仕候若遣可然之御評決ニ候ハ、其段当県ヘ御達被下度別紙相添此段至急御伺申上候以上

午（明治三年）十月廿八日　　角田県印

民部省

御役所*54

即ち北地跋渉費としてならば、ひとり片倉氏のみならず、亘理の伊達氏、船岡の柴田氏にも下附すべき筈である。元来この種の歎願があっても、下附すべきではないので従来は許さなかったが、旧按察府のやり方は不公平で、取扱に支障をきたすのみならず、いやしくも城郭を救済の手段に使うことはあり得ないことであると、意見を具して伺いをたてたのである。折返し民部省から付紙をもって、旧按察府の指図によって取計らうこと。伊達藤五郎外一人の屋敷はそのまま置くのも無益であるから、願い出があれば伺いの上取計らえと回訓され、*55跋渉費として下附されることの決定が確認された。

既にこの回答がもたらされる以前、按察府の官員引揚とともに、白石城は開拓役所に引渡され（以前片倉氏が北海道開拓御用を命ぜられたので、旧家中跋渉関係の事務所をかく呼んだものであろう）同役所において、十月二十五日から閏十月を経て十一月十一日までの四十五日間、旧家中五人一組一昼夜交代の順番をもって、城の取締りを行うよう割当て*56、城は再び旧家中の手に戻ることになった。

その後城破却の準備が進められたと見られるが、閏十月、角田県から民部省宛の再伺いによると、

（上略）郭内立木之儀ハ相應之木品ニ有之大小取交数千本余生立管内有用之材木ニ有之代價凡千両程ニ相当り候事ニ御座候此度毀城ニ付テハ右立木不残同人へ差遣候筋ニ可有之哉元来城建物ノミ差遣候而ハ取毀之費用ニモ引足兼候事ニ付立木差遣方取計可申存候此段奉伺候以上

（明治三年）十月　角田県

民部省

御役所

と述べている。*57当時城内には数千本の樹木が鬱蒼と茂り、これを材木とすれば千両程になる。建物の取毀し費用が売却の代金よりも高くなりかねない状況では、樹木も拂下げて下附した方がよいと思うがどうかと言うのである。これに対する民部省の付札が見えないので、如何なる回答が寄せられたか不明であるが、恐らくは、その頃政府において、白石城を兵隊屯所とする議が持ち上がっていた頃であるから、回答はそのまま保留となっていたものかもしれない。

然し事情に通じない県としては更に準備を進める都合上、十二月五日、片倉氏重臣宛に売却の代価を取りきめるよう左の如く指令を出している。

仙台藩士族　片倉小十郎重臣共

白石城兼而旧按察府より達候通片倉小十郎へ被下候ニ付其方共へ相渡候間取毀可申尚売却之代價取極早々可申出事

（明治三年）十二月五日　角田県*58

これによって、片倉氏重臣と商人との間に、具体的な交渉が進められたろうことは、前記米竹清右エ門の訴願関係の記録に「速ニ売却仕山崎屋清右エ門江返金仕度手配仕居候内」とある文面に見る通り

であるが、間もなく、十二月二十日をもって、突然庶務局より白石城下附書類の返上を命じて来た。

仙台藩士族片倉小十郎旧重臣中

白石城片倉小十郎江被下之儀今般御詮議之筋有之候間追而御沙汰有之候迄過る相下ケ候書付返納可致事

庚午（明治三年）十二月廿日　　庶務局*59

理由も示されず、ただ返上だけを命じられた跋渉当事者の当惑と衝撃が、如何に大きかったかは想像に余りがある。恐らくその後、詮議筋に関する事情の穿鑿と、返上命令撤回の請願等種々画策するところがあったであろう。翌四年一月二十日、城の材木その他を下賜され、開墾入費にあてるようあらためて許可を得たのである。

其藩士片倉小十郎儀、北海道支配所痾土殊ニ開墾之タメ、疲弊ヲ凌ギ尽力候ニ付、格別之御詮議ヲ以今般廃毀被仰付候白石城材木其外下賜候條、勝手ニ始末イタシ、開墾入費ニ充候様可相達事。*60

この記録は一月二十日付の太政官日誌に見えるのであるが前記小島久等の答申書に「翌春二月建家而已下賜」とあるのは、この日付の発令が二月になって当事者に伝えられたことによるのであり、この時には建家だけが下賜され、当初の目算を遥かに下廻る大削減を受け、跋渉計画に大違算を生ずる結果に終わるのである。

三月になると、再び庶務局から次のような指令が伝えられた。

仙台藩士族
片倉小十郎家来
取締中

先般政府より片倉小十郎へ被下相成候白石城一時御入用之筋有之候間取毀方暫時見合可致事

未（明治四年）三月　　庶務局*61

すなわち取毀しの延期命令であり、跋渉を目前にして、早急に取毀し売却を必要とする時にあたり、このような措置をとられたことは、北地跋渉の早期実現を更に困難にするものとして県としてもその対策を講ずる必要を感じ、同月弁官宛左の伺いを提出するに至った。

当管内白石城今度兵部省兵員繰込度趣ヲ以同城借用之儀打合有之則御用立之筈ニ候処同城儀は旧臘中仙台藩士族片倉小十郎江取毀賣却之代價北地跋渉入費トシテ被下相成此頃破毀之都合モ候間其侭御用立候事難出来就テハ小十郎ヨリ当県江買上其上同省江御用立可申ト存候且同城は至テ小城の上朽破等モ有之旁修補営繕向ハ同省入費相成候儀と存候右様取計可然候哉此段御伺申上候也

未（明治四年）三月　　角田県

弁官
御中*62

これによれば城は跋渉費にあてる為に下附され、取毀しの都合上そのまま御用立する訳にはいかないので、片倉氏より県へ買戻しの上、兵部省へ御用立したいがどうかと伺い出たのである。同時に県はその準備として、金二万両の置金の用意ある旨を申し出た。

一金貳万両

右者今般当管内白石城へ兵部省兵隊繰込相成候ニ付同城買戻料并屯所営繕兵食料等諸入費大凡積ヲ以去午年租税金之内ヨリ書面之通引当置候尤入費之儀ハ兼テ伺置候次第ニ付追テ明細勘定相立可申上候以上

辛未（明治四年）四月　　角田県

弁官

御中

この件は、その後弁官の廃止によって大蔵省に移牒されたらしく、八月、右入費は兵部省において賄うべき筋のもの故置金に及ばず、且つ従来支拂の分は兵部省より受取るよう大蔵省から回答された。[*63]そのため県としては城の買戻料だけは県負担とすべきことを主張し、

（上略）右入費之中同城買戻之儀ハ先般別紙之通弁官江伺置候儀ニテ当県江買上候筋与存候然処未タ御下知無之内弁官御廃止相成候間別紙相添再應相伺候否早々御指図被下度此段奉伺候以上

辛未（明治四年）八月　　角田県

大蔵省

御中

と述べ、大蔵省の再考を要請した。[*64]これに対する回答史料は見当らないが、九月二十五日付左の報告書には、

当県去午租税金之内未納之分早々上納可致様御申達之趣承知仕候右者追々上納皆済イタシ候様ニテ全先般相伺候白石城繰込兵部省兵隊諸入費引当貳万両之分未納相成候儀ニ御座候然処此頃御附紙ヲ以右入費之儀ハ同省ヨリ請取候様御達相成候付即今同省江懸合中に有之候尤当時壱万両余之立替相成候間則今般壱万両外ニ伺済臨事置米貳百石餘之石代此程地拂取計候ニ付両様共上納仕候猶未納之分者兵部省ヨリ請取次第上納可仕候此段御報申上候也

辛未（明治四年）九月廿五日　角田県権知事　武井守正

租税権頭　松方正義殿

證

高金貳万両之内

一金壱万両也

但白石城繰込兵部省兵隊諸入費江引当去午租税金之内ヨリ一時置金取計貳万両之内上納候也

辛未（明治四年）九月廿五日　　武井守正権知事

大久保大蔵卿殿

と見え、[*65]文中買戻料の語が消滅しているところを見ると、この時は既に買戻し済のあとと考えられ、それも八月の伺いの後間もなく行われたものかと推定される。この年の九月十二日には、六百人余が跋渉の為寒風沢を出帆しているので、それ以前に入費問題の解決を急ぐ必要があったことと合せて考えるべきであろう。

『奥羽盛衰見聞誌』には、前記明治三年十月十五日の、元按察府より片倉小十郎宛白石城売却代金

下附の指令をかかげた次に、

依之御城御家作一宇鶴見屋専右衛門ニ金百五十両ニ御払成右ヲ直々角田県江御買上ニ而兵隊陣営ニ成

と説明した一節がある。按察府から引渡し直後に鶴見屋へ拂下げられ、更に県へ買戻されたように解釈される文面であるが、既に見た如く紆余曲折を経た後、四年三月以後八月頃までの間に、一種の権利金のような名目で、建物も破却されず、現状のまま鶴見屋へ拂下げ、それを県へ買い戻し、百五十両は鶴見屋から跋渉費として繰り入れられたと解されるのである。

なお兵隊繰込のことは、明治四年四月二十三日の布告によって、東山道及び西海道に設置された二鎮台の兵制に関係して行われたもののようである。

東山道鎮台は石巻を本営とし、福島と盛岡に分営を置いたのであるが、鎮台設置の布告の末に、

右両鎮管内應援運輸ノ便地ヲ撰ミ猶数箇所ニ兵備ヲ被設候事

とあり、*66これら数カ所の便地の一つとして、白石城にも兵隊屯所が設置されたと思考される。松下芳男氏によればこの時の制度は紙上制度か、或いはつぎつぎと制度が変わって行ったので、内容を具体的に把握する事が出来ない程度のものであったように説かれているが、*67白石においてはこの制度の布告以前より準備の為の指令があり、その上で事実上兵隊繰込が実現されたと考えられ、その時期は、前記三月の伺の時にはまだ繰込は行われなかったが、四月付角田県より弁官宛の報告に「今般当管内白石城へ兵部省兵隊繰込相成候ニ付」とある文面によって、この月の兵隊繰込が行われたと推定されるのである。

『奥羽盛衰見聞誌』に、

○明治四年辛未二月白石城兵隊屯所ト成岡山藩兵隊大隊引移三ノ丸北小路細小路居家取毀調練場ト成稽古有

と見えるのがこれに当る記事である。但し「二月」とあるのは四月の誤記であろう。そしてこの時に、三ノ丸から北小路、細小路の居家が取り拂われ、軍隊の調練場となり、それにちなんで、現在の調練場の字名が起ったのである。

然し兵隊屯所も僅か六、七ヶ月で廃止となる。廃藩置県に伴う兵制改革により、八月二十日、従来の二鎮台を廃して、新たに全国四鎮台の制となし、*68その一つとして東北鎮台が仙台に置かれるや（本来は石巻に設置される予定であったが、当分仙台に置くことになっていた）白石の兵隊屯所も廃止されることになった。『宮城県国史』に

同年（明治四年）十一月東北鎮台ヲ陸前国宮城郡仙台ニ置カル尓後県限ノ常備兵ヲ解キ（下略）

と見える記事が白石屯所の仙台に移転する時期を示す史料である。

当時はまだ国内の治安が確保されず、鎮台設置の意義も、国内の秩序を維持することにあると見られ、この段階では城郭の持つ軍事的機能は、まだ完全には見捨てられなかったもののようであり、前記八月二十日の布告の末に

地方城郭之儀兵部省管轄被仰付候事*69

の一項がつけ加えられているのも、この意味で理解される。ここにおいて、屯所廃止後の白石城は主

のいないまま兵部省所管に入ることになった。

翌五年二月二十七日、兵部省の廃止によって、新たに陸軍省、海軍省が置かれると、白石城はそのまま陸軍省に引継がれたようである。然し維新政府による兵制の近代化が進むに伴い、非近代的な城郭の軍事的意義が失われて行くのは当然であり、そのため諸城郭は従来の軍の所管から大蔵省へ移管されて行く。六年二月二日には、左の如く達せられるに至った。

其管内之城塞并兵庫等是迄陸軍省管轄之内今般別紙ノ分当省所管ニ被仰付候条此旨可相心得事

（但書略）

明治六年二月二日　　大蔵大輔井上　馨

宮　城　県

角　田

一、要　害　地

（舟岡以下五ヶ所の要害地略）

白　石

一、城　郭

右之他県之分略之

（但書略）*70

ここに白石城の軍事的生命は完全に終りを告げたものと見られ、更にその頃急激に高まる旧物打破の思潮は、このような城郭建造物を一顧の値だになきものとして捨て去り、やがてこれらは次々と解体される運命にあう。

間もなく大蔵省より城郭施設等の評價額取調方の命があり、これについて左の如く報告された。

磐城国刈田郡白石要害

一建家貳拾八棟

此建坪九百三拾四坪七合五勺

此代金七拾五円八拾六銭　但平均壱坪ニ付金八銭壱厘余

一松杉雑木千貳本

此代金百六拾壱円八拾六銭五厘　但大小平均壱本ニ付金拾六銭壱厘余

一石類貳万六千五百五拾七箇

此代金七円四拾三銭六厘　但大小平均壱箇ニ付金弐毛八糸余

（角田要害の件略）

右者本年八拾号虎ヲ以御布達相成候旧城郭陣屋練兵場等之建物木石共相当之代價取調候処書面之通り御座候仍之此度申上候也

明治六年七月三十日　　宮城県七等出仕　宍戸　昌

宮城県権参事　遠藤　温

宮城県参事　宮城　時亮

大蔵省事務総裁

参議大隈重信殿*71

これによれば、建物、樹木、石類の相当代価合計僅か二百四十五円十六銭一厘と評価されている。明治三年、樹木だけでも一千両と評価した当時とは甚だしい懸隔がある。次いで十月二十八日、

書面白石外五ヶ所要害之儀者悉皆拂下之積ヲ以建屋石垣樹木地所区別ヲ立入札之上三番札まで相添可伺出事

明治六年十月廿八日　　大蔵卿大隈重信*72

のように拂下入札の件について指令が出され、県ではその手続を進めたものと思われるが、以後何の沙汰もないので、翌七年三月、

（上略）白石城郭及要害地（中略）代價取調同年七月御届仕其後何等之御沙汰も無之候処毎風雨益破損ニ相及即今ニ至取調差出置候代價ニテハ御拂下望之者無之其侭差置候テハ大破相成御不益ニ有之仍テ右五ヶ所地所建物等悉皆入札御拂下ヶ相成可然哉迅速御指揮御座候様仕度此段申上候以上

明治七年三月　　宮城県参事　宮城時亮

内務卿　木戸孝允殿

と県より回訓を要請している。*73かつては、奥羽列藩同盟会議所として戊辰史上に脚光を浴びたこの城も幾度か主を換え、今廃屋となっては、風雨毎にいたずらに頽廃朽損し、一年前の評価額通りでは拂下げ希望者もない状況にあることを、この文面は語っている。

この時は既に内務省所管に変わったものであろう。折り返し同省から、

書面城郭之内天主楼櫓之分ニ限り入札取調当可申哉余り分ハ昨年第四百貳拾六号公布有之右ニ照準貫属授産寮へ拂下候積リ可相心得若所望無之候ハ、其処分後可伺出事

明治七年三月十九日　　内務卿木戸孝允*74

と指令された。白石城には正式には天守閣と称するものはなかったが、三層の大櫓を初め、本丸の三隅に各櫓があり、これを対象として入札の手続が進められていった。

租　税　係

参　事

権　参　事

七　等　出　仕

管内城郭要害地建物等悉皆入札御拂下之義内務省御伺之処天主櫓而已入札拂下其他ハ家禄奉還之者へ可拂下旨御指令相成候処渡辺権少属南方郡々巡回中ニ有之候間同人へ申遣見分入札為取計候様仕度此段相伺申候

七年四月四日*75

即ち内務省の指令に基づいて、入札処分を実施するため、仙南各郡巡回中の渡辺権少属に対し、天守櫓の見分入札を取計らわせたいと、知事宛に租税係の発議した伺いの文である。

この伺いはそのまま承認施行されたものであろうか。『奥羽盛衰見聞誌』の明治七年の條には、左

の一項即ち

○白石城郭家禄奉還士族御代田圓八等五名エお拂下　七月廿八日

と記されているに過ぎない。この日をもって、解体拂下に関する一切の手続が完了したのであろう。解体についての挿話や建物の行衛など、わずかにそれと傳えるものを白石の周辺に見受けるだけで、それらの一切は不明のままであり、これを明らかにするには、また別の史料の発掘にまたねばならないのである。

五、むすび

明治元年十月官軍の入城から、同七年白石城の拂下入札完了に至る六年間において、白石城は大きくは四度その主を換えている。これを表示すると次の如くである。

年月日	
一・一〇・九～一・一二・七	官軍入城以後片倉氏重臣預り
一・一二・七～二・七・二二	南部氏居城
（二・四・一二～二・一〇・一九）	
二・八・一八～三・九・二八	按察府役所
（三・一〇・二一）	
三・一〇・一五～三・一二・二〇	片倉氏へ下附開拓役所預り
（四・四頃）	
四・四頃～四・一一頃	兵部省兵隊屯所
四・一一頃～七・七・二八	兵部省、陸軍省、大蔵省、内務省へ次々と所管換えの後、御代田円八等に拂下解体*76

これによれば、官軍、南部藩、按察府、軍隊の四者が主としてあげられて来る。官軍の入城は、奥羽列藩同盟会議所の所在地として、最初から進撃目標の一つに数えられていた結果であり、維新の到来を目のあたりに示す事件であった。南部氏の移封は、改革実施の第一段階として、維新政府の強い決意を示すものであり、次いで三陸奥羽七国を総括する行政庁の設置は、動乱後における東北地方民生の安定を期し、行政監察の機能を発揮して、維新政治の実をあげようとする意図を見る事が出来るものである。

やがて行われる鎮台兵の駐屯は、これを母体とし、近代兵制――明治軍制――が確立されて行く姿を示すものとしてうけとれるのである。

これらは必ずしも、維新政府の一貫した計画性にもとづくものではなく、いわゆる朝令暮改と多少の混乱を伴いつつ実施されたものであるが、結果的には、維新の目標達成への布石と見られ、この限りにおいて、これらが白石城に置かれたことは、前代まで持ち続けられた戦略上の意義が、まだ完全に失われない段階において、政府の意図する地方経営の一翼をにない、重要な役割を果たしたと見ることが出来よう。

然し明治維新による近代化が進めば、このような地方小城郭の存在意義が失われ、旧物打破の思潮

によって見捨られて行くのもまた当然であり、その過程において、城が北地跋渉費に充当されることから、前述の如き種々の曲折を経て、やがて破却される運命に逢着するのである。

このことは同時に、城の主である地方官庁がつぎつぎと白石を去って行くことと関連し、新しい町作りの行われる機会となるが、住民としても、短年月の間に、地方制度のはげしい変革や、又時には中央における藩閥政権争いの縮図とも見るべき、地方官庁同士の葛藤を見聞することによって、国全体の動きを身近に感ずることもあったと考えられ、更に内部的には、一揆の形態をとった農民の大集会や、従来の支配階級であった旧家中が、大挙して北地跋渉に去って行く姿を見送るなど、明治維新の動きを体験する仕方において、他地方の住民に比較し、より直接的なものがあったと考えられる。

既にこの期を境とし、相当の体質改造を行った白石の住民に対し、このような体験が何等かの影響を及ぼしたとすれば、その事は、おのずから、新しい町作りの過程の中にあらわれて来る筈であるが、それは又、その後の白石を究明する一つの問題点をなすと考えられるのである。

あとがき

本稿において引用した史料及び参考書中『刈田郡誌』『奥羽盛衰見聞誌』『仙台市史』『明治軍制史論』『復古記』『維新史』以外のものは、すべて宮城県図書館の架蔵にかかる明治初年の宮城県庁資料である。筆者が約八百冊に上るこの書類綴を、公務として数ヶ月を要して整理する旁ら、白石関係史料を目にふれる毎に少しずつ書きとめておいたが、それが引用史料の中心をなしている。

この史料の引用と、公務時間中写本の作業をひそかにお許しいただいた、館長佐々久氏の御好意に対し、深く感謝の意を表するものである。

一九六〇、一二、三一　　脱　稿

解説

白石市誌資料は昭和三十年に第一輯として小見普門筆録の幕末維新時の諸誌物価の記録を、ついで第二輯として武藤弘毅筆録の『奥羽盛衰見聞誌下巻』を公刊されたが、その後暫くは諸般の事情から公刊を見あわせ各委員の調査蒐集の成果を草稿にまとめるだけにとどめていたのに、此の度第三輯として亘理梧郎委員著述の本稿を公刊することにした。

既刊の第一輯、第二輯はともに明治初年の白石地方の政治、経済、社会の各面を知る貴重な文書であるが、前者は旧片倉家中の一個人の見聞の記録であり、後者は明治二年八月南部藩白石移封以後の片倉家中心の公文書、布達、往復文書等の筆録であるから、明治元年から同二年前半までの重要な時期の記録を欠いておるので、この両者を併読しても維新期の振天動地の大変革下の地方史の推移を明らかにする資料としては不十分で、いささか物足らぬ点がないわけではなかった。

亘理委員は宮城県立図書館整理係長の職にあって同館所蔵の古文書のすべてに目を通す機会にめぐまれておられたので、公務の傍ら数年間にわたって明治初年の根本史料である旧白石県、旧角田県など同館架蔵の八百余冊の宮城県庁資料の中から、白石関係資料を一々摘記して研究を進められて来たが、この度ここにその成果を世に問われたわけである。その内容は明治元年十月官軍入城に初まり、

南部氏の入城と復帰、両羽三陸磐城按察府の新設廃止、白石県の設置と移転、刈田郡の農民一揆、旧片倉家中の北海道跋渉、兵部省兵隊屯所の新設並びにその移転など、短日月間につぎつぎと目まぐるしい程に変革した史実の跡を、白石城を中心として明確にまとめあげ、やがて北海道跋渉の資金調達の赤字補填のために白石城が解体されるまでの経緯を詳述して明治七年四月までに至っている。

本書は宮城県立図書館所蔵図書中第一級の価値ありと称せられる宮城県庁資料を中心として、広く資料をあさって史実に論述を進められ、その考証の緻密なるに加えて、いささかもおろそかにせぬ学術的な香の高い堂々たる大作であり、やゝ近より難い感を抱く人もあるかと危ぶまれるが、明治初年の白石地方史研究の総結論とも見なすべき好著である。

本書をひもとくことによって我々は封建制度の解体に伴って白石城が官軍に明渡され、その後次第に白石の住民たちが封建的な桎梏から解放されて、史上かつて無かった農民強訴を惹起するに至った過程を知ると共に、それとうらはらに中世以来七百年間、東北地方又は旧仙台藩内の戦略上の重要拠点であった白石地方が、時代の推移につれにわかにその地位を失って行政軍事上の諸官庁兵営がつぎつぎと他に移り行き、やがてその存在意義を失った白石城が旧物打破の新思潮により解体されて行くいきさつを明らかにすることが出来、深い感銘を受けるであろう。

と同時に、片倉家を始め旧藩時代の指導者階級である旧家中二百余家族の北海道移住が当時最大の問題であって、多大の犠牲を払い多くの困難を乗り越えて逐次決行された反面、東北地方の重要拠点の役割を果たし終え、単なる一地方都市に転落した白石地方の住民たちが、指導者階級を欠いたまゝ、白石の近代的建設の出発点にたたされた冷厳な史実を知り得る。本書はそれ以後の白石の住民たちの活動には他日を期し触れてはいないが、いずれにせよ、本書は現代の我々地方人にとって実に意義深い研究であるということが出来る。

あえて本書を広く地方人士に推奨したく本書を公刊した次第である。（飯沼寅治記）

昭和三十六年六月　日

白石市誌編纂調査会

註

＊1　『復古記』所収白河口戦記第十一明治元年十月六日の条

（上略）備前、彦根、柳河、大村四藩兵ヲ白石駅ニ差遣ス（下略）

＊2　『刈田郡誌』一四四頁

＊3　『復古記』所収白河口戦記第十二明治元年十月九日の条

＊4　『刈田郡誌』一四四頁

＊5　『伊達氏史料』四輯巻廿二

十月廿八日彦根藩届書

別紙之通於奥州白石城従総督府御達ニ付出張之兵隊去十一日白石城出発東京ヘ凱還可仕由尤去月出張之二小隊ハ今一應御沙汰有之迄居残り候様御達ニ付白石城ニ滞陣仕候（下略）

彦根中将公用人

十月廿八日　　田部洗蔵

＊6　『刈田郡誌』一四五頁

＊7　『明治二年　刈田柴田伊具宇田亘理五郡南部家へ引渡留』所収明治二年二月十四日熊谷内蔵石母田但馬連名歎願書

＊8　註7の歎願書の付札

帰農願書候者共能々其主人々々より篤与情実取糺し武器刀剣類不残取揚実々農商ニ帰し候得は其侭居住御免相成南部彦太郎へも可相達ニ付得其意戸口員数追而可書出候事

＊9　『刈田郡誌』一四五―一四六頁所収明治二年二月二十日付片倉小十郎邦憲歎願書

＊10　註7の中□（三）月十五日付片倉小十郎宛申渡書留書

＊11　註7の中三月十七日付古内十左エ門達書の文中左の如くあり

（上略）右御場所之義ハ御大切之御場所ニ而御郡一篇ニ而引受候而ハ外ニ警衛可仕者も無之御引渡前甚御手薄之義ニ有之尤下々動揺仕在之折柄之義火事等何様之変事相出候哉も難斗（カ）且城地之儀ハ兼而郡村へ預かり候取扱ニも無御座候間御内付ノ武頭ニ而も被相下引受方仕御足軽等被相下警衛仕候様御吟味被成度（中略）尤御郡奉行手前ニ而受取御引渡迄之間ハ片倉小十郎向役之中よりも取締人指出置候様御郡奉行より相当首尾可有之旨申渡候

＊12　註7の中（三月）十九日付片倉小十郎付札留書

白石城地南部様御引渡之処去年十月中官軍御繰込監察衆御印符之上重臣之者へ被相預候処右印符之義は上ニ而御始末可被成下哉重臣之者より彦太郎様御重臣へ引渡候方ニ可有御座義之旨相達候ニ付印符之侭可被引渡旨付札留主居呼出物書申陳（カ）相渡申候

＊13　註7の中□（三）月二十七付日出入司達書留

（上略）白石城玄関等去年官軍御繰込之節印符被相付置候付其侭御引受相成度段出役之向方役々佐藤直衛等及談判候へハ印符付候而ハ請取兼候段申聞候付土地人民斗（計）も御引渡相成候方ト重而及談判候得共兎ニ角受取兼候段申聞候付三右（入生田）エ門後ニ而御吟味之上廿四日夜東京へ御小人御飛脚被相立候間御伺済之上御飛脚下着不仕候へハ御引渡可被成様無御座候間右之日次之儀ハ別而申達候様可仕候（下略）

＊14　註7の中四月五日夜到着の白石状

（上略）白石城之儀は印符切次第之儀ニ候得共外御郡々ニ候ハ先以御引渡相成置由之義応接役段々南部様御役人江及御欠合候得共白石城ハ本分之義ニ候右ハ引渡候以後自然枝葉ニ及度申達（カ）而申聞候付色々及理解候得共何様共氷解不仕候ニ付其侭置候其後（中略）御郡役々より彼方御役々へ外御郡之分御引渡相成候方可然由序を以咄合候所漸此方意之任外々之分御内見分候積を以直々御引受仕度由挨拶有之候付角田等江之方ハ幸ヒ吉田源六郎法令ニ付御郡奉行御用相弁候様申渡（中略）片平新左エ門へ御郡奉行御目付御用相弁御引渡仕候様申渡御郡方役々引添昨三日指遣申候（下略）

一（上略）明日ニも東京より右伺之義御指図有之御引渡相済候ハ、早速御届不相成候而ハ不叶訳ニ候所然ニ南部様ニ而ハ右御引受相済候段屹度爰元より直々東京へ被相届義と致推察候

所左候得は仙台表より右之義為御届之御飛脚等被相立候時ハ自然南部様御届より余程相後れ候事ニ可相至（中略）行政官より段々被為禁御不審之義も有之上之義（中略）御手後れ不相成様仕度兼而為御首尾合之申達置候

＊15　註7の中四月六日氏家兵庫書状留

（上略）幸御小人六人東京勤番ニ明七日出立罷登候由向々申聞候付御自分ハ出張先へ立寄東京江之御用相伺可相勤旨申渡指登候間壱人也貳人也御見詰次第被相留置右御届之義ハ御自分より為申登夫々首尾可被成候（下略）

＊16　註7の中□（四）月九日付出入司達書留

（上略）右御印符等為御切方之御用係統取佐藤嘉七郎殿武庫方河村幸七郎殿過ル四日東京出立道中常之通被相下事ニ被仰渡御取扱ハ知県事衆同様村々案内振を始御賄薬数（ママ）差發之節御酒被相出候義共吟味仕置候尤直々角田其町も廻行可被成哉も難（カ）斗是又先々首尾可仕由（下略）

＊17　註7の中四月十三日付松本八郎左エ門達書留

（上略）軍務官御用係頭取佐藤嘉七郎殿武庫方川村幸七郎殿今十二日朝五ツ半時参城御開印之上被相渡候付南部様御宿老中野舎人始列席御家ニ而も御宿老衆始御郡方役々迄列坐無滞相済申候間為御承知相達申候尚以本文（分ノ誤）白石城地御引渡之廉ニ而五郡共御引渡相済候訳ニ而（下略）

御届写

四月十四日着入生田三右エ門達書留

（上略）右御役人衆昨十一日白石表着候十二日御城御見分之上（中略）南部様御役々江御引渡相済候付御届之義共別紙写之通爰元ニおゐて相済（下略）

御届写

白石城之儀兼而御沙汰之通南部藩江引渡候様被仰渡今十二日右藩江引渡相済候間右之段御届仕候以上

巳四月十二日　　御名内

後藤和泉

入生田三右エ門

＊18　『奥羽盛衰見聞誌』下編一頁

＊19　仙台市編『仙台市史』第一巻　一七二頁所収

＊20　明治二年　御布告

＊21　明治己巳　往復

＊22　明治二年　御布告。なお按察使設置の布告を『奥羽盛衰見聞誌』は八月と記し、『仙台市史』は八月五日としている。

＊23　『奥羽盛衰見聞誌』下編五頁所収

＊24　『奥羽盛衰見聞誌』下編五頁所収

＊25　文部省編『維新史』第五巻　七四〇頁所収

＊26 『開拓地不及詮議分評議留』に白石県設置の年月を左の如く記している。

右者戊辰十二月十七日盛岡藩再建之上右区郡下賜其後同藩土地人民奉還己巳（明治二年）八月十八日白石県被置同年十一月廿七日角田県ト改称辛未十二月二日廃県

＊27 『明治二三年　官省伺届』所収巳十月白石県差出着県御届

＊28 前掲書所収巳十二月角田県差出御収納御回米延引之儀ニ付申上候書付

＊29 前掲書所収巳十二月角田県差出民部省宛届書の覚書に次の如く見えている。

覚

一　岩代国　伊具郡　人員貳千六百貳拾九人　刈田郡人員　九百四拾三人

一　磐城国　亘理郡　人員　三百拾貳人　宇田郡人員　八百八拾九人

一　陸前国　柴田郡　人員　五百五拾人

五郡人員合五千三百貳拾三人

右日数三拾日の間壱人ニ付一日米壱合八勺宛

此石数合貳百八拾七石四斗四升貳合也

右之通御座候

巳十二月

＊30 『明治己巳往復』所収九月十八日付山口大属竹内権大属連名申入書

＊31 『明治自巳至午』管下布告

＊32 『明治己巳』往復

当県権知事始其外不日当表着致候ニ付居邸之儀為取調候処片倉小十郎旧家来別紙名前之分相用候積ニ付早々引拂方御達被下度（中略）都合次第転居之儀含御達有之度此段及御懸合候也

九月廿七日　竹内権大属　山口大属

福島圓司様

＊33 前掲書

当県権知事始其外去ル廿二日東京出発明後晦日当所着之趣只今途中より壱人急行ニ而報知有之尤居邸江直之積ニ付差向別紙名前之分而巳明日迄ニ引拂相成様至急ニ達被下度且両斎藤之儀道具向等モ一同取拂相成候様致度其余之分ハ持運兼候道具向丈ケ両三日差置候義ハ不苦候間其段モ可然御指揮被下度候也

九月廿八日　竹内権大属　山口大属

福島圓司様

右之通申遣候処両斎藤家按察府ヨリ入用之由達有之段申越候ニ付尚又左ニ申遣ハス

（上略）両家之儀ハ当県兼而入用之手筈ニ有之尤昨月貴所江も以名前書引拂方都合御頼申進候事ニ候間右ハ是非当県ニ而用立候様致度此段尚又申進候也

九月廿八日　竹内権大属　山口大属

福島圓司様

＊34　前掲書

斎藤新蔵人矢内弥一郎宅之儀ニ付（中略）右両家之儀ハ当県方ニモ是非入用ニ候得共現今彼是談判仕居候テハ時刻モ遷延差当手前之都合も手後レニ相成候ニ付不得止場合モ有之且ハ右邸宅其御府ニモ差当御入用ニモ不被為在哉之趣ニモ竹内ヨリ拝承候ニ付テハ右談判ハ暫御浮置被下度尤確然御府江御渡申上候儀ハ是非相成兼候得共前条之次第ニ付一両日之処右両邸代り乍迷惑外ニ而都合致置其内御熟談可申上与奉存候（下略）

九月廿九日　山口光之助

西　健之助様

＊35　『明治自巳至午　管下布告』所収十月朔日及び巳十月付の白石県布告

＊36　『明治己巳　往復』所収郷村御引渡手続書

＊37　前掲書所収十月付按察府申入書

＊38　前掲書所収十月十九日付白石県返書

＊39　前掲書

城中畳建具等惣員数点検いたし度趣盛岡藩申出候間右役人罷出候ハ、可然御指図被下度此段為念申入候也

十月廿九日　白石県

按察府　御中

＊40　前掲書

（上略）過日其御県与盛岡藩与既ニ点検相済候事ニ付唯今ニ相成候テ盛岡藩ヨリ建具等之員数点検ニ罷越候は甚不都合ニ存候間一應此段及御掛合候也

十月廿九日　按察府

白石県御中

＊41　前掲書所収十月廿九日付白石県返書

＊42　前掲書

過刻御談有之候揚屋之品致承知候此節当県ニ而入牢申付有之候者ハ何れも軽罪之者ニ有之候付取締自然不行届ニ渉り候而ハ不相済事候間守衛人之儀ハ御府ヨリ可然御取斗（計）有之様揚屋之

儀ハ何時ニテモ御貸渡可申候此段申入如此候也

十一月廿四日　　白石県

按察府　御中

昨日御申越揚屋之儀ニ付御談申度儀有之候間御掛之人御出府有之度候也

十一月廿五日　　按察府

白石県　御中

（上略）然ニ勝手ケ間敷候得共右揚屋之儀ニ候得ハ以書面御掛合被下間敷哉一應及御問合候御承知之通甚多忙罷在候条宜敷御推察被下度候也

十一月廿五日　　白石県

按察府　御中

その外二三應答の文書であるが最後に左の如き挨拶で終っている。

過日及御相談候揚屋借用之儀御詮議替ヲ以不用ニ相成候間此段及御答候也

十　一月廿七日　　按察府

白石県

＊43　前掲書所収十月付按察府申入書

＊44　『明治自巳至午　管下布告留』所収十一月付武井守正請願書

＊45　前掲書所収十一月付太政官布告及び白石県通達書

なお太政官布告が十一月二十七日であることは註26によって明らかである。

＊46　『奥羽盛衰見聞誌』下編　九三頁

＊47　前掲書　二五頁

＊48　『明治七年五月ヨリ　官省願伺綴』所収明治三年五月小島久等三名連名金子借用證文写

＊49　前掲書所収明治六年三月小島久等三名連名答申書写。なお文中に跋渉者五十人余とあるのは、奥羽盛衰見聞誌の明治三年六月二十五日出発の十九名（家族を含めて五十余か）がこれに当ると見られるが、六月とあるのは五月の誤りであろうか。

＊50　前掲書所収明治七年十月米竹清右エ門等二名連名歎願書。なおこの訴願は三千円のうち二百円を返上するだけで一切御破算にすると申渡しがあり、同年中に解決した事を附記しておく。

＊51　『明治三年　御布告』

按察府被廃候事

九月　　太政官

仙台市編『仙台市史』第一巻一七二頁『奥羽盛衰見聞誌』下編二五頁

＊52　『明治二三年　官省伺届』所収庚午十月付元按察府指令書

＊53　前掲書所収庚午十月十五日付元按察府申入書

＊54　前掲書所収午十月二十八日付角田県伺書

＊55　前掲書には角田県の伺いに対し左の通りの付紙が見えている。

一民部省附紙

書面旧按察府指図之趣を以可取計候伊達藤五郎外壱人旧居邸建屋其侭置候モ無益ニ付御県ニ而不用ニ候ハヽ、被下候而も可然候間願出候ハヽ、伺之上可取計事

＊56『奥羽盛衰見聞誌』下編二九～三二頁

＊57『明治二三年　官省伺届』所収閏十月付角田県伺書

＊58『明治自巳至午　管下布告』所収十二月五日付角田県指令書

＊59前掲書所収庚午十二月二十日付庶務局指令書

＊60太政官日誌明治四年一月二十日の條『新聞集成　明治編年史』第一巻所収

＊61『明治三年　管下布告留』所収　未三月付庶務局指令書。なおこの書類綴の書名には明治三年とあるが、内容は四年の分も収録されている。

＊62『明治四年　官省願伺届書』所収　未三月付角田県伺書

＊63前掲書所収辛未四月付兵部省出張兵隊諸入費引当置金之儀ニ付申上候書付

なおこれについての付書は左の通りである。

書面諸入費之儀ハ兵部省ニ而可取賄筋ニ付不及置金候条是迄仕拂相成候分は都而同省より請取候儀与可相心得事

辛未八月　（大蔵省印）

＊64前掲書所収辛未八月付角田県再伺書

＊65前掲書所収辛未九月二十五日付角田県権知事武井守正報告書

＊66松下芳男氏著『明治軍制史論』所引史料（同書八五頁）

＊67前掲書八五頁

＊68仙台市史編纂委員会編『仙台市史』9資料編収録史料（同書三二二頁）

＊69仙台市史編纂委員会編『仙台市史』9資料編収録史料（同書三二二頁）

＊70『明治六年　大蔵省達』所収明治六年二月二日付大蔵省達

＊71『自明治六年至同八年　官省御指図綴』所収明治六年七月三十日付宮城県報告書

＊72前掲書所収明治六年十月二十八日付大蔵省指令書

＊73『自明治六年至同八年　上申書類綴』所収明治七年三月付宮城県伺書

＊74前掲書所収明治七年三月十九日付内務省指令

＊75『開拓地不及詮議分評議留』所収七年四月四日付発議伺書

＊76（　）は居城又は預りの実年月を示す。

第10章　まとめ

1　白石城跡は宮城県白石市益岡町の標高79のｍ独立丘陵上に立地している中世から近世の城館跡である。近世には本丸、二ノ丸、中ノ丸、南ノ丸、沼ノ丸、三ノ丸、西曲輪、厩曲輪、帯曲輪、巽曲輪、外曲輪の六丸、五曲輪から構成されていた。本丸の規模は東西120m、南北110mほど、城域は、東西750m、南北480mほどである。現状は都市公園、社地、学校用地等である。

2　発掘調査の結果、絵図に描かれた三階櫓跡、大手一ノ門跡、大手二ノ門跡、枡形跡、土塁、井戸跡、石垣、勘定所跡が発見された。

3　三階櫓跡は３時期の遺構変遷があり、掘立柱建物跡、礎石建物跡、大石を用いた建物跡の順で、新しくなる。

4　出土遺物には大量の陶磁器、かわらけ、瓦質土器、中世陶器、瓦、石臼、金属製品、銭貨、土人形、焼成を受けた粘土塊、板碑等がある。瓦は計1300kgほど出土し、軒丸瓦、丸瓦、板塀瓦、平瓦、棟瓦、軒桟瓦、軒平瓦、桟瓦、輪違い、面戸瓦等がある。文政の年号が記された鬼瓦片が出土している。陶磁器は青花、肥前、瀬戸美濃、大堀相馬、小野相馬、岸、堤、成島、切込、末家のものがある。

5　中世に遡る可能性がある遺構が一部で発見されたが、詳細は不明である。

6　廃城後の土地利用を表すものとして、大正４年11月の片倉公三百年祭紀念坏、洋食器が出土した。旧軍防空監視所時代に関係する遺物として敵機識別模型、統制陶器、軍隊茶碗が発見された。

7　発掘調査に先立つ植物調査では、本丸跡において自生、帰化・逸出するもの156種類、植栽４種類が確認された。本丸跡の東側外郭周辺では、自生、帰化・逸出するもの133種類、植栽17種類があり、ケヤキ、サイカチ、ソメイヨシノでは古木も確認された。調査地は人為の影響を受けているが面積の小さいわりには、やや豊富な人里の植物相が形成されていた。

引用参考文献

我妻健治ほか　1995 『よみがえる白石城』 碧水社

阿子島雄二、片倉信光、岡崎雄四郎　1967 『明治100年白石風物詩』前編

阿子島雄二　1970 『みちばたの神さまたち』 白石郷土研究会

氏家和典　1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14 （『東北古代史の基礎的研究』に再録）

遠藤　智、清野俊太朗　1984　梅田遺跡調査報告書　白石市文化財調査報告書第22集

及川　仁　1972 「白石地方の植物」『白石市史』 2　特別史（上）pp.191-251

片倉信光ほか　1937 「白石の維新前後を語る」『仙台郷土研究』第７巻第３号　pp.30-44

片倉信光　1941 『鷹巣古墳群調査報告』（『白石市史』別巻　考古資料篇に再録）

片倉信光　1941 「白石城下聴書」『仙台郷土研究』第11巻第４号　pp.12-16　今井なか談

片倉信光　1965 『白石市文化財調査資料　白石城址調査報告書』

片倉信光、後藤勝彦、中橋彰吾　1976 『白石市史』別巻　考古資料篇

片倉信光　1979 『白石城』 白石市文化財調査報告書第３集

片倉信光、阿子島雄二、岡崎雄四郎　1983　ふるさとの思い出　写真集　明治大正昭和　国書刊行会

風間観静　1979 『白石市史』１　通史編

風間観静　1987 「口絵写真説明　白石城及び町絵図」『白石市史３の（３）特別史（下）の２』

加藤正一郎　1990 「耕龍寺山門について」『宮城高専研究紀要』第26号　pp.75-86

加藤政久　1984 「亘理・刈田地方で見つけた板碑」『仙台郷土研究』復刊９巻第２号・通巻第229号 pp.36-37

川村要一郎　1997 『白石城主片倉氏と家臣の系譜』創栄出版（『家臣系譜書上』）

菊地逸夫　1996　一本杉窯跡群　宮城県文化財調査報告書第172集

菊池佳子　1997 「第Ⅱ章　仙台城二の丸跡第９次調査地点（ＭＮ９）の調査　４．出土遺物（４）瓦」『東北大学埋蔵文化財年報』８

菊池佳子　1998 「考察編　仙台城二の丸跡の考古学的調査　５．仙台城の瓦とその変遷」『東北大学埋蔵文化財調査年報』９

国文学研究資料館　1990 『古典籍総合目録-国書総合目録』続編　第一巻

国立公文書館　1987 『内閣文庫所蔵　正保城絵図』膳所城、白石城、丸亀城

建築文化研究所　1991 『白石城三階櫓外基本構想策定報告書』

近藤和夫　1991 「大畑遺跡」『舘南囲遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第144集

近藤真佐夫　1998　史跡若松城跡Ⅱ　会津若松市文化財調査報告書第55号

斎藤良治　1975　車丁古墳調査報告書　白石市文化財調査報告書第10集

佐々木和博、菊地逸夫　1985 「白石市兀山遺跡の古瓦」『赤い本』片倉信光氏追悼論文集　pp.55-64

佐藤　巧　1994 『宮城県指定有形文化財　旧小関家住宅修理工事報告書』

白石市　1964　白石市勢要覧　昭和39年度版

白石市　1974 「風土記御用書出」『白石市史』５史料篇（下）

白石市　1976 「片倉代々記」『白石市史』４史料編（上）

白石市　1976 「奥羽盛衰見聞誌」『白石市史』４史料編（上）　武藤弘毅筆

白石市教育委員会　1990 『白石城の絵図・白石城下絵図』

清野俊太朗、遠藤　智　1981　谷津川・江ノ下遺跡調査報告書　白石市文化財調査報告書第23集

清野俊太朗　1992 「大畑遺跡」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料』pp.87-89

関根達人　1993「第Ⅱ章　二の丸跡第５次調査地点（ＭＮ５）の調査　４．出土遺物（２）瓦」『東北大学埋蔵文化財調査年報』６
関根達人　1994「第Ⅲ章　仙台城二の丸跡第５次調査地点調査成果の検討　２．陶磁器」『東北大学埋蔵文化財調査年報』７
関根達人　1998「考察編　仙台城二の丸跡の考古学的調査　４．仙台城における陶磁器の変遷」『東北大学埋蔵文化財調査年報』９
関根達人　1998「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報』10
芹沢長介　1981「宮城県のやきもの」『日本やきもの集成』１　北海道　東北　関東　pp.124-128
仙台市教育委員会　1998　年報19　仙台市文化財調査報告書第233集
仙台市博物館　1966『伊達家寄贈文化財目録』（古文書２・記録）　p.114
仙台市博物館　1994『仙台市博物館収蔵資料目録』Ⅶ―仙台藩士資料（家わけ）―
仙台市博物館　1987『伊達政宗と家臣たち』
東北歴史資料館　1994『宮城の古絵図』　東北歴史資料館資料集37
中橋彰吾　1974　道ばたの碑　白石市文化財調査報告書第12号
中橋彰吾　1976　茶園遺跡　白石市文化財調査報告書第15号
中橋彰吾　1987「中世城館の規模と構造について」『白石市史』３の（３）特別史（下）の２pp.543-648
中橋彰吾、清野俊太朗　1978　観音崎遺跡調査報告書　白石市文化財調査報告書第18集
中橋彰吾、高橋辰男、佐々木敏雄　1979『白石市の文化財』　白石市文化財調査報告書第20集
中橋彰吾　1995「白石城築城の謎」『白石市文化財愛護友の会々報』第17号　pp2,5,6
名村栄治　1995『白石城物語』　読売新聞東北総局
名村栄治　1996「白石城絵図一覧」『仙台郷土研究』復刊21巻１号（通巻252号）　pp.12-20
日本城郭研究センター城郭研究室　1991『城郭関係図書所在一覧』
（財）日本城郭協会編　1984『図説日本城郭史』
原田伴彦・矢守一彦　1982『浅野文庫蔵諸国当城之図』　新人物往来社
藤沢　敦　1998「考察編　仙台城二の丸跡の考古学的調査　４．仙台城における土師質・瓦質土器の変遷」『東北大学埋蔵文化財調査年報』９
藤沼邦彦　1996「白石焼・萩の坂窯跡をめぐって」『白石市文化財愛護友の会々報』第18号　pp.1-4
宮城県図書館　1993『宮城県図書館蔵　絵図・地図解説目録』
村田町史編纂委員会　1977『村田町史』p.240
室野秀文、吉田義昭ほか　1991「発掘調査報告書編」『盛岡城跡Ⅰ』
八嶋伸明　1995「大畑遺跡」『大畑遺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第168集
結城慎一、佐藤洋　1985　仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書　仙台市文化財調査報告書第76集
（有）建築文化研究所　1996『白石城天守閣（三階櫓）復元建設工事報告書』
渡部美津丸　1984「角田の板碑」『角田市史』１　通史編上　p.698
亘理梧郎　1961　白石市誌資料　『白石城解体のいきさつ』　白石市誌編纂調査会
亘理梧郎　1984「白石領村落の住民構造」『白石市史』３の（２）特別史下の（１）　pp.417-566

報告書抄録

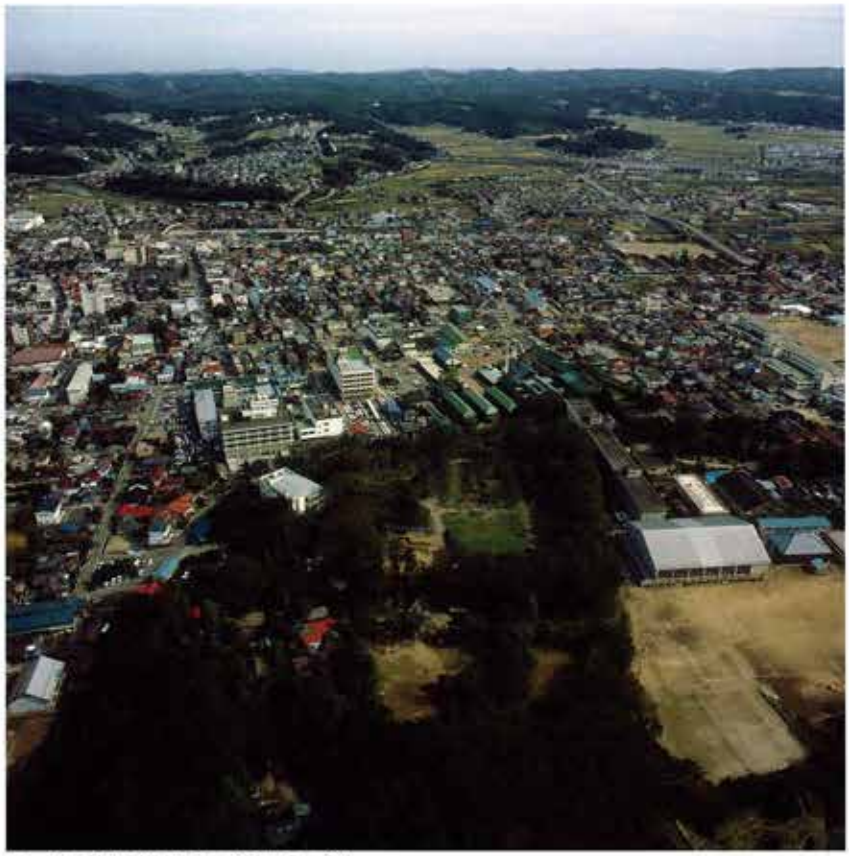
ふりがな	かたくらこじゅうろうのしろ　しろいしじょうあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	片倉小十郎の城　　白石城跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	白石市文化財調査報告書
シリーズ番号	第26集
編著者名	日下和寿、中橋彰吾、上野雄規、横山正弘、亘理梧郎
編集機関	白石市教育委員会
所在地	〒989-0206　宮城県白石市大手町１番１号　TEL：0224(22)1343
発行年月日	西暦1998年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	発掘調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しろいしじょうあと 白石城跡	白石市益岡町	04206	02197	38° 00′ 09″	140° 37′ 2″	19901015～ 19911018、 19920512～ 19931118、 19940518～ 19950109、 19941022～ 19941105	2900.00	城復元工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白石城跡	城館	近世	三階櫓建物跡、石垣、大手門跡、勘定所跡 掘立柱建物跡、礎石建物跡、井戸跡、馬場跡、土塁	近世瓦（軒丸瓦、軒平瓦、軒桟瓦、平瓦、板塀瓦、棟瓦、輪違い、面戸瓦、棟込め瓦、鯱瓦、鬼瓦）、板碑 近世陶磁器（肥前、大堀相馬、小野相馬、岸、瀬戸美濃、唐津、波佐見、青花、堤、末家、成島、京・信楽、地方窯）、中世陶器（東北、一本杉）、洋食器、瓦質土器、土師質土器、土師器、土人形、鉄器（和釘）、銭貨、石盤、模型飛行機、統制陶磁器、焼成塊、土壁	白石城跡本丸の天守閣に相当する三階櫓（大櫓）跡、大手一ノ門跡、大手二ノ門跡、井戸跡２箇所、馬場の城郭の主要部分の発掘調査を行った。近世を主とする陶磁器、瓦類も大量に出土した。また、第二次世界大戦時の防空監視所に関連する模型飛行機、統制陶磁器が発見された。

要約	近世における白石城跡本丸の三階櫓跡、大手門跡、井戸跡、勘定所跡が発掘された。
	仙台藩南部における瓦、陶磁器の発掘例としては最もまとまったものである。
	刈田郡においては発見例が少ない、板碑１基が発見された。
	近代の遺物として、模型飛行機、統制陶磁器が発見された。

写真図版



1　白石城跡航空写真（西上空から）

2　三階櫓跡（南東上空から）

写真図版１　航空写真、三階櫓跡

◀白石城跡
本丸跡航空写真（上空から）

◀大手二ノ門跡
航空写真（上空から）

写真図版２　本丸跡、大手二ノ門跡

◀三階櫓跡
航空写真（上空から）

◀大手一ノ門跡
航空写真（上空から）

写真図版３　大手一ノ門跡、三階櫓跡

1　三階櫓跡（東上空から）

2　階段跡（南から）

3　三階櫓跡（東から）

4　三階櫓跡北側石垣（北から）

5　三階櫓跡北側石垣（北西から）

6　三階櫓跡北側石垣（北西から）

写真図版４　三階櫓跡

1　三階櫓跡西側石垣（西から）

2　三階櫓跡と本丸内井戸跡（南上空から）

3　A−A′土塁断面（北から）

4　B−B′土塁断面（南東から）

5　階段跡（南上空から）

6　本丸内井戸跡（上空から）

写真図版５　三階櫓跡とその周辺

三階櫓跡遺構変遷図

1　第1トレンチ（東から）

2　二ノ門跡西側基礎（南から）

写真図版6　三階櫓跡遺構変遷図、大手二ノ門跡写真

1　本丸跡裏門断面（東から）

2　本丸跡外部東側石垣南側（東から）

3　同の中央（東から）

4　同の北側（北東から）

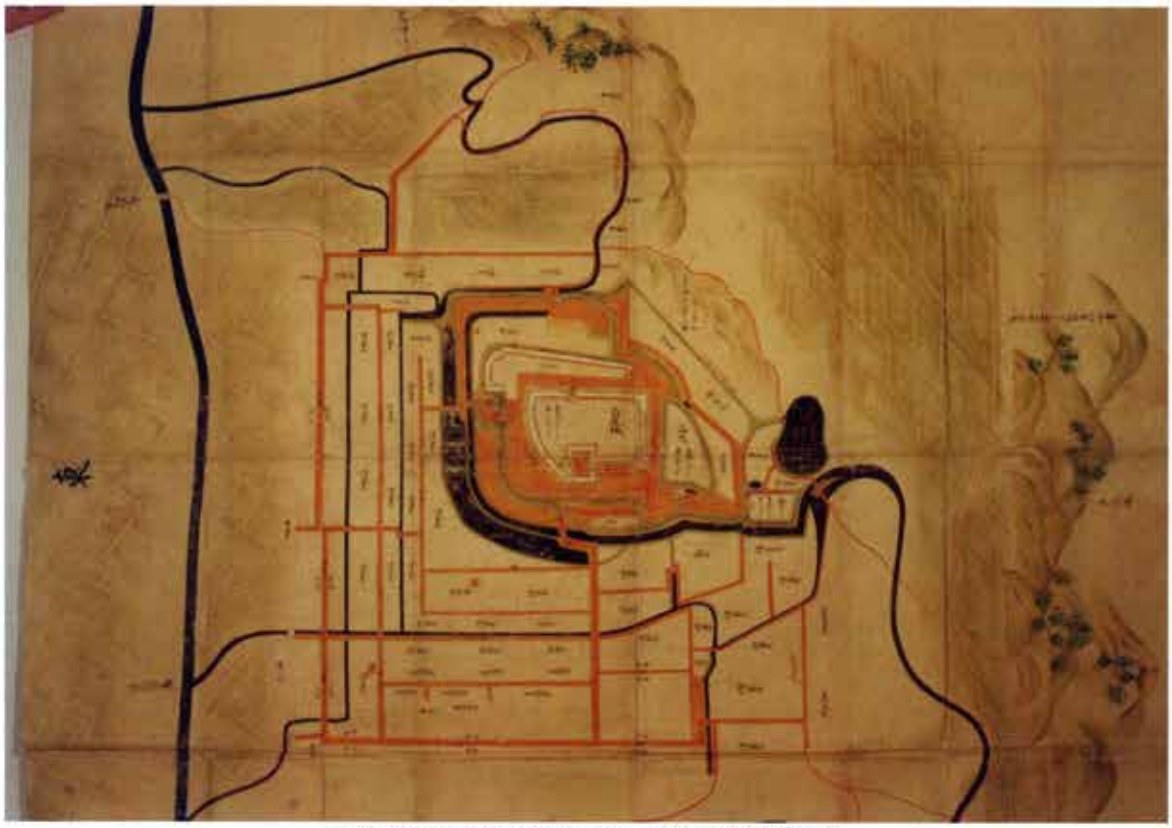
5　未申櫓跡（東から）

6　同（東から）

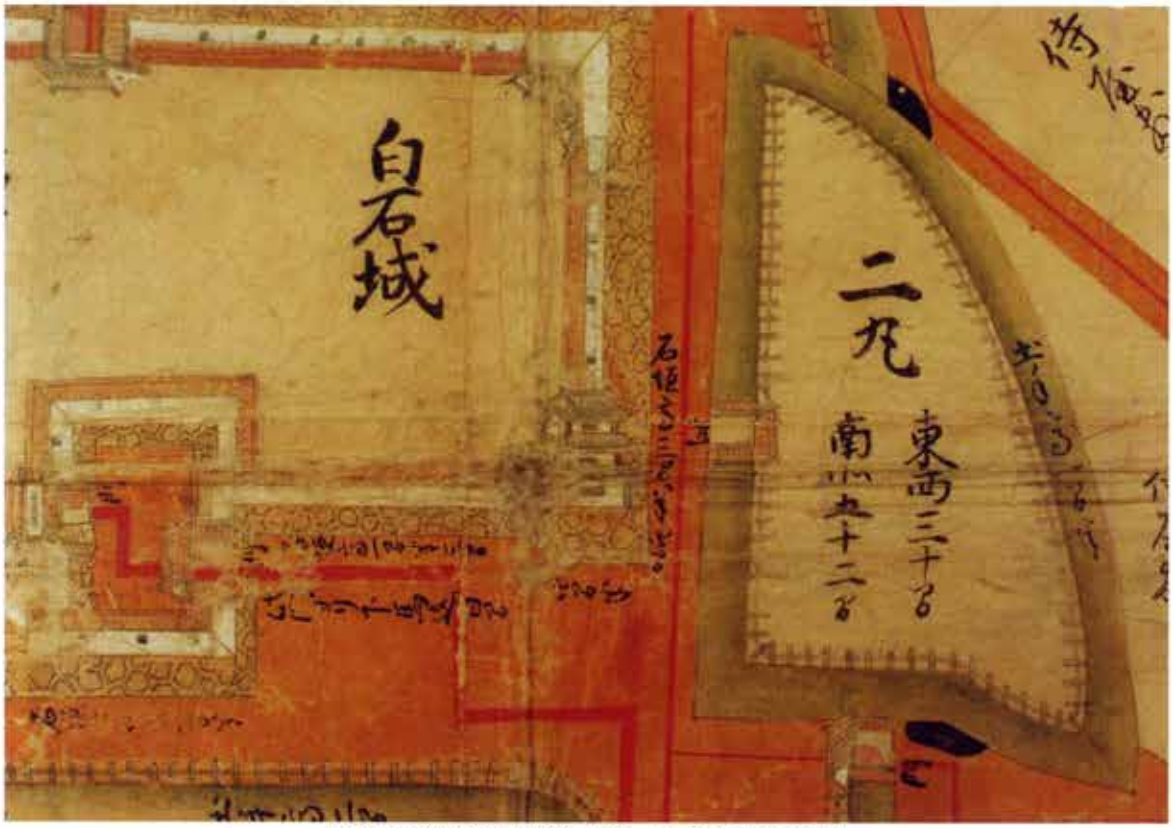
7　同（東から）

8　同（東から）

写真図版７　白石城跡現状写真

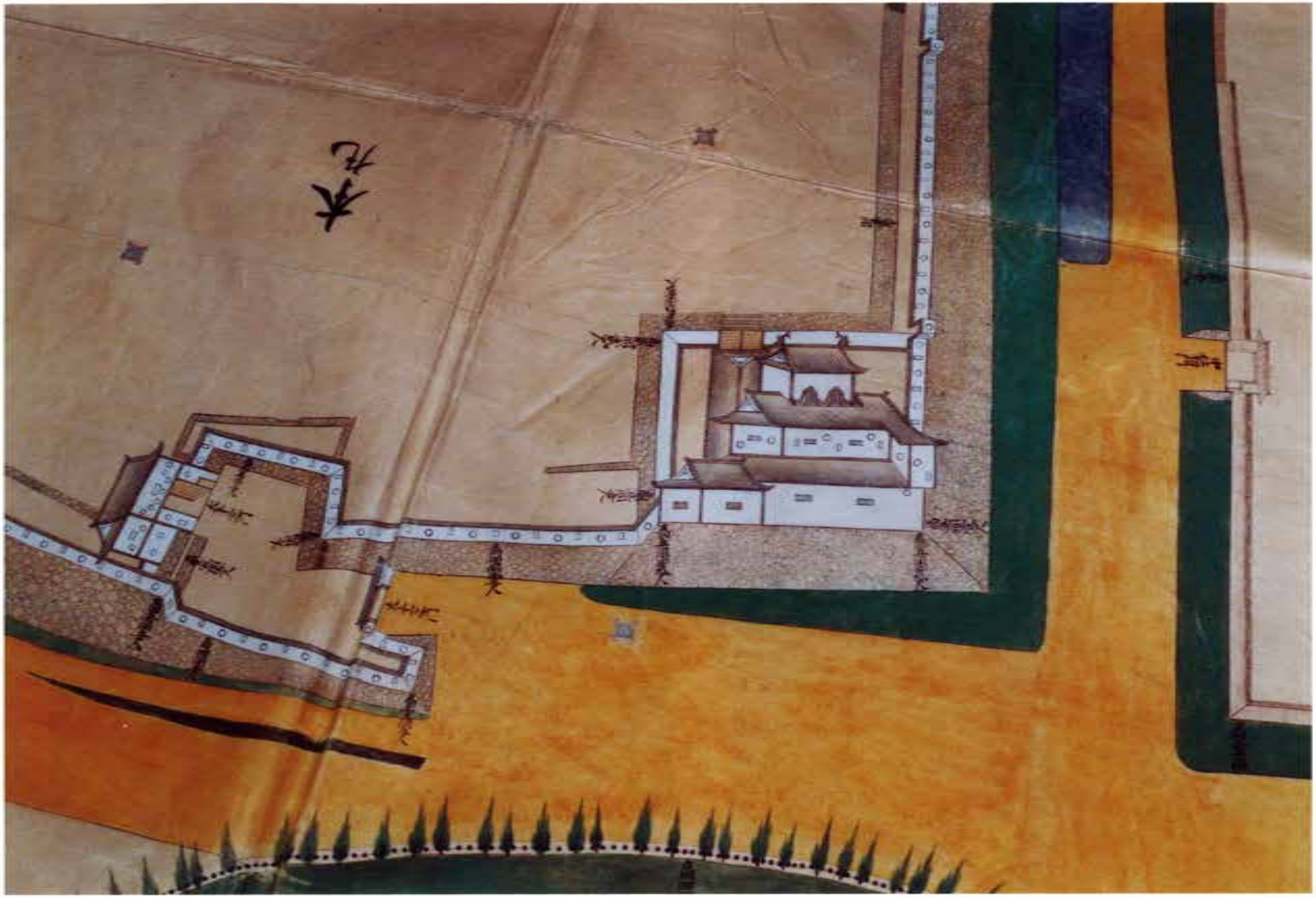


白石城絵図全体（寛政10年　仙台市博物館蔵）



白石城絵図細部（寛政10年　仙台市博物館蔵）

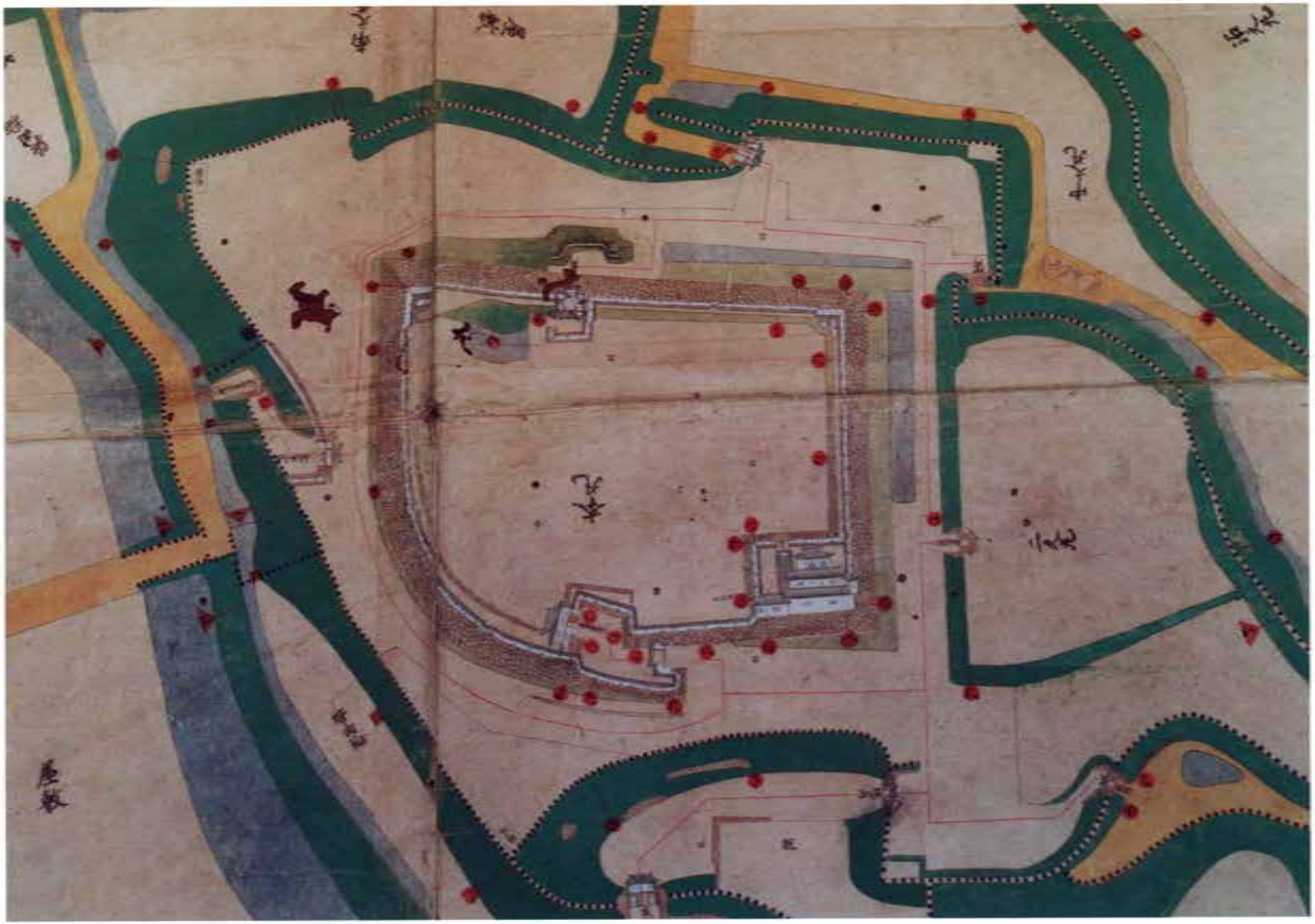
写真図版８　白石城絵図（寛政10年　仙台市博物館蔵）



写真図版９　刈田郡白石城下御絵図（天和３年　宮城県図書館蔵）

写真図版10　白石城絵図（元禄15年　仙台市博物館蔵）

写真図版11　白石城絵図細部（元禄15年　仙台市博物館蔵）



写真図版12　白石城下絵図（年代不明、宮城県図書館蔵）

写真図版13　白石城絵図（斎藤報恩会蔵）

写真図版14　白石城光景之図（小関雲洋筆）

写真図版15　常盤崎別邸絵図（斎藤報恩会蔵）

1　登録番号（101－4、7）、大堀相馬

2　大堀相馬（101－11＋185－3）

3　大堀相馬（101－10、9、20）

4　大堀相馬（210－1、18）

5　大堀相馬（123－1）

6　大堀相馬（101－2）

7　大堀相馬（133－14＋69－2）

8　大堀相馬（201－1、2）

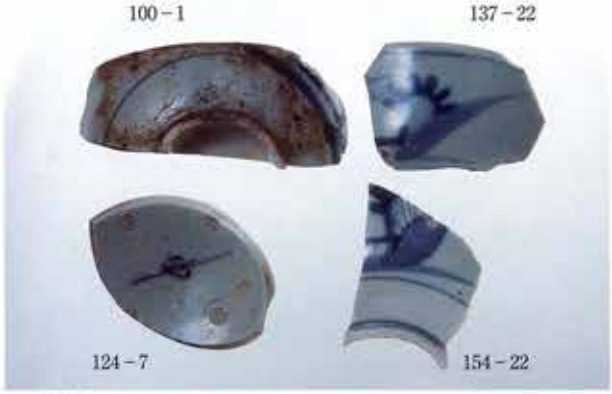
写真図版16　大堀相馬

1　199−1

2　切込（021102C-1）

3　180−14

4　切込



5　切込

6　岸

7　岸窯

8

写真図版17　切込焼、岸、瓦

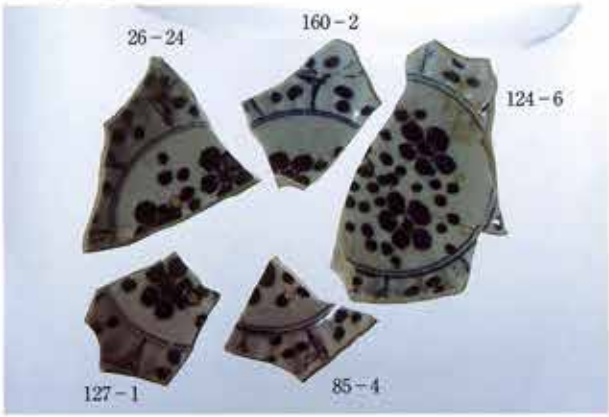
1　波佐見（200－1）

2　肥前（147－10）

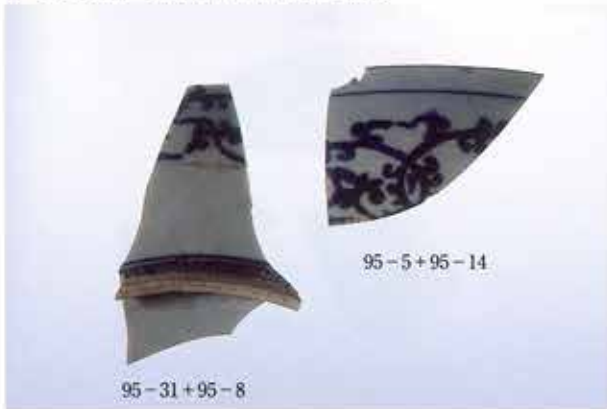
3　185－6

4　187－27

5　瓦質土器（三階櫓下井戸北側立割部）



6　肥前



7　肥前　外面

8　同　内面

写真図版18　肥前

1　大堀相馬（141－12）

2　大堀相馬（185－1）

3　185－2

4　141－11＋183－4＋101－3

5　143－13、5、12

6　大堀相馬

7　大堀相馬

8　大堀相馬

写真図版19　大堀相馬

1　堤（68−1）

2　堤（55−3+172−1）

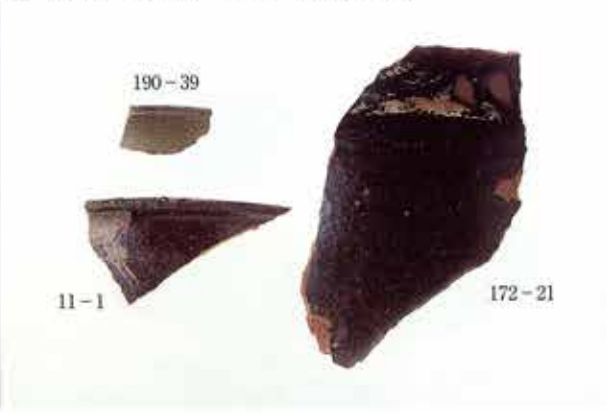
3　末家（21−9、4、10、3）外面

4　末家（21−9、4、10、3）内面

5　地方窯（125−1）

6　末家？（SJXX）、素焼き（北東部下部）

7　末家？



8　末家

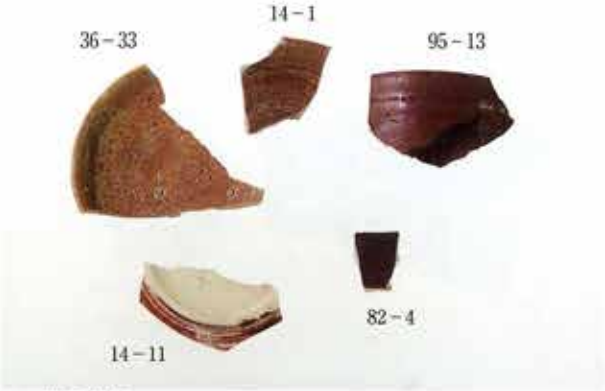
写真図版20　堤、末家

1　181−2

2　119−1、2

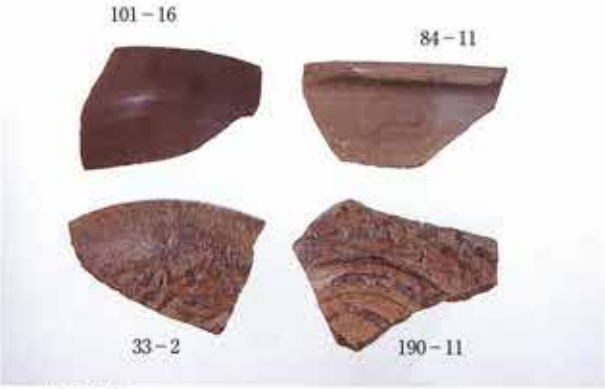
3　19−1

4　産地不明（23−7）



5　瀬戸美濃

6　瀬戸美濃



7　瀬戸美濃

8　軍隊茶碗

写真図版21　産地不明、瀬戸美濃、軍隊茶碗

1　145−5

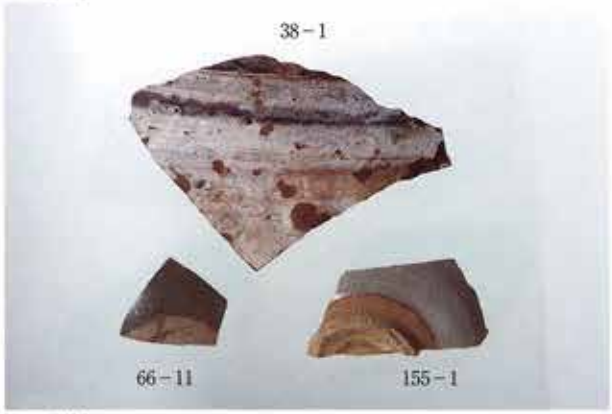
2　小野相馬

3　小野

4　信楽（177−14）、小野相馬（23−3）

5　小野

6　現川（190−64、37）、常滑（備前？）（14−16）



7　唐津

8　天目（美濃55）

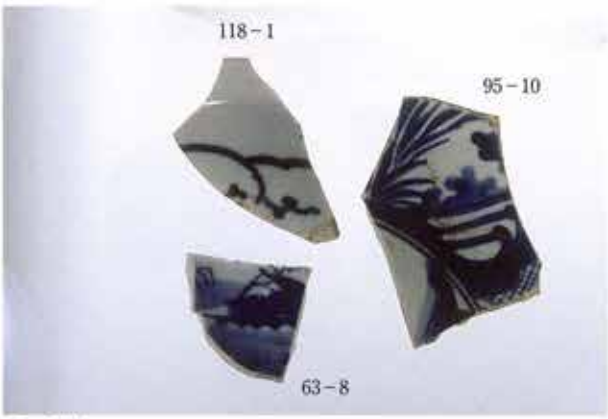
写真図版22　小野相馬、信楽（177−4）、現川ほか（190−64）

1　肥前（小十郎碑北西1－3）

2　肥前（54－2、143－6）

3　肥前（143－16、144－1）

4　肥前（150－2、190－55）



5　肥前

6　肥前

7　肥前

8　肥前

写真図版23　肥前

1　肥前

2　肥前

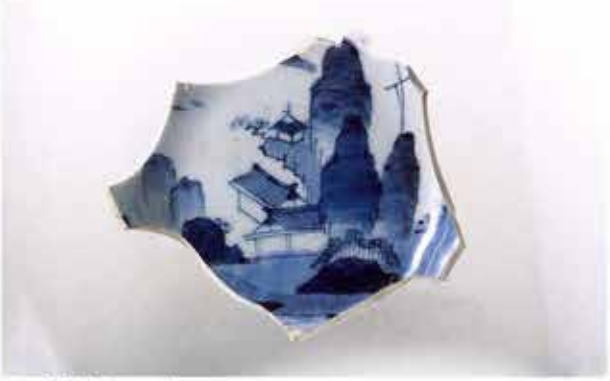
3　肥前

4　肥前

5　不明（210－3）、地方窯（210－16）、肥前（その他）

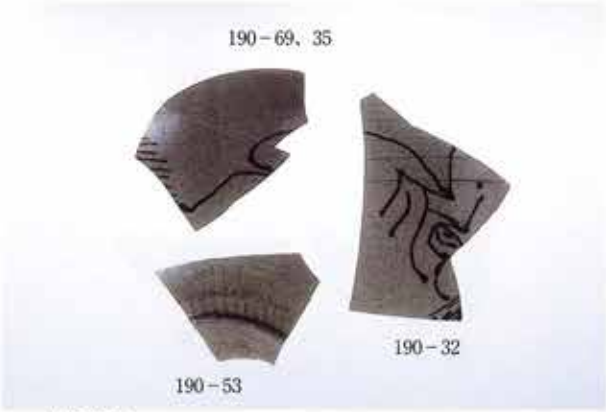
6　肥前（45－3）

7　肥前（185－6）



8　肥前（16－1）

写真図版24　肥前ほか



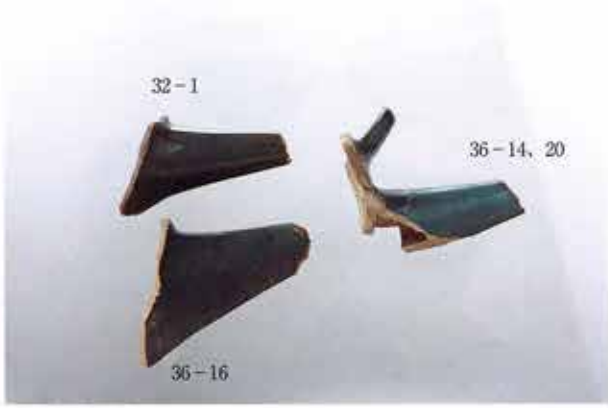
1　大堀相馬

2　大堀相馬

3　大堀相馬

4　大堀相馬

5　大堀相馬（130－1）



6　大堀相馬

7　大堀相馬（105－1）、瀬戸美濃（131－1）

8　肥前（177－10）、大堀相馬（101－1、187－37）

写真図版25　大堀相馬、瀬戸美濃（131－1）、肥前（177－10）

1　大堀相馬

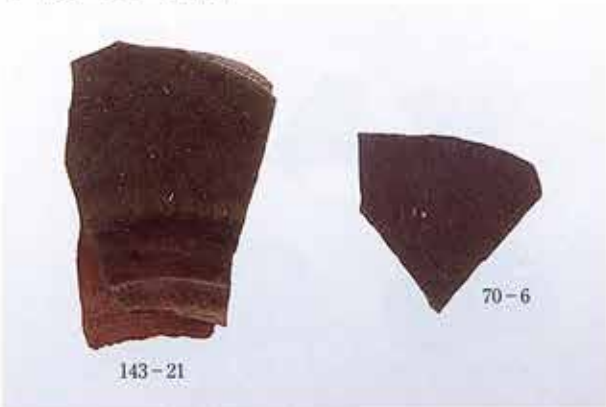
2　肥前（36－24、8）

3　肥前（161－20、21）

4　青花

5　青花（198－1外面）

6　青花（198－1内面）



7　元（143－21）、中国？（70－6）

8　191－1、2

写真図版26　大堀相馬、肥前、青花、元

1　地方窯（161－14、63－6）

2　地方窯

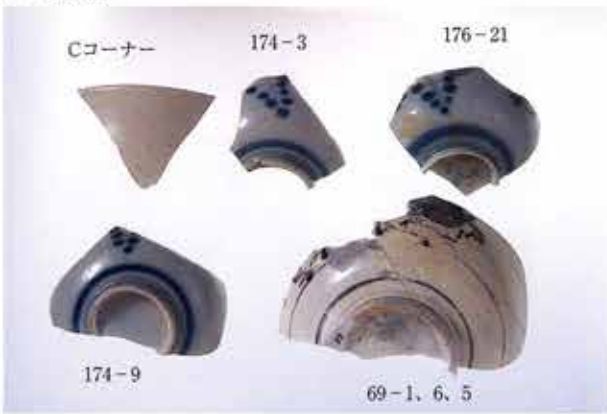
3　地方窯（44－5+121－4）

4　地方窯（187－30）

5　地方窯

6　地方窯

7　地方窯



8　地方窯

写真図版27　地方窯

1　地方窯（49−4+188−80　外面）

2　同　内面

3　地方窯（49−1、2、16　外面）

4　同　内面

5　地方窯（75−1）

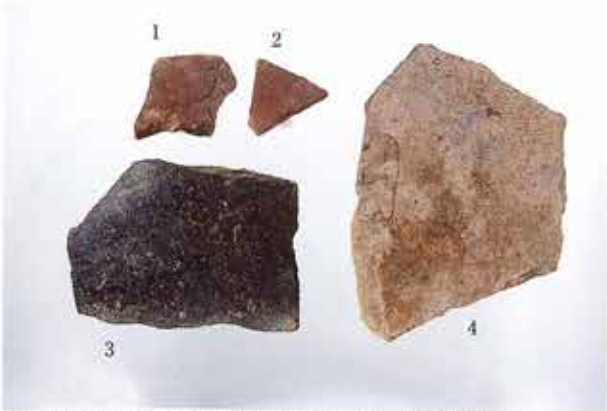
6　産地不明、京・信楽

7　産地不明

8　産地不明

写真図版28　地方窯、産地不明、京・信楽（45−2、95−18）

1　中世陶器（一ノ門跡柱跡確認面）



2　中世陶器（1、2：下部東南トレ、3、4：SJXX）

3　かわらけ（本丸内表採）

4　土師質土器ほか

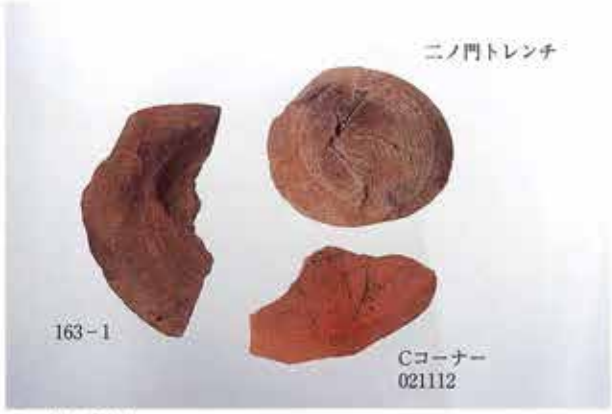
5　かわらけ

6　かわらけほか

7　素焼き

8　かわらけ、瓦質土器

写真図版29　中世陶器ほか



1　かわらけ

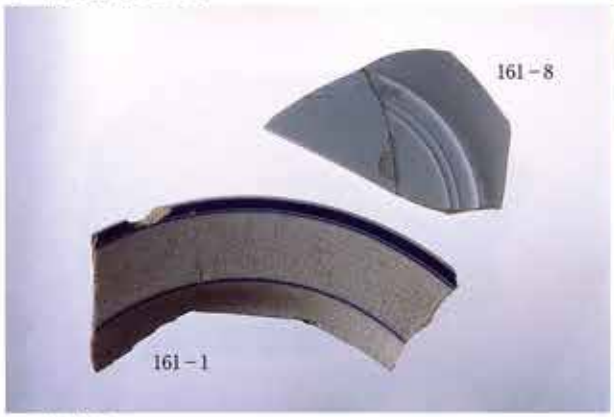
2　かわらけ

3　片倉公三百年紀念坏（36－10）

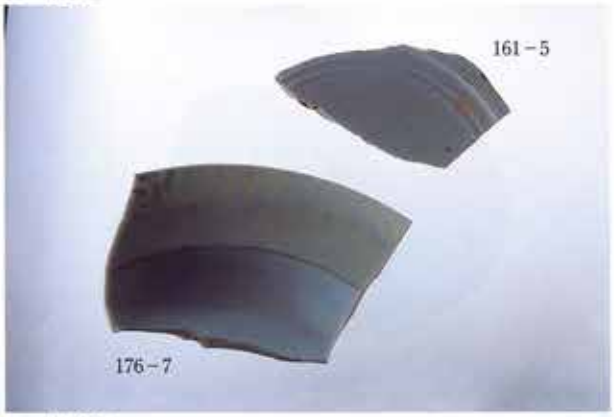
4　洋食器（161－19）

5　洋食器（182－5）

6　洋食器



7　洋食器



8　洋食器

写真図版30　かわらけ、洋食器ほか

1　統制（133−6、40−17）

2　同　底面（岐8/4）

3　統制（189−6）

4　同　底面（岐86）

5　統制（149−36）

6　同　底面（岐911許27237）

7　スサ入り壁土（三階櫓跡南東）

8　焼成粘塊（大手二ノ門脇階段と溝の間、埋土）

写真図版31　統制陶器ほか

1　石版

2　鉄器

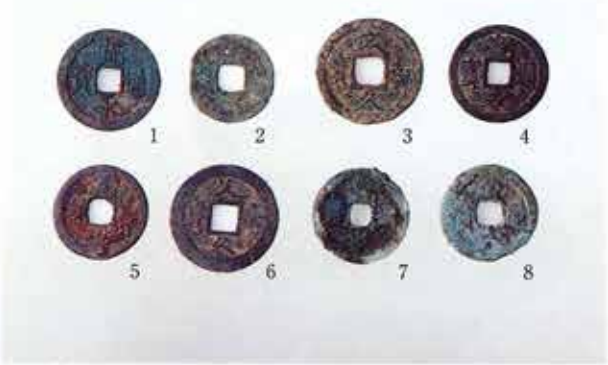
3　青銅器

4　鉄釘

5　鉄釘

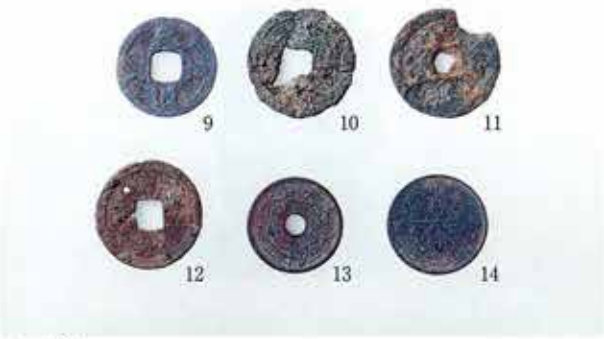
6　人形（26－17）、壁土（192）

7　土人形



8　銭貨

写真図版32　鉄製品ほか



1　銭貨

2　板碑

3　萩の坂窯跡山神講徳利（表）

4　同（裏）

5　おやわら碗

6　鬼瓦（高野家）

7　茶園遺跡出土洋食器

8　茶園遺跡出土摺鉢

写真図版33　出土遺物ほか

1

2

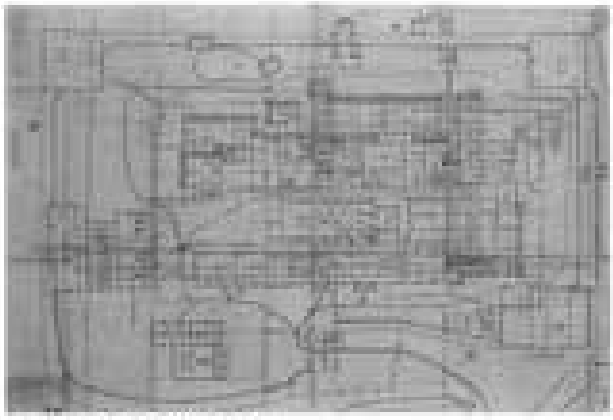
写真図版34　発見された飛行機模型

◀白石城下家中屋敷図（森家蔵）

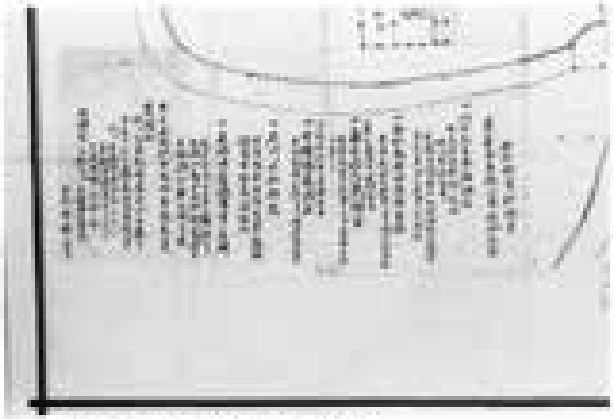
▲「関番有来」白石城住居之覚（白石図書館蔵）

▲同　本文

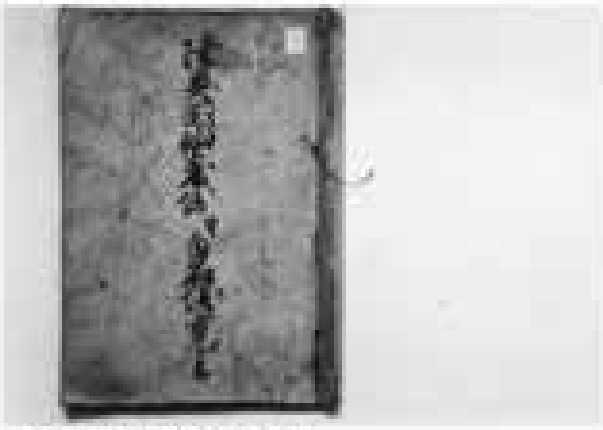
写真図版35　白石城絵図、白石城住居之覚



1　白石城略記（安政3年）



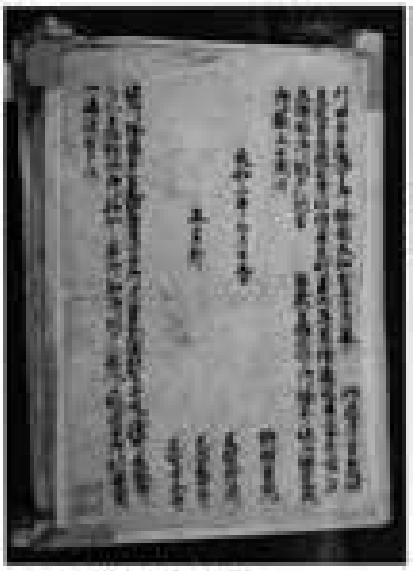
2　同絵図中の記載（仙台市博物館蔵）



3　御表図仙台城付白石城覚書

4　同本文

5　天和3年奥州仙台領白石城並城下絵図　覚書



6　同　（仙台市博物館蔵）

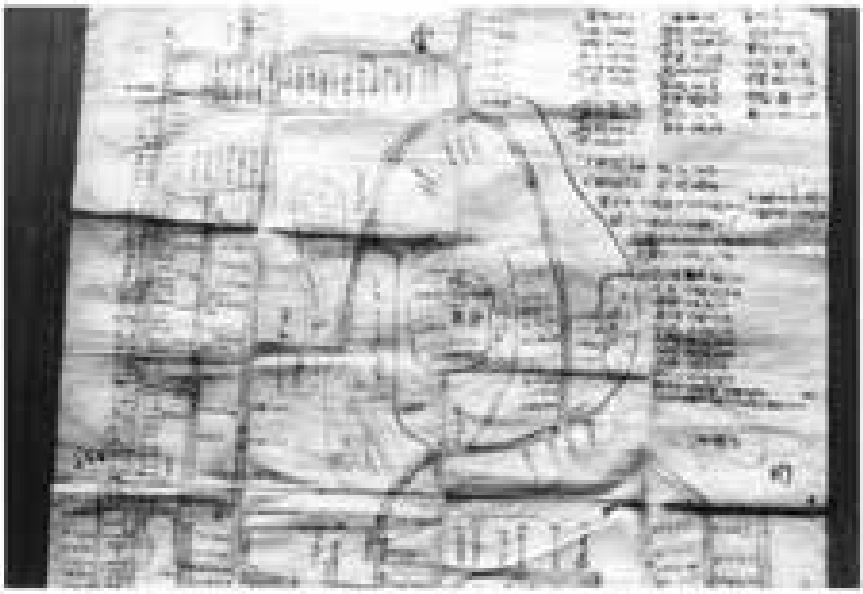
7　天和3年白石城絵図覚書
（宮城県図書館蔵）

写真図版36　白石城略記、覚書、天和3年絵図　覚書

▲鳥瞰

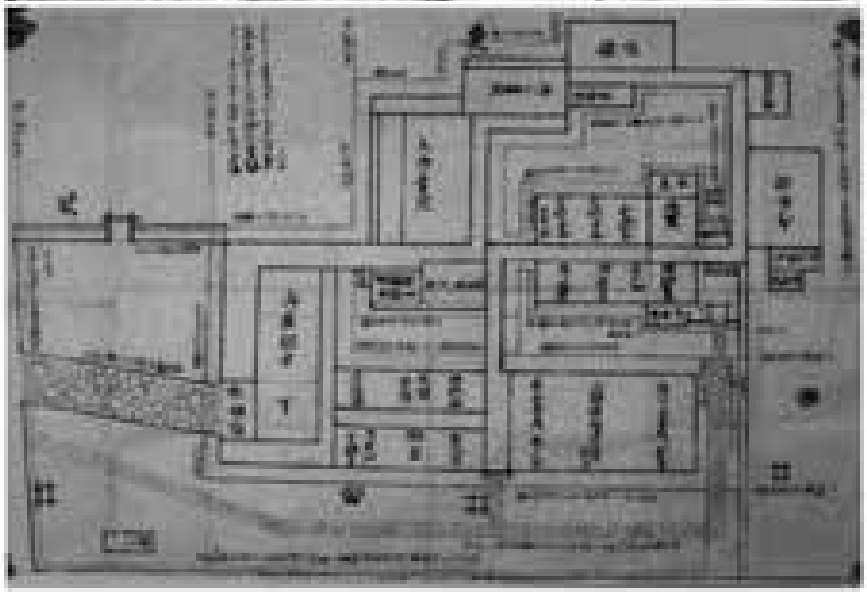
◀白石城之図（仙台市博物館蔵）

写真図版37　白石城絵図



◀白石城下絵図（白石市図書館蔵）

◀同絵図の記載



◀片倉家仙台屋敷絵図（個人蔵）

写真図版38　白石城絵図と片倉家仙台屋敷絵図

1　全景（南から）

2　東側側面（東から）

3　全景，戸を開けた状態（南から）

4　北側側面（北から）

5　南東隅軒下の状況

6　解体作業（東から）

7　間（北東から）

8　間（東から）

写真図版39　茶室

1　昭和59年頃の本丸跡状況（東から）市教委写真より

2　大手一ノ門跡東側の状況

3　北側井戸跡周辺（北東から）

4　石碑、説明板（北東から）

5　説明板（北から）

6　説明板（北から）

7　高田御殿（北から）

8　今泉先生碑（東から）

写真図版40　発掘調査以前の状況（1）

1　大手二ノ門跡（北西から）

2　枡形部南面（北から）

3　東側大手二ノ門跡礎石（北西から）

4　西側大手二ノ門跡礎石（南東から）

5　復元概要看板（東から）

6　三階櫓跡（南から）

7　本丸跡文化財説明板（水濠跡）

8　同（東側）

写真図版41　発掘調査以前の状況（2）

1　三階櫓跡南西隅にあった通路（西から）

2　三階櫓跡東側土塁（東から）

3　三階櫓跡（南から）

4　三階櫓跡（南西から）

5　三階櫓跡北半の表土剥ぎ（東から）

6　同（南から）

7　松笠乙二句碑

8　大手二ノ門礎石跡（伐採後、西から）

写真図版42　発掘調査以前の状況（3）と発掘風景

1　93 アカマツ、92 アカマツ

2　33 ソメイヨシノ、34・35 ヒノキ、36 クルミ

3　14・15 ケヤキ、16・17 ヒノキ、18 コナラ、19 ソメイヨシノ、20 ヒノキ、21 ソメイヨシノ

4　57 シダレザクラ、59 ソメイヨシノ、60 エドヒガン、66 ソメイヨシノ、67 エドヒガン、68 ヒノキ、63 ソメイヨシノ、64 ハナカイドウ

5　45 エノキ、43 ケヤキ、75 ミズキ、78 オオモミジ、96 ソメイヨシノ、77 アオナラガシワ、81 ソメイヨシノ

6　53 ソメイヨシノ、52 スギ、33 ソメイヨシノ、34・35 ヒノキ

7　22 ミズキ、1 ソメイヨシノ、2・3 イロハモミジ、5 ケヤキ

8　45 エノキ、45・47・48 ケヤキ、74 ミズキ

写真図版43　本丸跡地植物調査（1）

1　77 アオナラガシワ、76 オオモミジ

2　45 エノキ、44 ソメイヨシノ、43 ケヤキ

3　53 ソメイヨシノ、56 ネズミモチ、55 ソメイヨシノ

4　41 オオモミジ、40 アカマツ、42 イロハモミジ

5　47・48 ケヤキ

6　25 ソメイヨシノ、24 クロマツ

7　81 ソメイヨシノ、77 アオナラガシワ、75 ミズキ、76 オオモミジ

写真図版44　本丸跡植物調査（2）

1　91 シダレザクラ

2　47・48 ケヤキ、74 ミズキ

3　79・80 エノキ

4　75 ミズキ、77 アオナラガシワ、81 ソメイヨシノ

5　85 ソメイヨシノ

6　4・13・5・7 ケヤキ、8 ウワミズザクラ、9 モミ

写真図版45　本丸跡地植物調査（3）

1　47・48 ケヤキ

2　54 ウメ、55 ソメイヨシノ、56 ネズミモチ

3　2・3 イロハモミジ

4　75 ミズキ、76 オオモミジ

5　47 ケヤキ

6　43 ケヤキ、44 ソメイヨシノ

写真図版46　本丸跡植物調査（4）

1　47 ケヤキ

2　23 ソメイヨシノ

3　27 ソメイヨシノ

4　95 ソメイヨシノ

5　9 モミ、11 ソメイヨシノ

6　11 ソメイヨシノ、9 モミ

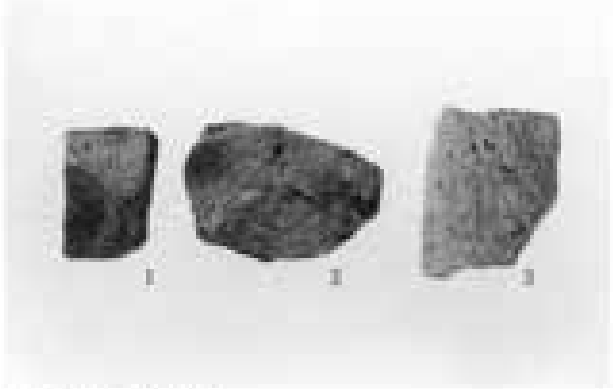
写真図版47　本丸跡地植物調査（5）

1　銚子ヶ盛古墳全景（西から）

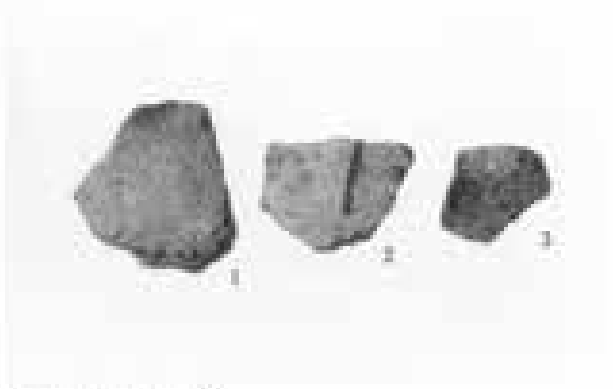
2　同　トレンチ全景（西から）

3　同　A—A′断面（南から）

4　同　第1トレンチ



5　同　出土遺物（1）



6　同　出土遺物（2）

7　城内屋敷遺跡出土埴輪蓋（外面）

8　同　（内面）

写真図版48　銚子ヶ盛古墳ほか

1　茶園遺跡遠景（北から）

2　トレンチ全景（南から）

3　Vトレンチの土坑

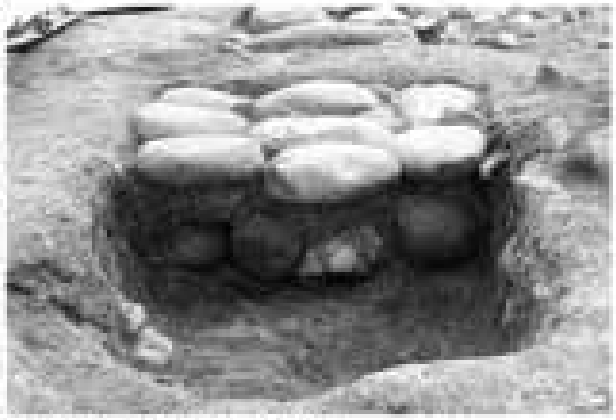
4　茶畑跡石垣（北から）

5　西南輪田状（東から）　所倉1965より

6　沼ノ丸田状（西から）　所倉1965より

写真図版49　茶園遺跡ほか

1　頂部北東部土層セクション（西から）

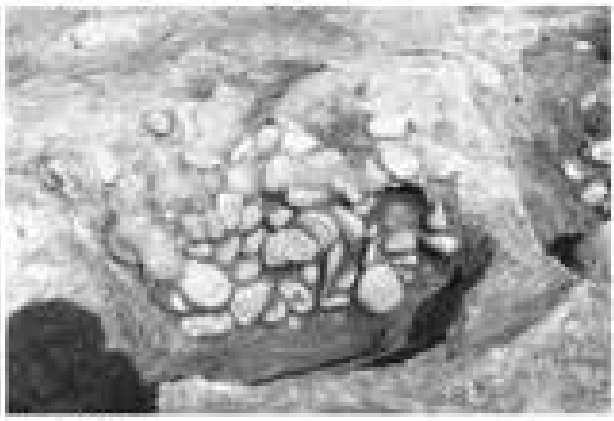


2　G～G′（3期）断面（北から）

3　O～O′（2期）断面（西から）

4　R～R′（1期）断面（北から）

5　断面（建物復元予想）



6　S～S′断面

7　頂部南西部（東から）

8　頂部東側中央断面（南から）

写真図版50　三期検討の建物跡

1　頂部南西区礫石（北から）

2　頂部中央南区礫石（北から）

3　頂部南東区礫石（北から）

4　三階櫓跡東側階段跡（東から）

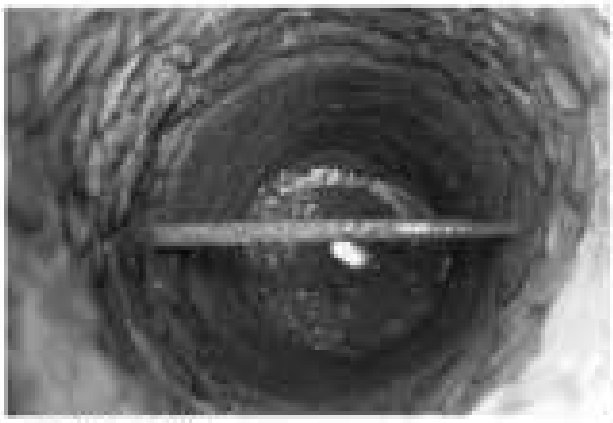
5　三階櫓跡東南の南面石垣（南東から）

6　本丸内井戸跡（南西から）

7　井戸跡側部（南から）

8　井戸脇の敷石跡（北から）

写真図版51　三階櫓跡、本丸内井戸跡



1　金丸内井戸の内部

2　三階橋跡東側隅石垣（南から）

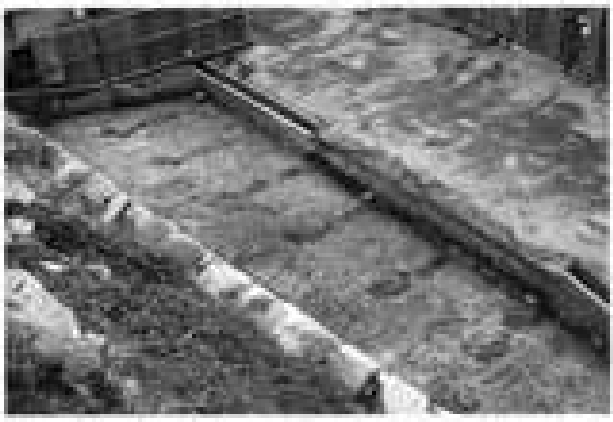
3　三階橋跡南側隅石垣（南東から）

4　南5～6断面（東から）

5　三階橋跡南東隅（東から）

6　三階橋跡西側石垣（北から）

7　三階橋跡北側石垣番付状況（北西から）

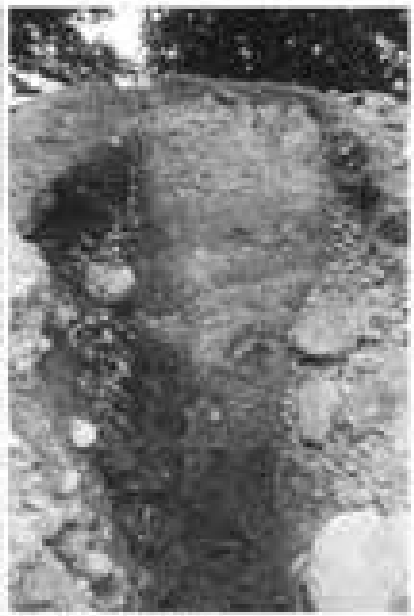


8　南端跡（北東から）

写真図版52　三階橋跡石垣ほか

1　西3－4断面（南から）

2　東3－4断面（東から）



3　西3－4（南から）

4　石列東端（南から）

5　大手二ノ門跡裏の石列屈曲箇所（南から）

6　石列西端（東から）

7　石列東端（東から）

写真図版53　三期堆跡、石列周辺

1　石列西端（南東から）

2　石列東端（西から）

3　F−F′付近（南から）

4　石列調査風景（西から）

5　G−G′セクション（東から）

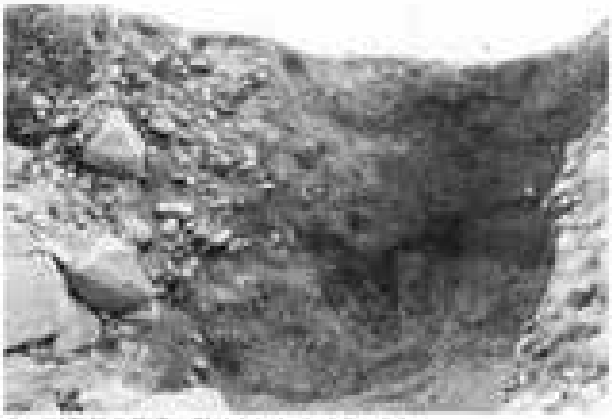
6　H−H′セクション（東から）

7　I−I′セクション（東から）

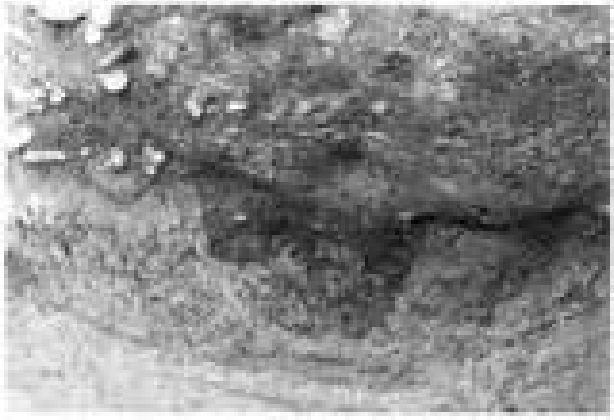
8　石列に接続する例別図東角（東から）

写真図版54　石列周辺

1　石列に接続する柄形部東角部（東から）

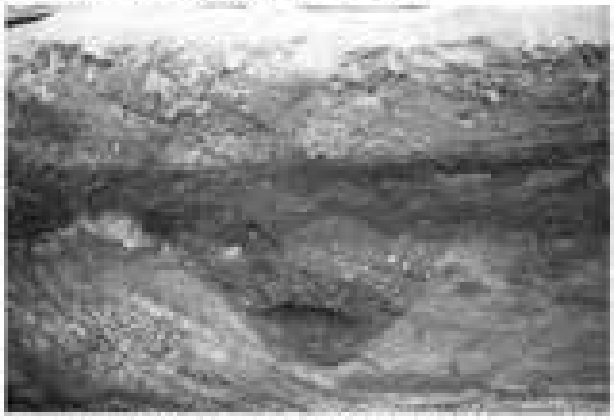


2　柄形部土層断ち割りトレンチ（東から）



3　トレンチ南壁に見えるピット（北から）

4　同トレンチ北壁（南から）



5　土層B−B′セクションに見えるピット（東から）

6　B−B′トレンチ（北から）

7　柄形部の石列（東から）

8　柄形部の石列検出部（東から）

写真図版55　石列、柄形部

1　石列部北側の柄形部石垣（北から）

2　同　石垣（東から）

3　柄形部南側（北から）

4　大手二ノ門跡全景（北西から）

5　同　北西隅部（北西から）

6　大手二ノ門跡の南西石垣（西から）

7　大手二ノ門跡裏の階段跡（南東から）

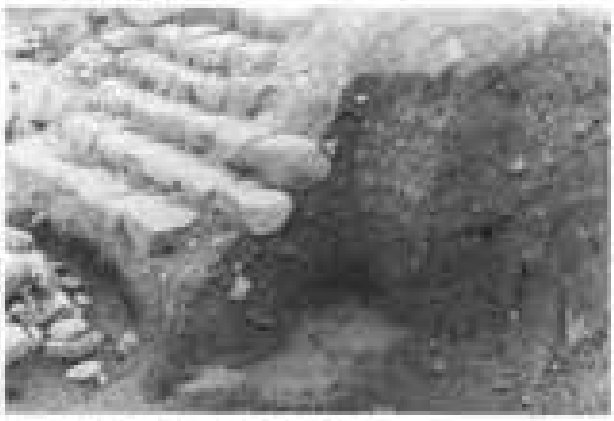
8　同　裏部（南東から）

写真図版56　柄形部、大手二ノ門跡

1　階段上の瓦片出土状況（南東から）

2　階段部の敷石遺存セクション（北から）

3　階段前石敷（北上方から）



4　階段南部セクション（南東から）

5　階段部のピット等（北東から）

6　階段部のピット等（北西から）

7　大手二ノ門跡発掘状況（西から）

8　K～K′大手二ノ門跡断面図（北から）

写真図版57　大手二ノ門跡

1　土塁部J－J′北端部盛（西から）

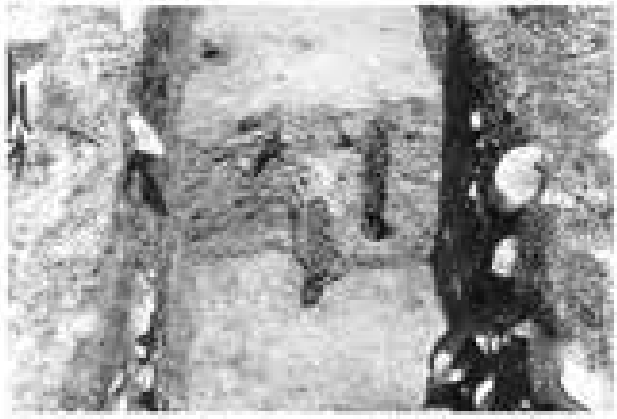
2　同　南端部盛（西から）

3　大手二ノ門跡D－D′断面（南西から）

4　同　東側断面（南西から）

5　同（南西から）

6　同（南西から）



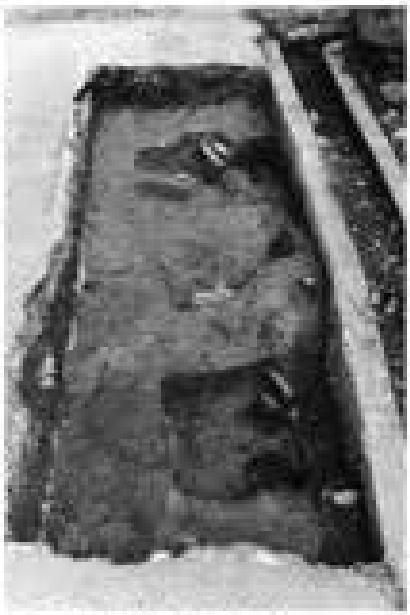
7　大手二ノ門跡南端トレンチ内の柱穴状遺構（南西から）

8　大手二ノ門跡南端トレンチ全景（南西から）

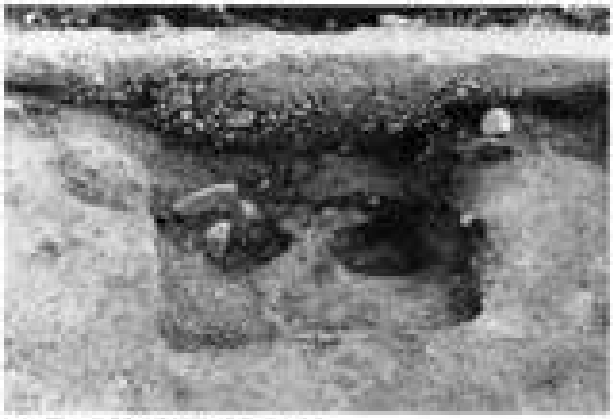
写真図版58　土塁部、大手二ノ門跡

1　柵列部C－C′断面（北西から）

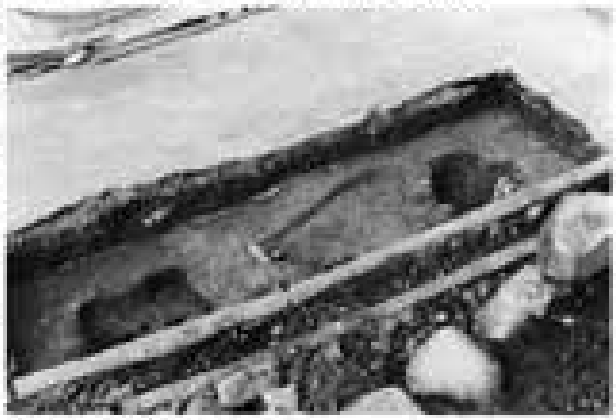
2　大手二ノ門跡西側基礎跡（北西から）



3　同　発掘状況（北西から）



4　同　北側の基礎跡（北東から）



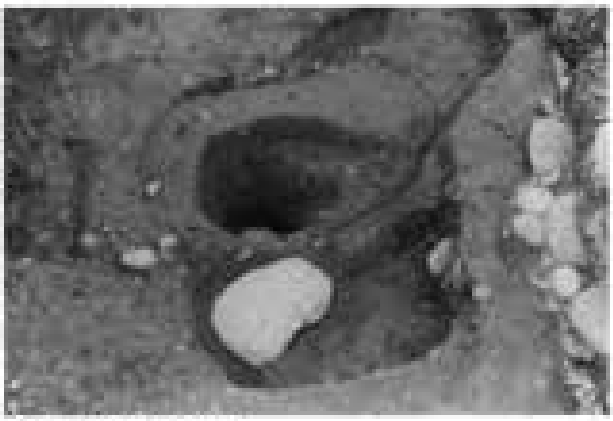
5　同　（西から）

6　大手一ノ門跡北東側工事状況（北から）

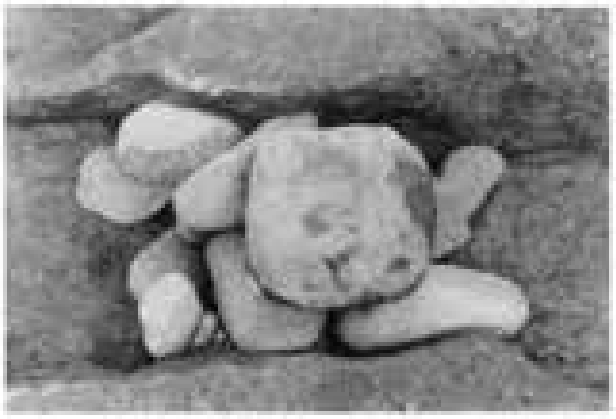
7　大手一ノ門跡（北から）

写真図版59　大手二ノ門跡、一ノ門跡等

1　大手一ノ門跡　柱穴1（1）遠景（北西から）



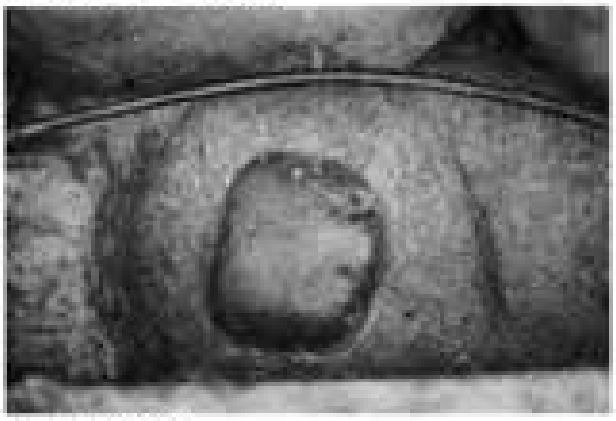
2　同　細部（北西から）



3　同　溝内積み石（北西から）

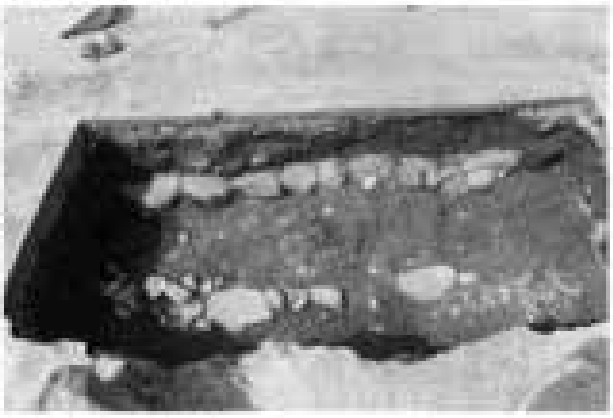
4　溝B－A断面（西から）

5　同　柱穴2（1）（北から）



6　同　柱穴2（4）

7　同　石垣西側発掘状況（西から）



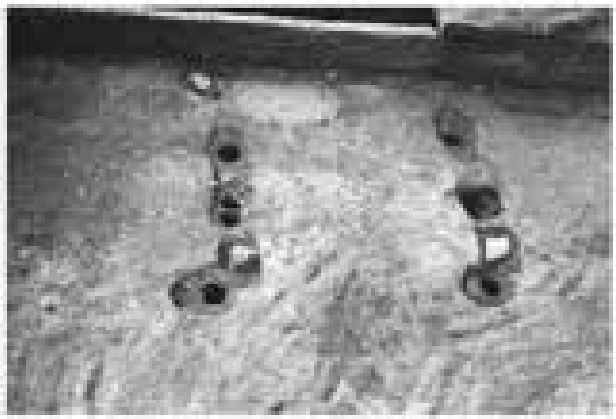
8　同　細部（西から）

写真図版60　大手一ノ門跡

1　三階幅跡南側、土塁東面石垣（南東から）

2　本丸跡北辺石垣の東面（東から）

3　大手一ノ門と二ノ門跡間の石垣（南から）

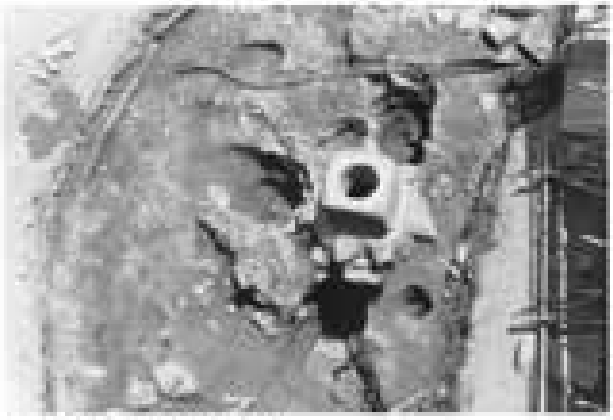


4　馬場跡（北東から）

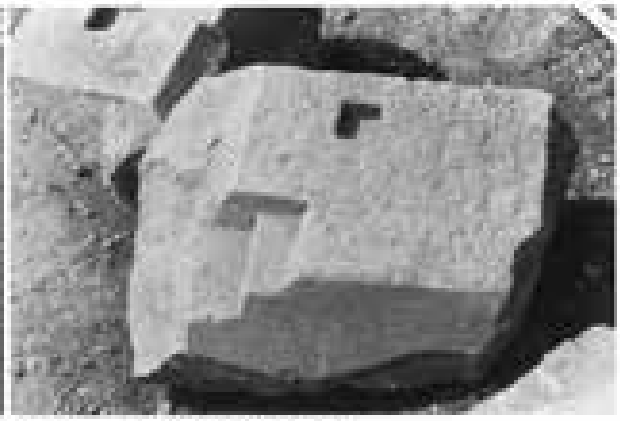
5　石列周辺発掘状況（西から）

6　番号が付けられた石（イ133）

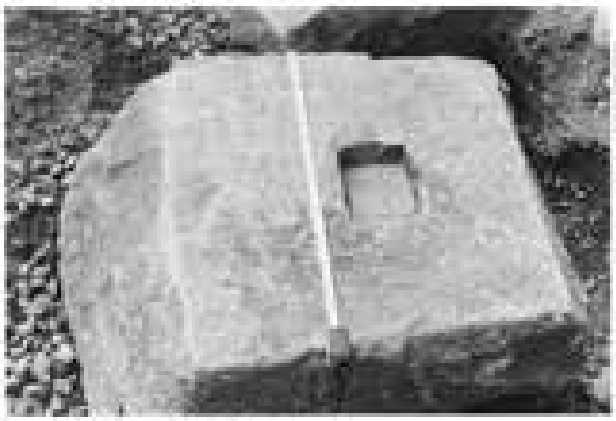
写真図版61　調査写真



1　本丸北側井戸跡（西から）



2　大手二ノ門跡にあった礎石（1）



3　大手二ノ門跡にあった礎石（2）

4　本丸北辺工事状況（東から）

5　本丸北辺北側石垣工事状況（東から）

6　同（北東から）

7　同（北東から）

8　本丸北側井戸、大手一ノ門工事状況（北西から）

写真図版62　北側井戸跡、工事状況

1　桝形部～大手二ノ門跡工事状況（東から）

2　大手二ノ門跡の礎石（南東から）

3　大手二ノ門跡北側工事状況（南西から）

4　大手二ノ門跡Q－Q'付近工事状況（北から）

5　大手一ノ門跡工事状況（北から）

6　大手一ノ門跡北東側工事状況（北から）

7　三階櫓跡西側石垣工事状況（北から）

8　同　（北西から）

写真図版63　復元工事状況

1　三脚櫓跡西側石垣工事状況（北東から）

2　大手門跡現地説明会（南東から）

3　櫓脚部付近　抜きれた石塁

4　白石城復元記念石垣づくり（1）

5　同（2）

6　定礎式（1）（南から）

7　同（2）（北から）

8　同祝賀会

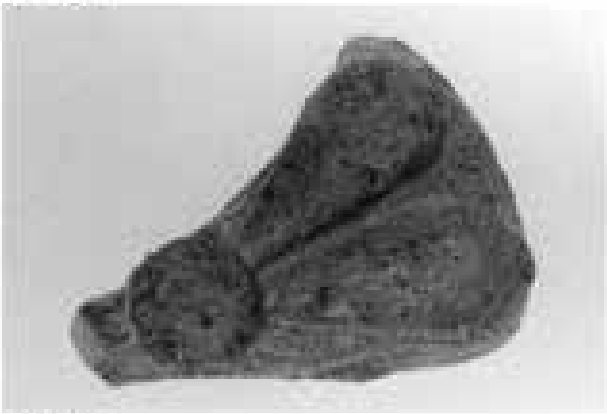
写真図版64　工事状況、関連行事

1　軒丸瓦　瓦当面

2　同　側面

3　軒丸瓦

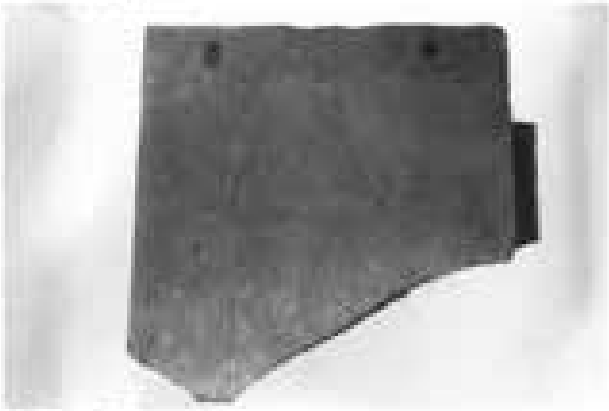
4　軒丸瓦



5　軒丸瓦

6　軒平瓦　瓦当面

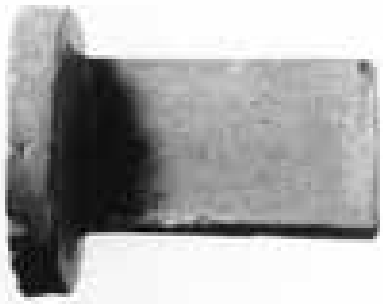
7　軒平瓦　外面



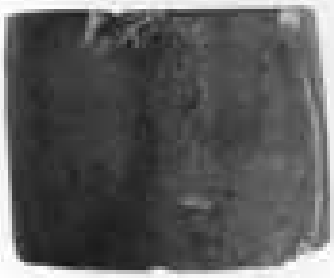
8　同　内面

写真図版65　三殿幡跡出土瓦（1）

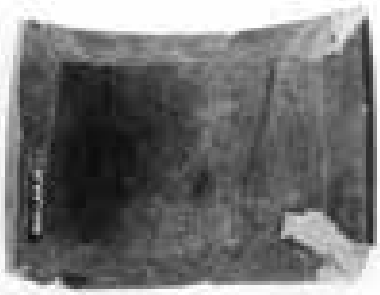
1　棟込瓦　文様面



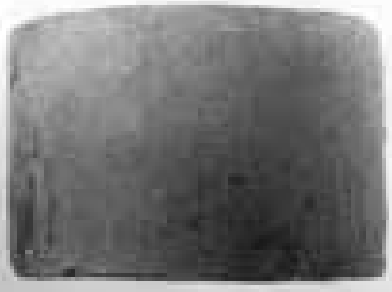
2　棟込瓦　側面



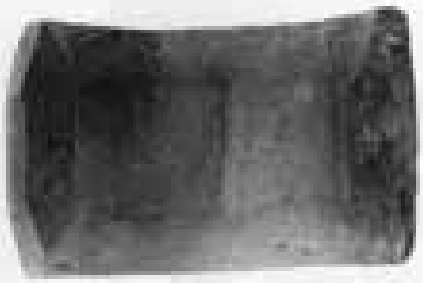
3　面戸瓦　外面



4　面戸瓦　内面



5　面戸瓦　外面



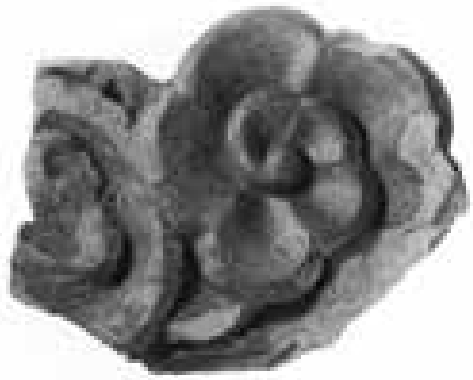
6　面戸瓦　内面

7　谷丸瓦　外面

8　谷丸瓦　内面

写真図版66　三脇惣跡出土瓦（2）

1　刻込瓦　瓦当部



2　軒瓦

1（SJXX）　2（修了西側 暗渠排水溝）

3

4　軒瓦

5　軒瓦

6　軒瓦

7　軒瓦

8　模型飛行機1

写真図版67　三期橋跡ほか出土遺物

1　模型飛行機2

2　模型飛行機3

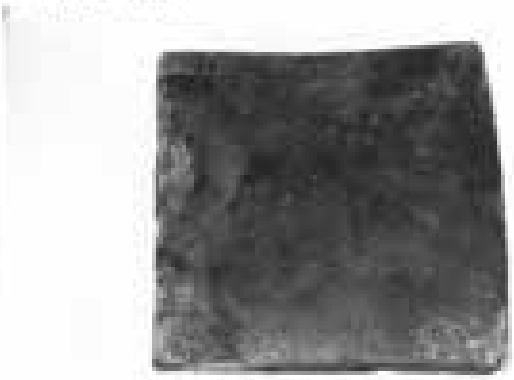
3　模型飛行機4

4　模型飛行機5

5　模型飛行機6

6　軒丸瓦　瓦当面

7　桟瓦



8　平瓦

写真図版68　三陵橋跡周辺、土塁部出土遺物

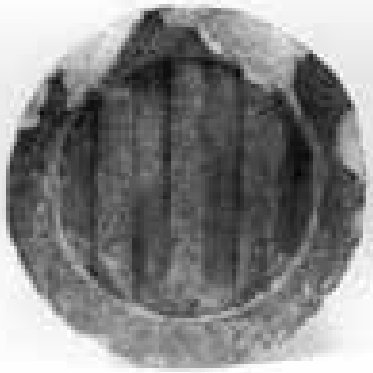
1　軒丸瓦　瓦当面（本丸内井戸跡）

2　隅切瓦

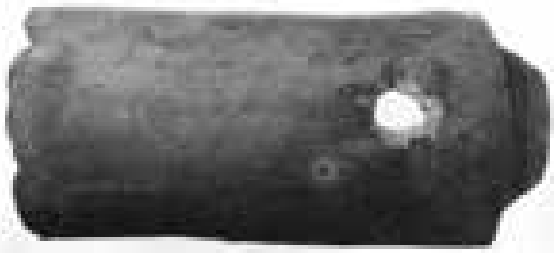
1（土器土師器）　2（須恵器）

3

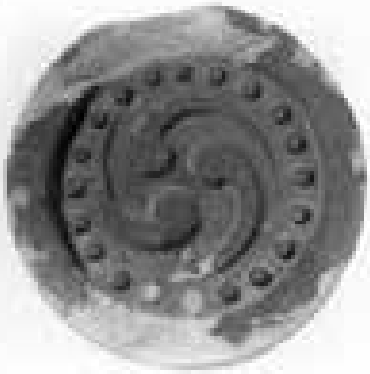
4　軒丸瓦　瓦当面



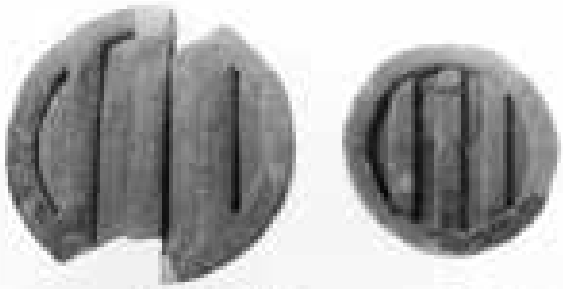
5　軒丸瓦　瓦当面



6　軒丸瓦　内面



7　軒丸瓦　瓦当面

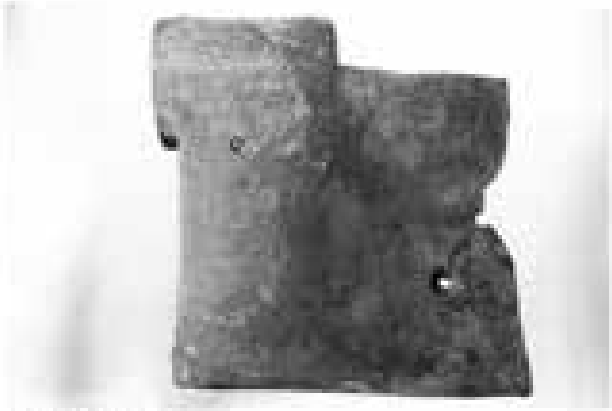


1　軒丸瓦　瓦当面　2　隅切瓦

8

写真図版69　土塁部周辺、大手門跡出土瓦

1　軒桟瓦　文様面



2　軒桟瓦　内面

3　輪違い　外面

4　同　内面

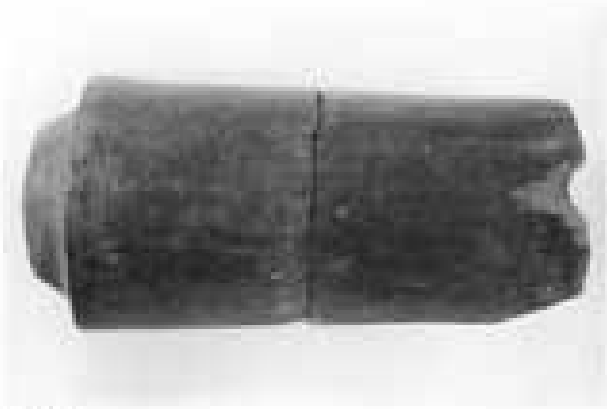
5　輪違い　外面

6　同　内面

7　輪違い　外面

8　同内面

写真図版70　大手門跡出土瓦（1）



1 丸瓦

2 丸瓦

3 軒瓦 正面

4 軒瓦 側面

5

6

7 軒瓦、丸瓦

8 丸瓦（文字瓦）

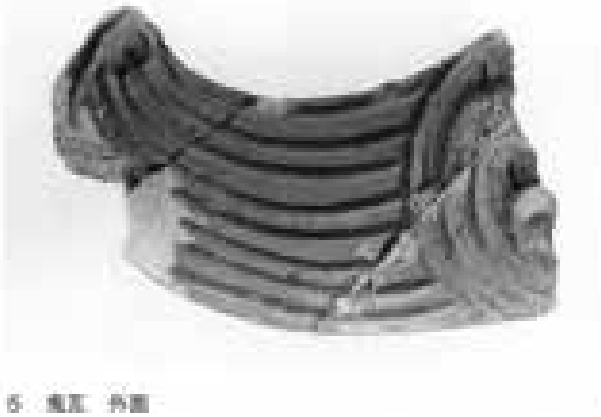
写真図版71　大手門跡出土瓦（2）

1　鬼瓦

2　鬼瓦

3　鬼瓦

4　鬼瓦



5　鬼瓦　内面

6　鬼瓦　内面

7　乗焼き製品内面

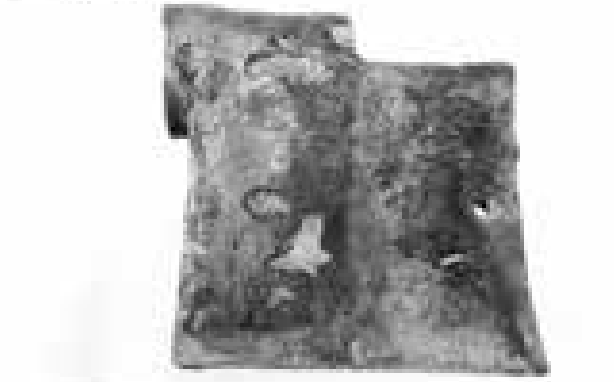
8　乗焼き製品内面

写真図版72　大手門跡出土遺物

1 軒丸瓦 瓦当面

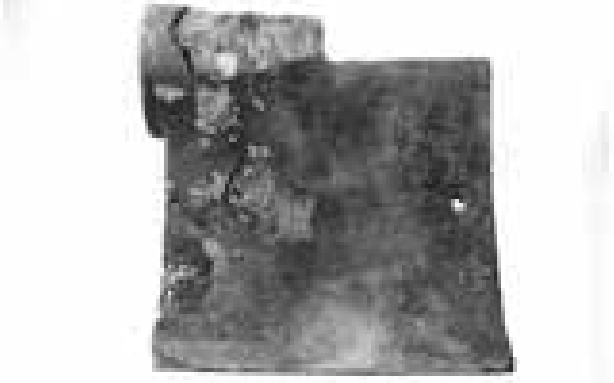
2 軒丸瓦 側面

3 軒桟瓦 瓦当面



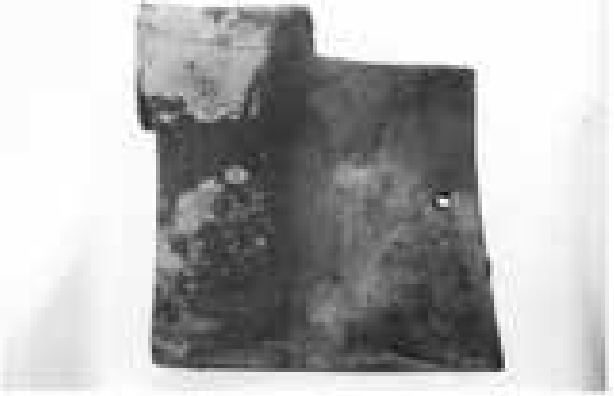
4 軒桟瓦 外面

5 軒桟瓦 瓦当面



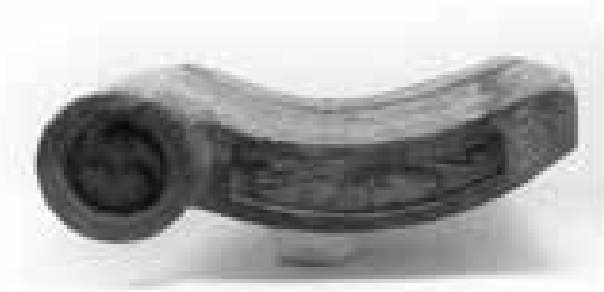
6 軒桟瓦 外面

7 軒桟瓦 瓦当面



8 軒桟瓦 外面

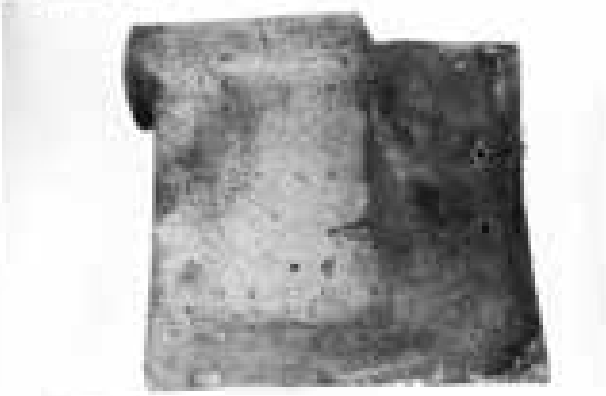
写真図版73 清横外出土瓦（1）



1　軒桟瓦　瓦当面

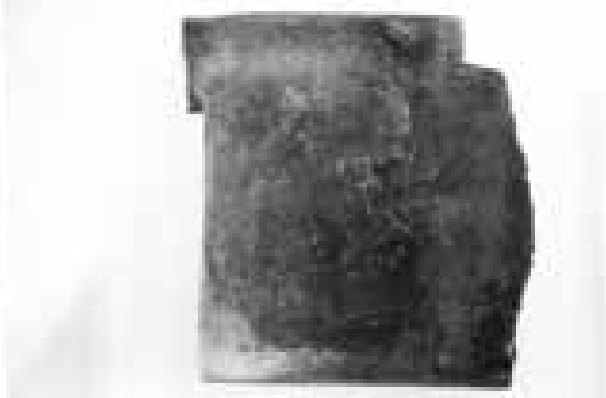
2　軒桟瓦　外面

3　軒桟瓦　瓦当面

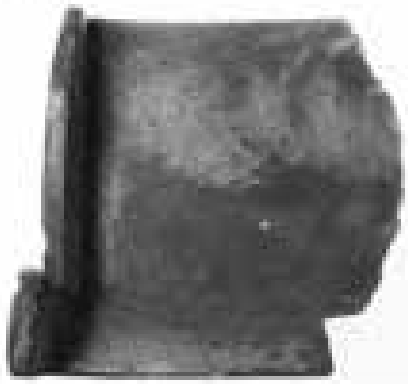


4　軒桟瓦　外面

5　軒桟瓦　瓦当面



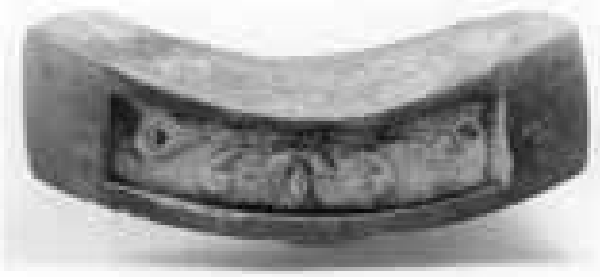
6　軒桟瓦　外面



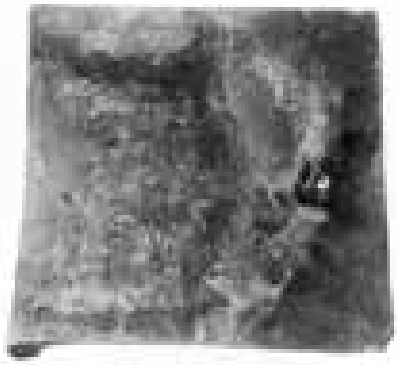
7　軒桟瓦　内面

8　軒丸瓦　瓦当面

写真図版74　唐橋外出土瓦（2）

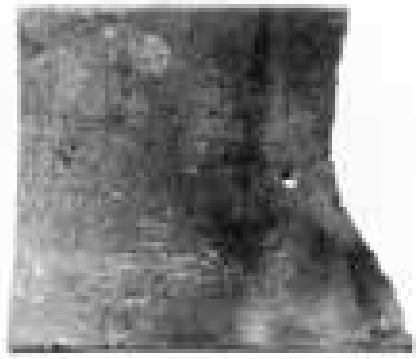


1　軒平瓦　瓦当面

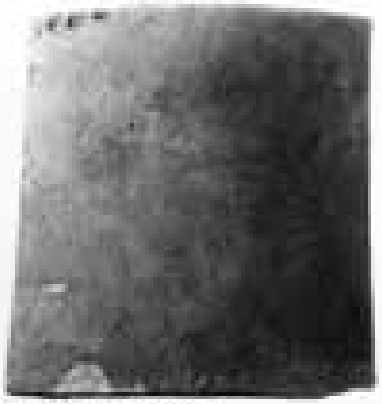


2　軒平瓦　内面

3　軒平瓦　瓦当面



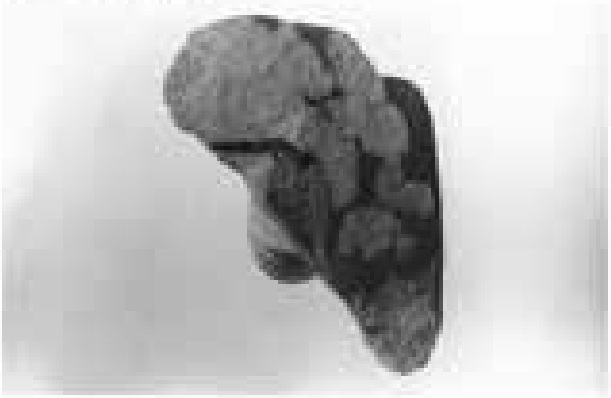
4　軒平瓦　内面



5　平瓦（側面に文字　第96図2）

6　棟込瓦　瓦当面

7　鬼瓦



8　鬼瓦

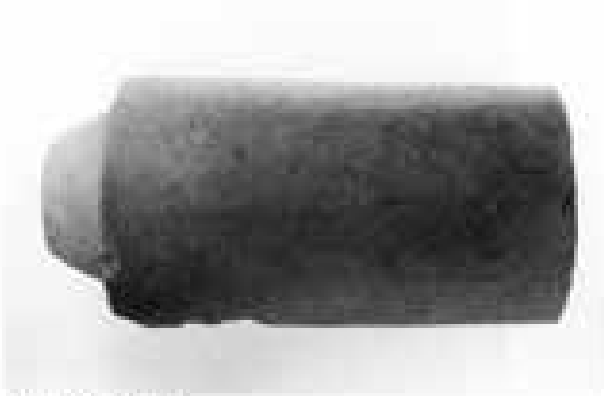
写真図版75　遺構外出土瓦（3）

1　軒丸瓦　瓦当面（本丸跡表採）

2　軒丸瓦内面

3　軒丸瓦　瓦当面

4　鬼瓦



5　未中焼の丸瓦

6　石臼

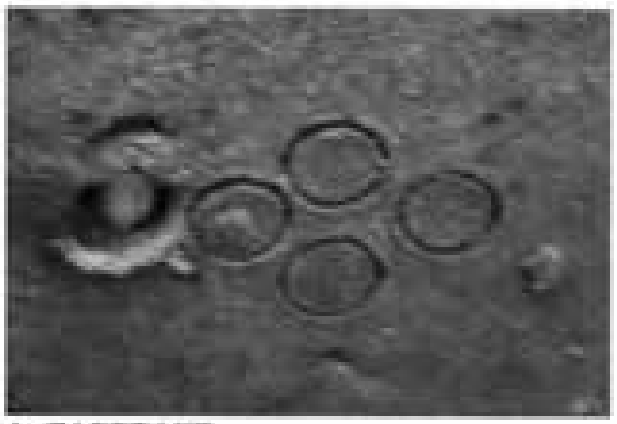
7　石臼

8　石臼

写真図版76　そのほかの瓦、石臼

1　石臼

2　鬼瓦（高野家）



3　同右側面の印

4　鯱瓦（高野家）

5　同裏の文字（左側）

6　同裏の文字（右側）

写真図版77　石臼、高野家の瓦

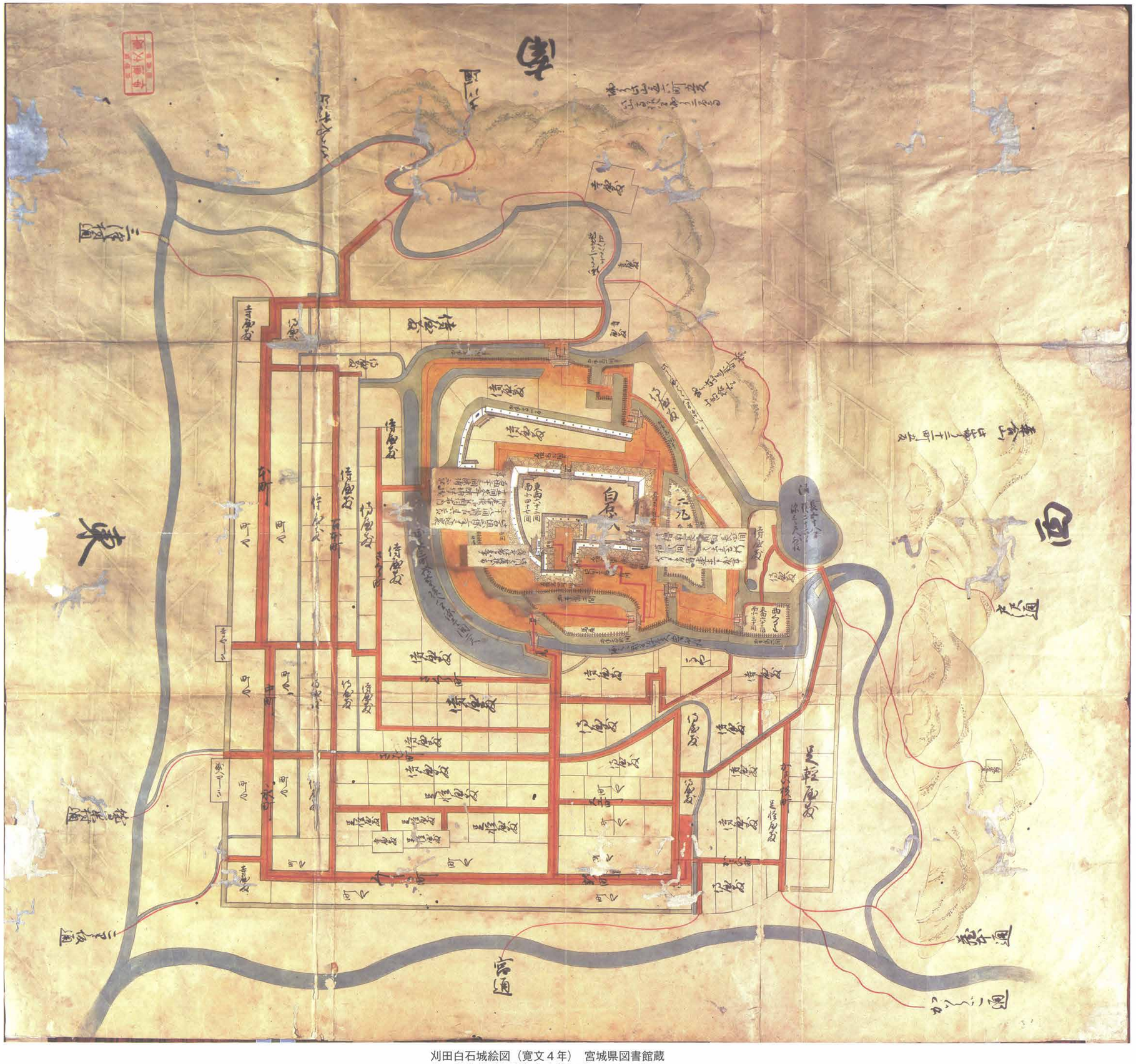
白石市文化財調査報告書　第26集

片倉小十郎の城
白石城跡発掘調査報告書

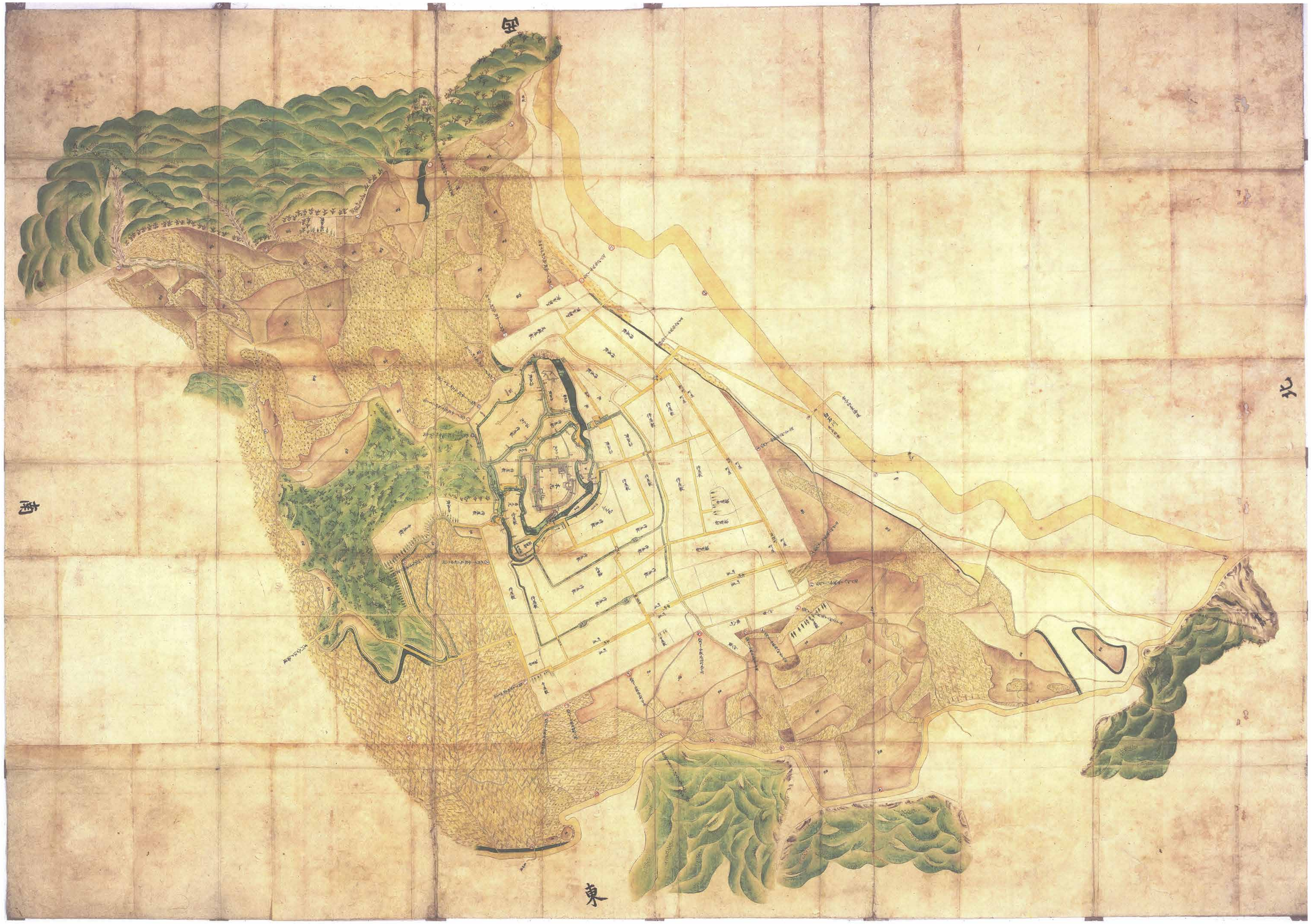
平成10年３月15日印刷
平成10年３月31日発行
平成23年10月７日増刷

編集・発行　白石市教育委員会
〒989-0206　宮城県白石市大手町１番１号
電話：0224（22）1343

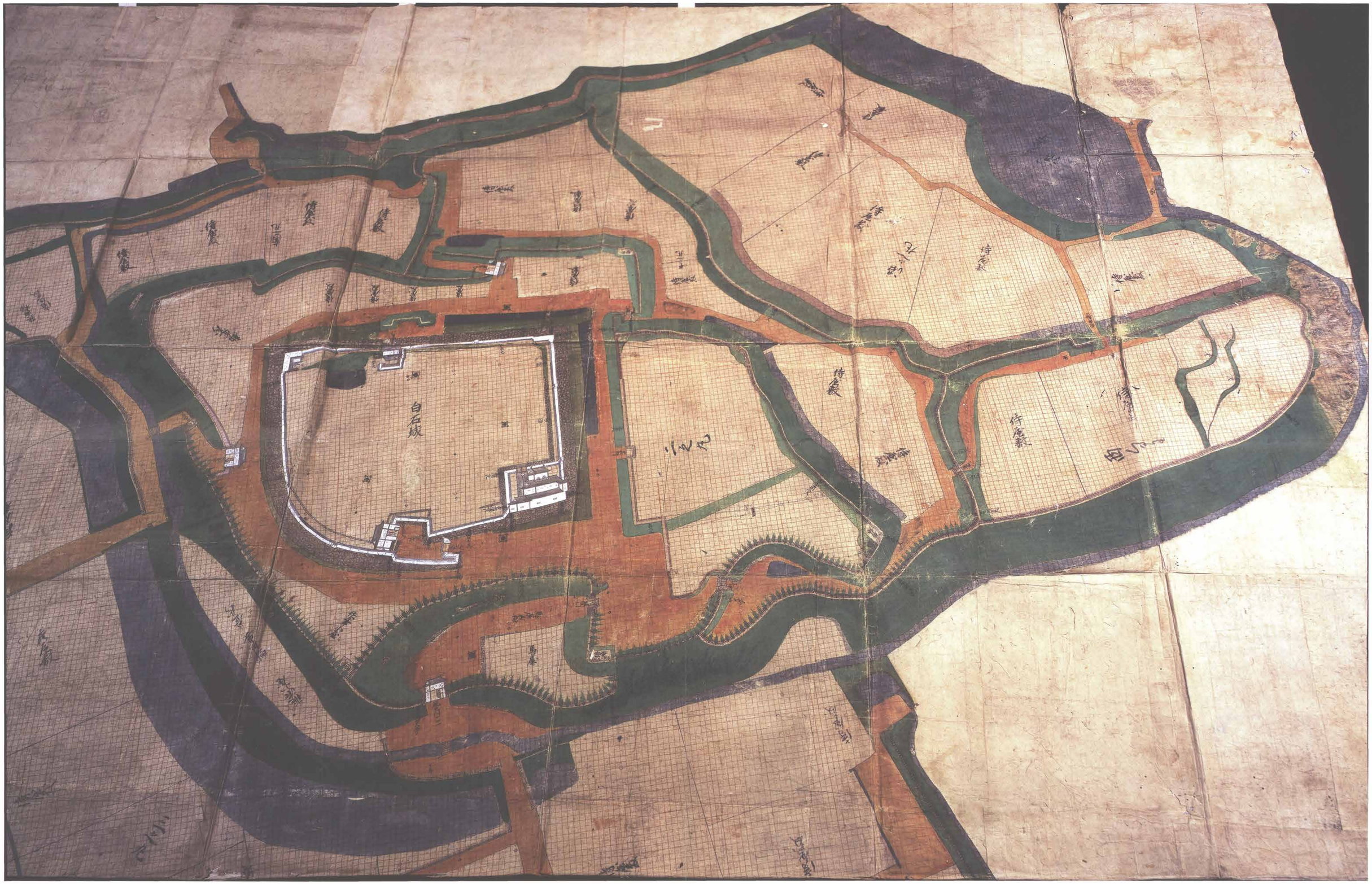
印　　刷　株式会社東北プリント
〒980-0822　仙台市青葉区立町24番24号
電話：022（263）1166



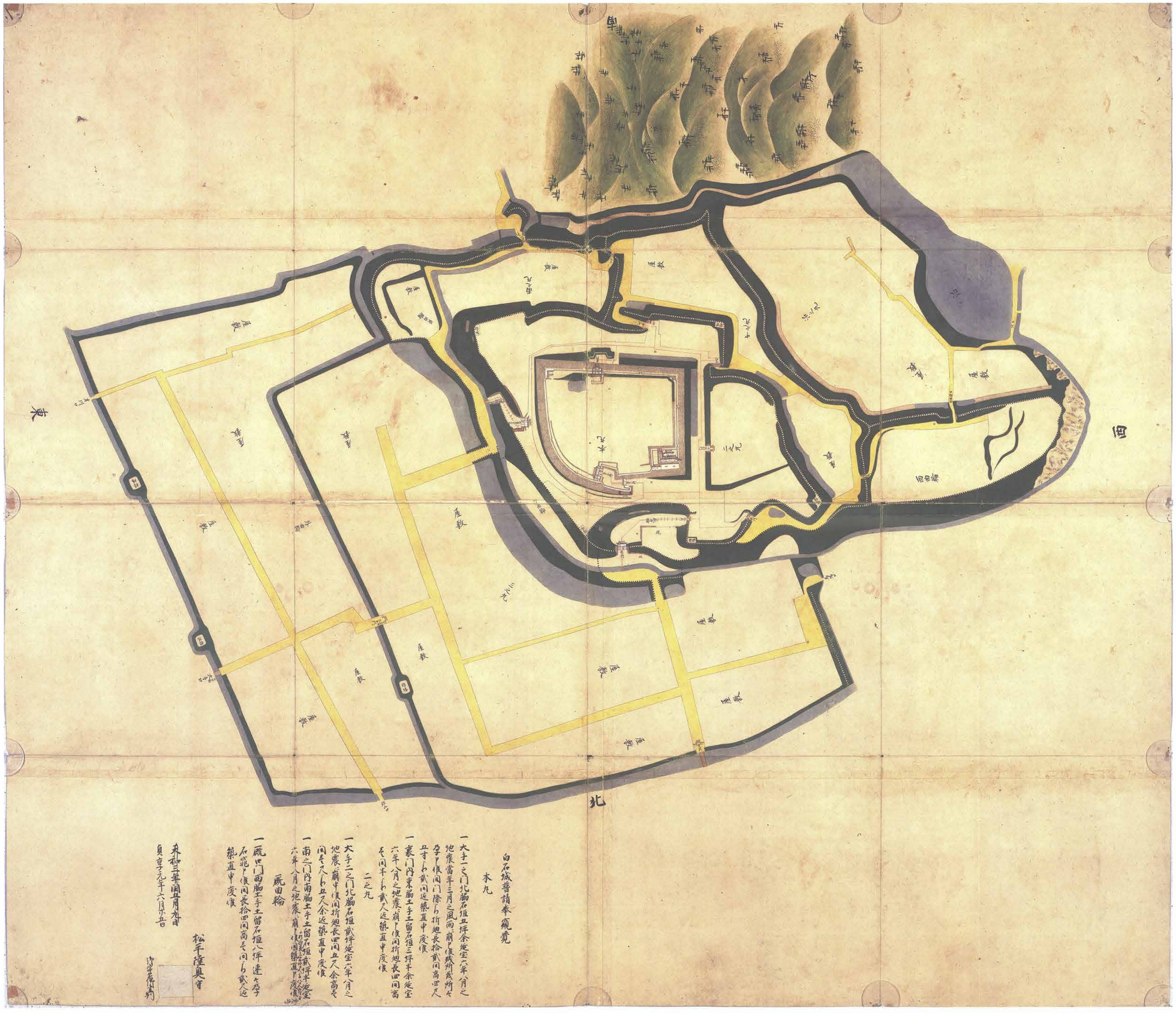
刈田白石城絵図（寛文４年）　宮城県図書館蔵
白石市文化財調査報告書第26集
片倉小十郎の城　白石城跡発掘調査報告書　付図1/9



奥州仙台領　白石城並城下絵図（天和３年）　仙台市博物館蔵
白石市文化財調査報告書第26集
片倉小十郎の城　白石城跡発掘調査報告書　付図2/9

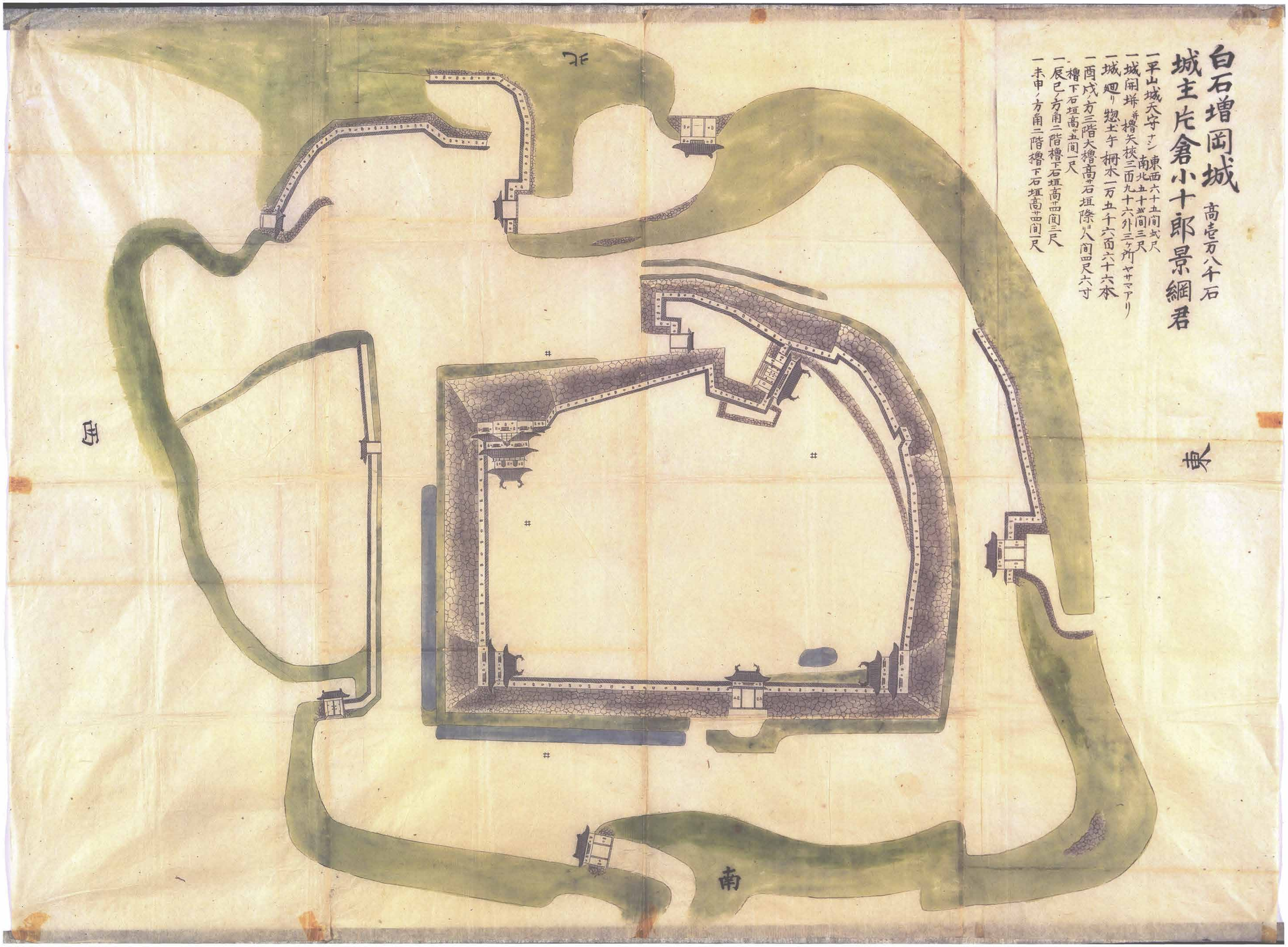


白石城絵図（天和３年）　宮城県図書館蔵
白石市文化財調査報告書第26集
片倉小十郎の城　白石城跡発掘調査報告書　付図3/9

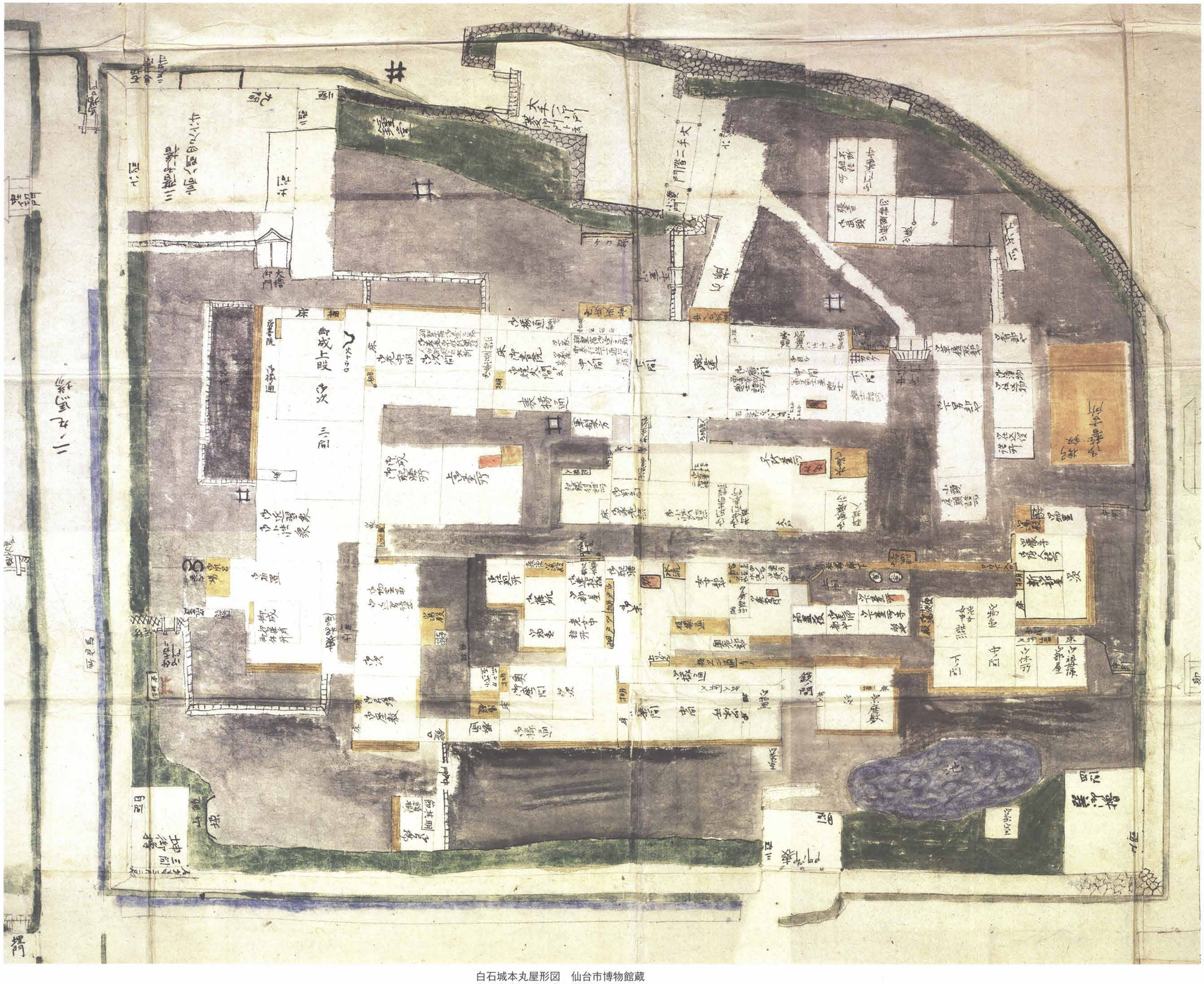


白石城普請奉窺図（貞享元年）　仙台市博物館蔵
白石市文化財調査報告書第26集
片倉小十郎の城　白石城跡発掘調査報告書　付図4/9

白石城下絵図（安政３年）　白石市教育委員会蔵
白石市文化財調査報告書第26集
片倉小十郎の城　白石城跡発掘調査報告書　付図5/9



白石城絵図　個人蔵
白石市文化財調査報告書第26集
片倉小十郎の城　白石城跡発掘調査報告書　付図6/9



白石城本丸屋形図　仙台市博物館蔵
白石市文化財調査報告書第26集
片倉小十郎の城　白石城跡発掘調査報告書　付図7/9

白石城と家中旗験図　片倉家蔵
白石市文化財調査報告書第26集
片倉小十郎の城　白石城跡発掘調査報告書　付図8/9

白石城之図（小関雲洋画）　白石市蔵
白石市文化財調査報告書第26集
片倉小十郎の城　白石城発掘調査報告書　付図9/9